



BL                    Tripitaka. Japanese. 1929  
1411                 Showa shinshu kokuyaku  
T8J3                 Daizokyo  
1929  
v.25

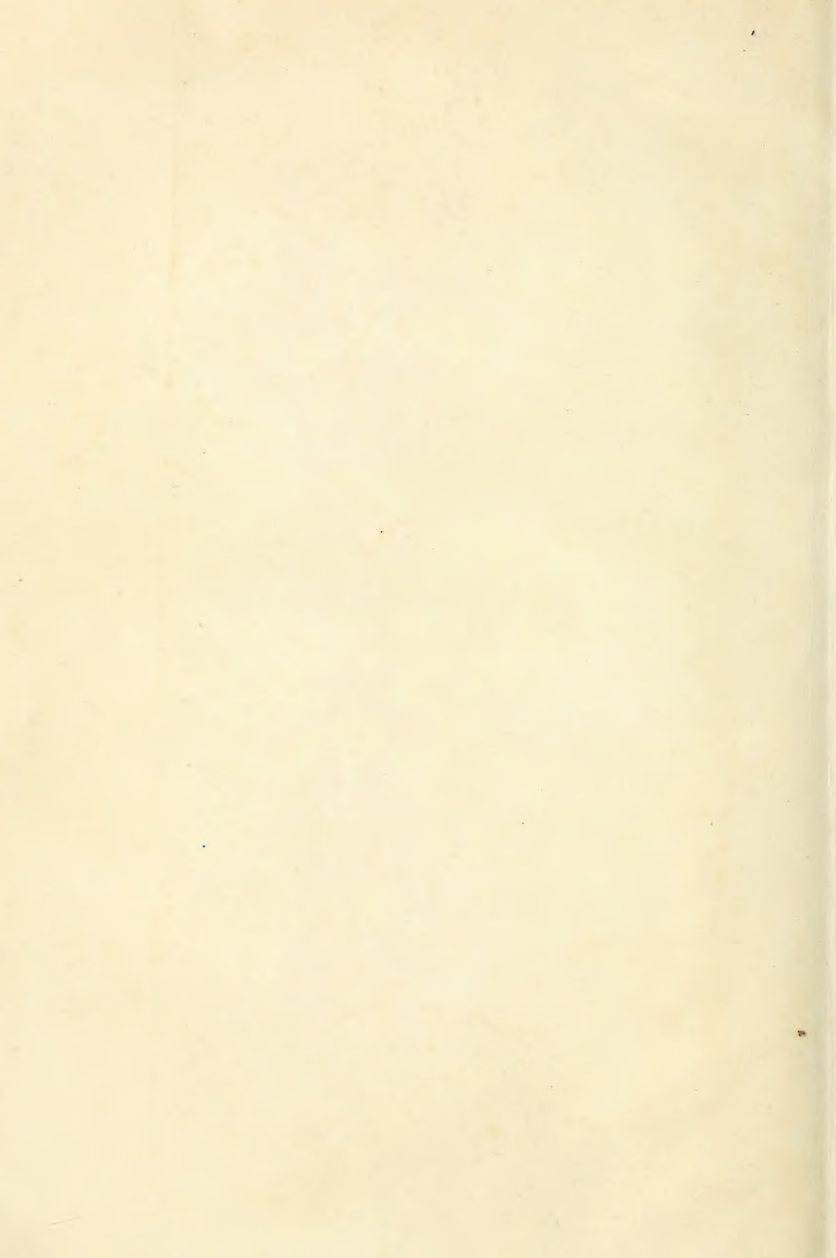
East Asia

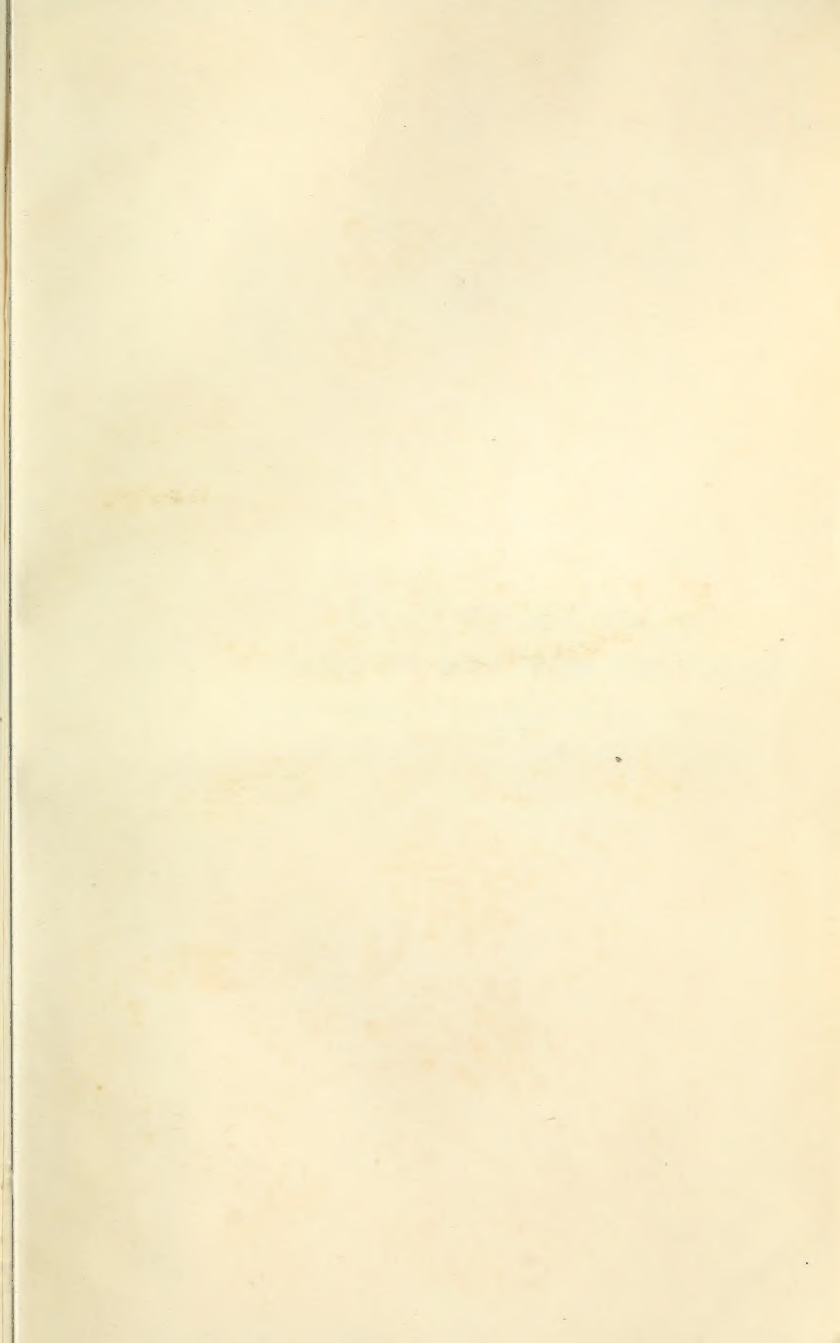
PLEASE DO NOT REMOVE  
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

---

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

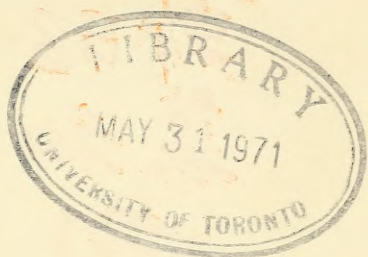
---





昭和  
新纂

國  
譯大藏經



BL  
144  
T8J3  
1929  
V.25

昭和  
新纂

# 國譯大藏經

宗典部

第一卷

## 天台宗聖典 目次

|            |       |    |
|------------|-------|----|
| 傳教大師發願文    | 傳教大師撰 | 一  |
| 山家學生式      | 傳教大師撰 | 三  |
| 法華秀句       | 傳教大師撰 | 二  |
| 天台四教儀      | 諦觀法師撰 | 一三 |
| 十二門        | 荆溪大師撰 | 一五 |
| 止觀大意       | 荆溪大師撰 | 一六 |
| 金剛頂大教王經疏玄談 | 慈覺大師撰 | 一八 |
| 大毘盧遮那經指歸   | 智證大師撰 | 二三 |
| 北嶺教時要義     | 敬光律師撰 | 二七 |
| 上顯戒論表      | 傳教大師撰 | 二七 |

|           |       |     |
|-----------|-------|-----|
| 授菩薩戒儀     | 傳教大師撰 | 二八一 |
| 普通授菩薩戒廣釋  | 安然和尚撰 | 二九九 |
| 內證佛法相承血脈譜 | 傳教大師撰 | 三六七 |
| 觀心略要集     | 源信僧都撰 | 四三七 |
| 橫川法語      | 源信僧都撰 | 四八五 |
| 奏進法語      | 眞盛上人撰 | 四八六 |
| 天台大師和讚    | 源信僧都撰 | 四八七 |
| 傳教大師和讚    | 最深上人撰 | 四九四 |



天台宗聖典

|     |     |
|-----|-----|
| 第一卷 | 宗典部 |
|-----|-----|



傳教大師全集新  
版卷一頁一延  
曆四年傳教大師生  
年十九歳にして此  
願文を製して立誓  
し給ふと傳ふ。

【三界】欲界、色  
界、無色界の三種  
の世界にして、之  
れ凡夫の生死往來  
する世界なり。

【四生】胎生、卵  
生、濕生、化生、卵  
【牟尼】釋迦牟尼  
【三災】火災、水  
災、風災。

【五濁】劫濁、見  
濁、煩惱濁、衆生  
濁、命濁。

【古賢禹王】支那  
上代聖の世を建て  
たる夏の王の號。

【四事】衣服、飲  
食、臥具、湯藥。

【未曾有因緣經】  
二卷、蕭齊の曇景  
譯す。

【末利夫人】印度  
古代波斯匿王の夫  
人の名。末利華園  
より將來せしもの  
なるが故に此名あ  
り。

# 傳教大師發願文

悠悠たる三界、純ら苦にして安きこと無く、擾擾たる四生、唯患にして樂しからず。牟尼の日久しく隠れて慈尊の月未だ照さず、三災の危きに近づき、五濁の深きに没む。加之、風命保ち難く露體消え易し、艸堂樂み無しと雖も、然も老少白骨を散じ曝す、土室闇く進しと雖も而も貴賤魂魄を争ひ宿す。彼を瞻己を省るに此理必定せり。仙丸未だ服せず遊魂留め難し、命通未だ得ず、死辰何とか定めん。生ける時善を作さずんば、死するの日獄の薪と成らん。得難くして移り易きは其れ人身なり矣、發し難くして忘れ易きは斯れ善心なり焉。是を以て法皇牟尼は大海の針、妙高の線を假りて人身の得難きを喻況へたまへり。古賢禹王は一寸の陰、半寸の暇を惜みて、一生の空しく過ぐることを歎勸せり。因無くして果を得るは、是處り有ること無く、善無くして苦を免かるるは、是處り有ること無し。伏して己が行迹を尋ね思ふに、無戒にして竊に四事の勞りを受け、愚癡にして亦四生の怨となる。是故に未曾有因緣經に云はく、『施す者は天に生れ、受くる者は獄に入る。』と。提鞞女人の四事の供は末利夫人の福と表れ、貪著利養の五衆の果は石女擔譽の罪と顯る。明かなる哉や善惡の因果、誰が有懸の人か此典を信ぜざらんや。然れば則ち苦因を知りて

【五衆】色蘊、受蘊、想蘊、行蘊、識蘊を五衆と言ふ。【闍提】成佛の種子を失つた人。【六根相似の位】眼耳鼻舌身意の六根清淨となる位を相似の位と言ふ。

【般若の心】一切諸の智慧の中第一の智慧の心。【三際】過去、現在、未來。【無上菩提】佛所得の悟界。

【法界】眞如とも實相とも言ふ。今は諸法森羅の總稱。【妙覺】佛の悟界。【神通】天眼通、天耳通、他心通、宿命通、如意通の五種の不思議自在の用を言ふ。

【四弘誓願】衆生無邊誓願度、煩惱無量誓願斷、法門無盡誓願學、佛道無上誓願成。

【六道】地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天を言ふ。

而も苦果を畏れざるを釋尊は闍提と遮したまひ、人身を得て徒に善業を作さざるを聖教に空手と嘖めたまへり。是に於て、愚が中の極愚、狂が中の極狂、摩訶の有情、底下の寂澄、上は諸佛に達し、中は皇法に背き、下は孝禮を闕けり。謹みて迷狂の心に隨ひ三二の願を發す、無所得を以て方便と爲し、無上第一義の爲に金剛不壞不退の心願を發す。我未だ六根相似の位を得ざるより以還出假せじ其一。未だ理を照すの心を得ざるより以還才藝あらじ其二。未だ淨戒を具足することを得ざるより以還檀主の法會に預らじ其三。未だ般若の心を得ざるより以還世間人事の緣務に著せじ、相似の位を除く其四。三際の中間に修する所の功德は獨り己が身に受けず、普く有識に回施して悉く皆無上菩提を得しめん其五。伏して願くは解脫の味は獨り飲まず、安樂の果は獨り證せず。法界の衆生とともに同じ妙覺に登り、法界の衆生とともに同じ妙味を服せん。若し此願力に依りて六根相似の位に至り、若し五神通を得ん時は必ず自度を取らず、正位を證せず、一切に著せざらん。願くば必ず今生無作無縁の四弘誓願に引導せられて、周く法界に旋らし、遍く六道に入り、佛國土を淨め、衆生を成就し、未來際を盡すまで恆に佛事を作さんことを。

傳教大師發願文 畢

# 山家學生成式

## 天台法華宗年分學生式一首

(一) 國寶とは何物ぞ、寶とは道心なり。道心有るの人を名けて國寶と爲す。故に古人の言はく、「徑寸十枚是れ國寶に非ず、一隅を照す、此れ則ち國寶なり」と。古哲又云はく、「能く言ひて行ふこと能はざるは國の師なり、能く行ひて言ふこと能はざるは國の用なり、能く行ひ能く言ふは國の寶なり。三品の内、唯言ふこと能はず行ふこと能はざるを國の賊と爲す」と。乃ち道心有るの佛子を西には菩薩と稱し東には君子と號す。惡事を己に向へ好事を他に與へ己を忘れて他を利するは慈悲の極なり。釋教の中、出家に二類あり。一には小乘の類、二には大乘の類なり、道心あるの佛子は即ち此れ斯類なり。今我東州には但小像のみ有りて未だ大類有らず、大道未だ弘まらざれば大人興り難し。誠に願くば、先帝の御願、天台の年分は永く大類と爲し、菩薩僧と爲さん。然るときは則ち積王の夢猴、九位列り落ち、覺母の五駕、後の三、數を増さん。斯心、斯願、海を汲む事を忘れず。今を利し後を利して劫を歴れども窮り無けん。

年分度者二人 柏原先帝、新に天台法華宗の傳法者を加へたまふ。

【傳教大師全集新】 卷一の一百以下。之れ傳教大師畢生の鴻業たる重戒獨立史に顯る要なる撰述にして三條式より成る。即ち菩薩の大道に由つて鎮護國家利民福の實を擧げんが爲、弘仁九年五月より翌年三月に至るまで三回に互つて大師の上表し給ふ所なり。【一】 立制の意を明す。【道心】 上求下化の菩提心を有する者を言ふ。【徑寸】 魏王の所持せしと言ふ徑寸の珠。【菩薩】 ボーザサットバ (Bodhisattva) 上求下化の菩提心を有する佛道行者。【釋教】 佛教。【大乘の類】 聲聞比丘僧。【大乘の類】 菩薩比丘僧。

【先帝の御願】天台の年分變者は先帝即ち桓武帝の延曆二十五年に轉許を得たるが故に斯く言ふ。

【年分】一期を六年として一年毎に二人を得度せしむる去規。

【世王の夢猴】迦葉波佛の時の迦里世王の夢事、守護國界主經に出づ。

【九位列り落ち】十猴の中九猴の不淨出家は皆滅滅すと。即ち山家の衰者は大類なるが故に獨り残り、餘の小類は皆列り落ちるの意なり。

【覺母の五駕】覺母は文殊の異名、三世の諸佛は等しく此母より出づ故に覺母と言ふ、五駕とは羊乘行、象乘行、月日神通乘行、聲聞神通乘行、如來神通乘行の五乘にして之れ菩薩の乘なり。

凡そ法華宗天台の年分は、弘仁九年より永く後際を期し、以て大乘の類と爲す。其籍名を除かずして佛子の號を賜加し、圓の十善戒を授けて菩薩の沙彌と爲す。其度縁には官印を請はん。

凡そ大乘の類は、即ち得度の年、佛子戒を授けて菩薩僧と爲し、其戒牒には官印を請はん。大戒を受け已らば叡山に住せしめ、一十二年山門を出ずして兩業を修學せしめん。

凡そ止觀業の者は、年年毎日、「法華」、「金光」、「仁王」、「守護」、諸大乘等の護國の衆經を長轉長講せしめん。

凡そ遮那業の者には、歲歲毎日、「遮那」、「孔雀」、「不空」、「佛頂」、諸眞言等の護國の眞言を長念せしめん。

凡そ兩業の學生は、一十二年所修所學の業に隨ひて任用せん。能く行ひ能く言ふは常に山中に住して衆の首と爲し、國の寶と爲す。能く言ひて行ふこと能はざるは國の師と爲し、能く行ひて言ふこと能はざるは國の用と爲す。

凡そ國師、國用は官符の旨に依りて、傳法及び國講師に差し任せよ。其國講師は一任の内、毎年安居の法服の施料は即便當國の官舎に收納し、國司、郡司相對して檢校し、將に國裏の池を修し、溝を修し、荒れたるを耕し、崩れたるを理め、橋を造り船を造り、樹を殖る、紵を殖る、麻を蒔き草を蒔き、井を穿ち水を引きて國を利し人を利するに用ふべし。經を講じ心を修めて、農商を用ひざれ。然るときは則ち、道心の人天下に相續し、君子の

【後の三】五乗の中、羊、象二乗を除きたる他の三乗。

【柏原先帝】桓武天皇。

【二】正しく制度を列ぬ。

【署名】俗語。

【綱經の十重禁戒】

【沙彌】シユラ一マネーラ (Sinnan) 息慈、行慈等と譯す。即ち大僧となる前方便の僧階。

【佛子戒】菩薩沙彌の十重戒に今更に梵網の四十八輕戒を授くるを言ふ。

【兩業】止觀業と遮那業。

【止觀業の者】法華等の顯教の行人

【法華、金光、仁王守護】金光明經、蓮華經、金光明經、王經、守護國界經

【遮那業の者】眞言密教を中心とする行人。

【遮那】孔雀、不空佛頂

【大毘盧遮

道永代に斷えざらん。

右六條の式は、慈悲門に依りて有情を大に導き、佛法世に久しく、國家永く固うして佛種斷えざらん。樓樓の至りに任へず、圓宗の式を奉り、謹んで天裁を請ひたてまつる。謹んで言す。

弘仁九年五月十三日

勸獎 天台宗年分學生式

凡そ天台宗得業の學生の數を一十二人と定むるは、六年を期と爲す。一年に二人を闕かば、即ち二人を補ふべし。其得業生を試むるには、天台宗の學衆俱に學堂に集會し、法華、金光、明二部の經訓を試む、若し其策を得ば、具に籍名を注し、試業の日、官に申し送らん。若し六年にして業を成すれば試業の例に預る。若し業を成ぜざれば試業の例に預らず。若し退闕あらば、具に退者の名並に補すべき者の名を注して官に申し替へよ。

凡そ得業の學生等の衣食は、各私物を須ひよ。若し心才如法にして、骨法成就すれども、但衣食具らずんば此院の狀を施し檀を九方に行じて其人に充て行へ。

凡そ得業の學生、心性において法に違ひ、衆制に順はずんば、官に申し送り、式に依りて取替へよ。

那經、孔雀明王經、不空羅索經、佛頂經。

【安居】 冬夏に頭陀遊行を廢して坐禪修學に勵むを言ふ。

【三】 制度を合して請す。

【圓宗】 天台宗は法華圓教に由る宗なるを以て圓宗とも言ふ。

【四】 正しく八條式の制度を列ぬ。【其筆を得ば】 試業に及第すること

【心才如法】 其心術如法に學才あるを言ふ。

【骨法成就】 身體に缺點無きを言ふ

【大戒】 梵網經の十重四十八輕戒。

【四種三昧】 常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧。具には摩訶止觀に出づ

【三部の念誦】 佛部、蓮華部、金剛部の三部を念誦するを言ふ。

凡そ此宗の得業の者は、得度の年即ち大戒を受けしむ。大戒を受け竟らば一十二年山門を出でず、勤めて修學せしめん。初の六年は聞慧を正と爲し思修を傍と爲す。一日の中、二分は内學、一分は外學、長講を行と爲し、法施を業と爲す。後の六年は思修を正と爲し聞慧を傍と爲す。止觀業には具に四種三昧を修習せしめ、遮那業には具に三部の念誦を修習せしめん。

凡そ比叡山一乘止觀院、天台宗學生等の年分、並に自ら進む者は本寺の名帳を除かず。便ち近江の食ある諸寺に入れて供料を送らしむ。但し冬夏の法服は大乗の法に依りて、檀を諸方に行じ有得の身を蔽ひて業をして退せざらしむ。而今而後、固く常例と爲す。草菴を房と爲し竹葉を座と爲し、生を輕じ法を重じ、法をして久住せしめ國家を守護せん。

凡そ他宗年分の外、得度受具の者、自ら進みて住山十二年、兩業を修學せんと欲する者有らば、具に本寺並に師主の名を注し、明に山院の狀を取りて須く官司に安置すべく、固く一十二年を経竟らば、此宗年分の者に準じ、例して法師位を賜へ。若し式法を闕かば本寺に退却せしめよ。

凡そ住山の學生、固く一十二年を経、式に依りて修學せば、大法師位を恩賜したまへ。若し其業具せずと雖も、固く山室を出ずして一十二年を経ば、法師位を恩賜したまへ。若し此宗の者にして宗の式に順はず、山院に住せず、或は山に住すと雖も屢衆法を煩はし、年數足らずんば永く官司の天台宗の名を貫除し、本寺に退却せしめよ。



【有待の身】人の身は衣食等の資を得つて立つるものなるが故に斯く言ふ。

【法師位】僧位に入位、住位、満位法師位、大法師位の五階ありたりと言ふ。

【五】八條式を結して奏請す。  
【一】正しく四條式の制度を列ぬ。

【一向大乘寺】一向に大乘を修する寺。  
【大小兼行寺】大乘小乘を兼ね行ずる寺。

【回心向大】小乗の劣心を回轉して大乘の勝道に向ふを言ふ。

【小律儀を假受せば】大師の眞意は圓頓大戒にあるも、當時は南都の小戒を受くるが故に通途とせるが故に且

凡そ此天台宗の院には、俗別當兩人を差し、番を結して檢校を加へしめ、兼て盜賊、酒、女等を禁ぜしめ、佛法を住持し國家を守護せん。

以前八條の式は、佛法を住持し、國家を利益し、羣生を接引し、後生をして善に進ましめんが爲なり。謹んで天裁を請ひたてまつる。謹んで言す。  
弘仁九年八月二十七日

天台法華宗年分度者回小向大式合せて肆條

凡そ佛寺に三有り。

一には一向大乘寺 初修業の菩薩僧の住する所の寺

二には一向小乘寺 一向小乘の律師の住する所の寺

三には大小兼行寺 久修業の菩薩僧の住する所の寺

今、天台法華宗年分の學生、並に回心向大の初修業の者は、一十二年、深山の四種三昧院に住せしめ、得業以後、利他の故に小律儀を假受せば假に兼行寺に住することを許す。

凡そ佛寺の上座に大小の二座を置く。

一には一向大乘寺 文殊師利菩薩を置き、以て上座と爲す。

二には一向小乘寺 賓頭盧和尚を置き、以て上座と爲す。

く利他の爲に小戒を假に受くるを言ふ。

【文殊師利菩薩】マンジュシヨリ

一(Manjusri)常に釋迦如来の左脇に侍して智慧を司る菩薩なり。

【賓頭盧和尚】ピンドーラ、(Pindurā)永く南天の摩梨山に住して釋迦滅後の衆生を度すと云ふ。

【布薩の日】半月毎に衆僧を集めて戒經を誦して淨戒に安住せしめ、又能く善法を長養せしむる日を言ふ。

【普賢經】觀普賢菩薩行法經一卷、劉宋の曇摩蜜譯

【三師七證】戒和尚、羯磨師、教授師を三師と云ひ、七人の證明師を七證と言ふ。

【和上】師に依つて弟子の道力生ずるが故に和上と言ふ。

三には大小兼行寺。文殊と賓頭盧との兩の上座を置き、小乗布薩の日は賓頭盧を上座と爲して小乗の次第に座し、大乘布薩の日は文殊を上座と爲して大乘の次第に座す。此次

第座は此間に未だ行はれず。

凡そ佛戒に二有り。

一には大乘の大僧戒。十重四十八輕戒を制し、以て大僧戒と爲す。

二には小乗の大僧戒。二百五十等の戒を制し、以て大僧戒と爲す。

凡そ佛受戒に二有り。

一には大乘戒。普賢經に依りて三師證等を請す。

釋迦牟尼佛を請して菩薩戒の和上と爲す。

文殊師利菩薩を請して菩薩戒の羯磨阿闍梨と爲す。

彌勒菩薩を請じて菩薩戒の教授阿闍梨と爲す。

十方一切の諸佛を請じて菩薩戒の證師と爲す。

十方一切の諸菩薩を請じて同學等侶と爲す。

現前の一の傳戒師を請じ、以て現前の師と爲す。若し傳戒の師無くんば、千里の内に請す。若し千里の内に能く戒を授くる者無くんば、至心に懺悔して必ず好相を得、佛像の前

に於て自誓受戒せよ。

今、天台の年分學生、並に回心向大の初修業の者には、所説の大乗戒を授けて將に大僧

【羯磨阿闍梨】比丘の受戒等の作法を羯磨と云ひ、阿闍梨とは弟子の行業を正し其規範となるべき高僧への敬稱なり。

【自誓受戒】佛前に於て自ら誓つて大戒を受くるを言ふ。

【白四羯磨】一度の表白と二度の羯磨を合せて言ふ。

【七】四條式に對して更に天戒を請はんが爲に其意を述ぶ。

【摩訶衍】マハーヤーナ(Mahayana)大乘と譯す。之れ佛菩薩の教法なり。

【彌天の七難】火難、水難、羅刹難、鬼難、枷鎖難、怨賊難の七難今は且く天台の觀音義疏上に由る。

【仁王經の百法】仁王般若經の百法師。

【請雨經の八德】

と爲さん。

二には小乗戒。小乗律に依り、師に現前の十師を請じて白四羯磨す。清淨持律の大徳十人を請じて三師七證と爲す。若し一人を闕かば戒を得せず。今、天台の年分學生、並に回心向大の初修業の者には、此戒を受ることを許さず。其久

修業のものを除く。竊に以るに、菩薩の國寶は法華經に載せ、大乘の利他は摩訶衍の説なり。彌天の七難は大乗經に非ずんば何を以てか除くことを爲さん。未然の大災は菩薩僧に非ずんば、豈冥滅することを得んや。利他の徳、大悲の力は諸佛の稱する所、人天歡喜す。仁王經の百

僧、必ず般若の力を假り、請雨經の八徳も、亦大乘戒を屈す。國寶國利、菩薩に非ずして誰をや。佛道には菩薩と稱し、俗道には君子と號す。其戒廣大にして眞俗一貫す。故に法華經に二種の菩薩を列ぬ。文殊師利菩薩、彌勒菩薩等は皆、出家の菩薩、跋陀婆羅等の五百

の菩薩は皆、是れ在家の菩薩なり、法華經の中、具に二種の人を列ぬ、以て一類の衆と爲す。比丘の類に入れず、以て其大類と爲す。今此菩薩の類は此間に未だ顯傳せず。伏して乞ふ。陛下、維弘仁の年より新に此大道を建て、大乘戒を傳流して而今前後を

利益したまへ。固く大鐘の腹に鏤めて遠く塵劫の後に傳へん。仍て宗式を奉り、謹んで天

裁を請ひたてまつる。謹んで言す。

弘仁十年三月十五日

請雨經の境法、八

淨僧を請ずと言ふ

【眞俗一貫】眞諦

門、俗諦門を一貫

する通受の戒なる

を指す。

【二種の菩薩】大

乘比丘の出家の菩

薩と大乘優婆塞等

の在家の菩薩を指

す。

【彌勒菩薩】マイ

トレーヤ (Maitreya)

當來佛位を嗣

ぐ菩薩なり。

【跋陀婆羅】パド

ラバーラ (Bhadrapala)

賢護菩薩と

言ふ。一説には王

舎城の在家菩薩な

りしと傳ふ。

前の入唐天台法華宗沙門寂澄上る

山家學生式畢

法華秀句

序

法華秀句といふは、髻珠を琢磨するの砥礪なり。乃ち靈山の明珠遠く西秦に傳ひ、天台の珠囊遙に東海に流るる有るに、珠を施すの客各是非を評ひ、珠を求むるの主所歸を知ること無し。是を以て、靈食の見林を剪除して天台の圓城を造立す。是に於て一謀家有りて云はく、「天台所立の四車の義は、華嚴宗をして奪ひて其義を取らしめ、又其所立の成佛の義は、三論宗をして奪ひて其義を取らしむと。然れば則ち天台法華宗は、何等の義を以て自宗の義と爲すや。若し自宗の義無くんば、別宗を許さざる者なり」と。時人を矚まさんと欲し、其を度りて謀を爲す。誣網も亦甚だし。是故に且く、法華秀句三卷を著す。庶くは、妙法の勝幢、千代に傾かず、一乘の了義、群心を開悟せんことを。但恐るらくは、織成正しからずして、聖の耳目を汗さんことを。

【髻珠】 法華七喻の一。  
 【靈山の明珠】 靈鷲山所説の法華經都諸師の謬見。  
 【靈食の見林】 南都諸師の謬見。  
 【四車】 法華の羊車鹿車牛車大白牛車を指す。  
 【華嚴宗】 八宗の一。華嚴經を所依とせる宗。唐の杜順之を開き我朝には審祥、道璿に依りて傳へらる。  
 【三論宗】 龍樹の中論、大論及び提婆の百論を所依とせる宗。秦の羅什となす。本朝には高麗の慧灌始めて之を傳ふ。  
 【天台法華宗】 傳教大師所立の天台宗を指す。  
 【一乘の了義】 法華の會三歸一の佛乘の深義。

# 法華秀句

本朝沙門寂澄撰す

傳教大師全集新  
 版第三卷一百以下  
 本書は大師晩年の  
 撰に係り法華輔照  
 とも名けらる。法  
 華の十勝を擧げて  
 經宗の他家に勝る  
 るを力説し併せて  
 南都諸宗の謬解を  
 破せられしものな  
 り。上中下三卷あ  
 りて、中卷は上下  
 と全く別問題なる  
 佛性證を説き、爲  
 佛性證の十勝す  
 眞偽を疑はれし因  
 となれり。故に今  
 は定説に憑り上下  
 二卷の法華秀句の  
 みを採れり。

- 佛説已顯眞實勝一
- 無問自説果分勝三
- 佛説諸經校量勝五
- 卽身六根互用勝七
- 多寶分身付屬勝九
- 佛説經名示義勝二
- 五佛道同歸一勝四
- 佛説十喻校量勝六
- 卽身成佛化導勝八
- 普賢菩薩勸發勝十

## 佛説已顯眞實勝一

(一) 未顯已顯、肩を比べて實を諍ひ、三乘一乘、權を訴へて是非す。現在の麤食者僞章數卷を造りて、法を謗り、亦人を謗る。『法華經』を謗りては、則ち權と爲し、亦密と爲す。天台の聖を謗りては、則ち三寸の舌の應説と爲す。夫不定二乘の一寸の楯は、趣寂の屍を隱蔽するに足らず。密意言摠の鉛錫の刀、何を以てか一ら全身の珠を刊らんや、是故に麤食者十教の陣を破りて權賊を華夷に摧伏し、麤食者二理の關を壞りて商人に寶所に往還せしむ。



と云ふ。今は成佛の記別を指す。

誰か敢て權と爲さん。麤食者、未記の前文に法華は聲聞の爲と云ふを見て、已記の後に法華は菩薩の爲と云ふを見ず。麤食者慚愧せざるべけんや。慚愧せざるべけんや。又舍利弗、大心を發するの時、すでに經文に違す。其「譬喻品」の文に曰はく、『我昔曾、於二萬億佛所、爲無上道故、常教化汝。』と。論文。當に知るべし、麤食者、昔十六王子の時に教へて菩提心を發せしむとは未だ經文を案ぜず、分明の文に迷ふのみ。況んや不形の義、何ぞ對論すべけんや。』

【二】麤食が法華の告舍利弗の文及論をとりて對聲聞の法なるを主張するを破す。

麤食者、第二に「法華經」を謗る文に云はく、『二には佛、定より起ちて舍利弗に告げたまはく、諸佛の智慧、甚深無量と、論に釋して云はく、何が故に唯舍利弗に告げて諸の菩薩に告げたまはざるとは五種の義有り。一には諸の聲聞の所應作の爲の故に。二には諸の聲聞をして廻心して大菩提に趣向せしめんが爲の故に。三には諸の聲聞の怯弱を恐るるを護るが故に。四には餘人をして善く思念せしむるが爲の故に。五には諸の聲聞をして所作已辨の心を起さざらしむるが爲の故に。』と。文。已上經麤食者此文意を取りて云はく、『此文に準じて知る。法華は是れ權にして實教と爲すに非ず』と。已上麤食者彈じて曰はく「此文兩らず。引く所の經論の文、法華は是れ權にして實に非ざること有ること無きが故に。麤食者、偏に定起告小の句を見、又釋論の聲聞の句を見て五甚八甚の義を了せずして、權と爲し實に非ずとは麤食の迷ひのみ。明かに知んぬ。麤食が第二、又定んで論旨を解せざるの失有ることを。夫告ぐる所の鶩子は、大機已に熟せり。示す所の佛智は内證の境界なり。

【鶩子】舍利弗を云ふ。



【三】蠱食が妙法華と正法華の第二品の品題について法華を方便教と立つるを破す。

【正法華】正法華經十卷、西晉の竺法護譯。

【善權品】正法華經善權品第二。

【辟支佛】緣覺又は獨覺と譯す、内外の縁を觀じて聖果を證る一類の人

論主の大意、此佛智を指して法勝を歎すと爲す。蠱食何の意ぞ。此佛智を指して權にして實に非すと爲す。蠱食者、小乘の本名を執して大機の熟を知らず。證甚深の經を誘りて遍く更生に苦を施す。夫論主の正義、廻心趣向は定性を簡ばす。又、不起已辨は不定を指さず、蠱食者、聲聞の人に因りて『法華經』を權と爲すは、機應の理に迷ひ廣野の吠を示すのみ。是故に當に知るべし、『妙法華經』は實にして權と爲すに非ざることを。蠱食者、爲聲聞の句、法華を無して權と爲し、天台智者、久默斯要の句、法華を有して實と爲すなり。蠱食者、第三に法華を誘ふ文に云はく、「三に妙法華には方便品と云ひ、正法華には善權品と云ふ」と。已上品に蠱食者、此品の名言を取りて云はく、「此れ即ち接下方便、顯上の方便なり。是を方便と名け、亦善權と名く。二乗を引接するが故に接下方便と名け、一乗を顯示するが故に顯上と名く。此文に準じて知んぬ。法華は是れ權にして實教と爲すに非ず」と。已上蠱食者語。

彈じて曰はく、『此文爾らず。引く所の重譯の經、其方便の名は内證の權に口くるが故に、其品に方便と權とは體外の權に名けず。名同義異の說、自他共に許すが故なり。若し接下方便は二乗を引接するの方便なりと云はば、彼二乗の人已に解了す。何ぞ經に『一切聲聞、辟支佛、所不能知。』と云はん。明かに知んぬ。其方便品の方便の題は是接下の方便に不ざることを。若し顯上の方便とは二を存するの一乗を顯示すと言はば、菩薩乘の人は能く一を知る。何ぞ經に『不退諸菩薩、其數如恆沙、一心共思求、亦復不能知。』と言ふや。明か

【無漏】煩惱無き境涯を云ふ。

【有爲】因縁所生の事物を稱す。

【開三顯一】華嚴著三乘を開して佛の一乘を顯す。

【上宮】聖德太子法華疏。

【法華疏】法華經疏四卷。

【有漏智】迷理の煩惱を斷ずる力無き智慧。

【龍樹】ナーガールルツユナ(Nāgārjuna) 佛滅後七百年南天竺に出世せし大論師。顯密八宗の祖たり。

【靈山】印度王舍城の東北千里にして靈鷲山あり。此山にて佛、法華經を説かれしと傳ふ。

【南岳】支那六朝代の人。天台大師の師。

【四】麤食が法華の方便品の過現未及び釋迦佛の文譬喩及び攝論の文譬喩引せしめて法華經の權教なること

に知んぬ。其方便品と善權とは是顯上の方便に不ざることを。夫無漏有爲は一乘に非ず。彼佛果を指して假に一と爲す。明かに知んぬ。三が中の大は究一に非ず。開三顯一を究竟と爲すことを。麤食者、顯上の一は究一に非るが故に品題に當らず。天台智者、善巧の釋を造りて體内の權と爲す。其體内の權は體外の實に對して固に眞實たり。是故に上宮御製の『法華疏』に、『亦、實相品と名く。』と云ふ。今麤食者は有漏智邪分別なり。文誰か信ず可けん乎。夫密室の燈は文を見ること明なり。風中の燈は何ぞ文を見ん。是故に龍樹評して曰ばく、『多聞辨慧、言語に巧にして美しく諸法を説きて人心を轉ずるも自ら不如法にして行ひ正しからずんば、譬へば雲雷して雨無きが如し。一。廣學多聞、智慧有れども訥口拙言にして巧便無く法寶の藏を顯發すること能はずんば、譬へば雷無くして小雨あるが如し。二。廣く學問せずんば智慧無く法を説くこと能はず、好行無し。是れ徹法師の無慚愧なり。譬へば小雲にして雷雨無きが如し。三。多聞廣知、言語に巧に美く諸法を説きて人心を轉じ法を行するに心正しして畏るる所無きは、大雲雷して洪雨を注ぐが如し。』

と。其四。天台智者、定室常に閑にして惠燈恆に明かなり。靈山に聽き、南岳に稟く。釋する所の義、誰か信受せざらん哉。第四法師は天台其人なり。

【麤食者】第四に法華を誘ふ文に云はく、『方便品』に云はく、『過去無數劫、無量滅度佛、種種緣譬喩、無數方便力、演說諸法相』と。已上經に麤食者、但方便の句を見て先

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

三を指せることを解せず。是故に偽りて法華經を指して是れ權にして圓實に非すと云ふ。

を主張するを破す

【五性】法相宗の所立一切衆生の機類を五性に分ちて成佛不成佛を定む。一に定性聲聞二に定性緣覺、三に定性菩薩、四に不定性、五に無性を云ふ。【三世】過去、現在、未來を云ふ。

五佛の中には是過去の佛なり。又三一の中には是、先三の權なり。其後一の文に云はく、  
 『是諸世尊等、皆説一乘法。化無量衆生、令入於佛道。』と。已上經 當に知るべし。皆説一乘  
 法と云ふことは是則ち『法華經』なる事を。無量の衆生を化して佛道に入らしむと云ふは、  
 三乘五性皆成佛するの文なることを。麤食者又、未來佛の偈を引いて云はく、『未來の諸  
 の世尊、其數量有ること無し。是諸の如來等、亦方便して法を説きたまふ。一切の諸の  
 如來、無量の方便を以て、諸の衆生を度脱し、佛の無漏智に入らしむ』と。已上經 麤食者、  
 偏に方便説法、亦無量方便と云ふを見て、何經を指すことかを解せず。是故に偏りて『法華  
 經』を指して是權にして圓實に非すと云ふ。五佛の中には是未來の佛なり。三一の中には先  
 三の方便なり。其次の文に云はく、『若し法を聞くこと有らん者は一として成佛せざるは  
 無し』と。已上經 當に知るべし。未來の佛、三乘五性皆成佛すと云ふことを。文に、定性  
 の二乘、畢竟無涅槃も佛の説法を聞くことを許すが故に。次に誓願皆成佛の文に云はく、  
 『諸佛の本誓願、我が行ずる所の佛道、普く衆生をして亦同じく此道を得しめんと欲す。』  
 と。已上經 當に知るべし。十方三世の一切の諸佛の本誓願は我が行ずる所の佛道、普く衆  
 生をして亦同じく此道を得しめんと欲することを。若し定性の二乘、畢竟無性成佛を得  
 ずんば、諸佛の本誓願は遍知を闕き、同得此道は衆生を欺き、普く衆生は亦普遍無からん。  
 豈爾の可ん哉。若し麤食者、無上道の爲に本誓願を發せば、寧ろ普令の句を去り、同得  
 の文を除かん哉。若し除去せば何ぞ諸佛數遍く所行の道を施すに預らん。其未來の佛の

後一の文に云はく、『未來世の諸佛、百千億の無數の諸の法門を説くと雖も其實は一乘の爲なり』と。已上經 當に知るべし。其實爲一乘とは即ち『法華經』を指すことを。既に其實と云ふ。明かに知んぬ。蠶食、權と爲すは深く經旨に違ふことを。蠶食者又、現在の佛の文を引きて云はく、『現在十方の佛、第一寂滅を知り、方便力を以ての故に、種種の道を示すと雖も其實は佛乘の爲なり』と。已上經 蠶食者、偏に方便の句を執して、『妙法華經』に配す。此亦爾らず。經義に違背するが故に。經に雖示種種道と云ふは、謂く、人道、天道、聲聞道、緣覺道、六度の菩薩道、三乘、共行の菩薩道、歷劫修行の菩薩道なり。是則ち法華の前の得果差別の道を指す。次の句に其實爲佛乘と云ふは即ち『法華經』を指す。既に其實爲佛乘と云ひて、其實爲三乘と云はず。明かに知んぬ。蠶食者、法華を權と爲すは經に違ふの妄説なることを。蠶食者又、釋迦佛の文を引きて云はく、『今我も亦是の如く、衆生を安穩にするが故に、種種の法門を以て佛道を宣示す』と。已上經 蠶食者、以種種法門の句を執して、『法華經』に配し、以て權と爲す。此亦爾らず。以種種法門とは法華の前經を指す。是則ち先の三權なり。宣示於佛道とは是則ち後の一實なり。次に釋迦の偈にのたまはく、『舍利弗、當に知るべし。鈍根小智の人、著相橋慢の者は是法を信する能はず。』と。已上經 蠶食者、法華を信する能はずして權と爲し、亦、密と爲す。豈鈍根小智の人、及び著相橋慢の者に不ず哉。次の偈に云はく、『今我、喜びて畏無し』諸の菩薩の中に於て、正直に方便を捨てて、但無上道を説く』と。已上經 當に知るべし。理外の方便を捨てて、但理内の道を説くことを。

【鶩子の領解の文】  
妙法蓮華經信解品  
第四に出づ。

【得道轉法輪】三  
學を行じ歸惑證理  
するを得道と云ひ  
佛の説法を轉法輪  
と言ふ。

【無量義經】一卷  
蕭齊の曇摩伽陀耶  
舍譯。法華の開經  
に當る。

其但説無上道とは即ち是れ妙法華なり。麤食者、法華は是權とは無上道を權と爲すなり。麤食者、大乘を以て實と爲し、無上道を權と爲す。豈自語相違に不ず哉。其無上道とは大乘に不ず哉。若し法華は大乘に不ずと言はば説大乘の文に違す。若し法華を大乘と爲すと云はば權にして圓實に非すと云ふに違す。進退逃るる所無し。深く悲しまざるべけん哉。麤食者又、鶩子の領解の文を引きて云はく、「又譬喩品の初に、舍利弗、前の文の方便品を領解して云はく、『佛、過去世の無量滅度の佛、方便中に安住して亦皆、是法を説きたまふ。現在未來の佛、其數量り有ること無し。亦諸の方便を以て、是の如きの法を演説したまふと説く。今の如きは世尊、生及び出家より、得道轉法輪まで、亦方便を以て説く』と。已上經、麤食者但、安住方便中を見、亦、亦以諸方便を見、重ねて亦以方便説を見て、何れの時の諸の經教なることを覺らず。僞りて法華を配し、以て權と爲す。誰か智有る者、此釋を啖はざらん哉。當に知るべし。安住方便中とは、過去世の佛の先三の方便を領し、亦皆説是法と言ふは、過去世の佛の後一の眞實を領し又亦以諸方便と云ふは、現未の諸佛の先三の方便を領し、演説如是法と言ふは、現未の諸佛の後一の眞實を領し、又、亦以方便説と云ふは、釋迦如來の得道已來、法華の前に轉ずる所の法輪なり。是則ち、釋迦如來の先三の方便を領することを、『無量義經』に「種種の説法、方便力を以てす。四十餘年、未だ眞實を顯はさず。是故に衆生、道を得ること差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず」と。即ち其事なり。麤食者、世尊説實道の句を隱泯し、法華を名けて實道と爲さず。覺せ

【攝論】攝大乘論  
無著菩薩造。佛陀  
扇多譯二卷等四譯  
有り。

【玄非】唐の大慈  
恩寺の玄奘三藏  
入竺して多くの梵  
本を請來し弘福寺  
に於て徒衆と共に  
翻譯す。凡そ七十  
五部一千三百三十  
五卷。

【無性】無着の攝  
論を釋す。

【世親】バスマン  
ド (Vasubandhu)  
天親とも譯す。無  
着の弟にして千部  
の論師と稱せられ  
其攝論は五攝論の  
一なり。

ざるが故に顯揚せずと爲んや。常に覺すと雖も、固く自宗を執して法華を隱すと爲ん耶。  
當に知るべし。世尊說實道の句は釋迦如來の後一の眞實を領すること。麤食者、偽りて  
方便の句を指して「法華經」を權と爲すは、深く驚子の領に違す。驚子領解して云はく、「疑  
悔永く已に盡きて、實智の中に安住す」と。文。已上經。既に安住實智中と云ひて、安住權智と云

はず。明かに知んぬ。麤食者、「法華經」を權と爲すは愚中の極愚なることを。麤食者、過  
去佛の方便の文は未來諸佛の方便の文、現在諸佛の方便の文、釋迦文佛の以種種の文を引  
き、又、舍利弗領解の文、過去諸佛の方便の文、現未諸佛の方便の文、釋迦如來の方便の  
文を引く。此即ち「攝論」に「是法華の文意を會して言はく、「一類を引接し及び所餘を任持せ  
んが爲に、不定種性に由りて諸佛一乘を説く」と。文。已上論。麤食者、常に此頌の文を引きて法

華の一乘に會し、千番萬番、不定の二乘に佛一乘と説くと云ふ。今當に具に其不定種性  
を審定し、法華の一乘を顯はして、無量の時苦を濟ふべし。

問ふ。「其「攝論」とは四本の中、誰の所譯を指すや。」答ふ。「唐朝の玄奘所譯の攝論なり。  
其譯に二本有り。無性の攝論十卷、世親の攝論十卷なり。今世親の論に據りて法華の意に  
會す。問ふ。「其一類を引接せんが爲とは何人ぞ耶。」答ふ。「釋論」に云はく。「一類を引接

せんが爲とは、謂く不定種性の諸の聲聞等をして、大乘に趣むかしめんが爲なり。  
云何ぞ、不定種性の諸の聲聞等をして、皆大乘に由りて而も般涅槃せしむべき」と。論文。  
今問ふ、「此一類の不定種性とは、約位の不定と爲んや。種子の不定と爲んや。若し約位の

【忍位】七善根の中、忍法の位、總じて眞理を證する位。

【熏習】現行法が眞如又は阿頼耶識に其種子又は習氣を留る作用。

【廻心向大】聲縁の小根を廻らして大乘の佛道に趣向するを云ふ。  
【十地の位】界外の無明を斷ずる位

不定と言はば忍位以前の不定と爲んや。大に望むる不定なるべしと爲んや。若し忍位以前の不定なりと言はば法華の前に二を存する一乘は皆悉く引接なり。明かに知んぬ。此類は法華に會せず。舍利弗を指さざるが故に。若し大に望むる不定ならば後頌の文を指す可し。舍利弗を指すが故に。又究竟の一乘なるが故に。若し種性不定なりと言ふは、又問ふ。其種性とは法爾の不定種性と爲んや。熏習の不定種性と爲ん耶。若し法爾の不定種性と言はば、一類の不定種性の聲聞、廻心向大して後、十地の位の中、一類の不定の號を立つ可し。法爾の種性は終盡無きが故に、若し熏習の不定種性と言はば、退位の前に限りて不定種性の號を立つ可し。正位に入るの人、何ぞ不定の號を立てん。又此一類の不定種性を引接すとは、五種性の中の不定種性に攝すと爲んや否や。若し攝すと言はば不定多種なり。三乘の不定種性あり。菩薩緣覺にして聲聞を闕くの不定種性あり。菩薩聲聞にして緣覺を闕くの不定種性あり。聲聞緣覺にして菩薩を闕くの不定種性あり。此四の不定種性と、此一類の不定種とは何の不定に攝するや。聲聞の不定と云ふこと無きが故に。又聲聞緣覺にして菩薩を闕くの不定種性は大乘に趣くべし。論に簡ばざるが故に。等の字を以て三の不定を等取するが故に。又其菩薩を闕くの不定種性は五種性の中何れの性に攝す可き。若し猶、不定種性に攝すと言はば、其菩薩を闕くの不定は成佛することを得べし。汝、五種性の中の不定種性の成佛を許すが故に、若し多分に約して三の不定の成佛を許して、菩薩を闕くの不定を許さずと言はば不定の失有り。三種の不定種性の如く、第四の不定種性に攝

【退位】菩薩一分にても眞理を證得せば不退位と云ふ。其已前を退位と云ふ。

するが爲の故に、菩薩を闕くの不定は成佛することを得べし。菩薩を闕くの不定の如く、第四の不定種性に攝するが爲の故に、三種の不定種性は成佛せざるべし。又一類の不定種性を引接すと云ふは但、諸の聲聞を擧げて緣覺を擧げず。若し等の字を以て緣覺を等取すとせば、餘の不定等を等取せざる可し。若し餘の不定を等取すとせば緣覺を等取せざる可し。若し二色の人を等取すとせば一類の言、用無かる可し。麤食者常に云はく、「不定種性の二乗の爲に法華一乘を説く」と。當に知るべし。菩薩を闕く不定の二乗は定めて成佛す可きことを。若し菩薩を闕く不定の二乗は成佛することを得ずと言はば定んて自語相違の失有り。麤食者、一類を引接すと云ふに、菩薩を闕くの不定を簡ばざるが故に、又初の一類に成佛を許すが故に、又及び所餘を任持すとは不定種性の諸の菩薩衆なりと云ふは、五種性の中、何れの種性に屬せん。若し第四の不定種性に攝せば四不定の中、菩薩不定無し。何ぞ相攝することを得ん。若し菩薩種性に攝すと言はば、菩薩種性は定性の菩薩爲り、何ぞ不定種性に攝せん。「攝論」の釋に違するが故に。若し後の定性の菩薩を以て菩薩種性に攝すと言はば、此不定種性の菩薩は退位に約して不定と名け、不退位に約して定と名く。麤食者の所立、種性に約して不定と名けば都て用無かる可し。若し退位に約して不定と名くとは種性有るが故なりと言はば、此不定種性は定性の菩薩を攝せざる可し。又、十地の位に不定の號を立つ可し。種性は法爾として定んで改むべからざるが故に、若し種性は法爾なりと雖も緣に隨ひ改む可しと言はば五種性、共に不定と名く可し。若し



【等覺】大乘五十二位の中第五十一位、菩薩終極の位なり。

【玄贊】法華玄贊十卷、唐の慈恩大師撰。

【唐師】慈恩大師窺基を云ふ。

【五】麤食が化城喩品を引き法華十方三世の佛の聲聞を引攝して一乘に歸入せしめんが爲にして頓悟の爲に非ずとするを破す。

【化城喩品】妙法蓮華經化城喩品第七。

【大通智勝佛】三千塵點劫の過去世に出世せし佛。

【阿耨多羅三藐三菩提】アヌッタラサムミヤク・サンボーヂ (Anuttara-samya-sambuddhi 無上正遍知、一切の眞理を悟る無上の智慧)。

【沙彌】十戒を受けし男子の出家衆

法爾の種性、法爾として各別なりと言はば不定の名、等覺に及ぶ可し。定性の菩薩、不定の菩薩、法爾として種性別なるが故に。若し爾らずんば法爾の種別、用無かる可きが故に。麤食者所引の頌の文は後つて麤食の義に違す。麤食の法爾を破して天台の約位に順す。今より以後、此一頌の文を引きて法華に會す可からず。此一頌の意は退位の不定をして大乘に趣かしむるに會す。故に法華の前の所説存二の一に會す。『攝論』に此頌を釋するに法華を指さざるが故に。法無我等の後の一頌の文、當に法華を會すべし。入位定性、一乘に趣くに會するが故に。『妙法蓮華經』の所説の破二の一を釋す。『釋論』此頌を釋するに法華の會を指すが故に。又究竟なるが故にとは唯此一乘最も究竟と爲す。前の頌釋の中、究竟を指さざるが故に。明かに知んぬ。引く所の『攝論』の頌、麤食の義に順ぜざることを。又麤食者意を取り結して云はく、『此等の文に準するに法華は是權にして圓實の教に非ず』と已上麤食者、衣を沾すの失を犯して深く自宗に違す。『玄贊』の第一に大乘の基師、自者語。麤食者、衣を沾すの失を犯して深く自宗に違す。『玄贊』の第一に大乘の基師、自ら八宗を立てて一代の經を攝す。即ち『法華經』を判じて應理圓實に攝す。今麤食者、固く『法華經』は是れ權にして圓實に非ずと判ずるは師資相違せり。歸信すべからざるなり。

【五】麤食者、第五に法華を誘ふ文に云はく、五に『化城喩品』に言はく、『十六王子、大通智勝佛に白して言さく、世尊、是諸の無量千萬億の大徳の聲聞は皆已に成就せり。世尊、亦當に、我等が爲に阿耨多羅三藐三菩提の法を説くべしと。爾時に彼佛、沙彌の請を受け四衆の中に於て、是大乗の經、妙法蓮華と名くるを説く。乃至爾時の所化の無量恆河

【四衆】發起衆、當機衆、影向衆、結緣衆の四を云ふ。【比丘】出家して具足戒を受けし男僧を云ふ。

【六】麤食が法華の開方便門、示眞實相と云へるを執し之れ攝下顯上の方便教なりと謂ふを破す。

沙等の衆生は汝等諸の比丘及び我滅度の後、未來世の中の聲聞の弟子是なり」と。已上經麤食者、此經文の意を取りて云はく、「既に十方三世の佛、聲聞を引攝して一乘に歸せんと欲するが爲に此法華を説く。頓悟の菩薩の爲に而も説かず。故に知んぬ。此權にして實教に非ず」と。已上麤食。彈じて曰はく、「此文爾らず。定んで機法別たざるの失有るが故に。所以は何ん。夫れ一乘の本法は時を待ち機を待つ。機熟し時至らば佛、乃ち此を説きたまふ。佛頓機の熟を待ちて一乘の頓教を説く。當に知るべし。聲聞の弟子頓機今熟して法華經を説くことを。何ぞ漸時の名を執して頓機の熟に泥まん。其大通佛の時法華經を説くに所化の衆生何ぞ但小のみ有らん。其十六の菩薩沙彌、豈頓悟せざらん哉。是故に經に云はく、「是經を説く時、十六の菩薩沙彌、皆悉く信受す」と。明かに知んぬ。麤食者、頓悟の菩薩の爲に而も説かずとは、未だ法華の文を検せざるの失あり。夫頓悟の機熟して頓を説く時至らば爾時諸佛、機に應じて頓を説きたまふ。當に知るべし、法華經は機頓教頓にして是實是圓なることを」

【六】麤食者、第六に法華を誘る文に云はく、「六に經の第四に云はく、「此法華經の藏は方便の門を開きて眞實の相を示す」と。已上取意所。麤食者、經意を取りて云はく、「上の句は是攝下の方便、下の句は是即ち顯上の方便なり」と。已上麤食。彈じて曰はく、「此説爾らず。定んで方便を解せざるの失有るが故に。其攝下の方便、顯上の方便と云ふは法華の前の未顯眞實の種種の方便なり。亦此體外の方便なり。是れ法華の已顯眞實能開の實教に不ず。

【七】 蠱食の大乗十法經を引き法華を密意の教と爲すを同じく同經を用ひて破す。

【大乘十法經】 卷梁の僧伽婆羅譯【阿難】アーナンダ (Ananda) 佛十大弟子の一、多聞第一。

今此法華經は方便の門を開くとは、方便の言は所聞に名く。法華の前の種種の方便なるが故に、聞に能所有り。能聞の邊は法華の義を含め、所聞の邊は體外の方便なるが故に、示眞實相とは、實相の言は法華に名く。法華の日に眞實を示すが故に示に能所有り。能示の邊は法華の義なり。所示の邊は本有の法なり。蠱食者、偏へに方便の二字を見て名同義異の旨を解せず。體外の方便を執して法華經を權と爲す、但、應理圓實に相違するのみに非ず。亦復、示眞實相に乖違す。

【七】 蠱食者、第七に法華を誘ふ文に云はく、「七に」大乘十法經に云はく、「善男子、何等か是れ如來秘密の教と爲す。善男子、我、聲聞阿耨菩提を得と記するは此爾るべからず。阿難、我、昔病を患ふと言ふが如き此爾るべからず。乃至廣く是れ秘密教なりと説く」

と。已上蠱食者、此意を取りて云はく、「此意は、説きて言はく我法華會の中、聲聞阿耨菩提を得と説くは此不定性に約して佛道を得と説く。決定性を記せず。而も總含して、唯一乘のみ有りて二乘有ること無しと言ふ。故に法華は密意の教と名け權教と名く」と。者語。彈じてげはく、「此文爾らず。定んで密の義を解せざるの失有るが故に。其、大乘十法經に十種の密の義有り。一には記密、二には病密、三には老密、四には聞密、五には論密、六には身密、七には怨密、八には乞密、九には謗密、十には食密なり。此十種の密、其義各異り。今蠱食引く所の文、此不應爾と云ふを取りて定性に記せずと云ふ。此亦爾らず。其、十法經の文、定不定を簡ばざるが故に其密の大意は時徳の密なるに約す。



【補特伽羅】一ブド  
ガ(Parivāṇa)人  
又は衆生と譯す。

引攝し及び所餘を任持せんが爲に、不定種性に由りて諸佛一乘を説く。法、無我、解脫等し  
きが故に性不同なり。二の意樂を得て化し究竟じて一乘を説く」と。已上論。此十義の中、初  
の一頌は不定の二乘の爲に一乘を説くの意を顯し、後の一頌は定性の二乘の爲に一乘を  
説くの意を顯す。此即ち二十法經の聲聞に成佛の記を授くるを記祕密教と名くるに同じ。  
當に知るべし。方便祕密は密意有餘の不了義なることを。是文異れども義同じ。猶是れ權  
の義なり」と。已上麤食。彈じてはく、「此釋爾らず。定んで論の頌を解せざるの失有り。文  
を加へて後學を誑惑するの失あり。其論頌の意は初一行の頌は未だ正位に入らざる一類  
の不定種性の聲聞等、及び未だ不退の位に入らざる不定種性の諸菩薩等をして大乘に趣む  
かしめ、大乘に住せしむることを辯す。且つ法華の前の所説、一を存する一乘の意趣なり。  
其頌の釋論の文、法華を指さざるが故に後の一行の頌の意は已に正位に入れる諸の聲聞  
等の故に佛一乘を説く別の意趣を辯す。何となれば三平等に由るが故に、當に佛道を成  
すべしと説く。法等しきが故にとは法は謂く眞如、諸の聲聞等の同じく歸趣する所、所趣  
平等なり。故に一乘と説く。一乘と説くと言ふ意は定性の聲聞等、遂に佛乘に趣むくべ  
きが故に、一乘と説くと名く。無我等しきが故にとは、謂く聲聞等の補特伽羅、我皆有る  
こと無し、無我に由るが故に。此は是聲聞、此は是菩薩と云ふは道理に應ぜず。此れ無我  
の平等意趣に由るが故に一乘を説く。一乘を説くと言ふ意は、人無私の理を證する定性  
の聲聞等遂に佛乘に趣むくきが故に説一乘と名く。解脫等しきが故にとは、謂く聲聞等

煩惱障に於て同じく解脱を得るが故に一乘を説く。世尊の言ふが如し。解脱脱解、差別有ること無し。一乘と説くと言ふの意とは、煩惱障を燒きて解脱を得る灰滅趣寂の聲聞等、遂に一佛乘に趣入す可し、是故に一成佛の義を説く。性不同の故とは、種性差別するが故に不定性の諸の聲聞等、亦當に成佛すべきを以て此意趣に由るが故に一乘を説く。一乘を説くと言ふ意は、緣覺種性、聲聞種性、差別するが故に、菩薩を闕く不定性の聲聞等亦當に成佛すべきを以ての故に一乘を説く。夫定性聲聞等、三平等に由るが故に遂に佛乘に趣むくべし。菩薩を闕く不定、何に由りて佛乘に趣むかざらん。『亦當に成佛すべし』の言は上下の義を兼ぬるが故に、上に定性等遂に佛乘に趣むくべしと説く。是故に下に不定を『亦當に成佛すべし』と稱す。二の意樂を得るが故にとは、二種の意樂を得るが故なり。一には攝取平等意樂、此に由りて一切の有情を攝取す。彼即ち是れ我、我即ち是れ彼と言ふ。是の如く取り已りて此既に成佛す。彼亦成佛せん。此意趣に由るが故に一乘を説く。夫一切の有情は法身の流轉なるが故に彼我相即することを得。定性の聲聞等は法身の流轉なるが故に遂に佛地に登るべし。夫衆生海聚は増せず滅せず。有心の衆生は無心を成ぜず。無心の物は有心を成ぜず。是故に灰滅趣寂の二乘、分段の躰身は界内を灰にし有爲の曇智は無爲に滅す。然りと雖も三餘ありて意生を引起す。無明住地は則ち煩惱餘なり。無漏の業は是れ則ち業餘なり。意生の身は則ち果報餘なり。定生の二乘、未だ佛智を得ず。無明住地、能斷の智無し。何ぞ金鏢を免れん。鐵鏢を免るるを以て無餘滅と名く。未だ金

【迦柘珠】 寶玉の名。

【無餘】 煩惱の残りなき至極の境地

【無餘涅槃】 身智俱に灰滅せる涅槃

録を免れざれば亦、有餘と名く。不増不減の故に、已に死して寂に趣むくも等しく再生して法華を聞く。攝取平等意樂とは其意是の如し。若し爾らずんば彼我相即の言、都て寄る所無し。「故に一乘を説く」の言、亦衆生を欺誑す。二に法性平等意樂とは、謂く諸の聲聞、法華會上に佛の授記を蒙り、佛の法性平等意樂を得るも、未だ法身を得ず、是の如きの平等意樂を得るに由りて是思惟を爲す。諸佛の法性は即ち我法性なりと。復別の義有り。謂く彼衆の中、諸の菩薩有り。彼と名同じく佛の授記を蒙る。此れ法如平等意樂に由るが故に一乘を説く。夫一乘を説くの意は、法華の會上に佛の授記を蒙り、諸の聲聞等、已に煩惱を燒き、已に正位に入る。迦柘珠の如く亦敗種の如し。然りと雖も法華の威力の故に法性平等意を得、迦柘身を轉じて瑠璃を成じ再び敗種を生じて覺樹を茂らしむ。化の故にと言ふは、謂く聲聞乘等を化作するなり。世尊の言ふが如き我往昔を憶ふに無量百返、聲聞乘に依りて而も般涅槃すと。此意越に由るが故に一乘を説く。聲聞乘を以て化する所の有情、此を見るに由るが故に般涅槃を得。故に此化を現す。夫一乘と説くの意は、化作の聲聞等、般小無餘なりと雖も、然も示にして永く滅せずと。當に知るべし。實に寂に趣むくの聲聞は般小無餘なりと雖も然も永く種を滅せず。定んで當に成佛を得べきことを。是故に一乘を説く。夫一乘の名は二を遮するの名なり。若し定性有りて成佛せずんば實に小乘の涅槃の證有らん。今化するが故に一乘を説くは何の利益か有る。化は是れ實を引く。小乘の無餘涅槃に留らず。而も彼土に於て『法華經』を聞きて廻心向大

す。是故に一乘を説かば當に成佛すべきの義なり。究竟の故とは唯此一乘のみ最も究竟と爲す。此を過ぎて更に餘の勝乘無きが故に、聲聞乘等は餘の勝乘有り。謂ゆる佛乘なり。此意趣に由りて、諸佛世尊、一乘を宣説す。當に知るべし。三乘は究竟ならず。一乘を究竟と爲すことを。其聲聞乘等とは緣覺乘及び菩薩乘を等取す。故に天親菩薩の云はく「善く成立するに三有り。一には小乘、二には三乘、三には一乘なり」と。明かに知んぬ。一乘を最と爲す。良に以有ることを。三乘の人、究竟じて一に趣く。是故に論に云はく、「唯此一乘のみ最も究竟と爲す」と。麤食者、頌の意を説きて云はく、「此十義の中、初の一頌は不定性の二乗の爲に一乘を説くの意を顯はす」と。此説爾らず。任持の意を闕くが故に。夫不定種性の菩薩を擧げざるは、還つて自宗に於て密する所重きが故なり。其所害の義は具に前の章に説くが如し。麤食亦云はく、「後の一頌は定性の二乗の爲に一乘を説くの意を顯はす」と。此説爾らず。性不同の人、及び法華の記を隱すが故に、麤食者の意は一乘と雖も然も定性の二乗は成佛を得ず。但法身平等を取るが故に一乘を説くと。此義爾らず。定性の聲聞、寂死に趣くと雖も法義平等なるが故に、遂に成佛を得べし。是故に一乘を説く。一乘の言は二を遮するの義なり。是故に麤食深く「攝論」の義に違ふ。何を以てか二頌の意、皆佛道を成ずと云ふことを知ることを得んや。天親菩薩の云はく、「已に定まる根性の聲聞は更に練根して菩薩と爲し未だ定まらざる根性の聲聞は直ちに佛道を修せしめ、佛道に由りて般涅槃す」と。當に知るべし。已定根性は定性の異名、未定



【九】 麤食が涅槃經を接引し法華一乘を密意權教とせるを破す。

【涅槃經】 大般涅槃經四十卷、北涼曇無讖譯を北本の樂と稱し、劉宋の慧觀等前經を再治せるもの南本涅槃三十六卷と爲す。

【須陀洹】 スロータ・アーバナ (Srotāyana) 新に預流と譯す。聲聞四果の内初果の名、三界の見惑を斷じて此果を得。  
【阿羅漢】 アル・ハーン (Arhāt) 小乘の極果。

法華秀句

根性は不定の異名なり。練根して菩薩と爲し直に佛道を修せしむることを。明かに知んぬ。定性不定皆共に成佛すと云ふことを。麤食者私に論文を加へて云はく、「八に攝論」の第十卷に云はく、十の密意に依りて法華會中に佛一乘を説く。十の密意とは頌に曰はく」と。論文を加ふ。麤食者己が門徒を誘はんが爲に私に論文に字を加へ、聖教を壞亂し後學を誑惑す。其加ふる所の十密意等の一十八字は衆本都て無し。唐朝の玄奘三藏所譯の攝論、其の兩本有り。一に無性菩薩の釋論一部十卷、其第十卷に都て此文無し。二に世親菩薩の釋論一部十卷、其第十卷に都て此文無し。又隋朝に譯する所の天親菩薩の釋論一部十卷、其第十卷に都て此文無し。又梁朝に譯する所の天親の釋論一部十卷都て此文無し。麤食者何ぞ輒く十の密意は法華の會を指すと云ふや。一言を増加するも古人許さず。況んや二言三言をや。麤食者所同の『十法經』の成佛は密記と名け、能同の攝論の頌の皆成一乘と爲す。當に知るべし。麤食者引く所の方便秘密、密意有餘不了義とは皆先三の方便を指して同じく權と爲すが故に、天台智者引く所の方便秘密等は皆體内の權を指す。明かに知んぬ。法華の皆成唯一佛乘は是れ眞是れ實なることを。」

(九) 麤食者第九に法華を謗る文に云はく、「九に涅槃經の三十四に云はく、我經の中に於て諸の比丘に告ぐ、一乘一道、一行一緣なり。乃至云はく、我諸の弟子我意を解せず。唱へて如來は須陀洹乃至阿羅漢皆佛道を得と説くと云ふ」と。已上略して經麤食者、此意を取りて云はく、「此れ即ち法華の一乘を會するの文なりと。定性の二乘、佛道と作さざる

【深密】 解深密經五卷、唐の玄奘譯、法相宗所依の根本聖典たり。

【華嚴】 大方廣佛華嚴經六十卷、八十卷、四十卷の三本あり。華嚴宗所依の根本經典たり。

【十二因縁】 無明行、色、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二にして因縁生滅の法則なり。

行るも而かも摠相して唯一乘のみ有りて二乘無しと言ふ。故に不解と名く。此密意の故に是れ權にして實に非すと云ふ」と。已上麤食 彈じて曰はく、「是れ法華を會せず、定んで深密等を會す。知ることを得る所以は法華は定説なるが故に、是れ諍論の本にあらす。深密、華嚴等は不定の説なるを以ての故に、是れ諍論の本爲り、麤食者引く所皆不解意と成る。此れ則ち諍論の文なり。若し此不解を取らば我亦其を引きて對へん。『涅槃經』の次の文に云はく、『善男子、我經中に於て須陀洹の人、人間天上七返往來して、信ち般涅槃すと説く』と。乃至云はく、『我諸の弟子、是説を聞き已りて我言を解せず。唱へて如來須陀洹乃至阿羅漢、佛道を得ずと説くと云ふ』と。已上經 當に知るべし、佛道を得ずと云ふも佛意を解せず、皆佛道を得と云ふも佛意を解せず。意を得れば俱に得、意を失へば俱に失ふ。何が故に皆成の不解は失にして不成の不解は得なる。若し不成の不解、失を成することを得ずと云はば彼皆成の不解、其失を成すべからず。凡そ佛の滅後に於て是の如きの説を作す。如來は畢竟じて涅槃に入ると云ひ或は畢竟じて涅槃に入らずと云ふ。一證論。或は我有りと説き或は我無しと説く。二證論。或は中陰有りと云ひ或は中陰無しと云ふ。三證論。或は退有りと説き或は退無しと説く。四證論。或は有が説きて十二因縁は是れ有爲の法なりと言ひの身は是れ無爲なりと言ふ。五證論。或は有が説きて十二因縁は是れ有爲の法なりと言ひ或は因縁は是れ無爲の法なりと説く。六證論。或は心は是れ有常なりと説き或は心は是れ無常なりと説く。七證論。或は有が説きて欲樂を受くれば能く聖道を障ふと言ひ或は遮せ

【世第一法】四加行位の第四、世俗法中の最上にして有漏智の最極なり  
 【二界】欲界、色界、無色の三界、凡夫の生死往來する世界の分類なり  
 【五陰】又は五蘊有爲法の作用を起す五種の要素。色受、想、行、識の五之なり  
 【三無爲】小乘に立つる所、一に擇滅無爲、二に非擇滅無爲、三に虚空無爲なり  
 【無作】因縁の造作無きを名づく。因縁所生なるを有作と云ふ  
 【心數法】又は心所法と云ふ。是心法にして其法數多ければ爾名づく  
 【八齋戒】不殺、不盜、不婬、不妄語、不飲酒、不塗飾香鬘、歌舞觀聽、不眠坐、嚴麗牀座、不食非時食  
 【優婆塞戒】不殺

法華秀句

すと云ふ。是則ち第九論。或は世第一法は唯是れ欲界なりと説き或は三界なりと説く。是則ち第九論。或は布施は唯是れ意業なりと説き、或は有が説きて即ち是れ五陰なりと言ふ。是則ち第十論。復有が説きて三無爲有りと言ひ、或は有が説きて三無爲無しと言ふ。是則ち第十論。復有が説きて或は造色有りと言ひ復有が説きて或は造色無しと言ふ。是則ち第十論。或は有が説きて無作の色有りと言ひ或は有が説きて無作の色無しと言ふ。是則ち第十論。或は有が説きて心數法有りと言ひ、或は有が説きて心數法無しと言ふ。是則ち第十論。或は有が説きて五種の有有りと言ひ或は有が説きて六種の有有りと言ふ。是則ち第十論。或は有が説きて八齋戒、優婆塞戒は具受得の戒なりと言ひ、或は有が説きて具受得に不すと云ふ。是則ち第十論。或は比丘四重を犯し已りて比丘戒在りと説き、或は在らずと説く。是則ち第十論。或は有が説きて須陀洹の人、斯陀含の人、阿那含の人、阿羅漢の人、皆佛道を得と言ひ、或は得ずと言ふ。是則ち第十論。或は佛性は衆生に即して有りと説き、或は佛性は衆生に離れて有りと説く。是則ち第十論。或は有が説きて四重禁を犯し五逆罪を作る一闍提等皆佛性有りと言ひ、或は言ひて無しと説く。是則ち第十論。或は有が説きて十方の佛有りと言ひ、或は有が説きて十方の佛無しと言ふ。是則ち第十論。或は有が説きて十方の佛有りと言ひ、或は有が説きて十方の佛無しと言ふ。是則ち第十論。今麤食者の引くは、是二十一の論論の中の第十八の論論の一段の文なり。法華を會すと爲すは迷謬の甚だしき哉。夫れ論論の本は不定の説に有り。是故に次の經文に云はく、如し其れ如來は具足成就して根力を知りたまふ者なり。何が故に今日決定して説かさる。佛、迦葉菩薩に告げたまはく、善男子、是の如きの義は眼識の知に非ず。乃至意識の知に

不盜、不邪淫、不妄語、不飲酒の五戒。

【四重】四波羅夷罪を云ふ。姦戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒なり。

【比丘戒】比丘の二百五十戒を云ふ。

【斯陀含】一來と譯す。聲聞の第二果。

【阿那含】不來と譯す。聲聞の第三果。

【五逆罪】殺父、殺母、殺阿羅漢、出佛身血、破和合僧。

【一闍提】イクチヤーンチカ (Ikchhi) 成佛の種を失ひし人。

【如來】タターガタ (Tathagata) 佛十號の一、如實の道に乗じ來つて佛道を成ずるの意。

【迦葉菩薩】佛十大弟子の一、頭陀第一の大士。  
【一〇】麤食の菩提資糧論を引きて法

非ず。乃ち是れ智慧の能く知る所、若し智有る者は我是人に於て終に二説を作さず。是れ亦、我二説を作さずと謂ふ。智無き者に於ては不定の説を作す。而も是無智、亦復我不定の説を作すと謂ふ。善男子、如來の所有一切の善行は悉く諸の衆生を調伏せんが爲の故なり。譬へば醫王の所有醫方悉く一切の病を療治せんが爲なるが如し。若し善男子、如來世尊は國土の爲の故に、時節の爲の故に、他語の爲の故に、度人の爲の故に、衆根の爲の故に、一法の中に於て二種の説を爲し、一名の法に於て無量の名を説き、一義の中に於て無量の義を説き、無量の義に於て無量の名を説く。當に知るべし、『法華經』は二説を作さず。故に諍論の本と作らざることを。『深密經』所説の密意の一乘の義は不定の説を作す。故に是れ諍論の本なり。華嚴所説の一道出生は不定の説を作す。故に亦、諍論の本なり。明かに知んぬ。麤食者宗とする所の解深密所説の一乘は是れ正しく密意と爲す、未だ眞實を顯さざるが故に。天台法華宗の所説の一乘は是れ正しく顯了と爲す。已に眞實を顯すが故に『解深密經』の文には密意の言有り。『妙法華經』の文には宣示顯説の句有り。顯密の意、經に依りて定む可し。具に通六九證に廣く説くが如し。」

【麤食者第十】法華を誘るの文に云はく、「十に菩提資糧論に云はく、『問ふ、若し煩惱を燒くの衆生、菩提心の種子を生ぜずんば何が故に』法華經に煩惱を燒く諸の聲聞等に授記を與ふるや。』答ふ、『彼諸の衆生に記するは此れ因縁有るに記す。唯是佛の巧方便なり。而も彼菩提心の種子を生ぜずとは無爲正定の位に入るを以ての故なり。經に説くが

華の權なるを謂ふを、次に脱漏ありと破す。以上を以て十教二理の内十教了る。  
 【菩提資糧論】龍樹造、自在比丘釋隋の達磨笈多譯六卷。  
 【頭多】(Dhuta)衣食住の執を離るる行法にして通途には乞食の一行を謂ふ。  
 【三摩提】(Samadhi)定又は等持と譯す。  
 【笈多三藏】隋代の達磨笈多を云ふ菩提資糧論の譯者。  
 【比丘自在】菩提資糧論の釋を造る。  
 【到彼岸】菩薩の大行にして、速の彼岸より悟の彼岸に到るを謂ふ。

如し。迦栞珠の如き諸天世間に善く修理すと雖も彼迦栞珠は終に瓔珞と爲すこと能はず。是の如く聲聞復、諸の戒を具し頭多功德、三摩提等を學すと雖も終に道場に坐して無上覺を證する能はず。是の如き等の經を以ての故に、當に知るべし。聲聞、無爲法を得已れば菩提の心を生ぜざることを、已上論云、  
 曇食者結して云はく、「此れ即ち十法經に聲聞に作佛の記を授くるを指して秘密教と名く。此等の文に準じて知る。法華會の中に聲聞に授記するは定性、不定性、及び應化の聲聞に通ずることを、已上曇食彈じて曰はく、「此說爾らず。此二資糧論は位に約して往復す。曇食者種性約して立つる所の定性の聲聞の義は此論に相應せざるが故に、又曇食者引く所の論文雜亂して次第ならず。凡そ此資糧論は笈多三藏譯する所の本なり。一部合して六卷あり。龍樹菩薩本頌を造る。比丘自在、頌文を釋す。今曇食者引く所の文、『問ふ若し煩惱を燒くと云ふより下、等授記と云ふに至るの二十九字は比丘自在造る所の自問なり。曇食引く所の文、中の字を脱落せり。一行五言の頌有り。』彼諸の衆生に記するは、此れ因縁有るに記す。唯是れ佛の善巧なり。方便して彼岸に到らしむ」と。  
 已上頌云、  
 此一行の頌は龍樹の本頌なり。曇食引く所の文、二句雜亂せり。其唯是句に善の一字を脱し其方便の句に到彼岸の三箇の字を脱す。曇食者但、方便の文に限りて到彼岸と云ふを除却せり。其意矯むるに似たり。比丘自在釋して曰はく、「知らず、何等の衆生をか成就する、彼中の因縁は唯佛のみ知る所なり。調伏の彼岸に到り餘の衆生と共に相似せざるを以ての故に」と。  
 已上論云、  
 曇食者、不知成就等の三十箇の字を隠して乃

【一行】唐代の僧善無畏と共に大日經を譯す。

【五欲】色聲香味觸は眼等の五根に對して人の欲心を發起するものなれば五欲と云ふ。

【方等維摩】維摩詰所說經三卷、秦の羅什譯。方等は大乘の意なり。

至の言を置かず。其句の中、唯物所知と云ふは法華を推すの詞なり。麤食者引く所の次の文に云はく、「而も彼菩提心の種子を生ぜざる者は無爲正定の位に入るを以ての故に經に説くが如し」と。已上論まゝに、其論に「空と蓮華と、峻峯と深坑と、界と不男と迦柁との如く、亦、種子を焼くが如し」と。已上頌 麤食者、乃至の言を置かずして、其論文を雜亂せり、其頌の釋に曰はく、「虚空の中に種子を生ぜざるが如く、高原廣野に蓮を生ぜざるが如し、聲聞地の峻崖、獨覺地の峻崖、若し善學せずんば而も深坑に墮して便ち坑内に死なん。界とは聲聞は繫、無爲界に在るが故に、復有爲の中に於て行すること能はず。不男とは根敗の丈夫の五欲の利に於て復、利有らざるが如く、迦柁珠の諸天世間に善く修理すと雖も彼迦柁珠は終に瓊瑤寶と爲すこと能はざるが如く、彼焼ける種子の地中に置きて水澆ぎ日暖むと雖も、終に生ずること能はざるが如し。是の如く聲聞煩惱の種子を燒き已れば三界の中に於て亦、生の義無し」と。今、論文を案するに八種を以て聲聞獨覺の無爲正定の位の中に入りて佛法を生ぜざるを喻ふ。明かに知んぬ。方等維摩の敗種の喻其意同じき所なり。正位に入るを敗種に喩ふるを以ての故に、喩の種は多しと雖も喩ふる所の義は是れ一にして異なること無し。明かに知んぬ。釋迦世尊、佛性を見るを以ての故に、三平等を以ての故に、法華會の中にして正定の位に入る。舍利弗等の諸の聲聞衆に成佛の記を與ふるは、定、不定の性及び應化の聲聞に通じて授くる所の成佛の記なることを、四六の記に通ずるが故に定んで佛道を成ずることを得。正定の位に入る大迦葉等記を得て成佛

【二】 以十教二  
理の内、二理を中  
心として問難破斥  
あり。はじめ麤食  
が方便品の文を執  
り法華は不定に對  
する經なりとする  
を破す。

【三】 麤食の法華  
は定性不定性を隱  
密する權教なりと  
云ふを破す。

することは是れ種性ならず。未顯眞實の年の説く所の入位の喻なり。何に因りて已顯眞實の日に記する所の成佛の記を制斷することを得ん。是故に『法華經』の『法師品』に云はく、『聲聞法と決定する、是れ諸經の王。』と。經文。當に知るべし。餘經の決了、證と爲すに足らざることを。

【二】 麤食者、二理の中、初に法華の理を誘りて曰はく、「言ふ所の理とは『方便品』に云はく、『十方佛土の中には唯一乘の法のみ有りて二も無く亦三も無し。佛の方便説を除く。』と。

已上經。麤食者自らの道理を以て法華を會して云はく、「此れ不定性の二乗の遂に作佛するに約す。故に二も無く亦三も無しと云ふ。定性には依らず。總相して密意に、唯一佛乘無二無三と云ふ故に是れ權にして實に非ず」と。者語。此會、理に應ぜず。何を以ての故に、法華の一乘は通じて三乘に被らしむるが故に、退位の不定は法華の前に一乘に入るが故に、入位の定性、歷劫の菩薩は法華の所被なるが故に。是故に經に云はく、『菩薩は法

を聞きて疑網皆已に除くる。千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし。』と。『攝論』の初の頌は『法華』を指さざるが故に、法華の一乘は究竟の故に、已定の根性は練根して大と爲るが故に。是れ實にして權ならず。

【二】 麤食者亦、『法華』を誘りて云はく、「若し顯了に定性の二乗有りて不定性の二乗無しと言はば、應に是れ顯了の一乘なるべく、應に是れ實の一乘なるべし。語摠合せり。故に隱密と言ふ。故に是れ權教の攝なり」と。已上麤食者語。

【三】 麤食の法華は定性不定性を隱密する權教なりと云ふを破す。

【三】麤食の法華  
 は定不定有性無性  
 を總合して漸次に  
 一乘に趣かしむ。  
 之れ華嚴の實教に  
 對せば權說なりと  
 云ふを破す。

此理爾らず。教に違ひて立つるが故に、「解深密教」の中に密意の一乘を説く。其經の第一に云はく、「一切聲聞、獨覺、菩薩皆共に此れ一妙清淨の道なり。皆同じく此一は究竟清淨にして更に第二無し。我此に依るが故に密意に説きて唯有一乘と言ふ。一切の有情界の中に於て種種の有情種性有ること無きに非ず」と。已上經當に知るべし。存二の一乘を密意と名くることを。今の法華の中には隱密の言無く、但顯説の言有り。是故に「法華經」の「第七」に云はく、「要を以て之を言へば、如來の一切所有の法、如來の一切自在の神力、如來の一切秘要の藏、如來の一切甚深の事皆此經に於て宣示し顯説す」と。已上經當に知るべし。破二の一乘を顯説と名くることを。麤食者何の道理に因りてか存二の一乘を顯了と名け破二の一乘を隱密と爲すや。明かに知んぬ。麤食者言ふ所の顯密は深く兩經に違ふことを。是故に法華の一乘は是れ實教の攝なり。

（二）麤食者亦、法華を誘りて云はく、「凡そ漸悟の機の爲に説くは時れ權教なり。頓悟の機の爲に説くは是れ實教の攝なり。今法華の一乘は不定性の二乘を引きて一乘に趣むかしめんと欲す。定不定性、有性無性を揀別せず。總合して一乘と説くが故に、故に是れ權教なり。華嚴は頓悟の機の爲に直爾に深く甚深の義を説く。故に實教の攝なり」と。已上麤食者語。此理爾らず。機應相違するが故に亦未だ定不を了せざるが故に。麤食者云はく、凡そ漸悟の機の爲に説く、是れ權教なりとは其漸悟の機とは小乘の機と爲んや大乘の機と爲んや。若し小乘の機と言はば小乘の機の爲に大乘の法を説くは道理に應せず、機應相違するが故に。



【權大乘】大乘の中に權實の二を立つるを實大乘と云ひ爾らざるものを權大乘と爲す。  
 【四乘】聲聞、緣覺、菩薩、佛の四乘にして法華譬喻品の羊鹿牛三車と大白牛の一車を依つて立つる義。  
 【麤食】門外の三車の内の牛車を實とし露地の大白牛車を權とするを破し兼て華嚴の權説なるを論ふ。

小乗の機の爲に小乗の法を説くは是れ道理に應ず、機應相順するが故に。若し大乘の機と言はば大乘の機の爲に大乘の法を説く、何ぞ權教と名けん。若し漸漸に引接して後に大を説く、故に機に隨ひて教は權なりと言はば即ち大乘の中に於て權大實大有らん。若し爾なりと許さば三乗の外に權大を立つ。故に四乗を立つ可し。若し爾なりと許さば三車の外に權車を立つ可し。若し三乗の外に權大を立てずと言はば三が中の大乘は麤食常に二權一實なりと言ひ、亦、二を破して一を明すと云ふ。何ぞ法華の大を權教と爲ん耶。若し三が中の大、權ならずと言はば三乗の外に權大乘有る可し。何ぞ四乗ならざる耶。

麤食者云はく、「門外の牛車、以て因車と爲し、露地の牛車、以て果車と爲す」と。麤食の正義此の如し、是に今、此因果を以て麤食の妄義を顯はす。謹んで『法華經』の第二を案するに云はく、「初三車を以て諸子を誘引す」と。已上經明かに知んぬ、門外の三車は此れ引きて與ふるに非ざれば三が中の大乘は法華を指さざることを、亦麤食者、三が中の牛車を一向に實と爲す。謹んで同品を案するに云はく、「時に諸子等、各父に白して言さく、「父先に許す所の玩好の具、羊車、鹿車、牛車願はくば時に賜與したまへ」と。舍利弗、爾時に長者、各諸子に等一の大事を賜ふ」と。文。明かに知んぬ。露地の一車は此れ與にして引に非ざることを。此與車を以て『法華經』に喩ふ。今麤食者、三が中の大乘を眞實の教と爲し、『法華經』を以て權密の教と爲す。當に知るべし。麤食者、因の牛車を以て眞實と爲し、果の牛車を以て權教と爲すことを。麤食者、但權實に迷ふのみに非ず。亦即ち因果を

【五根】信根、精進根、念根、定根  
【四惡道】地獄、餓鬼、畜生、修羅

亂す。麤食者、四車の文を混すと雖も然も普賢力の故に四乗の義顯はる。當に知るべし。本法の『法華經』は三乘の人の一乘の機熟するを待ちて乃ち一乘の教と説くことを。何ぞ究竟の乘を以て輒く權教と爲さん。寧んぞ機應に迷ひ以て權と爲さざらん哉。未だ定不を了せざるが故にとは定性、不定性は位に約して立つる所なり。故に論に云はく、『聲聞若し信等の五根を得ば定根と名けず、未だ聖を得ざるを以ての故に。若し未知欲知等の三根を得ば則ち定根と名く、聖を得るを以ての故に。若し頂位に至るを定性と名けず、四惡道を免れざるを以ての故に。若し忍位に至るを名けて定性と爲す、四惡道を免かるるを以ての故に。未だ定根性を得ざれば則ち小を轉じて大と爲す可し。若し定根性を得ば則ち轉す可からず。是の如きの聲聞は小を改めて大と爲すの義有ること無し』と。已上論當に知るべし、『維摩經』の財種、『資糧論』の八喻、其義皆未顯眞實に同じきことを。故に天親菩薩の云はく、『此の如きの聲聞、小を改めて大と爲すの義有ること無し。云何が一乘を得ん。今大乘に依りて解するに未だ菩薩の道を専修せざるを悉く未定根性と名く。故に一切の聲聞、皆小を轉じて大と爲す可きの義有り』と。已上論當に知るべし。入位定性の驚子、迦葉等究竟の一乘を聞きて成佛の授記を受く。法華の義と天親の論と同一にして異なること無し。明けし、法華一乘の經は入位の定性を引きて一乘道に趣かしむ。摠含の言は麤食の臆説なることを。判權の詞は麤食の謗法なり。誰か智有る人、麤食を恐まざらん哉。麤食又、頓悟の爲に説くは是れ實教の攝と云はば、其頓悟とは歷劫修行の頓悟と爲んや、

【地論】十地論十  
二卷天親菩薩造、  
北魏の菩提流支、  
勒那摩提共譯。

【分別說三】一乘  
を分別して三乘と  
説く法華の教。

【五】麤食の法華  
を終に方便權教と  
なし開方便門示眞  
實相も結極方便な  
るを證明するにす  
ぎずといふを破す

直至道場の頓悟と爲んや。若し歷劫修行の頓悟の者、是れ實教の攝と言はば道理に應ぜ  
す。其歴劫修行は未顯眞實なるが故に、未だ方便を捨てざるが故に、何ぞ實教と稱せん。  
若し直至道場の頓悟と言はば即ち是れ法華の教なり。其法華の教は麤食固より權と爲す。  
豈是れ實に權教の攝ならん哉。若し劫を歴れども直に大乘に同ず、故に名けて頓悟と爲す、  
是れ實教の攝なりと言はば、溪水及び海水、鹹淡各不同なり、何ぞ一の頓悟と爲して權  
實雜亂せしめん。麤食亦、華嚴は頓機の爲に直爾に深く甚深の義を説くと言はば因分の甚  
深と爲んや。果分の甚深と爲んや。若し因分の甚深と言はば未だ眞實を顯さず、方便を兼  
ぬるが故に、半權半實なり、何ぞ一向に實ならんや。若し果分の甚深と言はば華嚴の時に  
は未だ果分を説かず。佛の不思議、如來の相海等を説くと雖も然も是れ形對の果なり。故に  
『地論』に云はく、『因分可説、果分不可説と、果分の經は即ち唯一佛乘なり。華嚴に佛乘を  
説くと雖も行唯一ならず、故に兼權と名く。若し普賢行門の因分、性海の果分なりと言は  
ば、教と相應せざるが故に可説不可説と名く。何ぞ必ずしも法華を指さざらん。然るに法  
華に於一佛乘と云ふは、華嚴以前は於きて説かず。分別說三は方便を兼ぬ、華嚴の會中に  
分別する所なり。明かに知んぬ。一の果分に於て法華の目には熟機の人の爲に一大事を説  
く。麤食者何ぞ因分の華嚴は實教の攝、果分の法華は權教なりと云ふ。華嚴は同時の四車、  
法華は開會の四車なり。其義天に懸る、何の同じき所ならん。  
麤食者又法華を謗りて云はく、『法華の一會、不定の機に對し二を以て方便と爲し、一乘

【無學】學道圓滿して更に學習すべきもの無き聲聞の阿羅漢果を言ふ。

【五種の驚怖】不活畏、惡名畏、死畏、惡道畏、大衆威德畏。

【退位】修證の位を退失轉變するを言ふ。

を眞實と爲す。定性の二乗、無情有情に約して一乘を以て方便と爲し二乗を以て眞實と爲す。何を以ての故に。不定性の二乗は二乗の無學の極果を證すと雖も而も彼後當に菩提の果を證得す可きに望むるに是れ不實なるが故に猶方便と名く。決定して寂に趣く二乗の無學は終に佛菩提の果を得べからず。故に彼所得の二乗の極果を名けて眞實と爲す。唯有一乘と説けども猶方便と名く。故に「法華經」に「方便の門を開き眞實の相を示す」と。已上。此理爾らず。經に違ひ論に違ふが故に。「法華經」の一會は五種の驚怖に對して驚怖を斷ぜしむるが故に。其枝葉眞實を利と爲る文なるが故に。經に違ふの失とは經に云はく、「聲聞若し菩薩、我所説の法を聞き乃至一偈に於て皆成佛すること疑ひ無し」と。已上。經當に知るべし。彼驚怖の人、已に「法華經」を聞くことを。定性の二乗の人、成佛何の疑ふ所あらん。蠶食者、不定の機に對して二を以て方便と爲し一乘を眞實と爲すと云ふは其不定の機は何人ぞや。若し舍利弗等なりと言はば是れ入位の定性なり、何ぞ不定と名けん哉。若し菩提心を退するが故に不定と名くと言はば、未だ菩提を退せざるの人をば不定と立てざるべし。若し已退未退共に不定と名くと言はば其不定の人は退位に約して不定の名を得と爲さんや。數種に約して不定の名を得と爲さんや。若し退位に約すと言はば驚子正位に入る、何ぞ不定の機と名けん。若し數種に約すと言はば其數種とは重種と爲んや、法爾と爲んや。若し重種と言はば舊重と爲んや、新重と爲んや。若し舊重と言はば約位の不定に同じ。若し新重と言はば未だ機性を成ぜず。何ぞ不定と名けん。若し爾らずと言はば

【二六】麤食の勝鬘經を引證として法華方便説を立てるを破す。

【勝鬘經】勝鬘師子吼一乘大方便方廣經一卷、劉宋の求那跋陀羅譯。

不定の名法爾なり。十地の位も不定と名く可し。論とは又「資糧論」の八喻、及び「攝大乘論」の不改に違ふ。麤食者未だ入位の定を案ぜず、不定性に對すと云ふは是れ第一の妄語なり。未だ先の三種、三權を以てするを案ぜず。二を以て方便と爲すと云ふは是れ第二の妄語なり。麤食者又、定性の二乘、無性有情に約し一乘を以て方便と爲し二乘を以て眞實と爲すと云ふは是れ最極の妄説なり。未だ究竟を了せざるが故に。麤食者、定性二乗とは約位の定と爲んや、種性の定と爲んや。若し約位の定と言はば一切の聲聞皆轉じて大と爲る可きの義有り。何ぞ究竟の一乘に望めて更に定性の名を存せん。若し種性と言はば又問ふ、其種性は熏種性と爲んや、法爾種と爲んや。熏種と言はば又問ふ、舊熏種性と爲んや新熏種性と爲んや。若し舊熏と言はば約位の定と同じ。若し新熏と言はば未だ其種性を成ぜず。何ぞ定性と名くるを得ん。若し法爾の一種と言はば其種は熏に由らず。亦六義を闡くが故に。三乘の人法爾として各一の種子有り。大乘 小乘 諸經諸論に説かず述べず。但章疏の中、此文有るに似たり。麤食者偏に未顯眞實の經を見て固く已顯眞實の經を誘る。維摩の已死、法華の再生 其文分明にして其義顯了なり。麤食者、已死の文を執すれども義理は再び佛種を生ず。佛滅度の後、法華の怨嫉とは麤食者に非ずんば更に誰有りてか怨ならん哉。誠に願くば有智の君子諒りて之を許す莫れ。

【勝鬘經】勝鬘師子吼一乘大方便方廣經一卷、劉宋の求那跋陀羅譯。麤食者又「法華」を誘りて云はく、又「勝鬘經」に云はく、「若し如來、彼意欲に隨ひて而も方便して唯一乘有りて二乘有ること無しと説く」と。文。已上經 麤食引く所、吠聲にして而も

【上古の御製】 太子義疏三卷。 太

【四乘】 聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘、佛乘。

【宋代譯經】 劉宋代の求那跋陀羅を指す。

【四智】 四諦を悟る智。我生已盡、梵行已立、所作已辦、不受後有的智を言ふ。  
【蘇息處】 小乗の灰身滅智の涅槃處を言ふ。

謬れり。其正本の經文に都て意欲の言無く、但所欲の句有り。所と意と兩字、其調稍異なる。一の疏師有り。所の字を改め自義を救はんが爲に意の字と爲す。又其正本の經、大唐の眞本、並に諸家の疏、新羅の義疏、我大日本の上宮の御製都て唯一乘の句無く、三國の正本の經疏等正しく即是大乗の句有り。畏る可き哉、畏る可き哉。自義を成するが爲に恣に經文を改む。誰か智有る者默止す可けん哉。但、近江の伊香縣に一本の經有り。唯一乘の文有り。恐くは章疏の文を見て本經の文を改むる歟。麤食者此經の意を取りて云はく、「此意は決定の二乘終に成佛せざるが故に一乘の名を方便と爲す。故に法華は不定の機に據り二乘を以て方便と爲し一乘を眞實と爲す。勝鬘は決定性に對し四乘を以て實と爲し唯一乘と説く。是を方便と爲す。是故に法華の一乘を眞實の義と爲すは甚大なる謬述なり」と。者語。此說理あらず。己の眼の轉ずるを知らず謬りて天地山河轉ずと謂ふを以ての故に。其勝鬘經の重譯に兩本あり。宋代譯經の本に云はく、「若し如來彼所欲に隨ひ而も方便にして即ち是れ大乘にして二乘有ること無しと説く。二乘とは一乘に入る。一乘は即ち第一義乘なり」と。文。唐譯の經本に云はく、「若し諸の如來、彼所欲に隨ひ而も方便を以て二乘即ち是れ大乘なりと説く。第一義には二乘有ること無きを以て二乘は同じく一乘に入る。一乘とは即ち勝義乘なり」と。文。此經の正意は未だ正位に入らざるの二乘をして一乘眞實に入らしむ。故に説きて云はく、「二乘の涅槃を向涅槃界と名く。四智究竟して蘇息處を得。是れ佛の有餘不了義の説なり」と。文。豈一向に二乘を眞實と爲ん哉。

【如來四無畏】一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏。

【勝鬘夫人】舍衛國波斯匿王之女、佛、勝鬘偈を説きて勝鬘が佛の來現を請ひし徳を稱揚す。勝鬘後十弘誓願を發し、乃至大乘の了義を説いて廣く二乗の不了義を明すと勝ふ。

【毘闍闍宮】阿毘闍闍王妃となり佛の來現を奉請す、其宮は即ち毘闍闍宮なり。

【守護國界章】九卷、傳教大師撰。

【二七】麤食が法華の世尊法久後を執りて附前權説を主張し法華權なりとするを破す。

其經に又云はく、「一乗の道を説く、如來四無畏成就して師子吼するの説なり」と。已上經文。

豈一向に一乗を方便と爲ん哉。彼法華の前に勝鬘夫人の説く所、存二の一乗一乘眞實を顯し其經上下の文に一乘方便と云ふこと無し。其題名の中、一乘大方便とは其意亦別なり。一乗と言ふは所歸の一乘を擧げ大方便とは能歸の二乗を明す也。二乗と言ふは則ち大乘の方便なり、故に大方便と云ふ。是故に下の經に云はく、「若し諸の如來、彼所欲に隨ひ而も方便を以て二乗を説く、即ち是れ大乘なり」と。已上經文。明かに知んぬ。大方便とは能歸の二乗を明す也。夫れ勝鬘夫人は釋迦を對揚と爲し自解の一乗を説き重ねて阿難に説く。故に是の如く我聞く、釋迦、夫人に應じて攝受の正法を論じ一乗の眞實を説く。故に其經に言さくと置く。釋迦無從、獨一に應じて攝受の正法を論じ一乗の眞實を説く。故に其經に云はく、「決定了義、一乘道に入る」と。已上經文。豈一乗を方便と爲ん哉。而るに却りて麤食者

「勝鬘經」は決定性に對して四乗を以て實と爲し、唯一乗を説く。是を方便と爲すととは未だ勝鬘の會を案せず。亦經の起盡に迷ふ。豈自眼の轉ならざらん哉。麤食の文に、是故に法華の一乗を眞實の義と爲すは甚大謬迷なりと云ふは寧ろ天地轉ずると謂へるに非ず哉。此文義廣く破し遠く遮すること、守護國界章に具に説くが如し。

麤食者、自問自答して法華を誘ふ文に云はく、「問、若し法華は是れ權の攝ならば何が故に經に世尊法久の後、要す當に眞實を説くべしと。又、今汝等の爲に最實事を説くと云ふや。是即ち四十年前の教は是權、法華の後の教は是實教の攝と説くなり。即ち無量義

法華秀句

【四味の教】華嚴の時は乳味、鹿苑の時は酪味、般若の時は酥味、なり

經に四十年前の方便の說なるが故に得果差別せりと云ふに同じ。何ぞ法華を權教と名けん。答ふ。是不定性の二乗の根機熟するに據りて前後に而も説く。頓悟に約せず。此れ復如何ん。不定性の二乗、四十年より前には一乘の根機熟せず。此に由りて如來、爲に一乘を説かず。故に世尊法久後と名く。今法華の會に至り其根終に熟して一乘を聞くに堪ふ。故に要當說眞實と名く。頓悟の菩薩は始、華嚴より涅槃の教に至るまで恆に一乘を聞き、常に記別を授く。故に法久後と名けず。常に一乘眞實の法を聽受す。故に後要當說眞實と名けず。已上麤食彈じて曰はく、「此說爾らず。機會相違するが故に。其未だ正位に入らざる不定性の二乗は四十年より前に一乘の根機熟せり。是故に華嚴の教より法華の前に至るまで四味の教の中に存二の一乘を説きて一乘の道に入らしむ。麤食者何ぞ世尊法久後と名けん。已に存二の一を説く、麤食者何ぞ要當說眞實と名けん。其已に正位に入る。定性の二乘並に歷劫修行の菩薩等は四十年より前には未だ究竟果分、一乘直道の根機を熟せざるが故に此に由りて如來、務めて速かに説かず。是故に無量義經に云はく、「種種に法を説けども方便力を以て四十餘年未だ眞實を顯さず。是故に衆生の得道差別して疾く無上菩提を成ずることを得ず」と。已上經。今其已に正位に入れる定性二乗及び歷劫修行の菩薩等已に究竟果分、一乘直道の根機熟するが故に、世尊法久の後、要當に眞實を説くべし。其圓機の菩薩は始華嚴の會より般若等の經に至るまで因分の圓教を聞いて因分の佛慧に入る。是故に「始めて我身を見、我所説を聞きて佛慧に入らしむ」と云ふ」と。已上經文。



【千二百の羅漢】法華の五百弟子授記品第八に佛、千二百の羅漢に記勅を授くる事を記す

【八】麤食が譬喩品の舍利弗の言を執り、法華の漸悟不定性に對する權說なりとするを破す。  
【第一周】三周說法の第一法說周。法華の譬喩品の首に出づ。

其歴劫修行の利根の菩薩等は「法華」の序品に、第三に如來、法を説かんと欲する時、成熟の時に至りて「無量義經」を聞き險徑の路を廻して大直の道に向はしめ、又彼歴劫修行の鈍根の菩薩等は「法華經」を聞いて大直道に向はしむ。是故に經に云はく、「菩薩是法を聞きて疑網皆已に除る。千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし」と。又云はく、「諸の菩薩及び聲聞乘此寶乘に乗じて直に道場に至る」と。又云はく、「當に知るべし、羅漢當に作佛すべし」とは再び取種を生ずるの文なり。「資糧論」の八喻、此句に會せらるるが故に。明かに知んぬ、麤食者が自問自答は狐狸に非ずんば豈熊羆ならん哉。麤食者第一の道理、道理に應ぜず。當に知るべし、「妙法華經」は權に非ず、密に非ず。眞と爲し實と爲すことを。  
麤食者第二の理、法華を誘る文に云はく、「又云はく、言ふ所の理とは第一周の中に舍利弗自ら領解して云はく、「我昔佛に従ひて是の如きの法を聞き、諸の菩薩の受記作佛するを見る。而も我等は斯事に預からず、甚だ自ら感傷して如來の無量の知見を失ふ」と。已上麤食者、經の意を取りて云はく、「此れ即ち華嚴の會より後、四十餘年、頓悟の菩薩の受記作佛を見、咨嗟を發して悔ゆと。此文に準じて知んぬ。頓悟の菩薩に約せば世尊法久後と名けず、要當說眞實と稱せざることを。唯舍利弗等の不定性の聲聞、四十年の前には小果に住して未だ一乘を聞かず。未だ佛記を受けず、故に聲聞に約して法久後と名く。今法華の會に至り一乘の法を聞いて佛の記莖を受く。故に要當說眞實と稱す」と。已上麤食彈じてはく、「此說爾らず。所以は何ん、未だ本法を了せざるが故に。其れ「妙法華經」は内證

【方等以來】五時の中、第三の方等の時以來。  
 【入法界】諸佛所證の法界理に證入するを言ふ。  
 【逝多林】(javana) タバナ(じavanā) 逝多太子所有の林にして、後須達長者之を買ひて精舎を建て佛に獻ず、故に此名あり。

の本法なり。故に教を留めて機を熟を待つ。其れ「華嚴」等の諸經は隨宜の說法なり。故に機に隨ひて時を待たず。待時、不待時、其義最も不同なり。本地本法、宜きに隨ひて三を説く、何ぞ級無きを得ん。其れ舍利弗は方等以來菩薩の記を見、華嚴に預からず。但入法界の會、當に逝多林に在るべし。其逝多林は給孤獨園なり。須達長者と舍利子と造立する所の園なり。明かに知んぬ。其歷劫修行の頓悟の菩薩等は歷劫修行すれば歷劫成佛の記を得。舍利弗、此歷劫の記を見て、感傷の心を發すなり。法華の前の教には直道の法を説かず、誰か直道の行を修せん。已に直道の行ならず、誰か直道の記を得ん。已に直道の記無し、舍利弗何ぞ見ん。舍利弗見ずんば何ぞ咨嗟を發して悔いん。但因分の圓教を開くのみ。別門の圓を悟るの人は九日の月に似たりと雖も十五日に如かず。華嚴以來は隨宜の法を被り本法の法華は法華以前に都て説かず。故に經に「世尊法久後、要當說眞實」と云ふ。若し其果分は法華、華嚴等の大乘に頓悟の爲に皆説くと言はば說時未至の言、都て寄る所無きが故に若し不定性の聲聞の人に約して說時未至と云ひ頓悟に不すと言はば菩薩問法とは豈頓悟に不すと哉。與諸菩薩とは豈頓悟に不すと。蠶食者所立の頓悟、「法華經」を聞きて疑網皆已に除り、又、「一乘此寶乘、直至道場」と云ふ。蠶食者の頓悟の菩薩、法華の前には未だ疑網を除かず、未だ寶乘に乗せず。明かに知んぬ。蠶食者の立つる頓悟の菩薩は是れ歷劫の頓悟なることを。何ぞ但聲聞に約し名けて法久後と爲し歷劫頓悟に預からざらん。亦何ぞ聲聞に約して要當說眞實と稱し歷劫頓悟に及ばざらん。蠶食者傳ふる所の不定の會、

【一九】 麤食の迦葉  
領解の文を執り法  
華は小乘の爲の權  
說なりとするを破  
す。

【第二周】 三周說  
法の文は法華信解  
品第四にあり。

【二〇】 麤食の第三  
周の佛語を引き、  
法華說小權說なり  
とするを破す。  
【第三周】 三周說  
法の第三因緣周。  
今の文は法華化城  
論品第七に出づ。  
【二涅槃】 有餘涅  
槃、無餘涅槃。  
【三】 麤食の三周  
は悉く舍利弗等の  
聲聞をして回小向  
大開しむる漸權教  
なりとせるを破す。

千萬番たりと雖も然も正義ならず。理其れ失すること上に説くが如し。法華を害するの偽會、此の如くならずんば定まらず、庶くは諸の智有る者謬りて之を許す莫れ。

麤食者又云はく、「又第二周の獅子喩の中、迦葉領解して云はく、『我等昔より來た眞に是れ佛子なり。而も但小法を樂ふ、若し我等大を樂ふの心有らば佛、則ち我が爲に大乘の法を説く。乃至今法王の大寶自然に至る』と。已上麤食者經文、麤食者の意、但小乘の人の爲に此『法華經』を説き頓悟の爲に『法華經』を説かずと。若し爾らば先の歷劫頓悟の人の已除疑網を失することを免れざるが故に、亦寶乘に乗するが故に、其迦葉領解の文は不及の領

なるが故に、獨り自分を領するが故なり、夫れ退の不及なるが故に人天を領せず、進の不及なるが故に菩薩を領せず何ぞ小乘自分の領を取りて如來速成の旨を泯ぜんや。

麤食者又云はく、『第三周に佛自ら説きて言はく、『若し衆生、但一佛乘を聞かば則ち佛を見るを欲せず、親近することを欲せず。佛是心の下劣なるを知り方便の力を以て而も中道に於て止息せんが爲の故に二涅槃を説く』と。已上麤食者引、麤食者此文を引く意、前の意に異らず。小乘の人の爲の故に此法華を説く。此故に二を會して一乘經を説く、是を以て權教なりと。此說爾らず。菩薩を隱すの失あり。已に上に説くが如し。一乘を説きて權漸と爲すと云ふこと聖教量に無き所なり。

麤食者又云はく、「此三周の文に準するに法華は正しく退菩提心の聲聞の爲に二を會して一乘を説く、故に是れ權教なり。舍利弗等の退菩提心の聲聞をして、心を廻して大に向ふ

【三子】聲聞、緣覺、菩薩を長者の三子に譬ふ。

【八部】天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅迦の八部衆。

【文中】麤食の三周の文の中は菩薩領解のみありて菩薩領解なし故に權漸なりとするを破す。

【方等十二部經】修多羅、祇夜、伽陀、尼陀那、伊帝目多、闍多伽、阿浮達摩、阿波陀那、優婆提舍、優陀那、毗佛略、和伽羅の十二之れ一切經の分類なり方等とは大垂の意。

【摩訶般若】摩訶般若波羅蜜經、羅什譯、二十七卷と十卷の二本あり。

【華嚴海空】華嚴經の異名。

後轉じて漸悟の菩薩と名く。今の法華は正しく此等の爲に説く、頓悟の菩薩の爲に説かず、故に權教の攝なり。亦漸教と名く」と。已上麤食彈じて曰はく、「麤食者拏げて三周の小分の文を引き、「妙法華經」を權漸と爲す。此れ亦爾らず。直道は頓機の三子を熟せしめ直道の頓教を三子に與ふるが故に。若し麤食者の義の如きは但二子の益のみ有りて天子の益有ること無し。三子各に三車を索め三子等しく大白牛車に乗ず。是れ則ち法華三周の旨なり。豈三子の中の其大乘の子はれ頓悟ならずや。又、内秘外現は寧ぞ頓悟の菩薩にあらざらん哉。八部及び天子の頓悟は是れ誰ぞ。三周の文の中頓悟の菩薩其數少なからず。「法華論」に云はく、「退菩提心の聲聞、應化の聲聞に記を授くと。其れ應化の聲聞は内秘の菩薩なり。豈頓悟の菩薩に不ずや。法華の眞實たること諸佛の所説なるに法華を權漸と爲んや。」

麤食者又、法華を誘りて云はく、「何を以て頓悟の爲にせざるを知るを得る。三周の文の中唯聲聞領解の言のみ有りて都て菩薩領解の文無し。故に法華を判じて圓頓の教と爲さば甚太しき迷謬なり」と。已上麤食彈じて曰はく、「此説爾らず。自眼の及ばざるを以て菩薩の領解無しと云ふ。經に云はく、「我等昔より來た數世尊の説を聞く。未だ曾て是の如き深妙の上法を聞かず」と。文。已上經當に知るべし。は無數の天子は是れ菩薩なることを。我等從昔來、數聞世尊説と言ふは法華の前の「方等十二部經」摩訶般若「華嚴海空」を謂ふ。未曾聞か深妙之上法と言ふは、内證の「法華經」を謂ふ。又經に云はく、「我等も亦是の如く必ず當に作佛することを得べし」とは豈直道頓悟の諸の大菩薩等に不ず哉。其第二周の迦葉

【諸天】 欲界の六天、色界の四禪天、無色界の四空處天、八部衆の一。  
 【龍王】 奇類にして水屬の王なり、八部衆の一。  
 【夜叉】 空中を飛行する鬼神なり、八部衆の一。  
 【乾闥婆】 帝釋天の樂神なり、八部衆の一。  
 【三菩提】 佛所得の悟界。

【二三】 麤食の法華は二乘正意なれども兼圓の權教なりとすを破す。  
 【如來壽量品四】 妙法蓮華經如來壽量品第十六。

法華秀句

の領解は自らの小分に周ると雖も如來の速成の如き、上草と小樹と及び大樹等は豈頓悟の菩薩に不ず哉。其第三周の文に云はく、『爾時に會中の新發意の菩薩八千人、咸是念ひを作す』と。乃至云はく、『爾時に世尊、諸の菩薩の心の所念を知りて而も之に告げて曰はく、諸の善男子』と。已上經 當に知るべし。其新發意の菩薩は頓悟の菩薩に不ざることを哉。其第三周の次の品に云はく、『是大衆の中の無量の諸天、龍王、夜叉、乾闥婆』と。乃至云はく、『佛道を求むる者、是の如き等の類成佛前に於て妙法華經の一偈一句を聞き乃至一念隨喜せん者は我皆授記を與へ當に三菩提を得べし』と。已上經 當に知るべし。『法華經』を聞きて佛記を得る者は豈直道頓悟の諸の菩薩等に不ず哉。麤食者何に因りてか菩薩如是等の領解を隱し此『法華經』の一句、不定の爲にして頓悟の爲にするを許さざらん哉。若し得記と雖も是れ領解の文ならずと言はば其一念隨喜、豈領解の文ならざらんや。若し領解の人ならずんば佛何に由りてか授記せん。當に知るべし、成道の記を得るを以て必ず領解有り」と云ふ意なることを。此三周の文の中、大小の領解有り。是故に麤食者、菩薩の領解無ければ『法華』を判じて權と爲すは至極の迷謬なり。

【二三】 麤食者亦、兼正の爲に『法華經』を誇りて云はく、「然れども如來壽量品四を説く時、菩薩益を得れば頓教に通ずること妨げ無し。而も此れ兼爲にして正の所爲に非ず。故に猶漸と名く」と。者語。已上麤食 彈じて曰はく、「此說爾らず、法華の命を斷つが故に。其壽量品の中に一偈二上を説く、何に因りてか兼爲と爲ん。諸の菩薩得道の數、稱て計ふ可からず、何に由

【四】 麤食が以上十教二理を結して法華は正しく權漸にして兼實の權なりとするを破す。  
 【開三顯一】 三乘を開して一佛乘を顯現す。  
 【開近顯遠】 伽耶始成の近情を開して遠實成の本地を顯現す。

【五】 以下麤食四教二理を立て定性無性の不定を論ず初に、藥草喩品の文について法華は三乘五性各別を認むると云ふを破す。  
 【藥草喩品】 妙法蓮華經藥草喩品第五。

りてか正爲ならざらん。上殘の無上、是れ流通に不ず、醫師の一喻を説くは顯遠の正説なり。明かに知んぬ。此「法華經」は一向に是れ頓教、是れ漸漸の教に不ざることを。

麤食者、十教二理を結して云はく、「以上の十教二理、而も法華の一乘は正しく權教と爲し亦漸教と爲し兼ねて頓教と爲し亦、實教と爲すに亦之を妨ぐることを證す」と。已上者。彈じて曰はく、「此説爾らず、兼正雜亂するが故に。夫れ開三顯一の段には小は正爲にして大は兼なり。開近顯遠の段には大は正爲にして小は兼なり。而も却りて二周の一乘に菩薩を隠して兼爲の益を失ひ、壽量の喩上に大の正爲を隠して一向に兼と爲す。又、經の正體と了せずして權と爲し。亦、漸と爲し、頓と爲し亦實と爲す。所説定準無くして不定を指南と爲す。麤食者、自問自答して更に四教及び二理を立て定性の一乘、無性有情の不作佛を證し「法華經」を謗り法華の心髓を死して云はく、「開ふ、法華一乘既に權教の攝なりと云ふ。此れ即ち四十年前の權教に同じ。若し爾らば應に定性の二乘、無性有情佛道を成ぜずと説くべし。若し爾なりと許さば文證有り耶」「答ふ、四教二理有りて定性の二乘、無性有情の不作佛を證す」。

麤食者第一に法華の心髓を死す文に云はく、「一には「藥草喩品」に云はく、「一雨の潤ほす所、三草二木生長同じからず」と。已上經文に似た。麤食者引く所の經文、文を取意するに似て不正の經文なり。謹んで其經文を案するに開譬の長行、無差別の中唯一雨所潤の句有り。麤食者引く所、三草二木生長不同の八字の文は長行偈頌都て此文無し。此れ即ち

麤食者自ら思量する所の義、他人をして信を起さしめんとし名けて經文と爲す。若し正經の文有らば必ず此を後學に示せ。若し正經の文無くれば教證と爲すに足らず。麤食者、文を執して意を取ること許さず。故に名けて臆說と爲す。

故に麤食者經旨を取り更に其意を説きて云はく、「一雨とは教なり。三草一木とは機なり。佛の教一なりと雖も而も所被の機は即ち三乘五性各別異なるものなり。教一機一皆同じく成佛すと云はば、則ち應に經に一雨所潤、三草二木平等生長と云ふべし。何が故に生長不同と言ふや。既に生長不同と云ふ。明かに知んぬ。三乘五性差別すと云ふことを。」已上麤食 此說爾らず、差に迷ふが故に。其譬喩の中、差別無差別あり。法華の前に説く所の一雨とは一時に等しく澍ぎ乃至一雲の雨す所其種性に稱ひて而も生長して華果敷實することを得と。是れ則ち四十餘年未だ眞實と顯はさざれば得果差別あり。若し此一雨に依りて三乘五性各別不同なりとは立已成の失有り。經に「除佛方便説」と云ふが故に法華の日に説く所の一雨とは謂く、一地の所生、一雨の所潤なり。一地の所生とは機なり、一雨とは教なり。夫れ三乘五性の人、一地の機熟す。是故に法説に當に知るべし、如來は是れ諸法の王なり。若し所説有らば皆虚しからず、一切智地に於てすと云へり。既に皆悉到於一切智地と云ふ。誰か定性の二乘、何れか畢竟無性智地に到らざらん。又、經に云はく、「又諸法に於て究盡明了に諸の衆生に一切智慧を示す」と。既に示諸衆生一切智慧と云ふ。其れ定性の二乘、畢竟無性等、釋迦如來に於て何の怨の衆生有りてか一切智を示さざら

ん。但し未だ海に入らざる三乗の流は淡味不同にして鹹味無く一地所生の草樹等は四微皆  
 同じく一地に歸す。羸食者、有差別の位を執して一地の所生に迷ひ各得生長を見て究竟  
 至智を忘る。誰か草木の類にして所生の地に歸せざらん。誰か定性無生にして法身に歸  
 せざらん。其れ「藥草喻」の種子無上の偈に云はく、「今汝等が爲に最實事を説く。諸の聲  
 聞衆、皆滅度せず」と。既に説最實事といふ、明かに知んぬ、「法華經」は權ならず、方便なら  
 ず、此れ最實の經なることを。又既に諸聲聞衆皆非滅度と云ふ。誰か定性の聲聞、小乗  
 の滅度有りて但虚妄を離るるを名けて解脱と爲さん。諸の字は定不を兼ね、皆の字豈小  
 分ならんや。不定の會、上に已に破するが如く、言總の會、都て憑據無し。羸食者、意義  
 を取ることを許さず、言總の會釋は羸食者が應説にして是れ如來の説に不ず。若し如來の  
 説有らば何の經にか言總の會有る。汝今、後學に示せ。若し如來の説無くんば汝更に導く  
 可からず。經に「汝等所行は菩薩道、漸漸修學悉當成佛」と言ふ。已上經當に知るべし。中草  
 聲聞の性、上に遷りて大樹と爲り乃至當に成佛すべし。明かに知んぬ。羸食者、生長不  
 同と云ふ、義上に遷るを得ず。其三弁一樹、定不定有るが故に。若し不定性は上に遷  
 り定性は上に遷らずと言はば不定の失を免れず。定性の人の如き同じく中草に攝する  
 が故に不定も上に遷らずと爲んや。不定の如き同じく中草に攝するが故に定性も上に遷  
 る可しと爲んや。是故に大唐貞元元年龍集乙丑上元新甲子の後、上都の大荷恩寺の内供  
 奉、三教談論の大徳淡延が撰ずる所の「法華經七喻三平等十無上述」に云はく、「決定性の



乾地は既に清濡に沐し、一闍提の燠芽は亦膏潤を蒙むる。雷聲遠く震ひ四衆是に於て歡欣し、雲影逶迤、五性是に由りて承攬す」と。已上達其れ大唐の貞元元年龍集乙丑上元新甲子の後とは、大日本國の延暦四年歲次乙丑上元新甲子の後に當る也。大唐國擧りて一乘の五性成佛を信じ此れを正義と爲す。今此内供奉は大唐國の上智なり。此達を造る年より日本國の今歲に至るまで三十七紀を經。其言舊說ならず。況んや諸の三藏皆成じ諸の高名皆成すること車に載するに勝へず。今麤食者、舊章の贊論を執して一乘の佛性を破す。但白ら墜墮するのみに非ず。多人をして墜墜せしむ。庶くは有智の君子、年代の新舊を照して所傳の邪正を鑒みよ。麤食者云はく、「若し教一機一皆同じく成佛すと言はば則ち應に經に、一兩所潤、三草二木平等生長と云ふべし。何が故に生長不同と言へる」と。已上麤食者未だ機教甚深の理を了せず、五機の爲に一乘を説くと謂ふ。汝今、『法華經』は一佛の機の爲に一乘を説くことを了せず。是故に空しく平等の難を説く。當に知るべし、各得生長の益は法華の前、先三の益にして、是れ菩薩の行、當に成佛すべしとは法華の難都て寄る所無し。麤食者結して云はく、「既に生長不同と云ふ、明かに知んぬ。三乘五性差別すと云ふことを」と。已上麤食者語。

麤食者白ら經文を造り以て明證と爲す。誰か智有る者汝の證文を信ぜん。具に破すること上の如し。

【六】 麤食の方便  
藥草喻品の文に關  
し言物意別を立つ  
るを破す。

麤食者又、自問自答し法華の心腑を死して云はく、「問ふ、若し爾らば『方便品』に云はく、  
 『唯一乘のみ有りて二も無く三も無し』と。此れ即ち平等生長なり。今の『藥草喻』に『生  
 長不同』と云ふ。一經の語に約するに前後不同なり。妄語を成せざるや。答ふ。此は言總意  
 別なり。言總とは不定性の二乘に約して唯一佛乘にして餘乘有ること無しと云ふ。此れ  
 即ち平等生長なり。意別とは三乘五性に約して定性の二乘、無性有情は成佛せず、故に  
 生長不同と云ふと。者語。此說爾らず。應説の證文を引き無據の會を用ふるが故に其  
 自問の文に平等生長と云ふは是れ則ち麤食の臆説なり。其『藥草品』に生長不同と云ふ  
 は是れ則ち麤食の臆説なり。兩品の經文に都て此文無し。何ぞ不同有らん。何ぞ妄語を成  
 ぜられん。其自答の文に、答ふ、是れ言總意別と云ふは惡總惡別なり。『法華經』法華論に  
 定不定を簡ばざるが故に、言總意別無きが故に、麤食者、不定性の二乘に約して平等生  
 長を立てて定性の二乘、無性の有情に約して生長不同を立つ。此說爾らず。不定の二乘  
 は法華の前にして一乘に入ることを得。何ぞ言總有らん。定性の二乘は法華の目にして  
 一乘に入ることを得、何ぞ意別有らん。是故に經に、『除先修得學小乘者如是之人我今亦令  
 得聞是經入於佛慧と云ふ。其不定性の二乘は除先ならざるを以ての故に其定性の二乘  
 は已に正位に入るが故に、是故に文殊曰はく、若し無爲を見ば正位に入ると。是故に『維摩  
 經』の不思議品に云はく、『是時に大迦葉、菩薩の不可思議解脫法門を説くを聞き未嘗有な  
 りと歎じて謂はく、舍利弗、譬へば人有り、盲者の前に於て衆の色像を現せんに彼が所

【三七】 麤食が法華論の文を取來りて法華一乘の證を一向決定慢となすを破す。

見<sup>けん</sup>に非<sup>ひ</sup>ざるが如<sup>ごと</sup>く、一切<sup>いっせつ</sup>の聲聞<sup>しょうもん</sup>、是不<sup>こふ</sup>思議<sup>しぎ</sup>解脫<sup>げだつ</sup>法門<sup>ほふもん</sup>を聞くも解<sup>げ</sup>了<sup>りょう</sup>すること能<sup>あた</sup>はざることを爲<sup>な</sup>すに此<sup>こ</sup>の若<sup>ごと</sup>し。智者<sup>ちや</sup>是<sup>これ</sup>を聞きて其<sup>そ</sup>れ誰<sup>たれ</sup>か阿耨多羅三藐三菩提<sup>あうたろさんみょうさんぼだい</sup>の心<sup>こころ</sup>を發<sup>はつ</sup>せざらん。我等<sup>われら</sup>何<sup>なに</sup>爲<sup>な</sup>ぞ永<sup>なが</sup>く其<sup>その</sup>根<sup>ね</sup>を絶<sup>た</sup>つ。此<sup>こ</sup>の大乘<sup>だいじやう</sup>に於<sup>お</sup>て已<sup>すで</sup>に敗種<sup>ばいしゆ</sup>の如<sup>ごと</sup>くなる」と。文<sup>ぶん</sup>。上<sup>じやう</sup>經<sup>きやう</sup>。當<sup>たう</sup>に知るべし。摩訶迦葉<sup>まかか</sup>等<sup>とう</sup>、維摩<sup>ゐま</sup>の口<sup>くち</sup>には敗種<sup>ばいしゆ</sup>の類<sup>たう</sup>なることを。其<sup>その</sup>等<sup>とう</sup>の字<sup>じ</sup>、一切<sup>いっせつ</sup>の已<sup>すで</sup>に正位<sup>せうゐ</sup>に入<sup>い</sup>れる。諸<sup>しよ</sup>の聲聞<sup>しょうもん</sup>衆<sup>しゆ</sup>を等<sup>とう</sup>取<sup>しゆ</sup>するを以<sup>もつ</sup>てなり。是<sup>こゝ</sup>れ豈<sup>な</sup>其<sup>その</sup>餘<sup>あま</sup>先<sup>せん</sup>修習<sup>しゆじゆ</sup>學小<sup>がくせう</sup>の定<sup>ぢやう</sup>性<sup>じやう</sup>ならざらんや。今<sup>いま</sup>麤食<sup>そじき</sup>者<sup>しや</sup>、但<sup>ただ</sup>維摩<sup>ゐま</sup>の敗種<sup>ばいしゆ</sup>の文<sup>ぶん</sup>のみと見<sup>み</sup>て法華<sup>ほふわ</sup>の入<sup>に</sup>於<sup>お</sup>佛慧<sup>ぶつゑ</sup>を見<sup>み</sup>ず。敗種<sup>ばいしゆ</sup>の迦葉<sup>か</sup>、成佛<sup>じやうぶつ</sup>の記<sup>き</sup>を得<sup>え</sup>、再生<sup>さいじやう</sup>の言<sup>ごん</sup>、豈<sup>な</sup>空<sup>くう</sup>言<sup>ごん</sup>を傳<sup>でん</sup>へん哉<sup>や</sup>。一隅<sup>いちよく</sup>を見<sup>み</sup>て三方<sup>さんぱう</sup>を悟<sup>ご</sup>る。等<sup>とう</sup>の字<sup>じ</sup>、餘<sup>あま</sup>の定<sup>ぢやう</sup>を等<sup>とう</sup>取<sup>しゆ</sup>するを以<sup>もつ</sup>て。明<sup>めい</sup>かに知<sup>し</sup>んぬ。麤食<sup>そじき</sup>所立<sup>しよりつ</sup>の生<sup>しやう</sup>長<sup>ぢやう</sup>、不同<sup>ふたう</sup>は敗種<sup>ばいしゆ</sup>の時<sup>とき</sup>を指<sup>さ</sup>すことを。法華<sup>ほふわ</sup>の意<sup>い</sup>別<sup>べつ</sup>は麤食<sup>そじき</sup>の妄說<sup>まうせつ</sup>なり。麤食<sup>そじき</sup>者<sup>しや</sup>所立<sup>しよりつ</sup>の不定<sup>ふぢやう</sup>性<sup>じやう</sup>の平等<sup>びやうぢやう</sup>は密意<sup>みつゐ</sup>の一乘<sup>いちじやう</sup>を指<sup>さ</sup>す。『法華經<sup>ほふわきやう</sup>』の言<sup>ごん</sup>總<sup>そう</sup>は亦<sup>また</sup>、麤食<sup>そじき</sup>の妄語<sup>まうご</sup>なり。

麤食<sup>そじき</sup>者<sup>しや</sup>第二<sup>だいじ</sup>に法華<sup>ほふわ</sup>の心腑<sup>しんぶ</sup>を死<sup>し</sup>す文<sup>ぶん</sup>に云<sup>い</sup>はく、「二<sup>ふた</sup>には『法華論<sup>ほふわろん</sup>』に云<sup>い</sup>はく、『大乘<sup>だいじやう</sup>の人<sup>にん</sup>、一向<sup>いっかう</sup>決定<sup>ぢやうぢやう</sup>せる増上<sup>さうじやう</sup>慢<sup>まん</sup>の心<sup>こころ</sup>に是<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>きの執<sup>しやく</sup>を起<sup>おこ</sup>す、別<sup>べつ</sup>の聲聞<sup>しょうもん</sup>辟支佛<sup>びやくしふつ</sup>の乘<sup>じやう</sup>無<sup>な</sup>しと。是<sup>こゝ</sup>の如<sup>ごと</sup>く倒取<sup>たうしゆ</sup>す。此<sup>こゝ</sup>を對治<sup>たいぢ</sup>するが故<sup>ゆゑ</sup>に、爲<sup>ため</sup>に雲雨<sup>うんう</sup>の喻<sup>よ</sup>を説<sup>と</sup>く」と。文<sup>ぶん</sup>。上<sup>じやう</sup>論<sup>ろん</sup>。麤食<sup>そじき</sup>者<sup>しや</sup>、此文<sup>こゝ</sup>を引<sup>ひ</sup>くの意<sup>い</sup>は、無別<sup>なべつ</sup>聲聞<sup>しょうもん</sup>、辟支佛<sup>びやくしふつ</sup>乘<sup>じやう</sup>、如是<sup>ごと</sup>く倒取<sup>たうしゆ</sup>を、示<sup>し</sup>さんと欲<sup>ほつ</sup>し、又<sup>また</sup>後<sup>ご</sup>令<sup>ら</sup>知<sup>し</sup>種種<sup>しんしん</sup>乘<sup>じやう</sup>を、示<sup>し</sup>さんと欲<sup>ほつ</sup>す。是<sup>こゝ</sup>れ則<sup>すなは</sup>ち山家<sup>さんけ</sup>の立<sup>た</sup>つる一乘<sup>いちじやう</sup>は一<sup>いち</sup>向<sup>いっかう</sup>決定<sup>ぢやうぢやう</sup>慢<sup>まん</sup>なるに墮<sup>だ</sup>せしめんと欲<sup>ほつ</sup>するなり。此<sup>こゝ</sup>の說<sup>せつ</sup>爾<sup>に</sup>らず。論意<sup>ろんゐ</sup>に違<sup>たが</sup>ふが故<sup>ゆゑ</sup>に。其<sup>その</sup>論<sup>ろん</sup>の意<sup>い</sup>は彼<sup>か</sup>増上<sup>さうじやう</sup>慢<sup>まん</sup>心<sup>しん</sup>は法華<sup>ほふわ</sup>の前<sup>まへ</sup>を指<sup>さ</sup>す。何<sup>なに</sup>を以<sup>もつ</sup>ての故<sup>ゆゑ</sup>に。煩惱<sup>ぼんごう</sup>の性<sup>じやう</sup>を具<sup>ぐ</sup>足<sup>そく</sup>して帶<sup>たい</sup>權<sup>けん</sup>の一乘<sup>いちじやう</sup>を聞き此<sup>こゝ</sup>倒取<sup>たうしゆ</sup>を起<sup>おこ</sup>すが故<sup>ゆゑ</sup>に、所對治<sup>しよたいぢ</sup>の病<sup>やまひ</sup>は類<sup>たぐひ</sup>に隨<sup>したが</sup>ひて各<sup>おの</sup>く解<sup>げ</sup>を得<sup>え</sup>ることを指<sup>さ</sup>し、能<sup>のう</sup>對治<sup>たいぢ</sup>の藥<sup>やく</sup>は一音<sup>いちおん</sup>の演說<sup>えんせつ</sup>を示<sup>し</sup>す。其<sup>その</sup>一音<sup>いちおん</sup>の中<sup>ちゆう</sup>諸乘<sup>しよじやう</sup>の同異<sup>どうゐ</sup>を含む<sup>ふく</sup>。是<sup>こゝ</sup>の故<sup>ゆゑ</sup>に各<sup>おの</sup>く解<sup>げ</sup>して後<sup>ご</sup>、別

【二八】 麤食の法華論を引き二種の聲聞根未熟の故に授記せずと云ふを破通す。

【四種聲聞】 一、決定聲聞、二、上慢聲聞、三、退大聲聞、四、應化聲聞。

教の信位の人、是増上慢を發す。其大乘の一向決定の菩薩、一音の内の大乘の法各解の後  
に増上慢を發す。大乘の分には別の聲聞、辟支佛の乘無し。唯我のみ此分有り。正位に入れ  
る二乗は敗種の如しと聞く、故に此増上慢を發することは未だ究竟の一を聞かず。諸乗の  
同じきことを解せざればなり。是故に法華の時、迦葉の領解の詞、其大乘に及ばず。所以  
に釋迦如來更に加へて不及を速成して先三差別の雲雨を示し。一音と名けて後一の無差  
を明す。若し爾らずんば能治の雲雨の喻、所治に相違するが故に若し一乘に依りて病を發  
せば差別を用ひて治す可し。何ぞ一雲を用ひて治せん。當に知るべし。權教の三乘の人は  
種種の地に住して自ら三性の唯如來如實の見の明了無斷なる有ることを知らざることを、  
各生長を得るに二義有るが故なり。若し近果に約せば當分の生長なり。若し遠果に  
約せば佛生の生長なり。化城の歩即ち寶所に近し、故に小草の生長は佛性の生長な  
り。是を論に爲説云雨喻と云ふ。又論に云はく、第三人には種種の乘を知らしめんとし  
て諸佛如來平等に法を説く上、已上論に云はく、當に知るべし、種種乘とは謂く、先三の權を知らし  
むるなり。又、諸佛如來平等説法とは謂く後一の實を明すなり。是故に麤食は唯出生を  
執して全く經旨に違ひ、亦論文に乖くことを。

【麤食者第三に法華の心臍を死す文に云はく、又論に云はく、四種聲聞の中、決定、増上  
の二種の聲聞は根未だ熟せざるが故に如來授記を與へず」と。已上論に云はく、麤食者解して云はく、  
「決定の聲聞は是れ愚法ならず、根未だ熟せざるが故に佛授記を與へず」と。已上麤食者語。此説

【玄贊】妙法蓮華經玄贊十卷、唐慈恩撰。

【義林】大乘法苑義林章七卷、唐慈恩撰。

【二九】羅食が法華論の文を引き聲聞授記を論じ二乗の成不を論ずるを破す。

爾らず。『玄贊』に不熟と會するが故に、又三藏の傳に違くが故に。法華の會の決定は方便の決定なるが故に、又義林に違するが故に。法華の會の決定は暫時の決定なるが故に、又論の記に違するが故に。此論の決定は暫時に就きて説くと。明かに知んぬ、羅食者の會釋は自他宗に相違することを。

羅食者第四に法華の心腑を死す文に云はく、「四には論文に云はく、聲聞等は實に成佛するが故に授記を與ふと爲んや。若し實に成佛せば菩薩何が故に無量劫に於て無量の種種の功德を修習する。若し成佛せずんば云何が虚妄に之に授記を與ふる。論に即ち答へて言はく、如來の法身と彼聲聞、法身と平等にして異なること無きを以ての故に授記を與ふ。即ち修行の功德を具足するには非ざるが故に」と。已上羅食者引其答の中、決定心を得て聲聞、法性を成就すと謂ふには非ず。如來彼三種の平等に依りて一乗の法を説くと。已上論羅食者、得決定心等の句を隠して成佛決定の心を顯はさず。當に知るべし、諸聲聞の人等、功德未だ具せずと雖も究竟成佛する決定の實心を得、法身平等なるが故に成佛の授記を與ふることを。羅食者當に知るべし。法身平等なるが故に其れに授記を與ふと雖も成佛を得ると謂ふには非ず。論の末具足の言、必ず當具足なる可きか故に。當に知るべし、聲聞に授記を與ふるは必ず當に實に成佛して決定心を得べきが故なることを。是故に虚妄ならず、若し授記を與ふと雖も未だ必當成佛せずんば豈虚妄に墮せざらんや。若し不定は實に成佛するも定性は成佛せずと言はば法華の所被は入位の定性、迦栢の敗種皆入位なり。虚妄を

免れず。若し入位の聲聞に二種有り、一には不定の入位、是は當に成佛すべし。二には定性の入位、是は成佛せずと言はば此れ亦爾らず。入位の聲聞をば不定と名けざるが故に。入位の聲聞を名けて定性と爲ること經論に證有り。入位の聲聞を名けて不定と爲ることは經論に證無し。但し『涅槃經』の劫住不定等を除く。定性聲聞を指し究竟に望めて不と爲るが故に、夫れ誠證の本文は章を斷じ義を成するも其旨を謬まらざれ、一字を間糅し一字を増減せば誠證とするに足らず。但取意を除く。夫れ意を取りて會釋するは自他共に許す、其議を成するを得ればなり。若し自他許さずんば其義成じ難し。麤食者輒く決定等の二十四字を減じて乃至の言を置かず、意を取らず、會釋せず、何ぞ論文を亂ると。心有る學生、一を以て十を知る。麤食者又云はく、「又下に云はく『何の義に依るが故に如來三乘を説き名けて一乘と爲す。同の義に依るが故に諸の聲聞に大菩提の記を與ふ。同の義とは如來の法身と聲聞の法身と平等にして差別無きを以ての故なり。』」諸の聲聞、辟支佛異乘なるを以ての故に差別有り、彼二乘大乘に非ざるを以ての故なり」と。已上麤食者引く麤食者此意を説きて言はく「無爲の乘は三乘別無し、故に不定性を揀別せず皆成佛と説く。此れ即ち『攝論』の法無我解脱等しきが故に一乘を説くと云ふに同じ有爲の乘は三乘差別せり故に不定性は成じ定性は成佛せずと説く、即ち『攝論』の類を引按せんが爲に及び所餘を任持す、不定種性に由り諸佛一乘を説くと云ふに同じ。已上麤食者所立の無爲の乘は三乘別無し、故に不定皆成佛す。此れ即ち『攝論』の等故説一乘に同じと。此説爾らず、

無爲の中に授記無きが故なり。汝が皆成佛都て寄る所無し。攝論の等故とは一乘を説くを以ての故に必ず當に佛道を成すべし。若し一乘を説くと雖も未だ必當作佛せずんば深く『攝論』の旨に乖く。其入位の定性は必ず轉改すべきが故なり。是故に汝が無爲は『攝論』の頌に同じからず。又、麤食者立つる所の有爲の乘は三乘差別す。故に應に一乘を説くべきに不ずとは何ぞ『攝論』の頌を引きて成不成の義を立てん。『攝論』の頌の末句に諸佛説一乘とは汝が差別に違ぐが故に、何ぞ一乘を説くを聞きて三乘の差別を悟らん。是故に『攝論』の頌に同じからず。麤食者又云はく、『論』に既に諸の聲聞辟支佛は異乘なるが故に差別有り、彼二乘は大乘に非ざるを以ての故にと云ふ。此に準じて明かに知んぬ。定性の二乘は行佛性無し、故に成佛せず。彼不定性の二乘は廻心已後轉じて菩薩と名く。如何が彼一乘、大乘に非ざるを以ての故にと云ふことを得ん。是故に『方便品』の中には法身の理に約して『唯一佛乘にして餘乘有ること無し』と云ひ、『藥草喻』の中には行佛性に約して『三草二木生長同じからず』と云ふ。爾らずんば如何にして一論文の中、二乘を説き名けて一乘と爲さん。亦彼二乘、大乘に非ざるを以てと云はんと。已上麤食。此説爾らず。乘平等の議に違き初の染慢を發するが故なり。麤食者、經論の四の教文を引くと雖も唯異乘の一義爲り、論に云はく『何者か三種の無煩惱の人、三種の染慢なる、謂ゆる三種の顛倒信なるが故なり。何等をか三と爲す。一には種種の乘異なりと信ず、二には世間涅槃繫異なりと信ず、三には彼此の身異なりと信ず。乃至云はく、『一乘は平等なり、謂く聲聞の與に菩薩の記を授く、唯大

乘にして二乘無きが故に、是乘平等にして差別無きが故に」と。其三平等とは法華の大義なり。今麤食者、定性の二乗の異を信ず、麤食者無煩惱ならずと雖も第一の染慢を起す明かに知んぬ。麤食者異乗の會釋は論の乘平等に違することを、其諸の聲聞、辟支佛は異乗なるが故に差別有りとは三乗の差別は行乘に約するが故に常に差別有り、證乘に約するが故に常に一乘を説く、又彼二乗、大乘に非ざるを以ての故にと云ふは、彼二乗の道は究竟の佛に到ると雖も迂廻の小徑なるを以ての故に大乘に非ざるが故にと云ふ。究竟の佛に到らざるが故に大乘に非ざるが故にと謂ふには非ず、是故に「方便品」には證乘に約するが故に、同法身なるが故に、唯一佛乘にして餘乗有ること無しと云ひ、「藥草喻品」には行乘に約するが故に迂直異なるが故に、各生長を得と云ふ。若し闡らずんば乘平等の義全く、無用なる可く、雲雨の喻の意亦流失す可し、論文異り無し、異を見るは麤食の見なるのみ。定不定の會は具の上に破するが如し。故に繁く述べざるなり。

【三〇】以下四教二理の中、二理に於いて難破あり。初に麤食者が安樂行品の非菩薩の文を執し法華に定無有りと説くを破す。【安樂行品】妙法蓮華經安樂行品第十四。

麤食者、二理を立て法華の心腑を死して云はく、「一には『安樂行品』に云はく『後末世の時、此經を持する者は家、出家及び非菩薩に於て應に慈悲を生ずべし』と。取意の文。麤食者、此非菩薩を説きて云はく、「此れ即ち一闡提定性の二乗を非菩薩と名く。不定性は佛の記前を授く、故に菩薩と名く。一闡提及び定性の二乗は闡ならず、故に非菩薩と名く。」と、已上麤食者、彈じて曰はく、「此説闡ならず。章を闡じて義を成じ經の心に違くが故に。麤食者其頭語を斷ちて尾語を示さず、頭尾別離す。何ぞ眞體を知らん。今頭尾の語を續きて深



【四徳】常樂我淨  
 の四種の功徳  
 【二死】分段、變  
 易の死。

誓願せいかんを知らしめん。謹こんんで其正文そのまことを案あんするに云はく、「又文殊師利菩薩摩訶薩、後末世、法の減げんせんと欲ほつする時に於て、「法華經」を受持じゆぢする有らん者は、在家出家の人の中に於て大慈心だいじしんを生じ、非菩薩ひぼつさつの人の中に於て大悲心だいひしんを生ず」と。已上經文いじやうきやうぶん是、次つぎの經文きやうぶんに云はく、「一應に是念このまごころを作すべし、是の如き人、則ち大いに如來の方便ひやうべんをして宜しきに隨したがひて法を説くを失すと爲す。聞かず知らず。覺らず問はず。信ぜず解せず。其人是經を問はず信ぜず解せずと雖も、我阿耨多羅三藐三菩提を得る時、隨したがひて何れの地に在んも神通力、智慧力をもつて之を引きて是法の中に住することを得しめん」と。已上經文いじやうきやうぶん是、今頭尾いまづつひを續つづきて云はん、「其れ在家、出家及び非菩薩は持經者の誓願の念に依り、隨したがひて何れの地に在らんも決定して妙法の中に住することを得。已に妙に住す、誰か一乘の法ならざらん、誰か成佛せざらん。若し誓ふと雖も住せずと言はば衆生を欺誑あやまちす、何ぞ安樂行と名けん。若し住することを得と言はば麤食の怨める定ぢやう性しやうの二乘、一闍提いっせつていの人必ず當に成佛すべし、持經者の願に依りて是法の中に住するが故に。已に權大の心を發するを家、出家と名け未だ大心を發せざるを非菩薩と名く、今法華を持する者已に權大の心を發するに於て圓の大慈心を生じて眞の四徳の樂を興へ、未だ大心を發せざるに於ては圓の大悲心を生じて夢の二死の苦を抜く。近きが爲、遠きが爲に大誓願を發することを爲す。定性を中路に死し無性を火宅に繋ぐ。麤食者に於て何ぞ利益有らん。若し利益有らば後學に示す可し。若し利益無くんば速かに改むるに憚かること勿れ。

【三】。麤食の涅槃經、勸持品等を引き、定不得記を簡ぶを破す。  
【阿若橋陳如】。佛初轉法輪時の五比丘の中の一人。

【姨母と耶輸】。姨母は摩訶波闍波提にして耶輸とは佛出家以前の妃なり。  
【三周】。法、譬、因縁の三周、之れ佛の法華を説き聲聞を度する形式なり。

【橋曇彌】。ガウタミ(Chandami)佛の姨母のこと。  
【四人の迦葉】。伽耶迦葉、那提迦葉、優樓頻羅迦葉及び摩河迦葉を指す。  
【勸持品】。妙法蓮華經勸持品第十三

麤食者第二の理に法華の心腑を死す文に云はく、「二には涅槃經の第九に云はく、『法華の會中、佛の記莖を授かる聲聞八千』と、『法華』の勸持品に云はく、『佛の記莖を授かる有學無學八千の聲聞』と。又『經』の首の同聞衆の中に『萬二千人』と俱なりき、皆是れ阿羅漢なり。其名を阿若橋陳如、舍利弗等と言ふ」と云ふ。此れ即ち大通智勝佛の十六王子の時に菩提心を發し或は爾らざる有りりと。今難じて云はく、「若し定性不定性、法華の會に至りて皆成佛せば萬二千人皆應に授記すべし。何が故に唯八千人に記莖を授けて餘人に授けざる。若し八千人を除きて餘は未だ根熟せざる故に授記せずと云はば、何か故に有學は根熟して無學は熟せざる。此文に準じて知る、『法華論』に決定の二乗の根熟せざるが故に佛授記せず」と云ふは即ち此類を指すことを。」  
【上座食】。彈じて曰はく、「此理爾らず、經の義に垂き論の文に違するが故に。經の義に垂くとは法華の會に記を得るもの但八千人のみに非ず。其八千の外五百の得記有り、六千の得記有り、姨母と耶輸と及び三周の別記有り。何に況んや物記を得るをや。」  
【經】に云はく、「橋曇彌、我先に惣じて説く、一切の聲聞皆已に記を授く」と云ふ。已上論。當に知るべし、法華の會の中には定不を簡ばざることを。一切の聲聞皆已に記を授く、一切の言、其れ皆の字皆萬二千の殘を攝せざらんや。上根の一人の舍利子、中根の四人の迦葉等、下根の五百及び千二百の阿羅漢とは是は萬二千の略して記を得る者を云ふなり。學無學の二千は是れ萬二千に不ず。『勸持品』の八千は是れ萬二千に不ず。『序品』の萬二千は學無學に不ざるが故に、法華の明文、記を得るもの八千に餘れり。明かに知

【三】四教二理を結して麤食の法華の定性無性の不成佛なるを證するを破斥す。  
 【如來藏經】大方等如來藏經一卷、東晋の佛陀跋陀羅譯。  
 【善知識】能く行者の修行を益する人を云ふ。

んぬ、麤食但八千を執して全く經の義に乖くことを。涅槃に遙かに指すの文は得記の義を顯さんが爲なり。得記の數を取るには非ず。麤食者、但八千の文を見て法華の記を算へず、豈愚中の愚ならざらんや。論文に違するが故にとは、『釋法華論』の正文に云はく、「若し決定の者、増上慢の者、二種の聲聞は根未だ熟せざるが故に授記を與へず」と。已上論大唐の贊師、未の字を改めざるは上慢の爲の故なり。但趣寂に於て不訓を含有す、況んや餘の諸の疏師都て未の字を改めず。今麤食者輒く論文を糅へ法華の心を死し後生智を礙ふ。其論文を糅へて云はく「決定の二乗、根熟せざるが故に佛授記せず」と。雜せる論文。麤食者の意、若し増上慢の句を隱除せずんば其未熟の未の字、不の字に替ふるに由無し。若し未の字に改めずんば決定の二乗の根、必ず當に熟すべきが故に。是故に麤食者自立の義を救はんが爲に論の正文の増上慢者の句を除却し不熟の句を糅加し妄に千代の下に傳ふ。誰か智有る者、此妄を許す可けんや。明かに知んぬ、麤食者糅ふる所の論文、深く天親に乖き又釋尊に違することを。」

麤食者、四教二理を結し法華の心腑を死して云はく、「此四教二理に依て證と爲すに法華も亦定性の二乗、無情有情作佛せずと説く。法華既に權教の攝なり。即ち知んぬ。法華以前の教に權實有り。『華嚴』『楞伽』『勝鬘』『如來藏經』等の如き是れ眞實の教なり。是れ頓教の攝なり。頓悟の菩薩に被むらしむるを以ての故に、『華嚴』の中に説く、『定性二乗、無情有情成佛せず』と、『勝鬘經』に云はく、『善知識を離れたる無間非法の衆生

は人天の善を以て而も之を成就す。聲聞を求むる者には聲聞乘を授け、緣覺を求むる者には緣覺乘を授け、大乘を求むる者には授くるに大乘を以てす。無聞非法の衆生は即ち小草なり。中間の二乗は即ち中草なり。菩薩は是れ大藥草なり」と。又、『涅槃經』に云はく、  
 『譬へば病人の如し、其に三種有り。一には若し良醫に遇ひ及以遇はざるも、決定して差ゆべし、即ち是れ大草なり。二には若し遇はば即ち差え遇はずんば差えず、即ち是れ中草なり。三には若し遇ひ遇はざるも定んで差ゆべからず、即ち是れ小草なり」と。此等の文に準じて明かに知んぬ。法華の前の教、法華の後の教皆共に三乘五性を建立し而も定性二乗、無性有情皆成佛せずと説くこと。者語。彈じて曰はく、「蠱食者の四教二理皆悉く破壞し、定性無性究竟じて成佛す。法華の心腑都て損害無し。又法華の前の教、『華嚴』『楞伽』『勝鬘』、『如來藏經』等は教に約せば權有り亦實有り。部に約せば顛有り亦權有り。機に約せば歷劫頓悟の人なり。『華嚴』『勝鬘』存二の一乘に約せば立已成の失有り。法華の前なるが故に二を存して一乘を説く。『涅槃經』に説く所の三種の病人各一の故には差有り。究竟の故には凡そ心有る者悉く當に成佛すべし。此等の文に準じて、明かに知んぬ。法華の前の教には定性の二乗を存して密意の一乘を説き、法華の後の教には差不差を説くと雖も心有るは當に成佛すべし。蠱食者、法華の前の教、法華の後の教皆共に三乘五性を建立して而も定性二乗、無性有情皆成佛せずと説くと執するは退きては則ち立已成の失有り。進みては則ち究竟に違するの失有り。誠に願くば一乘の學生、謬りて之を許すこと莫れ。是の

如き等の權實及び成不成不定性、約位約種、密意隱密は、義鏡章等、慧日羽足、遮  
異見章等にあり。委悉に遮破すること、守護國界章、照權實鏡、決權實論、通六九證等の  
如し。

【短翻】 不成佛を論ぜざるを端として通あり更に會釋し後、破斥に遣ふ。  
【短翻者】 麤食者と同様の意。  
【兜率天】 欲界の天處、内院は彌勒菩薩の住居にして外院は天衆の欲樂處なり。

【集諦】 苦諦を招く原因、即ち貪瞋癡、善惡の諸業を云ふ。

短翻者第一に法華の心髓を死す證文に云はく、『華嚴』卷四十、世間品に云はく、『佛子、菩薩摩訶薩、兜率天に於て命終に臨む時十種の果現す。第三に右手の掌中に於て大光明を放つを淨明境界と名け、悉く能く大千世界を嚴淨す。此世界の中若し無漏の諸の辟支佛有りて斯光を覺る者は即ち壽命を捨てて涅槃に入る。若し覺らざる者は光明の力の故に移して他方の餘の世界の中に置くなり。法華宗通じて曰はく、『此證理に非ず。何を以ての故に。』涅槃經の時會通せらるるが故なり。『涅槃經』に云はく、『迦葉、第五人は永く食欲瞋恚癡を斷じて辟支佛の道を得、煩惱無餘にして涅槃に入る。眞に是れ麒麟獨一の行なり。是を第五人有病行處と名く。是人未來十千劫を過ぎて便も當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得べし。』明かに知んぬ、入滅の後劫を経て作佛することを。豈權を執して實を失はんや。『短翻者更に彼第一に掌中放光の文を通ずるを會す。』華嚴』に入於涅槃と云ふと雖も而も『涅槃經』の會に至り入滅の後劫を経て作佛すと云ふは此通通に非ず。『華嚴』は無餘涅槃に入るに約して説くを得。『涅槃經』は有餘涅槃に入ると説きて無餘に入るを明さす。何を以て然るを知る。『華嚴』には即ち壽命を捨てて涅槃に入ると云ふ。明かに知んぬ、此れ苦諦を捨つることを。『涅槃經』には煩惱無餘にして涅槃に入ると云ふ。此れ集諦を

【苦諦】三界六道  
之苦報にして之れ  
迷界なり。

捨するなり。既に煩惱無餘と言ひて壽命を捨つと言はず。集諦煩惱の所感の苦諦の有餘を有餘涅槃と名くるが故に、先に集諦を捨て後に苦諦を棄つるを無餘涅槃と名く。故に知んぬ、「華嚴」は無餘に入るを説き、「涅槃經」は有餘涅槃に入ることを。又「華嚴」には決定性の獨覺無餘に入ることを説き、「涅槃經」には不定性の獨覺有餘涅槃に入ることを説く。故に「涅槃經」の第二十二に云はく「須陀洹果、亦復不定なり、決定せざるが故に、八萬劫を還て阿耨菩提を得。乃至辟支佛、亦復不定なり。決定せざるが故に十千劫に阿耨菩提を得」と。此等に準ずるに彼二經の二乗は定不定別なり。云何ぞ定性の文を以て不定性の文を通ぜんや。故に汝が通は通に不すと。法華宗、邪苗に霜雹して云はく、「短韻者」涅槃經の不定の文を引きて「華嚴」定性の文に違せしむ。是れ則ち汝が決定の執を破して不定の文と作さしむるなり。故に其經の上の文に云はく、「善男子、譬へば幻師の大衆の中に在りて四兵の車歩象馬を化作し諸の瓔珞嚴身の具、城邑聚落、山林樹木、泉池河井を作るが如し。而して彼衆の中に諸の小兒有り。智慧有ること無くして之を覩見する時悉く以て實と爲す。其中の智人は其虚誑にして幻力を以ての故に人の眼目を惑はすと知る。善男子、一切の凡夫乃至聲聞辟支佛等一切の法に於て定相有りとも見るも亦復是の如し。諸佛菩薩は一切の法に於て定相を見ず。善男子譬へば小兒の盛夏の月に於て熱時の炎を見、之を謂ひて水と爲すも有智の人は此熱炎に於て終に實水の想を生ぜず、但是虚炎、人の眼目を誑かすのみ、實に是れ水なるに非すと云ふが如し。一切の凡夫、聲聞緣覺一切の法を見るも亦復是の如

し。悉く是れ實なりと謂ふ。諸佛菩薩は一切の法に於て定相を見ず。善男子、譬へば山の  
 間聲に因りて響有り、小兒は之を聞いて是れ實聲と謂ふも有智の人は定實無く但聲相有り  
 て耳識を誑すと解するが如し。善男子、一切の凡夫、聲聞緣覺、一切法に於けるも亦復是  
 の如く定相有りと見る。諸の菩薩等は諸法悉く定相無しと解して無常の相、空寂等の  
 相、無生滅の相なりと見る。是義を以ての故に、菩薩摩訶薩、一切の法は是れ無常の相なり  
 と見る。善男子亦定相有り。云何が定と爲す。常樂我淨なり。何れの處にか在る耶。謂ゆる  
 涅槃なり。善男子、須陀洹果も亦復不定なり。決定せざるが故に八萬劫を運て阿耨多羅三  
 藐三菩提心を得ん。斯陀含果も亦復不定なり。決定せざるが故に四萬劫を運て阿耨多羅  
 三藐三菩提心を得ん。阿那含果も亦復不定なり。決定せざるが故に二萬劫を運て阿耨多羅  
 三藐三菩提心を得ん。阿羅漢果も亦復不定なり。決定せざるが故に十千劫を運て阿耨多羅  
 三藐三菩提心を得ん。辟支佛道も亦復不定なり。決定せざるが故に十千劫を運て阿耨多羅  
 三藐三菩提心を得ん。已上經文。當に知るべし、唯常樂我淨の徳を除きて自餘の人法皆不定  
 なることを。幻人の法定相無きが如く、何ぞ定性有りて作佛せざらん。法華已前には入位  
 の定性轉ぜず改めず、敗種等の如し。法華の日に「先より修習して小乘を學せる者をば  
 除く。是の如きの人も、我今亦是經を聞いて佛慧に入ることを得しむ」と。此より以後、入  
 位の二乘皆不定と名く、更に定性二乘の人無し。是故に當に知るべし、「涅槃經」の文、四  
 果支佛等、不定不決定は凡夫二乘の實定の相有りと見るを破することを。故に「攝論」に云

【頂位】四善根の  
一、動善中の最極  
猶し人の頂の如き  
が故に此名あり。

【四果】聲聞乘の  
聖果の分類、須陀  
洹、斯陀含、阿那  
含、阿羅漢の四果  
を指す。

はく、『若し頂位に至るも定性となげす。乃至云はく、『若し忍位に至るを名けて定性となげす。乃至云はく、『若し小乗に依りて解せば、未だ定根性を得ざれば則ち小を轉じて大となげす可し。若し定根性を得ば則ち轉す可からず。此の如きの聲聞は小を改めて大となげすの義有ること無し。云何が一乗と説くことを得ん。今大乘に依りて解す、未だ専ら菩薩の道を修せず、悉く未定根生となぐ。故に一切の聲聞皆轉じて大となげす可きの義有り』と。論文當に知るべし、『涅槃經』に四果支拂を不定となぐるは未だ專修せざるの不定なり。是れ頂の不定に不定なることを。是故に當に知るべし、華嚴の所説は入滅の敗種なり。法華は再生、涅槃も再生なることを。除先の決定、令人の不定、是れ則ち一人なるが故に前後相違せず。短翻者又云はく、『華嚴』に云はく、『即ち壽命を捨てて涅槃に入る』と。明かに知んぬ。是れ苦諦を捨つることを、『涅槃經』に云はく、『煩惱無餘にして涅槃に入る』と。此れ集諦を捨つるなり。乃至云はく、『苦諦を棄つるを無餘涅槃となぐ』と。已上人。明かに知んぬ。短翻者、苦諦を斷ずるを以て無餘涅槃となぐることを。若し斷らば苦免れ難し。『涅槃經』に五種の病人有り。第一の人は人天七反し永く諸苦を斷じて涅槃に入る。是人は未來六萬劫を過ぎて當に菩提を得べし。第二の人は斯陀含果を得、一往來し永く諸苦を斷じて涅槃に入る、是人は未來六萬劫を過ぎて當に菩提を得べし。第三の人は阿那含果を得、更に此に來らず永く諸苦を斷じて涅槃に入る。是人は未來四萬劫を過ぎて當に菩提を得べし。上の三種の病人永く諸苦を斷じて涅槃に入ることを。已に苦諦を棄てて涅槃に入る。明かに



知んぬ。無餘涅槃なることを。若し兩らずと言はば短翻が捨壽の涅槃は應に苦を捨つる無  
 餘なるべからざるが故に、短翻者云はく、「涅槃經」には不定性の獨覺有餘滅に入ること  
 を説くと此五義の爲に棄てらるる有らん。若し短翻自語して若し可稟有りと言はば、短  
 翻應に彼師に問うて言ふべし。大師何れの所に有る經論にか麒麟獨覺を不定と説ける。其  
 師若し麒麟多し、是故に不定性に喩ふ可しと言はば麟角獨覺一なるが故に、此故に定性に  
 喩ふ可し。短翻應に彼師に問うて言ふべし。涅槃眞に是れ麒麟獨一の行ならば何ぞ多と名  
 けんと。其師若し「涅槃經」に辟支佛道も亦不定なり。十千劫を遡て菩提を得と言はば明か  
 に知んぬ。支佛は不定性なることを。短翻應に彼師に問ひて言ふべし。位不定と爲んや。  
 種性と爲んや。彼師若し種不定なりと云はば應に問ふべし。何ぞ病行處に住すと。彼師  
 若し位不定なりと言はば應に問ふべし、無學何ぞ不定と名けんと。若し短翻、師の説を稟  
 くと言はば未だ知らず。何の師の日本に傳ふと云ふことを。若し道昭及び智通と言はば古  
 記の中に其文を示せ。若し古徳所傳の語と言はば後の學者を信ぜしむるに足らず。若し比  
 蘇及び義淵と言はば自然智の宗にして稟くる所無し。短翻、何ぞ稟くる有りと言ふや。短  
 翻若し白らの所悟なりと言はば早速此邪見を捨離せよ。寧ろ名利の爲に聖釋を破せんや。  
 短翻詰りて「華嚴」權なりと言はば他宗を了せず。妄徴を設けて法華を權と爲すは上に已に  
 破せり。深密の三時は但劍解にして一代教時を判するに足らず。故に大唐の貞元十四年  
 歲次戊寅 日本國の延暦十七年 翻經評定の沙門澄觀法師の「新華嚴經疏」の第二に云はく

「明かに知んぬ、深密の三時は定んで一切の聖教を斷すること能はず。未だ最後に在らざるを以ての故に、且く一類の義に約す、故に三を分つと云ふのみ。」已上疏文明かに知んぬ。大唐の新判、三時を許さざることを。其大唐貞元十四年より大日本弘仁十二年歲次辛丑に至るまで正しく二十四歳を經。

【三】短翻の三乘五性を立つるに於いての難、會、破なり。

短翻者、第二に法華の心腑を死す證文に云はく、「莊嚴論」の第一卷に云はく、「餘人の善根は涅槃の時に盡く、菩薩の善根は爾らずと」。又云はく、「三乘の衆生、界差別に由るが故に、種性差別するが故に」と。已上論法華示通じて曰はく、「此證理ならず。所以は何ん。餘人の善根とは則ち是れ唯神通の善根なり。故に『法華經』の信解品に云はく、「老蔽の使人あり、須ひば相給せん」と。問ふ、「何を以て善根とは神通なりと知ることを得る耶。」答ふ、「其論の第一歸依品に無盡とは謂く、神通の善根なり。無餘涅槃に至るも亦無盡なるが故にと。」已上論故に知んぬ、小乘は有盡、大乘は無盡俱に是れ神通の善根なることを。又、界差別に由るが故に種性差別すとは下の「楞伽」「瑜伽」の五性の通の如しと。短翻者、此第一の通を會して云はく、「彼第二の通に莊嚴論に餘人善根と云ふは小乘は有盡、大乘は無盡俱に是れ神通の善根なりとは此通通に非ず。何を以ての故に。他宗の義を救ひ自宗を害するが故に。餘の二乘の人の神通の善根、無餘涅槃に入る時已に盡く。況んや餘の善根豈に餘留有らん耶。菩薩の神通の善根、無餘に入るとき都て損減無し、故に種性最勝なり。又汝、歸依品の文を、以て種性品を釋して云はく、「餘人の善根は涅槃の時盡くとは二乘の

神通善根の無餘涅槃に入るの時已に盡くるが故なり」と。此通愚癡なり。何を以ての故に。汝が宗には二乘無餘に入るの時善根盡きすと云ひ、我宗には二乘無餘に入るの時、善根已に盡くと云ふ。而も汝、我宗に對して、二乘の神通善根、無餘涅槃に入るの時已に盡くと云ふ、故に還りて我宗を成じ汝の自宗害せらる。論の「餘人の善根、涅槃に入りて已に盡く」の文を通ずることを得ずと。法華宗、已盡の邪出に霜苞して云はく、「短翻送る所の自害の失都て白ら害せず、用極るを盡と名く。永く盡くと謂ふには非ず。故に「佛性論」に云はく、「三種の餘有り。謂はく煩惱餘、業餘、果報餘なり。權教に約して灰身滅智を無餘滅と名くと雖も、然れども實教に約せば住劫の後、「法華經」を聞きて廻心作佛すと説く。已に三餘有り、何ぞ餘善無からん。唯神通の作用弱きに約するが故に入の時盡くと名くるのみ。若し爾らすんば金剛頂宗に違するが故に。故に大唐の至徳二年大日本國天平寶字元年に當る。天竺の三藏、阿日法拔日羅合の譯せる「金剛頂瑜伽中發阿耨多羅三藐三菩提心論」に云はく、「二乘の人は人執を破すと雖も猶法執有り、但意識を淨め其他の久久にして、果位を成ずることを知らず。灰身滅智して其涅槃を越くを以てなり。大虚空の湛然として常寂なるが如し。定性有るは發生す可きこと難し。要す劫限等の満を待ちて方に乃ち發生すべし。若し不定性は劫限を論ずること無く、縁に遇へば便ち廻心向大す」と。已上論當に知るべし。無餘に入るの定性は神通善根の相を盡すと雖も然れども其神通の性及び一切の善根永く滅盡せず。要す劫限等の満を待ちて方に即ち發生すべきことを。明かに知んぬ、短翻者の結する所の

【淨眞如第八識】  
第八阿賴耶識、眞  
常淨識を言ふ。

文に、「泥んや餘の善根豈餘留有らんや」とは短翻の臆説なり。歸信す可からず。短翻者又云はく、「汝が宗には二乗無餘に入るの時善根盡きすと云ふ」と。已上麁食此説爾らず。他宗を了せざるが故なり。老藏の通は作用弱きが故に無餘に入るの時作用起らざるが故に已盡と名く。是れ永滅に不ず。短翻者此意を了せず、已盡の言に於て謂ひて斷空と爲す。法華宗は已盡の言に於て謂ひて斷と爲さず。是故に分段の死に望むれば用息むを盡と名け、變易の死に望むれば三餘盡きざるを名けて盡と爲す。短翻者此意を了せず。汝が宗に無餘に入る時善根盡きすと云ふは宗の人と云ふと爲んや、當に「玄疏」に云ふと爲んや。若し「玄疏」と云はば、其處を指す可し。若し文を指さずんば短翻の臆説なり。我宗に云はす若し宗人の云ふ所と云はば小學の云ふを聞きて虚しく此難を設くるなり。夫れ此法華宗は老藏の通は入滅の時盡く。是故に「莊嚴論」の證甚だ好く通を得。變易身に望むれば、唯淨眞如第八識のみ有りて都て盡くと。是の如き等の妄説四海に散ぜり。止息するに由無し。其れ無餘に入るの定性の二乗未だ法執を斷ぜず。何を以てか都て法執を盡さん。無明、分段の生を引發せずと雖も無明住地を意生の縁と爲し無漏の業を意生の因と爲して變易の生を受く。是故に「夫人經」に云はく、「世尊、又有漏を縁する業因を取りて而も三有を生ずるが如く、是の如く無明住地の縁、無漏業の因は阿羅漢、辟支佛、大力菩薩の三種の意生身を生ず。無漏の業の生ずることは無明住地に依る。有縁にして無縁に非ず。是故に三種の意生身及び無漏業は無明住地を縁とす」と。已上經無餘涅槃に入趣寂の二乗は未だ無明住地を斷ぜず

【三五】短翻、涅槃經を執り皆成を遮せんとし、法華、五性皆成を以て之を通じ且つ破す。

未だ能斷の如來の智を得ざるが故に、能斷の智無くして無明の惑を斷ずとは道理に應ぜざるが故に。若し無明の惑を斷せば如來の身に同じきが故に。若し二乗の人は弘誓の願無く利他の行を闕く。是故に如來の身に同じからずと言はば已に能斷の如來の智を闕く、何ぞ無明の惑を斷じ意生身を免れん。若し其れ變易の身は、趣寂の定性は受けず。但不定性の人のみ有根身を留め場壽變易すと言はば不定性の人とは大目犍連も有根の身を留めず。更に何等の身を受けて將に八相成道せん。若し其れ大目犍連火を化して化身を燒くと言はば「法華經」の「是身を捨し已る」に違す。短翻者又自宗の增壽變易の義を助救せんが爲に輒ち意生を改めて恣に意成身と爲す。豈に聖說に乖かざらん哉。明かに知んぬ、如來の智無くんば永く無明住地を斷すること能はず。若し無明住地を斷ぜずんば變易の意生を解脫することを得ず。若し變易の意生を解脫せずんば、微細の苦何ぞ免脫することを得ん。是故に經に云はく、「阿羅漢に恐怖有り、何を以ての故に。阿羅漢は一切の無行に於て怖畏想に住す。人の劍を執り來りて已を害せんと欲するが如し。是故に阿羅漢は究竟の樂無し。」乃至云はく「是故に阿羅漢、辟支佛は有餘の生法盡きず、故に生餘有りと。」已上經。當に知るべし、無餘已に盡くと其れ滅の失に墮して聖說に順せず。無著世親並此失を覺らざらんや。

短翻者、論を通ずることを得ず、已が短翻を指すのみ。

短翻者、第三に法華の心髓を死す證文に云はく、「涅槃經」に云はく、「我經の中に於て諸の比丘に告げて一乘一行一緣を説く。是の如きの一乘乃至一緣は能く衆生の爲に大

寂靜と作りて永く一切の繫縛愁苦及び苦因を斷じて一切の衆生をして一有に至らしむ。我諸の弟子是説を聞き已りて我意を解せず、唱へて如來、須陀洹乃至阿羅漢の人皆佛道を得と説くと云ふ」と。已上短刪者引く所の證文。法華亦通じて曰はく、「此證爾らず。所以は何ん。此證文は『涅槃』の三十四卷の二十一淨論の中の第十八の「一乘三乘の淨論の文なり。即ち其淨論の對に云はく、『善男子、我經中に於て説く、須陀洹の人は、人間天上に七返往來して便ち般涅槃す。斯陀含の人は一たび人天を受けて便ち般涅槃す。阿那含の人は凡そ五種有り。或は中間に般涅槃する者、乃至上流して般涅槃する者。阿羅漢の人は凡そ二種有り、一には現在、二には未來なり。現在も亦煩惱の五陰を斷じ、未來も亦煩惱の五陰を斷ず。我諸の弟子是説を聞き已りて我意を解せず唱へて、如來須陀洹乃至阿羅漢、佛道を得ずと説くと言ふと。』已上法華宗引く所の證文。夫れ初の證は實を執して權を失ふ。故に我意を解せず。後の證は權を執して實を失ふ。故に我意を解せず。今法華宗の所傳は方便の故には三乘の成不成あり、故に『法華』には『佛の方便の説を除く』と云ふ。眞實の故には『唯一佛乘のみ』と説き三乘五性皆悉く成佛す。故に『法華』に云はく、『若し法を聞くこと有らん者は一としてして成佛せざるは無し』と。又云はく、『舍利弗に告ぐ、我も亦是の如し。衆聖の中の尊なり。世間の父なり。一切衆生は皆是れ吾子なり』と。或は養子の義を立。短刪者、更に第三の通を破顯して云はく、「四果皆佛道を得とは我意を解せず。前の證は實を執して權を失ふ、故に我意を解せずと云ひ、後の證は權を執して實を失ふ、故に我意を解せずと云ふは此通通に非ず。

何を以ての故に。我を救ひ汝を害するが故なり。四十年前の權教を執して法華の後實を失ふが故に我意を解せずと云ふは此れ亦應に爾るべし。法華の後の實教を執して四十年前の權を失ふが故に應に我意を解すと名くべし。何を以ての故に。汝、權教は實教に會せらると云ふが故に、即ち既に實教を執するを我意を解せずと名く。故に知んぬ、二乘四果皆佛道を得と説くこと有ることを。是を佛意を解せずと名く。明かに知んぬ、二乘四果に定性不定性有り。定性は成ぜず、不定性は成佛す。是人を能く佛意を解すと名くることを「法華宗、不解の言の邪苗を霜雹して云はく、「此説爾らず、佛意を解せざるが故に。此第十八の一乘三乘の評論は諸部の中には此計無し。何となれば一乘三乘は皆大乘の所説なり。其境界に非ず。所以に此計の謂ひ無し。此文に一乘一道一因等と云ひ、並に我意を解せずと云ふは、「法華」には一乘一道を解することを明す。即ち知んぬ、三乘同じく一理に還る、皆即ち是なることを。此中那んぞ非を言ふことを得ん耶。解して云はく、前の文に亦能く常住の二字を得ば生生に惡道に墮せずと云ひ。此には那んぞ更に常を執するを佛意を解せずと云ふや。何の異ありて一乘一道を執して佛意を解せざる耶。又若し三乘同じく一乘に歸して成佛を得と言はば「大論」に何が故に聲聞の人成佛するや成佛せざるやと問ひ論主答へて、此事論議者の知る所に非ずと云ふや。若し爾らば豈に同じく一理に歸す、定んで是なりと爲す可けん耶。道運の「記」に云はく、「一二皆是大乘なりとは此れ皆法華の前及び涅槃の後に在り。三乘一乘に歸し悉く是れ大乘なりと聞きて初心の人此執評有り。

又若し法華の開權顯實を聞き已らば必ず此諍ひ無し。「法華」の若きは是れ顯露彰灼に三乘一乘に歸するの義を説く。故に知んぬ。必ず是れ爾前、密に聞きて執諍を生ずることを。又「大論」の中に「問ふ、何をか諍法と名くる。答ふ、三藏は是れ諍法、行門は此事有ること少し」と今諍と言ふは多くは三藏の三乘に在り。若し大乘諍有れば悉く初心に在り。經に須陀洹乃至佛道を得ずと云ふは餘國の所得なり。此文は例に非ず。又、七寶臺の云はく、是れ前の教の密意一乘の説に依る。故に實に是れ一と謂ふ。是れ佛意を解せざるなり。「二乘」とは密意の一乘なり。「一道」とは深密に三乘同じく三無性に依りて一道と爲す等と説くが如し。「一行一緣」とは同じく無差別を顯揚す。行相の無差別の相なり。「能く衆生の爲に大寂靜」と作るとは能證の道滅を説くなり。「永く一切の繫縛愁苦及び苦因を斷ず」とは道は能く苦集を斷ず。「一切の衆生をして一有に至ら令む」とは涅槃なり」と。已上法華涅槃の前の經に依る諍

此は是、三を存して一を説く異時の説なり。同じく是れ三乘皆成佛することを得と明さんと欲するに非ず。蟲の木を食む、是れ字を解するに非ざるが如し。後教を得と雖も前の經の意に非ず、故に意に諍ひを成するなり。乃至云はく、「深密の密意の一乘と法華等の究竟の一乘と何の差別か有る」と。乃至云はく、「略して九意有りて異なる。一には存三と破二の異、二には説時前後の異、三には説位不同の異、四には滅別道同の異、五には分同全同の異、六には在會無會の異、七には合三開一の異、八には爲人勝劣の異、九には説義不同の異なり」と。已上疏 廣く説くこと疏の如し。當に知るべし。短翻常に云ふ、「涅槃の一道は



【三】短翻が攝論を引きて法華は不定性に對して一乘を説くと爲すを通じ更に破す。

法華の文に會す」と。都て憑據無し。明かに知んぬ、臆説なることを。鏡と爲すに足らず。二乗四果に定不定性有り。定性は成佛せず、不定性は成佛す。是人を能く佛意を解すと名くとは、法華の前に望めて少く佛意を解するに似たり。若し法華に望むれば都て佛意を解せず。

短翻者、第四に法華の心腑を死す證文に云はく、「又攝大乘に十義の爲の故に一乘を説く。不定性を引攝するが故に」と。短翻者取法華宗、通じて曰はく、「此十因の故に證と爲すとも成せず。所以は何ん。此十因の故に一乘を説くは、定不定性の三乘を引攝して一乘に趣入せんが爲の故に、具に梁の「攝論」並に「別章」に説くが如し」と。已上法華宗通短翻者、更に第四の通を破して云はく、「彼第四に「攝論」の「十因の故に一乘を説く」の文を通じて、此十因の故に一乘を説くは定不定性の三乘を引攝して一乘に趣入せんが爲の故に」と云ふ汝が通通に非ず。何を以ての故に。論意を知らざる邪惡の通なるが故に。凡そ彼「攝論」には三世の佛の一乘を説くの意を會釋す。定性不定性の三乘を引攝して一乘に趣入せんが爲に不ざるが故に彼論の第十に云はく、「十の密意に依りて諸佛一乘を説くと云ふは、第三の因に云はく、法等しきが故に一乘を説く。三乘所趣の眞如一なるが故に一乘を説く。決定の二乘同じく佛果の一乘に趣くが故に一乘を説くと謂はず」と。已上短翻者對法華宗、十密の邪苗に霜雹して云はく、「短翻が破文此れ破すること能はず。何を以ての故に。道理無きが故に、論文を糅するが故に。道理無しとは三世十方の佛及以釋迦佛、究竟一乘を以て

定性ぢやうじやうの三乗さんじやうの人にんを引攝しやくし、不定ふぢやうの三乗さんじやうの人にんを引攝しやくして究竟くわうぢやうの一乗いちじやうに入いらしむ。故ゆゑに十一因いんを以もつて一乗いちじやうを説とく。此文こゝろ此理こゝろ經きやうの義ぎに合契がうぢやくし本法ほんぽうの道理だうりに合契がうぢやくし、亦復また貞觀ていくわんの後のち、天竺てんぢくより唐たうに來きたれる諸三藏しよさんざうの所傳しよふでんの一乘眞道いちじやうしんたうの理りに契合ぢやくがうす。知んぬ、短翻たんぱん者しや攝論しやくろんの意いを得とず。僞いつはりりて他たの正義しやぎを破やぶすることを。又短翻たんぱん者しや攝論しやくろんの第十だいつを引ひきて云いはく、十じゆの密意みつぢに依よりて諸佛しよぶつ一乗いちじやうを説とくと言いふとは、此文こゝろ木論ぼくろんの文ぶんならず。短翻たんぱん者しや糝しやくする所ところの論文ろんぶんなり。知しることを得とる所以ゆゑは唐朝たうたうの世親せしんの「攝論しやくろん」に云いはく、「釋しやくして曰いははく、此中こゝろの二頌にじゆは諸佛しよぶつ一乗いちじやうを説とくの意趣いそを辨べんす」と。又上論じやうろん短翻たんぱん者しや若し此本こゝろを指ささば、明あかに知んぬ、十じゆの密意みつぢに依よるの言ごんは短翻たんぱんが加かふるの文ぶんなることを。又唐朝たうたうの無性むじやうの「攝論しやくろん」に云いはく、「此密意こゝろに依よりて佛ぶつ一乗いちじやうを説とく、二頌にじゆに顯示けんしす」と。又上論じやうろん短翻たんぱん者しや若し此本こゝろを指ささば、此一こゝろ字じを改かめて十じゆの一字いちじに作さす。此こゝろと十じゆと異訓いじゆんなり。何ぞ唐朝たうたうの譯やくの本論ほんろんの外のちに輒たやく字じを改かむる。又隨朝ずいぢやうの笈多がくた、行ぎやう瓊じゆ等たうと共に譯やくせる天親てんしんの「攝論しやくろん」に云いはく、「釋しやくして云いはく、此二こゝろ偈げは一乗いちじやうを説とくの意いを顯けんす」と。又上論じやうろん短翻たんぱん者しや若し此本こゝろを指ささば、梁りやうの「攝論しやくろん」第十五だいじゆに云いはく、「釋しやくして曰いははく、一乗いちじやうを説とくの意いを顯けんさんさんが爲ために、此故こゝろに偈げを説とく。前まへの偈げは了義りやうぎを以もつて一乗いちじやうを説とき後のちの偈げは密義みつぎを以もつて一乗いちじやうを説とく」と。又上論じやうろん短翻たんぱん者しや若し此文こゝろを指ささば義相ぎさう似にせず。明あかに知んぬ、短翻たんぱん者しや四本しほんに依よらざることを。若し此四本こゝろの外のち、更さらに十密じゆみつの文ぶん有あらば必ず後學ごがくに示しせ。若し指示しじすることを得とずんば、明あかに知んぬ、論文ろんぶんを案あんぜざる吠聲はいしやうの釋しやくなることを。又、短翻たんぱん者しや云いはく、「第三因だいさんいんに云いはく、法等ほふたうしきが故ゆゑに一乗いちじやうを説とく。三乘さんじやうの所趣しよそ眞如しんぢよな

【七七】短翻が法華論の四種の聲聞不受記を以て決定定性を立てんとするを通じ更に破す。

るが故に一乘を説く。決定の二乘同じく佛果の一乘に趣くが故に一乘を説くと謂はず」と。  
 已上短翻者、夫れ所趣の眞如なるが故に、決定の二乘同じく佛果に趣くが故に一乘を説く。安語の文。攝論に云はく、「已定根性の聲聞は更に練根して菩薩と爲ると。」短翻者、何ぞ天親の是故に「攝論」に云はく、「已定根性の聲聞は更に練根して菩薩と爲ると。」短翻者、何ぞ天親の釋に垂きて定性不成を立つるや。「攝論」の四本に決定の二乗作佛を得ざるの説、都て其文無し。況んや其義有らん。無著の頌文、天親の釋に曰はく、「定性を遮せず、一乘を擁せず」と。明かに知んぬ、「攝論」の頌を引きて不定性は成佛し定性は成佛せずと云ふは但一斑の色を見て未だ其大體を知らざるなり。

短翻者、第五に法華の心腑を死す證文に云はく、「法華論」の中の四種の聲聞は趣寂の爲に受記せざるが故に」と。已上短翻取法華宗、通じて曰はく、「此證最も非なり。所以は何ん。唐の三藏、並に神昉師、義寂師、義一師等の諸の法相宗の師皆云はく、「法華論」の中、決定は即ち方便決定と爲し、或は暫時決定と名く。彼土にして廻心するが故に未來決定と爲す。具に神昉師の『集』の中卷、「大乘義林章第三」、義一師の『法華論述記』の下卷に説くが如し」と。已上法華宗通たんに、短翻者、更に第五通を破して云はく、「彼第五に『法華論』の決定の二乘、佛授記せざるの文を通じて云はく、方便決定、暫時決定なり、彼土にして廻心すればなりと。汝が通は通に非ず。教の文義を壊し而も強惡に通ずるが故に。後更に改轉するを方便と名け暫時と名く。後更に改めざるを決定と名く。而も汝が言ふ所の方便決定、暫時決定は文の意を知らず。而も文句雜亂せり。既に方便と名け返りて決定と名く。何ぞ此迷

亂を知らん」と。已上短翻者、已上短翻の詞。又云はく、「言ふ所の彼土に廻心すとは是れ有餘の廻心なり。無餘の廻心に非ず」と。已上短翻法華宗、妄破の邪曲に霜雹して云はく、「教の文義を壊して而も強惡に通ずるが故に、後更に改轉するを方便と名け暫時と名く。後更に改めざるを決定と名くと。而も汝が言ふ所の方便決定、暫時決定は文の意を知らず、而も文句雜亂す。既に方便と名け返りて決定と名く、何ぞ此迷亂を知らんとは此說爾らず。言ふに足らざるが故に。唐朝翻經の沙門神昉法師の『種性集』の中卷に云はく、『三藏解して云はく、決定の聲聞、義亦二あり。一には本性決定、本來唯二乘の種性有りて菩薩の性無し。二には方便決定、亦菩薩の種有り、而も此會に於て根未だ熟せざるが故に定んで發心の義無し。如來授記を與へず。故に決定と名く。後に於て根熟すれば菩薩授記して亦發心せしむ。此道理に由りて決定の聲聞亦不定に通ず。彼論は且く方便決定に據りて發心せしむ、本性に約するには非ず。故に違失無し』と。已上神昉法師今短翻の破の如くんば彼二種の決定聲聞を立つること、翻經者應に文の意を知らざるなるべし。亦應に文句雜亂すべし。一。『義林章』第三に云はく、『然るに決定の聲聞に凡そ二種有り。一には畢竟決定、本來唯聲聞の性のみ有るが故に永く發趣大の義無し。『瑜伽』に説く所の四聲聞の中の、趣寂の聲聞は此に據りて説くなり。二には暫時決定、一化の中に根未だ熟せざるを以ての故に廻趣すること能はず。名けて決定と爲す。後時に於て畢竟廻せざるには非ず。』法華論』の中の四種聲聞の中の決定聲聞は此に據りて説くなり』と。已上義林今短翻の破の如くんば『義林章』の例、

應に文句雜亂すべしや。嗚呼、短翻者、豈爾る可けん哉。二。其、又、義寂師、義一師同じく  
 云はく、「然るに決定とは謂く、釋迦の一化に廻心せざるが故に名けて決定と爲す。後時畢  
 竟して廻せずと謂ふには非ず。此論の説く所の決定の聲聞は彼瑜伽の趣寂の聲聞の義と差  
 別有り。謂く決定に二種有り。一には暫時、二には畢竟なり。此論の決定は暫時に就きて  
 説く。「瑜伽論」に趣寂聲聞と云ふは畢竟に據りて説く。何を以て此論の決定は暫時に據  
 りて説くを知ることを得ん。論に根未熟の故にと云ふ、後の可熟に望めて未熟と名くるが  
 故に。又、瑜伽の一向趣寂は即ち是れ此説の決定聲聞なる可し。彼は權の説に就き、此  
 は義の實に約す。故に相違せず。然るに大乘の基師、固く趣寂の聲聞を成せんと欲するが  
 爲に『法華論』を會して是の如きの言を作す。其趣寂の者既に大の性無し、何ぞ其熟と未熟  
 とを論ずることを得ん。應に言ふべし、趣寂は大の因無くして根熟せざるに由るが故に佛  
 記を與へず。菩薩に記を與ふるは且く理性同じければ漸く大乘を信ぜしむるなり。法に遇  
 はざるが故に、根未熟にして後當に熟す可きに非ず。若し爾らずんば應に趣寂に非ざるべ  
 し。便ち聖教に違す。増上と一處に合説して、同じく未熟と言ふと雖も發心をして増上に  
 同じからしむること勿れ。正義は應に云ふべし。決定の聲聞は根熟せざるが故に佛記を與  
 へず。菩薩に記を與ふるは方便して大乘を信する心を發さしむ。増上慢の者は根未だ熟せ  
 ざるが故に記を與へず。菩薩に記を與ふるは、菩薩に記を與へて大乘に趣向するの心を發  
 さしむ。若し趣寂の者亦發心を得と云ふは便ち涅槃等處の聖教に違せんと。今謂く、

若し趣寂の發心を説くは應に深密に違すと云ふべし。寧んぞ涅槃に違すと云はんや。涅槃には趣寂の發心作佛を説くが故に。何を以て趣寂發心すと云ふことを知ることを得る。瑜伽に説く、鱗角喩の一向趣寂なる、而も涅槃に説く、彼十千を経て當に發心すべしと。故に知んぬ、彼經に依るに趣寂も亦發心することを。又「法華論」の第三の聲聞は、唯曾發の後還退する者を取る。故に未だ曾て發せず。根未だ熟せざる者は一化の中に於て廻心すること能はず、故に亦名けて決定の聲聞と爲す。若し爾らずんば、不定種の申會て未だ發せざる四が中に誰にか攝せん。攝して退菩提心に在るべからず。彼は曾て未だ菩提心を發せざるが故に。寧ぞ説きて退菩提心と爲す可けんや。餘の三の攝に非ざること理在ること知る可し。又、趣寂性にも亦、佛の時に大乘を信する者有れば如何ぞ彼人に佛記を與へざらん。不定種性にも、亦佛の後に方に大乘を信する者有れば寧ぞ菩薩與記を説かざる可けんや。故に知んぬ、彼説未だ善と爲さざることと。已上法華論述。短翻の彼の如くんば彼義寂師義一師等應に文意を知らざるべし。亦應に文句雜亂すべしとせんや。噫、短翻者、公獨り文意を知りて唐の諸師は知らざる哉。既に彼三藏の解、及び禪坊義寂、並に義一法師等の法相宗の法將、二種の決定性は印度より東に相傳して大唐國に來り、大唐國より海外に相傳して日本に來る。短翻者起りて迷亂と爲す。短翻愚なるのみ。又、彼土廻心とは是れ有餘の廻心なり。無餘の後の廻心に非すと云ふは短翻の臆説なり。臆説無きが故に。「玄疏」に問ふ、「何を以て夕に製し朝に談する贊なるを知ることを得る。」答ふ、「更に他の文を引か

【三〇】短翻、楞伽及び瑜伽の五性差別に關して山家と論難往復せるもの破し重ねて破せり

す、即ち其贊の文を引く。故に其法華玄贊の第十卷の末に云はく、基、談遊の際を以て徒に博陵に次る。道俗虚に課して斯典を講ぜよと命ず。諸の古義を修むること能はずして遂に乃ち自ら新文を纂む。夕に製して朝に談じ講じ終んぬ。嗟く所は、學寡く識淺くして理偏に詞殫なり。經の義は深願にして拙く光讚を成ず。兢兢として聖教に依り、慄慄として玄宗を探る。猶恐らくは旨謬り言疎ならん。寧んぞ輒く枉げて援據と爲さんや。此經は途に當るの最要なり。人誰か幽文を贊せざらん。既に黙して爾も無爲なる能はず。聊か且く用ひて狂簡を申ぶ。識達の君子、幸に余が爲に詳略せよ焉」と。已上贊

短翻者、第六に法華の心腑を死す證文に云はく、「楞伽、瑜伽五性差別有り、是の如く一に非ず」と。已上短翻者引く所の文。法華宗、通じて曰はく、「此證理あらず。所以は何ん。楞伽が瑜伽の五性差別は障に依りて立つる所なり。定性の聲聞、不思議變易の死に墮することを許すが故に。暫時無性、畢竟無性同じく第五の性に攝するが故に。二、二性の勝を知るが故に位に約して種性を定むるが故に。緣生種性、自性無きが故に、廣く説くこと別の「五性法爾章」の如し」と。已上通

短翻者、更に對破して云はく、「彼第六に楞伽瑜伽の五性差別を通じて云はく、定性の聲聞、不思議變易の死に墮することを許すが故に。暫時と畢竟との無性同じく第五の性なるが故にと。汝が通惡し。楞伽の聲聞、定不定性に通じ而も不定性は變易の死を得、決定の二乘は變易の死を得ず。楞伽の第五の無性は是れ暫時の無性に於て畢竟の無性に非ず」と。已上短翻者、邪會の言に霜沍して云はく、「短翻者、五種

【入楞伽經】十卷  
 元龜菩提留支譯。  
 楞伽は師子國の山  
 の名、佛彼山に於  
 て此經を説き給ひ  
 しかば此名あり  
 【陰界入】五陰、  
 十八界、十二入。

性を噴くこと經文に依らば一向に楞伽の文を指示せよ。今、楞伽を案するに相似せず。謹  
 んで「入楞伽經」の第二を案するに云はく、「復次に大慧、我五種乘の證法を説く。何等をか  
 五と爲す。一には聲聞乘性の證法、二には辟支佛乘性の證法、三には如來乘性の證法、  
 四には不定乘性の證法、五には無性の證法なり。大慧、何者か聲聞乘性の證法なる。謂  
 く、陰界入の法を説くが故に、自相同相證智の法を説くが故に、彼身毛孔、懸悟欣悅して  
 樂うて相智を修し因縁を修せず。相を相離れざるが故に。大慧、是を聲聞乘性の證法と  
 名く。故に彼聲聞、又邪見の證智、塵煩惱を起すことを離るるも無明熏習の煩惱を離れず。  
 己身の證相を見て初地乃至五地六地同じく己が所證なりと謂ふ。不可思議變易の死に墮す  
 るが故に、而も是言を作す。「我生已に盡き梵行已に立し、所作已に辨じ後有を受けず」と是  
 の如き等、人無我乃至生心に入ることを得。以て涅槃を得と爲すが故に。大慧、復餘の外  
 道有り、涅槃を證することを求めて而も是言を作す。我人、衆生、壽命作者、受者丈夫を  
 覺知し以て涅槃と爲すと。大慧、復餘の外道有り、一切諸法因に依りて有なるを見て涅槃  
 の心を生ずるが故に。大慧、彼諸の外道には涅槃解脱無し。法無我を見ざるを以ての故  
 に。大慧、是を聲聞乘外道性の非離處に於て而も離想を生ずと名く。大慧、汝應に此邪  
 見を轉じて如實の行を行すべきが故に」と。文。已上經。「當に知るべし、定性の聲聞、變易の  
 死に墮すること。大慧、何者か辟支佛乘性の證法なる。謂く、緣覺の證法を演説する  
 を聞き、擧身毛竅も悲泣して涙を流す。憤悶を樂はざるが故に。諸の因縁法を觀察するが



【器世間】一切衆生の住する世界を謂ふ。

故に、諸の因縁法に著せざるが故に。自身の種種の神通、若は離合して種種に變化するを説くを聞きて其心隨ひて入るが故に。大慧是を緣覺乘性の證法と名く。汝應に知るべし。

緣覺に隨順して説くことを。大慧、何等か如來乘性の證法なる。大慧、如來乘性の證法に四種有り。何等をか四と爲す。一には證實法性、二には離實法證性、三には自身

内證聖性、四には外諸國土勝妙莊嚴證法性なり。大慧、若し此一の法を説くことを聞く時、但邪心を利し、外の身の所依、資生の器世間、不可思議境界を見て驚かず怖ぢず

畏れざる者、大慧、當に知るべし、是れ如來乘性を證するの人なることを。大慧、是を如來乘證法の人の相と名く。大慧、何者か不定乘性の證法なる。大慧、若し人此三種

の法を説くを聞き一一の中に於て樂ふ所の者有れば隨順して爲に説く。大慧、三乘を説くとは修行地を發起せんが爲の故なり。諸法の性差別を説くには究竟地に非ず。畢竟して能

く寂寂靜の地を建立せんと欲するが爲の故なり。大慧、彼三種の人は煩惱障の熏習を離れて清淨を得るが故に。法無我を見て三昧の樂行を得るが故に。聲聞緣覺畢竟して如

來の法身を證得するが故に。爾時に世尊、重ねて偈を説きて言はく、逆流の修無漏、往來及び不還、應供阿羅漢、是等心に亂惑あり。我三乘一乘及び非乘を説くに諸聖は實の如

く解せり。凡夫は第一義の法門を知ること能はず。二教を遠離し、三乘を建立し、寂靜の處に住せんが爲に諸禪及び無量、無色三摩提、無相定滅盡、亦皆心中に無し」と。已上經

『當に知るべし、聲聞緣覺畢竟して如來の法身を證得するが故なることを。大慧、何者か

無性乘なる。謂く、一闍提なり。大慧、一闍提とは涅槃の性無し。何を以ての故に。解脱の  
 中に於て信心を生ぜず。涅槃に入らざればなり。大慧、一闍提とは二種あり。何等をか二  
 と爲す。一には一切の善根を焚燒す、二には一切の衆生を憐愍して衆生界を盡すの願を作  
 すなり。大慧、如何が一切の善根を焚燒する。謂く、菩薩藏を誘りて是の如きの言を作す。  
 彼修多羅、毗尼解脫の説に隨順するに非ず。諸の善根を捨つ。是故に涅槃を得ず。大慧、  
 衆生を憐愍して衆生界を盡すの願を作すとは是を菩薩と爲す。大慧、菩薩方便して願を作  
 す。若し諸の衆生、涅槃に入らずんば我も亦涅槃に入らじと。是故に菩薩摩訶薩、涅槃に  
 入らず。大慧、是を二種の一闍提、無涅槃性と名く。是義を以ての故に決定して一闍提の  
 行を取るなり。大慧菩薩、佛に白して言さく、世尊此二種の一闍提、何等の一闍提か常に  
 涅槃に入らざる。佛、大慧に告げたまはく、菩薩摩訶薩の一闍提は常に涅槃に入らず。何  
 を以ての故に。能善く一切の諸法は本來涅槃なりと知るを以て、是故に涅槃に入らず。是  
 故に一切の善根を捨つる闍提に非ず。何を以ての故に。大慧、彼一切の善根を捨つる闍提  
 は若し諸佛、善知識等に値へば菩提心を發し諸の善根を生じて便ち涅槃を證す。何を以て  
 の故に。大慧、諸佛如來は一切の諸衆生を捨てざるが故に、是故に大慧、菩薩の一闍提は  
 常に涅槃に入らずと。已上經 當に知るべし、二種の闍提、一人は發心して便ち涅槃を證し、  
 一人の菩薩は本來涅槃なることを。明かに知んぬ楞伽經に依るに成佛せざるは無し。若  
 し此經に依りて造る所の諸論、何ぞ成不を立てん。但し位障に約して成不成を立てべし。

【阿頼耶識】 アー  
ラヤ (Ālaya) 八識  
中の第八。有情根  
本の眞識。之に眞  
妄兩面の説有り。

【補特伽羅】 プド  
カラ (Pudgala) 人  
又は衆生と譯す。  
五趣を取つて輪廻  
するを云ふ。

短嗣者、經文を案せず、定性の證を引く。豈所引皆、本の義を證助することを成せんや。又、瑜伽論の第五十二に云はく、「復次に我當に略して安立種子を説くべし。云何が略して安立種子を説く。謂く、阿頼耶識の中に於て一切諸法遍く自性を計する妄執の習氣、是を安立種子と名く。然るに此習氣は是れ實物有なり。是れ世俗有なり、彼諸法に望めて異不異の相を定説す可からざること猶眞如の如し。即ち此を亦、遍行麁重と名く。問ふ、若し此習氣、一切の種子を攝するを復遍行麁重と名けば、諸の出世間の法は何の種子より生ずる。若し麁重自性の種子、種子と爲りて生ずと言はば、種子の生道理に應ぜず。答ふ、諸の出世間の法は眞如所法緣縁の種子より生ず。彼習氣積集の種子の所生に非ず。問ふ、若し習氣積集の種子の所生に非ずんば何の因縁の故に三種の涅槃法種性の補特伽羅を建立し不般涅槃法種性の補特伽羅を建立するや。所以は何ん。一切皆、眞如所緣縁有るが故に。答ふ、有障無障の差別に由るが故に。已上論當に知るべし、出世間の法は眞如所緣縁の種子より生じて彼法爾の有爲無漏の種子の所生に非ざることを。障無障の差別有るに由りて其三乘種性、無涅槃性を建立するなり。短嗣者云はく、「此論の問答は是れ互に影顯して無爲の種を説く。何となれば、問の意は眞如の所緣縁は一切の有情に平等に皆有り。而も本有無漏の種子は有無差別なることを顯し、答の意は眞如所緣縁は一切有情共に有るも唯本有無漏の種子は是れ無性には無く、此種子の有無に由りて而も有障無障、性に差別有ることを顯す。若し爾らずんば論に應に問うて云ふべし。所以は何ん。一切皆、眞如所緣

【彌勒】マイトレーヤ(Maitreya)佛位を繼ぐ補處の菩薩にして、五十六億七千萬歳を經て人間界に下生し、龍華三會に於て衆生を度す。

縁の種子有るが故にと。既に論に唯、眞如所縁縁の故にと云ひ而も眞如所縁縁の種子と云はす一也。已上短翻者語。此説爾らず。彌勒の明文を屈して糝家の僞會に歸するが故なり。其彌勒の明文に云はく、「諸の出世間の法は眞如所縁縁の種子より生ず」と。已上論短翻者、此誠文を見ると雖も可と不可との斷を執し初文種子の文を隠して後の文の略を執す。若し後文の中に種子無きに依るが故に所縁の種に非ずと言はば、短翻、其初の文の中に種子有るが故に眞如所縁の種と爲すことを信す可し。若し眞如所縁縁は一切の有情、平等に皆有り。唯、能縁智の種は有性は有り、無性は無しと言はば、今難じて言はく、能縁の智種應に平等に有るべし。其れ所縁縁、平等に有るが故に、若し其れ所縁縁は平等に有りと雖も然も能縁の種は有無差別なりと言はば、能所相應せざるが故に若し能縁の智無くんば何ぞ所縁縁と名けん。能縁所縁、一切の有情各具す可きが故に若し無性有情、能縁の智無しとは其れ無性の人の有する所の所縁は應に所縁ならざるべし。能縁の智無きが故に。若し所縁と名けずと言はば更に應に其れ所縁縁は平等に皆有りと云ふべからず。既に眞如所縁縁は平等に一切皆有りと云ふが故に、明かに知んぬ。能縁の智種も必ず應に皆有るべきが故に、短翻者、後の文の中に眞如所縁縁の種子と云はざるを以て山家の種子の義を許さずんば我亦初の文の中に能縁智の種子を云はざるを以て短翻の無漏種を許さず。短翻者又云はく、「論」に云はく、「次の文に云はく、若し眞如の所縁縁に通達する中に於て畢竟障種子有る者を建立して不般涅槃法種性の補特伽羅等と爲す。」解して云はく、通達とは能縁の眞

【護法菩薩】ダル

マハバーラ(Dharma)

年に南印度に生れ

世親の唯識論三十

頌の解釋を造り其

正宗を弘通す【世

第一法】四加

行位の第四、有漏

智の極果。世俗法

中の第一。【等無

間緣】四緣

の

【四緣】因緣、等

無間緣、所緣緣、

增上緣、心法は所

緣に由つて生じ二

無心定は所緣緣以

外によりて生じ一

如、無漏の正智なり。是れ能通達なり。眞如所緣緣とは是れ所通達なり。畢竟障種とは是れ所治の障なり。通達とは是れ能治なり。眞如所緣緣とは所治の障、能治の智の二の與に依止する所の境と爲る。若し眞如所緣緣と種子と別なりと云はずんば、應に論に但、若し眞如所緣緣中に於てと云ふべし。何ぞ更に通達を加ふべけん。護法菩薩此文意を取り本有無漏の種子を以て因緣と爲し、解脫分を増上緣と爲し、世第一法を等無間緣と爲し、眞如を所緣緣と爲す。故に初地出世間の法生ずることを得るは後の緣に従ひて説く。故に諸の出世間の法は眞如の所緣緣より生ずと云ふは、已上短翻此語爾らず。短翻の義に違ふが故に。夫れ通達とは是れ智、眞如所緣緣とは是れ境なり。其中の字は通達の中なり。所緣の中には非ず。明かに知んぬ、能通達の智の中に畢竟障の種有るを立てて不般涅槃法と爲す。其不般法の人能通達の智有り。當に知るべし、能緣所緣一切皆有り。但障の種子に由りて性の差別有るが故に。能通達の智とは是れ所障なり。畢竟障種子とは是れ能障なり。是能障に依りて性の差別を立つ。智障の種に依らず。短翻者、何に由りてか彌勒の正説に歸せず、還りて證無き糝家の釋を執する。短翻者、畢竟障の種子とは是れ所治障と云ふ。明かに知んぬ、能治の智障、所緣緣に隨ひて一切皆有り。所緣緣は一切に有るが故に必ず所治なる可し。又、天竺の論師、四緣の不同を立て、或師は本有無漏の種子を許さず、故に『瑜伽の記』の第十三に云はく、『備景法師の云はく、若し勝軍に依れば本有無漏の種子の象を立てず。此文を消釋するに二有り。一に解すらく諸佛菩薩、眞如を證するに由

【瑜伽の記】 瑜伽論記二十四卷、瑜伽倫撰。

【見道】 三道の一切て無漏智を生じ眞諦の理を照見する位。

【順解脱】 聲聞乘の三賢位。

【順決擇分】 標頂忍世第一の四殊勝善根を云ふ。

展轉して「十一部經」を流出す。流行すること、見道已前の順解脱、順決擇分に在り。彼教を緣じて所緣縁と作して生ず。本に従ひて名と爲し眞如の所緣縁より生ずと名く。二に解すらく、初地出世の聖道は、第一法は順決擇分の善を増上縁、等無間縁と爲して生ず。二は眞如所緣縁より生ずと。若し護月、護法の文句を消するに依れば亦二の釋有り。一に云はく、本有無漏の種子を増上縁と爲し眞如を所緣縁と爲すが故に順解脱分等の善根生ずることを得と。二に云はく、本有無漏の種子を以て因縁と爲し、解脱分等を増上縁と爲し、世第一法を等無間縁と爲し、眞如を所緣縁と爲すが故に初地出世間の法生ずることを得と。後の縁に従ひて説く、故に諸の出世間の法は眞如所緣縁より生ずと云ふと。已上論短翻者景法師四釋の中、第四の釋を盜みて護法菩薩と稱す。豈後學此偽に迷はざらん哉。短翻者又云はく、「阿頼耶識の中、有漏の種子は羸顯にして易ければ凡聖共許す。唯無漏種は細隱にして知り難し。阿頼耶識尙凡聖共許せず、況んや彼識の中の本有無漏の種子誰か信解することを得ん。故に本論の主先づ羸顯の有漏種子の羸重なるを擧げ發端に往覆問答し數遍徵迹して方に本有無漏の種子を顯す。眞如の所緣縁を顯さんと欲するに非ず」と。已上短翻此說爾らず。句の中前後相違するが故に、短翻の初の句に阿頼耶識の中の有漏の種子は羸顯にして易ければ凡聖共許すと云ひ、後の句に、阿頼耶識尙凡聖共許せずと云ふ。既に能藏の頼耶すら凡聖共許せずと言ふ、何ぞ所藏の有漏の種子、凡聖共許せんや。短翻者、共許不共許前後相違すれば解と爲すに足らず。又、短翻、論意を取りて云はく、

「故に本論の主先づ麤顯の有漏の麤重を擧げ、發端に往覆問答に緣りて數遍徴して方に後に本有無漏の種子を顯す。眞如所緣縁を顯さんと欲するには非ずとは此說爾らず。論の文意は初の四行一十一字は通行麤重の種子を擧げ次の二行一十一字に諸の出世間の法は何の種子より生ずと問ふは、前の麤重の種子を遮するなり。次の一行八字に、諸の出世間の法は眞如所緣縁の種子より生ず、彼習氣積集の種子の所生に非ずと答ふ。其論文を案するに、此より以後智種を説かず。次に三行九字あり。所緣縁皆有り、何ぞ性を立つること差別せるやと問ひ、次に十行二字あり。有障無障の差別に由るが故にと答ふ。短翻先に麤顯を擧げ後に本有無漏の種子を顯すと云ふは、短翻未だ義を了せず。其本論の中に文義無きが故に。短翻の義の若きは先に麤顯を擧げて後に麤顯を顯すなり。夫れ彌勒の大意は三乘を説くと雖も細種を隠さず、是故に自問又自答して眞如の種子を顯す。短翻者、「瑜伽」の文を會して云はく、「障に依りて種性の別を建立すとは無漏の種子の有無を顯す。若し全く無漏の種無しと謂はば彼二障の種、永く害す可からず。則ち彼を立てて非涅槃の法と爲す。若し唯二乘の無漏種有らば彼所知障の種永く害す可からず。一分をば立てて聲聞種性と爲し、一分をば立てて獨覺種性と爲す。若し亦、佛の無漏種有らば彼二障の種俱に害す可し。即ち彼を立てて如來種性と爲す、故に無漏の種子の有無に由りて障に可斷、不可斷の義有り」と。已上短翻問ふ、「短翻者、永く二障の種を害す可からずとは當に欲界の煩惱なるべしと爲んや。當に上界の煩惱なるべしと爲んや。若し欲界にして亦此障有りと言はば汝が立つ

非涅槃法の補特伽羅は應に上の色無色界に生ずること能はざるべし。彼二障の種永く害す可からざるが故に、能害の智種法爾として無きが故に、若し種字を害せずと雖も但現行を伏して上二界に生ずと言はば現行の煩惱、斷害無しと雖も然も伏害有るが故に、能害通達の智智應に不般の人に有るべし。若し通達の智、不般涅槃法の者に有らずと言はば能治の者無くして煩惱を伏害す、道理に應ぜざるが故に短翻者又云はく、「若し唯二乗の無漏種有りとは、彼二乗の種、何を用ひて性と爲さん。若し人無我の解を用ひて性と爲すと云はば一切の如來、人無我の智有りと爲んや。當に人無我の智無かるべしと爲んや。若し一切の如來、人無我の智有りと云はば應に『佛地論』所立の五性の中の第三の如來性無かるべし。一切の如來は皆、人無我の智有るが故に。喻へば不定性の如し。若し爾なりと許さば應に四種性を立つべし。若し一切の如來、二乗の人無我の解無しと言はば、一切の如來は應に一切智に非ざるべし。若し二乗性の人無我の解は如來性の人無我の解に別なり、故に此過無しと言はば『攝論』の『無我等の故』に相違す。問ふ、「如來性の人無我の解は二乗性の人無我の解に別なりとは、如來性の中の人執の煩惱、二乗性の人執の煩惱に別なりと爲ん耶。若し別なりと言はば本性不定性の人、無學果を得と雖も應に受生すること有るべし。未だ如來性の中の人執の煩惱を斷ぜざるが故に、喻へば地前の菩薩の如し。又、不定性の人眞に成佛すと雖も然も應に二乗性の中の一の一切の煩惱を具すべし。人執の煩惱、三乘各別なりと許すが故に。若し菩薩性の中の智慧、而も能く二乗性の人執の煩惱を斷ずと言はば、



菩薩性の中の人無我の智は即ち是れ應に二乗性の人無我の智なるべし。若し爾なりと許さば「佛地論」に立つる所の五種性の中の第四の不定種性は如來性に異らざるが故に應に不定と名けざるべく應に如來性と名くべし。若し二を不定性と名くと言はば、五性の別立つべからざるが故に。若し二を如來性と名くと言はば、亦五性の別立つべからざるが故に。若し如來性は獨り如來の智種有りて二乗の智種有らず。是故に別に一性を立つ。不定性は具に三乗の種有り。故に別に一性を立つと言はば、不定性の成佛唯一切智を具し、如來性の成佛は應に一切智を闕くべし。二乗の智種無しと許すが故に。佛法の道理豈に爾る可けん哉。明かに知んぬ、「佛地論」に立つる所の五性は法華の前、未だ眞實を顯さざる不了義の説、一分の機に向ふ隨他意の説なり。是故に相違せず。彼「佛地論」の五種性の中、第五に出世功德の種性有ること無しとは、玄辨三藏西天に在るの口、略去して師に白して呵せらるるの文なり。謹んで倫法師の「楞伽論記」の第十三を案ずるに云はく、「三藏の云はく、「八卷楞伽」の第一卷に五種性を辨す。三乗の定性を前の二人と爲し、四には不定性、五には一闍提なり。一闍提に二有り。一には菩薩の闍提、畢竟じて成佛の義無し。二には斷善の闍提、若し勝縁に遇へば必ず成佛することを得。余西方に在りし時、已に「楞伽」の梵本を看るに本文亦同じ。西方の大徳此義を評して云はく、「楞伽」は第五の無情有情を説かず。但有佛種の中の二種の闍提を説く。一は是れ斷善根、縁に遇ひ還りて續き究竟して作佛す。二は是れ菩薩大悲、純ら衆生の爲の故に正覺を取らず。此希奇を顯す。故に偏別して説く。

【大集經】大方等  
高麗藏本諸師の譯  
を收め一部六十卷  
とす。

【大莊嚴論】大莊嚴  
論經十五卷馬鳴造  
秦羅什譯。

【戒啓】天竺摩竭  
陀國那欄陀寺の僧  
の師。

即ち「大集經」に云はく「菩薩發心し、誓ひて衆生を度す。衆生未だ盡きざれば我作佛せず。衆生若し盡くれば我用方に息み須く涅槃に入るべし」と。又「智論」に「諸の菩薩有り、因圓満して正覺を取らず、文殊等の如し」と。「大莊嚴論」の第二卷に云はく「無佛性の人と云ふは、謂く、常無性の人なり」と。欲來の時諸の大徳無性の人を論じて云はく、「若し本國に至らば必ず信を生ぜざらん、願くば所將の論の中に於て無佛性の語を略去せん。」戒賢呵して云はく「彌離車人諸邊夷の所の解、何物か而も輒く彼指と爲すと。」文。當に知るべし、第五の無性有情は都て依經無し。略去の願豈に西評に依らざらんや。戒賢は唯、明かなる證據無きを呵す。一乘の學生、努勞之を許すこと莫れ。短翻者又云はく、「餘經の中に一切の有情の類皆當に作佛すべしと宣説すと雖も、然も眞如法身佛性に就き、或は少分の一切有情に就き皆方便して説く。不定種性の有情をして決定して速かに無上正等菩提の果に趣かしめんが爲の故に」と。已上短翻者佛地まき當に知るべし、不定種性の爲に説く所の餘經なるが故に、法華の前に説く所の經なることを。法華の所被は前に小乘を修習し學する者を除くが故に、敗種迦柢、入位の二乘なるが故に、小分の一切を方便して説くとは、法華の前の所説の經なるが故に、亦相違せず。法華の前の經には一乘の法は一道より生死を出す。眞如佛性等と説くと雖も未だ敗種の人、不般涅槃の人當に佛道を成すべくと説くと雖も是の如く推徴するに楞伽の五性は皆共に佛道を成す、但し未だ法華に至らず、入位の定性を存するなり。明かに知んぬ、不種子の五性、瑜伽の五性は障の有無に由りて立つ。然りと雖

【九】短翻、楞伽  
經によりて定性を  
立て同じく難破せ  
らる。

も不定種性を立てずんば但四種の性有り。三乘に不般を加ふ。眞如所縁縁の種を説くと雖も而も三乘の義を述ぶ。故に二乗の永滅を存して不般涅槃を立つ。「佛地論」は數楞伽を影にし義は瑜伽を取る。是故に多説を待たず。上來の六證、短翻六破あり。法華の一乘に望むに専ら如來の説に違ふ。廣く破すること別章の如し。

短翻者、法華の心腑を死す比量に云はく、「二乗の果は應に定性有るべし。小乗の所被なるが故に大乘者の如し」と。已上短翻者立す所量。法華宗、過を顯し破して云はく、「宗に自教相違の過失有り。楞伽の五性の中、第一定性の人は變易の生死に墮す。第二緣覺の人は彼經に結して「聲聞緣覺畢竟して如來の法身を證得するが故にと云ふ。短翻者、楞伽の五性差別を指示するが故に遂に此失を免れず。」

短翻者、更に對破して云はく、「彼經の第七に決定の二乗の比量を通じて自教相違有りと云ふ。「楞伽」の第一の聲聞乘の定性の文なりと。此通愚癡なり。何を以ての故に。他宗の義を成じて自の義を害するが故に。楞伽の五性の中、四性は決定性なり。一は不定性なり。今我四の定性に依りて此比量を云ふが故に、汝に於て自害と爲り能く我宗を成ず」と。已上短翻者語。法華宗、似能立の邪苗に霜雹して云はく、「短翻者、楞伽の五性の中、四性は決定なりと云ふは是れ大乘の語なり。何を以ての故に。文無く義無きが故に。文無しとは三乘證法の中に決定の文無きが故に。又、無性の證法に決定の文無きが故に。義無しとは、短翻者の義、定性の聲聞は變易の死に墮せず。若し爾らば汝が第一の決定性

の聲聞は已に變易の死に墮す。豈短翻が宗を成ぜん哉。短翻又云はく、「定性の緣覺は如來の身を得ず」と。若し爾らば汝が第二の決定緣覺は當に如來の身を得べし。豈短翻の義を成ぜん哉。又、短翻者立つる所の畢竟無涅槃は永く佛性無きの人なり。今楞伽の第五に有佛性闍提と云ふ。若し爾らば汝が第五の決定無性は經に依るに佛性有り。若し佛の經に依らざんば汝が第五の定性成じて證と爲すが故に、楞伽に依りて立つる所の二乘の比量自教に違くの失至極して免れ難し。何ぞ況んや楞伽に依りて造る所の二論伽顯揚對法佛地は一身の十支にして皆悉く經に順するをや。其義知る可し。五種性の具る文楞伽經の外一處として列文無し。又六證の中、五性差別は餘經を指さず。若し餘經有らば短翻の智及ばざるの失有り。短翻者、偏に愚癡の詞を習ひ愚癡を示す。短翻が似能破、還つて負處に墮するの失あり。

佛說經名示義勝二

【四】法華は歷劫を説かず、大直道に他家に勝ることを明す。

【法相宗】又は唯識宗とも云ひ、解深密經を所依とす。玄奘之を支那に傳へ、慈恩之を大成し、本朝には道昭等之を傳ふ。

謹んで「無量義經」を案するに云はく、「次に方等の十二部經、摩訶般若、華嚴海空」を説きて菩薩の歷劫修行を宣説す」と。已上經は、大唐の傳に云はく、「方等十二部經とは法相宗所依の經なり。摩訶般若とは三論宗所依の經なり。華嚴海空とは即ち華嚴宗所依の經なり。俱に歷劫の行を説きて未だ大直道を知らず。其れ大直道とは是れ果分なるが故に。是故に無量義經に云はく、善男子、是れ則ち諸佛不可思議甚深の境界なり。二乗の

【阿僧祇劫】無數の年壽のこと。

知る所に非ず。亦十地菩薩の及ぶ所に非ず。唯、佛と佛とのみ乃ち能く究了したまふ」と、已上經當に知るべし、果分の經に十七の名を具することを、『無量義經』とは、『法華』の序分の第三の如來欲說法時至成就なり。故に未合の義邊に約して隨他意と名くと雖も能生の一法は無相の理智にして『法華經』に同じ。故に『法華』の十七名の初は『無量義』の名なり。夫れ歷劫修行は果分の行に不ず、是れ因分の行なり。未だ方便を捨てず、故に名けて險徑と爲す。是故に『十功德品』に云はく、『若し衆生有りて是經を聞くことを得ば則ち大利と爲す。所以は何ん。若し能く修行すれば必ず疾く無上菩提を成ずることを得。其れ衆生有りて聞くことを得ざる者は當に知るべし、是等を大利を失すと爲す。無量無邊不可思議の阿僧祇劫を過ぐるも終に無上菩提を成ずることを得ず。所以は何ん。菩提の大直道を知らざるが故に、險徑を行きて留難多きが故に』と。已上經當に知るべし。歷劫修行頓悟の菩薩は終に無上菩提を成ずることを得ざることを。未だ菩提の大直道を知らざるが故に終不言、大小俱に有り。直道直至は已顯の口に興。是故に法華經宗は諸宗の中の最勝なり。法相の贊、三論の疏は法華に順ぜず。具に別に説くが如し。

無問自說果分勝三

【二】法華は無問自說の果分の經なることを闡明し、法相三論等を批判す。

謹んで『法華經』の方便品を案ずるに云はく、『爾時に世尊、三昧より安詳として起ちて舍利弗に告げたまはく、諸佛の智慧は甚深無量なり。共智慧の門は解し難く入り難し。一

切さいの聲聞しやうもん、辟支佛びやくしぶつの知しること能あたはざる所ところなり」と。已上經いじやうきやう又、偈げに云いはく、「不退ふたひの諸菩薩しよぼさつ、共數恆沙きうすうじやうさの如ごとし。一心いっしんに共に思求しじゆすれども亦復また知ること能あたはず」と。已上偈いじやうげ又、經きやうに云いはく、「佛ぶつの成就じやうじゆしたまふ所ところは第一だいいち希有きゆうゆう難解なんげの法ほふなり。唯佛ただぶつと佛ぶつとのみ乃すなはち能あたく究盡きうじんしたまふ」と。已上經いじやうきやう是こゝの如ごとき等の文ぶんは果分くわふんの法ほふを示しす。又、舍利弗せりふの偈げに云いはく、「慧日えにち大聖尊だいせいそん、久ひさしうして乃すなはち是法こゝのほふを説ときたまふ。自ら是こゝの如ごとき力りき無畏むゐ三昧さんまい、禪定ぜんぢやう解脱げつたつ等の不ふ可か思議しぎの法ほふを得えたまへることを説ときたまふ。道場だうぢやう所得じゆじやくの法ほふは能あたく問もんを發はつする者もの無なし。我意わがい測そくる可べきこと難たがく亦また能あたく問もんふ者もの無なし。無問むもんにして而しかも自ら説ときて所行じゆじやうの道だうを稱歎じやうたんす。智華ちけ甚じんだ微妙みせうにして諸佛しよぶつの得える所ところなり」と。已上偈いじやうげ明あきらかに知しぬ、果分くわふんの一乘いちじやうは無問むもんにして自ら説とくことを。又、經きやうに云いはく、「諸佛しよぶつ世尊せそんは唯一ただいっ大事だいじ因緣いんげんを以もつての故ゆゑに世よに出現いっげんす」と。已上經いじやうきやう當あたに知しるべし、一乘いちじやうの爲ための故ゆゑに世よに出現いっげんす、三乘さんじやうの爲ために世よに出現いっげんせざることを。果分くわふんの一乘いちじやう、遍あまく衆生じゆじやうに施せす、寧なんぞ門外もんがいに車くるまを索もとめ門かどの側わきに住すせん哉や。父ちちを知しり、家いへを知しり、車くるまを知しり、道だうを知しる。豈いか歴劫れきけつの路みちに入りて迂迴うゑゐの道だうを過すぎん哉や。是故こゝに、「譬喻品ひやくうひん」に云いはく、「今いまの所應じよ作さくは唯佛ただぶつの智慧ちゐなり」と。已上偈いじやうげ菩薩ぼさつの智慧ちゐは所應じよ作さくならず。是故こゝに又また云いはく、「若しし善男ぜんなん子こ善女人ぜんにん、我滅度わがめつたうの後のち能あたく竊ひそかに一人ひとりの爲ためにも「法華經ほふけきやう」の乃至なほ一句いっくを説とかん。當あたに知しるべし、是人こゝは則すなはち如來にらいの使つかなり。如來にらいに遣つかはされて如來にらいの事ことを行いするなり」と。已上經いじやうきやう明あきらかに知しぬ、「法華經ほふけきやう」を説とくの人ひとは則すなはち是れ如來にらいの使つか、則すなはち如來にらいの事ことを行いすることを。又、經きやうに云いはく、「善男子ぜんなんし、善女人ぜんにんし、如來にらいの室むろに入り如來にらいの衣えを著きし如來にらいの座ざに坐まして爾すなはち乃すなはち四衆しじゆの

【神力品】 妙法蓮華經如來神力品第二十一。

【三十唯識論】 唯識三十論頌一卷、唯世親造、唐玄奘譯成唯識論の本頌。【大乘の基】 慈恩大師窺基のこと。【成唯識論】 十卷唐の玄奘合糅して十卷と爲す。瑜伽一宗の精要なり。

法華秀句

爲に廣く斯經を説くべし」と。已上經明かに知んぬ、「法華經」を説くの人は果分の室に入り果分の衣を著し、果分の座に坐して應に四衆の爲に果分の法を説くべきことを。又「神力品」に云はく、「要を以て之を言へば、如來一切の所有の法、如來一切の自在の神力、如來一切の祕要の藏、如來一切の甚深の事、皆此經に於て宣示顯説す」と。已上經明かに知んぬ、果分の一切の所有の法、果分の一切の自在の神力、果分の一切の祕要の藏、果分の一切の甚深の事、皆「法華」に於て宣示顯説することを。夫れ「華嚴經」は前後翻譯合して三本有り。初は六十卷、次の本は八十卷、後の本は四十卷なり。重譯の經、同本異譯にして但住土地上の因分を説きて未だ如來内證の果分を説かず。是故に天親の「十地論」に云はく、「因分可説、果分不可説とは即ち其事なり。當に知るべし、果分は因分に勝ることを。夫れ「三十唯識論」の一卷二紙は天親の本頌なり。「華嚴經」の經に依りて唯識の義を立つ。天竺の十論師、各其釋論を造る。乃ち玄奘三藏、其梵本を賈らし來る。十論師の釋論各別釋せしむ。是に於て三藏の門人大乗の基、數朝に諮りて曰はく、「三藏前に十師の論に別譯することを停止す。同譯の三人譯處を去る。獨り法を糅へ義旨を正し名けて「成唯識論」と曰ふ。十卷ありと。遂に十師の義を隠して唯識論の旨を傳ふ。其十卷の本は天竺に無き所なり。故に基公即ち曰はく、「復本五天より出づと雖も然れども彼に茲釋無し。眞爾に十師の別作なり。鳩集猶難し、況んや更に此幽文を攬すること誠に未だ有らずと爲す。斯れ乃ち此論の因起なり」と。已上基當に知るべし。五天無問の獨様の論は五天有本の重譯の經に

【最勝子菩薩】 瓊伽師地論釋を造りし菩薩。

【龍猛菩薩】 龍樹菩薩の異名。

【極喜地】 菩薩第一阿僧祇劫の行を経て始めて眞無漏の智を發して法身の菩薩となる。此位は極めて歡喜を生ずる位なるを以て極喜地と云ふ。

【三】 過去諸佛、未來諸佛、現在諸佛に各方便先三、眞實後一の教在るに隨順して第五釋迦佛又先三、後一の教あり。その究竟後一を説き明せるもの法華經なることを論ず。

如かざることを、「法華」を譯するの三藏は舌を燒かざるの驗有り。釋論を釋するの贊師は未だ其靈驗を聞かず。千佛が一佛の所釋の諸義何ぞ闕減するの失有らんや。専ら其本を譯せず、更に釋釋の詞を加ふ。是故に妙法華宗に對比するに足らず。夫れ、「中」「百」「十二門」の七卷の論は龍樹、提婆二菩薩の所造なり。佛滅度の後、有の見を破せんが爲に空の義を採集す。是故に最勝子菩薩の論に云はく、「佛涅槃の後、魔事紛れ起り部執競ひ興り、多く有見に著せり。龍猛菩薩、極喜地を證し大乘無相の空教を採集し「中論」等を造り、眞要を究暢して彼有見を除く。聖提婆等の諸の大論師、「百論」等を造りて大の義を弘開す。是に由りて衆生復空見に著す」と。已上論。明かに知んぬ、但因分の空、歷劫の修行を説きて未だ果分の空、大直道を説かざることを。誠に願くば一乘の君子、佛説に依憑して口傳を信ずること莫れ。誠文を仰信して偽會を信ずること勿れ。天台所釋の法華經宗は諸宗に勝る。寧ぞ所傳を空くせん哉。

五佛道同歸一勝四

謹んで「法華經」の第一を案するに云はく、「舍利弗、諸佛は宜きに隨ひて法を説く。意趣解し難し。所以は何ん。我無數の方便、種種の因縁、譬喩の言辭を以て諸法を演説す」と。已上經。當に知るべし、十方の諸佛先に方便を以て三乘の法を説く。是れ即ち初の諸佛道同の先三の文なり。未だ究竟せず、故に眞實の説ならず。法華の前の所立の宗是に準じて之



を知る可し。又云はく、「是法は思惟分別の能く解する所に非ず。唯諸佛のみ有りて乃ち能く之を知しめす。所以は何ん。諸佛世尊は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現す。舍利弗、如何なるをか諸佛世尊は唯一大事因縁を以ての故に世に出現すと名くる。諸佛世尊は衆生をして佛知見を聞き清淨なることを得しめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生に佛知見を示さんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見を悟らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。衆生をして佛知見の道に入らしめんと欲するが故に世に出現したまふ。舍利弗、是を諸佛は唯一大事の因縁を以ての故に世に出現したまふと爲す。佛、舍利弗に告げたまはく、諸佛如來は但菩薩を教化したまへり。諸有の所作は常に一事の爲なり。唯佛の知見を以て衆生に示悟す。舍利弗、如來は但一佛乘を以ての故に衆生の爲に法を説く。餘乘の若は二若は三有ること無し。舍利弗、一切十方の諸佛の法も亦是の如し」と。文。當に知るべし、十方の諸佛の法久しうして後、故に眞實の一乘を説く。是れ則ち初の十方諸佛道同の後一の文なり。已に究竟するが故に是れ眞實の説なり。「法華」を宗とする天台の旨此に準じて知る可し。又云はく、「舍利弗、過去の諸佛は無量無數の方便、種種の因縁、譬喩の言辭を以て而も衆生の爲に諸法を演説したまふ」と。文。當に知るべし、過去の諸佛先に方便を以て三乘の法を説く、是れ則ち第二の過去の諸佛道同の先三の文なり。未だ究竟せざるが故に眞實の説に不ず。法華の前の所立の宗此に準じて知ることを得。又云はく、「是法は皆一佛乘の爲の故なり。是諸の衆生、諸佛に従ひて

【一切種智】總相別相化道斷惑一切種の法に通達する佛智を言ふ。之れ二智の中の一なり

法を聞き、究竟して皆一切種智を得」と。已上經。當に知るべし、過去の諸佛の歸一眞實の説なることを。是れ則ち第三の過去の諸佛道同の後一の文なり。已に究竟するが故に是れ眞實の説なり。後一を宗とする天台の趣き此に準じて知る可きのみ。又云はく、「舍利弗、未來の諸佛の當に世に出でたまふべきも、亦無量無數の方便、種種の因縁、譬喩の言辭を以て而も衆生の爲に諸法を演説したまふ。」已上經。當に知るべし、未來の諸佛、彌勒、無著等、先に方便を以て三乘の法を説く。法相所傳の三乘等の宗は未來の爲に一旦に於て三乘を説く。是れ則ち第三の未來の諸佛道同の先三の文なり。未だ究竟せざるが故に眞實の説に不ず。華嚴、三論の二宗の所傳、此に準じて知る可し。又云はく、「是法は皆一佛乘の爲の故に、是諸の衆生、佛に従ひて法を聞き究竟して皆一切種智を得」と。已上經。當に知るべし、未來の諸佛、彌勒、無著等の歸一の眞實の説なることを。是れ則ち第三の未來の諸佛道同の後一の文なり。已に究竟するが故に、成道時を待ち久うして後眞説す。未だ説時に至らざるが故に法華の一を述べず。又云はく、「舍利弗、現在十方の無量無數の百千萬億の佛土の中の諸佛世尊、饒益する所多く衆生を安樂にしたまへり。是諸佛も亦、無量無數の方便、種種の因縁、譬喩の言辭を以て而も衆生の爲に諸法を演説したまふ」と。已上經。當に知るべし、現在の諸佛先に方便を以て三乘の教を説く。是れ則ち第四の現在の諸佛道同の先三の文なることを。未だ究竟せざるが故に眞實の説に不ず。此に準じて知る可し。佛滅度後の六七百年の經宗論宗、九百年中の法相の一宗は歷劫の行を説きて衆生を引攝す。是故に未





【湛然】支那天台六祖荆溪大師を指す。唐代の高僧。【嘉祥の大徳】隋の會稽の嘉祥寺の吉藏、之れ三論宗の祖なり。【高僧傳】唐の道宣撰、續高僧傳三十卷。

の一邊を指す。餘部の隨他意に同じからず。代を語れば則ち像の終り末の初なり。地を尋ぬれば唐の東羯の西なり。人を原ぬれば則ち五濁の生、闍諍の時なり。『經』に「猶怨嫉多し、況んや滅度の後をや」と云ふ。此言良に所以有り。又「安樂行品」に云はく、「文殊師利、是『法華經』は無量の國の中に於て、乃至名字すら聞くことを得べからず。何に況んや見ることを得、受持し讀誦せんをや」と。已上經當に知るべし、天台所釋の法華宗は名字すら聞き難し。何に況んや讀誦せんをや。他宗には此數無し。何ぞ法華に歸せざらんや。有人問うて曰はく、「法相宗の人、『法華』の贊を造りて盛に『法華』を弘む。其疏記等數百卷なり。又、三論宗の人、『法華』の疏を造りて盛に『法華』を講ず。今、天台法華宗何の異釋有りて二宗に勝るる耶。」答ふ、「若し異釋を論せば、玄疏籤記四十卷あり。今一隅を指して三方を知らしめん。法相宗の人は「成唯識」を以て尊主と爲し、法華の義を屈して唯識に歸せしむ。『法華經』を贊すと雖も還つて法華の心を死す。故に湛然の「記」に云はく、「唯識の滅種は其心を死す」と。當に知るべし、其義懸に別なり。又、三論宗の人は「法華」の疏を造ると雖も其義未だ究竟せず。是故に嘉祥の大徳、稱心に歸伏せり。『高僧傳』の第十九を案するに云はく、「灌頂、晩に稱心精舍に出でて法華を開演す。即ち跨へ以て基を籠め、雲印に超えたり。方集奔隨し篋を負ひて書誦す。吉藏法師と云ふ有り。興皇の入室なり、嘉祥に肆を結び獨り浙東に擅にせり。稱心の道勝れたるを聞き意に之を未だ許さず。義記」を求め借り尋ねて淺深を聞し乃ち體解心醉の所從有るを知る。因て講を廢し衆を散じて

【警中の珠】法華  
七喻の一、安樂行  
品に品づ。既に分  
段の生死を出て進  
んで變易の生死を  
離るる機の爲に法  
華を説くに喩ふ。

足を天台に投ず。『法華』を濃稟し誓を發して弘演す」と當に知るべし、『法華』の疏有りと雖も天台の釋に如かざることを。又『經』に云はく、『四衆の中に於て爲に諸經を説き其心を悦ばしむ。賜ふに禪定、解脫、無漏根力の諸法の財を以てし、又復、涅槃の城を賜與して滅度を得たりと言ひて其心を引導して皆歡喜せしむ。而も、爲に是法華經』を説かずと。已上經當に知るべし。未だ『法華』を説かざる前の所説の諸經等は、是れ警中の珠に不す。但、田宅、聚落、城邑、或は衣服、嚴身の具を與へ、或は種種の珍寶、金、銀、琉璃、砗磲、碼碯、珊瑚、琥珀、象、馬、車乘、奴婢、人民を與ふる所諭の經にして、未だ眞實を顯さず。警中の明珠、未だ授與せざるが故に。明かに知んぬ。他宗所依の經は是れ警中の明珠に不ざることを。又『經』に云はく、此『法華經』は能く衆生をして一切智に至らしむ。一切世間に怨多くして信じ難く、先に未だ説かざる所なるを而も今之を説く。文殊師利、此『法華經』は是れ諸の如來の第一の説なり。諸説の中に於て最も爲甚深なり。末後に賜與すること、彼強力の王の久しく護れる明珠を、今乃ち之を與ふるが如し。文殊師利、此『法華經』は諸佛如來の祕密の藏なり。諸經の中に於て最も其上に在り。長夜に守護とて妄りに宣説せざるを、始めて今日に於て乃ち汝等が與に之を敷演す」と。已上經當に知るべし、末後の所説『妙法華經』は是れ、田宅、聚落乃至人民所諭の經に不す。但し警中の明珠所諭の經なることを。已に眞實を顯はし、警中の明珠已に授與するが故に。明かに知んぬ、天台所釋の法華の宗は釋迦世尊所立の宗なることを。是れ諸の如來の第一の説なり。又、諸

經の中に於て最も其上に在り。大牟尼尊、豈愛憎有らんや。是法道理なり。讀む可きに足るのみ。天親論師、説きて無上と爲すこと良に以有り。天台法華宗は諸宗に勝るとは所依の經に據るが故なり。白讀毀他に不ず。庶くは有智の君子、經を尋ねて宗を定めよ。

佛說十喻校量勝六

【四】法華藥王品の十喻を執り、當經の衆經に勝れ、他の四時に勝れることを論ず。  
 【法華玄】妙法蓮華經玄義十卷、隋天台大師撰。台宗三大部の一。

謹んで、一法華經の藥王菩薩本事品を案ずるに云はく、『宿王華、譬へば一切の川流、江河の諸水の中に、海爲第一なるが如く、此法華經も亦復是の如し。』諸の如來の所説の經の中に於て最も爲深大なり』と。已上經天台の「法華玄」に云はく、『海は是れ坎徳なり。萬流歸するが故に、同一鹹なるが故に、一法華も亦爾なり。佛の證得する所の萬善同じく歸し、同じく佛乘に乗ず。江河川流は此大徳無し。餘經も亦爾なり、故に一法華一最も大なり』と。已上玄。明かに知んぬ、他宗の所依の經は大海の徳有ること無く、唯法華宗のみ有りて大海の深大の徳有ることを。第一喻。又云はく、『又、土山、黒山、小鐵圍山、大鐵圍山、及び十寶山の衆山の中に、須彌山爲第一なるが如く、此法華經も亦復是の如し。』諸經の中に於て最も爲其上なり』と。已上經天台の「法華玄」に云はく、『山王最も高し。四寶の所成なるが故に。純ら諸天の居なるが故に。一法華も亦爾なり。四味の教の頂に在りて四の誹謗を翻れたり。閉示悟入して純ら一根本一縁なり。同一道味なり。純らは是れ菩薩なり。聲聞の弟子無きが故に』と。已上玄。明かに知んぬ、此法華は乳味の華嚴、酪味の阿含、生酥

【兼但對帶】一次の如く華嚴、鹿苑、方等、般若の前四時の教の說相を云妙の法華の純圓獨ふ。委しくは天台四教儀參照のこと【日天子】スールヤ、(Surya)太陽觀世音菩薩の變化身なり。

【高山、幽谷、平地】華嚴經の三照の譬にして涅槃經の五味の譬と對照して天台の教判に應用するところ。

の方等、熟酥の般若の四教の頂に在ることを。當に知るべし、他宗所依の經は須彌の徳有ること無し。唯、法華宗のみ有りて須彌最、高の徳あることを。第二喻。又云はく、「又、衆星の中に、月天子最も爲第一なるが如く、此『法華經』も亦復是の如し。千萬億種の諸の經法の中に於て最も爲照明なり」と。已上經。天台の『法華玄』に云はく、「月は能く虧盈するが故に。月は漸圓なるが故に。『法華』も亦爾なり。同體の權實なるが故に。漸を會して頓に入るが故に、燈炬、星、月は能く闇と共に住す。諸經の二乘の道果を存して小と並び立つに譬ふ」と。已上玄。當に知るべし、兼、但、對、帶の隨他意の經は未だ最照有らず。他宗所依の經は但照明の徳有りて最明の徳有ること無し。天台法華宗は最照明の徳有りて無餘果の已死の人を照せり。佛種を滅せずして成佛せしむるが故に。第三喻。又云はく、「又、日天子の能く諸の闇を除くが如く、此經も亦復是の如し。能く一切の不善の闇を破す」と。已上經。當に知るべし、他宗所依の經は、破闇の義未だ圓滿ならざるが故に。日、高山を照して未だ幽谷を照さず。幽谷を照すと雖も未だ平地を照さず。天台法華宗は已に平地を照し、山谷俱に照す。故に能く不善の闇を破す。深く以有り。第四喻。又云はく、「又、諸の小王の中に、轉輪聖王最も爲第一なるが如く、此經も亦復是の如し。衆經の中に於て最も爲其尊なり」と。已上經。當に知るべし、未顯眞實の四十餘年の所説の衆經等は彼諸王の如し。他宗の所依の經は、諸經の王等一兩句の文有れども當分に王と爲る。故に轉輪王と名けず。已顯眞實の日に説く所の『法華經』は此轉輪王の如し。天台法華宗は衆經の中に於て



【俗語、眞諦】迷情に於て見る所の真相を見る所の眞實の理性を眞諦と云ふ。

【三諦圓融】空假中の三諦の互具五用せるを云ふ。

最も其尊爲り。是故に諸宗に勝るとは是れ應説に不ず。第五論云はく、「又、帝釋の、十三天の中に於て王たるが如く、此經も亦復是の如し。諸經の中の王なり」と。第六論當に知るべし、三十三天は他宗所依の經なり。其帝釋王とは天台の法華宗なることを。又云はく、「又、大梵天王の、一切衆生の父なるが如く、此經も亦復是の如し。一切の賢聖、學無學、及び菩薩の心を發せる者の父なり」と。已上經天台の「法華玄」に云はく、「輪王は四域に於て自在なり。釋王は三十三天に於て自在なり。大梵は三界に於て自在なり。諸經は或は俗語に於て自在なり。或は眞諦に於て自在なり。或は中道に於て自在なり。但是れ歴別の自在にして大自在に非ず。今の經は三諦圓融して最も自在を得、大梵王に譬ふ」と。已上玄經と玄と開合して王が中の王を顯すことを爲す。其諸の小王の中に輪王を最と爲す。三十三天には帝釋を主と爲す。經は別して聞するが故に、王が中の王は「法華」に喩ふ。玄は總じて合するが故に、二主の王は「法華」に喩ふ。是故に相違せず。明かに知んぬ、他宗所依の經は一分の佛母の義有り、雖も然も但愛有りて嚴の義を闕く。天台法華宗は嚴愛の義を具して一切の賢聖、學無學、及び菩薩の心を發する者の父なり。第七論云はく、「又、一切の凡夫人の中に、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢、辟支佛、此第一なるが如く、此經も亦復是の如し。一切如來の所説、若は菩薩の所説、若は聲聞の所説、諸の經法の中に最も爲第一なり。能く是經典を受持すること有らん者も亦復是の如し。一切衆生の中に於て亦爲第一なり」と。已上經天台の「法華玄」に云はく、「五佛子の如き凡夫の中に於て第

一なり。或は衆生を拔きて涅槃を出す。菩薩の無學の上に居するが如し。今の經は衆生を拔きて方便教の菩薩の上に過ぐ。即ち法王と成る、最も爲第一なり」と。已上玄。當に知るべし、他宗所依の經は未だ最も爲第一ならざることを。其能く經を持する者も亦未だ第一ならず。天台法華宗所持の「法華經」は最も爲第一なり。故に能く「法華」を持する者も亦衆生の中に第一なり。已に佛説に據る、豈自歎ならん哉。第八喻また、又云はく、「一切の聲聞、辟支佛の中に、菩薩爲第一なり。此經も亦復是の如し。一切の諸の經法の中に於て最も爲第一なり」と。已上經。當に知るべし、他宗所依の經は未だ最も爲第一ならず。末顯眞實なるが故に。天台法華宗は固に最も爲第一なることを。已顯眞實なるが故に。第九喻また、又云はく、「佛は爲諸法の王なるが如く、此經も亦復是の如く、諸經の中の王なり」と。已上經。當に知るべし、佛は無上の法王なり。「法華は無上の妙典なり。明かに知んぬ、他宗所依の經は諸王所喻の教なることを。天台法華宗の所依の經は王中の王の所喻の經なり。他宗には都て此十喻無し。唯「法華」のみ有りて此十喻あり。若し他宗の經には此十喻有りと雖も當分跨節なり、分別すべし。釋尊の宗を立つるは「法華」を極と爲す。本法の故に時を待ち機を待つ。論師の宗を立つるは自見を極と爲す。隨宜の故に空を立て有を立て。誠に顯くば有智の賢聖、玄に佛説に鑒みて指南と爲す可し。第十喻。竟る。

即身六根互用勝七。

【功徳】法華の法師功徳品の即身に六根を具する妙功徳有るを擧げ以て法華經の他經に勝るを辨ず。

【六即の位】一家に於て立つる闍梨の行位にして、理即、名字即、觀行即、相似即、分證即、究竟即を云ふ【相似即】六根清淨の徳を得る位。

「謹んで法華の法師功徳品を案するに云はく、『爾時に佛、常精進菩薩摩訶薩に告げたまはく、若し善男子、善女人、是法華經を受持し、若し讀み、若し誦し、若し解説し、若し書寫せん。是人は當に八百の眼の功徳、千二百の耳の功徳、八百の鼻の功徳、千二百の舌の功徳、八百の身の功徳、千二百の意の功徳を得べし。是功徳を以て六根を莊嚴し皆清淨ならしむ』と。」  
文。當に知るべし、受持の法師、讀の法師、誦の法師、解説の法師、

書寫の法師、此五種の法師各法華經に依りて、各六千の功徳を獲、其六即の位の中に第四相似即の位なり。又云はく、『善男子、善女人、父母所生の清淨の肉眼を以て三千大千世界の内外、所有の山林河海を見、乃至廣く説く。二明かに知んぬ、父母所生と云ふは、即身の異名なることを』又、偈に云はく、『未だ天眼を得ずと雖も肉眼の力是の如し』との

已上偈。當に知るべし、實經の力用は肉眼をして淨からしむ。他宗の所依の經には都て此眼用無し。天台法華宗、具に此眼用有ることを。又云はく、『未だ大耳を得ずと雖も父母所生の清淨の常耳を以て皆悉く聞知す』と。文。當に知るべし、他宗の所依の經には都て此耳用無し。天台法華宗、具に此耳用有ることを。又云はく、『未だ菩薩の無漏法性の鼻を得ずと雖も而も此經を持する者は、先づ此鼻の相を得』と。文。明かに知んぬ、他宗の所依の經には、有漏の位の中都て此鼻相爲し。天台法華宗は、有漏の位の中先づ此鼻相を得ることを。又云はく、『是人は舌根淨くして終に惡味を受けず。其食噉する所有れば、悉く皆甘露と成る。深淨の妙聲を以て大衆に於て法を説き、諸の因緣喻を以て衆生の心を引

導す<sup>（一）</sup>乃至廣く説く。當に知るべし、五種の法師、各此舌を得。他宗所依の經には都て此舌用無し。天台法華宗、具に此舌用有ることを。又云はく、『未だ無漏法性の妙身を得ずと雖も、清淨の常體を以て一切中に於て現すと。』<sup>（二）</sup>當に知るべし、他宗所依の經には都て有漏の位中、此身の用を説かず。天台法華宗は有漏の位の中、八百の身用を説くことを。又云はく、『法華經』を持する者は意根淨きこと斯の如し。未だ無漏を得ずと雖も、先づ是の如きの相有らん』と。<sup>（三）</sup>當に知るべし、他宗所依の經には有漏の位の中、之意用を説かず。天台法華宗には有漏の位の中、具に此意用を説くことを。是故に天親菩薩の『釋論』の下卷に云はく、『常精進菩薩品』の中の一法門とは、謂く、讀誦し、解説し、書寫する等にて六根清淨を得。經に、若は善男子、善女人、『法華經』を受持し、若は讀み、若は誦し、若は解説し、若は書寫せん。是人當に八百の眼の功德を得べし。次第に乃至千二百の意の功德を得と云ふが如くなるが故に。此六根清淨を得る者は謂く、諸の凡夫、經力を以ての故に勝根の用を得』と。<sup>（四）</sup>當に知るべし、諸の凡夫の人、此經を修學すべし。他宗所依の經には都て此力無きが故に。天台法華宗には具に此力有るが故に、權實檢すべく妙行進むべし。互用の文、論に具に説くが如し。

即身成佛化導勝八

【四六】法華の提婆品の龍女成佛の一條を説き以て法華經の直至道場の頓教なるを論ず。  
【提婆達多品】妙法蓮華經提婆達多品第十二。

譯んで『法華經』の提婆達多品を案ずるに云はく、『文殊師利の言はく、我海中に於て唯

常に「妙法華經」を宣説す」と。文。已上經。當に知るべし、是文は能成佛の經を示し、以て往復の端と爲すことを。又、「經」に云はく、「智積、文殊師利に問うて言はく、此經は甚深にして微妙なり。諸經の中の寶なり。世に希有なる所なり。頗し衆生の勤加精進し、此經を修行して速かに佛を得る有りや不や」と。文。已上經。當に知るべし、此文は所成佛の人を問うて此經の威勢を顯すことを。又、「經」に云はく、「文殊師利の言はく、娑竭羅龍王の女有り、年始めて八歳なり。智慧利根にして、善く衆生の諸根の行業を知り、陀羅尼を得、諸佛の所説の甚深の祕藏、悉く能く受持し、深く禪定に入りて諸法を了達し、刹那の頃に於て菩提心を發して不退轉を得たり。辯才無礙にして衆生を慈念すること猶赤子の如く、功德具足して心に念ひ口に演ぶること微妙廣大なり。慈悲仁護、志意和雅にして能く菩提に至れり」と。已上經。當に知るべし、此文は難成の趣を明して經の力用を顯すことを。六趣の中には是れ畜生趣なり、不善の報を明す。男女の中には是れ則ち女身なり、不善の機を明す。長幼の中には是れ則ち少女なり、不久の修を明す。然りと雖も「妙法華」の甚深微妙の力、具に二嚴の用を得。明かに知んぬ、「法華」の力用は、諸經の中の寶、世に希有なる所なり。又云はく、「智積菩薩の言はく、我釋迦如來を見たてまつるに、無量劫に於て難行苦行し、功を積み徳を累ねて菩薩の道を求むること未だ曾て止息したまはず。三千大千世界を觀るに、乃至芥子の如き計りも、是れ菩薩の身命を捨てたまふ處に非ざること有ること無し。衆生の爲の故なり。然して後に乃ち菩提の道を成ずることを得たまへり。此女の、須臾の間に

於て便ち正覺を成ずることを信ぜず」と。已上經當に知るべし、智積菩薩は、歷劫修行を  
 擧げて即身成佛を難じ、三僧祇の佛を信じて須臾の成を信ぜざることを。今時、三が中、  
 大いに疑難する所の趣は智積の難に過ぎず。又「經」に云はく、「言訶未だ訖らざる時に、龍  
 王の女、忽ちに前に現じて頭面に禮敬し、却きて一面に住して偈を以て讚めて曰さく、深  
 く罪福の相に達して、遍く十方を照したまふ。微妙の淨法身、相を具すること三十二。八  
 十種好を以て、用ひて法身を莊嚴せり。天人の戴仰する所、龍神も咸く恭敬す。一切衆  
 生の類、宗奉せざる者無し。又聞きて菩提を成ずること、唯佛のみ當に證知したまふべし。  
 我大乘の教を闡きて、苦の家生を度脱せん」と。已上經初句の深達罪福相とは、罪福多種な  
 り。故に四惡道を罪と爲し、人天を以て福と爲す。又、人天を罪と爲し、二乘を以て福と  
 爲す。兩教の二乘、以て罪と爲し、六度の菩薩以て福と爲す。六度の菩薩以て罪と爲し、  
 通教の菩薩以て福と爲す。通教の菩薩以て罪と爲し、別教の菩薩以て福と爲す。別教の菩  
 薩以て罪と爲し、圓教の菩薩以て福と爲す。是の如き罪福の相、理の如く了達するが故に、  
 是故に名けて深達と爲す。若し未だ六重に達せざるをば深達と名くることを得ず。當に知  
 るべし、龍王の女、深く法身に達することを擧げ、引きて唯佛を證することを、一次の經に  
 云はく、「爾時に舍利弗、龍女に語げて言はく、汝久しからずして無上の道を得たりと謂へ  
 り。此事信じ難し。所以は何ん。女身は垢穢にして是れ法器に非ず。云何が能く無上菩提  
 を得ん。佛道は懸曠なり。無量劫を経て、勤苦して行を積み、具に諸度を修して然して後

に乃ち成す」と。已上經 當に知るべし、舍利弗、小乗の三藏教、三阿僧祇劫に六度の行を修し、百劫に相好の業を修することを信じて、『法華』の直に道場に至り須臾の頃に於て便ち正覺を成ずるを信ぜず。次に經に云はく、『又女人の身には猶五障有り。一には梵天王と作ることを得ず。二には帝釋、三には魔王、四には轉輪聖王、五には佛身なり。云何が女身にして速に成佛することを得ん』と。已上經 當に知るべし、舍利弗、小乗の義を擧げて龍女が便成を難することを。次に經に云はく、『爾時に龍女、一の寶珠有り。價值三千大千世界なり。持して以て佛に上る。佛即ち之を受けたまふ。龍女、智積菩薩、尊者舍利弗に謂つて言はく、我寶珠を獻る、世尊納受したまふ、是事疾しや不や』と。已上經 當に知るべし、龍女、圓珠を以て佛に上る。佛即ち之を受けたまふ。龍女、返つて大小の尊者に問ふ。圓珠の納受、是事疾きや不やと。次に經に云はく、『答へて言はく、甚だ疾し』と。已上經 當に知るべし、歷劫の智積、小乗の鴉子、龍女が問に答へて甚だ疾しと言ふことを。次に經に云はく、『女の言はく、汝が神力を以て我成佛を觀よ。復此よりも速かならん』と。已上經 當に知るべし、龍女、口密を開きて速成佛の義を立て、『法華經』力の諸の群生を化導することを顯す。次に經に云はく、『當時の衆會、皆龍女の、忽然の間に變じて男子と成り、菩薩の行を具して即ち南方無垢世界に往き、寶蓮華に坐して等正覺を成じ、三十二相、八十種好ありて、普く十方の一切衆生の爲の故に妙法を演說するを見る』と。已上經 當に知るべし、龍女、身密を開きて速成佛の事を示し、『法華經』の勢、十方の衆生を化する

【三不退】位不退  
行不退 念不退を  
云ふ。

ことを顯す。有人會して云はく、「是は此れ權化なり。實凡成ぜず」と難じて云はく、「權は是れ實を引く。實凡成佛せば權化無用ならん。經力没せしめんや。釋迦、智積、文殊、妙法を弘め、龍女、經力を顯すに由るを以て、是の如きの妙論議は已顯眞實の經に宣示し顯説す。如來の一切所有の法、如來の一切の自在神力、如來の一切の祕密の藏、如來の一切の甚深の事とは蓋し斯の如き歟。有人の云はく、「變成男子とは、未だ取捨を免れず」と。今謂く、法性の取捨、法性の緣起は常差別なるが故なり。法性の同體、法性の平等は常平等なるが故なり。常平等の故に法界を出でず、常差別の故に取捨を礙へず。又、有人の云はく、「龍女成佛せば名何ん。難じて云はく、「經文分明に成等正覺と云ふ。寧ぞ其號無からんや。但し義に傍正有り。不要の故に其號を稱せず。若し文義無きを尋ねば何が故に文殊海去の文を噴問せざる。明かに知んぬ、義に傍正有ることを。」次に經に云はく、「爾時に娑婆世界の菩薩、聲聞、天龍八部、人と非人と、皆遙かに彼龍女の成佛して普く時の會の人天の爲に法を説くを見て、心大いに歡喜して、悉く遙かに敬禮す。無量の衆生、法を聞きて解悟し不退轉を得、無量の衆生、道の記を受くることを得たり。無垢世界六反震動し、娑婆世界の三千の衆生不退地に住し、三千の衆生菩提心を發して受記を得たり」と。已上經當に知るべし、所化の得益、唯、圓教一乘の益のみ有ることを。夫無量の衆生、法を聞き解悟して不退轉を得とは、是れ則ち圓教の三不退なり。即ち所化の即身成佛を顯す。又、無量の衆生、道記を受くることを得とは即身に記を得ることを顯す。已上



【旋陀羅尼】法華三陀羅尼の一、法門に於て旋轉自在の力用を得るを云ふ。

他土の得益なり。又、娑婆世界の三千の衆生不退地に住すとは、是れ則ち圓教の三不退なり。即ち所化の即身成佛を顯す。又、三千の衆生菩提心を發して而も受記を得とは即身に記を得ることを顯す。已上此土の得益なり。明かに知んぬ、能化の龍女、偈に「我大乘の教を闡きて、苦の衆生を度脱せん」と云ふは、已顯眞實の内證の大乘にして、是れ未顯眞實の前三が中の權因の大乘に不ざることを。何を以ての故に。能化の龍女、歷劫の行無く、所化の衆生、歷劫の行無し。能化所化、俱に歷劫無し。妙法の經力を以て即身に成佛し、上品の利根は一生成佛し、中品の利根は二生成佛し。下品の利根は三生に成佛す。普賢菩薩を見、菩薩の正位に入り、旋陀羅尼を得。是れ即ち分眞の證なり。是故に、「普賢經」に云はく、「阿難、若し比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷、天龍八部、一切衆生、大乘を誦する者、大乘を修する者、大乘の意を發する者、普賢菩薩の色身を見んと樂ぶ者、多寶佛塔を見んと樂ぶ者、釋迦牟尼、及び分身の諸佛を見んと樂ぶ者、六根清淨を得んと樂ぶ者は當に此觀を學ぶべし。此觀の功德は諸の障礙を除き上妙の色を見、三昧に入らず。但誦持するが故に。專心に修習して心心相次ぎて大乘を離れず。一日より三七日に至りて普賢を見ることを得。重障有る者は七七日の後、然る後に見ることを得。復重有る者は一生に見ることを得。復重有る者は二生成る者は二生成ることを得。復重有る者は三生に見ることを得」と。同經に又云はく、「釋迦牟尼佛、毘盧遮那遍一切處と名く。其佛の住處を常寂光と名く。常波羅蜜の攝成するの處、我波羅蜜の安立するの處、淨波羅蜜の有相を滅するの處、樂波

羅蜜の身心の相に住せざるの處なり。是れ有無諸法の相に不ざる處なり」と。乃至云はく、  
 『此懺悔を行する者は身心清淨にして法の中に住せず、猶流水の如し。念念の中、普賢菩薩、及び十方の佛を見ることを得。時に諸の世尊、大悲の光明を以て、行者の爲に無相の法を説く。行者、第一義空を説くを聞き、聞き已りて心に驚怖せず。時に應じて即ち菩薩の正位に入る」と。已上經。當に知るべし、『普賢經』は龍結の『法華經』なり。即入の言は即身と異ること無し。他宗所依の經には都て即身入無し。一分即入と雖も、八地已上を推て凡夫の身を許さず。天台法華宗には具に即入の義有り。四衆、八部の一切衆生、圓機の凡夫は、發心修行して即ち正位に入りて普賢を見ることを得。八地に推らず、凡夫を許すが故に。次の經に云はく、『智積菩薩、及び舍利弗等、一切の衆會、默然として信受せり』と。已上經。當に知るべし、智積菩薩、劫を歴て大乘の行を修行すとは、舍利弗等の析體兩教の不思議の人、三周に法華を聞いて自悟皆圓滿す。法華の力を顯さんが爲に、先の修習を擧げて龍女の成佛を難す。龍女成佛して所化巨多なり。法華の力、今日已に顯れたり。一切の衆會、皆悉く見ることを得。是故に默然として信受せり。他宗所依の經には、是の如きの信受無し。天台法華宗には是の如きの信受有り。即身成佛化導の義、寧んぞ他宗に勝れざらん哉。

多寶分身付屬勝九

【四七】釋迦、多寶二佛法華を付屬するに闕し、去華受持の六難を擧げ餘經の九易を誦くを以て今宗の勝絶を論ず。  
 【見寶塔品】妙法蓮華經見寶塔品第十一。  
 【結跏趺坐】佛陀の座法。

謹んで『法華經』の見寶塔品を案ずるに云はく、『爾時に多寶佛、寶塔の中に於て、半座を分ちて釋迦牟尼佛に與へ、而も是言を作したまはく、釋迦牟尼佛、此座に就きたまふべし。即時に釋迦牟尼佛、其塔の中に入りて、其半座に坐し。結跏趺坐したまふ。爾時に大衆、二如來の、七寶の塔の中の師子の座の上に在して結跏趺坐したまふを見たてまつりて、各是念を作さく、佛高遠に坐したまへり。唯願くば如來、神通力を以て我等輩を、俱に虛空に處せしめたまへ。即時に釋迦牟尼佛、神通力を以て、諸の大衆を接して皆虛空に在きたまふ。大音聲を以て普く四衆に告げたまはく、誰か能く此娑婆國土に於て廣く『妙法蓮華經』を説かん。今正しく是時なり。如來久しからずして當に涅槃に入るべし。佛此妙法蓮華經を以て付屬して在ること有らしめんと欲す』と。已上經當に知るべし、過去の多寶、現在の釋尊は同じく塔中に坐し、十方現在の釋迦の分身は各八方に坐し、大會の四衆皆虛空に在りて、『妙法蓮華經』付屬在ること有りと云ふことを。他宗所依の經には都て此付屬無し。天台法華宗には具に此付屬有り。是故に、天親菩薩『釋論』の下卷に云はく、『多寶如來の塔、一切の佛土の清淨なることを示現すとは、諸佛の實相の境界の中、種種の諸寶の間錯して莊嚴することを示現するが故に』と。已上經當に知るべし、實相の境界の中、種種の莊嚴有り。即ち内證境界なり。其實相の中、又寶塔の中、『法華經』を付屬す。其權大乘の經は彼權の一乘經なれば、都て此付屬無し。未顯眞實なるが故なり。今の實大乘經は今、實の一乘經なれば、具に此付屬有り。已顯眞實なるが故なり。他宗の經の付屬、

法華宗に如かず。塔の八示現、論に廣く説くが如し。又、經の偈に云はく、『若し此經を説  
 かば則ち我と多寶如來、及び諸の化佛を見たと爲す。諸の善男子、各諦に思惟せ  
 よ。此は爲れ難事なり。宜しく大願を發すべし』と。已上偈。當に知るべし、見佛の功を擧げ  
 て、法華を勸持することを。又、六難を擧げ重ねて九易を示す。經の偈に又云はく、『諸餘  
 の經典の數恆沙の如し。此等を説くと雖も未だ爲れ難しとするに足らず。若し須彌を接し  
 て他方の無數の佛土に擲置するも、亦未だ爲れ難しとせず。若し足の指を以て大千界を動  
 かして遠く他國に擲たんと、亦未だ爲れ難しとせず。若し有頂に立ちて、衆の爲に無量の  
 餘經を演説するも、亦未だ爲れ難しとせず』と。已上經。當に知るべし、四行の偈は即ち四種  
 の易と爲すことを。經の文、分明に『諸餘の經典、數恆沙の如し』と云ふ。又『若し有頂に立  
 ちて衆の爲に無量の餘經を演説すと云ふ。他宗所依の經は、説くと雖も未だ爲れ難しとせ  
 す』是故に『諸餘の經典、無量の餘經、亦未だ爲れ難しとせず』と。九易の中、初の四易竟ん  
 ぬ。經に又云はく、『若し佛の滅後に惡世の中に於て、能く此經を説かん、是れ則ち爲れ難  
 し』と。已上經。當に知るべし、是一行は六難の中、初の第一の難なることを。能く此經を説  
 くと、即ち『妙法蓮華經』なり。天台法華宗、惡世の中に於て能く説くことを爲れ難し。四  
 易一難竟んぬ。經に又云はく、『假使人有りて、手に虚空を掲り、而も以て遊行するも、亦  
 未だ爲れ難しとせず』と。已上經。當に知るべし、是一行は九易の中、第五の易なることを。  
 經に又云はく、『我滅後に於て、若し自ら書持し、若し人をして書せしむ。是れ則ち爲れ難

【六神通】神境智  
證、天眼智證、天  
耳智證、他心智證  
宿命智證、漏盡智  
證の六通を云ふ。

し」と。文。已上經 當に知るべし、是一行は、六難の中、次の第二の難なることを。夫圓融の心を發して書持することは、得ること難し。東隅の一公、法華の中を制書し、法華の釋氏、大律儀を斷ず。是れ則ち爲れ難し、深く信じ恐る可し。經に又云はく、「若し大地を以て、足の甲の上に置き、梵天に昇らんも、亦未だ爲れ難しとせず」と。文。已上經 當に知るべし、是一行は九易の中、第六の易なることを。易きが故に餘經を指すなり。經に又云はく、「佛滅度の後、惡世の中に於て、暫くも此經を讀まん。是れ則ち爲れ難し」と。文。已上經 當に知るべし、是一行は、六難の中、次の第三の難なることを。夫圓融の三諦を解して暫くも「法華經」を讀むは、濁惡世の中、其人極めて得難し。今時、法華を讀む、其數忽ち多きに似たり。然りと雖も、即身に六根清淨の果無きは、未だ圓融の三諦を解しせざるに由るが故なり。難は則ち法華を指すなり。經に又云はく、「假使劫燒に、乾草を擔ひ負ひて、中に入りて燒けざらんも、亦未だ爲れ難しとせず」と。文。已上經 當に知るべし、此一行は、九易の中、第七の易なることを。易きが故に餘經を指すなり。經に又云はく、「我滅度の後に、若し此經を持ちて、一人の爲にも説かん、是れ則ち爲れ難し」と。文。已上經 當に知るべし、是一行は、六難の中、次の第四の難なることを。夫圓融の三諦は一乘の本法なり。持し難く、説き難し。所化得難し。一人の爲に説くも佛種斷ぜず。是れ則ち爲れ難し。難は則ち法華を指すなり。經に又云はく、「若し八萬四千の法藏、十二部經を持ちて、人の爲に演説し、諸の聽かん者をして六神通を得しめん。能く是の如くすと雖も、亦未だ爲れ難しとせず」と。文。已上經 當

に知るべし、是二行は、九易の中、第八の易なることを。易きが故に餘經を指す。未顯眞の八萬法藏、十二部は、是妙法ならず。是故に易しと爲すなり。經に又云はく、『我滅後に於て此經を聽受して、其義趣を問はん、是れ則ち爲れ難し』と。文。已上經當に知るべし、是一行は、六難の中、次の第五の難なることを。夫佛知佛見は其義解し難く、體内の權實は機に非ざれば信ぜず。是故に法華を聽受し、其義趣を問ふは、是れ則ち爲れ難し。難は則ち法華を指すなり。經に又云はく、『若人法を説きて、千萬億無量無數の恆沙の衆生をして、阿羅漢を得、六神通を具せしめん。是益有りと雖も亦未だ爲れ難しとせず』と。文。已上經當に知るべし、是兩行は、九易の中、第九の易なることを。易きが故に餘經を指す。夫當代に法を説くは、未だ一人をして羅漢を證得せしめず。何ぞ況や三四五六七人をや。何を況や無量無數の恆沙の衆生をして、阿羅漢を得しめんを乎。而して小乗と威儀を執して、法華の制に離せず。大乘の威儀を執して但兩聚の戒を許せり。寧ろぞ大小權實の義を解了する者ならん哉。既に得果阿羅漢を擧げて是益有りと雖も未だ爲れ難しとせず。何に因てか固く其威儀を執し、萬億の行者を小道に引かんや。小乗の持戒は即ち菩薩の煩惱なりとは、蓋し斯事を謂ふ歟。但し小儀を執せざるを除く。經に又云はく、『我滅後に於て、若能く斯の如き經典を奉持せん、是れ則ち爲れ難し』と。文。已上經當に知るべし、是一行は、六難の中、次の第六の難なることを。夫如來の室に入り、如來の衣を著し、如來の座に坐し、若能く『妙法華經』を奉持するは、是れ則ち爲れ難し。難は則ち法華を指すなり。夫六難は是れ則

ら「法華經」を指し、九易は則ち是れ餘の經典を指す。他宗所依の經は、未だ九易の局りを  
出でず。天台法華宗は獨り六難の頂に居す。誰か有智の者、經文を分たさらん哉。是の  
如き校量の付屬、他宗の經には無き所、唯「法華經」のみに有り。經に又云はく、我佛道の  
爲に無量の土に於て、始より今に至るまで廣く諸經を説く。而も其中に於て此經第一なり。  
若能く持つこと有らば、則ち佛身を持つなり。諸の善男子、我滅後に於て、誰か能く此  
經を受持し讀誦せん。今佛前に於て自ら誓言を説け」と。已上經當に知るべし、是の如き  
の三行半の偈は、經の勝能を擧げて能持を募り求む。寶塔、中天に騰りて三變の淨土新な  
り。分身、樹下に坐して一乘の付屬盛なり。釋迦世雄、殷勤に付屬したまふ良に以有り、  
信順せざる可けん哉。信順せざる可けんや。論宗、經宗は、九易の故に信じ易く解し易し。  
法華經宗は、六難の故に信じ難く解し難し。淺は易く深は難し。釋迦の所判、淺を去りて  
深に就くは丈夫の心なり。天台大師、釋迦に信順し、法華の宗を助けて震旦に敷揚す。觀  
山の一家、天台を相承し、法華の宗を助けて日本に弘通す。夫玄贊の家は、法華の旨を會  
して唯識の義に歸す。是れ則ち唯識の宗を弘めて法華を弘めず。無相の家は、法華の旨を  
會して無相の義に歸す。是れ則ち無相の宗を弘めて法華を弘めず。是故に天台一家、一切  
經を會して「法華經」に歸す。是れ則ち、法華を敷揚し諸經を會通す。委曲の義、其に「玄疏」  
に出でたり。

普賢菩薩勸發勝十

【六八】普賢菩薩の勸發は獨り本宗所依の本經にのみ有りて獨起なること餘他の宗と異なることを論ず。

【普賢菩薩勸發品】妙法蓮華經普賢菩薩勸發品第二十八

「（釋入つ）」んで「法華經」の普賢菩薩勸發品を案するに云はく、「若し善男子、善女人、如來の滅後に於て、云何が能く是法華經を得ん。佛、普賢菩薩に告げたまはく、若し善男子、善女人、四法を成就せば、如來の滅後に於て當に是法華經を得べし。一には諸佛に護念せらるることを爲、二には諸の徳本を殖え、三には正定聚に入り、四には一切衆生を救ふの心を發す。善男子、善女人、是の如く四法を成就せば、如來の滅後に於て必ず是經を得ん」と。已上經當に知るべし、普賢菩薩、法華を得ることを決して、滅後の持經者を勸發することを得。經の義、意趣甚だ多し。卷を得、義を得、思を得、修を得、六即の位を経て分別すべし。經に又云はく、「爾時に普賢菩薩、復佛に白して言さく、世尊、後の五百歳濁惡世の中に於て、其れ是經典を受持すること有らん者をば、我當に守護して其衰患を除き安穩を得しむべし」と。已上經當に知るべし、法華眞實の經、後の五百歳に於て必ず應に流傳すべきことを。普賢の正身、累分を守るが故に持經者を護りて安穩を得しむ。他宗所依の經には都て此勸發無し。天台法華宗とは具に此勸發有り。經に又云はく、「是人、若し行き、若し立ちて此經を讀誦せば、我爾時に六牙の白象王に乗りて、大菩薩衆と俱に其所に詣りて、自ら身を現じ、供養し守護して其心を安慰せん。亦法華經を供養せんが爲の故なり」と。已上經當に知るべし、普賢菩薩、身を現じて、法華を讀誦する者を供養するこ



【勸善賢經】佛說法華經の結經。佛說勸善賢菩薩行法經一卷、劉宋の曇摩蜜多譯、

【三昧】サマーガ(Samadhi)定と譯す。

【陀羅尼】ダラニー(Dhāraṇī)總持と譯す。善法を受持し散ぜしめず惡法を持して起らくしめざる力用に名

とを。夫れ果分の經は、因位の菩薩の人は尊む可く貴む可し。故に『法華經』を供養す。他宗所依の經には都て此俱養無く、亦此安慰無し。天台法華宗には具に此俱養有り。亦此安慰有り。勸發の功、果分の經に盡く。經に又云はく、『是人若し、坐して此經を思惟せば、爾時に我復、白象王に乗りて其人の前に現ぜん。其人若し『法華經』に於て、一句一偈をも忘失する所有らば、我當に之を教へて與共に讀誦し、還つて通利せしむべし』と。已上經當に知るべし、果分の『法華經』は、一句一偈を忘失する所有れば、普賢菩薩當に之を教へて與共に讀誦して還つて通利せしむべし。他宗所依の經には、總て此示教無し、『觀普賢經』に此示教有るは、『法華經』を結するが故なり。天台法華宗には具に此示教有り。勸發の功、果分の經に窮るなり。經に又云はく、『爾時に、法華經を受持し讀誦せん者、我身を見ることを得て、甚だ大いに歡喜して、轉復精進せん。我を見るを以ての故に、即ち三昧及び陀羅尼を得ん。名けて旋陀羅尼、百千萬億旋陀羅尼、法音方便陀羅尼と爲す。是の如き等の陀羅尼を得ん』と。已上經文。當に知るべし、法華經力の故に普賢の身を見ることを得。普賢の身を見るが故に、即身に三昧及び陀羅尼を得ることを。圓融三諦の義陀羅尼は唯法華に有り。餘經には都て無し。他宗所依の經、都て圓益を得ること無く、天台法華宗、具に圓益を得る有り。勸發の功、果分の經に盡く。經に又云はく、『世尊若し、後の世の後の五百歲、濁惡世の中に、比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷の、求索せん者、受持せん者、讀誦せん者、書寫せん者、是『法華經』を修習せんと欲せば、三七日の中に於て、應に一心に精進

すべし。三七日を滿じじりて、我當に六牙の白象に乗りて、無量の菩薩の而も自ら圍繞せると、一切衆生の見んと喜ぶ所の身を以て、其人の前に現じて、爲に法を説きて示教利喜すべし」と。文。已上經。當に知るべし、法華經力の故に、後の世の後の五百歳の圓機の四衆等、三七日の中に於て普賢の身を見ることを得。亦聽聞して示教利喜することを。他宗所依の經には、都て勸發無し、天台法華宗には具に此勸發有り。經に又云はく、『亦復、其に陀羅尼呪を與へん。是陀羅尼を得るが故に、非人の能く破壊する者有ること無けん。亦女人の爲に惑亂せられず、我身も亦、常に是人を護らん』と。文。已上經。當に知るべし、『法華經』を護らんが爲に、眞言を持者に與へ、自身常に守護することを。他宗所依の經には都て此勸發無く、天台法華宗には具に此勸發有り。妙法の眞言は他經に説かず、普賢の常護は他經に説かず。是故に法華宗は、二論の宗に勝れ、亦華嚴に勝れたり。經に又云はく、『爾時に釋迦牟尼佛、讚めて言はく、善哉善哉、普賢、汝能く、是經を護助して、多所の衆生をして安樂し利益せしめん。汝已に、不可思議功德深大の慈悲を成就せり。久遠より來、阿耨多羅三藐三菩提の意を發し、能く是神通の願を作して、是經を守護す。我當に神通力を以て、能く普賢菩薩の名を受持せん者を守護すべし』と。文。已上經。當に知るべし、釋迦牟尼佛、普賢の願を印可したまふことを。他宗所依の經には、都て此印可無く、天台法華宗には具に此印可有。普賢は持經者を守護し、釋迦は持名者を守護す。是の如きの印可勸發は他宗に無き所、但此經に有り。經に又云はく、『普賢、若如來の滅後、後の五百歲に若人

有りて、『法華經』を受持し讀誦せん者を見ては、應に是念を作すべし。此人は久しからずして、當に道場に詣りて、諸の魔衆を破し、阿耨多羅三藐三菩提を得、法輪を轉じ、法の鼓を撃ち、法の螺を吹き、法の雨を雨すべし。當に天人大衆の中の、師子の法座の上に坐すべし」と。文。已上經。當に知るべし、如來の滅後、後の五百歲に、『法華經』を受持し讀誦せん者は、速に佛果を成じ、衆生を度脱することを。他宗所依の經には、都て速成の勸有ること無く、天台法華宗には具に速成の勸有り。夫佛知佛見の内證の經は、信じ難く解し難し、果分の教は獨り諸經に秀でて對無く比無し。全身舍利、亦上亦一なり。深く金口を信じて此十勝を造り、法華の勝るることを擧げて圓機の人に勸む。但權機と三乘とを除くが故なり。是故に『法華經』の囑累品に云はく、『未來世に於て、若し善男子、善女人有りて、如來の智慧を信ぜん者には、當に爲に、此『法華經』を演說して、聞知することを得しむべし。其人をして佛慧を得しめんが爲の故なり。若し衆生有りて、信受せざらん者には、當に如來の餘の深法の中に於て、示教利喜すべし。汝等、若し能く是の如くせば、則ち爲に已に諸佛の恩を報ずるなり」と。文。當に知るべし、佛慧の機は、本法を信じて而も修學し、三乘の機は、本法を誘りて而も墜墮することを。是故に釋迦、餘の深法の中に示教利喜す。三が中の大乗、通別の教等を餘の深法と爲す。俱に大乘なるが故に。小乗の益を許さざるが故なり。然るに『法華經』は、常住佛性を以て咽喉と爲し、一乘の妙行を以て眼目と爲し、再生取種を以て心腑と爲し、顯本遠壽を以て其命と爲す。而も却つて、唯識の

【天台四教儀】  
 撰、天台智者大師  
 撰、論觀錄と棟別  
 して大本四教儀と  
 も云ふ。

滅種を以て其心を死し、婆沙の菩薩を以て其眼を掩ひ、壽量を以て、釋疑と爲して其命を斷じ、常住を以て、遍ぜずとして其喉を割く。三界八獄を以て大科と爲し、斯を形して小と爲し、一乘の四徳を以て小の義と爲れば、會歸す可きこと無し。斯に據つて以て論ずるに、諸例識る可し。明かに知んぬ。支贊の家は法華の心を死し、法華の眼を掩ひ、法華の命を斷じ、法華の喉を割くことを。誰か智有らん者、驚愕せざらん哉。畏るべからざらん哉。畏るべからざらん哉。無相の家は義記を求借し、尋ねて淺深を聞き、足を天台に上りて法華を漁稟す。然公の云はく、「嘉祥、身は妙化に活ひて、儀已に神に灌ぐ。舊章先に行はるれば、理須く委しく破すべし。此大旨を識らば師資成す可く、此一途に準じて餘も亦了す可し。」乃至云はく、「若し舊に依りて立せば師資成ぜず。伏膺の説、施すこと靡く、頂戴の言奚ぞ寄せん」と。無相の家、舊の玄疏を改めて天台に歸仰す。其文墜ちずんば、何ぞ信ぜざる者ならん哉。何ぞ信ぜざる者ならん哉。華嚴の家、「天台四教儀」に影響して、即ち華嚴五教の義を立ち、法華四車の文を引證して、華嚴四宗の義を助成すれば、白牛兩に分れ、同別説を異す。即三の一、即一の三、天台の義を抄せり。分相の門、該攝の門は破問の異名なり。亦其文有り。誰か疑を致す可けん哉。勝けて言ふ可けん哉。天台法華宗は、能説の佛は久遠實成なり。所説の經は譬中の明珠なり。能傳の師は靈山の聽衆なり。所傳の釋は諸宗の憑據なり。委曲の依憑、共に別の卷に有り。頌に曰はく、  
 妙法一乘の宗を傳へんが爲に、分に隨ひ敬つて十勝の文を造る

無相の妙法は是非無し、機に随ひ法を説くに權實有り  
 法華の本法は時機を待つ、體内の權實は内證の境なり  
 今、十勝を擧げて後學に示す、此傳法の諸の功德を以て  
 法を謗り人を謗る者に悲施す、先に佛道を成じて衆生を利せん  
 一び斯文を覽る諸の衆生は、三生に畢竟じて正位に入らん

法華秀句畢



縮陽十、一五一頁。天台一家教相判釋の天台大要を録し、兼て觀心門として二十五方便及び圓教の十乘を略す。

【論觀】本書の著者、高麗國の沙門宋の建隆二年台藉を奉じて支那に渡り、義寂に師事す。其間五時八教の大要を録す、是れ本書一卷なり。

【一】能立教主を明す。  
【天台智者大師】名は智顛、字は徳安、頤川の人、支那天台の開祖、壽六十にして寂す。

【二】五時八教の名目を擧ぐ。  
【華嚴の時】釋尊成道直後三七日間の説かれたる深遠の教を指す。  
【鹿苑の時】華嚴の時次に凡そ十二年間劣機に對して説かれたる教。  
【方等の時】鹿苑

# 天台四教儀

高麗沙門諦觀錄す

天台智者大師、五時八教を以て東流一代の聖教を判釋したまふに、罄きて盡きざること無し。

五時と言ふは、一に華嚴の時、二に鹿苑の時を説く。三に方等の時、嚴三昧「金光明」勝鬘等の經をよみ、四に般若の時「摩訶般若」「光讚般若」「金剛般若」五に法華涅槃の時なり。是を五時と爲し、亦是五味と名く。八教と言ふは、頓、漸、秘密、不定、藏、通、別、圓なり。是を八教と名く。頓等の四教は是れ化儀なり。世の藥方の如し。藏等の四教を化法と名く、藥味を辨ずるが如し。是の如き等の義、廣文に散在せり。

今「大本」に依て略して綱要を録す。初に五時、五味及び化儀の四教を辨じ、然して後に藏、通、別、圓を出さん。

第一に頓教とは、即ち華嚴教なり。部、時、味等に從へて名けて頓と爲ることを得。謂ゆる如來初めて正覺を成じ、寂滅道場に在して四十一位の法身の居士及び宿世に根熟せる天龍八部、一時に圍繞して雲の月を籠めるが如し。爾時、如來、盧舍那の身を現じて圓滿修多羅を説きたまふ。故に頓教と言ふ。若し機に約し教に約すれば、未だ權を兼ぬること

に次ぐ八年間の説法。【般若の時】方等以後二十二年間の説法教化。

【法華涅槃の時】般若の後八年間、闍維一實の説法と佛入滅の折の教法を、括して言ふ。

【五味】乳、酪、生酥、熟酥、醍醐の五味を言ふ。

【化儀】衆生教化の形式的分類。

【化法】衆生教化の教理的分類。

【三】所依の典籍と本書説述の次第を明す。

【大本】法華玄義淨名玄義等を指す。

【四】化儀の四教中第一の頓教の旨を詮す。

【部、時、味】部は部類、時は五時(三照五時も含む)味は五味の譬。

【法身の入土】一分の無明を破し、一分の中道を證せる菩薩。

を免れず。謂く初發心時便成正覺等の文は、圓機の爲に圓教を説くなり。處處に行布次第を説くは即ち權機の爲に別教を説くなり、故に部に約して頓と爲し、教に約して兼と名く。此經の中に云はく、「譬へば日出でて先に高山を照すが如し」と第一時。「涅槃」に云はく、「譬へば牛より乳を出すすが如し」と。此れは佛より十二部經を出すなり。味。一に乳。【法華】の信解品に云はく、「即ち傍人を遣して急に追うて將めて還らしむ、窮子驚愕して怨なりと稱して人に喚ぶ」等と。此は何の義をか領せる。答ふ、諸の聲聞、座にあれども聾の如く瘖の若し等是れなり。

第二に漸教とは此より下の三時三味を總つ。次に三乘の根性、頓に於て益無きが爲の故に、寂場を動せずして鹿苑に遊び、舍那珍御の服を脱いで丈六弊垢の衣を著す。兜率より降下し摩耶の胎に托し、胎に住し胎を出で、妃を納れ子を生じ、出家苦行すること六年の已後、木菩提樹の下にて草を以て座となし、劣應身を成ずることを示す。初め鹿苑に在して、先に五人の爲に四諦、十二因縁、事の六度等の教を説きたまふ。若し時に約すれば則ち日、幽谷を照すなり。第二時。若し味に約すれば則ち乳より酪を出す、此れは十二部經より九部の修多羅を出すなり。味。二に酪。信解品に云はく、「而も方便を以て密に二人聲聞の形色憔悴して威徳無き者を遣す。汝、彼に詣つて徐に窮子に語る可し、汝を雇ふことは糞を除はしめんとなり」と。此は何の義をか領せる。答ふ、頓の後に次で三藏教を説く、二十年の中に常に糞を除はしむ。即ち見思の煩惱を破する等の義なり。



【圓滿修多羅】圓教の意。

【行布次第】行布は教門の配列、次第は位次の數。

【五】化儀四教の第二漸教を明す。

【漸教】調機入實の方便教。

【寂苑を動ぜずして鹿苑に遊び】大小二乘の説法二始同時なるを証す。

【舍那珍御の服】華嚴經大の教を指す。

【丈六寮垢の衣】小乘漸教を指す。

【劣塵身】地前の凡夫二乘に對して應現する丈六の佛身。

【五人】陳如、頌轉、跋提、十力迦葉、俱利伽藍比丘の六度。六度とは檀那、尸羅、羼提、毘梨耶、禪那、般若の六波羅蜜。

【九部の修多羅】兜率所説の小乘教

【三藏教】經、律

【三藏教】經、律

天台四教儀

次に方等部を明さば、『淨名』等の經なり。偏を彈じ、小を折し、大を敷じ、圓を褒す。

四教俱に説く、藏を半字の教と爲し、通、別、圓を滿字の教と爲す。半に對して滿を説く、

故に對教と言ふ。若し時に約すれば則ち食時なり。第三時。若し味に約すれば則ち酪より生酥を

出す、此れは九部より方等を出すなり。三に生酥味。信解品に云はく、『是を過ぎて已後、心相體信

し入出に離り無し、然れども其所止は猶木所に在り』と。此は何の義をか領せる。答ふ、三

藏の後に次で方等を説くに、已に道果を得て心相體信じ、罵を聞けども瞋らず、内に慙

愧の心を懷いて心漸く淳淑するなり。

次に般若を説いて轉教、付財、融通、淘汰す。此諸部の『般若』の中には藏教を説かず、

通、別の二を帯びて正しく圓教を説く。時に約すれば則ち寓中の時なり。第四時。味に約すれば

則ち生酥より熟酥を出す。此は方等の後より摩訶般若を出すなり。酥味。信解品に云はく

『是時に長者疾あつて自ら將に死なんこと久しからずと知つて、窮子に語つて言はく、

『我今多く金銀珍寶あつて倉庫に盈溢せり、其中の多少所應に取與せよ』と。此れは何の義

をか領せる。答ふ、方等の後に次に般若を説くことを明す。般若の觀慧は即ち是れ家業な

り、空生身子勅を受けて轉教す、即ち是れ領知等なり、已上の三味は華嚴の頓教に對して

總じて名けて漸と爲す。

第三に秘密教とは、前の四時の中の如き、如來の三輪、不思議なるが故に、或は此人の

爲に頓を説き、或は彼人の爲に漸を説く。彼此互に相知らずして能く益を得しむ、故に秘

密

密

密

密

密

論を三藏と言ふも今は小乘教の意。

【見思の煩悩】眞理に迷ふ見惑と事物に迷ふ思惑の二煩悩。

【六】漸教中の第二方便を明す。

【方等部】五時中の第三時にして廣く四教を説いて小乘を拆し大乘を褒歎し以て二教の優劣を示す。

【淨名】維摩經の異名。

【道果】小乘の最上果たる阿羅漢果。

【七】漸教の第三般若の時を説す。

【轉教】二乗が佛に代りて大乘の菩薩の爲に大乘の法を説くを言ふ。

【寄生身子】須菩提と舍利弗。

【八】化儀の中第三秘密教を明す。

【三】神通輪、正教輪、記心輪。

密教と言ふ。

第四に不定教とは、亦前の四味の中に由る。佛一音を以て法を演説し、衆生、類に隨つて各解を得。此れ則ち如來不思議の力、能く衆生をして、漸説の中に於て頓の益を得、頓説の中に於て、漸の益を得しむ。是の如く得益不同なり、故に不定教と言ふ。然るに秘密、不定の二教、教の下義理は只是れ藏、通別、圓なり。化儀の四教此に齊る。

次に法華を説く。前の頓、漸を聞して非頓非漸に會入す、故に開權顯實と言ひ、又は廢權立實と言ひ、又は會三歸一と言ふ。權實と言ふは、名は今昔に通ずれども義意不同なり。謂く法華已前は權實同じからず、大小相隔てり。華嚴の時の如きは一權一實別は權。各相即せず、大は小を納れず、故に小は座に在りと雖も、譬の如く瘡の若し。是故に所説の法門、廣大圓滿なりと雖も、機を攝すること盡さざれば如來出世の本懷を暢べたまはず。

所以はいかん、初の頓部に一疊別。一妙教。あり、一妙は則ち法華と無二無別なり。若し是れ一疊は須く法華に開會し廢し了るを得て方に始て妙と稱すべし。次に鹿苑は但疊にして妙無し。次に方等は三疊別。通、一妙教。なり。次に般若は二疊別。一妙教。なり。法華會上に來至して總じて前の四味の疊を開會し廢して一乘の妙と成さしむ。諸味の圓教は更に開す須らず、本自ら圓融なれば開を待たざるなり。但是れ部に兼、但、對、帶す故に法華の淳一無雜に及ばず。獨り妙の名を得良に所以有るなり。故に文に云はく、一十方佛土の中には唯一乘の法のみ有つて二も無く亦三も無し」と一。『正直に方便を捨てて但

【化儀の四教】此に齊る。化儀の四教は法華以前の四時に通じて法華に通ぜず。故に斯く言ふ。

【五時の第五法華涅槃の時の中先づ法華を明す。】

【法華】法華以前は頓漸の二別なり、法華は頓即して化儀を説くる必要なし。故に非頓非漸なり。

【法華】法華以前は頓漸の二別なり、法華は頓即して化儀を説くる必要なし。故に非頓非漸なり。

【法華】法華以前は頓漸の二別なり、法華は頓即して化儀を説くる必要なし。故に非頓非漸なり。

【法華】法華以前は頓漸の二別なり、法華は頓即して化儀を説くる必要なし。故に非頓非漸なり。

天台四教儀

無上道を説くと一。但菩薩の爲にして小乘の爲にせずと一。世間の相常住なりと一。

時の人未だ法華の妙旨を得ず、但部内に三車、窮子、化城等の譬あるを見て、乃ち餘經に及ばずと謂へり。蓋し重て前の四時の權を擧げて獨り大車を顯し、但家業を付し、唯寶所に

至ることを知らず、故に誹謗の咎を致すなり。時に約すれば則ち日輪午に當つて、罄く側

影無し時。味に約すれば則ち熟酥より醍醐を出す。此は摩訶般若より法華を出すなり。醍醐

味。信解品に云はく、「親族を聚會して即ち自宣言すらく、此れ實に我子、我は實に其

父なり、今の吾所有は皆是れ子の有なり、家業を付與す。窮子、歡喜して未曾有なること

を得たり」と。此は何の義をか領せる。答ふ、即ち般若の後に次に法華を説く。先に已に庫

藏の諸物を領知すれば、命終の時に臨んで直に家業を付するのみ。前に轉教して皆法門を

知れば、法華を説く時は、佛の知見に開示し悟入して授記作佛するのみなるを譬ふ。

次に大涅槃を説く時は、佛の知見に入らしむ、故に捨捨の教と名く。二には末代の鈍根、佛法の

談じ、眞常を具して大涅槃に入らしむ、故に捨捨の教と名く。二には末代の鈍根、佛法の

中に於て斷滅の見を起し、慧命を天傷し、法身を亡失するが爲に、三種の權を設けて一圓

の實を扶く、故に扶律談常の教と名く。然るに若し時味を論ずれば法華と同じ。其部内を

論ずれば純雜小く異なり。故に文に云はく、「摩訶般若より大涅槃を出す」と。前の法華

に此經を合せて第五時と爲すなり。問ふ、「此經に四教を具すると、前の方等部に具に四教

を説くと、同と爲んや異と爲んや。」答ふ、「名同じくして義異なり、方等の中の四は、圓

【兼、但、對、帶】

【兼、但、對、帶】

五

兼は華嚴の圓に別  
兼ぬるを言ひ、  
但は鹿苑の但小乘  
の三藏教を説く  
みなるを言ひ、對  
は方等の圓は藏通  
別に對して説かれ  
たるが故に、帶に  
般若の深別を帶び  
て他教を離へ隔つ  
るを言ふ。

【世間の相常】住  
悟理の智見を以て  
すれば世間差別の  
當相は其處常住不  
變の眞理なり。

【寶所】百由旬  
の化城に對して五  
百由旬の眞實の城  
を寶所と言ふ。

【佛の智見】中道  
の理を照す佛の智  
慧(佛智)と、中道  
の理を見る佛の眼  
(佛見)を言ふ。

【一】第五法華涅槃  
の時の中、涅槃  
を證す。

【拈拾の教】當座  
三種の教。

【三種の權】前三  
種の戒定慧。

【扶律談常の教】

は則ち初後俱に常を知る。別は則ち初め知らず、後方に知る。藏、通は則ち初後俱に知らず、涅槃の中の四は初後俱に知る。

問ふ、「五味を將て五時の教に對す、其意如何ん」。答ふ、「二あり。一には但相生の次第を取る。謂ゆる牛を佛に譬へ、五味を教に譬ふ。乳は牛より出で、酪は乳より生ず。二、醃醢次第亂れず。故に五時相生の次第に譬ふ。二には其濃淡を取る。此れ則ち一番下劣の根性を取るなり。謂ゆる二乘の根性、華嚴の座に在れども、信ぜず、解せず、凡情を變ぜず、故に其乳に譬ふ。次に鹿苑に至つて三藏經を聞いて、二乘の根性、教に依つて修行し凡を轉じて聖と成る、故に乳を轉じて酪と成すに譬ふ。次に方等に至つて聲聞を彈斥するを聞いて、大を慕ひ小を恥ぢ通教の益を得、酪を轉じて生酥と成すが如し。次に般若に至つて勅を奉けて轉教し、心漸く通泰して別教の益を得、生酥を轉じて熟酥と成すが如し。次に法華に至つて三周の説法を聞いて得記作佛す、熟酥を轉じて醍醐と成すが如し。此は最鈍根の具に五味を経るに約す。其次の者は或は一、二、三、四を經、其上達の根性は味味に法界實相に入ることを得、何ぞ必ずしも須らく法華の聞會を得つべけんや。」上來已に五味、五時、化儀の四教を録すること大綱此の如し。

【白下は化法の四教を明す。第一に三藏教とは、一には修多羅藏、四阿含等、二には毘尼藏、五部つ、三には阿毘曇藏等の論、婆沙なり。此三藏の名大小に通ず、今は小乘の三藏を取るなり。】

【大智度論】に云はく、「迦旃延子、自ら聰明利根なるを以て、婆沙の中に於て三藏の義を明

【未代】贖命の涅槃。

【三】涅槃經の五味の譬を以て一代五時の説法を判ずる所以を明す。

【相生の次第】佛が華嚴より順華涅槃に至るまで順序次第して説き給ふを牛より乳を出し乃至熟酥より醍醐を出す五味に喩へしなり。

【濃淡を取る】五味の濃淡轉化を以て根性の生熟轉變を證す。

【三周の説法】法説周、譬喩周、因緣周の三種の説法

【一】一味、二味、三味、四味。

【二】化法の四教中、先づ三藏教の旨を證す。

【迦旃延子】佛十大弟子の一、論議

【婆沙】婆沙論。

【衍經】摩訶衍經の略、即ち大乘經

【四空處】空無邊

す、衍經を讀まざれば大菩薩に非ず」と。又「法華」に云はく、「小乗に食著する三藏の學者」と。此等の文に依る、故に大師、小乗を稱して三藏教と爲したまへり。此に三乘の根性あり。初に聲聞の人は生滅の四諦の教に依る。四諦と言ふは、一には苦諦なり、二十五有の依正の二報是なり。二十五有と言ふは、四洲と、四惡趣と、六欲と、並に梵天と、四禪と四空處と、無想と、五那含となり。四洲と四惡趣と八と成る、六欲天と并に梵天と十五と成る、四禪と四空處と二十三と成る、無想天及び那含天と二十五と成る。別すれば則ち二十五有、總すれば則ち六道の生死なり。一には地獄道、梵語には捺洛迦又は泥黎と譯ふ、此には苦具と翻す。而して地獄と言ふは、此處地の下に在り、故に地獄と言ふ、謂く八寒、八熱等の大獄なり、各眷屬あつて其類無數なり。其中に苦を受くる者の其業に隨つて、各輕重あり、劫數を經る等なり。其最も重き處は一日の中に八萬四千の生死あり、劫を經ること無量なり。上品の五逆、十惡を作る者は此道の身を感ず。二には畜生道、亦是傍生と言ふ。此道は徧く諸處に在り。披毛、戴角、鱗甲、羽毛、四足、多足、有足、無足、水陸空行、互に相呑噬して苦を受くること窮り無し。愚癡貪欲にして中品の五逆十惡を作る者此道の身を感ず。三には餓鬼道、梵語には閻黎哆、此道も亦諸趣に徧じ、福德ある者は山林塚廟の神と作る、福德無き者は不淨處に居して飲食することを得ず。常に鞭打を受けて河を填め海を塞ぎ苦を受くること無量なり。詔誰の心意にして下品の五逆十惡を作るもの此道の身を感ず。四には阿修羅道、此には無酒又は無端正又は無天と翻す。或は海岸海底に在つて宮殿嚴飾せり、常に鬪戰を好み怖懼り無し。因に在るの時猜忌の

處、謾無邊處、無所有處、非想非非想處。

【無想】無想天。

【五那合】無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天。

【未到定】又未至定と音ふ。八近分定中初禪の近分定は他のそれと異なるが故に特に此名を附す。

【嶺有の苦諦】三界には實生實滅の苦相のみありて樂の性なし。此理決定して眞實なるを苦諦と言ふ。

【四住】見一切處住地、欲愛住地、色愛住地、無色愛住地。

【染汚無知】二無知の中、染汚無知は無明を體とせるものなり。

【枝末無明】見思は無明を體とするが故に。

【通惑】三乘通斷の惑。

心を懷き、五常を行ずと雖も他に勝んことを欲するが故に、下品の十善を作るもの此道の身を感ず。五には入道、四淵同じからず、謂はく東弗婆提壽五百、南閻浮提壽一百、西嚮耶尼壽二百五、北鬱單越に出でたまはず、即ち八難の一なり。皆苦樂相聞はる、因に在るの時五常五戒を行ず、五常とは仁義禮智信なり、五戒とは不殺不盜不邪淫不妄語も不飲酒なり、中品の十善を行ずるもの此道の身を感ず。六には天道、二十八天同じからず、欲界の六りの十八天、無初に欲界の六天とは、一には四天王天、須彌山の腹に居す。二には忉利天、須彌山の頂に居す。三には夜摩天、四には兜率天、五には化樂天、六には他天あり、已上の二天は單に上品の十善を修して其中に生ずることを得。三には夜摩天、四には兜率天、五には化樂天、六には他天あり、已上の四天は空居なり、上品の十善を修し兼つて色界の十八天、分つて四禪と爲す。初禪に三天あり、輔、大梵、一、二禪に三天あり、光、光音、三禪に三天あり、少淨、無量、四禪に九天あり、無雲、福生、廣果、已上の三天は凡夫の住處なり。上品の十善を修し禪に坐する者、其中に生ずることを得、無想天は外道の所居なり。無煩、無熱、善見、善現、色究竟、已上の五天は第三果の居處なり。上の十八天、欲の麤散を離るれども、三には無色界の四天未だ色塵を出でず。故に色界と名く。坐して禪定を得るが故に禪の名を得。三には無色界の四天空處、講處、無所有處、非想非非想、已上の四天は、只四陰のみあつて色羅無し。故に名を得るなり。上來釋する所、地獄より非非想天に至るまで、然も苦樂不同なりと雖も未だ生じて而も復死し、死し已つて還生することを免れず、故に生死と名く。此は是れ藏教實有の苦諦なり。二に集諦とは、即ち見思の惑なり。又は見修と云ひ、又は四住と云ひ、又は染汚無知と云ひ、又は取相の惑と云ひ、又は枝末無明と云ひ、又は通惑と云ひ、又は界内の惑と云ふ。名、同じからずと雖も但見思なるのみ。初に見惑を釋するに八十八使あり。謂ゆる一には身見、二には邊見、三には見取、四

には戒取、五には邪見使。六には貪、七には瞋、八には癡、九には慢、十には疑なり。  
 已上鈍此十使、三界の四諦の下に歴て増減同じからず、八十八と成る。謂く欲界の苦に十  
 使具足す、集滅に各七使あり、身見、邊見、戒取を除く。道諦に八使あり、身見、邊見を  
 除く。四諦の下合せて三十二と爲る。上二界の四諦の下も餘は皆欲界の如し、只諦毎の下  
 に於て瞋使を除く、故に一界に各二十八あり。二界合して五十六と爲る、前の三十二を  
 併せて合して八十八使と爲すなり。二に思惑を明さば、八十一品あり。謂く三界を分つて  
 九地と爲す。欲界を合して一地と爲し、四禪と四定とを八と爲し、共じて九地と爲す。欲  
 界の一地の中に九品の貪、瞋、癡、慢あり。九品と言ふは上の上、上の中、上の上、  
 中の中、中の下、下の上、下の中、下の下なり。上八地に各九品あり。瞋使を除く。故に八  
 十一と成るなり。上來、見、思同じからざれども、總じて是れ藏教實有の集諦なり。三に滅  
 諦とは、前の苦集を滅して偏眞の理を顯す、滅に因つて眞に會す、滅は眞諦に非ず、四に  
 道諦とは、略すれば則ち戒、定、慧、廣すれば則ち三十七の道品なり。此三十七を合して七科  
 と爲す。一には四念處、二には身は不淨なりと觀す。二には受は是れ苦なりと觀す。三  
 には心は無常なりと觀す。四には法は無我なりと觀す。想、行二には四正勤、一には未  
 生の惡は生ぜざらしむ、二には已生の惡は滅せしむ、三には未生の善は生ぜしむ、四には已  
 生の善は增長せしむ。三には四如意足、進、慧、四には五根、信、進、念、一には五力、上  
 の根の六に  
 は七覺支、念、擇、進、喜、七には八正道なり。正見、正思惟、正語、正業、已上の七科は即ち是れ藏  
 輕安、定、捨、

【廣狹勝劣】藏教

は生滅の四諦にし

て狭劣、通教は無

勝、別教は無量の

四諦にして廣劣、

同教は無作の四諦

にして廣勝なり。

【生滅】生滅の四

諦。是は有に著す

る見思の惑の重き

者の爲に六道三界

の色心二法は實生

藏教の所詮なり。

【無生】無生の四

諦。見思の惑の輕

教生滅の道諦なり。然るに前に列ぬる所の四諦の名數の如きは下の三教に通ず、但是れ教の廣狹勝劣に隨つて、生滅、無生、無量、無作の不同あるのみ。故に下に向つて名數は更に再び列ねず。然るに四諦の中に世、出世を分つ。前の二諦を世間の因果と爲し集は因。後の二諦を出世間の因果と爲す。道は因。問ふ、「何が故ぞ世、出世に果を前にし因を後にするや。」答ふ、「聲聞は根、鈍にして苦を知つて集を斷じ、果を慕つて因を修す、是故に然なり。」略して藏經の修行の人と位とを明さん。初に聲聞の位を明すに二を分つ、初には凡、二には聖なり。凡に又二つ、外凡と内凡なり。外凡を釋するに自ら三を分つ、初には五停心、一には多貪の衆生は不淨觀、二には多瞋の衆生は慈悲觀、三には多散の衆生は數息觀、四には愚癡の衆生は因緣觀、五には多障の衆生は念佛觀なり。二には別相念處なり。念處の如きは三には總相念處、一には身は不淨なりと觀すれば、受、心、法も皆不淨なり、乃至法は無我なりと觀すれば、身、受、心も亦無我なり。中間は例して知れ、已上の三科を外凡と名け、二に内凡を明さば四あり、謂く煖、頂、忍、世第一なり。此四位を内凡と爲し、亦是加行の位と名く。の内凡、外凡を總じて凡位と名け、亦是七方便の位と名く、次に聖位を明すに亦三を分つ、一には見道果、二には修道果、三には無學道果。なり。一には須陀洹、此には預流と翻す、此位に三界の八十八使の見惑を斷じて眞諦を見るが故に、名けて見道と爲し、又は聖位と名く。二には斯陀含、此には一來と云ふ。此位に欲界の九品の思を斷ずる中、前の六品を斷じ盡して後の三品猶在り、故に更に一び來る。三には阿那含、此には不來と云ふ。此位



【四】藏教の修行の人と位を明す中先づ聲聞を明す中【外凡】智力最も弱く未だ伏惑すら爲し足はぬ位【内凡】惑を伏して相似の諸理を見る位。

【五停心】五法に安住して五過を止息するを言ふ。

【別相念處】各別の行相を以て四念處等を行ずるを言ふ。

【總相念處】總合して行相を念處するを言ふ。

【懷、頂、忍、世第一】聖道に近づきて無漏の智火漸く起るは懷法。前の煖位に居るは忍位の中間に居るは頂法。四諦の理を忍可樂欲し、煩惱を忍伏忍耐する力最も勝るは忍法。世間有漏法中最勝なるが故に世第一法と言ふ。

【見道】七方便を

に欲の殘思を斷じ盡して、進んで上八地の思を斷ず。四には阿羅漢、此には無學と云ひ、又は無生と云ひ、又は殺賊と云ひ、又は應供と云ふ。此位は見思を斷じて俱に盡す。子縛已に斷じて果縛猶在れば有餘涅槃と名く。若し灰身滅智すれば無餘涅槃と名け、又は孤調解脫と名く。略して聲聞の位を明すこと竟んぬ。

次に緣覺を明さば、亦是獨覺と名く。佛の出世に值うて十二因緣の教を稟く、謂ゆる一には無明煩惱障、二には行支は過去に屬す、三には識分の氣息、四には名色、色は是れ質、五には六入此れ胎中、六には觸胎、七には受り受に至るを現在の五果と名く、八には愛、色を男女金銀錢物、九には取來の因にして皆煩惱に屬す、過去の無明の如し。十には有、業已に成就す等道に屬す、過、十一には生事なり。十二には老死、此は是れ所滅の境なり。前の四諦と聞去の行の如し。十一には生事なり。十二には老死、此は是れ所滅の境なり。前の四諦と聞合の異なるのみ。云何が閉合する、謂はく無明、行、愛、取、有、此五支を合して集諦と爲し、餘の七支を苦諦と爲るなり。既に名異にして義同じ、何が故ぞ重て説く、機宜不同なるが爲の故なり。緣覺の人は先に集諦を觀ず、謂ゆる無明は行に緣たり、行は識に緣たり、乃至生は老死に緣たりと、此れ則ち生起なり。若し滅觀は、無明滅すれば則ち行滅す、乃至生滅すれば則ち老死滅するなり。十二因緣を觀じて眞諦の理を覺るに因る、故に緣覺と言ふ。獨覺と言ふは、無佛世に出で、獨り孤峰に宿し、物の變易を觀じて自ら無生を覺る、故に獨覺と名く。兩名同じからざれども行位別無し。此人は三界の見思を斷ずること聲聞と同じ、更に習氣を侵すが故に聲聞の上に居す。

修し、八十八使の見惑を斷じて後始めて四諦の理を證見するが故に。

【修道】 數數修習して八十一品の思惑を斷ずるが故に。

【無學道】 一切の煩惱を斷盡して更に學修すべき所無きが故に。

【灰身滅智】 二乘の人が三界の煩惱を斷盡して火光三昧に入り、身を燒き心を滅して空寂の涅槃に歸するを言ふ。

【五】 前の聲聞に序で次に緣覺の修行の人と位を明す

【二】 三藏教の修行の人と位を明す中、第三菩薩の位を註す。

(一六) 次に菩薩の位を明さば、初發心より四諦の境を緣じて、四弘願を發し、六度の行を修す。一には未だ度せざる者をは度せしめん、即ち衆生無邊誓願度なり。此は苦諦の境を緣す。二には未だ解せざる者をは解せしめん、即ち煩惱無盡誓願斷なり。此は集諦の境を緣す。三には未だ安んぜざる者をは安んぜしめん、即ち法門無量誓願學なり。此は道諦の境を緣す。四には未だ涅槃を得ざる者をして涅槃を得しめん、即ち佛道無上誓願成なり。此は滅諦の境を緣す。既に已に發心す、須らく行を行じて願を填つべし。三阿僧祇劫に於て六度の行を修し、百劫に相好を種う。三阿無僧祇數劫時と言ふは、且く釋迦の菩薩の道を修する時に約して分限を論せば、古の釋迦より尸棄佛に至るまで、七萬五千佛は值へるを初阿僧祇と名く。此より常に女身及び四惡趣を離れ、常に六度を修す。然も自ら當に作佛すべきを知らず。若し聲聞の位に望むれば即ち五停心、總、別の念處凡。なり。次に尸棄佛より燃燈佛に至るまで、七萬六千佛に值へるを第二阿僧祇と名く。此時七葉の蓮華を用て供養し髮を布き泥を掩うて、記莖を受けて釋迦文と號することを得。爾時自ら作佛を知れども口に未だ説くこと能はず。若し聲聞の位に望むれば即ち煥位なり。次に燃燈佛より毘婆尸佛に至るまで、七萬七千佛に值へるを第三阿僧祇の滿と名く。此時自ら知り亦人に向て必ず當に作佛すべしと説く。自他疑はず。若し聲聞の位に望むれば即ち頂位なり。如許の時を経て六度を修し竟る。更に百劫に住して相好の因を種う、百福を修して一相を成す。福の義は多途なり、定判すべきこと難し。有が云はく、「大千の盲人を治し差やすを一福と爲す」等と。六度

【三十四心】九地九品、九無礙九解脱を合して十八を合して十六と爲し前と總合して三十四となる。  
 【梵王の請】梵天は深く正法を信じ佛出世毎に必ず最初に來つて佛に轉法輪を請ふ。  
 【三たび法輪を轉じ】示轉、勸轉、證轉。  
 【三根性】聲聞、緣覺、菩薩。  
 【一七】化法の第二通教の旨を明す。  
 【無言説の道】通教は諸法を如幻如化と了達して因縁事法の言説を離るる觀智に住するが故に。  
 【色を體して空に入る】因縁事法の當體其儘空なりと觀す。  
 【大品經】大品般若經第十九卷楞伽深奧品。  
 【理水】四諦の理

を修行するに、各滿の時あり。尸毘王の鵠に代るは檀の滿、普明王の國を捨るは尸の滿、驪提仙人の歌利王の爲に割哉せられて恨むこと無きは忍の滿、大施太子の海を打ち并に七日足を翹げて弗沙佛を讚するは進の滿、尙闍梨の鵠頂上に巢ふは禪の滿、劬嬖大臣の閻浮提を七分に分つて諍を思むるは智の滿なるが如し。初の聲聞の位に臨むれば是れ下忍の位なり。次に補處に入つて兜率に生じ、胎に托し、胎を出で、出家、降魔、安坐して動ぜざるを中忍の位と爲す。次の一刹那に上忍の位に入り、次の一刹那に世第一の位に入る。眞無漏を發して三十四心に頓に見思の習氣を斷じ、木菩提樹の下に坐して生草を座と爲し、劣應丈六身の佛と成る。梵王の請を受けて三たび法輪を轉じ三根性を度す、住世八十年老比丘の相を現じ、薪盡き火滅して無餘涅槃に入るは、即ち三藏の佛果なり。上來釋する所、三人の修行證果則ち不同なりと雖も然も同じく見思を斷じ、同じく三界を出で同じく眞眞を證す。只三百山句を行きて化城に入るのみ。略して藏教を明すこと畢んぬ。  
 次に通教を明さば、前の藏教に通じ、後の別、圓に通ず、故に通教と名く。又當教に従へて名を得、謂はく三人同じく無言説の道を以て、色を體して空に入る、故に通教と名く。  
 『大品經』に依るに乾惠等の十地あり、即ち是れ此教の位次なり。一には乾惠地、未だ理水あらず、故に其名を得、即ち外凡の位なり。藏教の五停心、總別等の三位と齊し。二には性地、相似に法性の水を得て見思の惑を伏す、即ち内凡の位なり。藏教の四善根と齊し。三には八人地、四には見地、此二位無間三昧に入つて、三界の八十八使の見を斷じ盡して、

【無間三昧】坐禪入定して間斷無く無生の觀智の出づる三昧。

【習】習氣にして煩惱の餘蘊。

【遊觀雙流】内には空觀を以て見思を破し、外には假觀を用ひて化他に赴き、自行化他兩行を雙修す。

【遊戲神通】遊戲は無執着を示し、神通は菩薩が色身を現じて衆生を化する妙用を言ふ。

【七寶菩提樹】通教は藏教より勝れるを以て斯く言ふ。

【帶劣勝勝身】應身と謂ふも高深理に帶着するは帶劣に勝劣なり。

【果頭の佛】是れ通教の佛果也。

【最高位の佛果】然し事實は通教としての佛無し。

【鈍は三藏の佛果】鈍は三藏の佛果に入り利は別賢に被接するが故なり。

【無漏を發し眞諦の理を見る。藏教の初果と齊し。五には薄地、欲界九品の思の前六品を斷す。藏教の二果と齊し。六には離欲地、欲界九品の思を斷じ盡す。藏教の三果と齊し。七には已離地、三界見思の惑を斷じ盡す、但正使を斷じて習を侵すこと能はず、木を焼いて炭と成すが如し。藏教の四果と齊し。聲聞の位、此に齊る。八には辟支佛地、更に習氣を侵す、炭を焼いて灰と成すが如し。九には菩薩地、正使を斷じ盡すこと二乗と同じ。習を扶けて生を潤し、道觀雙流、遊戲神通して佛國土を淨む。十には佛地、機縁若し熟すれば一念相應の恵を以て頓に殘習を斷じ、七寶菩提樹の下に坐して天衣を以て座と爲し、帶劣勝勝身を現じて成佛す。三乘の根性の爲に無生四諦の法輪を轉じ、緣盡くれば入滅す。正習俱に除く、炭灰俱に盡くるが如し。經に云はく、「三獸河を度る」と。象、馬、兔を謂ふ、斷惑の不同なるを喻ふるが故なり。又經に云はく、「諸法實相は三乘、皆得れども亦佛と名けず」と。即ち此教なり。此教の三乘、因同じく果異なり、證果異なると雖も同じく見思を斷じ、同じく分段を出で、同じく偏眞を證す。然るに菩薩の中に於て三種あり、謂はく利、鈍なり。鈍は則ち但偏空を見て不空を見ず、正當教果頭の佛と成る。行因殊なりと雖も果は藏教と齊し、故に通前と言ふ。若し利根の菩薩は但空を見るのみに非ず、兼て不空を見る。不空は即ち中道なり。二種を分つ、謂はく但、不但なり。若し但中を見るは別教に來接し、若し不但中を見るは圓教に來接す、故に通後と言ふ。問ふ、「何れの位に受接し、進んで何れの位に入るや」答ふ、「受接の人、三根同じからず。若し上根は三地、四地に被接し、中

【不空】當體即空と觀じて有空不二に通過するを言ふ  
 【不空】有空不二は畢竟中道なり  
 【但中】佛界所現の理性のみ中道に稱つて餘の九界は理具にあらず  
 【不但中】十界悉く同一眞如の顯現せるものにして理性本具の徳なり  
 【三地四地】八人見地  
 【五地六地】薄、離欲の二地  
 【七地八地】已辨地、辟支佛地  
 【被接】今は通教の人が當通の分齊を超越して別圓の人となるを言ふ  
 【朱雀門】通教は大乗の初門なるも教は界内に屬するが故に二乘の出入を許す  
 【二八】化法の四教中第三別教を明す

根の人は五地、六地、下根の人は七地、八地なり。所接の教、眞似同じからず。若し似位の被接は別の十廻向、圓の十信位なり。若し眞位の受接は別の初地、圓の初住なり。問ふ、「此藏通二教は同じく是れ三乘、同じく四住を斷じ、止三界を出で、同じく偏眞を證し、同じく三百由旬を行き、同じく化城に入る。何が故に二を分つ」答ふ、「誠に所問の如し。然るに同じにして而も不同なり、所證同じと雖も大小巧拙永く異なり。此二教は是れ界内の教なり。藏は是れ界内の小拙なり、大に通ぜざるが故に小、色を析して空に入るが故に拙なり。此教の三人、當教の内には上中下の異ありと雖も、通の三人に望むれば則ち一槩に鈍根なり。故に須らく析破すべきなり。通教は則ち界内の大巧なり、大は謂く大乘の初門なるが故に、巧は謂く色を體して空に入るが故なり。當教の中の三人、上中下の異ありと雖も、若し藏教に望むれば則ち一槩に利と爲す」問ふ、「教既に大乘なり。何が故ぞ二乘の人あるや」答ふ、「朱雀門の中には何ぞ庶民の出入を妨げん。故に人に小ありと雖も、教は定んで是れ大なり。大乘に小を兼ねて漸く引いて實に入らしむ、豈巧ならずや。般若、方等の部内の共般若等は即ち此教なり」略して通教を明すこと竟んぬ。

次に別教を明さば、此教は界外獨菩薩の法を明す。教、理、智、斷、行、位、因、果前の二教に別に、後の圓教に別なり、故に別と名くるなり。『涅槃』に云はく、『四諦の因縁に無量の相あり、聲聞、緣覺の所知に非ず』と。諸大乘經に廣く菩薩の歷劫修行、行位次第して互に相攝せざることを明すは、此れ並びに別教の相なり。『華嚴』には十住、十行、十廻向を

【金光明】 合部金光明經。

【勝天王】 勝天王般若經。

【五行】 聖行、梵行、天行、病行、嬰兒行。

【七科】 十信、十住、十行、十觀、十地、等覺、妙覺の七。開すれば五十二位となる。

【十信】 在迷の凡夫が佛菩薩の教を受けて隨順して疑はざる位。三界見思の煩惱を伏す。

【伏忍の位】 地前の人は未だ無漏智を得ざるが故に煩惱を斷ずること能はず、只有漏の勝智を以て煩惱を伏する位を言ふ。

【十住】 見思の惑を斷じて空理に安住する位。

【塵沙】 三惑の一化道障の惑。

【習種性】 空觀を習して見思を斷ずるを言ふ。

【從假入空の觀】

賢と爲し、十地を聖と爲し、妙覺を佛と爲ることを明す。『瓔珞』には五十二位を明す。『金光明』には但十地と佛果とを出す。『勝天王』には十地を明す、『涅槃』には五行を明す。是の如く諸經に増減不同なるは、界外の菩薩を機に隨つて利益すればなり。豈定説することを得んや。然るに位次周足するは『瓔珞經』に過ぎたるは莫し。故に今彼に依つて略して菩薩の歷位斷證の相を明す。五十二位を以て束ねて七科と爲す、謂はく信、住、行、向、地、等、妙なり。又七を合して二と爲す、初には凡、二には聖なり。凡に就て又二つ、信を外凡と爲し、住、行、向を内凡と爲す、亦是名けて賢と爲す。聖に約するに亦二つあり、十地、等覺を因と爲し、妙覺を果と爲す。大に分つこと此の如し、白下に細釋せん。初に十信と言ふは、一には信、二には念、三には精進、四には惠、五には定、六には不退、七には廻向、八には護法、九には戒、十には願なり。此十信に三界の見思の煩惱を伏す、故に伏忍の位凡と名く、藏教の七賢の位、通教の乾惠性地と齊し。次に十住を明さば、一には發心住、三界の惑を斷じ盡す。藏教の初果、二には治地、三には修行、四には生貴、五には具足方便、六には正心、七には不退、八には上界の思惑を斷じ盡して、八には童眞、九には法王子、十には灌頂なり。已上の三住は界内の塵沙を斷じ、界外の齊し。亦是習種性と名く、從假入空の觀を用ひて眞諦の理を見、惠眼を開き一切智を成じ、三百由旬を行く。次に十行を明さば、一には歡喜、二には饒益、三には無違逆、四には無屈撓、五には無癡亂、六には善現、七には無著、八には難得、九には善法、十には眞實なり。界外の塵沙の惑を斷ず。亦是性種性と云ふ、從空入假の

萬法は縁生の法（假）にして自性無一實の空理に入るを言ふ。

【三百由旬】 空理を成じて三界の生死を離るるを喻ふ。

【十行】 界外の塵沙を斷じて化他行を行ずる位。

【性種智】 十行の異名なり。

【從空入假の觀】 迷事の法、本無なるを悟り我法の執を離れ、進んで智を以て縁生差別の法に通達して化他するを言ふ。

【道種智】 衆生濟度の化他門の智慧。

【十廻向】 界外の無明を伏して自行の功徳を衆生に廻向する位。又中道觀を修す。

【道種性】 十廻向の異名。

【四百由旬】 塵沙の惑を斷じて假觀を習ひ方便土に生ずるを言ふ。

觀を用ひて俗諦を見、法眼を開き道種智を成す。次に十廻向を明さば、一には救護衆生離衆生相、二には不壞、三には等一切諸佛、四には至一切處、五には無盡功徳藏、六には入一切平等善根、七には等隨應一切衆生、八には眞如相、九には無縛無著解脫、十には入法界無量なり。無明を伏し中ま亦は道種性と名く、四百由旬を行き、方便有餘土に居す。已上の法界無量なり。觀を習ふ。亦は内凡と名く。八住。次に十地を明さば、一には歡喜分の無明を破し、二分の三徳を顯す。乃至等覺と名く。此は是れ見道の位、又無功用の位なり。百界に作佛し八相成道して衆俱に聖種性と名く。此は是れ見道の位、又無功用の位なり。百界に作佛し八相成道して衆生を利益す。五百由旬を行き初めて寶報無障閻土に入り、初て寶所に入る。二には離垢地、三には發光地、四には徼惠地、五には難勝地、六には現前地、七には遠行地、八には不動地、九には善惠地、十には法雲地なり。已上の九地は地地に各一品の無明を斷じ、一分の中道を證す。更に一品を斷じて等覺の位に入る、亦是金剛心と名け、亦は一生補處と名け、亦は有上土と名く。更に一品の無明を破して、妙覺の位に入り、蓮華藏世界七寶菩提樹の下大寶華王の座に坐して圓滿報身を現す。鈍根の菩薩衆の爲に無量四諦の法輪を轉ずるは即ち此佛なり。有經論に七地已前を有功用の道と名け、八地已上を無功用の道と名け、妙覺の位に但一品の無明を破すと説くは、總じて是れ教道に約するの説なり。有處に初地に見を斷じ、二地より六地に至つて思を斷ず、羅漢と齊しと説くは、此乃ち別教の位の名を借りて通教の位に名くるのみ。有は三賢十聖は果報に住す、唯佛一人淨土に居すと云ふは、此れ別教の名を借りて圓教の位を明せるなり。此の如きの流類甚だ衆し。須らく細しく當教斷證の位、何れの位に至つて

【方便有餘土】空假二觀を修して四住は斷ずるも無明未だ盡きざる報土四土の一。  
 【十地】能く佛智を生じ衆生を荷負する位。  
 【聖種性】無明を斷じ中道を證する性分。  
 【五百由旬】前の四百由旬に更に無明と中道觀を加ふるが故に。  
 【實報無障闍土】眞實法を修して感得する色心不二の勝報土。四土の一。  
 【有上土】斷證すべき悉智の尙存するを言ふ。  
 【無量四諦】別教所説の四諦。  
 【二九】化法の四教中、第四圓教を明す。  
 【菴蔔林】菴蔔はチヤンパカ（Tinnaka）の一の香樹なり。  
 【不二法門】事理平等因果不二の法

何れの惑を斷じ、何れの理を證すといふを知るべし。往いて諸教の諸位を判するに通達せざることを無し。略して別教を明すこと竟んぬ。  
 次に圓教を明さば、圓は圓妙、圓滿、圓足、圓頓に名く、故に圓教と名くるなり。謂ゆる圓の伏、圓の信、圓の斷、圓の行、圓の位、圓の自在莊嚴、圓の建立衆生なり。諸の大乗經論に佛の境界を説いて、三乗の位次に共せざるは總じて此教に屬すなり。法華の中の開示悟入の四字を圓教の住、行、向、地に對す、此れ四十位なり。華嚴に云はく、「初發心の時便ち正覺を成す、所有の惠身他に由つて悟らず、清淨妙法身湛然として一切に應ず」と。此は圓の四十二位を明す。「維摩經」に云はく、「菴蔔林の中には餘香を嗅がず、此室に入る者は唯諸佛功德の香を聞く」と。又云はく、「不二法門に入る」と。「般若」には最上乘を明し、「涅槃」には一心の五行を明す。又經に云はく、「人あつて大海に入つて浴すれば、已に一切諸河の水を用ふ」と。又「娑伽羅龍、車軸の雨を澍ぐに、唯大海のみ能く受け、餘地は堪へず」と。又「萬種の香を擣いて丸と爲し、若し一塵を焼けば衆氣を具足す」と。是の如き等の類、竝に圓教に屬す。今且く法華、「璣珞」に依つて略して位次を明すに八あり。一には五品弟子の位に出でたり。二には十信の位凡。三には十住の位初。四には十行、五には十廻向、六には十地、七には等覺の末。八には妙覺なり。初に五品の位とは、一には隨喜品、經に云はく、「若し是經を聞いて、而も毀訾せずして隨喜の心を起す」と。問ふ、「何れの法をか隨喜する」答ふ、「妙法なり」妙法とは即ち是れ心なり。妙



【婆伽羅】シヤーガラ(Sigama) 鹹海の名。

【五品弟子の位】觀行即五品の行を修する位。

【妙心體具】一念の安心に三千の法を具す。

【常境】……無縁なり。境智其體冥合して能所の立たざるを言ふ。

【無縁】……三諦宛然なり。境智俱に存するを言ふ。即ち不二而二なり。

【理即】何等修習の加はらざる衆生本具の佛性を指す

天台四教儀

心體具す、如意珠の如し。心、佛及び衆生、是三差別無し。此心即空、即假、即中なり。常境は無相にして、常智は無縁なり。無縁にして而も縁す、三觀に非ざることを無し。無相にして而も相なり、三諦宛然なり。初心に此を知つて已を慶び人を慶ぶ、故に隨喜と名く。内には三觀を以て三諦の境を觀じ、外には五悔を以て勤めて精進を加へて理解を助成す。五悔と言ふは二あり、一には理、二には事なり。理懺とは、若し懺悔せんと欲せば端坐して實相を念ぜよ、衆罪は霜露の如し、惠日能く消除すと、即ち此義なり。事懺と言ふは、晝夜六時に三業清淨にして尊像に對して過罪を披陳す、無始より已來今身に至るまで、凡そ造作する所の殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、出佛身血、邪淫、偷盜、妄語、綺語、兩舌、惡口、貪、瞋、癡等是の如きの五逆十惡及び餘の一切意に隨つて發露して更に覆藏せず、故きを畢へて新きを造らす。若し是の如くなれば則ち外障漸く除き、内觀増明なり。順流の舟に更に櫓棹を加ふるが如き、豈速疾に所止に到らざらんや。圓行を修する者も亦復是の如し。正しく圓理を觀じ事行相助く、豈速かに妙覺の彼岸に至らざらんや。此説を見て便ち漸行と謂ふこと莫れ、圓頓に是の如き行無しと謂ふは謬の甚しきものなり。何れの處にか天然の彌勒、自然の釋迦あらん。若し纔かに生死即涅槃、煩惱即菩提即心是佛、動ぜずして便ち到る、修習を加へずして便ち正覺を成ずといふを聞いては、十方世界盡く是れ淨土、觸向對面覺者に非ざること無しといふ。今然も即佛なりと雖も、此は是れ理即なり、亦是れ素法身にして其莊嚴無し、何ぞ修證に關る者ならんや。我等愚

一九

輩纔に即空と聞いて便ち修行を廢す、即の所由を知らず、鼠啣鳥空廣く經論に在り、之を尋ね之を思へ。二に勸請とは、十方の諸の如來、身を留めて久住し含識を濟ひたまへと勸請す。三に隨喜とは、諸の善根を隨喜し稱讚す。四に廻向とは、所有の稱讚の善を盡く菩提に廻向す。五に發願とは、若し發心無ければ萬事成ぜず、故に須らく發心して以て前の四を導くべし。是を五悔と爲す。下位の諸位、直に等覺に至るまで、總じて五悔を用ふるも更に再び出さず、此に例して知るべし。二に讀誦品とは、經に云はく、「何に況んや之を讀誦し受持せん者をや」と。謂く、内に圓觀を以てし更に讀誦を加ふ、膏の火を助くるが如し。三に說法品とは、經に云はく、「若しは受持し讀誦し他人の爲に説くもの有らん」と。内解轉勝れて前人を導利す、化の功、己に歸して心前に倍勝す。四に兼行六度とは、經に云はく、「況んや復人あつて能く是經を持ち、兼ねて布施等を行ぜんをや」と。福徳力の故に觀心を倍増す。五に正行六度とは、經に曰はく、「若し人讀誦し他人の爲に説き、復能く戒を持つ」と。謂く自行、化他、事理具足して觀心闊ふること無く、轉前に勝ること比喩すべからず。此五品の位は圓に五住の煩惱を伏す、外凡の位なり。別の十信と同じ。次に六根清淨の位に進む、即ち是れ十信なり。初信に見惑を斷じて眞理を顯す、藏教の初果、通教の八人見地、別教の初住と齊し。位不退を證するなり。次に二信より七信に至つて思惑を斷じ盡す。藏通の二住、別教の七住と齊し。三界の苦集斷じ盡して餘り無し。故に『仁王』に云はく、「十善の菩薩大心を發して長く三界の苦輪海を別る」と。解し

【永嘉大師】名は玄覺、永嘉の人、天台の止觀門に精通し常に禪觀を修す。先天元年寂、又の名を眞覺大師と言ふ。

【無明】一切煩惱の根本なり。又不了一法界の惑と言ふ。

【伊の三點】梵語の母韻のイ字即ち伊は三點より成りて不縱不横なり。

て曰はく、「十善とは、各十善を具するなり。若し別の十信は即ち伏して斷せず、故に定んで圓信に屬す。然るに圓人の本期は見思塵沙を斷せず、意住に入つて無明を斷じ佛性を見るに在り。然るに譬へば鐵を治るに鑿垢先づ去るは本の所期に非ず、意器を成すに在り、器未だ成らざる時自然に先づ落つ、先づ去るを見ると雖も其人一念の欣心無きが如し。所以は何ん、未だ所期を遂げざるが故なり。圓教の行人も、亦復定の如し、木の所望に非ずと雖も自然に先づ落つ。」永嘉大師の云はく、「同じく四住を除く此處を齊しと爲す、若し無明を伏するは三藏則ち劣なり」と、即ち此位なり。解して曰はく、「四住とは、只是れ見思なり。謂く見を一と爲し、見一切處住地と名く。思惑を三に分つ、一には欲愛住地、欲界九品の思なり。二には色愛住地、色界の四地に各九品の思あり。三には無色愛住地、無色界の四地に各九品の思あり。此四住は三藏の佛と六根清淨の人と同じく斷ず、故に同除四住と言ふなり。若伏無明三藏則劣と言ふは、無明は即ち界外障中道の別惑なり、三藏教は止界内の通惑を論ず、無明は名字すら尙知ること能はず、況んや復伏斷をや、故に三藏則劣と言ふなり」次に八信より十信に至るまで、界内外の塵沙の惑を斷じ盡す。假觀現前して俗諦の理を見、法眼を開き道種智を成じ、四百由旬を行く。別教の八、九、十住、及び行、向の位と齊し。行不退なり。次に初住に入つて一品の無明を斷じて、一分の三徳を證す。謂く解脫、般若、法身なり。此三徳は不縱、不横にして世の伊の三點の如く、天主の三日の若し。身を百界に現じ八相成道して廣く群生を濟ふ。『華嚴經』に云はく、「初發心

【天主の三日】摩  
論首羅の三日なり

【分證の果】初住  
以上は内證外用俱  
分に隨つて佛と  
同じきが故に八相  
の佛と成る。

【了因の性】眞如  
の理を照して般若  
の果徳を成滿する  
智性。三因佛性の  
一。

【正因の性】一切  
の邪非を離れ法身  
の果徳を滿する眞  
如性。三因佛性の  
一。

【緣因の性】了因  
を緣助して正因を  
開發し以て解脫の  
徳を成ずる一切の  
善根功徳性。三因  
佛性の一なり。

【念不退】中道の  
正念を退失せず。

の時便ち正覺を成ず、所有の患身他に由つて悟らず、清淨妙法身湛然として一切に應ず」と。解して曰はく、「初發心とは、初住の名なり。便成正覺とは八相の佛を成ずるなり。

是れ分證の果なり、即ち此教の眞因なり。妙覺を成ずと謂ふは謬りの甚しきものなり。

若し是の如くならば二住已去の諸位は徒らに施すならん。若し重説すと言はば、佛に煩重

の咎あらん。位位に各諸位を攝するの言あり、又發心、究竟の二別ならずと言ふと雖も、

須らく攝の所由を知り、細く不二の旨を識るべし。龍女は便ち正覺を成じ、諸の聲聞の人、

當來成佛の記莖を受くるは、皆是れ此位の成佛の相なり。惠身は即ち般若の徳、了因の性

開發す。妙法身は即ち法身の徳、正因の性開發す。應一切は即ち解脫の徳、即ち緣因の性

開發す。此の如きの三身は本有を發得す、故に不由他悟と言ふ。中觀現前し、佛眼を開き

一切種智を成ず、五百由旬を行いて寶所に到り、初めて實報無障閻土に居す、念不退の位

なり。次に二住より十住に至るまで、各一品の無明を斷じて一分の中道を増す。別教の

十地と齊し。次に初行に入つて一品の無明を斷ず。別教の等覺と齊し。次に二行に入る。

別教の妙覺と齊し。三行より已去は別教の人は尙名字すら知らず、何に況んや伏斷をや、

別教は但十二品の無明を斷ずるを以ての故なり。故に我家の眞因を以て汝が家の極果と爲す。只教彌權なれば位彌高く、教彌實なれば位彌下きに緣る。譬ば邊方未だ靜な

らざれば職を借すこと則ち高く、爵を定め勳を論すれば其位置に下きが如し。故に權教には妙覺と稱すと雖も、但是れ實教の中の第二行なり。次に三行已去十地に至るまで、各一

【常寂光土】法身所居の土。三徳祕密藏土とも稱せられ四土の一なり。  
 【六即】理即、名字即、觀行即、相似即、分證即、究竟即、六は差別、即は融即の意。

【二十五方便】顯惑證理の正觀に入る前の方便資助を指す。此名數は本文にあり。

天台四教儀

品の無明を斷じて一分の中道を増す、即ち四十品の惑を斷するなり。更に一品の無明を破して等覺の位に入る、此は是れ一生補處なり。進んで一品の微細の無明を破して妙覺の位に入る。永く無明の父母に別れて究竟して涅槃の山頂に登る、諸法不生なれば般若不生なり、不生不生なるを大涅槃と名く。虚空を以て座と爲し、清淨法身を成じて常寂光土に居す、即ち圓教の佛の相なり。然るに圓教の位次、若し六即を以て之を判ぜずんば則ち多く上聖に濫せん。故に須らく六即をもつて位を判すべし。謂く、「一切衆生皆佛性あり、有佛無佛性相常住なり」と。又云はく、「一色一番中道に非ずといふこと無し」等の言は、總て是れ理即なり。次に善知識に従ひ、及び經卷に従つて此言を聞見するを名字即と爲す。教に依つて修行するを觀行即と爲す。五品の相似の解發するを相似即と爲す。分に破し、分に見るを分證即と爲す。初住より等覺に至る。智斷圓滿するを究竟即と爲す。妙覺の修行の位次に約すれば淺きより深に至る、故に名けて六と爲す。所顯の理體に約すれば位位不二なり、故に名けて即と爲す。是故に深く六の字を識れば上慢を生ぜず、委しく即の字を明むれば自屈を生ぜず、歸すべく依すべし、之を思ひ之を擇べ。略して圓教の位を明すこと竟んぬ。

然るに上の四教に依つて修行する時は、各方便正修あり。謂く二十五方便、十乘觀法なり。若し教教に各明さば其文稍煩はしからん、義意異なりと雖も、名數別ならず、故に今は總じて明す。意を以て知る可し。二十五方便と言ふは東にて五科と爲す、一には具五緣、二には訶五欲、三には棄五蓋、四には調五事、五には行五法なり。初に五緣を明さ

二三

【十乘觀法】十種の法を用ひて能く因より果に至る正

【具五緣】道法を行するに就て先づ必要なる五種の事項を具す。

【訶五欲】對外的障道の過失なる五欲を除く。

【棄五蓋】對内的障道たる五過失を除く。

【調五事】五種の事項を調整して道法を行じ易からしむ。

【行五法】五法を用ひて道法を策進せしむ。

【三衣】僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會なり。譯して衆衆時衣、上衣、中着衣と爲す。

ば、一には持戒、清淨、經の中に説くが如き、此戒に依因て諸禪定及び滅苦の智慧を生ずることを得。是故に比丘應に淨戒を持つべしと。在家、出家、大、小乘の不同あり。二には衣食具足、衣に三あり、一には雪山居士の如き、所得の衣に隨つて形を蔽ふに即ち足れり。人間に遊ばず堪忍力成するが故に。二には迦葉等の如き、糞掃の衣を集め、及び但三衣にして餘長を畜へず。三には多寒の國土には如來も亦三衣の外に百一の衆具を畜ふることを許したまへり。食も亦三あり、一には上根の居士は深山に世を絶ち、茶根草果得るに隨つて身を資く。二には常乞食、三には檀越の送食、僧中の淨食なり。三には閑居靜處、衆事を作さざるを閑と名け、憤悶無き處を靜と名く。處に三あり、衣食に例して知んぬ可し。四には息諸緣務、生活を息め、人事を息め、工巧技術を息むる等なり。五には近善知識に三あり、一には外護の善知識、二には同行の善知識、三には教授の善知識なり。第二に訶五欲、一には色を訶す、謂く、男女の形貌端嚴にして脩目高眉丹唇皓齒なると、及び世間の寶物玄黄朱紫種種の妙色等なり。二には聲を訶す、謂く絲竹環珮の聲、及び男女歌詠の聲等なり。三には香を訶す、謂く男女の身香、及び世間の飲食の香等なり。四には味を訶す、謂く種種の飲食、肴膳美味等なり。五には觸を訶す、謂く男女の身分柔軟細滑なると、寒き時體温かに、熱き時體涼しきと、及び諸の好觸等なり。第三に棄五蓋、謂く貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑なり。第四に調五事、謂く心を調るに沈ならず淨ならず、身を調るに緩ならず急ならず、息を調るに澀ならず滑ならず、眠を調るに節ならず恣ならず、

【觀不思議境】觀  
 是一心三觀、境は  
 吾人現前剎那の妄  
 心。一心三觀を以  
 て剎那の妄心是れ  
 三千三諦なりと觀  
 ずるは不思議なり  
 【善巧安心止觀】  
 止觀に依りて心を  
 三千の諸理に安住  
 せしむる方法なり  
 【破法徧】心の執  
 着を破するを言ふ

食を調るに飢ゑず飽かず。第五に行五法、一には欲、世間の一切の妄想顛倒を離れんことを欲し、一切の諸の禪定智慧門を得んことを欲するが故に。二には精進、堅く禁戒を  
 持し、五蓋を棄て、初、中、後夜に勤行精進するが故に。三には念、世間の欺誑は輕す可  
 く賤しむ可く、禪定智慧は重んず可く貴む可きことを念す。四には巧慧、世間の樂と、禪  
 定智慧の樂との得失輕重等を籌量す。五には一心、念慧分明にして、明に世間は患へつ可  
 く惡む可きことを見、善く禪定智慧の功德は尊む可く貴む可きことを識るなり。此二十五  
 法を四教の前方便と爲す、故に應に須らく具足すべし。若し此方便無くんば世間の禪定す  
 ら尙得べからず、豈況んや出世の妙理をや。然るに前に教を明すに既に漸頓同じからざれ  
 ば、方便も亦異れり。何れの教に依つて修行すとも時に臨んで審量せんのみ。  
 次に正修の十乘觀法を明さば、亦四教名同じく義異なり。今且く圓教を明す、餘教は  
 此れに例せよ。一には觀不思議境、謂はく一念の心を觀するに、具足して三千性相、百界  
 千如を滅すること無し。此境に即して即空、即假、即中なり、更に前後ならず、廣大圓滿に  
 して横豎自在なり、故に法華經に云はく、「其車高廣」と此境を觀す。二には眞正發菩提  
 心、謂く妙境に依つて無作の四弘誓願を發し、己を憫み他を憫みて上求下化す、故に經に  
 云はく、「又其上に於て輻蓋を張り設く」と。三には善巧安心止觀、謂く前の妙理を體して  
 常恆に寂然なるを名けて定と爲す、寂にして常に照すを名けて慧と爲す、故に經に云はく、  
 「丹枕車内の を安置す」と。四には破法徧、謂く三觀を以て三惑を破す、三觀一心惑として

【識通塞】善く情知の得失を識別するを言ふ。

【六蔽】慳貪、破戒、瞋恚、憍念、散亂、愚癡、即ち淨心を蔽ふ煩惱。

【道品調適】常用の法門をして宜しきに適はしむ。

【對治助開】淺近の事行を假りて障道の重蔽を除く。

【能安忍】順逆の縁に依つて心を動ぜられざるを言ふ。

【無法愛】相似の凡位に停住せず、進んで眞證の聖位に入るを言ふ。

【總じて結論す】

【淨名玄義】天台大師撰の淨名經の玄義十卷。

破せざることを無し、故に經に云はく、『其疾きこと風の如し』と。五には識通塞、謂く苦集、十二因縁、六蔽、塵沙、無明を塞と爲し、道滅、因縁を滅する智、六度、一心三觀を通と爲す。若し通は須らく護るべく、塞あらば須らく破すべし。通に於て塞を起さば能破を所破の如くし、節節檢校するを識通塞と名く、經に云はく、『丹枕枕を安置す』と。六には道品調適、謂く無作の道品一一に調停して宜しきに隨つて入る、經に云はく、『大白牛あり等』と中根なり。七には對治助開、謂く若し正道障り多くして圓理開けざれば、須らく事助を修すべし、謂く五停心及び六度等なり、經に云はく、『又僕從多し』と根と爲す。八には知位次、謂く修行の人増上慢を免るるが故に。九には能安忍、謂く逆、順に於て安然として動ぜず、五品を策進して六根に入る。十には無法愛、謂く、十信相似の道に著すること莫く、須らく初住眞實の理に入るべし、經に云はく、『是寶乘に乗じて四方に遊び、四十位に直ちに道場妙覺のに至る』と。

謹んで台教の廣木を案じて五時八教を抄録し、略して知らしむること此の如し。若し委しく之を明らめんと要はば、請ふ、法華玄義十卷を看よ。委しく十方三世諸佛の説法の儀式を判ずること猶明鏡の如し。及び淨名玄義の中の四卷全く教相を判ず。此れ自從下は諸家の判教の儀式を明すことを略するのみ。

天台四教儀畢



縮陽跋二十、四頁  
以下本思想たる三千  
中心之妙を詮し  
三篇の妙を一念三  
同時に之を結歸  
せしめて妙行を成  
ずるにあり。

【一】本書述作の  
所以を明す

【二】法華經を  
解釋するに本、述  
の二門あり述門は  
相對的方面的の釋  
本門は絕對的方面  
の釋なり。

【三】藏、通、  
別、圓の四教なり  
【四】止觀の十  
乘觀法にして、觀  
不思議境、眞正發  
菩提心、善巧安心  
止觀、破法調適、識  
通塞、破品調適、識  
助道對治、知次位  
能安忍、離法愛。

【十妙】之に本述  
二門の十妙あり、  
述門の十妙とは、  
境、智、行、位、  
法、感應、神通、  
說法、眷屬、利益  
本門の十妙とは、

十不  
二門

# 十不 二門

然るに此述門に其因果及以自他を談ずるは、一代の教門をして融通して妙に入らしむるが故なり。凡そ諸の義釋皆四教及以五味に約するは、意、教を開して、悉く醍醐に入らしむるに在り。觀心は乃ち是れ教行の樞機なり。仍且く略點して諸説に寄在す。或は存、或は沒、部の正意に非ざるが故なり。縦ひ施設することあるも、事に託し法に附す、或は十觀を辯ずるも名を列ぬる而已、明す所の理、境、智、行、位、法、能化、所化は、意、能詮論の中、咸く妙ならしむるに在り。詮内の始末、自他を辯ぜんが爲の故に、具に十妙を演べて一化を撰括す。出世の大意罄きて盡きざること無し。故に十妙の大綱を了せずんばある可からず。故に十妙を撮て觀法の大體と爲す。若し迹妙を解すれば、本妙遙なるに非ず。應に知るべし、但是れ離合の異なる耳、因果義一なり、自他何ぞ殊ならん。故に下の文に云はく、「本迹殊なりと雖も不思議一なり」と。況んや體、宗、用は祇是れ自他の因果の法なるが故に、況んや復教相は祇是れ前の四章を分別して、前の四章をして諸文と永く異ならしむ。若し斯旨を曉むれば、則ち教、歸する所あり、一期の縱橫、一念三千世間即空假中を出でず。理境、乃至利益、咸く兩り。則ち止觀の十乘は今の自行の因果を成じ、起教の一章は今の化他の能所を成ず。則ち彼此昭著にして法華の行成す。功をして唐捐ならず、

本因、本果、國土感應、神通、說法眷屬涅槃、壽命利益【一化】釋尊一代化導の教法【四章】五章中の四、五章は即ち五重玄義にして、釋名、田疇、明宗、論用、教相。今は教相を除きたる他の四を指す。

【一期の縱橫】釋尊一代所說縱橫の一切法の意。一念【一念三千】一念は凡夫迷情の一念三千は有漏無漏の一切法なり。

【六即】理即、名字即、觀行即、相似即、分證即、究竟即の六。二門の名目を擧げ、且つ十妙との關係を證す。

【境妙】十如境、十二因緣境、四諦境、二諦境、三諦境、一諦境。以上六境皆不可思議なり。

所詮を識る可からしむ。故に更に十門を以て十妙を收攝す。何となれば實の爲に權を施すときは則ち不二にして而も二、權を開して實を顯すときは則ち二にして而も不二なり。法既に教部なれば感く開して妙を成ぜしむ、故に此十門は不二を日と爲す。一一の門の下に六即を以て之を檢せよ。本文已に廣く誠證を引けり、此下は但直に一理を申べて、一部の經旨をして峻として目前に在らしむ。

一には色心不二門、二には内外不二門、三には修性不二門、四には因果不二門、五には染淨不二門、六には依正不二門、七には自他不二門、八には三業不二門、九には權實不二門、十には受潤不二門なり。是中第一は境妙に従つて名を立て、第二第三は智行に従つて名を立て、第四は位、法に従つて名を立て、第五第六第七は感應、神通に従つて名を立て、第八第九は說法に従つて名を立て、第十は眷屬、利益に従つて名を立てつ。

一に色心不二門とは、且く十如の境、乃至無諦、一一皆總別の二意あり、總は一念に在り、別は色心に分つ、何となれば初の十如の中、相は唯色に在り、性は唯心に在り、體力作縁は義色心を兼ね、因果は唯心、報は唯色に約す。十二因縁は苦業は兩つながら兼ね、惑は唯心に在り。四諦は則ち三は色心を兼ね、滅は唯心に在り。二諦、三諦は皆俗は色心を具し、眞中は唯心なり。一實及び無は此に準じて見る可し。既に別を知り已れば、別を攝して總に入るに、一切の諸法心性に非ざること無し、一性無性にして三千宛然なればなり。當に知るべし、心が色心なれば心に即して變と名くることを、變を名けて造と爲す、

所詮を識る可からしむ。故に更に十門を以て十妙を收攝す。何となれば實の爲に權を施すときは則ち不二にして而も二、權を開して實を顯すときは則ち二にして而も不二なり。法既に教部なれば感く開して妙を成ぜしむ、故に此十門は不二を日と爲す。一一の門の下に六即を以て之を檢せよ。本文已に廣く誠證を引けり、此下は但直に一理を申べて、一部の經旨をして峻として目前に在らしむ。

【三】第一色心不二門を證す。

【色心不二門】玄女の七科の諸境、事理悉く三千三諦の妙法となるは色攝するに依る理を顯はす。

【色心】色は物質心は精神。

【十如】如是相、如是性、如是體、如是力、如是緣、如是因、如是緣、如是果、如是報、如是本末究竟。

【二諦】眞諦、俗諦。

【三諦】空諦、假諦、中道諦。

【二性無性】心性は縁に隨つて用を起す故、一性なりと共に亦無性なり。

【四】第二の内外不二門の意義を證す。

【内外不二門】自己の心法を内とし餘法を皆外とし、乃至非内非外の三千を或は内或は外

造は謂く體の用なり。是れ則ち色に非ず心に非ず、而も色而も心、唯色唯心良に此に由る。

故に知んぬ、但一念を識れば遍く己他の生佛を見ることを。他生他佛尚心と同じ、況んや己心の生佛寧んぞ一念に乖かん。故に彼の境法の差、差にして而も差にあらず。

二に内外不二門とは、凡そ所觀の境は内外を出でず。外は彼依正色心に託するを謂ふ、即空假中なり。即空假中妙なるが故に色心の體絶し、唯一實性にして空假中無し。色心宛然として當として同じく眞淨なり。復衆生七方便の異、國土淨穢の差品を見ず。而も帝網の依正終自炳然たり。言ふ所の内とは、先に外の色心一念無念にして、唯内體の三千のみなりと了すれば、即空假中なり。是れ則ち外法全く心性爲り、心性外無く、攝するに周ねからざること無し。十方の諸佛、法界の有情、性體殊なること無ければ一切咸く徧す。誰か内外、色心、己他を言はん。此れ即ち向の色心不二門を用ひて成す。

三に修性不二門とは、性徳は祇是れ界如一念なり。此内の界如に三法具足す。性は本爾なりと雖も智に藉つて修を起し、修に由つて性を照し、性に由つて修を發す。性に在るときは則ち修を全うして性を成じ、修を起すときは則ち性を全うして修を成す、性移る所無く、修常に宛爾なり。修に又二種あり、順修と逆修となり。順は智を了じて行を爲すを謂ひ、逆は性に背いて迷と成るを謂ふ。迷了の二心、心不二と雖も逆順の二性、性事伍に殊なり。事にも移らざる心に由るときは則ち迷をして了を修成せしむべし、故に須らく一期の迷了をもつて、性を照し修を成すべく、性を見、心を修すれば二心俱に泯す。又曉む、順

と爲すに就て觀を用ひて不二の法體を顯はす

【七方便】二種あり。一は人乘、天乘、聲聞乘、緣覺乘、藏教菩薩乘、通教菩薩乘、別教菩薩乘、二は藏教の聲緣、通教の聲緣、別教の菩薩、圓教の菩薩なり。

【帝網】帝釋天宮の網。

【五】第三修性不二門を證す。

【修性不二門】修は事造の三千、性は理具の三千。事造、理具義は異なるも法體は一の三千なり。

【性德】萬物各本性の上にて迷悟因果の性能を具するを言ふ。

【離】離は謂はく修性各三、三は法身、般若、解脱の三徳等を指す。離は修性の體は一なれば互に能顯所顯の徳を融じて隔て無き

と爲すに就て觀を用ひて不二の法體を顯はす

修は性に對して離あり合あることを。離は謂く修性各三、合は謂く修二性一なり。修二各三共に性三を發す、是れ則ち修、九を具すと雖も九は祇是れ三なり。性に對して修を明さんとす、故に修を合して二と爲す。二と一性とは水の波と爲るが如し、二も亦二無きこと亦波水の如し。應に知るべし、性は三障を指す。是故に三を具す。修は性に從つて成ず、三を成ずること法爾なり。修性無しと達すれば唯一妙乘、分別する所無く法界洞朗なり。此は内外不二門に由つて成ず。

四に因果不二門とは、衆生の心因既に三軌を具す、此因果を成ずるを三涅槃と名く。因果殊なること無く始終理一なり。若し爾らば因徳已に具す、何ぞ因に任せざるや。但因に迷ふに由つて各自實と謂ふ、若し迷性を了すれば實に唯因に住す。故に久しく此因を研ぎ因顯るるを果と名く。祇因果理一なるに緣つて此一理を用ひて因と爲す、理顯るれば復果の名無し。豈仍因の號を存す可けんや。因果既に泯すれば理性自ら亡す。祇亡智の觀疎に由つて迷をして厚薄を成せしむることを致す。迷の厚薄の故に強いて三惑を分つ。義をもつて六即を開して智の淺深に名く。故に如夢の勤加に空名の惑絶し、幻因既に滿すれば鏡像の果圓なり。空像、即義同じと雖も、而も空は虚、像は實なり。像實なるが故に理に稱つて本有なり。空虚なるが故に迷轉して性と成る。是れ則ち不二にして而も二なれば因果の殊なりを立つ、二にして而も不二なれば始終體一なり。若し因は果に異なりと謂はば因も亦因に非ず、果は因に從ふことを曉むれば因方に果を克す。所以に三千理に在れば同

を彰すが故に修性各三と言ふ。修二合は明は修二性一合は體は一なれども修は能顯性は所顯なれば其義は別なり。故に修二性一なり。故に修二合三合に就て難を示して法相は異なれども離合の體は別なきを彰す。

【修、九を具す】

前に修二各三共に性三を發すと云へば性も所發となりて俱に修に屬するが故なり。

【二門の義を詮す】

【因果不二門】法體に違して三千の理顯はれざるは因果の理顯はるは果顯と未顯と異なるれども三千の法體は常に別無きを彰す。

【三軌 眞性軌、觀照軌、資成軌、性淨淨】

【三淨淨】性淨淨

じく無明と名け、三千果成すれば威く常樂と稱す。三千改まること無ければ無明即ち明なり、三千並に常なれば俱に體俱に用なり、此は修性不二門を以て成す。

五に染淨不二門とは、若し無始より法性に即して無明と爲ることを識らば、故に今無明に即して法性と爲ることを了す可し。法性と無明と遍く諸法を造す、之を名けて染と爲す。無明と法性と遍く衆縁に應ず、之を號けて淨と爲す。濁水、清水、波濕殊なること無し。清濁は即ち縁に由ると雖も、而も濁の成ずるは本有なり。濁本有なりと雖も、而も體を全うじて是れ清なり。二波理通ずるを以て體を擧げて是れ用なり。故に三千の因果を俱に縁起と名く、迷悟の縁起刹那を離れず、刹那の性常なれば縁起理一なり。一理の内而も淨穢を分つ、別しては則ち六穢四淨、通じては則ち十は淨穢に通ず。故に知んぬ、刹那の染體は悉く淨なり。三千未だ顯れざれば體仍迷ふことを驗む。故に相似の位、成すれば六根遍く照して十界を照分す、各具灼然たり。豈六根淨の人、十定んで十と謂はん、分眞の迹を十界に垂るるも亦然り、乃至果成すれば彼百界に等し。故に須らく初心に而も遮し而も照すべし。照の故に三千恆に具し、遮の故に法爾として空中なり。終日雙亡し、終日雙照す。此念を動ぜずして遍應無方なり。感に隨つて而も施せば淨穢斯に泯す。淨穢を亡する故は空を以てし、中を以てすればなり。仍空中に由つて染を轉じて淨と爲す、染淨を了するに由つて空中自ら亡す。此は因果不二門を以て成す。

六に依正不二門とは、已證遮那一體不二なるは良に無始の一念三千に由る。三千の中、

樂、圓淨樂、方便淨樂。

【三惑】見思惑、塵沙惑、無明惑。

【七】第五染淨不二門を説す。

【染淨不二門】染は情執、淨は執を離れて自在なるを言ふ。徳の隠顯に因つて其用異なるも共に三千の法に於て、隨緣の外無ければ利那の染心は則ち果上の妙用なりと説す。

【六穢】六道のこと。

【四淨】聲聞、緣覺、菩薩、佛の四聖。

【相以の位】六即の一、觀智の力を離れて稍法性に冥合せんとする位。

【分位】六即の一分分に無明を斷じて分分に中道の理を證する位。

【八】第六依正不二門を説す。

【依正不二門】依正は他意に従ふ時

生、陰の二千は正となり、國土の一千は依に屬するを以てなり。依正既に一心に居す、一心豈能所を分たん。能所無しと雖も依正宛然なり。是れ則ち理性名字觀行已に不二依正の相あり。故に自他、因果をして相攝せしむ。但衆生は理に在つて、果未だ辨ぜずと雖も一切遮那の妙境に非ざること莫し。然れども應に復諸佛の法體遍に非ずして而も遍じ、衆生の理性局に非ずして而も局することを了すべし。始終改まらざれば大小妨げ無し、因果理同じ、依正何ぞ別ならん。故に淨穢の土、勝劣の身、塵身と法身と量同じく、塵國と寂光と異なること無し。是れ則ち一の塵刹一切刹、一の塵身一切身なり、廣狹勝劣思議し難く、淨穢方所窮盡無し。若し三千空假中に非ずんば、安んぞ能く茲自在の用を成ぜん。是の如くにして方に生佛等しきことを知れば、彼此の事理互に相收む。此は染淨不二門を以て成す。

七に自他不二門とは、機に隨つて他を利するの事は乃ち本に憑る。本は一性を謂ふ、自他を具足す、方に果位に至つて自即ち他を益す。理性の三徳、三諦、三千の如き、自行は唯空中に在り、利他は三千物に赴く。物機無量なれども三千を出でず、能應多しと雖も十界を出でず、境界轉現すれども一念を出でず、土土互に生ずれども寂光を出でず。衆生は理具の三千に由るが故に能く感じ、諸佛は三千の理滿するに由るが故に能く應ず。應遍じ機遍じて欣赴差はず。然らずんば豈能く鏡の像を現するが如くならんや。鏡に像を現するの理あり、形に像を生ずるの性あり。若し一の形も對するに像を現すること能はざると

生、陰の二千は正となり、國土の一千は依に屬するを以てなり。依正既に一心に居す、一心豈能所を分たん。能所無しと雖も依正宛然なり。是れ則ち理性名字觀行已に不二依正の相あり。故に自他、因果をして相攝せしむ。但衆生は理に在つて、果未だ辨ぜずと雖も一切遮那の妙境に非ざること莫し。然れども應に復諸佛の法體遍に非ずして而も遍じ、衆生の理性局に非ずして而も局することを了すべし。始終改まらざれば大小妨げ無し、因果理同じ、依正何ぞ別ならん。故に淨穢の土、勝劣の身、塵身と法身と量同じく、塵國と寂光と異なること無し。是れ則ち一の塵刹一切刹、一の塵身一切身なり、廣狹勝劣思議し難く、淨穢方所窮盡無し。若し三千空假中に非ずんば、安んぞ能く茲自在の用を成ぜん。是の如くにして方に生佛等しきことを知れば、彼此の事理互に相收む。此は染淨不二門を以て成す。

は所現の身上差別  
し、自意に隨ふ時  
は不二の身上に會  
す。不二の身土は  
皆心本具の三千に  
由る。

【生陰の二千】 衆  
生と五陰の二千。

【理性】 六即中の  
理即、佛性を有す  
るのみにて未だ解  
行證の功能なき位

【名字】 六即の一  
經卷、善知識に依  
つて迷悟の法體不  
二なるを了解する  
位。

【觀行】 經卷等を  
離れて觀智親しく  
性德を照す位、六  
即中の一なり。

【九】 第七自他不  
二門を明す。

【自他不二門】 自  
とは己心、他とは  
生佛なり。己心本  
具の三千は生佛體  
同じきが故に果に  
至れば能化所化互  
に感應の用を起す  
【三德】 法身、般  
若、解脱。

【緣了】 三佛性中

きは、則ち鏡の理窟あり、形事未だ通ぜず。若し鏡と隔つときは則ち是理あるべし、形對して而も像ならざるものあること無し。若し鏡の未だ像を現せざるは塵に遮らるるに由る。塵を去ることは人の磨するに由る、像を現することは磨する者に關るに非ず。以て觀法を喻ふ、大旨知んぬ可し。應に知るべし、理に自他を具足すと雖も、必ず緣了に藉つて利他の功を爲すことを。復緣了と性と一合するに由つて、方に能く性に稱つて施設萬端なり、則ち自稱を起さずして化に方所無し。此は依正不二門に由つて成す。

八に三業不二門とは、化他門に於て事に三密を分つ、物理に隨順して名を得ること同じからず、心輪は機を鑿み、二輪は化を設く、現身說法未だ會て毫も差はず。身に在つては眞應を分ち、法に在つては權實を分つ。一身若し異ならば何が故ぞ乃ち即是法身と云はん、二說若し乖かば何が故ぞ乃ち皆成佛道と云はん。若し唯法身のみならば應世に垂ること無からん、若し唯佛道のみならば誰か三乘を施さん。身尙身無し、説必ず説に非ず、身口平等にして彼意輪に等し。心色一如にして不謀にして而も化す、常に至極に冥すれども物に稱つて施爲す。豈百界一心、界界三業に非ざること無きに非ずや。界尙一念なり、三業豈殊ならんや。果用虧くること無く、因は必ず果に稱ふ。若し因果を信ぜば方に三密、本あることを知る。百界の三業俱に空假中なり、故に宜しきに稱つて遍く赴かしむるを果と爲す。一一の應色、一一の言音、百界の三業具足せざること無し、化復化を作すとは斯謂歟。故に一念の凡心に已に理性の三密相海あり、一塵の報色に同じく木理の毘盧遮那あつ

の二、三佛性とは正因、了因、縁因の三なり。

【二〇】第八三業不二門を説す。

【二一】三業不二門。果後に意に機を鑑み身を現じ、法を説くを迷の因に本より百界の三業を具するが故に、果に至つて機に随つて身説を異にし終て自意の實に會入せしむ。

【二二】三密。身、語、意の三種の密行。

【二三】三輪の中。二、三輪とは記心輪、神通輪、正教輪なり。

【二四】眞身、應身。

【二五】第九權實不二門を明す。

【二六】九權實不二門。九界の機、七方便の教は權、佛界の機圓教は實なり。

【二七】理。十界を具して九界佛界を隔てざれば、偏圓の法にも

て、方に乃ち名けて三無差別と爲す。此は自他不二門を以て成す。

て、方に乃ち名けて三無差別と爲す。此は自他不二門を以て成す。

【二八】九に權實不二門とは、平等大慧の常に法界を鑒むること、亦理性の九權一實に由る。

實復九界、權も亦復然り。權實相冥じ百界一念にして分別す可からず、任運に常に然り。

果に至れば乃ち本の一理に契ふに由つて、非權非實、而權而實なり。此れ即ち前の如く、心輪自在にして身口をして權實の機に赴かしむることを致す。三業一念にして權實に乖くこと無し。動ぜずして而も施す。豈應に隔異すべけんや。説に對しては即ち權實を以て稱を立て、身に在つては即ち眞應を以て名と爲す。三業理同じく、權實冥合す。此は三業不二門を以て成す。

【二九】十に受潤不二門とは、物理は本來性に權實を具す。無始より重習して或は權、或は實なり。權實は重に由る、理は常に平等なり。時に遇ひ習を成じて行願に資けらる。若し本因無くんば重も亦徒設ならん、熏に遇うて自ら異なり、性の殊なるに由るに非ず。性は殊なること無しと雖も、必ず幻に藉つて發す、幻の機幻に感じ、幻の應幻に赴く。能應、所化並に權實に非ず。然るに生は非權非實を具して權實の機を成するに由つて、佛も亦果に非權非實を具して權實の應を爲す。物機、應契、身土に遍無し、同じく常寂光にして法界に非ざること無し。故に知んぬ、三千同じく心地に在つて、佛の心地の三千と殊ならざることを。四微體同じく權實益等し。此は權實不二門を以て成す。

【三〇】是故に十門は門門通入す、色心乃至受潤咸然り、故に十妙をして始終理一ならしむ。境

【三一】

【三二】

【三三】

【三四】

【三五】



麤妙の見るべきもの無きを彰はす【三】第十潤不

二門を證す【受潤不二門】所化は理性を全じて偏圓の重を發して能圓は自證に稱つて權實の化を説くるが故に會して而も其利益に差別無し

【四微】色、香、味、觸の四種の極微【三】前來の義を結攝して重ねて述作の意を示す【本來三を具す】性徳の三千三諦を言ふ【三法】修性の三法【下の五章】十妙中の下の五妙を言ふ

の如き本來三を具す、理に依つて解を生ず、故に名けて智と爲す。智解行を導き行解理に契ふ。三法相符ひて異ならずして而も異なり。而して假に淺深を立てて位を設け濫を簡ぶ。三法は概是れ彼理三を證す。下の五章は三法用を起す。既に是れ一念三千即空假中成ずるが故に用あり。若し一念を了すれば、十方三世諸佛の法は本迹遙なるに非ず。故に重ねて十門を述べて觀行をして識る可からしむ。首題既に爾り、別を攬つて總と爲す、符文知る可し。

十不二門畢



止觀大意

唐天台沙門釋湛然述

縮陽帙七。本書一卷は荆溪尊者が員外李華の求めに應じて智者大師の摩訶止觀一部の綱要を録せるもの。湛然支那天台の六祖。

【一】略して教觀の祖承を詮す。

【慧文】南岳慧師

【南嶽】慧文に師事して三觀の口訣を受け、法華三昧を悟る。

【天台】支那天台の開祖。

【法華三昧】三諦圓融の妙理現前し障中道の無明止息するを言ふ。

【二】教觀を叙する中、先づ教を詮す。

【五重の玄解】諸經の幽玄なる義理を詮するに天台は先づ五重の解釋を用ふ。

【五科の方便】天台の四教の觀法を修する前方便の加

員外李華、止觀の大意を知らんと欲するに因りて、略して綱要を撮る。

(二) 略して教觀の門戸の大槩を述べば、今家の教門は龍樹を以て始祖と爲し、慧文は但内觀を列ねて視聽するのみ。南嶽、天台に泊んでは、復法華三昧をもつて陀羅尼を發するに因りて、義門を開拓して觀法周備す。

(三) 諸經を消釋するに、皆五重の玄解、十義の融通を以てし、觀法は乃ち五科の方便、十乘の軌行を用ふ。五重と言ふは、一切の經の前に五義をもつて玄釋す。名通じて義異なり、總を以て別に冠せしむ。謂く釋名、出體、明宗、辨用、判教なり。法華より前は諸教未だ合せず、五重皆盡なり、法華に來至して名等俱に妙なり。廣くは玄文十卷に委しく釋するが如し。一義と言ふは、一には先に道理を明す。寂絶亡離にして思議す可からず、一の寂の理に於て分たざるを而も分ちて諸諦を離開す。四の四諦、七の二諦、五の三諦等を謂ふ。若は開し、若は合す、權實の道理冷然として見つべし。二には能詮の教門。槃峙を綱格し、祕露を包括し、漸、頓、不定、祕密、藏、通、別、圓と謂ふ。此八の意を得れば、一代の聲教化道を知んぬ可し。三には經論矛盾にして言義相乖く、情を以て通す可からず、博を

聲教化道を知んぬ可し。三には經論矛盾にして言義相乖く、情を以て通す可からず、博を

止觀大意

行なり。

【小乘の執行】五

科の前方便に討する正觀にして、十法を用ひて觀行を成就す。

【行の五】五重玄義の第一、總題を釋す。

【出體】五重玄義の第二、第一節の旨歸たる體を辨ず。

【明の六】五重玄義の第三、修行の宗旨を明す。

【辨用】五重玄義の第四、宗に就て一觀の作用を辨ず。

【判教】五重玄義の第五、教の大小權實を論ず。

【法華より俱に】妙なり。法華以前は三乘權實なるが故に斯く言ふ。

【法華玄義】法華玄義の四種の四諦。

【無生、無量、無作】無生、無量、無作の四種の四諦。

以て解す可からず。古來の執淨連代休まず。今四悉檀の意を用ふるに、滯として融せざること無く、拔擲自在なり。四には巧に執著を破して善く諸句を用ふ。能著の心を破すること所破の惑の如くす、單、複、具足、無言窮遂す。五には法門を結正して行位に對當し、教に依りて修するに方便あり、行に依つて證するに階差あらしむ。賢卑濫せず、増上慢を免る。六には一句を以ふるに隨つて、縱橫無礙にして而も綸緒次第し、宛然として章を成す。七には聞章科段鈎鎖相承けて文勢を決疏し、生起冠帶す。八には經文を帖釋するに、須らく義順して理當るべし。九には方言を翻譯するに、名義をして塞らざらしむ。十には一一の句の下に理觀をもつて消通す。觀と經と合し、心に印して行を成す。他の寶を數ふるに非ず。若し法華を釋するには、彌、須らく權實、本迹を曉了すべく、方に行を立つべし。此經獨り妙と稱することを得、方に此に依りて以て觀の意を立つ可し。

【五方便及び十乘の執行と言ふは、即ち圓頓止觀なり、全く法華に依る。圓頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ。若し此圓頓三昧を修せんと欲せば、圓の十乘を具して方に圓行と名く。方便品の法の文、略なりと雖も警諭品の大車の論足れり。

然るに止觀の十卷大いに分つて二と爲す。初の二卷は略して綱起を釋し、後の八卷は廣く行相を明す。初に略して明す中、又開いて五と爲す。圓心を發し、圓行を修し、圓果を感じ、八教を起し、三徳に歸するを謂ふ。初に圓心を發するは第一卷に在り。謂く四弘、四諦、六即に約して以て偏、圓の發心の相を簡ぶ。四弘は是れ能發の誓、四諦は是れ所依の

行なり。【小乘の執行】五科の前方便に討する正觀にして、十法を用ひて觀行を成就す。【行の五】五重玄義の第一、總題を釋す。【出體】五重玄義の第二、第一節の旨歸たる體を辨ず。【明の六】五重玄義の第三、修行の宗旨を明す。【辨用】五重玄義の第四、宗に就て一觀の作用を辨ず。【判教】五重玄義の第五、教の大小權實を論ず。【法華より俱に】妙なり。法華以前は三乘權實なるが故に斯く言ふ。【法華玄義】法華玄義の四種の四諦。【無生、無量、無作】無生、無量、無作の四種の四諦。

以て解す可からず。古來の執淨連代休まず。今四悉檀の意を用ふるに、滯として融せざること無く、拔擲自在なり。四には巧に執著を破して善く諸句を用ふ。能著の心を破すること所破の惑の如くす、單、複、具足、無言窮遂す。五には法門を結正して行位に對當し、教に依りて修するに方便あり、行に依つて證するに階差あらしむ。賢卑濫せず、増上慢を免る。六には一句を以ふるに隨つて、縱橫無礙にして而も綸緒次第し、宛然として章を成す。七には聞章科段鈎鎖相承けて文勢を決疏し、生起冠帶す。八には經文を帖釋するに、須らく義順して理當るべし。九には方言を翻譯するに、名義をして塞らざらしむ。十には一一の句の下に理觀をもつて消通す。觀と經と合し、心に印して行を成す。他の寶を數ふるに非ず。若し法華を釋するには、彌、須らく權實、本迹を曉了すべく、方に行を立つべし。此經獨り妙と稱することを得、方に此に依りて以て觀の意を立つ可し。

【五方便及び十乘の執行と言ふは、即ち圓頓止觀なり、全く法華に依る。圓頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ。若し此圓頓三昧を修せんと欲せば、圓の十乘を具して方に圓行と名く。方便品の法の文、略なりと雖も警諭品の大車の論足れり。

然るに止觀の十卷大いに分つて二と爲す。初の二卷は略して綱起を釋し、後の八卷は廣く行相を明す。初に略して明す中、又開いて五と爲す。圓心を發し、圓行を修し、圓果を感じ、八教を起し、三徳に歸するを謂ふ。初に圓心を發するは第一卷に在り。謂く四弘、四諦、六即に約して以て偏、圓の發心の相を簡ぶ。四弘は是れ能發の誓、四諦は是れ所依の

行なり。【小乘の執行】五科の前方便に討する正觀にして、十法を用ひて觀行を成就す。【行の五】五重玄義の第一、總題を釋す。【出體】五重玄義の第二、第一節の旨歸たる體を辨ず。【明の六】五重玄義の第三、修行の宗旨を明す。【辨用】五重玄義の第四、宗に就て一觀の作用を辨ず。【判教】五重玄義の第五、教の大小權實を論ず。【法華より俱に】妙なり。法華以前は三乘權實なるが故に斯く言ふ。【法華玄義】法華玄義の四種の四諦。【無生、無量、無作】無生、無量、無作の四種の四諦。

以て解す可からず。古來の執淨連代休まず。今四悉檀の意を用ふるに、滯として融せざること無く、拔擲自在なり。四には巧に執著を破して善く諸句を用ふ。能著の心を破すること所破の惑の如くす、單、複、具足、無言窮遂す。五には法門を結正して行位に對當し、教に依りて修するに方便あり、行に依つて證するに階差あらしむ。賢卑濫せず、増上慢を免る。六には一句を以ふるに隨つて、縱橫無礙にして而も綸緒次第し、宛然として章を成す。七には聞章科段鈎鎖相承けて文勢を決疏し、生起冠帶す。八には經文を帖釋するに、須らく義順して理當るべし。九には方言を翻譯するに、名義をして塞らざらしむ。十には一一の句の下に理觀をもつて消通す。觀と經と合し、心に印して行を成す。他の寶を數ふるに非ず。若し法華を釋するには、彌、須らく權實、本迹を曉了すべく、方に行を立つべし。此經獨り妙と稱することを得、方に此に依りて以て觀の意を立つ可し。

【五方便及び十乘の執行と言ふは、即ち圓頓止觀なり、全く法華に依る。圓頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ。若し此圓頓三昧を修せんと欲せば、圓の十乘を具して方に圓行と名く。方便品の法の文、略なりと雖も警諭品の大車の論足れり。

然るに止觀の十卷大いに分つて二と爲す。初の二卷は略して綱起を釋し、後の八卷は廣く行相を明す。初に略して明す中、又開いて五と爲す。圓心を發し、圓行を修し、圓果を感じ、八教を起し、三徳に歸するを謂ふ。初に圓心を發するは第一卷に在り。謂く四弘、四諦、六即に約して以て偏、圓の發心の相を簡ぶ。四弘は是れ能發の誓、四諦は是れ所依の

行なり。【小乘の執行】五科の前方便に討する正觀にして、十法を用ひて觀行を成就す。【行の五】五重玄義の第一、總題を釋す。【出體】五重玄義の第二、第一節の旨歸たる體を辨ず。【明の六】五重玄義の第三、修行の宗旨を明す。【辨用】五重玄義の第四、宗に就て一觀の作用を辨ず。【判教】五重玄義の第五、教の大小權實を論ず。【法華より俱に】妙なり。法華以前は三乘權實なるが故に斯く言ふ。【法華玄義】法華玄義の四種の四諦。【無生、無量、無作】無生、無量、無作の四種の四諦。

以て解す可からず。古來の執淨連代休まず。今四悉檀の意を用ふるに、滯として融せざること無く、拔擲自在なり。四には巧に執著を破して善く諸句を用ふ。能著の心を破すること所破の惑の如くす、單、複、具足、無言窮遂す。五には法門を結正して行位に對當し、教に依りて修するに方便あり、行に依つて證するに階差あらしむ。賢卑濫せず、増上慢を免る。六には一句を以ふるに隨つて、縱橫無礙にして而も綸緒次第し、宛然として章を成す。七には聞章科段鈎鎖相承けて文勢を決疏し、生起冠帶す。八には經文を帖釋するに、須らく義順して理當るべし。九には方言を翻譯するに、名義をして塞らざらしむ。十には一一の句の下に理觀をもつて消通す。觀と經と合し、心に印して行を成す。他の寶を數ふるに非ず。若し法華を釋するには、彌、須らく權實、本迹を曉了すべく、方に行を立つべし。此經獨り妙と稱することを得、方に此に依りて以て觀の意を立つ可し。

【五方便及び十乘の執行と言ふは、即ち圓頓止觀なり、全く法華に依る。圓頓止觀は即ち法華三昧の異名なるのみ。若し此圓頓三昧を修せんと欲せば、圓の十乘を具して方に圓行と名く。方便品の法の文、略なりと雖も警諭品の大車の論足れり。

然るに止觀の十卷大いに分つて二と爲す。初の二卷は略して綱起を釋し、後の八卷は廣く行相を明す。初に略して明す中、又開いて五と爲す。圓心を發し、圓行を修し、圓果を感じ、八教を起し、三徳に歸するを謂ふ。初に圓心を發するは第一卷に在り。謂く四弘、四諦、六即に約して以て偏、圓の發心の相を簡ぶ。四弘は是れ能發の誓、四諦は是れ所依の

行なり。【小乘の執行】五科の前方便に討する正觀にして、十法を用ひて觀行を成就す。【行の五】五重玄義の第一、總題を釋す。【出體】五重玄義の第二、第一節の旨歸たる體を辨ず。【明の六】五重玄義の第三、修行の宗旨を明す。【辨用】五重玄義の第四、宗に就て一觀の作用を辨ず。【判教】五重玄義の第五、教の大小權實を論ず。【法華より俱に】妙なり。法華以前は三乘權實なるが故に斯く言ふ。【法華玄義】法華玄義の四種の四諦。【無生、無量、無作】無生、無量、無作の四種の四諦。

【七の二諦】眞俗二諦に就て、天台にては藏、通、別、圓、別接通、圓接通、圓接別の七種の二諦を建立す。  
 【九の二諦】別接通、圓接通、別接通、圓接別の五種に各空假中三諦あるを言ふ。  
 【法華の教門】經典の文句、能く義理を明すを言ふ。  
 【前、眞、不定、秘密】天台の化儀の四教なり。  
 【藏、通、別、圓】天台の化法の四教化義の四教と合して八教と言ふ。  
 【四悉檀】世界悉檀、各各爲人悉檀、對治悉檀、第一義悉檀の四種悉檀を指す、佛の善法は此四悉檀を出でずと言ふ。  
 【理觀】道理の觀念にして事觀に對す。  
 【三】後觀を明す中次に觀を叙す。

止觀大意

境、六即は是れ所歷の位なり。誓ひ若し境無くんば、名けて狂願と爲す、境、位を辨せざれば凡聖分たず。境に依りて誓ひを發すと云ふは、謂く、衆生無邊誓願度は苦諦の境に依り、煩惱無數誓願斷は集諦の境に依り、法門無盡誓願知は道諦の境に依り、佛道無上誓願成は滅諦の境に依る。「涅槃經」の中に四諦を聞して四重と爲す、故に弘誓にも亦四番あらしむ。今偏を簡んで圓に従ひ、此圓の四願を以て前の三願を融す、法界に非ざること無し。故に法界に依つて妙願を起す、初心徧く攝し、惑法界を觀じて、徧く佛法を習ひ、三身等しく證す。已に圓心を發す、未だ知らず、圓心は初心を是と爲んや、後心を是と爲んや、初は後に即すと爲んや、初は後に異なりと爲んや。若し初は非、後は是、若は初心後に異なるは俱に圓融に非ず。故に六即を辨じて是非を判す。理即、名字即、觀行即、相似即、分眞即、究竟即を謂ふ。即の故に初後俱に是なり、六の故に初後濫せず。理同の故に即、事異の故に六なり。凡そ諸經の中に即の名あるは、生死即涅槃の流の如し。皆六位を以て之を甄らめ、始終理同じくして而も初後濫すること無からしむ。  
 (五) 次に圓行を修する等の四の文は、並びに第二卷の中に在り。初に圓行とは、四種三昧を謂ふ、徧く衆行を攝す。若し勝行無くんば勝果階ひ難からん。一には常坐、「文殊問」、  
 「文殊説」兩「般若經」に出づ。亦は一行三昧と名く、唯専ら法界を念するが故なり。九十日を以て一期と爲す。二には常行、「般若三昧經」に出づ。亦は佛立三昧と名く、三昧成るの時、十方の佛の空中に在して立つるを見る、亦、九十日を以て一期と爲す。三には半行半

【圓頓止觀】法華所説の觀法に依つて妄念を止息し、眞智に通達する止觀を指す。

【四】正しく本文の綱要を示す中、先づ暗示の第一の發圓心を釋す。

【三德】法身、般若、解脫の三德を指す。

【四弘誓願】四弘誓願【ノ即】六は差別即は圓教の人の修行六種の階位。

【前の三觀】藏、通、別三教の四弘誓願。

【理即】六即の第一、但、理性の融通せるのみにして毫も解行の功能なき在迷の凡夫の佛性を言ふ。

【名字即】六即の第二、經卷又は善知識に依つて迷悟不二の法體了する位。

坐、「法華」、「方等」の二經に出づ。法華は三七日を一期と爲し、方等は時節を限らず。四には非行非坐、亦是墮自意と名く。意起れば即ち觀するが故なり。方法は「請觀音」等の諸大乘經に出づ。四儀及び諸の作務に通ず。公私迅速にも亦修す可きなり。是四三昧、行は異れども理は同じ、是故に同じく十乘の法を用ふ。二に圓果を感ずとは、諸行に由るが故に。圓位に入ることを得、近くは初住に入る。無生忍と名け、遠くは妙覺を期す、寂滅忍と名く。初住の功能、具には華嚴に初住を數する文の如き、即ち其相なり。豈造次に自ら眞、乃至妙覺を證すと謂ふ可けんや、廣くは經に説くが如し。三に八教を起すとは、既に住に入り已れば八相成道して十界の身を現す。能く物機に隨順して、三藏等の四及び漸等の四を用ひ、五時に物を利す、一代の始終なり。四に三德に歸すとは、機緣息み已れば宜しく三德に歸すべし。三德とは何ぞ、謂く秘密藏なり。故に「涅槃」に云はく、「諸子を

秘密藏の中に安置し、我も亦久しからずして自ら其中に住せん。」と。

次に第三卷より去は、廣く行相を釋す、前の五を開演して行じ易からしむるが故なり。謂く止觀の名を釋し、止觀の體を辨じ、體に法を攝することを明し、法の偏、圓を判す。此四並びに第三卷の中に在り。次に正修の爲に前方便を作す、並びに第四卷の中に在り。二

十五法を謂ふ、總じて五科と爲す。初に五縁を具す、一には衣食具足、希望の縁を離るるが故に。二には持戒清淨、惡道の因を離るるが故に。三には閑居靜處、憤鬧の事を離るるが故に。四には息諸緣務、猥雜の業を棄つるが故に。五には須善知識、諸疑の地あるが故

が故に。四には息諸緣務、猥雜の業を棄つるが故に。五には須善知識、諸疑の地あるが故

が故に。四には息諸緣務、猥雜の業を棄つるが故に。五には須善知識、諸疑の地あるが故

が故に。四には息諸緣務、猥雜の業を棄つるが故に。五には須善知識、諸疑の地あるが故

離れて觀智視しく  
性徳を照す位。  
【出似即】六即の  
第四、觀智の力を  
も離れて法性に冥  
合せんとする位。

【分眞即】六即の  
第五、分分に無明  
を斷じ分分に中道  
の理を證する位。

【究竟即】六即の  
第六、智斷究竟の  
妙覺極果の位。

【五】略示の中間  
行等の四を證す。

【四種三昧】常坐  
常行、半行半坐、  
非行非坐の四三昧  
を指す。

【初住】一品の無  
明を斷じて三徳混  
繁の實域に住する  
圓人の位。

【無生無滅】無生無  
滅の理に安住して  
動ぜざるを言ふ。

【寂滅忍】諸惑斷  
盡して涅槃寂滅す  
る位。

【十界の身】地獄  
餓鬼、畜生、修羅  
人、天、聲聞、緣覺  
菩薩、佛の十法界

なり。文の中に 各事理の二具あり。二には五欲を訶す。色、聲、香、味、觸を謂ふ。正報、依報 各此五を具す、豈びに能く行者須欲の想を生ずるが故に、故に須らく訶滅すべし。文の中に 自ら事理の二訶あり。三に五蓋を棄つとは、緣具して欲無ければ方に觀に入るに堪へたり。觀未だ相應せざれば、五法心を覆ふ、謂く、貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、狐疑なり。觀に由つて起る所、常に信異せり、寂照を損す、覺り已つて須らく棄つべし。文の中に各事理の二棄あり。四に五事を調ふとは、蓋去れども入らざるは、當に是れ身等の五法調はざるなるべし、謂く、身、息、心の三は定内に各調ふ、身は寬急ならず、息に澁滑無く、心に浮沈無からしむ。眠、食の二法は定外に各調ふ、身は當に節せず、恣にせざるべし。食は飢えず飽かさらしむべし。五に五法を行すと、四科具すと雖も、必ず此五を須ひて方に行の首を成す。一には樂欲、希慕すべきが故に。二には專念、憶持すべきが故に。三には精進、相續すべきが故に。四には巧慧、廻轉すべきが故に。五には一心、他求無きが故なり。此方便を具して正觀獲つ可し。

【正觀】とは何ぞ、謂ゆる十法なり。若し此十無ければ墮驢車と名く。又此十法は具に圓常なりと雖も、圓人も復三根等しからざることあり。上根は唯一法、中根は二或は七、下根は方に十を具す。上根の一法とは、不思議境を觀するを謂ふ、境を所觀と爲し、觀を能觀と爲す。所觀とは何ぞ、陰、界、入を謂ふ、色心を出でず。色は心より造す、全體是れ心なり。故に經に云はく、『三界は別の法無し、唯是れ一心の作なり。』と。此能造に諸法を具

【三】戒等の四 化  
 【四】漸等の四 化儀  
 【五】時 華嚴、鹿  
 苑、方等、般若、  
 法華涅槃の五時。  
 【六】廣く行相を  
 明す中、先づ四章  
 對女及び五科の前  
 方便を證す。  
 【五緣を具す】道  
 法を行するに必要  
 なる資緣を備ふる  
 こと。  
 【五欲を呵す】外  
 界の障道の過害を  
 防遏するをいふ。  
 【寂照】眞理の體  
 は寂、眞智の用は  
 照なり。  
 【五事を調ふ】五  
 事を調試して道を  
 行じ易からしむる  
 を言ふ。  
 【五法を行す】五  
 法を行じて道法を  
 策進するを言ふ。  
 【七】廣く行相を  
 明す中、次に正觀  
 の十乗の軌行に遵  
 んで先づ第一の觀

身。  
 足す、若は漏、無漏、非漏、非無漏等、若は因、若は果、非因、非果等なり。故に經に云はく、  
 『心、佛及び衆生、是三差別無し。』と。衆生は理に具し、諸佛は已に成ず、成と理と性等しか  
 らざることを莫し。謂く、一一の心中に一切心あり、一一の塵中に一切塵あり、一一の心中  
 に一切塵あり、一一の塵中に一切心あり、一一の塵中に一切利あり、一切利塵も亦復然り。  
 諸法、諸摩、諸刹身、其體宛然として自性無く、性無くして本來物に隨つて變ず。所以に相  
 入れども事は恆に分る。故に我身心、刹塵に徧す、諸佛、衆生も亦復然り。一一の身上の  
 體恆に同じけれども、何ぞ心、佛、衆生の異なることを妨げん。異の故に染淨の緣を分つ。  
 緣の體は本空、空にして空ならず。三諦、三觀三にして三に非ず、三一、一三寄る所無し。  
 諦、觀名は別にして體復同じ、是故に能所、二にして二に非ず。三觀の名義は『環路』等の經  
 に在り、三諦の名義は『仁王』等の經に在り。是の如く觀する時を心性を觀すと名く。墮緣  
 にして不變なるが故に性と爲し、不變にして墮緣なるが故に心と爲す。故に『涅槃經』に云  
 はく、『能く心性を觀するを上定と爲す。』と。上定は第一義と名け、第一義は名けて佛性  
 と爲し、佛性は毘盧遮那と名く。此遮那の性に三佛性を具す、遮那徧するが故に三佛も亦  
 徧す。故に知んぬ、三佛は唯一刹那なり、三佛徧するが故に刹那則ち徧す。是の如く觀す  
 るは煩惱を觀すと名け、法身を觀すと名く。此法身を觀するは、是れ三身を觀す、是れ刹  
 那を觀す、是れ海藏を觀す、是れ眞如を觀す、是れ衆生を觀す、是れ已  
 身を觀す、是れ虚空を觀す、是れ中道を觀するなり。故に此妙境は諸法の本爲り、故に此



不思議境を詮す。  
【不思議境を起す】  
吾人現前陰妄剎那  
の妄心これ三千三  
諦の妙理なりと照  
すを言ふ。

【陰、界、入】五  
陰、十八界、十二  
入を言ふ。

【三觀】一心三觀  
即ち一念の妄心に  
圓かに三諦の融即  
を觀了するを言ふ

【三佛性】自性住  
佛性、引出佛性、  
至得果佛性の三を  
言ふ。

【内、外凡】十住  
以上の三賢の位を  
内凡、未だ似解を  
得ざる位を外凡と  
言ふ。

【八】十乘の第二  
眞正發菩提心を明  
す。

【僧那】菩薩の四  
弘誓願を言ふ。

【九】十乘の第三  
善巧安心止觀を詮  
す。

【般若解脫】平等  
法身を證する智慧  
の力用。

妙觀是れ諸行の源なり。是の如くにして方に偏小邪外を離るる所以に十法の首に居在す。上根は一觀に横堅該攝して、便ち無相にして衆相宛然なることを識り、即ち無明を破して初住若しは内、外凡に登る、故に論に云はく、『其車高廣にして乃し道場に至る。』と。中根は未だ曉らざれば、更に下の法を修す。

二に起慈悲心とは、境を觀じて悟らざれば須らく發心を加ふべし。此人無始より已に弘誓を起す、故に僧那を始心に發して、大悲を終へて以て難に赴くと云ふ。僧那とは弘誓なり、赴難とは惡に入るなり。今境を觀じて理に契はざるに由つて、重ねて須らく誓を發すべし。靜心の中に於て彼我を思惟し、自他を痠痛す。無量劫より來た生死に沈廻して、縱

ひ小志を發するも菩提心に迷ふ。我今知ると雖も、行由未だ備らず、故に重ねて誓を發して言はく、衆生は無邊なれども誓願して度せん、生死即涅槃なるが故に。煩惱は無數なれども誓願して斷ぜん、煩惱即菩提なるが故に。法門は無盡なれども誓願して知らん、惑に即して智を成ずるが故に。佛道は無上なれども誓願して成ぜん、生に即して滅を成ずるが故なり。此思惟を作すに當然として大いに悟り、照す所の境を冥して凡聖の位に入る。故

に論に云はく、『體蓋を張り破く。』等と。若し入らざる者は心安らかならざるに由る。三に安心とは、先に總、次に別なり。言ふ所の總とは、法界を以て所安と爲し、寂照を以て能安と爲す。若し煩惱及以生死の本性、清淨なりと知るや、之を名けて寂と爲し、本性如空なる、之を名けて照と爲す。此煩惱生死を復法界と名く、即ち此法界の體用五に

【二】十乗の第四破法偏を明す。

【破法偏】心の執着を除き盡すを言ふ。

【衆教の諸門大に各四あり】有門、空門、亦有亦空門、非有非空門の四。

【無生】涅槃の眞理には生滅無きが故に無生なり、此

【二】十乗の第五識通塞を明す。

【識通塞】善く情智の得失を識別するを言ふ。

【十乗の第六道品調適を説明す】道品調適は所用の法門をして宜しきに適はしむるを言ふ。

【七科】三十七の助道品を束ねて七科となす、名数は本文にあり。

【六科】七科の中念處を除いた他の六を言ふ。

【正勤】未生惡令

顯す。體は是れ所安の法界、用は是れ能安の寂照なり。體を平等法身と名く、亦三徳を具す。用を般若、解脫と名く、亦三徳を具す。體用不二にして三徳の理均し。氷水露蛇の論の意識んぬ可し。言ふ所の別とは、復之を安んずと雖も、彌暗く彌散す、良に無始の習性同じからざるに由る。故に今性に順じて逐つて之を安んず。謂く、聽に宜しく、思に宜しく、寂に宜しく、照に宜しく、樂に隨ひ、第一義に隨ふ。何を以ての故に。

寂照に因つて善根增長することあり、增長せざるあり。寂照に因つて煩惱破壞することあり、或は破せざるあり。理を見ること亦然り。或は聞思廻轉し、或は聞思相資く。未だ卒に具にす可からず、細しく尋ねて方に曉らむべし。故に論に云はく、「丹枕を安置す」と。即ち車内の枕なり。若し入らざる者は、法を破すること徧からざるに由る。  
四に破法徧とは、衆教の諸門大いに各四あり、乃至八萬四千同じからざれども、竝に無生を以て首と爲さざること莫し。今且く初に従つて、無生門に於て徧く諸惑を破す。復無生を以て餘門に突入す、縱横俱に破して、體徧きことを識らしむ。故に論に云はく、「其疾きこと風の如し。」と。此門最も廣し、即ち具にす可からず。若し入らざる者は、應に通塞を尋ぬべし。  
五に識通塞とは、生死煩惱を塞と爲し、菩提涅槃を通と爲すと知ると雖も、復應に須らく識るべし。通に於て塞を起さば、此塞須らく破すべく、塞に於て通を得ば、此通須らく護るべし。如將も賊と爲らば、此賊豈存せんや、若し賊を將と爲らば、此將豈破せんや。

不生、已生惡令滅  
 未生善令生、已生  
 善令增長の四正勤  
 【如意】の欲、念、  
 進、慧の四。  
 【根】信、進、念  
 定、慧の五根にし  
 て生善に資す。  
 【力】信、進、念  
 定、慧の五力にし  
 て破惡に資す。  
 【七覺】念、擇、  
 進、喜、輕安、定  
 捨の七。  
 【八道】正見、正  
 思惟、正語、正業、  
 正精進、正定、正  
 念、正命の八正道  
 をいふ。

節節に檢校して、著を生ぜしむること無かれ。著の故に塞と名く、塞を破して通を存す、  
 唯一轍のみに非ず。心あるもの皆爾り、念念に常に須らく通塞を檢校すべし。故に論に云  
 はく、「丹枕を安置す」と、即ち車外の枕なり。若し入らざる者は、道品巧しからざるに由  
 る。

六に道品調適とは、門に約して徧く破すれども、理に於て又味し、應に七科を須ひて次第に調試すべし。若し爾らざれば、此道品誰が爲に施設せん。破徧の門、陰境を觀すと雖も、陰の上に来だ念處の名を分たざるを以ての故なり。況んや六科展轉して調停するこ  
 とあらんや、故に此門を用ひて檢校餘擇す。念處、正勤、如意、根、力、七覺、八道を謂ふ。初  
 に念處とは、身、受、心、法を謂ふ。四法竝びに法性の心中に於て三諦推檢す。初に身を觀ず  
 るとは、身は是れ色法、法性の色を觀するに一色一切色、一切色一色、雙べて一、一切を  
 照し、雙べて一、一切を非ず。能所、三一具に前の文の妙境の中に説くが如し。受等の三  
 法は前に例して知んぬ可し。餘の六科は具に委しくす可からず。故に論に云はく、「大白牛  
 あり一等三。上の如き六門、名けて正行と爲す。若し悟らざる者は、良に事惡助けて理善  
 を覆ふに由る。

七に助道對治とは、「涅槃」に云はく、「衆生の煩惱、一種に非ざれば佛無量の對治門を  
 説きたまふと。夫れ對治あることを信せざるの人は、當に知るべし、此人未だ正行を曉  
 めざることを。若し己身に正行未だ辨ぜずと識るは、良に事惡、理惡を助け、共に理善

【上の如き六門】  
 觀不思議境より道  
 品調適迄の六を指  
 す。又此六は入理  
 の常規なるが故に  
 正行と言ふ。  
 【三】十乗の第七  
 助道對治を明す。  
 【助道對治】淺近  
 の事行を假りて障  
 道の重蔽を除くを  
 言ふ。  
 【事善】布施、持  
 戒、忍辱、精進、持  
 禪定、智慧の六度  
 行を指す。

【四】十乗の第八  
 知次位を證す。  
 【知次位】行人自  
 ら修證の分齊を分  
 別するを言ふ。

を蔽うて現前せざらしむるに由る。理善とは法界常住、事善とは事施等の六、理惡とは微細の無明、事惡とは六の重蔽を謂ふ。止觀を修するに由つて、此六現起す、饑貪、破戒、瞋恚、憍怠、亂想、愚癡なり。此六惡を具して、前も内に勝法ありと云ふ、或は常に自ら相應すと云ふ。若し相應せば即ち法身に同じ、應に方所無く、説必ず機に稱はん。若し暫く相應して復惡を起さば、都て此理無し。則ち成佛して還つて衆生と作るの妨を爲さん。若し曾て契へりと言はば、妨も亦之の如し。若し理を知れば惡を妨すと言はば、亦應に當を知らば貧を免れ、藥を知らば病を免るべし。事惡若し去れば理善明らめ易し、仍聖の加を請ひて我理を顯すことを助くべし。若し爾らば、但惡即ち是れ道と觀せば、豈惡能く理を蔽ふことあらんや。此義然らず、若し惡已に道を成らば、道は即ち法身なり、法身未だ契はざるは、即の觀微なるに由る、故に先づ事度を修して以て事惡を治すべし。事惡傾き已れば理善生ず可し。故に觀を修する者は、須らく事惡を以て檢し、六即を以て理を判すべし。理善明め竟れば、事惡必ず亡ぶ、須らく知るべし、理明かなれば位何許に在ることを。乃ち小を以て大を助け、偏を以て圓を助く。況んや復更に轉治、兼治、具治、第一義治等あるをや、卒かに盡す可きに非ず。故に論に云はく、『又僕從多くして而も之を侍衛すと。若し僕從無ければ傾覆何を疑はん。中根の觀を用ふること極めて此に至る。』

八に知次位とは、下根は障り重くして唯正助明かならざるのみに非ず、却つて上慢を生じて己佛に均しと謂ふ、未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證すと謂ふ。須

【混墮】ニラヤ(ニラヤ)地獄と深す。

【四禪比丘】佛弟子の一比丘に四禪を得て増上慢を生じ、四道を得たりと謂へる者ありと傳ふ。

【四果】須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢の四を言ふ。

【破法の也】菩薩の不退轉位の記號

【五】十乗の第九能安忍を明す。

【安忍】違順の縁の爲に心を動ぜられざるを言ふ。

【六】十乗の第十法愛を明す。

【離法愛】相似の凡位に停住せず、進んで眞議の聖位に入るを言ふ。

【兩惑】見思の二惑を言ふ。

【銅輪】十住の菩薩は銅輪王となりて二大洲を化すれば、十住を銅輪位と言ふ。

止觀大意

らく次位を知つて朱紫をして濫せざらしむべし。夫れ小大、眞似證するに非ざれば明かならず、故に三世の諸佛皆諸位を明したまふ。若し未だ證得せざるを而も證得すと謂へば、唯位を失ふのみに非ず、却つて泥犖に墮す。故に小乘經の中には四禪比丘謂つて四果と爲し、大乘經の中には魔、菩薩の與に跋致の記を授く。若し取著を生ずれば必ず魔屬に同じ、尙人天を失ふ、何ぞ至道に關はらん。故に大小の經論に咸く次位を明す。又深位の勝妙の功德を説いて、始行を引接して欣慕せしむるが故なり。又樂つて長遠の位を聞くことあつて、増上の信を生じ、難行の行を立て、大煩惱を破し、第一義を見る。故に論に云はく、『四方に遊ぶ』と、住等の四を論ふるなり。次位を知ると雖も、違順を忍はずんば、須らく安忍を明すべし。

九に安忍とは、圓頓の行人初めて外凡に入れば、外名利を招き、内に宿障を動す。宿障縦ひ薄くとも名利彌至るべし。衆の爲に圍繞せられて自行を廢損す、茲に因つて破損す。豈能く道を進めんや。外人之を視て猶大聖と謂ふ。樹の蝎を抱くが如く、表は似て内は虚なり。唯當に自ら勉めて、爲に動ぜられざるべし。内凡に入ることを得るを名けて似位と爲す。若し専ら似位に住するは、名けて法愛と爲す。

十に離法愛とは、已に相似の六根互用を得、兩惑を破して永く墜苦無し。此似位を愛するを名けて頂墮と爲す。小乗の退して五逆を爲るに同じからず、内外凡の位は諸教別なるを以ての故なり。若し離愛を修すれば進んで銅輪に入るを、名けて十住と爲す。身を百界

【四土】凡聖同居土、方便有餘土、實報淨土、常寂光土の四土。

【七】觀陰の後發する所の宿習を明す、所謂の十境の相狀なり。

【四大】地水火風

【六蔽】六蔽と六度。

に分ち、一多相即す。身土既に爾り、己他も亦然り。十身生を利し、四土物を攝す。初住の功德は、具に華嚴の賢首品に廣く明すが如し。此より上、第五卷の初より、第七卷の末を盡すまで、正修行を明す。始め初心より、終り初住に至る。

第八卷より去は、陰を觀じて後更に宿習を發すれば、觀を用ひて習を觀することを明す。若し上來の十種の觀法を用ひて、未だ位に入ることを得ざれば、必ず宿習を發す。謂く、煩惱、病患、業相、魔事は竝に第八卷の中に在り、禪境は第九卷の中に在り、見境は第十卷の中に在り。餘に上慢、兩教の二乘、三教の菩薩あれども、時夏の終りに通るが故に略して説きたまはず。前の諸文に比知す可きを以ての故なり。宿習若し起らば、識らすんばある可からず。先に若し之を知れば、其變怪を恣にす。此の如きの諸境は發すること又定まらず。過去世の若は近く、若は熟せるに隨つて此世に現前す。文の中は一往且く次第に従ふ。凡そ起る所あれば、但寂照を以て而して之を止觀す、法界に等しく一相無相ならしむ、皆上乘の觀法を用ひざることを無し。初に煩惱を發すと云ふは、謂く、無始より已來重惑を積集す。今觀を用ふるに因つて、此惑常に過ぎて、控制す可からず。病患と言ふは、陰惑を觀するに由つて四大を激動す。其元由何の治を用ふるに宜しき、或は内觀の力、或は術、或は醫と識つて、然して後觀を用ふ。業相と言ふは、有漏の業、或は已に報を受くるに復更に發せず、或は未だ報を受けざるは靜心の中に於て忽然として俱に發す。發するの相、多しと雖も蔽度を出でず、各六相あり、或は止に因つて生じ、或は觀に因つて生

【四魔】煩惱魔、陰魔、死魔、他化自在天子魔。

【旃陀羅】チャンダーラ (Candala)、四姓の外に在つて屠殺を業とする男

【根本四禪】初禪一禪、二禪、三禪、四禪

【特勝】十六特勝を發する禪

【通明】六通三明に於ける九種の觀想

【背捨】八背捨の禪

【八】總じて上を結す。

止觀大意

す。魔事と言ふは、諸境を觀するに由つて、惑未だ破せずと雖も、天魔猶境を出でて其宮殿を空しうし、其民屬を化せんことを恐る。其と戰諍するが故に民主皆來る、即ち四魔の中の天子魔なり。乃至人間の慚悔、夜叉、時媚等の鬼、天魔に管屬して其が爲に巡邏して、行者を防遏して界を出づることを許さず。故に『大品』に云はく、『菩薩魔を説かざれば、菩薩の旃陀羅と名く』と。次に禪發とは、根本四禪、特勝、通明、九想、背捨、乃至念佛、神通等の禪を謂ふ。近く熟する者に隨つて其相を發す、相最も知り難し。次に諸見とは、乃至百四十見なり。上慢と言ふは、既に見を伏し已れば謂つて深誑と爲し、上位に濫叨す、是故に須らく識るべし。次に二乗とは、昔小志を發し、慧に由つて習生す。次に菩薩とは、三藏、通、別の三菩薩の心は習に由つて現す。上の如き諸境、竝に須らく觀力をもつて之を調伏すべし。竝に本文に在り、具に抄す可からず。

故に一家の觀法入道の次第は稍諸説に異なる、諸經に附して行相を成ずるを以ての故なり。則ち内は觀道に順ひ、外は教門に附す。之に依つて修行すれば、必ず空しく過ぎず、縱ひ此生に未だ獲ざるも、種と爲ること亦難し、意氣博達にして該括包籠す。未來際を盡して復轍を改めざれ、若し之に依つて修行せば、咸く口訣を須ひて方に一家の行相を成す。湛然所見暗短にして稟承功無し、本文は三百餘紙、此を略するに多く周からざる所あらん。俛仰して以て嚴命に赴くと雖も、實に大師の深旨を失はんことを恐る。諸の逮ばざることあるは、敢て通想を望むと云ふ耳。

止<sup>し</sup>  
觀<sup>くわん</sup>  
大<sup>だい</sup>  
意<sup>い</sup>  
畢



# 金剛頂大教王經疏玄談

慈覺大師撰

【日本佛教全書】日本書紀慈覺大師の撰にして七卷有り。實に密部經典に對する一家の態度を闡明せるものにして、法華と比ぜられて、同事勝と判ぜられしこと、誠に高祖天台大師並に宗祖傳教大師の教學を擴充せられたるものと稱せねばならぬ。本書所收は大綱と互義のみにして經文を釋する部は省けり。

【金剛寶樓閣】金剛界大日尊の宮殿

【理事俱密】眞如實相等の眞理を理密と云ひ、印契禁呪等の三密を事密と云ふ。

【金剛乘】眞言密教の異名

【菩提心嚴】一向に眞道を求むる菩提心の道場

【一】判釋の三門の名義を擧げ、次に第一門大綱を明すの條を詮す。

金剛頂大教王經疏玄談

金剛寶樓閣

法界衆徳の大日尊

理事俱密の金剛乘

菩提心殿の一切衆を稽首したてまつる

今此秘密典を演べ

諸の迷徒をして心明を開かしめんと欲す

唯願くは無縁の慈を流澍して

能所詮の中に四辯を増さんことを

(一) 今此經を釋せんとするに將に三門を用ゐてす。初には大綱を明し、次には互義を判じ、後には經文を釋す。初に大綱とは、夫以れば本初の極理は百非を超えて而も常に寂なり、遮那の大智は四句を絶して以て恆に明かなり。三乘の賢聖の跡猶臻らず、凡外の輩流焉んぞ能く測ることを得ん。攝教の如來、甚深を説くと雖も而も只是れ莽鹵なり、歴劫の薩埵眞實を稱ふと雖も而も争でか伊れ役ることを得ん。今此金剛眞宗の人は則ち達磨馱都を

【五義】五重玄義の略、釋名、辨體、明宗、論用、辨教の五義なり。【遮那】毘盧遮那の略。

【四句】有門、空門、亦有亦空門、非有非空門。

【三乘の寶華】聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の三乘は共に聖位に屬するが故に賢聖と云ふ。

【金剛眞宗】顯教に對して眞言密教を金剛眞宗と云ふ。

【法華駄耆】ダルマダーツ (Dharma-shattu) 法界の梵音。

【四種曼茶羅】大要は諸經に無き所、五智の奥源は唯此教に在り。金剛乘の大綱蓋し是の如き歟。伏して惟れば我仁壽皇帝、運は乾坤に合ひ、明は日月に均し、佛の付屬を受け非に大教を興したまふ。曩の願を遺れず終に眞宗を弘む。今贊述する所は前聞に非ざること無し。一義一文如し實際に契はば、伏して願くは陛下を資け奉りて徳山河と同じく、算ひ劫石に齊しからん。一句一頌、儼聖心に叶はば、復願くは國界を守護して普く無邊を福せん。

【三際】過去、現在、未來。

【二】

【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【一】  
【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【一】  
【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【一】  
【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【一】  
【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【一】  
【二】  
【三】  
【四】  
【五】  
【六】  
【七】  
【八】  
【九】  
【十】  
【十一】  
【十二】  
【十三】  
【十四】  
【十五】  
【十六】  
【十七】  
【十八】  
【十九】  
【二十】  
【二十一】  
【二十二】  
【二十三】  
【二十四】  
【二十五】  
【二十六】  
【二十七】  
【二十八】  
【二十九】  
【三十】  
【三十一】  
【三十二】  
【三十三】  
【三十四】  
【三十五】  
【三十六】  
【三十七】  
【三十八】  
【三十九】  
【四十】  
【四十一】  
【四十二】  
【四十三】  
【四十四】  
【四十五】  
【四十六】  
【四十七】  
【四十八】  
【四十九】  
【五十】  
【五十一】  
【五十二】  
【五十三】  
【五十四】  
【五十五】  
【五十六】  
【五十七】  
【五十八】  
【五十九】  
【六十】  
【六十一】  
【六十二】  
【六十三】  
【六十四】  
【六十五】  
【六十六】  
【六十七】  
【六十八】  
【六十九】  
【七十】  
【七十一】  
【七十二】  
【七十三】  
【七十四】  
【七十五】  
【七十六】  
【七十七】  
【七十八】  
【七十九】  
【八十】  
【八十一】  
【八十二】  
【八十三】  
【八十四】  
【八十五】  
【八十六】  
【八十七】  
【八十八】  
【八十九】  
【九十】  
【九十一】  
【九十二】  
【九十三】  
【九十四】  
【九十五】  
【九十六】  
【九十七】  
【九十八】  
【九十九】  
【百】

【四佛】不動如來、寶生如來、觀自在如來、不空成就如來。

【十六の開示、内外の八供】共に曼荼羅中の諸尊。

【金剛薩埵】眞言の第二祖。

【三密】身密、語密、意密。

【五智】法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。

【二】判釋三門の第二五義を以て判ずる中、先第一の釋名を明す。

【金剛頂一切如來眞實證大乘現證大教玉經】三卷、二卷の同名異譯あり共に唐の不空譯。

【金剛界】大日如來の智徳を開示せる部門。

【十八會】金剛頂の大本十萬頌の説會に十八會あり。

【指歸】金剛頂瑜伽經十八會指歸一卷、唐の不空譯。

るなり。初に經の名を釋すと、今此經に於て二の題目有り。初には金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教玉經卷第一と云ひ、次には金剛界大曼荼羅廣大儀軌品之一と云ふ。

金剛頂一切如來眞實攝大乘現證大教玉と言ふは是れ總名なり。金剛界大曼荼羅等と言ふは即ち別號なり。總名の中に就いて、金剛頂と言ふは是れ十八會の都名なり。一切如來大教王等とは即ち十八會の初の會を名けて一切如來眞實攝教王と爲るなり。故に「指歸」に

云はく、「金剛頂經 瑜伽に十萬の偈、十八會有り、初の會を一切如來眞實攝教王と名け四

大品有り。一には金剛界と名け、二には降三世と名け、三には遍調伏と名け、四には一切

義成就と名く。第二の會を一切如來祕密瑜伽と名く。色究竟天に於て説き四品を具す。

第三の會を一切教集瑜伽と名け、法界宮殿に於て説く。此經の中に大曼荼羅五部を説き、

一一の部の中に五曼荼羅有り。第四の會を降三世金剛瑜伽と名け、須彌頂に於て金剛藏等

の八大菩薩を説き、一一の尊に各四種の曼荼羅を説く。第五會を世間出世間金剛瑜伽と名

く、波羅奈國空界の中に於て略して五佛曼荼羅及び諸の菩薩、諸の外金剛部の曼荼羅を説

き、一一に四種を具す。第六會を大樂不空三昧耶眞實瑜伽と名け、他化自在天宮に於て説く。此經の中には普賢菩薩乃至外金剛部を説き般若理趣を説く、一一の尊に具に四種を説く云云。第七の會を普賢瑜伽と名く、普賢菩薩の宮殿の中に於て説く。此經の中には普賢菩薩等乃至外金剛部を説く、一一の尊に各四種曼荼羅等を説く。第八の會を勝初瑜伽と名く、普賢の宮殿に於て説く。普賢菩薩等より乃ち外金剛部に至るまで各各に四種曼荼羅

【色究竟天】色界十八天の一、色界天の最頂に位す。密教にては大日光明心嚴を指すことあり。

【法界宮殿】胎藏界大日如來の宮殿。波羅奈國恒河の流域に位す。

【外金剛部】金剛界曼荼羅の外衆。二十二天ありて四方を繞る。

【他化自在天宮】欲界六天の第六の天宮。

【普賢菩薩】一切諸佛の理徳、定徳行徳を司る菩薩。

【實相の理】三千の諸法本來虚妄の相を離れて相相皆實なり、之れ實相の本理なり。

【阿伽尼吒天】色究竟天の梵名。

【三摩地】サマディ (Samadhi) 定等持、一境性と譯す。

等と説く。第九の會を一切佛集會拏吉尼波網瑜伽と名け。眞言宮殿に於て説く。此中に自身を立てて本尊の瑜伽と爲すことを説く。身外に形像を立つることを訶す。瑜伽とは廣く實相の理を説く。並に五部の根源を説き、並に瑜伽の法等を説く。又四種曼荼羅等を説く。

第十會を大三昧耶瑜伽と名け、法界宮殿に於て説く。普賢等の十六の菩薩各々に四種曼荼羅等を説く。第十一會を大乘現證瑜伽と名け、阿伽尼吒天に於て説き、毘盧遮那佛乃至八供四攝、同眞實攝瑜伽を出生す。一一の尊に四種等を具す。第十二會を三昧耶最勝瑜伽と名け空界の菩提道場に於て説く。毘盧遮那等四部の中の上首の菩薩、金剛拳等二十八の菩薩及び外金剛部各々に四種等を説く。第十三會を大三昧耶眞實瑜伽と名け、金剛界の曼荼羅道場に於て説く。金剛薩埵、十方一切の佛の請を得已りて普賢の十七字眞言等を説く。

第十四會を如來三昧耶眞言瑜伽と名く。此經の中の普賢菩薩、十六大菩薩四攝一身と成りて四種曼荼羅等を説く。第十五會を祕密集會瑜伽と名く、祕密處に於て説く。此中に教法、壇、印契、眞言等を説き、廣く實相の三摩地を説き諸の菩薩各々に四種曼荼羅等を説く。第十六會を無二平等瑜伽と名け。法界宮殿に於て説く。毘盧遮那佛及び諸の菩薩並に外金剛部等各々に四種曼荼羅等を説く。第十七會を如虚空瑜伽と名け、實際宮殿に住して説く。毘盧遮那、普賢及び外金剛部一一に四種曼荼羅等を説く。第十八會を金剛寶冠瑜伽と名け、第四靜慮天に於て沙訶世界主の爲に五部の瑜伽曼荼羅を説き、亦四種曼荼羅等を説くこと具に彼に説くが如し。

【沙河世界】 娑婆世界とも稱す、三千大千世界の總名【第一義空】 小乘の涅槃に對して大乘至極の涅槃を言ふ。【阿字】 梵語十二母韻の最初の韻。一切諸法の根源を寄教にては阿字と云ふ。【三惑】 見思、塵沙、無明の三種の惑惱。

金剛と言ふは是れ堅固、利用の二義即ち喻の名なり。堅固なるを以て實相不思議祕密の理の常に存して不壞なるに譬ふ。利用は以て如來の智用の惑障を摧破して極理を顯證することを喻ふ。又極理は本より摧破の用を具するが故に利用の義と云ふ。智用の自體は滅壞有ること無きが故に堅固の義と爲す。又世間の金剛に三種の義有り、一には不可壞、二には寶中の寶、三には戰具の中の勝にして即ち極理の三種の義を具するを顯すなり。不可壞とは是れ實相の中道にして一切の語言中道を過ぎ、諸の過患を離れて變易すべからず、故に雲阿闍梨示して云はく、金剛とは堅固の義、以て一切如來の法身堅固にして壞せず、生無く滅無く始無く終無く、堅固にして常に存し壞せざることを表すなり。寶中の寶とは是れ實相中道の恆沙の萬德を具することを顯す。戰具の中の勝とは即ち第一義空の一切煩惱の敵對する者無きを表す。此三は即ち是れ阿字の三の義、此等の三法は佛の所作に非ず及以人天の所作にも非ず。法然の道理にして始無く終無く生無く滅無し、故に金剛と云ふ。故に『毘盧遮那經』に云はく、『此眞言の相は一切諸佛の所作に非ず、他をして作さしめず、亦隨喜せず、何を以ての故に、是諸法は法は是の如くなるを以ての故に。若は諸の如來出現し若は諸の如來生ぜざれども諸法は法爾にして是の如く諸の眞言に住す。眞言は法爾なるが故に若し此門に入る者は亦復是の如く一切の三惑等も破壞すること能はず、一切の邪魔等も敢て壞亂せず、法の木際に住する法然の道なるが故にと。此一阿の如く餘字も亦然り、故に金剛と云ふなり。又金剛に五種有り。一には青色金剛、能く一切の災障を除く。二に

【釋論】 釋摩訶衍論十卷、龍樹菩薩造、後提摩多譯、起信論を釋せしもの。  
 【涅槃經】 大般涅槃經四十卷、北涼曇無讖譯、三十六卷と劉宋の慧觀等編の二本あり。

は黄色金剛、能く空に昇るに身輕し。三には赤色金剛、能く火を出すことを得。四には白色金剛、能く水を出すことを得、亦能く水を澄ましむ。五には碧色金剛、能く諸の毒を消す。是の如きの金剛に各二義を具し成く功能を備ふ。以て如來五智の利用の煩惱を碎壞して有情の願を滿するに譬ふ。或は云はく七種の金剛あり、五は前に列ぬるが如し、更に綠色及以紫色を加へて七種と爲す。今謂く七種の金剛何ぞ五色に過ぎんと。但し今は青碧を彼に收めて且く五と爲すのみ。『釋論』に明さく、金剛を以て龜甲の上に安じて白羊の角を以て之を打つに金剛は碎けて微盡と成る。若し金剛は如來の智に譬ふれば佛智豈壞せざらんや。然るに『涅槃經』に云はく、『大喻は全を取るべからず、或は少分を取り、或は多分を取ると。』今は且く世間の金剛の少分相似するを取りて以て出世に喻へ常に不壞金剛を存するのみ。又金剛不可壞の如きは此經も亦爾なり。外道邪魔等の阻壞する所に等しからず。一切の法の中に極實法なるが故に、金剛の寶中の寶なるが如く此經も亦然なり。諸の經法の中に最も第一と爲す。三世の如來の發中の寶なるが故に金剛の如し。戰具の中に勝とは此經は諸教の中に於て而も殊勝と爲す。若し此教を覺らば劫數を歷ずして煩惱の賊を破り早く成佛するが故なり。言ふ所の頂とは是れ最勝の義、亦尊上の義なり、謂く此金剛教は諸大乘の法の中に於て最勝無過上の故に頂を以て之に名く。故に雲阿闍梨釋して云く、「金剛頂とは人の身に頂を最も勝と爲すが如く、此教は一切大乘の法の中に於て最も尊上と爲す故に金剛頂と名くるなり」と。又金剛頂とは是れ喻の名に不ず、一切衆生の心法界の中に本

【法華】 妙法蓮華經七卷又は八卷、羅什譯。

【器世間】 一切衆生の住居すべき國上世界を言ふ。

【隨自意】 如來内證の三密は隨自意の教なり。

【理趣釋】 大樂金剛不空眞實三昧耶經般若波羅蜜多理趣釋二卷、唐の虚空譯。

【善戒經】 菩薩善戒經九卷、劉宋の求那跋摩譯。

【眞道の淨心】 初めて無漏智を生じて、眞諦の理を照見せし位の淨心。

【三阿僧祇】 菩薩成佛の年時なり。阿僧祇は無數長時に名く。

【一行阿闍梨】 唐朝の沙門、善寂に就て出家し、後密教に通達して善無畏と共に大日經を譯す。阿闍梨とは佛道行者の師となるべき高僧への敬

より金剛堅固最勝最尊の義を具足せり。則ち理體に於て諸法と與に起るが故に、『法華』に是法は法位に住すと云ふ。今は正しく此秘密の理を顯說するが故に金剛頂と云ふなり。一切如來と言ふは謂く毘盧遮那如來なり。内曼荼羅三十七尊及び八十一聖とは、十方三世の盡虚空遍法界微盡刹海の一切如來の身を以て其體と爲す。故に亦能く甚深秘密百千萬億の修多羅藏を生ず。皆是れ毘盧遮那如來性海の功德なり。亦能く華藏莊嚴世界海の有情世間及び器世間を生ず。皆是れ毘盧遮那如來の體性周遍の故に、一身一切の刹に充遍するが故に一切如來と名く。又一切如來とは謂く五如來なり。毘盧遮那佛、阿闍梨佛、寶生佛、阿彌陀佛、不空成就佛なり。此五如來に一切の佛を攝する故なり。又三世十方一切の諸佛、是を一切如來と爲すは一切の言を以て遍く該攝するが故なり。眞實と言ふは是れ隨機誘引の言に非ず。専ら是れ一切如來隨自意の語なるが故に眞實と云ふなり。攝大乘 現證とは收攝なり。七大を攝せんが爲の故に大乘頓證と名く。故に現證と爲す。大乘とは、理趣釋に云く、『大乘に七義有り。一には法大、二には心大、三には勝解大、四には意樂大、五には資粮大、六には時勝大、七には究竟大なり。善戒經』に七大有り。一には法大、謂く十二部毘佛略なり。二には心大、謂く菩提を求るなり。三には解大、謂く菩薩藏を解するなり。四には淨大、謂く見道の淨心なり。五には莊嚴大、福德智慧なり。六には時大、謂く三阿僧祇の行なり。七には具足大、謂く相好を以て自ら嚴りて菩提を得るなり。六には是れ因大、七には是れ果大、大因大果合して大乘と爲るなり。一行阿闍梨の云はく、『略して七義

得なり。

【三時】 正法時、  
像法時、末法時。

【醍醐涼味】 五味  
中の最上味を醍醐  
と云ふ。  
【金剛經】 大般若  
經第二處第九會五  
百四十七卷を指す  
常には金剛般若波  
羅蜜經と言ふ。  
【智度】 大智度論  
百卷、龍樹造、秦  
の羅什譯  
【二乘の種】 聲聞  
緣覺二乘の劣慧の  
種

有り故に大乘と名くと。一には法大を以ての故に、謂く諸佛廣大甚深の秘密の藏、毘盧遮那遍一切處、大人の所乘なり。二には發心大の故に謂く一向志求平等の大慧、無盡の悲願を起し誓ひて當に普く法界の衆生に授くべしと。三には信解大の故に、謂く初めて心明道を見る時に無量の功德を具足して能く遍く恆沙の佛刹に至り、大事の因縁を以て衆生を成就するなり。四には性大を以ての故に、謂く自性清淨、心金剛寶藏は缺減有ること無く、一切衆生に等しく共に之れ有り。五には依止大の故に、謂く是の如き妙乘は即ち法界衆生の大依止處なり。猶百川の海に趣き、弁木の地に依りて生ずるが如し。六には時大を以ての故に、謂く壽量長遠にして三時に出過し、師子奮迅して秘密神通の用をば未だ曾て休息せざるなり。七には智大を以ての故に、謂く諸法無邊なるが故に虚空心に等しく、自然の妙慧も亦復無邊なり。實相の原底を窮むること譬へば函蓋相稱ふが如し。是の如きの七の因縁を以ての故に諸の大乗の法門に於て猶醍醐涼味の第一なるが如し。故に最勝大乘と云ひ又進趣と名くるなり。義意准知すべしと。今大乘に於て二種有り。一には顯示大乘、二には最勝金剛秘密乘なり。故に『金剛經』に云はく、『大乘を發する爲に説き最上乘を發する者の爲に説く』と。『智論』に亦云はく、『佛法に二種有り。一には秘密、二には顯示』と。而も今此經は是れ最上金剛秘密乘なり。瑜伽を修する者は、大乘普賢金剛の欲箭の三摩地を以て、彼無明住地二障の種現及び二乗の種を破し、摧碎して餘無く、多劫を屢すして大口毘盧遮那の位を證す、故に現證と云ふなり。諸の最上乘、頓證の旨は此經に攝屬せずと



【素怛囉】スート  
ラ(Sutra)。義譯し  
て經と言ふ。

云ふこと無し。故に攝大乘現證と云ふなり。大教主とは或は諸の大乗經に成佛の義を説くと雖も、而も劫數を經歷し或は得、或は得ず。或は大乗經に現證を明すと雖も、但理にして事無し。或は大乗經に粗真言、印契等を明すと雖も、而も支分具はらざれば未だ佛意を盡さず。今此經には具に五部、三密、五智の成佛等を説く。事理具足して佛の大意を盡すが故に大教主と云ふなり。經とは梵には素怛囉合。先古の聖人に而も多くの釋有り。或は無翻と言ふ、五義を含むが故に。五義は謂く、法本と徵發と涌泉と繩墨と結鬘となり云云。或は有翻と言ひ亦は五と爲す。謂く一には翻じて經と爲し、經は由の義と爲す、聖人の心口に由るが故に。今亦隨つて之を釋するに謂く、教由、行由、理由なり。二には翻じて契と爲す。緣に契ひ、事に契ひ、義に契ふなり。三つは法本と翻す、即ち教、行、理の本なり、四には繩と翻す、繩は教行理を貫持して零落せざらしむるなり。五には善語教と翻す、亦是れ善行の教なり。亦是れ善理教なり。今は正しく經を用ふるに多合の義に於ては強ひて三の法本と、三の徵發と、三の涌泉と、諸の繩墨、結鬘等の義を含み、亦契、繩、善語教、法に訓じ、常に訓ずる等を含み、經の一字の中に攝在せずといふこと無し。餘の句も亦是の如し諸の大小乗教は皆經を以て通名と爲す。此義に従ふが故に經と云ふ。賈法師の云はく、「經とは連綴攝持なり」と。通法師の云はく、「今直に經を釋して常と爲し法と爲す。常は則ち道、百王の法に軌る。乃ち徳千葉に模すと。偈摩の曰はく、「古今殊なり」と。雖も覺道改まらず、群邪阻ること能はず、衆聖異にすること能はず、故に常と云ふなり」

【五相】 通達菩提心、修菩提心、成金剛心、證金剛身佛車圓滿。是五相の觀を以て金剛界の佛身を顯發す。

【等正覺】 如來十號の一、真正に一切法を覺知するを言ふ。

【波羅蜜形】 明妃の女形、明妃は三昧の形なり。

【四靜慮】 四靜慮天に生ずる禪定、悲、喜、捨の四種の無量心之を修すれば色界の梵天に生ず。

【三解脱門】 空解脱門、無相解脱門

と。第二と言ふは次第、一とは數の初なり。此經一部は總じて三轉有りて此卷は初に居せり、故に第一と云ふ。次に金剛界大曼荼羅廣大儀軌品の一と言ふは指歸に云はく、初會の一切如來眞實攝大教王に四大品有り。一には金剛界と名け、二には降三世と名け、三には遍調伏と名け、四には一切義成就と名く。四智印を表す。初品の中に於て六の曼荼羅有り、謂ゆる金剛界の大曼荼羅並に毘盧遮那佛の受用身を説き、五相を以て等正覺を現成すること。第二に陀羅尼曼荼羅を説き、三十七尊を具せり、此中の聖衆は皆波羅蜜密形に住す。廣く入曼荼羅儀軌を説いて弟子の爲に四種の眼を授け、敬愛、鈎召、降伏、息災等の儀軌を説く。第三に微細金剛曼荼羅を説き亦三十七聖衆を具す。金剛杵の中に於て盡く各定印を持したまへり。廣く入曼荼羅の儀軌を説いて弟子の爲に心をして堪任せしめ、心をして調柔せしめ、心をして自在ならしむ。微細金剛の三摩地を説きて四靜慮の法を修し、四無量心及び三解脱門を修す。第四に一切如來廣大供養羯磨曼荼羅を説き亦三十七を具せり。彼中の聖衆は各本標幟を持し供養して住し、廣く入曼荼羅の法を説く。弟子の爲に十六大供養の法を受くることを説いて、四種の祕密供養の法を説く。第五に四印曼荼羅法を説く、弟子の爲に四種の速成就法を受く。此曼荼羅を以て悉地成就を求めば、上の四曼荼羅の中の所求の悉地の如く此像前に於て成就を求む。第六に一印の曼荼羅を説く、若し毘盧遮那の眞言及び金剛薩埵菩薩を持せば十七尊を具す、餘も皆十三を具す。亦大曼荼羅儀軌を説き弟子の與に先行法修集本尊の三摩地を受く。然るに今の此經は四の小品に於て是は

初の大品なり、故に金剛界と云ふ。金剛と言ふは前の所釋の如し。言ふ所の界とは名けて性と爲し、種類の義を分つ。謂く諸の有情の身中に五智如來の性あり。此性有るが故に、此秘密教を修習する者有れば必ず曼荼羅海會を開顯することを得。是故に雲阿闍梨の釋に云はく、界とは性なり。一切如來の金剛性、一切有情身中に遍することを明す。本來普賢毘盧遮那大用自性身の海性功德を具足し圓滿するが故なり。又性とは是れ實性、實性は即ち是れ理性、實を極むるに過無し、即ち佛性の異名なり。即ち毘盧遮那法身如來の性なり。此理を具するが故に一切有情悉く當に秘密三身を顯得すべし。理必ず覺有り、猶金寶の必ず光明を有するが如し。又性は不改に名く、是如來の性は煩惱に隨逐し生死を經歷すと雖も而も其性を改めず、衆生を引發して的に佛果に到ること、金剛寶の必ず輪際に至りて而も停住することを得るが如し。此等の義に依るが故に界と云ふなり。大曼荼羅と言ふは六種曼荼羅の中に初を擧げ餘を兼ぬ、故に大曼荼羅と云ふ。又此初會の曼荼羅は餘會の本と爲る、故に大曼荼羅と云ふなり。廣大儀軌と言ふは諸會の秘密の儀軌を該攝す、故に廣と云ふ。是れ諸の如來の内證祕法の故に大と云ふなり。儀は謂く儀式、軌は謂く軌範、即ち是れ一切如來秘密頓證の儀式なり。普く群生を度するの軌範なるが故に儀軌と云ふ。言ふ所の品とは類なり、品類區別の故に。一は首章に冠る數の極みとは、此儀軌品に於ては總じて三品有り、此品は初に居す、故に之を一と云ふなり。

次に正しく經の體を明さば二と爲す。謂く總、別體なり。初に總體とは是れ即ち本有の阿

【二界】凡夫の生死流轉する世界を欲、色、無色の三界に分つ。

字一部の指歸、衆義の都會なり。故に『大毘盧遮那經』の第一に云はく、『云何が眞言教法なる、謂く阿字門なりと。』又云はく、『是中の一切の眞言の心は汝當に諦かに聴くべし、謂ゆる阿字門なりと。』此一切の眞言心を念ずるを最も無上と爲す。是れ一切の眞言の所住なり、此眞言に於て而も決定することを得と。『二行阿闍梨の云はく、阿字は是れ一切諸法の教の本なり。凡そ最初に口を開くの音に皆阿の聲有り。若し阿の聲を離れば則ち一切の言説無し、故に一切衆聲の母と爲す。凡そ三界の語言皆名に依り、而も名は各字に依る。故に悉曇の阿字も亦衆字の母と爲す。當に知るべし、字門眞實の義亦復是の如く、一切の法義の中に遍するなり。所以は何んとなれば、一切の法として衆縁より生ぜずと云ふこと無きを以て、縁より生ずる者は悉く皆始有り本有り。今此能生の縁を觀するに亦復衆の因縁より生じ、展轉して縁に従ふ。誰をか其本と爲さん。是の如く觀察する時に則ち本不生際を知る、是れ萬法の本なり。猶一切語言を聞く時に即ち是れ阿の聲を聞くがごとし。是の如く一切法の生を見れば即ち是れ本不生際を見、若し本不生際を見れば即ち是れ實の如く自心を知り、實の如く即ち自心を知る。是れ一切智智の故に毘盧遮那は唯此一字を以て眞言と爲すなり。而るに世間の凡夫は諸法の源本を觀ぜざるが故に妄に生有りと謂ふ、所以に生死の流に隨つて自ら出づること能はざること、彼無智の畫師の自ら衆縁を運んで可畏夜叉の形を作り、成し已つて自ら之を觀る、心に怖畏を生じて頓に地に蹴るが如し。衆生も亦復是の知し、自ら諸法の本源を運らして三界を畫作し、而も自ら其中に没して身心

熾然にして備に諸苦を受く。如來有智の畫師は既に了知し已れば即ち能く自在に大悲曼荼羅を成立す。是に由つて言はば謂ゆる甚深祕密藏とは衆生白ら之を秘するのみ。佛隠したまふこと有るに非ざるなり。

次に別體を明すとは、謂く諸字に約して各經體を明す。故に「毘盧遮那經」に云はく、「諸の如來の加持力、衆生に隨順して其種類の如く眞言教法を開示す。謂く阿字、迦字、佉字等の一一の字字聲名等皆是れ入法界の門なり。實に入るの門多し、故に名けて別と爲す。總別異なりと雖も其體殊ならず。諸字と言ふは阿上、阿引、佉上、佉去、塢、汗、哩、引、唱、囉、囉、愛、汗、奧、闇、惡及び迦、佉等の三十四字、乃至二合、三合等の字なり。此等を聞く時に各各に本極の理に契ふことを得。故に經體と爲す。云何が阿、佉等なる。謂く阿上字門、一切諸法不生の故に。阿引字門、一切の法寂靜の故に。佉上字門、一切の法根不可得の故に。佉去字門、災禍不可得の故に。乃至闇字門、一切法邊際不可得の故に。惡字門、一切法遠離不可得の故に。具に「金剛頂釋字母品」の如く、一一の字門本不生際に入ることを得ずといふこと無し。經體を論ずるに至つて應に一切隨方諸趣の名言に遍すべし。但し如來の出世の迹天竺に始るを以て且く梵文に約して一途と作し義を明すのみ。故に彼經の第二に亦云はく、「等正覺を成じ世に出興して、而も此法を用ひて種種の道を説き、種種の樂欲、種種の諸の衆生の心に隨ひ、種種の句、種種の文、種種の隨方便の語言、種種の諸趣音聲を以て、而も以て加持して眞言道を説くなり。若し且く佛世滅後に約して經を明さば、

【金口の演説】佛在世に於ける佛口よりの善説。

【善知識】修行を益する人。

【三塵】色、聲、法の三塵。佛は六塵を以て説法するも此土に就かば只上記の三塵のみ。

【餘の三識】香識、味識、觸識。

【六塵】色、聲、香、味、觸、法の六塵は象生の淨心を染汚するものなれば之を六塵と云ふ。

【五塵】十二入、十八界共に凡天實我の執を破せんが爲に施設せるもの密教にては心法に迷ふ者の爲に五陰を説き、色法に迷ふ者の爲に十二入を説き、色心に迷ふ者の爲に十八界を説くとなし。

【佛連金の三部に配す】

【華嚴經】大方廣佛華嚴經六十卷、八十卷、四十卷の

佛の在世の如きは金口の演説但し聲音詮辨有りて聽く者道を得たり。故に聲を以て經と爲す。『大品般若』に云はく、『善知識に従つて聞く所なり、若し佛世を去りては紙墨もて傳持し、應に色を用ひて經と爲すべし。』と。故に『大品』に又云はく、『經卷の中より聞く、若し意識利なる者は内に自ら思惟し心法と合し、他教に由らず、又紙墨にも非ず但心に曉悟す。即ち法を經と爲す。故に云はく、我法を修する者は識りて乃ち自ら知る。』と。是れ佛世及び滅後に通するなり。若し土に約して辨ぜば、此國土に於て耳識利なる者は能く聲塵に於て分別して悟を取る。則ち聲は是れ其經なり、餘に於ては經に非ず。若し意識利なる者は自ら能く研心す、思惟して決を取る法は是れ其經なり。若し眼識利なる者は文字詮量にして而も道理を得、色は是れ其經なり。此方に三塵を用ふるのみ。餘の三識は鈍なり。若し他土は不定にして亦六塵を用ひ、亦偏に一塵を用ふ。或は國土有り、天衣身に觸るるを以て即ち道を得、或は佛の光明を見て道を得。或は寂滅無言にして心を觀じて道を得。衆香土の如きは香を以て佛事を爲す。若し極理に約して經體を辨ずれば、五陰、十二入、十八界等本是法界の體、自ら是れ經なり。根性の方を取る乃ち是れ經なるに非ず。故に『金剛頂字母品』等に云はく、『一切諸法本生せず、本不生と言ふは即ち極理なり』と。『華嚴經』に云はく、『三界唯心なり』と。『大般若經』に云はく、『一切諸法皆如なり。若し三性に約せば聲名、句文是れ依他に屬し、字義等は即ち眞實性なり』と。問ふ、若し聲字等是れ依他ならば即ち生滅の法、何が故にか以て阿字本不生と爲んや。答ふ、依他の生滅とは是れ淺略の義な

三本あり。

【三性】。通計所執

性、依他起性、圓

成實性。之を次第

の如く妄有、假有

實有の三に配する

ことを得。

【西域記】。大唐西

域記十二卷、總持

寺沙門辯機撰、唐

玄奘三藏西域諸國

に遊びし紀行。

【三千大千世界】。

小千、中千、大千

の三世界より成れ

ば三千大千世界と

言ふ。其數量は十

億なり。

【八聖道】。正見、

正思惟、正語、正

業、正命、正精進

正念、正定の八種

の聖道。

【八聖道】。正見、

り。今深祕の釋に隨ふが故に阿字不生と云ふ。問ふ、如何が阿字不生なる。答ふ、阿

字は是れ佛及び天人の所作に非ず、是れ法然の道なるが故に不生と云ふ。故に毘盧遮那

經に云はく、「此眞言の相は一切諸佛の所作に非ず。他をして作さしめず、亦隨喜せず、乃

至云はく諸法は法爾にして是の如く住す、謂く諸の眞言なり。眞言は法爾なるが故に」と。

問ふ、天竺の梵字は是れ劫初の時梵王の作る所なり。「西域記」に云はく、梵王の所製、始

を原則を垂るるに三十七言なり。物に寓て合成し事に隨つて轉用し、支派を流演す。此

を以て之に准するに既に無の初に有り。如何にして今阿字は是れ法然の道なりと云ふや。

答ふ、法然の道に隨ひて梵製書せるのみ。故に梵王の所製と云ふ。是れ彼天の自ら製作せ

る所には非ず。故に「華嚴」に云はく、「一微塵の中に三千大千世界の經卷有り」と。又堅意の

寶性論に云はく、「一の大經卷有り、三千大千世界の如し。大千界の事を記し、中の

如くなるもの、小の四天下三界等の大さの如くなるものも皆其事を記して一塵の中に在り。

一微盡既に然なり、一切の塵も亦爾なり。一人出世して淨天眼を以て此大卷を見て是念を

作す。云何が大經は微盡の内に在りて而も一切の衆生を饒益せざると。即ち方便を以て此

經を破出して以て他を益す。如來無礙の智慧經卷は具に衆生の身中に在れども顛倒して

之を覆ひて信ぜず見ざれば、佛衆生を教へて八聖道を修し、一切の虛妄を破して己が智

慧を如來と等しきことを見しむ。此れ即ち法然の道理の經卷なり。文字既に爾なり、聲

名、句等も亦是れ不生なり。何を以ての故に。彼文字の性を離れざるを以ての故なり。故に

【八聖道】。正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八種の聖道。

【小乘有漏】 佛滅後二百年の初、上座部より有部宗分立す。

【有漏】 煩惱あるを有漏と云ひ、無きを無漏と言ふ。

【大乘宗】 印度にては中觀、瑜伽の二宗を大乘宗とし日本に於ては俱舍成實を小乗とし餘は皆大乘宗なりとなす。

【遍計所執】 凡夫の妄情は一切法を計度して我法ありと誤信するを言ふ

常人の云はく、名は自性を詮し句は差別を詮す、故に俱に本際不生の法なり。問ふ、小乘有部の云はく、聲は是有漏なり。何が故ぞ、今本際不生の法と云ふや。答ふ、彼は世間安立の淺略に隨ひ是は隨他法なり。今は如來隨自意の法に依りて極理を安立す、故に不生と云ふ。問ふ、大乘宗に就くに亦如來說法の聲、名、句等の法を以て無漏と爲すと雖も猶是有爲なり。何の故に今以て無爲法と爲るや。不生是れ即ち無爲の義なるが故なりや。答ふ、若し淺略の大乘の義に隨はば應に言ふ所の如くなるべし。今は但如來の自意を安立するが故に無爲と云ふ。問ふ、如今現に見るに或は起り、或は滅す。已に爲れ四相の爲作する所なり、何ぞ無爲と稱せんや。答ふ、起に似、滅に似、實の起滅に非ず。故に無爲と云ふ。問ふ、不生は是れ不滅なり。若し聲名等を以て不生と爲せば、即ち外道の聲は是れ常なりと立つるに同じ。答ふ、諸の外道等は遍計所執の妄分別の法に約して以て常等と爲す。今は法性法界の緣起に依りて如來内證の境界を安立するが故に、諸の外道に同すべからず。問ふ、諸の顯教等は聲名等を以て俱に經の體と爲す。亦唯心及び眞如の理を以て同じく經の體と爲す。今の秘密と何等の異り有りや。答ふ、諸の顯教等は聲等を説いて以て經の體と爲すと雖も、明す所の字等は法然の道に非ず、更に亦境を攝し心に從ふ、唯識を體と爲し、相を攝し性に歸し眞如を體と爲すと明すと雖も、境心融せず、相體隔別す。今の經體と同じく論すべからず。何となれば彼は但世間淺略の義に隨つて聲等を明す。故に若し今の經の法然に同せば、應に字等の依他の法は不生不滅なりと立つべし。若し爾らずんば諸



【攝相歸性】無明に據つて生起せる安相を破して眞如の法性に攝歸するを言ふ。

【四】五義の第三明宗の條を明す。

【維摩經】維摩詰所說經三卷、秦の羅什譯。

【楞伽經】四卷、十卷、七卷の三本現存す。

【如來藏】眞如の煩悩中にあるを言ふ。

【佛知見】諸法實相の理を照見する佛の智慧。

法の本不生の義に相違す、亦法然に非ず。又彼は只境心に依りて量知せらる、故に唯心と爲す。是れ色等に不ず、全く慮知と爲す。今の義は兩らず、色體全く心、心の體全く色、若し今に同じくんば應に非情にも佛性有るの義を立つべし。若し立たずんば境心融ぜず。良に以有るなり。又復彼は只相眞如を離れざるを取りて、以て攝相歸性と爲す。是相全く如の體と爲すには不ず。今の義は然らず。相法全く如、如の體全く相なり。若し今と共にらば應に眞如隨縁の義を立つべし。若し立たずんば何ぞ相體隔別の失を免かれん。

三に宗を明すに二と爲す。先には諸經の宗を判すること有るを出し、後には此經を明す。初に諸經の宗を判することを出ださば、或人の云はく、「維摩經」の如きは不思議を宗と爲す、「法華經」は一乘を宗と爲す。「楞伽經」は如來藏を宗と爲し、「涅槃經」は佛性を宗と爲すと、「是の如く經宗を判するに、只所說の辭を知りて未だ其源由を解せず。夫以みれば如來の說法は一經一説として、諸の衆生等をして因を修し果を證せしむるが爲ならずといふこと無し。故に「法華」に云はく、「諸佛世尊、衆生をして佛知見を聞き清淨を得しめんと欲するが故に世に出現したまふ」と。其所判の如きは未だ該潤を爲さず。

次に今の經宗を明さば復分つて二と爲す。初には正しく今の經宗を明し、後には疑難を明す。初に經宗を明すとは正しく佛因及び佛果を以て今の經宗と爲す。宗は是尊王の義、如來の說法は修因證果を尊主と爲す。故に佛因と言ふは、謂ゆる明かに五部祕密の修行、三密加持勝妙法等を了するなり。佛果と言ふは謂ゆる毘盧遮那五智の菩提遍法界の體を攝

【瑜伽論】 瑜伽師地論百卷、彌勒菩薩說、唐の玄奘譯

【十地】 菩薩の聖位にして界外の無明を斷じて次第に妙覺に近づかんとする位。

現するなり。是故に此經の正説の文初には五相の眞言を演説す。初の四は是れ因位なり、後の一は即ち果位なり。以後は諸文廣く果位の智用無礙自在の相を説くが故に、此經は正しく因果を宗と爲す。次に疑難を明さば、問ふ、「諸の顯教に亦因果を明す、今の所立と同一如何。」答ふ、「彼は是れ劫を歴て修證せるの因果、此は即ち歴ずして修證せる因果なり、是故に異なるなり。『瑜伽論』の四十八に云はく、『然も一切の住總じて三無數大劫を経て方に回證を得。謂く第一無數大劫を経て方に乃ち勝解行住を超過し、次第に極歡喜住を證得すと。此は恆常の勇猛精進に就く、勇猛精進ならざる者には非ず。復第二無數大劫を経て、方に乃ち極歡喜住を超過して乃ち有加行、有功用、無相住に至り次第に無加行、無功用、無相住を證得す。此即ち決定して是菩薩は淨意樂を得るを以て、勇猛勤精進を決定するが故に、復第三無數大劫を経て方に乃ち無加行、無功用、無相住及び無礙解住を超過して、最上成滿の菩薩住を證得す。』と。已上論。故に知んぬ、顯教は必ず劫數を経て最上を證得す。假令日夜月等を取り名けて劫數と爲すと雖も、而も現生に於て初無數劫を経歷すること能はず。何に況んや三無數大劫をや。『毘盧遮那經』の第一に云はく、『普く十方に於て眞言道清淨、句の法を宣説したまふ。謂ゆる初發心より乃至十地、次第に此生に満足す。』と。已上經。既に十地は此生に満足すと云ふ。若し此文に准せば應に顯教は三無數劫を経歷し證する所の最上成滿の菩薩位は密教の力を以て此生に満足すと云ふべし。又、『金剛頂五秘密』に云はく、『顯教の修行に於ては久久に三大無數劫を経て、然る後に無上菩提を證

【自受用身】 理智相應して自受法樂に住する身。

【他受用身】 十地の菩薩の爲に現ずる法身なり。現身とは佛の眞身を言ふ。

【灌頂】 天然の國王即位の時四大海の水を頂に灌いで觀意を表す。密教にては加行成就して阿闍梨となるとき此式を行ふ。

【無量義經】 一卷 蕭齊の曇摩伽陀耶舍譯。

【六波羅密】 布施持戒、忍辱、精進禪定、智慧の六度行、之れ菩薩の大行なり。

【無生法忍】 生滅を遠離せる眞如實相の理體に住して動ぜざるを言ふ。

【阿耨多羅三藐三菩提】 眞正に一切諸法の眞理を知る智慧。

【一切二十五有】 色欲界の十四有、色

成す。若し毘盧遮那佛自受用身の所説、内證自覺聖智の法及び大普賢金剛薩埵他受用身の智に依らば、則ち現生に於て曼荼羅阿闍梨に遇逢ひ乃至灌頂受職の金剛名號を受くれば此より已後廣大甚深不思議の法を受得して二乘十地を超越す」と。又云はく、「人法二觀、悉く皆平等にして現生に初地を證得し漸次に昇進す。若し此等の文に依らば應に現生の中に初地の佛、乃至第十地の佛を成ずることを得等と云ふべし」と。又「無量義經」の十功德品に云はく、「第七に是經の不可思議功德力とは、若し善男子善女人、佛在世若くは佛滅度の後に於て此經を聞くことを得、歡喜信樂して希有の心を生じ、受持し讀誦し書寫し、説の如く法の如く修行して菩提心を發し、諸の善根を起し、大悲意を興し、一切苦惱の衆生を度せんと欲せば、未だ六波羅密を修行することを得ずと雖も、六波羅密は自然に前に在り。即ち是に於て身に無生忍を得、生死煩惱一時に斷壞して第七菩薩の地に昇らん」と。又「第八功德」の文に云はく、「是故に善男子善女人佛の化功德を蒙るを以ての故に、男子女人等即ち是身に於て無生法忍を得、上地に至ることを得て諸の菩薩の與に以て眷屬と爲し、速に能く衆生を成就して佛國土を淨め、久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん」と。又第九の「功德」の文に云はく、「若し男子女人、若し佛在世及び滅度の後、是經を得ること有り。乃至是經の義を解説せば即ち宿業の餘罪一時に滅盡することを得て速に上地を越ゆることを得、善能く身を分ち體を散じ十方の國土に遍じて、一切二十五有の極苦の衆生を救濟して悉く解脱せしめん」と。又「第十功德」の文に云はく、「若し男子女人、若し佛在

界の七有、無色界の四有を合して三界二十五有となす

【法雲地】菩薩十地の第十、大法の智慧徧く盡す位

【即身成佛】此肉

刷身の儘にして成佛するを言ふ

【五】五義判釋の第四誦用の判を明す

【三業】身業、口業、意業

【如意珠王】如意寶珠の中、最勝なるもの

【分段生死】三界六道の果報にして因行に依つて其果報に分分段段の差異あれは斯く名く

【變易生死】界外の淨土の果報。阿羅漢以上の聖者の生死なり

【藥樹王】此樹の根莖枝葉は一切の病を癒すこと、他の藥樹に王たるが故に此名あり

【藥樹王】此樹の根莖枝葉は一切の病を癒すこと、他の藥樹に王たるが故に此名あり

及び滅度の後に若し是經を得、乃至如法に修行すれば即ち是身に於て便ち無量の諸陀羅尼門を逮得し、凡夫地に於て自然に初時に能く無數阿僧祇の弘誓大願を發さむ。深く能く發して一切衆生を救ひ、大悲を成就して廣く能く衆苦を抜き、厚く善根を集め乃至一切を安樂にし、漸く見るに超登して法雲地に住し、恩澤普く潤ひ慈被外無く、苦の衆生を攝して道跡に入らしむ。是故に此人は久しからずして阿耨多羅三藐三菩提を得ん」と。若し此等の文に依らば應に顯教は三無數劫に勤精進する功、此經の力に由りて即身成就すと云ふべし。引く所の經文皆是れ如來金口の誠言なり。彌信受すべし。

第四に用を明すとすは、用は是如來の妙能、此經の勝用なり。如來は祕密の五智を以て妙能と爲す。此經は大慈大悲を以て勝用と爲す。只五智能く慈悲を發起す。慈悲は五智に由り能く他に樂を與ふ。之を名けて慈と爲す。能く他苦を抜き、之を名けて悲と爲す。大慈善根力を以ての故に、能く實に一切衆生に世間の樂及び出世間の樂を與ふ。故に慈能く樂を與ふと云ふ。二種の與樂有り、一には大慈三昧に住して慈力冥に衆生を薰じて各安穩力を得。二には慈三昧力、普く三業を現じ衆生の見聞覺知有る者に隨つて各安樂を獲。故に大慈と名く。即ち是れ如意珠王の身なり。大悲善根力を以ての故に能く實に一切衆生の分段生死の苦及び變易生死の苦を抜き。故に非能く苦を抜くと云ふ。二種の拔苦有り、意慈中に分別するに同じ。但し拔苦の異り有るが故に大悲と名く。即ち是れ藥樹王の身なり。若し如意珠王身、樂を與ふるの時は上は如來無上の樂より下婦女卑少の樂に至るまで

【六】五義の中第一の教の一段を明す。

【毘奈耶】ビナヤ (Vinaya)、三藏の中の律藏。

【阿毘達磨】アビダルマ Abhidharma (三藏中の論藏) 處胎經、菩薩處胎經七卷、姚秦の竺佛念譯。

【半教滿教】半教は小乘、滿教は大乗を指す。

【漸頓の二教】次第漸人の法を漸教と言ひ、圓教の如き頓速頓極に成佛する法を頓教と言ふ。

授與せずといふこと無し。若し樂樹玉身拔苦の時、上は變易難除の大苦より、下愁咽此些の苦に至るまで、悉く能く救濟す。要を擧げて之を言はば、分段變易一切の諸苦、世出世間一切の諸樂、時に應じて悉く救つて樂ひに隨つて普く與ふ。蓋し此秘教最勝の妙用なり矣。

第五に教相を明すとは、中に於て三と爲す。初には諸門の所攝を明し、次に法被の根性を辨じ、三には正しく教相を判す。諸門の所攝に五有りとは一には諸藏を明し、二に諸教を明し、三に諸乘を明し、四に十二分を明し、五に所會を明す。初に諸藏を明すとは、諸經論の如きは藏を説くこと不同なり。若し、瑜伽の説に依らば二藏有り。謂く菩薩藏及び聲聞藏獨覺教なり。少なれば聲聞の中に入り、多に従つて藏と爲し聲聞藏と名く。或は三藏を説く、一には毘奈耶、二には素怛攬、三には阿毘達磨にして、次の如く戒、定、慧學を説す。或は四藏を説く、聲聞藏、菩薩藏、雜藏、佛藏なり。或は五藏を説く、『六波羅密經』の如し。毘奈耶等の三名は前の如し。四には般若波羅密多藏、五には陀羅尼藏なり。或は六藏を説く、菩薩、聲聞に各三有り。故に獨覺は更に別の戒律等無きが故に三藏無し。或は八藏を説く、『處胎經』の如し。謂く胎藏、化藏、中陰藏、摩訶衍方等藏、戒律藏、十住藏、雜藏、金剛藏、佛藏なり。此經は即ち二藏六藏に於て菩薩藏に收む。三藏の中には素怛攬藏なり。四八藏に於ては是は佛藏の攝なり。五藏の中に於ては陀羅尼藏なり。二に諸教を明すとは、『涅槃經』の説に依らば二教有り、半教滿教なり。『智度論』に亦説く、二種の教有り、謂く顯示教、祕密教なり」と。又或説は漸頓の二教有り。而るに今此經は以て、滿教及び

【攝論】攝大乘論  
無着菩薩造  
【十地經】九卷、  
唐の尸羅達摩譯。

【祇夜】(Geyā) 前段に説ける經文の義理を再び復讐にして説けるもの。  
【和伽羅那】(Vataraṇa) カラナ (Vataraṇa) じ、發心の衆生に對して當成成佛の記別を佛が授與するを言ふ。  
【伽他】(Gāthā) ガータ  
【優陀那】(Udāna) ウダーナ

秘密教と爲す。漸頓の中には是れ頓教なり。三に諸乘を明すとすは、或は一乘を説く、『法華』に云ふが如し。十方佛土の中に唯一乘の法のみ有り。一と。或は二乘を説く、『攝論』等の如し。一には大乘、二には小乘なり。或は三乘を説く、諸經に云ふが如く聲聞乘、獨覺乘、菩薩乘、なり。或は四乘を説く、『十地經第七』に云ふが如し。聲聞獨覺法行、菩薩行、法行、如來地法行なり。或は五乘を説く、謂く三乘に人天乘を加ふるなり。今此經は即ち一乘大乘、佛乘の所攝なり。四に十二分を明すとすは、謂く此經を以て十二分に收む。十二分教と言ふは、分は分類と爲し、教は能詮なり。分類不同にして此十二有り。具義具に餘處に説くが如し。今は但名を標して略して經文に配す。一には修多羅、此には契經と云ふ。謂く理に契ひ根に契ふが故に。此に通別有り、通は即ち十二俱に契經と名く。別は即ち長行なり。此經に具に有り。二は祇夜、此には重頌と云ひ、亦應頌と云ふ。即ち二意有り、一には重ねて後來未だ聞かざる者に示すが故に。二には重ねて長行の未だ了せざる所を頌す。故に應に重ねて頌を述べし。今此經中には別序の末偈の頌の如く、初十六菩薩、五佛、四波羅密等即ち重ねて頌するが故なり。三には和伽羅那、此には授記と云ふ。即ち三相有り。一には菩薩當成佛の事を記し、二には弟子死生の因果を記し、三には諸法甚深の義を記す。此經は第三義に通ずべし。四には伽他、此には頌と云ふ。即ち諷頌なるが故に、妙言詞を以て而も諷誦するが故なり。諷誦は謂く前に未だ説かざるを直に偈を以て明すなり。謂く十六大菩薩等各所受の智印を歎する五言の偈等の如き是なり。五に優陀那、此には自説と云

【尼陀那】ニダーナ(Nidana)。

【婆伽梵】バガヴァン(Bhagavan) 世尊と譯す、佛十號の一なり。  
【阿波陀那】アバダーナ(Avadhana) 意。  
【閻浮提】ヤアンブドゥビーバ(Jambudvīpa)、吾人の住處。  
【閻陀伽】ヤアーカカ(Jataka)。  
【伊帝日多伽】イチアリタカ(Idivyataka)。

ふ。謂く請を待たずして機を觀て即ち説き及び問を待たずして自證を顯説するなり。此經に云ふ、「爾時に世尊、毘盧遮那如來久しからずして乃至一切如來の性を現證し、自身に於て加持して即ち一切如來普賢摩訶菩提薩埵の三昧耶に入り、薩埵を出生し金剛三摩地一切如來大乘現證の三昧耶を加持するを一切如來心と名くるが如し」と。自信より縛日羅薩恒縛を出す、自證を顯説するとは是なり。六には尼陀那、此には緣起と云ふ。彼因緣に應じて説を起すが故に。即ち三相有り、一には犯に因りて戒を制す。二には事に因りて法を説く。三には請に因りて法を説く。此經の中の如きは惡事を治せんが爲に眞言を説き、罪垢を除かんが爲に密言を説き及び三昧耶戒等を授く、是れ制戒の義なり。時に普賢大菩提薩埵の身、世尊の心より一切如來の前に下り月輪に依りて住す。復教令を請ふ。爾時には婆伽梵、一切如來の智三昧耶に入る。乃至則ち一切如來、金剛名を以て金剛手と號する等とは是請に因りて説法す。又請に因りて大に金剛を持して百八の徳を讚め、讚に因りて演説す。讚を持つ功能、及び弟子入壇の事に因りて入壇廣大の功德等を辯説すとは即ち是れ事に因りて法を説くなり。七には阿波陀那、此には譬喩と云ふ。喩を擧げて彼所説法に況るが故に、此經に「恆河沙と等しき數の如來、猶し胡麻の如く示現して閻浮提に滿つと云ふが如きは是なり。八には閻陀伽、此には本事と云ふ。謂く自身を除きて諸弟子の本生の事を説く。故に今此經の中には諸の弟子をして楊枝を放擲し、華鬘を供へ奉り過去の奉る所の諸尊を知ることを得といふは是なり。九には伊帝日多伽、此には本生と云ふ。自ら佛菩薩

【毘佛略】 バイブ  
ルヤ (Vaidurya)。

【阿浮陀達摩】 ア  
ドブタ・ダルマ (A  
dohuta-Dharma)。

【優婆提舍】 ウパ  
デーシヤ (Upa  
deshya)。

の本生の法を説くが故に。此經の中に佛自ら本種子生を演説したまふが如し。十には毘佛略、此には方廣と云ふ。理正しく方と云ひ、包含を廣と名く。二種の相有り。一には菩薩の道を行ずと説く。二には法廣、多極高人の故に此經に回備せり。何となれば此經は一切如来内證の境、一切菩薩秘密の法なり。故に題目に一切如来眞實攝大乘現證大教王經といふ。又經文に云はく、『爾時に世尊久しからずして、等覺一切如来普賢心を現證し、一切如来虚空發生等と獲得すと。』又『無盡無餘をもつて有情界を救済すと云ふ。一切主宰安樂悅意なるが故に、乃至一切如来平等智神境通無上大乗を得、最勝悉地果を證するを見るが故に。』と。既に是れ内證、亦是れ大乘なるが故に方廣と爲す。十一には阿浮陀達摩、此には希法と云ひ。亦是れ未曾有と云ふ。謂く諸衆の共、不共の徳及び餘の最勝殊特の驚異を説く。此經に云ふが如く復正法に住する有情有り。一切衆生の爲に一切如来戒定慧最勝悉地の方便佛菩提を求むるが故に、久しく禪定解脱地等を修して勞倦して彼等を此金剛界大曼荼羅に入らしむ。纒に入り已らば一切如来の果といふも高難からず、何に況んや餘の悉地の類をや。是れ即ち不共行の徳なり。又云はく、『彼無量數の如来身、一の身より無量阿僧祇佛刹を現じ、彼佛刹に於て還つて此法の理趣を説く。又纒かに一切如来心を出して即ち彼婆伽梵普賢は衆多の月輪の爲に普く一切有情大菩提心を淨め、彼衆多の月輪より一切如来智の金剛を出して即ち如来の心に入ること。是れ即ち希有殊特の事なり。十二には優婆提舍、此には論義と云ふ。問答往復して眞理を顯す。故に此に二の別有り。謂く佛の所



説及び弟子の説なり。此經の中の如く、十方の諸佛一切義成就を驚覺す。即ち彼菩薩還つて諸佛に問ふ。諸佛還つて菩薩の所疑に答ふ。是の如く研覈して頓證秘密の眞理を顯現するなり。此れ即ち是なり。此十二分の應頌、諷頌は是れ單重との別、本生と本事とは即ち師資の異り、餘の分は知んぬべし。當に知るべし、此經には十二教を具することを問ふ、「諸の顯教等にも亦同じく之を説く、今と何の異り有りや。」答ふ、「顯教に立つる所は是れ隨他の説、密教の辨する所は是れ大日尊隨自意の説なり。問ふ、「顯密二教同じく十二を立つ。何を以てか隨他隨自を別と爲すや。」答ふ、「顯教の十二は同名なり」と雖も、修多羅等の爲に但隨機淺略の六度、四攝等の法を説く。未だ如來を結要の三密内證の五智を顯さず。故に隨他と云ふ。三密を知らざるが故に劫を歷て修行すと雖も而も佛果は得難し。内證の智に非ざるが故に法界の色心に於て周遍の身を見ず。今の經は然らず、纔かに一印を結んで法界の佛を供し暫く眞言を念すれば一切衆生を利す。況んや復法界は洞寂なり。忽爾に月輪の眞佛を見ることを得るをや。金剛三密力、如來加持力、及以法界力、是の如き等の力に由りて早く佛位に登ることを得。故に五秘密に云はく、須臾の頃に於て當に無量の三昧、無量の陀羅尼門を證すべし。不思議の法を以て能く弟子の俱生我執の種子を變易して、時に應じて身中の一大阿僧祇劫の所集の福德智慧を集得しつれば則ち佛家に生ずと爲すと云云。」一切の諸色、一切の諸心一一に皆是阿字本不生の法性法界なり。若し一色を見れば十方三世海會大曼荼羅を悟るを得ること具に此中に在り。一切の賢聖亦復同じく居して因を

【依正の二報】衣  
食住國土等は依報  
有情の身體は正報  
なり。

【瑜祇經】金剛峰  
樓閣一切瑜伽祇  
第一卷、唐の金剛  
智譯。金剛界の蘇  
悉地法は此經なり  
【四種法身】自性  
法身、受用法身、  
變化法身、等流法  
身。

修し果を證し、或は無量無數の大劫を經、佛國土を淨め衆生を成就して、一切の凡聖依正の二報一色を出でず、色法界の故なり。若し亦心に於ても亦復是の如し。何を以ての故に。心法界の故に。一の色心の如く一切の色心も亦復是の如く、曼荼羅海會は遍在せざること無し。是故に經に毘盧遮那遍一切處と云ふ。是の如きの甚深祕密無礙の大曼荼羅は、彼顯教の演說する所に非ず。故に今の十二は顯教に同じからず。

五に處會を明すとすは、今經は只是れ一處一會なり。謂ゆる本有金剛界阿迦尼吒天王宮の中の大摩尼殿處なれば既に動ぜられず、會も亦移らず故に一處會と爲すなり。阿迦尼吒天と言ふは是れ世間所說の三有の色界頂の天に不ず。是れ則ち大毘盧遮那の心中本有大菩提心の光明心殿なり。故に「瑜祇經」に云はく、「金剛界遍照如來は五智所成の四種法身を以て、本有金剛界自在大三昧耶自覺本初大菩提心普賢滿月不壞金剛光明心殿の中に於て、自性所成の眷屬金剛手等の十六大菩薩、及び四攝行天女使、金剛内外の供養金剛天女使と與なりき」と。已上經阿迦尼吒、此には色究竟と云ふ。心は是れ諸法究竟の歸する所故に色究竟と爲す故に「華嚴」に云はく、「三界唯心なり」と。實相功德妙住の境、金剛五智心王の所都、故に天王宮と爲す。問ふ、「今經文を案するに金剛界の如來諸佛の加持を受け已りて須彌盧頂金剛摩尼寶峯樓閣に往詣す。若し爾らば處會既に移る、何が故に但一處會と云ふや」答ふ、「須彌盧と云ふは是れ世間所知の須彌に非ず。即ち是れ毘盧遮那の所座の名を堅勝法界の座と爲すとすなり。是れ佛の座處は猶彼山の如し、故に須彌盧頂と云ふ。是故に諛に云

【最勝王經】金光  
明最勝王經十卷、  
唐の義淨譯。

はく、「今の人共に號して須彌座と爲すは此に從つて名を立つ。是れ須彌盧山四寶所成なる者に非ず。此妙の高顯なること彼山の如し、故に以て之に喩ふと云云。」如來の座に於て而も兩種有り、謂く世俗勝義なり。眞俗不二にして而も佛座を論ずるなり。往詣と言ふは本不生際より差別の境に赴くが故に往詣と云ふ。即ち是れ差、無差不二にして而も往詣を論ずるのみ。又或經に云はく、「即ち須彌山頂に下る」とは亦復准知すべし。

第二に法被根性を辨ずとは、此に就いて二と爲す。初には一切に約して泛く根性を明し、後には當經に就いて所被の機を明す。初に一切に約して泛く根性を明すとは毘盧遮那一切に遍するが故に、一切有情に皆佛性有り。是故に祕密根性に非ざること無し。若し毘盧遮那法身を具さば必ず三昧及び大智慧を具す。毘盧遮那萬徳の果を顯得せずといふこと無し。礦金を得れば必ず鑽劍を獲るが如し。故に「最勝王經」に云はく、「是の如きの法身の三昧智慧は、一切の相を過ぎて相に著せず。分別すべからず、常に非ず、斷に非ず、是を中道と名く。分別有りと雖も體分別無し。體に三數有りと雖も而も三體無し。不増不減なること猶夢幻の如し。亦所執無く、亦能執無し。法體如如にして是解脫の處、生死の境を過ぎ生死の闇を超ゆ。一切衆生修行すること能はず、能く一切諸佛菩薩の所仕の處に至ること能はざる所なり。善男子、譬へば人有りて金を得んことを願欲して處處に求覓むるに遂に金礦を得。既に礦を得已つて即便之を碎いて精きものを擇取して爐中に銷練して清淨の金を得。意に隨つて廻轉して諸の鑽劍種種の嚴具を作るに、諸用有りと雖も金の性は改まら

【勝天王經】勝天  
王般若波羅蜜多經  
七卷、陣の月婆首  
那譯。

ざるが如し。既に清淨の金を得、意に隨つて廻轉して諸の鑲釧を作ると云ふ。當に知るべし、法身を具する者は應に如來三昧の智慧を得べし。亦復是の如きの三法は既に中道と名く。中道は即ち是れ毘盧遮那一切處に遍する成佛の種子なるが故に、『涅槃經』に云はく『中道を名けて佛性の種子と爲す。若し中道法身の種子有りと雖も而も成佛せざる有情有りと云はば、豈鑲釧に鑲金を具せざること有らんや。又中道法性は必ず縁に隨つて諸法と作るの義有り。當に知るべし、毘盧遮那眞理の法性を具して、必ず秘密教成佛の機と爲ることを。故に『十地經第九』に云はく『法性は本寂なれども縁に隨つて轉ず。此妙智に由りて十地に向ふ』と。又『勝天王經 第四』に云はく『如來の法性は有情類蘊界處の中に在りて展轉相續す。諸佛如來無邊の功德不共の法は此性より生ず。此性に由つて一切聖者を出し、戒定慧品は此性より生ず』と。此義を解釋すること亦後の文の如し。

次に當縁に就て所被を辨すれば、今此秘密は三乘顯教の根性に對するに非ずして、但内證心地の眷屬の與に秘密の道を説くなり。故に此經に云はく、『爾時に世尊毘盧遮那如來、久しからずして等覺一切如來普賢の心を現證し、一切如來虛空發生大摩尼寶灌頂を獲得して、一切如來觀自在法智彼岸一切如來毘首羯磨不空を得たり』と。此に依りて知ることを得。四方四佛は是れ大日如來の内證の身なり。又云はく、『時に普賢大菩薩摩訶薩の身、世尊の身より一切如來の前に下り、月輪に依りて住す。乃至四攝是の如きの説を作す』と。此に依つて亦知る。諸尊も亦是れ大日世尊の内證の眷屬なりと。況んや復分別聖位に三十七尊を辨

説するに皆悉く稱して、毘盧遮那佛内心に於て證得したまへりと云ふをや。是尊等の爲に俱に此教を説く。是故に當に知るべし、此經は是れ即ち内證境界の所説なることを。問ふ、「如來の内證は寂靜無言にして心思廻かに絶せり。何が故にか今内證の境に於て此經を説くと云ふや。」答ふ、「汝が所説の如きは、内證の境は言亡慮絶せり、何を以ての故に諸の凡夫の境界に非ざるが故に。又如來の内證は但是れ寂靜無言等とは是れ即ち顯教の所説なり。彼教は未だ如來内證甚深の義を知らざるが故に。今此秘密教は其義然らず。寂照俱時に寂なるが故に、法界俱に寂照なるが故に法界同散す。散は寂を妨げず、寂も散を妨げず。如來の内證は其義是の如し。」問ふ、「諸佛の説法は必ず利他の爲にす。今は内證の眷屬の與に法を説くに何の利益有りや。」答ふ、「是れ即ち自受法樂なり、轉輪王の白らの眷屬の與に大快樂を受るは是れ國內萬民の所知に非ざるが如し。故に『金剛峯瓔珞經』に云はく、『金剛界の遍照如來、自性所成の眷屬金剛平等の十六大菩薩及び四攝行天女使金剛、内外の供養金剛、天女使と與に各各に本誓加持を以て、自ら金剛の月輪に住して本三摩地の標幟を持し、皆微細の法身秘密心地を以て十地身語心の金剛を超過し、各の五智光明峯杵より五億俱胝の微細金剛を出現し、虚空法界に遍滿したまへり。諸地の菩薩能く見ること有る無く。俱に覺知せず。故に知んぬ、此經は即ち是れ如來自境界の説にして餘の所知に非ず。一一の眷屬各五智を具し、五智を表さんが爲に各五億俱胝の金剛を現じ、展轉相生して邊際有ること無し。故に遍滿虚空法界と云ふ。』問ふ、「若し諸地の菩薩の俱に

覺知せずんば、此經は諸の有情に於て分無し。誰か此教を以て世に流轉せしや。答ふ、  
 「言ふ所の諸地の菩薩俱に覺知せずとは、是れ顯教の諸地の菩薩に約す。若し祕密の根に約  
 せば、凡夫具縛にして尙聞くを得、何に況んや祕教諸地の菩薩は何ぞ傳ふることを得ざら  
 ん。是故に彼經に亦云はく、一帯に三世に於て化身を壞せず、有情を利益して時として暫く  
 も息むこと無し。金剛自性の光明遍照、清淨不染の種種業用、方便加持を以て有情を救  
 度し金剛乘を演ぶ。唯一の金剛能く煩惱を斷す。此甚深祕密心地普賢自性常住法身を以て  
 諸の菩薩を攝す。」と。若し此文に依らば應に化身を壞せずして能く有情の爲に金剛乘を演  
 ぶと云ふべし。言ふ所の唯一金剛とは五種の大智互に攝して外無し、故に唯一と云ふ。能  
 く惑障を斷じ體性を顯現す、故に能斷と云ふ。此智は即ち是れ心地内證の普賢法身、菩薩  
 を教ふるを以ての故に諸の菩薩等を攝す等と云ふなり。

三には正しく教相を判ずとは、亦分ちて二と爲す。初には説教の時を明し、後には所説  
 の教を辨ず。初に説教の時を明さば亦復二と爲す、初には隨他意、後には隨自意なり。他  
 は謂く衆生の機に隨順して立つ。自は謂く佛の自意に隨ひて立つ。他に隨ひて立つと言ふ  
 は、衆生の宿殖種種不同なれば、佛の説教に遇ふこと前後各別なり。或は一時に如來の  
 慧に入ることを得、二三時と云はず。故に「法華」に云はく、始めて我身を見、我所説を聞き  
 て皆佛慧に入る。」と。或は一時に悟を得。故に「涅槃經」に云はく、「普波羅奈に於て初めて法  
 輪を轉じ八萬の天人須陀洹果を得。今此間の拘尸那城に於て法輪を轉する時、八十萬億の人

【須陀洹果】三界  
 の見惑を斷じ盡し  
 たる果位、聲聞四  
 果の第一なり。  
 【拘尸那城】佛入  
 滅の地。

【不退轉】功德善根増進し退失轉變せざるを言ふ。五卷唐の玄非譯。法相宗所依の本經なり。【四諦の相】苦諦集諦、滅諦、道諦の四理。

不退轉を得。』と。又『法華』に云はく、『昔波羅奈に於て四諦の法輪を轉じ、今は復更に最上の法輪を轉ず。』と。或は三時に悟を得。『解深密經』の第一に云ふが如し。『爾時に、勝義生菩薩、復仰に白して言さく、世尊初一時に波羅尼斯仙人の墮處施鹿林の中に在して、唯聲聞乘の者を發起せんが爲に四諦の相を以て正法輪を轉ず。是れ深機にして甚だ希有と爲すと雖も、一切世間の諸天人等先づ能く法の如く轉ずる者有ること無し。而も彼時に於て轉ずる處の法輪に上有り容有り。是れ未了義なり。是れ諸の詮論安足處の所、世尊昔第二時の中に在して唯大乘を修する者を發起せんが爲に、一切の法は皆自性無く、無生無滅本來寂靜にして自性涅槃に依り、隱密の相を以て正法輪を轉ず。更に甚奇にして甚だ希有と爲すと雖も而も彼時に於て轉ずる所の法輪は亦是れ上有り、容受する所有り、猶未了義は是れ諸の詮論安足處の所、世尊、今の第三時の中に於て普く一切乘を發起する者の爲に、一切法は皆無自性、無生無滅、本來寂靜にして自性涅槃無自性なるに依る。亦顯了の相を以て正法輪を轉じ、第一甚奇にして最も希有と爲す。今世尊轉じたまふ所の法輪は無上無容にして是れ眞了の義なり。諸の詮論安足處の所に非ず。是の如き等の例、種種不同なり、具に説くべからず。是等は皆悉く隨機の所説にして、未だ是れ如來常恆不變普説の時にはあらざるなり。

次に隨自立とは『大毘盧遮那經』の第一に云ふが如し。『而も毘盧遮那一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切處、一切時、有情界に於て眞言道句の法を宣説したまふ。』と。若し

【出生義】金剛頂  
瑜伽三十七尊出生  
義一卷、唐の不生  
譯。

【三有六趣の惑】  
三界六道生死流轉  
の惑。  
【蘊界入】五蘊、  
十八界、十二入。

【義釋】大日經義  
釋。慈覺大師將來  
十四卷。

此文に准ずれば、應に一切時處に說法し普く有情を利すと云ふべし。何ぞ但二三時等に局  
ることを得ん。故に大興善寺の傳法阿闍梨の云はく、「諸家に立つる所は皆是れ隨機なり、  
若し實義に准じて毘盧遮那如來說法の時を辨說せば應に一切時と云ふべし。問ふ、「出生義」  
に云はく、「我能仁如來、三有六趣の惑、常に蘊界入等に由りて生死を受け、妄に空華無な  
ることを執りて而も虚しく計し、衣珠有れども而も知らざるを憫れみたまふ。是に於てか  
跡を觀史天宮に收め、中印度に下生し、化城を超えて以て之を接し、糞除に由りて以て之  
を誘ふ。大種性の人、法緣已に熟し、三祕密の教、說時方に至れるに及んで遂に却つて自  
受用身に住し、色究竟天宮に於て不空王三昧に入り、普く諸の聖賢を集めて地位の漸階  
を削り、等妙の頓智を開く。」と。若し此文に依らば應に大日如來の說法は時有りと云ふべ  
し。何が故にか今一切時と云ふや」答ふ、「此亦且く一分の機熟せるに就き而も時至ると爲  
す。是れ普說の時と爲すと謂ふには非ず。」

次に所說の教を辨ずとは亦分ちて三門と爲す。初には正しく教を明し、次に經文及以義  
釋に依りて教相を辨じ、三には問答分別するなり。正しく教を明すと云ふは、亦分ちて二  
と爲す。初に他に隨つて立つるを明し、後には自らに隨つて立つるを辨ず。他に隨つて立  
つと言ふは眞言教に於て總じて五種の三摩耶教有り。謂く佛三摩耶教、菩薩三摩耶教、緣覺  
三摩耶教、聲聞三摩耶教、世間三摩耶教なり。故に「毘盧遮那經」の第二に「諸眞言道を説き竟  
つて攝偈を説いて云はく、「祕密主當に知るべし、此處の三昧道は若し佛世尊、菩薩救世者、



緣覺、聲聞の說に任して諸過を推背す。若し諸天世間の眞言法教の道、是の如く勤勇なるは衆生を利せんが爲の故にして、此等の偈文次の如し。即ち是れ五種三摩耶の教なり。中に佛三摩耶教有りと雖も、且く機に隨ひて別して以て隨他と爲す。故に毘盧遮那經の義釋に此偈を判じて云はく、『五位の三昧、皆是れ毘盧遮那の祕密加持にして其と相應する者は皆一生に成佛すべし。何ぞ淺深の殊り有らんや。今の偈の中の所説と、彼等の自所流轉の法教に就いて言ふのみ。後に自らに隨ひて立つるを辨せば唯如來の自意に隨ひて之を説く、故に隨自と云ふ。故に彼經に云はく、『毘盧遮那一切の身業、一切の語業、一切の意業、一切の處、一切の時に有情界に於て眞言道句の法を宣説したまふ。謂ゆる初發心より乃至十地までに次第に此生に満足す。』と。今此文に准すれば、如來但眞言頓證無上の法門を説いて曾て他事無し。是を即ち名けて隨自立と爲すなり。是故に大興善寺の阿闍梨の云はく、『若し眞言に就いて教を立つれば、應に一大圓教と云ふべし。如來の演べたまふ所眞言祕密の道に非ざること無きが故なり。』

次に經文及び義釋に依りて教相を辨せば亦分ちて四と爲す。初には教の本源を明し、二には教起の由を辨じ、三には教の淺深を釋し、四には教義の別を明す。初に教の本源を明すとは、彼經の第二に云はく、『祕密主、此眞言の相は一切諸佛の所作に非ず、他をして作らしめず、亦隨喜せず。何を以ての故に。是諸法は法として是の如くなるを以ての故なり。若し諸の如來出現し、若は諸の如來出でたまはずとも諸法は法爾として是の如く住す。』

謂く、諸の眞言法爾なるが故に「義釋」に云はく、「次の眞言の如實の相を説く、如來の身語意畢竟等しきを以ての故に此眞言の相、聲字は皆常なり。常の故に流れず、變易有ること無く法爾にして是の如し。造作して成る所に非ず、若し造成さる可くんば即ち是れ生法なり。法若し生有らば則ち破壊すべく、四相遷流して無常無我なり。何ぞ名けて眞實語と爲すことを得んや。是故に佛自ら作らず、他をして作らしめず、假令能作の主有りとも亦隨喜せず。是故に此眞言の相は若し佛世に出興し、若し世に出でたまはず、若し已に説き、若し未だ説かず、若し現に説法すとも法位に住し性相常住なり。是故に必定印と名く、衆聖道同なり。即ち此大悲曼荼羅一切の眞言、一一の眞言の相皆法爾として是の如し。故に重ねて之を言ふなり。一に教起の由を辨ぜば、謂く眞言諸の教起の元由を明す。彼經に亦云はく、「祕密主或は等正覺、一切知者、一切見者世に出興して而も自ら此法もて種種の道を説き、種種の樂欲、種種の諸の衆生の心に隨ひて種種の句、種種の文、種種の隨方の語言、種種の諸趣の音聲を以て、而して加持を以て眞言道を説きたまふ。」「義釋」に云はく、「若し是の如きは即ち是れ諸の眞言の相、畢竟寂滅にして人に授與せず。何が故にか有時は出興し、有時は隱没す。故に經の後に所由を釋して云はく、祕密主、或は等正覺、一切知者、一切見者世に出興して、而も自ら此法をもて種種の道を説き、種種の樂欲乃至種種の諸趣の音聲に隨つて、而も加持を以て眞言道を説く。此意の言はく如來自證の法體は佛の自作に非ず。餘の天人の所作にも非ず。法爾常住にして而も加持神力を以て世に出興し

衆生を利益したまふ。今此眞言門の祕密身口意は即ち是れ法佛平等の身口意なり。然も亦加持力を以ての故に世に出現して衆生を利益するなり。如來の無礙知見は一切衆生の相續の中に在りて、法爾に成就して缺減有ること無し。此眞言の體相を以て實の如く覺せざるが故に名けて生死の中の人と爲す。若し能く自ら自らを知り時を見れば、即ち一切知者、一切見者と名く。是故に是の如く、是れ佛自ら造作する所に非すと知り、亦他の傳受する所にも非ざるなり。佛道場に坐して是法を證知し已つて一切世界は本より以來常に是れ法界なることを了知し、即時に大悲心を生ず、云何が衆生佛道を去ること甚だ近くして、能く自覺せざる。故に此因縁を以て如來世に興して、還つて是の如きの不思議法界分を用ひ、種種の道を作し、種種の乘を開示して、種種の樂欲の心機に隨ひ、種種の文句方言を以て自在に加持して眞言道を説く。機感の因縁より生ずと雖も而も實際を動ぜず。善巧方便を爲さざる所無しと雖も、然も佛の所作に非ず。普門異説なりと雖も而も但佛の知見を以て衆生を示悟せしむ。若し行者、此眞言の十喻の中に於て妄りに有爲の生滅を見、更に心垢を増すときは則ち如來の本意に非ざるなり。三に教の淺深を釋すとは若し經文を引くこと前の攝偈を引くが如き是なり。『義釋』に云はく、『經の中に佛、攝偈を説く。五種の三昧道の中に就いて大に分ちて二と爲す。謂く、佛、菩薩、緣覺、聲聞の四種皆出世間の三昧と名く。若し諸天等所説の眞言法教の道は皆世間の三昧に屬す。出世間の三昧は皆實益有り。故に諸過を摧害すと云ふ。世間の三昧は但摧益のみ有り。故に衆生を利せんが爲の故

【十緣生句】 幻、乾陽炎、夢、影、水月、閻婆城、響、浮浪、虛空花、旋火輪の十種を指す之れ皆從緣生無自性の義なり。

【因陀羅宗】 帝釋天聲明論を造つて能く一言の中に衆義を含む。之を因陀羅と言ふ。【辟支佛】 緣覺と譯す。

にと云ふなり。餘經の所説の如く、小乗を求むる人は當に修行作觀するに即便ち世間の法教に於て深く厭離を生ずべし。大乘を求むるの人は又聲聞の法教に於ては深く怖畏を生ず。此れ皆未だ祕密藏を知らざる者の爲に此方便の説を作すのみ。此經宗に就かば則ち五種の三昧皆是れ心の實相門を聞く。如し行者初に有相瑜伽に住するときは即ち是れ世間の三昧なり。但し中に於て唯蘊無我を了知すれば即ち是れ聲聞三昧なり。若し十緣生句を以て諸蘊の無性無生を觀すれば即ち是れ菩薩三昧なり。餘は「作心觀」の中に廣く明すが如し。餘教の心性の旨未だ明かならざるを以ての故に、五乗の轡を殊にして相融會せざること同じからざるなり。若し更に深密釋を作さば、三重曼荼羅の中の五位の三昧の如し。皆是れ毘盧遮那祕密加持なり。其と相應せば、皆一生に成佛すべし。何ぞ淺深の殊り有らんといふは、今の偈の中の所説を彼自ら所流傳法の教に等しからしむるに就いて言ふのみ。四に教義の別を明すとは、經に亦云はく、「祕密主、汝當に諦聽すべし。諸の眞言の相、等正覺の眞言、言名成立する相、因陀羅宗の如く、諸の義利成就す。増加の法句有りて本行相應と名く」と。乃至云はく、此正覺佛子救世者の眞言、若し聲聞所説の一一の句、是中に安布せり。辟支佛復少の差別有り。謂く三昧分異して業生を淨除す。義釋に云はく、「大に眞言を判するに略して五種有り。謂く、如來の説、或は菩薩金剛の説、或は二乘の説、或は諸天の説、或は地居天の説、謂く龍、鳥、修羅の類なり。又前の三種は通じて聖者の眞言と名け、第四は諸天衆の眞言と名け。第五は地居者の眞言と名け、又通じて諸神の眞言

【龍樹】佛滅後七百年南天竺に出世せし大論師、古來顯密八宗の祖と稱せらる。

【三點】法身、般若、解脱の三徳不縱不横なるを梵語の伊字に喩へて伊の三點の如しと言ふ。

と名くべきなり。聖者の眞言の如きは亦阿字、或は羅字等を説く。彼諸の世天乃至地居鬼神等も亦復之を説く。彼れに何の殊異有りと言はば、阿闍梨の言はく、「若し佛菩薩の説は則ち一字の中に於て具に無量の義を具す。日略して之を言はば阿字に自ら三義有りの謂く不生の義、有の義なり。梵本の阿字の如きは本初の聲有り、若し本初に有らば則ち是れ因縁の法なり。故に名けて有と爲す。又阿は是れ無生の義、若し法因縁を攪つて成ずれば則ち自ら性有ること無し。是故に空と名く。又不生とは即ち是れ一實の境界、即ち是れ中道なるが故に、龍樹の云はく、「因縁生の法は亦空、亦假、亦中なり」と。又「大論」に薩婆若を明すに三種の名有り。一切智と二乗共の道種智と、菩薩と與に一切種智を共する是佛の不共法と、此三智其實に一心の中に得、分別して人をして解し易からしめんが爲の故に三種の名を作す、即ち此れ阿字の義なり。又囉字の如きは亦三義有り。一には摩の義、二には阿字門に入るを以ての故に即ち是れ無摩の義なり、又波羅蜜の義有り。究竟到彼岸を以ての故なり。即ち是れ本初不生なり。當に知るべし、亦三點を具す。三點に即ち一切の法を攝す。阿字、囉字の如く餘の諸の字義皆然なり。又一切の語言の中に阿の聲を帶ぶは皆阿字門の所攝なり。若し囉字を帶はば皆囉字門の所攝なり、餘の字も亦爾なり。大論の語等、字等の中に釋する義と亦同じ。下文に復廣く釋せざるなり。若し諸の菩薩の眞言に阿字有りとは、當に知るべし、各自ら通達する法門の中に於て一切の義を具す。普門法界の中に於て一切の義を具すには非ず。若し二乗の眞言に阿字有らば當に知るべし、只盡無生智の

【五欲】色聲香味觸の五境は人の欲心を起すものなるが故に五欲と言ふ【十不善道】十惡道。

【二諦】眞諦、俗諦の二理。

【四大弟子】佛弟子中の舍利弗、目連、須菩提、摩訶迦葉の四人を言ふ【十二因縁】無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老死の十二種の因縁の理。

寂滅涅槃に約して不生の義を明す。若し梵天所説の眞言に阿字有らば、是は五欲を出離して不生を覺觀するに約する義を明す。若し帝釋護世の眞言に阿字有らば、是は十不善道及び災横不生に約して義を明す。餘は皆類を以て知るべきなり。上の所説の如きは皆是れ隨他意語、淺略の義を明すのみ。若し隨自意語に就いて深密の義を明さば、一門に入るに隨ひて皆一切法界門を具す、乃至諸の世天等、悉く是毘盧遮那なり。何ぞ淺深の別有らんや。若し行者能く無差別の中に於て差別の義を解し、差別中に無差別の義を解せば、當に知るべし、是人は二諦の義に通達して亦眞言の相を識るなり。偈に云はく、「正等覺眞言乃至諸義利成就等とは、此は如來眞言の通相及以別相を明す。」と。具に彼釋の如し。皆是れ諸佛菩薩の眞言の相なり。次に若し聲聞所説の一一の句安布せりと云ふは、聲聞他に因りて解を得るを以て、法性に入りて未だ深からず、一言の中に於て具に衆徳を含むこと能はず。諸行無常の一四句の偈を説くが如く、要す次第に安布せしめ、文義缺くることなければ乃ち眞言を成す。字門を以て義を明し及び名句を増加することを得ず。辟支佛は言説無しと雖も亦能く神通力を以て眞言を現出す、諸を受持する者有れば皆義利を獲。是中に少き差別有りとは、謂く辟支佛は聲聞と與に漏盡則ち同じくして、三昧に淺深の異有り。能く神通を以ての故に物を利し、其所願をして皆成就することを得しむ。四大弟子を除くの外餘の聲聞の力の能はざる所なり。又其眞言は唯十二因縁寂滅の理を説く。故に謂く三昧の分異、業生を淨除すと云ふなり。

三に問答分別すとは義門一に非ず。謂く、顯教密教の別、即身成佛の義、四智五智の別、法身の説不説等は共に別章の如し。

金剛頂大教王經疏玄談 畢





【日本佛教全書】證大師全集二。六五六頁以下。唐の廣修維錫等の本經を法華前に置き又は方等第三時に攝屬せしめしを破して、本經の地位を判じて法華尙及ばずと迄極論し本經に對する態度を示されし書。

【五輪】地水火風空の五大のこと。

【十智】無量無邊法界智、能詣三世諸佛所智、一切世界海成壞智、入無量衆生界智、佛甚深法門智、一切三昧不壞三昧住智、入一切菩薩諸根界智、一切衆生語言轉法輪辯辯海智、一身偏滿一切世智、一身偏滿一切世智、一切諸佛音聲智。

【大日經王】大日經の教主は即ち大日覺王なり。

【醍醐を生蘇に貶し】醍醐は圓教、生蘇は通教。

# 大毘盧遮那經指歸 并序

## 序

竊に以れば眞心凝寂にして染淨を混へ而も同味なり焉。實性、恬然として表裏を籠め而も一體なり矣。大坎湛湛として已に清濁の波瀾無く、滿月團團として何ぞ増減の景象有らんや。然り而うして池深ければ連天にして感應交疎り、水靜かなれば月盈ちて影響彌密なり。是故に五輪重疊として三密の臺を架け、十智牢籠として九天の境を照す。無相の相鏡は性空に懸り、無形の形星は心地に羅る。八萬の三昧は二空の塵荒を蕩かし、五百の總持は一眞の妙理を顯す。法界に遍じて而も遼漚を盡し、塵區に互りて以て終始無し。廻ち是れ妙法の家の最深祕處、蓮華の海の自然の智龍なり。普門の應用彼時に歸し、本地の眞容此日眼に懸る。萬教の樞機、八藏の關鑰なるは謂つ可し、斯れ大日經王なり焉。是に於て唐朝の老宿、醍醐を生蘇に貶し、本國の幼童、甘露を毒乳に瀦る。遂に平等の淳味に差別の雜血を混へ、久城の師子を未化の羗羊に同ぜしむ。私に此此の如きを悲しみ心を刺して息まず。言は而も觸成し罷めんと欲すれども能はず。故に絀扇を擧げて山に隠るるの輪を思ひ、碧條を動かして虚に息むの風を訓ふ。冀くは兩方の學翬をして一道の指歸を知ら俾むと爾ふ。

入唐求法沙門圓珍述

【一】判教三門の名目を擧ぐ。  
【二】三門の第一他の問答を出す。  
【大毘盧遮那經】

【大日經】 薄伽梵 (Vajrapāṇi) (Mahāvairocana) 世尊と譯す、佛十號の一。

【加持】 アナスナ (Aśhīṣṭhān) じ、佛力を衆生に加持して其衆生を任持するを言ふ。

【金剛法界宮】 胎藏界大日如來の所住の宮殿を言ふ。

【持金剛者】 金剛部の菩薩。

【五時】 華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時。之れ釋尊涅槃の教説を時間的に分類せしものなり。

【四教】 頓、漸、秘密、不定を化儀の四教と云ひ、談通、別、圓を化法の四教と稱す。

【三身】 中道の理體を法身と云ひ、

# 大毘盧遮那經指歸

今、教相を判するに略して三門を用ふ。先に他の問答を出し、次に次義を建立し、後に總じて判釋す。

第一に、他の問答を出すとは、本朝叡山の學徒、難疑を作して曰はく、「大毘盧遮那經」一部七卷は薄伽梵、如來加持廣大金剛法界宮に住し、一切の持金剛者の爲に之を演説したまひしなり。大唐中、天竺國三藏輸波迦羅と言ふ。唐に善無畏譯す。今疑ふに、如來の所説は、始華嚴より終涅槃に至る五時四教と爲して該攝せざる所無し。今、此「毘盧遮那經」を以て、何の部、何の時、何の教にか之を攝するや。又、法華の前説と爲んや。當に法華の後説に當ると爲んや。此義如何ん。」

大唐國台州天台山佛隴禪林寺傳教和上廣修、同山國清寺傳法座主維錫答へて云はく、「毘盧遮那」は西天の本號なり。唐に翻じて遍一切處と爲す。此は是れ三身の一號にして即ち法身如來なり。既に是れ法身如來所説の經なれば、義理亦一切處に遍す。既に一切處は總じて此經の所攝を被むる。教必ず機に返するに必ず四種の根性有り。此に於て悟を得れば既に四教の根機有り。豈第三時の攝、方等教の收と爲さざらん。理を以て之を驗するに、即ち知る、是れ法華の前説の八教の中並べ攝することを。」上答ふ。

四行の功德報の實智を報身と云ひ、理智不二の妙用を起して衆生を度するを應身と稱す。  
 【八教】化儀、化法の兩四教を合して八教と云ふ。  
 【不空羅索】不空羅索神變眞言經三十卷、唐の菩提流支譯。  
 【大寶積】大寶積經百二十卷、前後の諸師の別行をも合して唐の菩提流支之を全本とす。  
 【大方等】大方等大乘經六十卷、前後の諸師各一部を譯して宋だ全本なし。  
 【金光明】四卷、八卷、十卷の三譯本あり。  
 【維摩】維摩詰所說經三卷、秦の羅什譯。  
 【四土】凡聖同居土、方便有餘土、實報無障礙土、常寂光土。  
 【法身寂光土】三

「講んで經文を案するに方等部に屬す。聲聞、緣覺に被むらしむるが故に、「不空羅索」大寶積、大方等、金光明、維摩等の經と同味にして、四教四土に具す。今毘盧遮那と題するは、法界宮に於て説く、是れ法身寂光土なるが爲に、勝るに従つて名を受くるなり。」  
 已上編座  
 主答ふ。

第二に自義を建立すとは、名匠の決判は應に間然すべきこと難し、海外の末學、須く仰いで之を信すべし、然るに如來は機に返じて三種の説を説く、謂く隨他意説、隨自他意説、及び隨自意説なり、一法に通じて三説を具す、彼台州判は則ち隨他に當る、猶珍服を損てて以て垢衣と爲すがごとし。而るに隨自を離れて別に隨他無く、一物の異説にして義に二途無し、譬へば陰來つて水を結して氷と爲すも、陽來れば氷を銷して水と作すが如し。佛經も亦如なり。緣に隨ひて變改すれども理を會すれば唯一なり、但し法身の説法は、理一切に遍じて必ず四機有るに至る、此得悟に於て事意未だ會せず、若し法身の理、法界に遍じて機に四種有り、教に四種を具ふと言はば、釋迦如來は是れ毘盧遮那の應身にして復一切處に遍するが故に、既に法華を説くの日も應に四教を用ふべし、縱ひ三乘を執つて一切處に遍するとも、普門の妙用、已に九乘を具す、豈阿含方等に攝屬すべけんや。若し勝佛乘を抑ふるとも、普門の妙用、已に九乘を具す、豈阿含方等に攝屬すべけんや。若し勝佛の説を挫きて生蘇味に屬せば、劣佛の説を判じて酪味に收むべきのみ、今隨他權判を却け換ふるに隨智の實説を以てせば、彼此違はず、並に聖教に充る。然り而して華嚴の縮徒は偏に餘經を貶し、小乘を習ふの輩は専ら己典を讚め、唯識の家は只ら深密を貴び、空論の

德祕密藏は如來の所住地なれば之を指して常寂光土と云ふ法身は如來の眞身に名く。

【三】三門の第二

自義建立の一段を詮す申通じて叙す

【二乘】聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘。

【一乘】法華經所說の一佛乘。

【華嚴の佛徒】華嚴宗の僧。

【唯識の家】萬法之れ唯識と説く。唯識宗の徒。

【深密】解深密經の略。

【空論の宗】三論宗。

【四】自義建立二十七條の中第一條を詮す。

【無明煩惱】佛道行者の障礙となるべき惑。

【諸法實相三昧】三千の諸法相相皆眞實中道なるを諸眞實相と言ふ。

【摩訶毘盧遮那】マハーバイローチ

宗は好んで般若を褒め、眞言を讀むる者は直に顯教をば譏り、法華を講ずるの徒は徒らに獨り一經を是とす。皆本師に乖き頗て一隅を得たり。兼て彼等の爲に以て九方を呈さんとし、專ら經文を引き傍ら疏意を案じ、略して二十七條を連れ巨昏の玉燭と作す。

題して云はく、『大毘盧遮那成佛神變加持經』釋して云はく、梵音に毘盧遮那とは是れ日の別名にして、即ち除暗遍明の義なり。然るに世間の日は則ち方分有りて、若し其外を照さば内に及ぶこと能はず、明は一邊に在らば一邊に至らず、又唯晝に存する光は夜を燭さず。如來の智慧の口光は則ち是の如くならず、一切處に遍じて大照明と作る。内外、方所、晝夜の別有ること無く、又重陰昏蔽して日輪隱沒すれども亦壞滅するには非ず、猛風雲を吹いて日光顯照するとも亦始生せしに非ざるが如し。佛心の日も亦復是の如し、無明煩惱戲論の重雲の爲に之覆障せらるると雖も、而も滅する所無く、諸法實相三昧を究竟して圓明際り無けれども而も増す所無し、是の如き等の種種の因縁を以て、世間の日は喩と爲すべからざれども、但其少分の相似を取る、故に加ふるに大を以て名けて摩訶毘盧遮那と曰ふなり、成佛とは具足の梵音にて、應に成三菩提と云ふべし、是れ正覺、正知の義なり。謂く如實智を以て、三世の數非數、常無常等の一切の諸法を知るに皆了了として覺知す、故に名けて覺者と爲す。而るに佛は即ち是れ覺者なるが故に、省文に就いて但成佛と云ふなり。神變加持とは舊譯に或は神力所持と云ひ、或は佛所護念と云ふ、然るに此自證の三菩提は一切の心地に出過し、現に諸法の本初不生を覺す、是處は言語究竟して心行亦寂

ヤナ(Mahāvairocana) 大日如來と譯す。之れ眞言教の教主なり。

【成三菩提】 正等覺を成ずるを言ふ。

【十地の菩薩】 十地は六即中には分證即五位の中の一

位にして、界外の無明を斷じ妙覺に

進む位なり。菩薩とは六度行によつて

自他兼濟する大士。

【帝釋】 忉利天の主なり。

【四乘俱轉】 第三時方等の時には四教を並べ説く。

【二十七條の中第二條を明す】

【佛受用身】 之に二種あり、理智相應して自受法樂に

住するを自受用身と言ひ、十地の菩薩の爲に現する法

身を他受用身と言ふ。

す。若し佛の威神を離るれば、則ち十地の菩薩も尙其境界に非ず。況んや餘の生死の人をや。爾時世尊往景に大悲願を發したまひ、自在神力加持三昧に住し、普門身を示して所宣の法を説き、彼心行に隨つて觀照門を開く、然るに此應化は如來の身語意より生ずるには非ず、一切の時處に於て起滅邊際但不可得なり。緣謝すれば則ち滅し、機興れば則ち生ず事に即して而も眞なれば終盡有ること無し、故に神力加持經と曰ふ。若し梵本に據らば、應に具に大廣博經、因陀羅王と題すべし、因陀羅王とは帝釋なり、言はば此經は是れ一切如來祕要之藏にして、大乘の衆教に於て威德特尊なること、猶千日の釋天の主たるが如し。今案するに此自證の三菩提は諸法の實相を究竟じ、普門の應化は事に即して而も眞なり。豈諸法を隨つて通合せざらんや。既に是れ諸佛祕密之藏にして、衆の大乗に於て威德特尊なり、豈第三時の四乘俱轉に同ぜんや。此題目に據りて應に知るべし、一大圓滿の教なることを。末流を執りて本源を蔽ふこと莫れ。

(五) 『住心品』に云はく、『薄伽梵、如來加持廣大金剛法界宮に住したまふ』と。釋して云はく、薄伽梵とは即ち毘盧遮那本地法身なり、次に如來加持と云ふは是れ佛の加持身にして、其所住の處を佛受用身と名く、即ち此身を以て佛の加持住處と爲す。如來は心王にして諸佛の住する如くにして其中に住したまふ。既に遍一切處の加持力より生ず、即ち無相法身と無二無別なり。次に又加持住處を釋歎す、故に廣大金剛法界宮と云ふ。大は謂く無邊際なるが故に。廣は謂く不可數量なるが故に。金剛は實相智に喩ふ、一切の語言心行の道を過

【無相法身】如來の眞法身には色聲香等味の相なきが故に無相法身と言ふ。

【六】二十七條の中第三條を明す。

【有爲無爲】因緣所生法を有爲と言ひ、然らざるものを無爲と言ふ。  
【一闍提】イクチヤーンチカ (Indra 帝) 成佛の種子を失ひし人。

ぎ適に所依無く、諸法を示さざれば初、中、後無し、變易すべからず、破毀すべからず、故に金剛と名く。法界とは廣大金剛の智體なり、此智體は謂ゆる如來の實相智身なり、加持を以ての故に即ち是眞實の功德に莊嚴せらるる所の妙住の境、心王の都する所、故に宮と曰ふなり。今案するに、能住所住、法界を該通し、能説の法身は無二無別、所説の法も亦初、中、後無し。詎三五七九乘等を存せんや。水鏡此に在り、更に惑ふべからず。

【六】二十七條の中第三條を明す。【有爲無爲】因緣所生法を有爲と言ひ、然らざるものを無爲と言ふ。【一闍提】イクチヤーンチカ (Indra 帝) 成佛の種子を失ひし人。本品に云はく、「住一切法平等執金剛、大那羅延力執金剛、妙執金剛」と。釋して云はく、住一切法平等執金剛とは、一切の佛の平等性を謂ふ。謂く因果、自他、有爲無爲等の一切の諸法は此如實智の中に入れば究竟平等同一實際にして、能く此智印を持するが故に以て名と爲すなり。大那羅延力とは、謂く秘密神通力を持するなり。一闍提必死の疾、二乘實際の作證已死の人の如し、諸佛の醫王明かに如來の性を見る、故に即ち能く必定師子吼して救療の因縁に於て心怯弱ならず。諸佛菩薩も尙爾る能はず、故に復不共一切摩訶那羅延力を明す。妙執金剛とは、妙は無等無比、更無過上の義に名く、猶醍醐の融妙にして已に極り復増すべからず、常に變易せず、無間無雜なるが如し。如來も亦爾なり、一切の功德悉く皆無比無上にして、諸有の所作は亦唯此一事の因縁の爲なり。故に妙執金剛と名く。今案するに、一切諸法は平等一味なるが故に、定性の二乘、畢死の闍提、皆疾を救ひ同一佛子なることを得、無間、無雜、無比、無上にして實に是れ眞實究竟圓融の教なり、豈第三時に同せんや。

【七】二十七條の中第四條を明す。  
 【善賢】普賢菩薩一切諸佛の理徳、行徳、定徳を司る。  
 【三時】過去、現在、未來。  
 【群機嘉會】諸の機類の嘉吉の法會。  
 【三業】身業、口業、意業。

【四生】胎生、卵生、濕生、化生。

【八】二十七條の中第五條を明す。  
 【一切智智】佛智を云ふ。

同品に云はく、「及び普賢等の諸大菩薩に前後を圍繞せられて而も法を演説したまふ。謂ゆる三時を越えたる如來の口、加持の故に、身語意平等句の法門なり。」釋して云はく、次に群機嘉會の時、同聞する所の法を明す、即ち是れ身語意三平等句の法門なり。言はく、如來種種の三業皆、第一實際妙極の境に至らば、身は語に等しく語は心に等し、猶大海の一切處に遍じて同一鹹味なるが如し、故に平等と云ふなり。句とは、是の如きの道を修して三平等處に住すことを得、故に句と爲す。即ち身口意秘密加持を以て所入の門と爲す、謂く平等の密印語、平等の眞言心、平等の妙觀を以て方便と爲すが故に、加持受用身を速見す。是の如き加持受用身は即ち是れ毘盧遮那遍一切處の身なり、遍一切處の身とは即ち是れ行者の平等智身なり、是故に此乘に住するものは、不行を以て而も行じ、不倒を以て而も到る、名けて平等句と爲す。一切衆生皆其中に入るに而も能入の者無く、亦所入の處無し、故に平等と名く。平等の法門とは則ち此經の大意なり。今案するに、此句の峻たること白口の如く、只眼前に在り。因果の兩人一平等身なれば、豈九乘差別して四生迂廻せしむる有らんや。直路を見ずして險徑に入るは瞽盲の所爲なり、一大圓教彌彌應に仰信すべし。

同品に云はく、「爾時に執金剛秘密主、彼衆會の中に於て坐し、佛に白して言さく、世尊、云何が如來一切智智を得たまふ、彼一切智智を得て、無量の衆生の爲に廣演分布して、種種の趣と、種種の性欲とに隨つて、種種の方便道をもつて一切智智を宣説したまふ。或は

【摩耆羅伽】 八部衆の一。

【八部身】 天、龍、夜叉、乾闥婆、阿修羅、乾闥婆、緊那羅、摩睺羅迦の八部衆の身。

【大悲胎藏】 衆生の肉團心所具の菩提の理性が大悲の萬行に依つて次第に開發せらるるを言ふ。胎藏とは衆生本具の菩提心なり。

【曼荼羅】 マンダラ (Mandala) 方圓の上境を築きて諸尊を安置し以て祭壇をなすを言ふ。此境中には諸尊諸徳を聚集して一大法門を成ずとなす。

【薩婆若】 サルバ智ユナー (Sarvajñā) 一切智と譯す。

【四重法界の圓境】 四重圓境のこと。

中胎八葉九尊、第三遍智院、第二遍智院、第四遍智院を以て、四重圓境を成ず。

聲聞、乘道、或は緣覺乘道、或は大乗道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中、及び龍、夜叉、乾闥婆に生じ、乃至摩耆羅伽に生ずる法を説く。若し衆生有りて佛をもつて度すべき者には即ち佛身を現じ、或は三乘及び八部身を現じ、各各彼言音に同じて種種の威儀に住したまふ。而も此一切智の道は一味なり、謂ゆる如來の解脫味なり。釋して云はく、此中の問意は即ち是れ大悲胎藏曼荼羅を發起するなり。薩婆若の平等心地は諸佛菩薩、二乘、八部等の四重法界の圓境を畫作す。此一の本尊の身語心印は皆是れ差別乘なり、是の如きの形聲悉く是れ眞言密印にして、或は久しき、或は近き、毒鼓の因縁に非ざること無し。故に經に皆同じく「一味にして謂ゆる如來の解脫味と云ふ」なり。爾る所以は、一切衆生の色心の實相は本際より已來常に是れ毘盧遮那の平等智身なり、是れ菩提を得し時強ひて諸法を空じ、法界を成ぜしむるに非ず、佛は平等心地より無盡莊嚴藏の大曼荼羅を開發し已つて、還つて用ひて衆生の平等心地の無盡莊嚴藏の大曼荼羅を開發す。妙感妙應皆阿字門を出でず。當に知るべし、感應の因縁、所生の方便、亦復阿字門を出でざること無し。譬へば大海の中の波濤相激して迭ひに能所と爲り、然も亦皆同じく一味にして謂ゆる鹹味なるが如し。今案するに、阿字は大海の水の如く、感と應とは波濤の如し、水波相異なれども鹹味が同じ、今同味を以て一切法を總べ一體と爲すなり。此意に熟せずして波を執りて水を疑ふ、偽謬何ん。

同品の偈に云はく、善哉佛眞子、廣大の心をもつて利益す、勝上大乗の句、心續



【阿字門】一切諸法の根本にして本來不生本有なる阿字を觀ずる眞言門を言ふ。阿字とは梵語十二母韻の最初の韻にして一切の梵語は皆之より生ず。

【九】二十七條の中第六條を註明す

【四味】乳味、酪味、生酥味、熟酥味。

生の相は、諸佛の大秘密なり、外道は識ること能はず。釋して云はく、略して七義有り、故に大乘と名く。一には法大を以ての故に、謂く甚深祕藏毘盧遮那遍一切處大人の所乘なり。二には發心大なるが故に、謂く一向に平等の大慧を志求して無盡の悲願を起し、普く法界の衆生を濟ふ。三には信解大なるが故に、謂く無量の功德を具足して遍く恆沙の佛刹に至り、大事因縁を以て衆生を成就す。四には性大を以ての故に、謂く自性清淨心の金剛寶藏は缺減有ること無く、一切衆生に等しく共に之を有せり。五には依止大なるが故に、謂く是の如きの妙乘は即ち法界衆生の大依止處なり、由りて百川海に趣き、芥木地に依りて生ずるが如し。六には時代を以ての故に、謂く壽量長遠にして三世を出過し、師子奮迅祕密神通の用は未だ休息せず。七には智大を以ての故に、謂く諸法無邊なるが故に、等しく虚空の心、自然の妙慧亦復無邊なり、實相の源底を窮むること函蓋相稱ふが如し。是の如きの七因縁を以ての故に諸大乘の法門に於て、猶醍醐の淳味第一なるが如し、故に最勝大乘と云ふなり。無相の相は甚深微妙にして了知すべきこと難し、諸佛の祕印は妄に宣示せず、是故に凡夫、二乗の兩種の外道は、但に無生滅心を識らざるのみに非ず、亦復生滅心をも識らず、故に外道は識ること能はずと云ふなり。今案するに、七大義は餘乘を超絶し諸の大乗に於て能く醍醐の如し、何ぞ四味を存せん。壽量長遠にして三世に出過す、豈木成に非ずや。凡夫二乗皆外道と爲る、豈彼淺法を將ひて此深理に雜せんや。若し早く本を覆ふの執、小を兼ぬるの僻を除かば則ち佛意に合すべし。

【二〇】二十七條の中第七條の旨を明す。

【十喻】如井、如鏡、如水中日、如影、如響、如夢、如鏡中像、如化、如摩訶行人、大乘の人。  
【無自性心】眞言宗十住心の第九華嚴經所説の圓融法界の理を指す。

【二二】二十七條の中第八條を明す。

（二）同品の末に云はく、『秘密主、應に是の如く大乘の句、心の句、無等等の苦、必定の苦、正等覺の苦、漸次大乘生の句を了知すべし。當に法財を具足し、種種の工巧大智を出生し、實の如く遍く一切の心想を知ることを得べし』と釋して云はく、此如幻等の十喻は皆是れ摩訶行人の甚深の緣起にして、聲聞緣覺の安足の處に非ず、故に大乘句と名く。心の實性は更に一法として以て之を顯示すべきもの無し。但深觀の時、障蓋雲除して自ら當に證知すべきのみ、故に心句と名く。如來の智慧は一切法中に於て譬類すべきもの無く、亦過上無し、故に無等と名く。而も心の實相は之と爾蓋相稱ひ間に異際無し、故に無等等句と曰ふ。諸佛は此十喻を以て必定師子吼して、如來性の心の實相印を説きたまふ。若し信者有らば、設ひ諸の魔有りて皆佛身に化して相似般若を説くも、亦其心を變易し、法相をして是の如からざらしむること能はず。故に必定句と曰ふ。此中道正觀を以て行爲無爲界を離れ、極無自性心生ずるは即ち是れ心佛顯現なり、故に正等覺句と曰ふ。深觀察を以ての故に、大海に入るに漸次に深きに轉ずること、乃至毘盧遮那の上上智觀を以て方に能く其源底を盡すが如し、故に準次大乘生句と曰ふと云云。今案するに、既に二乘安足の處に非ず、必定師子吼して佛性心印を説く。上上智觀獨り能く底を盡す、豈二乘に被らしめて第三時に涉らんや。

（三）入曼荼羅具緣品の初に云はく、『爾時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊此諸佛の自證の三菩提を説きたまへ、不思議法界は心地を超越せんと』釋して云はく、即ち金剛

【正遍知】眞正に  
遍く一切法を知る  
を言ふ。

【二】二十七條の  
中第九を明す。

【一生補處】菩薩  
初地に於て淨菩提  
心を得、乃至十地  
に至り更に佛地の  
法ありて轉生し以  
て佛處を補ふを言  
ふ。

【十緣生句】幻、  
陽炎、夢、影、乾  
闥婆城、響、水月  
浮浪、虛空花、旋  
火輪。

手佛の神力を承け、上の文を領解す。先づ世尊を歎ずること甚だ奇特と爲す、大方便を具するに由るが故に、乃ち能く此諸佛自證の三菩提を説く。謂ゆる自心自覺の不可思議法界は、一切の心地に出過して、的しく所依無し。世人、趾を擧げ、足を動かすことは皆地に依る。菩薩も亦爾なり。心に依つて進行す、故に此心を名けて地と爲す。心尙所依有るを以ての故に未だ正遍知と名けず。如來已に此微細の戲論を度せり、進取都て息む、故に超越心地と名く。今案するに、諸佛自證の法は尙菩薩の心地を超越、何に況んや二乘をや。定に論外に在り。既に三乘の境界に非ず、何ぞ彼分齊の法有らんや。有眼の土は意を留むべきのみ。

同文に云はく、「爾時薄伽梵毘盧遮那、大衆の會中に於て遍く觀察し已り、執金剛祕密主に告げて言はく、諦かに聽け金剛手、今曼荼羅行を修行して、一切智を満足するの法を説かん。」と釋して云はく、此中大會とは即ち是れ法界曼荼羅攝の應度の衆生なり。今佛深密の行を説かんと欲し、道機に著せしめんが爲の故に慧眼を以て觀察したまふ。即ち此修行とは梵音娜耶にして、所乘の法、所行の道、通じて娜耶と名く。此行とは梵音の折利耶なり、且く下の文に云ふが如く、先弟子の爲に心地を擇治す、若し我倒の凡夫の爲に一念守齋の種子心を擇得し、治めて平正ならしむれば、亦治地と名く、乃至一生補處の菩薩の爲に、心中の無明の父母極細の垢を擇去するを亦治地と名く。此に由つて之を言はば、則ち經文の一一の言の下の治地の義に凡そ幾重有りや、例せば十緣生句の皆漸次に轉深し

## 【三】二十七條の中第十條の旨を詮す。

て窮盡すべからざるが如し。執金剛、是の如き勸語を爲し、佛還つて此印を以て之に印し、而して後演説したまふ、故に満足一切智智法門と云ふ。今案するに、既に満足一切智智法門と言ふ、明かに三乘所涉の境に非ず、何が故にこれに僻執して存三の教に同するや。二同偈に云はく、「佛法は諸相を離れ、法位に住すれば、所説比類無く、相無く爲作無し。乃至法は分別及び一切の妄想を離る、凡愚の知らざる所なり。邪妄は境界を執し、時方相貌等といふも、而も實には時方無く。作無く造者無ければ、彼一切諸法は唯實相に住す。」と。釋して云はく、大法は常に無性にして衆縁より生ず。即ち是八心の相は諸の戲論に越ゆ、故に法は分別及び一切の妄想を離ると云ふ。若し諸法の本無相なることは是の如しと了知せば、則ち心の實相本初より以來常に自ら不生なりと照見して、一切の有相皆無相に住す。故に彼一切の諸法唯實相に住すと云ふ。今案するに、方便力を以て此曼荼羅の具縁支分に寄せ、初業者をして心を措くに地有りて、所作を空ならざらしむ。即ち此功德を以て佛の加持を蒙り、兼ねて十縁生句を觀じて能く實相を動ぜず、神通に遊戯して諸の佛土を莊嚴す。若し一切有爲の法、皆悉く實相に住せば、實相の外更に別の法無し。詎ぞ本源を捐てて末流を挹まんや。佛語灼然たり、以て疑を生ずること莫れ。

【四】二十七條の中第十一條を明す  
 同文に云はく、「爾時に金剛手秘密主、佛に白して言さく、當に云何んが此を曼荼羅と名くるや。曼荼羅とは其義云何ん。佛言はく、此を諸佛を發生する曼荼羅と名く。極無比味、無過上味なり。是故に説いて曼荼羅と爲す。」と釋して云はく、凡そ二問有り、世尊答

【一切智】一切の法を知了する智慧を言ふ。

【五】二十七條の中第十二條を明す

中に初に名を答へ次に義を答ふ。名を答ふる中に就かば、曼荼羅とは是れ發生の義にして今即ち名けて發生諸佛曼荼羅と爲すなり。菩提心の種子を一切智の心地中に下し、不思議法性の芽をして次第に滋長し、乃至法界に彌滿して佛の樹王と成らしむ。故に發生を以て稱と爲すなり。次に義を答ふる中、梵音に曼荼羅とは、是れ乳酪を攪搖して蘇と成すの義、曼荼羅とは是れ蘇中の極精醇なるものの浮聚して上に在るの義なり。猶彼精醇は復變易せざれば、復名けて堅と爲す。淨妙の味は共に相和合して餘物の雜すること能はざる所故に聚集の義有るがごとし。是故に佛は極無比味、無過上味と言へり、是故に説いて曼荼羅と爲すなり。三種の祕密方便を以て、衆生佛性の乳を攪搖し、乃至五味を經歴して妙覺の醍醐を成す、醇淨融妙にして復増すべからず、一切の金剛智印、同じく共に集會し、眞常不變の甘露味中に於て最も爲れ第一なり、是を曼荼羅義と爲す。今案するに、四味を攪搖して已に醍醐を成す、豈三乘の乳を存して淳味に亂ぜんや。佛、極無比無過上と言ふ。而も却つて下劣の乘に混ぜば逆佛の重罪を招かん。甚だ以て悲しむべし。

第二卷の初、具緣品の餘に云はく、一爾時に毘盧遮那世尊、一切諸佛と同じく共に集會し、各各一切の聲聞、緣覺、菩薩との三昧道を宣説す。時に佛、一切如來一體速疾力三昧に入りたまふ。是に於て世尊、復執金剛菩薩に告げて言はく、我本不生を覺り語言の道を出過す、諸過解脫を得因緣を遠離し、空の虚空と等しきことを知り如實相の智生ず、已に一切の暗を離れ第一實にして無垢なり。此第一實際は加持力を以ての故に、世間を度せん

【三空三印昧】三空三印昧、無相解脫門、無作解脫門の印【三重境】胎藏界曼荼羅は大日を中心として其外圍に三重の境あつて諸尊を安置す。

が爲に而も文字を以て説く。と。釋して云はく、如來已に三空三昧印を説き、復三昧道中差別の印を説く。三重境に示す所の類形は皆是れ如來一種の法門身なり。是故に悉く名けて佛と爲す。此等の諸佛各各本所流通の法門に於て自ら彼三昧道を説く。若し世天の身を現すれば則ち彼三昧道を説く。若し三乘の身を現すれば則ち三乘の三昧道を説く。若し執金剛の身を現すれば則ち彼三昧道を説く。當に知るべし、此中の偈頌は是の如く無量刹塵なり。結集の能く載する所に非ず。一體速疾力と言ふは、此三昧に入る時、則ち一切如來皆同一法界の智體なることを證知し、一念の中に於て世界海微塵等の諸三昧門を觀じ、一一の門に於て各各無量の衆生を成就することを得、故に一體速疾力三昧と名くるなり。爾時に世尊、遍く觀察し已り、種種の三昧道は同じく一體に歸し皆是れ佛乘なることを了知したまふ。復執金剛の爲に一切三昧道中の成菩提の印を説きたまへり。我覺本不生とは謂く自心は本來不生なりと覺れば即ち是れ成佛す。而も實には覺無く成無く、語言の道を出過す。此より已下は是れ阿字門を轉釋す。本不生と覺れば即ち是れ佛にして、佛自證の法は言語盡竟して行ぜざる處なり。若し本不生際を了すれば、一切の過失に於て皆解脫を得。生滅の因縁を離るること淨虚空の不變なるが如し、自性淨にして無分別なるを以ての故に大空の實相に同ず、即ち是れ毘盧遮那遍一切處なり。此薩婆若慧は大虚空と等し、一切の無明を離るるが故に本不生を覺す、一切諸法として聞知せざるは無し。第一實際とは謂ゆる自性清淨心なり、一切の暗を離るるを以ての故に佛の智見復垢汗無し。皆是れ

【五乗の佛身】人乘、天乘、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の五乗は共に大日法身中の自體なるが故に佛身と言ふ

【二六】二十七條の中第十三條の旨を詮す。

【二七】二十七條の中第十四條を明す

不生の義を轉釋するなり。今案するに、三重の諸尊皆名けて佛と爲す。曾て五乗の佛身に非ざる者無し。一切の如來は皆同じく一體にして、皆阿字を同うし、皆實際を同うす。遍一切處の所有の諸法は悉く佛乘の爲なること正しく此文に在り。縱令聖賢なりとも尙聞見すべし、況んや有眼の者は詎ぞ煩説を俟たんや。

同文に云はく、『復次に秘密主、此眞言の相は一切諸佛の所作に非ず、他をして作さしめず、亦隨喜せず、何を以ての故に、是諸法は法是の如きを以ての故なり。』と。釋して云はく、經の中次に眞言如實相を説いて言はく、如來の身語意畢竟平等なるを以ての故に、此眞言の相、聲、字皆常なり。常なるが故に流れず、變易有ること無く、法爾として是の如し。造作の所成に非ず、若し造作すべくんば即ち是れ生法なり。法若し生有らば期も破壊すべく、四相に遷流して無常無我なり、何を名けて眞實語と爲すことを得んや。故に佛は自ら作さず、他をして作さしめず、設ひ之を作すこと有らんも亦隨喜せず、此眞言の相は若し佛世に出づるも世に出でざるも、法として法位に住し性相常住なり、是故に必定印と名く。衆聖道同なれば即ち此大悲曼荼羅の一切眞言なり、一一の眞言の相は皆法爾として是の如し。故に重ねて之を言ふなり。今案するに、眞言とは是眞實語にして、變ぜず流れず、三重の諸尊の一切の眞言は皆必定印なり。皆常住法なり。若し此文を見るときは辭執水釋せん。

同偈に言はく、『眞言三昧門は一切の願を圓滿す、謂ゆる諸如來の不可思議の果なり。』

## 【二八】二十七條の中第十五條を明す

と釋して云はく、謂く諸の衆生此三昧門を修せば、一切の志求皆圓滿を得、此願の圓滿せし時は即ち是れ諸の如來の不思議の果なり。常住の果、無師の慧は猶能く衆生を給與す、何に況んや世界悉願の地をや。復次に如來の一一三昧門の聲字實相は、有佛、無佛の法は是の如し、是故に流れず。即ち是れ如來の本地法身なり。此を以て衆生に施さんと欲するが故に、還つて自在神力を以て是の如き法爾の聲字を加持す、故に此聲字は即ち是れ諸佛加持の身にして加持身は普く隨類の身と作り、在らざる所無し。聲字亦爾なり、行者一心に此聲字を觀すれば、自ら佛の加持身を見る、若し此身を見れば即ち本地法身なり、若し此身を見る時は即ち是れ行者の自身なり、故に此一門は即ち是れ如來不思議の果なり、別處より來るにあらず。今案するに、一一の三昧は皆是れ如來不思議の果、本地法身なり。豈唯方等の差別不融に據らんや、智人之を見れば幸甚幸甚。

同文に云はく、『不思議心に住して諸の事業を起作し、修行地に到らば不思議の果を授く』と釋して云はく、然るに地は即ち是れ心體なり、故に但不思議心に住すと云ふなり。眞言門中、是の如き不思議の果徳有りて能く一國を周給し、等しく衆生に賜ふに堪ふと雖も、若し諸の衆生難遭の想を生じ供養修行すること能はざれば、譬へば王膳前に盈つとも飲噉するの心無きが如し。則ち諸佛共れ此の若くんば云何。故に若し修行地に到らば不思議の果を授くと云ふ。此修行地は即ち是れ淨菩提心初法門なり。今案するに、因は之果と俱に不思議なり、大王の膳前第三時に預からんや。應に知るべし、此文は彼唯一に同



【九】二十七條の中第十六條の旨を説明す。

【維摩詰】佛在世の時畏耶離城に出世し、妙喜國より此に化生して釋迦の教化を輔く。

【舍利弗】シヤー

リブトラ (Sarpit

二) 佛十大弟子の

一、智慧第一と稱

せらる。

【妙法蓮華義】法

華の一乗妙法。

【壽量品】妙法蓮

華經如來壽量品第

十六。

【靈鷲山】天竺王

舍城の東北十里に

して靈鷲山あり

法華經は即ち此山

上にて説かれしと

傳ふ。

【補處の菩薩】前

佛を嗣ぎて成佛す

る菩薩を言ふ。

す、法華を執して此秘密を抑ふること莫れ。

同文に云はく、爾時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、希有なり世尊、佛、不思議の

眞言相の道法を説きたまふ。一切の聲聞緣覺を共せず、亦普く一切衆生の爲にも非ず、若

し此眞言道を信ぜば、諸の功德法皆當に満足すべし。」と。釋して云はく、聲聞法には解脱

の中に文字有ること無し、而るに維摩詰は文字を離れずして解脱相を説く、故に不思議解

脱と名く。今此字輪も亦爾り。即ち無相法身を以て種種の聲字と作り、種種の聲字は無相

法身と作る、故に不思議眞言相と名くるなり。

不共一切等とは、此經は是れ法王の祕寶、安に卑賤の人に示すべからず。釋迦出世して

四十餘年、舍利弗等の慇懃の三請に因り方に爲に略して妙法蓮華義を説きしが如し。今此

本地の身は又是れ妙法蓮華の最深祕處なり。故に壽量品に常在靈鷲山、及餘諸住處、乃

至、我淨土不毀、而衆見燒盡と云ふは即ち此宗の瑜伽の意のみ。又補處の菩薩の慇懃三請

に因り方に爲に之を説く、苟くも頓悟の機無くんば則ち其手に入らず。故に普く一切衆生

の爲にせず、亦是れ前の偈の中、修行地に到らば方に不思議の果を授くることを領解す。

若し満足する時は即ち是れ衆の勝願を具足するなり。今案するに、既に不共二乗と云

ふ、豈其教に同ぜんや。壽量の遠本は已に今と一なり、強ひて方等に混すれば法王の勅に

違す。釋尊、四十餘年を過ぎて妙法蓮華經を説きしが如く、今大日如來、一切法を説くの

意方に此祕要を説くにあり、俱に是終窮圓滿の教なり、疏の斷甚だ佳なり。意を留めて能

【二十七條の  
中第十七條を明す

く思へ、意を留めて能く思へ。法王の祕密の寶は定に此典に在り。一以て諸を貫く、尤此句に在り。彼久成の本地は即ち是法界心地なり。彼を是とし此を非とするは、耳を貫び目を賤しむるなり。

同文に云はく、「爾時に毘盧遮那世尊、一切の願を滿し、廣長舌相を出し、遍く一切の佛刹を覆ひ、清淨法幢高峰觀三昧に住したまひき。時に佛、定より起ち、爾時一切如來の法界に遍じて無餘の衆生界を哀愍する聲を發し、此大力大護明妃を説きたまふ。」と釋して云はく、此中出と言ふは梵本を正しく翻すれば當に發生と云ふべし。舊譯に或は奮迅とも云ふ。此廣長舌相を出すとは、即ち是如來奮迅して大神通力を示現するが故に會意して之を言ふなり。此三昧は、如來の廣長舌相の遍く一切の佛刹に滿ちて、巧色摩尼普門の大用中に於て最も上首たること、猶大將の幢の如きが故に清淨法幢と云ふなり。是の如き淨菩提心を萬行の幢簾と爲す、亦復是の如し。中道第一義諦の山上に住せば安閑不動にして、又生身佛の如く將に誠實の言を發さんとする時、或は廣長舌相をもて遍く其面を覆ふことを示し、若は摩訶衍中或は舌相の遍く三千世界を覆ふことを示す。今は世尊、將に如來の平等語を説かんとするが故に、此語輪橫堅皆一切法界に遍することを明す。故に廣長舌相と曰ふ。此舌は、如意珠の寂然として心無く、亦定相無く、而も能く普く一切に應じ、皆をして其心を稱悅せしむるが如し。故に巧色摩尼と名く、是れ一切眞言の出生するの所なり。今案するに、小乗の佛は舌相を出して面上を覆ひ、大乘の佛は三千世界

【三千世界】  
萬象の總稱。

一切

を覆ふことを顯す。今此祕密乘中には舌相を出して十方世界を覆ひて其間隙無し。横堅皆遍く平等法を説く、豈不平等の見を存せんや。今佛、狭少の惱を受く、痛ましき哉、痛ましき哉。

同文に云はく、一時に薄伽梵、廣大法界の加持を以て即ち是時に於て法界胎藏三昧に住し、此定より起ちて入佛三昧耶持明を説く、即ち兩時に於て一切の佛刹、一切の菩薩衆會の中に於て、此入佛三昧耶の明を説き已りぬ。諸佛子等同じく是を聞きし者は、一切法に於て而も違越せず。釋して云はく、梵音に毘富羅は是に廣大義といふ。謂く深廣無際なり。是の如き諸法の自體を名けて毘富羅法界と爲す。諸佛の實相、眞言の實相、衆生の實相皆是れ毘富羅法界なり。此を以て更に相加持す、故に名けて法界加持義と爲す。是の如く諸佛の國王、明妃と和合して共に毘富羅の種子を生ず、大悲胎藏の爲に持せられ失壞有ること無し、故に名けて法界加持と爲すなり。世尊普遍く一切衆生を加持して皆平等種子と作し竟る。即時に是三昧に入り、此一の種子皆是れ蓮華臺上の毘盧遮那なりと觀すれば、普門の眷屬、無盡莊嚴亦大悲曼荼羅と等しくして異り有ること無し。而も諸の衆生は未だ能く自ら證知すること能はず、故は現胎俱舍在りと名く、若し藏を出づる時は即ち是れ如來解脱なり。佛是の如く觀じ已つて定より起ちて三昧耶の持明を説く。三昧耶とは是れ平等の義、本誓の義、除障の義、警覺の義なり。平等と言ふは謂く、如來現に此三昧を證せし時、一切種種の身語意を見るに悉く皆如來と等し。禪定智慧は實相身と亦畢竟して

等し、故に平等と名く。又三世等しく、三因等しく、三業道等しく、三乘等しきは是れ平等義なり。

又三昧耶とは即ち是れ必定師子吼して諸法平等義を説く。若し先づ念持せざる者は一切眞言の法事を作すことを得ず。一切の佛子既に之を聞き已りて、一切の眞言法中に於て敢て違越せず、然る所以は若し菩薩、衆生の諸法中に於て種種の不平等の見を作さば、則ち三昧耶を越ゆと云云。此れ一切如来の金剛誓戒なり。是故に諸の菩薩等、此三昧耶を奉持すること身命を護るが如く、敢て違越せざるなり。今案するに、此平等義は法界に遍し、三世、三業、三乘一切諸法平等にして一味なり。皆是れ毘盧遮那本地常心なり、若し不平等の見を作さば如来の金剛誓戒に違越す。彼第三時の機未だ熟せざるが故に、未だ三平等法門を説かず。末學の僻執、由つて以て彼に同す。今より以後佛戒を敬順して三昧耶業を招越すること勿れ。

普通眞言藏品の初に、普賢の眞言乃至一切の聲聞、緣覺、菩薩、天龍八部及び諸人の眞言を説き竟り、末後に結句して云はく、『秘密主、是等一切の眞言は我已に宣説せり、是中の一切の眞言の心は汝當に諦聽すべし。謂ゆる阿字門なり。此一切の諸の眞言心を念ずるを最も無上と爲す。是一切の眞言の住する所、此眞言に於て而も決定を得。』と釋して云はく、次に毘盧遮那、眞言心を説くとは、以上諸の眞言等は一一の中に隨つて則ち根本眞言、心眞言、隨心眞言有り。是の如き等無量無邊にして數を知るべからず。今總じて諸眞

【三】二十七條の  
中第十九條を明す

【十界】 地獄、餓鬼、畜生、人、阿修羅、聲聞、緣覺、菩薩、權佛、實佛之れ密教の十界なり。

【阿字本不生藏】 阿字は本不生にして一切諸法も亦此の如し、之れ密教の根本義なり。藏は能藏所藏を義となす。

言の心を説くは即ち此阿字是なり。此は是れ諸法本不生の義にして、若し阿聲を離るれば則ち餘の字無く、即ち是れ諸字の母、即ち一切眞言の生處なり。謂く、一切の法門及び菩薩等は皆、毘盧遮那の自體自證の心より、衆生を饒益せんと欲するが爲に、加持力を以て而も是事を現す。能實に即體不生なること阿字の法體に同す。此字は眞言に於て最も上妙と爲す。是故に眞言行者は常に當に是の如く受持すべきなり。是故に一切の眞言は阿字に住す、此に住するに由るが故に之を誦すれば即生するなり。今案するに、大日如來は阿字門に住して十界の眞言を説く、説かば即ち却つて阿字本不生藏に攝入す。一相、一味、一道、一體にして最此句に在り。詎ぞ心眼有らん者は更に方等不會の教に同ぜんや。努力して之を見よ、努力して之を見よ。墮獄の事を招きて佛性の寶を損ふこと莫れ。

【阿字本不生藏】 阿字は本不生にして一切諸法も亦此の如し、之れ密教の根本義なり。藏は能藏所藏を義となす。

【三】 二十七條の中第二十條を明す

悉地出現品に云はく、『復三世無量門決定智圓滿法句を説く。』と。釋して云はく、謂く一念には、三世の中に於て無量無礙なる智門あり。佛種種の方便を以て微妙法を説き、一切衆生は各各所應智門に隨つて而も決定を得。其門無量なれば、故に無量門と言ふなり。佛大衆會を觀じ、此普門法界趣入の門を説き、各本縁に隨つて而も決定を得しめんと欲するが爲の故に、決定智門と名くるなり。法句とは、謂く先づ事に觸れ、事に從ひ能く理を生ずるを名けて句と爲す。圓滿とは此法門に入らば能く法界無相如來自證祕密の法を生ず、將に是の如きの法を以て一切衆生を満足し、空しく過ぐることを無からしめんと欲するなり。今案するに、大曼荼羅中の五百の諸如來乃至不可說微塵數の海會は是れ隔法に非ず。

【七寶】金、銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙、琥珀、珍珠、玫瑰。

【大車】羊車、鹿車、牛車の三乘車に對して佛の乘車を大白牛車即ち大車と稱す。

【二四】二十七條の中第二十一條を明す。

【大般涅槃】身心滅するの義より轉じて生死を離れて涅槃に入るを大般涅槃と言ふ。

【二五】二十七條の中第二十二條を明す。

【悉地】世出世の法に通じ三密相應して妙果を成ずるを言ふ。

【南摩三曼多勃默南阿】ナマフサマシタブンダラヤム(Namah Samantabuddhanam) 歸命平等諸佛と譯す。是れ佛部の歸命句なり。

一一皆是れ圓滿の法句なること、例へば法華の七寶大車其數無量なるが如きのみ。豈方等と目を同じうして言らんや。

成就悉地品に云はく、「諸佛是の如き更無過上の句を説くに一切法の歸趣すること衆流の海に赴くが如し」と釋して云はく、是の如き甚深の法性は猶し大海の萬流の歸趣する所なるが如し、此萬法歸趣して正しく大般涅槃に順するは、即ち是れ發行の義なり。世間の大海の種種の色味も大海の中に入れば皆同じく一色一味にして差別有ること無く、變易すべからざるが如し。如來の大海も亦復是の如し、一切の萬法萬行此中に入れば皆同一不思議解脫の味にして差別有ること無きなり。今案するに、萬法の阿字に歸すること衆流の海に赴くが如し、證據は日月よりも明かに、覆盆能く照すべし。

轉字輪品に云はく、「即時に世尊の身の諸の支分より皆悉く是字を出現す。一切世間の聲聞緣覺の靜慮と思惟とに於て勤修して悉地を成就せしめて、皆壽命を同うし、種子を同うし、依處を同うし、救世者を同うす。南摩三曼多勃默南阿」と釋して云はく、謂く佛身分に通く皆此阿字の眞言を現す。此阿字門は即ち是れ世、出世間、二乘の定觀等の慧命なり。壽の一字の如し、諸壽は上の世、出世間、一切の所作の妙業は阿字を即ち彼命と爲すが如きに同じ。人若し命根無くんば、一切の作業皆悉く棄廢するが如し。一切の世、出世間の功德定慧等亦雨り。若し阿字門を離るれば即ち増益成就することを得ず。彼死人の能く爲す所無きが如し。復阿字は是れ開口の聲なり。若し阿聲無くんば即ち口を聞くこ

と能はず、口若し聞かざれば一切の字皆無し。是故に阿字を一切の字の種子と爲す。當に知るべし、一切の萬行も亦是の如し。阿字門を以て而も種子と爲す、若し阿字を離るれば亦成ぜざるなり。依處を同うすとは、衆生等若し大地無くんば則ち住處無きが如し。此阿字門も亦是の如し、若し阿字を離るれば則ち所依の處無きなり。救度亦同じとは、當に知るべし、阿字門は即ち是れ一切世間の大救護なり。今案するに、二乗及び世間同一の壽命は、同じく阿字を以て種子と爲す、同じく阿字を以て依處と爲す、同じく阿字を以て救護者と爲す、何の怨恨有りてか判じて方等存三の教に屬せしや。大罪なり、大罪なり。

【秘密曼荼羅品の偈に云はく、或は復一切處に其類の形色に隨つて不思議智生ず。是故に不思議なり、物に應じて殊異有れども智と智證と常に一なり。】と釋して云はく、今謂く、法界の色は一色の中に於て即ち是れ一切色なり、能觀の智亦境と相應するが故に、是の如く自在にして用ふることを得んと欲するなり。無智を除かんが爲の故に種種の智を生ずる有り。無量の智を知ると雖も其實は是れ一智なり、前に智と云ひしは是れ一切智なり。一智を以て一切智を現するなり。前に本尊の形量大小を問ひしかば今次に之に答ふ。然るに佛の普門示現は皆群機に應起せんが爲なり、機既に萬差なり、當に知るべし、應を垂ることも亦大小定め無し。一一の本尊の形を論ずるに至らば、量として法界に同じからざるはなし。邊際及與始終有ることなし、智に淺深有るに由りて量に大小有り。故に所見の身は各差別せり。是故に當に知るべし、所觀の本尊は行者の心の大小に隨つて定量有

【三七】二十七條の  
中第二十四條を明  
す。

ること無し。云ふ所の證知とは即ち是れ佛なり。佛無盡の智を以て而も無盡の境を證す。兩大なれば蓋亦大なるが如し。今案するに、三重の海會、五百の諸尊、物に應じて形を異にすれども證智は本一なり。一一の諸尊、量法界に同じく邊際及以始終有ること無し。一切皆大菩提心に入るが故に、此の如き身は智者は局ること勿れ、然れば則ち障雲早く散じて佛日即ち現せん。努力して意を留めよ、努力して意を留めよ。

入秘密曼荼羅品に云はく、「是の如き三昧耶は一切諸如來と菩薩救世者と、及び佛の聲聞衆と乃至諸世間と平等にして違逆せず。此平等の誓秘密曼荼羅を解すれば一切法教に入りて諸壇に自在を得、我身は彼と等同なり。眞言者亦然り、相異らざるを以ての故に、説いて三昧耶と名く。」と釋して云はく、謂ゆる三昧耶とは是れ等の義なり。謂く我佛に等しく、佛我に等し、無二無別にして究竟じて皆等し。阿闍梨は佛に等しく、佛は即ち弟子に等し、此弟子は但十方三世一切の如來と等しきのみに非ず、亦一切の諸菩薩と等しく、亦一切の聲聞緣覺と等しく、亦一切世間天仙の衆とも等し。若し是の如く一切に等しくんば即ち是れ毘盧遮那佛心なり。故に諸の世間等は同等同順なりと云ふ。亦是れ法華は皆實相と相違背せざる義なり。應に是の如き解を作さば諸佛と等同すべきなり。違背無き義なり。若し此秘密曼荼羅を解さば即ち是れ遍く一切の曼荼羅に入るなり。此弟子は同じく遍く一切の曼荼羅に入るを以ての故に、即ち自在に一切の法門を修行して留難有ること無きを得るなり。佛、諸法究竟等を以て三昧耶の名を釋す、故に三昧耶と云ふ。今案するに、諸法究



【法華の十如】法華經方便品に説く十如是、十如是とは相性體力、作、因、緣、果、報、本末究竟等の十種を言ふ。

【依正一體】衣食住國土等を依報と言ひ、凡夫の身心を正報と云ふ。此依報正報の二は本來一體にして別無し。

【十善業道】不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不兩舌、不惡口、不倚語、不貪欲、不綺語、不邪見の十善。此十善行を修すれば善處に生ずるが故に十善業道と言ふ。

竟の等しきを以て三昧耶の義を釋す。法華の十如は此に於て囉きを増し、凡聖異なること無し。依正一體、性相圓融して同じく大日尊の位に住す。一切の十方一如一性なり。佛及び衆生は俱に是れ深玄の境にして、唯絶聞するのみに非ず、遂に以て聞會す。當機自ら知る。煩述すべからず。若し強ひて之を抑ふれば即ち聖死の人なり、數す可きに足るのみ。

受方便學處品に云はく、『秘密主、當に諦聽すべし。吾今差別の道、一道の法門を演說せん。秘密主、若し聲聞乘の學處、我慧の方便を離れ、教令を以て邊智を成就し開發するは、等しく十善業道を行するに非ずと説く。乃至、菩薩、大乘を修行し一切法平等に入れば智慧方便を攝受し、自他俱なるが故に諸所作轉す。是故に秘密主、菩薩此に於て智の方便を攝せば一切法平等に入らん。當に勤めて修學すべし。』と釋して云はく、謂く一切法は

阿字門を出でず、即ち是れ一道なり、道とは謂く此法に乗じて直に道場に至るの道なり。而して一と言ふは、此れ即ち如如の道は獨一法界なり、故に一と言ふなり。此一道の中に於て而も種種の差別を分別すること、猶無量の岐路の皆寶所に至るに、街を殊にして歸を同じうするが如し。又一の阿字門を以て一切の字を分別するが如し。當に知るべし、差別有りとは雖も阿字門に異らず。今此十善も亦爾り、上中下智の所解に隨つて自ら種種を成ず、一切衆生の本原の戒に而も差別有るには非ざるなり。然るに佛は大衆の疑を破せんが爲の故に、亦一道の中に於て而も分別して其差別相を答ふるのみ。故に次に若聲聞乘乃至非等行者と言ふ。此は意の大乗と別なるを答ふるなり。彼聲聞の十善は但是れ教令を

【藥草】 妙法蓮華經藥草論品第五中第二十六條を説す。

【六道】 地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人道、天道。

【三〇】 二十七條の中最後の第二十七條を明す。

以て成就すること、猶國王の約勅する所有るが如しと云云。但は一邊の智にして中道實相の戒に非ず、是は其れ差別なり。次に大乘十善の差別相を明さば、菩薩大乘を修行す等と言ふは、言はく此戒は一切平等法に入り自他を離る。而も普く自他を淨め自ら一切如來の知見を開く。亦一切をして我に等同せしむ。一切平等法界に入りて此戒を修するを以ての故に、一切と共にせざるなり。今案するに、一切の人をして一乘道に入らしむるが故に、差別の道、一道の法門と言ふ。既に一切法平等に入る。豈差別道有らん。已に差別を開す、即ち一道と爲す。詎ぞ岐術に留らん。無差別即差、差別即無差別なり。例は藥草品の如し。百字位成中に云はく、「曼荼羅は意と異なるに非ず、意は曼荼羅と異なるに非ず。何を以ての故に。彼曼荼羅は一相なるが故に乃至無二無別なり。」と釋して云はく、當に知るべし、彼心行者の心は曼荼羅と異らず、曼荼羅は心と異らず、一相なるを以ての故なり。言はく、此曼荼羅は心と無二無別なり。今此法も亦是の如く解す可きなり。今案するに、四重曼荼羅は皆悉く一相なり。三乘、六道の量は六日如來に同じ。水の流波は其相異りと雖も海に朝宗せば鹹味一に同じきが如し。輞爾に見乍ら判じて方等に屬せしめば、海水に臨んで未だ其味を食せざるが如し。

世出 世持誦品の偈に云はく、「當に知るべし、出世心は諸字を遠離す。自と尊と一相爲り、二無く取著無し、意と色像とを壞せず、法則に異りなきことを。」と。釋して云はく、一相とは身口意なり、本尊を觀する心の上に此圓明を作す。即ち是心なり。其身印は即ち

【三落又】密教にて字と印と本尊との三平等の實相を見る義なり  
 【修多羅】スートラ(Sutra)義譯して經と言ふ  
 【三】教判三門の第三總じて判釋するの旨を明す  
 【小乗の三藏】天台にては小乗を呼んで三藏と言ふ。三藏は通釋に隨へば經、律、論を言ふ  
 【三無性義】相無性、生無性、勝義無性の三無性の義  
 【華嚴般若】華嚴經と般若經

是身に等しく、其眞言の字は即ち是語に等し。今已に明かに本尊を見て而して本尊の三事を觀す、一相平等にして實相に如す。又本尊の三を觀するに平等一相にして即ち我に同す。我之三相は亦復一相にして平等なること尊に異らず。此圓明の性は菩提心と異らず、此菩提心は本尊と異らず、自他平等なり。又所觀の字は不同なりと雖も皆是れ三昧門なり、若し一字の性相を解せば即ち一切字の性相を解す。字は即本尊、本尊は即心、心は即法界體性なり。是故に此阿字は即ち是れ不思議の字、阿の如くんば一切亦爾なり、字の如くんば印等亦是の如し。此不思議の三相に於て、謂く字の眞言相、身の印相、本尊の心相は遺らず、立たず、増益せず、損減せず、當に一切平等の相の觀を作して、一切法に達し、一切智を成すべし。當に此法則に依り、此に異りて作すこと勿るべし。此は即ち是れ三落又の義なり。今案するに、此三摩地門は唯此秘密教にのみ在り。自餘の一切の修多羅中には闕きて書せず。故に大乘中の王、祕中の最祕と云ふ。法華すら尙及ばず、矧んや自餘の教をや。判じて第三時に置くは、譬へば日を指して螢と爲し、海を以て蹄と作すが如し。瞻智を總請し、妄執を停廢し佛語を仰信すべし。蠅翼を以て虚空を覆ふこと莫れ。

第三に總じて判釋すとは、先づ誠文を出し、次に之を通會す。先づ誠文を出すとは釋して云く、又此經宗は横に一切の佛敎を統ぶ。唯蘊無我出世間心仕於蘊中と説くが如し、即ち諸部の中の小乗の三藏を攝す。觀蘊阿頼耶覺自心不生と説くが如し、即ち諸經の八識三無性義を攝す。極無自性心十緣生句と説くが如し。即ち華嚴般若の種種の不思議境界を

【四阿含】長阿含、中阿含、雜阿含、增一阿含の四阿含經。  
 【楞伽經】楞伽經の略、四卷、十卷、七卷の三本今現に存す。  
 【大集】大方等大集經、十卷、前後の諸師各一部分を譯して未だ全本なし。  
 【央掘】央掘摩羅經四卷、宋の求那跋陀羅譯。  
 【涅槃】大般涅槃經四十卷、三十六卷の二本あり。  
 【阿頼耶】阿頼耶識の略、藏と譯す一切諸法の種子を合譯し、一切有爲法の根本となる。  
 【第一義空】小乘

攝して皆其中に入る。如實知自心名一切種智と説くが如し、則ち佛性一乘、如來の祕密藏は皆其中に入る、種種の聖言に於て其精要を統べざるは無し。已上つて通會とは、横統の言義は大藏の如し、如來の祕密藏は何法か備へざらん。常情を翫んで妄に巨容を生ずること莫れ。若し横義の大小を兼ぬるを嫌はば未だ一切純一の教有らず。此大綱を得れば摩解自ら解けなん。四阿含等の一切の小乘は皆唯蘊無我の句中に攝す。入室の理を説くが故に、楞伽、寶積、大集、維摩、央掘、金光、大方等の一切の大乗の如し、般若、華嚴、法華、涅槃を除く外皆悉く阿頼耶の句に攝入す、法空理を説くが故なり。華嚴、般若、種種の諸部は皆自性緣生の句中に攝す、第一義空を説くが故なり。問うて曰はく、『華嚴一乘は是れ第二七日の説なり、何が故に二十九年已後の般若と同じく之を攝するや。』答へて曰はく、『今疏の意を案ずるに説時の前後を論ぜず、只義理の淺深を取りて類を以て之を集むるに般若と同じ。加之、不共般若は即ち是れ華嚴にして、又華嚴の會は般若經と其時隣次す。又『無量義』に云はく、『次に』方等十二部經、『摩訶般若』、『華嚴海空』を説き、菩薩の歷劫修行を宣説す。是れ二七の説を指すには非ずと雖も、法界に入るの義同じきを以ての故なりと。此等の意を案ずるに、一句中に攝して其義傷無し矣。『法華』、『涅槃』及び『大日』等は如實の句に攝す。或は曰はく、佛性は『涅槃經』を指し、一乘は『法華經』を指し、如來祕密藏は即ち持明藏にして、眞言教とは此れ亦一見なり矣。今以爲らく、佛性一乘を讀みて兩句と爲すべからず、説教次第して亂有るが故なり。『法華』は『涅槃』と同じく佛性一乘

の涅槃に對して第一義の涅槃を第一義と云ふ。【無量義】無量義經一卷、蕭齊の曇摩伽陀耶舍譯。【持明藏】一切眞言陀羅尼の經典。【十住心】異生、凡心、愚童、持齊心、嬰童無畏心、唯觀無我心、拔業、因種覺心、他緣大乘心、覺心不生心、一道無爲心、極無自性心、秘密莊嚴心の十住の心。之れ眞言宗の教相列釋なり。【六波羅蜜經】大乘理趣六波羅蜜多經の略。【守護國界主陀羅尼經】十卷、唐の般若、牟尼室利共譯。【波羅蜜多】菩薩の大道に名く。【阿耨多羅三藐三菩提】アマツタラサミンヤクサンボデーイ(Amitayusamyak-sambodhi

の旨を明すが故に總含して一句と爲す。如來秘密藏を眞言と爲し、或は十住心を立てて一代の教を判するに未だ此疏に合せざれば論を爲すに足らざるのみ。秘密莊嚴法界樓觀は即ち如實知自心の相なり、豈此を過ぎて外に更に法有らんや。『六波羅蜜經』中、五藏を建立するに、般若教を以て第四藏を攝し、眞言教門を以て第五醜醜に置き、諸教に乖かずして一道に符會す。『守護國界主陀羅尼經』に云はく、『佛言はく、秘密主、我無量無數劫中に於て是の如き波羅蜜多を修習し、最後身に至りて六年苦行せしかども、阿耨多羅三藐三菩提を得て、毘盧遮那を成ずることを得ざりき。道場に坐せし時、無量の化佛猶油麻の如く虚空に遍滿し、諸佛同聲に我に告げて言はく、善男子、云何して成等正覺を求むるや。我佛に告げて言はく、我は是れ凡夫なれば未だ求むる處を知らず、惟願くは慈悲をもて我爲に解説したまへ、是時に諸佛同じく我に告げて言はく、善男子諦聽せよ諦聽せよ、當に汝が爲に説くべし、是時に諸佛同じく我に告げて言はく、善男子諦聽せよ諦聽せよ、當に觀を作し已りて後夜分に於て阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得ん。善男子、十方世界は恆河沙の如く、三世の諸佛は月輪に於て唵字の觀を作さずして成佛を得ば、是處有ること無し。何を以ての故に。唵字は即ち是れ一切の法門、亦是れ八萬四千法門の寶炬關鎖なり。唵字は即ち是れ毘盧遮那佛の眞身、唵字は即ち是れ陀羅尼の母、此より能く一切如來を生じ、如來より一切菩薩を生じ、菩薩より一切衆生を生じ、乃至少分所有の善根を生ず。善男子、此陀羅尼の是の如き等の不可思議威德功用を具すことは、劫を窮めて演説す

大毘盧遮那經指歸

じ、眞正に偏く一切の眞理を知る無上の智慧を指す。

【唯字】オン(三三)

金剛界の陀羅尼に唯字を冠す。

養、驚覺、攝伏、三身の五義を有す。

唯字に就いて法觀ずる觀法を唯字觀と云ふ。

【恆河沙】恆河の砂の數にて物の多きを喻ふ。

【三句法門】菩提心爲因、大悲爲根、方便爲究竟之れ大日經一部の大宗なり。

【諸法實相】有爲無爲一切の法皆三千三諦の妙用を具して互具互融するを言ふ。

るに、劫數は盡く可くとも此陀羅尼の功用威徳は窮盡すべからずと。【文】此文明鏡と爲る、更に疑慮すべからず。是處有ること無しと云ふは最も意を留むべきのみ。八萬の法藏若し此字門に入らば皆是れ秘密甚深の境界なり。一悟入すれば皆成佛するが故に、是故に説いて大空圓滿教と爲す。是を以て一切大小の諸乘に就いて心の實相の印を聞くこと第二門中に一一釋し畢れり。但如實の句に於て其に三部の前後有り、如何がして法華を初と爲し、涅槃を中と爲し、秘密を後と爲す、何を以て之を知るや。疏に云はく、「此經は横に一切教を統ぶ」と。又云はく、「即ち一部始終を統論し、無量の方便は皆諸菩薩をして菩提心清淨にして其心を知識せしめんが爲なること此經の如し。當に知るべし、一切修多羅の意も皆同じく此に在り。釋迦如來所説の法の如きは、當に知るべし、十方三世一切の如來、種種の因縁を以て宜しきに隨つて演説したまふ。法も此三句法門たるに非ざるは無し。究竟同歸して本に異轍無しと。」又云はく、「世尊前に已に廣く淨菩提心の如實相を説くに、衆生未だ意を得ること懸かにして悟ること能はざりしを以て、復方便を作して此頓覺成佛の入心實相門を説き、亦十方三世一切の佛法を決了せんが爲の故に、一切經中或は諸蘊和合中我不可得と説き、或は諸法は縁に從つて生じ都て自性無しと説くは皆是れ漸次に實相門を開するなり。彼に諸法實相と言ふは即ち是れ此經、心の實相なり。心の實相とは即ち是れ菩提にして更に別の理無きなり。但薄福の衆生にして自ら作佛することを信する能はず、自ら作佛すと信する者も甚だ得難しと爲すが爲の故に、世尊、且諸の垢障

【芬陀利】—ブンダ  
リーカ(Fundarika)  
滿開せる白色の蓮  
華を云ふ。

を淨め其心を將護せしめ、要す、時義契合せしめ、然る後に爲に即心の印を説く。今の經は則ち是の如くならず。直に諸法に約して其心を識らしむ。所以に必要の藏と爲すなり。已上。今案するに、横統の言は該總せざる所無し、十方三世一切の修多羅は同じく三句に歸し本より自ら異轍無し。明かに知んぬ、一切經の後に在ることを。諸經は猶文のごとく此經は印の如し。三摩地の印を以て一切諸經を印して諸佛の秘藏と爲す。例へば聲聞の大法を決了するが如し。是れ諸經の王たり、故に一切の修多羅は皆悉く前と爲し、此經を後と爲す。又漸次開心實相門といふは即ち是れ法華一乘、四十餘年未だ眞實を顯さざるが故に、彼に言ふ諸法實相の句は則ち法華の方便品を指すなり。此を除くの外は唯一教も無し。小智は小法を樂び自ら作佛することを信せず、故に彼情を將護し、要す時義をして契合せしめ末後之を説く。所以に文に未だ曾て汝等の當に佛道を成ずることを得べしと説かず、未だ曾て説かざる所以は説時未だ至らざるが故なりき、今正しく是れ其時なれば決定して大乘を説く、乃至、如來の尊重にして智慧深遠なる久しく斯要を默して務めて速に説かずと云ふ。此は乃ち時機に契合し、機を待ちて方に説き、而も實相心は彼此同體にして更に別理無きなり。彼經は實相の蓮華を顯し此經は芬陀利の體を顯す。今此教の顯す所の常住の本地は即ち彼指す所の久遠の眞如なり。故に法華涅槃を以て爾前の教と爲す。八教を攝するの判は甚だ不可と爲すのみ。「涅槃」に云はく、「能く心性を觀するを名けて上定と爲す。」と文。私に謂はく、上定とは謂ゆる三摩地なり。故に今疏に一切如來定と云

【首楞嚴定】諸佛究竟の三昧に名く

ふは「大涅槃經」に明すが如し。一切の心有る者は悉く佛性有り、此佛性は即ち首楞嚴定と名け、亦金剛三昧と名け、亦般若波羅蜜と名く。佛佛道同じくして更に異路無し。若し行人、初發心の時、能く言ふが如く正しく心の佛性を觀すれば亦即ち名けて如來定と爲す。豈煩はしく漸く四處を超えて究竟に至らんや。文。私に榮するに、經に説く所の如來定とは即ち是れ涅槃上定なり。三平等の句を名けて上定と爲す。彼經に粗末顯を點じて之を説く、故に判じて前に置く。復龍猛の『菩提心論』に云はく、「惟眞言教中のみ即身成佛あり、故に是を三摩地門と説く、諸教中に於て闕きて書せず」と。文。三摩地速疾門と云ふは一切諸經には闕けて書せず。斯教に方に説くが故に諸教所歸の教と爲す。前後明白なり。若し是れ此釋にあらずんば則ち闕きての言は消通すべきこと難し。

【龍猛】舊譯に龍樹と云ひ、新譯に龍猛と云ふ。佛滅後七百年南天竺に出世せし大論師、顯密八宗の祖と稱せらる。

【菩提心論】一卷龍樹造、唐の真空譯、眞言宗十卷書の一。

【即身成佛】此肉身のままにして成佛するを言ふ。

【天台の止觀】天台大師著摩訶止觀十卷。

疏に云はく、「此諸尊は毘盧遮那經に眞言手印を載せず、即ち別して餘經を出すは當に彼經に依りて眞言手印を授與し、此經の供養次第法に依りて之を行ぜしむべきなり」と。文。今案するに此文は一切に冠戴す矣、八萬の法藏は總じて修證を勸進するの意に在り。諸修多羅に或は字門を説き、或は明印を説き往々にして一に非ず。而も諸尊の圖供養行の門に至つては一切皆悉く此經に朝宗す。前後の義は疑と爲すに足らず。天台の止觀に云はく、「智者法華經を行じ陀羅尼を發す」と。文。所以に智者大師所説の四教は還つて總持門を攝す、樂說辯才なるは是れ總持力なり。若し非と言はば深く師の宗に違ふ。内に祕密教を説し外に顯示教を説く。故に一切の果は此門に依つて證す、暗は彼旨に充つ、更に



【跋摩】 訶利跋摩の略、成實の論主なり。

間然する莫れ。若し異端を見、異門を極はば邁く跋摩に垂き退に佛意に違ひ成佛期無し、嗟悲しいかな、煩はしく文網を張るは寔に瞽夫と爲す。達者は一を得ば多説を俟つこと莫れ。佛教を學びて偏執を事とするは水を攪めて蘇を求め、樹を攀ちて金を覓むるがごとく、空しく功夫を費して終に得期無し矣。言を老宿に寄せて後學を誡訓し聊か愚管を抽し、敢て深妙を談ず。謂ゆる蠱を以て海を酌むは通人焉を擇ぶ。

大毘盧遮那經指歸 終



本書は闍城寺法明院の第五世敬光律師の著す所に於て、五大院安然の著教時間答を抄録し、以て我北嶺教判の妙旨たる四一十門の綱要を録せるものなり。

**【放光金剛】** 敬光律師。

**【一】** 文に入るに先立つて通じて敘す。

**【時澤の大師】** 教時間答の著者安然を指す。

**【俱密】** 大日金剛等の密經は事理俱密の秘密教なり。

**【圓極】** 圓乘最極の理。

**【四身】** 自性法身受用身、變化法身等流法身。

**【自性身】** 自體法然の故に自性を言ひ、無爲の作業を具する故に身、即ち法身と言ふなり。

**【遍法界處】** 一切處の意。法界とは一切諸法を指す。

# 北嶺教時要義

放光金剛錄す

俯して惟みるに我時澤の大師、四一、十門の宗教を建てて、俱密の旨歸を開示したまふに、圓極ならずといふこと無し。蓋し是れ大毘盧遮那如來の三時を越えたる一眞の目を以て、無中無邊の宮に住して、専ら一道の法を宣暢たまへるに由つてなり。凡そ衆生の機熟して大日は是れ理智不二の法身なり、又、を感ずれば、此佛乃ち一身にして、而も平等の時を以て、遍法界處に一道の法を説きたまふ。然るに其本來常住の佛は、是を一切佛果佛なり。となす。又其平等の時は、是を一切時是は五教の、と名く。其法界宮は、是を一切處時は五處なと稱す。其自心成佛の教は、是を一切教説教なり。と號す。此一切佛を即ち一佛となす。時も、處も、及び教も亦復かくの如し。其常住佛と謂ふは、是れ眞如法界の色心の平等智身を指すなり。佛。其無始終の時とは、是れ脩短一如なるに名くるなり。時。其法界宮とは、是れ遍一切處なるに由るなり。處。成佛の教とは、皆自心成佛の法なればなり。教。夫れ未だ悟達らずんば則ち若干の佛等ありと謂ふ。而も其殊異は唯物機に在り、何ぞ法體に關はらん。是故に已に悟りぬれば則ち差無きなり矣。然るに其機區區なれば則ち入門も亦多し、是を以て諸を末代に論ずるに、宗家同じからずして能入の教各自ら差別せり。

【五教】藏教、通教、別教、圓教、密教。

【法界宮】胎藏界。大日如來の宮殿。

【一】四一教判の第一、一切佛一佛の旨を明す。

【物體】衆生の機。【法體】有爲無爲諸法の體性。

【唯識】ビシユナ。【一ナ・マトラ】パーダ (Vishvanathartha) 眼識乃至阿頼耶識等の八識以外に法なきを言ふ。

【無相宗】三論宗は般若皆空を宗とする故に、之を無相宗と言ふ。

【圓家】圓宗、即ち天台宗を指す。

【實用】諸法實相の略、是れ諸法究極の眞理に名くる署名なり。

【摩訶衍論】釋摩訶衍論十卷、龍樹造。

【四種の言説】相言説、夢言説、妄執言説、無始言説。

所以に若し法相宗は一切萬法を皆唯識に攝め、此を以て門と爲し、眞如に了達す。若し無相宗は勝義を門となす。此兩宗は通教の二門なり。華嚴は法界を門となすに一別を餘と。圓家は實相を門となす。其れ此の如しと雖も、俱に皆眞如觀門の異稱なるのみ。若し藏教の行人は心理外に遊べば、貶して外道種の一となす。豈に種實の大乘と同じきことを得んや。若し今教の意は一切の俗如も皆眞如に攝め、此教を門と爲して還つて斯理に達す。然るに諸文に自心を觀ずといふは、是れ亦自心の眞如を觀するなり。是ゆゑに若し言説に就かば則ち眞言を以て門となす。摩訶衍論の中に、四種の言説も及ぶこと能はず、故に説きて言語道斷となすといふは、但離言の邊を示すのみ。問ふ、『行者諸法の中に於て隨つて一法を以て眞如門となさば、善惡染淨の名義區別なり。何を以てか此の如き諸法は、皆三密の身を成すと知ることを得んや』答ふ、『大日經』の中の胎藏の號は、すでに是れ凡聖迷悟の名義なり。況んや復その餘の『金頂』、『華嚴』及び『五佛頂經』等、其説多く善惡染淨及び邪正等に涉るをや。又理趣會の中の十七句義、『普賢儀軌』の中の大樂の十七菩薩、及び五秘密の五方の五尊の三密等の如きは、即ち是れ般若の『理趣分』に説く所の四十餘門の菩薩の句義なり。但し是れ同聽異聞、顯密の經を殊にするのみ。是れ豈染惡の名等を悉くその門とするに非ずや。況んやまた『法鼓經』の道品の眞言、『最勝王經』の因縁の眞言、『大日經』の中の六道、四聖、五乘、八部、五大、六根、四等、六度、及び其凡聖の因果の法門の如きも、一一皆三密の行相を説く。寧ろ大小兩乘の一切の法數、皆これ眞言三密の教門なるに匪

【胎藏】 理體煩惱の中に隠れて顯現せざるを言ふ。  
 【金頂】 金剛頂經眞言教三部經の一。華嚴經。大方廣佛華嚴經。  
 【五佛頂經】 一字佛頂輪王經六卷。  
 【理趣會】 金剛界九尊曼陀羅の一、十七尊あり。  
 【普賢儀軌】 普賢金剛薩埵略瑜伽念誦儀軌一卷。  
 【五秘密】 金剛薩埵(中央)、密金剛(東)、觸金剛(南)、愛金剛(西)、慢金剛(北)の五金剛菩薩を言ふ。  
 【般若の理趣分】 大般若波羅密多經卷第五百七十八、唐の玄奘譯、第十般若理趣分。  
 【顯密】 隨他意の教は顯教、隨自意の教は密教なり。  
 【法鼓經】 大法鼓經二卷。  
 【最勝王經】 金光明最勝王經十卷。

ざらんや。須かく知るべし、秘密の大日は他受用に住して以て其門を示し、顯示の釋迦は變化身に住して而もその門を設くることを。縦ひ此異りあるも、而も内證に入れば則ち一身に必ず四身を具す。顯教蓋し是則は密に屬するに由る、亦一家の定例なり。の三身各異にして分量差別するに同じからず。興唐の云はく、「常途に法性と説き、或は法界と云ひ、或は法身と云ふは、寂靜にして空の如く、動作する所なし。都て是の如きの力用を具足すと説かず。以て凡そ神變を起すは、皆是れ有爲の心三昧の力なりとなす。而して法體は是の如く、此れ其れ未了なりと言はず」と。茲に識んぬ、了義の密乘も圓、密の二教是れなり、即は眞俗不二、凡聖一如を明せば、則ち一切の諸法は皆佛の異稱なることを。「夫れ衆生の迷情、諸法の別を存すと雖も、今眞如を觀するときは則ち皆これ法界なり、若し三密を成ずれば則ち一多自在なり。謂く一法界に於て堅に十界の衆生あり、横に十如の世間あり。一の衆生に於て堅に百法の性相あり、横に萬法の名義あり。皆眞如のために一一門となる。亦眞如に入りて各各身となり、又内證の三密となる。諸佛已に法と智との如如を顯はしたまへり。是故に事に十界を具して皆法身を成ず。台藏の中に云はく、「佛果已に滿ずれば事に從つて而も説く、乃至凡夫は但是れ理具なり」と。又云はく、「一人人は初心に事理具足す」と。此義的しく此宗の意と同じ。既に諸法を以てみな眞如となす、則ち迷位の法をも尙猶これに名く。況んや果地の三身等をや。此眞如を以て名けて法身となす、故に諸經論に説くとせるの諸身も、今皆これを法身と名け、皆報身等と名け、皆自性及び受用等と名く。三身、四

【四等】慈、悲、喜、捨の四無量心なり。

【他受用】十地の菩薩の爲に現應して法身の内證を傳説するを言ふ。

【變化身】地前の菩薩及び二乘凡夫の爲に現ずる所の丈六の應身を言ふ。

【興唐】唐の一行阿闍梨を指す。

【有爲】因縁所生の事物。

【二】四一教判の中第二、一切時一の旨を説す。

【興善闍梨】大興善寺傳法阿闍梨の略。唐の一行又は元政を指す。

【四祖】慈覺大師

【四】四一教判の第三、一切處一處の旨を明す。

【薄伽梵】バガバ

ーン(Shawarān)經中多く世尊と譯す即ち佛の異名なり

【無相法身】如來の眞身には諸の雜染なく、色心等の

身は感に隨つて異なりと雖も、而も俱に唯一の大日尊なるのみ。

一時と言ふは、無始無終平等の時、十方三世諸佛の説時を以て皆この中に攝す、是故に一切時を指すに惟これ一時なり。此は是れ性海果分の義にして、實には言説と相應せず。然るに如來は内證の境に於て終日之を説きたまふ、故に名けて一時と爲す。問ふ、興善闍梨は但一切時と云つて一時とは云ひ玉はず、今何ぞ之に反するや。答ふ、四祖釋して云はく、「不思議三昧無始無終なるを是を一時となす。一刹那の中に無量劫を具するも、劫は只これ刹那なり、名けて一時となす。時分の脩短思議すべからず、是を一時となす」と上。經に云はく、「謂ゆる三時を越えたる如來の日、加持の故に、身語意平等句の法門なり」と。

興唐の云はく、「此間の時分の如きは則も過、未、現あり、長短の劫量種種同じからず。乃至、淨眼を以て之を観るに、三際の相了に不可得なり。始めなく終りなく、亦去來無し。即ち此實相の日は圓明常住にして、湛として虚空の若く、時分の脩短の異なりあること無し。然るに神力を以ての故に、延促をして自在ならしめ、衆の機に感通す。無量の相不可得なり、故に如來の日と云ふと。」文理茲の如し、何すれぞ之を難ぜん。豈一切時即ち一時なるに非ざらんや。」

一處と言ふは、此れに二種あり。先に佛身を以て佛の住處とすることを明さば、經に云はく、「薄伽梵、如來加持に住したまふ」と。興唐の曰はく、「薄伽梵とは即ち毘盧遮那の本

地法身なり。次に如來といふは、是れ佛の加持身なり。その所住の處を佛受用身と名く、

差別の相用なきが故に斯く名く。

【三種世間】五陰世間、衆生世間、國土世間。

【四乘身】聲聞身、緣覺身、菩薩身、佛身。

【四曼】大、三、法、羯の四種の曼荼羅。

【阿迦尼吒天宮】色界十八天の最上天にして形體を有する天處の究竟たる阿迦尼吒天中の宮殿を言ふ。

【瑜祇】金剛峯樓閣一切瑜伽瑜祇經一卷。

即ち此身を以て佛加持の住處となす。如來の心王は諸佛の住の如くにして而も其中に住す、即ち遍一切處の加持力より生ず、即ち無相法身と無二無別なり。而るに自在神力を以て、一切衆生をして身密の色を見、語密の聲を聞き、意密の法を悟らしむること、其根性の分に隨つて種種不同なり、即ちこの所作を加持處と名く」と上。此無相法身は、更に他受變化等の身に住するときも亦異なり有ること無し。是ゆゑに説きて四種法身と云ふ。問ふ、「四身を以て住處となす。三種の世間は其住處に非ずとせん歟。」答ふ、「華嚴の第八地に一切佛の現身觀を説く。此地の菩薩は十種の身を現す、謂く衆生身に於て己身、國土身、業報身、四乘身、智身、法身、虛空身を作す。次に國土身を頭と作すもまた然り、乃至は虛空身を頭と作すも亦然り。乃ち百身を成ず。宗匠相承して以て十身盧舍那佛となす。此中、衆生、國土、業報は即ち三世間なり。然して業報は自ら六趣の身を具す、四乘身に足して自ら十界を成ず。今の大口尊もまた此十身の中に住す、是故に一切處に遍じて住處にあらざる

こと無し。」又復應に知るべし、今の意は、諸法は四曼に非ざることを無しといふことを。此四曼の身は即ち大日の住處なり、是を以て實業の九界の有情の陰、界、入等も皆これ其處なり、故に遍一切處を其住處となすと云ふなり。次に、別して依報を以て佛の住處とすることを明さば、經の次の文に、如來の信解遊戲神變より生ずる大樓閣寶王は、高うして中邊なく、諸の大寶王をもつて種種間飾す等と云ふ。『金剛頂』には、一切如來の遊戲處は阿迦尼吒天宮の中に住したまふといふ。『瑜祇』には、本有金剛界自在大三昧耶、乃至光明心

【第四禪】 此天には只意識のみあり唯捨受あつて相應するのみ。

【自受用】 理智相應して自受法樂に住するの身。

【三有の色界頂】

三有とは三界の生死、色界とは欲界の上に在て姪食の二欲を離れたる有情の住所。是に四禪天あり。

【義釋】 大日經義釋十四卷。

【摩醯首羅天宮】

色界の頂上に位する大自在天たる摩醯首羅天の宮殿。

【大道場經】 金剛頂大道場經。

【須彌頂金剛手】 須彌頂は須彌山頂金剛手は普賢菩薩と同體異名にして眞言宗八祖中の第二祖。

【密嚴經】 大乘密嚴經三卷。

【稱讚大乘】 稱讚大乘功德經一卷。

【大般若經】 大般若經。

【華嚴經】 華嚴經。

殿の中に於てすと云ふは是れなり。然して是れ皆遍法界の住處となす。問ふ、「阿迦尼吒天は是れ第四禪に在り、何ぞ此處を以て遍法界宮となすや。答ふ、「是に亦二義あり。初に自受用の宮を明すときは、四祖の云はく、「阿迦尼吒天といふは是れ世間所説の三有の色界頂の天ならず、是れすなはち大毘盧遮那の心中本有の大菩提心光明心殿なり」と。是れ即ち其義なり。二には他受用の宮を明さば、義釋に云はく、「此宮は是れ古佛の菩提を成じたまふ處なり、いはゆる摩醯首羅天宮なり」と。蓋し宗の意は、是れ即ち自在加持神心の所宅なるを以ての故に、如來の應ある處に隨つてこの宮に非ざることなし。獨り三界の表に在るのみならずらんや。」是を以て「金頂」の十八會は各別處にあり。「大道場經」もまた欲、色二界の多處にあり。「蘇悉蘇摩」等は須彌頂金剛手の住處に於て説きたまふと雖も、是等は隨つて何處に在りても皆悉く自在天宮に非ざることなし。然るに隨方を以て法界の體を顯し、毎に異名を立つ。例せば今の經には法界宮といひ、「金頂」には尼吒天といふも、但此一の法界宮なるか如し。四祖の曰はく、「須彌盧とは是れ世間所知の須彌にあらず、即ちこれ毘盧遮那の座としたまふところの名を堅勝法界座となす。是佛の座處は猶彼山のごとし、故に須彌盧頂といふ」と。是故に訣にいはいはく、「今人共に號して須彌座となすは、此に従つて名を立つ。是れ須彌盧山四寶所成のものに非ず。此妙高巖は猶彼山の如し、故に以て之を喩ふ」と。問ふ、「密嚴經」は其土に在て説き、「稱讚大乘」は法界藏に在り、「華嚴」は華藏界及び十天處に在り、「大般若經」は四處に歷て説き、「維摩」は菴羅苑の説なり。か



若波羅密多經六百卷。

【維摩】維摩詰所說經三卷。

【菴羅苑】菴羅樹女の戲せし菴羅樹園にして印度の毗耶離國にあり。

【五】四一教判の第四、一切教一教の旨を明す。

【文殊師利】釋迦佛の左に侍して智慧を司る文殊菩薩のこと。

【開權顯實】三乘各別の權教を開して一乘の妙教を顯す。

【如來應供正遍知】何れも佛十號中の一。

【五通智道】五神通智の道。

【薩婆若】サルバジユナー（*Sarvajñā*）一切智と譯す。

【阿字門】一切諸法の根本にして、本來不生本有なる阿字を觀する眞言門を言ふ。

【四重境】四重圓

くの如き顯教法に於て二名を立つるのみ、部は顯にして理は密なり。教に名くること解すべし。の說處もまた、遍一切處の法界宮の中に攝するや不や。答ふ、「是れ尙三世十方の一切の說處を攝す、況んや復一代をや。尙小乘をも攝す、何にいはんや大乘をや。四身悉く法身と稱するときは、則ち其住處も亦皆法界宮と名く。是れ一切處を一處となすなり。

一教といふは、遍一切乘自心成佛の教を一切教と名く、即ち此教を以て名けて一教となす。興唐の云はく、「文殊師利、白毫所照の萬八千土の諸の菩薩の、種種の因緣皆これ菩薩の道なるを行するを觀見て、即ち佛將に開權顯實して「法華經」を説かんと欲すと知るが如し。當に知るべし、金剛手等も亦復かくの如し、普く加持世界に唯平等の法門を説きたまふを見て、即ち如來將に遍一切乘自心成佛の教を演べんとするを知る」と上。經にいはく、

『如來應供正遍知は一切智智を得。彼一切智智を得て、無量の衆生のために廣演分布して、種種の趣と、種種の欲性とに隨つて、種種の方便道を以て一切智智を宣説たまふ。或は聲聞乘道、或は大乘道、或は五通智道、或は願つて天に生じ、或は人中及び龍、夜叉、乾達婆に生じ、乃至摩睺羅伽に生ずる法を説きたまふ。而も此一切智智の道は一味なり。謂ゆる

如來の解脫味なり』と。興唐の云はく、「毘盧遮那如來は能く遍一切處眞金の智體を以て種種の乘を造り、薩婆若平等の心地に於て、佛、菩薩、乃至二乘、八部等の四重圓境を畫作す。この一一の本尊の身心印は、皆これ一種の差別乘なり。是の如く或は佛身を現じて種種の乘を説き、乃至非人の身を現じて種種の乘を説くも、隨類の形聲、悉くこれ眞言密印

壇の略、一に中胎  
二に遍智院等、三  
に文殊院等、四に  
釋迦院并に二乘八  
部等なり。

【三句】菩提心爲  
因、大悲爲根、方  
便爲究竟。是れ大  
日經の三句なり。

【實相門】實相と  
は一切萬有の眞實  
の體相を言ふ。  
【諸蘊和合】蘊と  
は世間一切の有爲  
法を生ぜしめる本  
質的諸要素を指す

なり。或は久、或は近、毒鼓の因縁に非ざることなし。故に經に、皆同じく一味なり、謂ゆる解脫味なりといふ。然る所以は、一切衆生の色心の實相は、本際より以來これ毘盧遮那の平等智身たり。是れ菩提を得るとき、強ひて諸法を空じて、便ち法界を成ずるに非ず。還つて平等の心地より無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發し已つて、還つて用ひて衆生平等の心地無盡莊嚴藏大曼荼羅を開發す。妙感妙應、皆阿字門を出でず。當に知るべし、感應の因縁、所生の方便も亦復阿字門を出でざることを。譬へば大海の中、波濤相激して迭に能所となり、然もまた皆同じく一味にして、謂ゆる鹹味なるが如しと。「ゆゑに一教と稱ふなり。問ふ、「如來平等の心地を開し、四重壇を發きて、機に隨つて生を度す。便ち是れ經の三句に約せば方便爲究竟の句にして、十方三世諸佛の正覺を成じ已りて五乘の教を説き、以て衆生を度することを攝す。若し餘の二句の中には亦何等の教門を攝するや。」答ふ、「興唐の云はく、「世尊は前に已に廣く淨菩提心如實相を説きたまふも、衆生未だ意を得て懸に悟ること能はざるを以て、復方便を作して心の實相門に入る。亦十方三世一切の佛法を決つせんがための故なり。一切經の中、或は諸蘊和合、我不可得と説き、或は諸法は緣より生ず、都て自性なしと説くが如き、皆これ漸次に實相門を開するなり。彼に諸法實相といふは、即ち是れ此經の心の實相なり。心の實相とは即ち是れ菩提なり、更に別理なし。但薄福の衆生は、自ら作佛すと信すること最も甚難とするがために、且く諸垢を淨めて其心を將護し、要す時義をして契合せしめ、然る後方に即心の印を説く。今の經は則ち是の如くなら

【小乘三藏】小乘の教に依る一類の人の三藏の人と言ふ  
 【三性】遍計所執性、依他起性、圓成實性。  
 【三無性】性無性、相無性、勝義無性。三性、三無性は何れも法相宗に於ける諸法説明の根本要義なり。  
 【一乘】エーカヤーナ (Ekayana)、一切衆生を悉く運載して一佛果に至らしむる法門。  
 【六無畏】善、身無我、法、法無我一切法自性平等の六種の無畏。  
 【頓漸秘密、不定】化儀の四教。

す、直に諸法に約して其心を識らしむ、所以に祕密藏となすなり」上。蓋し是れ十方三世諸佛の法華等の開權顯實の教を説くは、以て今宗の菩提心爲因の句に攝するなり。また摩訶般若に明すところの六度、十八空、三昧、道品、總持門等の如きは、皆大悲の句の中に入る。又彼等の成果の利他を以ては、今の究竟の句に攝するなり。故にこの三句の中に、悉く一切諸佛の顯密の二教を攝す。又いはく、「此經の宗は横に一切佛敎を統ぶ。唯蘊無我出世間心住於蘊中句。と説くが如きは、即ち諸部の中の小乘三藏を攝す。觀蘊阿頼耶覺自心本不生句。と説くが如きは、即ち華嚴、般若種種不思議の境界を攝す。如實知自心名一切種智句。と説くが如きは、即ち佛性、一乘、如來祕藏皆その中に入る。種種の聖敎の言に於て、其精要を統べざることをなし、爾前理密の圓教を攝し、第四句に於ては第五時の理密、俱密の兩大圓教を攝すべし。則ち法華八敎の攝不の相、及び五教淺深の別、自ら此四句に攝在す。覃く之を思ふべし。若し能く是心印を持ちて廣く一切の法門を開かば、三乘に通達すと名くるなり」上。此中前の三句に於て六無畏、十地を論じ、第四句に於て正しく佛地を論ず。應に識るべし、因等の三句は他もまた之を言ふといへども、如今の四句は一家特に専らにすることを。他は今の句を分ちて五種の任心を引證すれば、則ち名けて四句となす無し。其餘の三妄の分別、地位の料簡等も、他と同じからざること亦二三ならず。須く精しく辨察すべし。今内證に約して四一に宗を判す、若し外化に約せば則ち須く方に九敎を立つべし、即ち頓、漸、祕密、不定、藏、通、別、圓、眞言なり。化儀、化法

【藏、通、別、圓】  
化法の四教

【二六】十門判教の  
名目を擧げ、次で  
其第一説の旨を説  
す。

【十門】十門判教  
は佛一代の教相を  
釋したる綱目なり

【六大曼荼】六大  
とは萬有生成の元  
質たる地、水、火、

風、空、識の六を  
言ひ、是を曼荼羅  
に配當せしものは  
即ち六大曼荼なり  
【大品】大品般若  
經二十七卷。

【阿縛羅訶法阿】  
六大を梵語の字母  
に配したるもの。

【阿尼羅吽欠】(ア  
ニロハニキヤム)

胎藏界大日如來の  
眞言なり。空海は  
之を地、水、火、  
風、空の五大に配  
當せり。

は大旨常に同じ。綱樞斯の如し、綱目は更に尋ねよ。

次に教を判ぜば大いに十門を分つ、謂く説、語、教、時、藏、分、部、法、制、附なり。  
第一に説とは、心色語事の、法義を詮表するを皆説法と名く。是故に諸佛は四曼の身を

以て、一一に説法したまふ。其六大曼荼の身は、日く二種に分つ。初に六大自ら法義を現  
することを明さば、謂く其地輪界は菩提心を現じ、水は其行を現じ、火は其智を現じ、風

は涅槃斷を現じ、空は大方便を現じ、識界無礙は法界の體を現す。各その形を見る者を  
して、隨つて其義を悟らしむ、是を説法と名く。故に一大品にいはく、三六界清淨なるが

故に一切智清淨なり等と相。又此六合して率都婆を成ずるときは毘盧遮那法身を現  
じ、行者をして一の塔形を見て、一法界を悟らしむるも亦説法と名く相。俱に内證に約

して明すなり。或は佛土あり、天衣身に觸るれば即ち悟りて道を得。此は是れ地體自ら  
法義を現するなり。或は佛土あり、寂滅無言にして心を觀じて道を得。此は是れ識大自

ら法義を現するなり。且く初後を擧ぐ、中間は例して知るべし。此の如く六大は、若し自  
にも、若し共に一一皆然り。是れ外化に約して明すなり。次に言説を具することを明さ

ば、地、水、火、風、空、識は、次の如く阿縛羅訶法阿を用ひて以て其聲となす。是故に六聲を  
聞かば、則ち自ら隨つて六義を悟る。又經の意に依るに、如來の遍法界の身は四に分つ

て四種の阿字を流出す、是れ識より聲を出して以て四義を示すなり相。又此六を合して  
一の明を成ず、また五字旋陀羅尼と名く。謂く阿尼羅吽欠これなり。または大悲胎藏八字

【無漏界】有漏界に對す。漏とは煩惱の意にして煩惱なき世界を無漏界と言ふ。  
 【三摩耶身】密教にては佛の本誓に基きて顯現せられたる身を言ふ。即ち諸尊が各器杖刀蓮等を持するは皆其本誓を標示せるなり。  
 【五股金剛】金剛杵の五股より成るもの。  
 【五智】法界體性智、大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智。  
 【三形】佛菩薩の本誓を標示する器杖等の形相を言ふ。  
 【達磨曼茶身】法曼茶羅身、四曼の一。

の眞言と名く、謂く更に吽紀哩合。惡の三字を加ふるなり。亦是阿婆訶縛羅訶法とも名く。是れ皆一の眞言を聞く者をして、一法界を悟らしむ相。是れ内證に約するなり。若し極樂の樹林、法を説き、頂王の舍利、法を説くは、豈五大所成にあらざらんや。又佛無漏界に出れば三種の意生身となりて法を説く、豈識大の所説にあらざらんや。是れ外化に約す。茲の如き六大は自共俱に然り、其三摩耶身もまた二とす。初に自の法義を現ずることを明さば、謂く五股金剛は五智の相を現し、上下の十掌は十地及び十眞如、十法界等を示現す。又三十七尊及び四重の諸尊の三形もまた各其義を現す。是故に行者此を見て之を悟る内。或は佛土あり、佛の光明を見て得道す、是れ金剛光の三昧耶身の力用なり。又娑婆の如きは聲佛事を作す、是れ金剛舌の三昧耶身の力用なり外。凡そ是の如き等、一切准じて知るべし。二に自に法音を出すとは、凡そ三形は情、非情に通ず。然るに刀劍輪等を是を有情となすは智印なるを以ての故なり。既に有情と名く、寧ぞ言説なからんや内。或は蘇摩胡經に説くらく、「鉢斯那を刀劍等に下せば能く未然の事を説く等」と外。義意解すべし。其達磨曼茶身もまた二とす。初に自に法義を現するを明さば、經にいはいはく、「此空中流散假立阿字の加持する所を觀て三味道を成就す。是の如き阿字は、種種の莊嚴に住して圖位を布列す。一切法不生を以ての故に自の形を顯示し、或は諸法は造作を遠離するが故には迦宇の形を現し、或は諸法離因の故には訶宇の形を現するは即ち是義なり」と。又兩部の種字曼荼の如きも、一一悉く法義を現す。供養法の疏にいはいはく、「阿字自ら阿字を



【八】十門判教の  
第三、教の旨を詮  
す。  
【台山の列祖】支  
那天台の諸祖。

全く顯教に異なるときは、則ち是を隨自他意語と名く。然るに興唐の大師は是を隨他とす  
るは、専ら今教に於て直に自他を判すればなり。問ふ、一若し隨他意語は今教に非ずんば、  
何が故ぞ前に皆是れ密教なりといへるや。答ふ、「佛に従へば則ち密教なり」と雖も、機に隨  
へば則ち自ら顯となす。前は佛の邊に従ふが故に、皆判じて一教となす。何を以ての故  
に、凡そ佛の口を開きたまふときは則ち阿字に非ざることなく、諸有る字句は迦等に非ざ  
ることなし。此阿字等は皆これ大日如來法身の言音にして、悉く秘密なるが故に。又今  
の一字には無量の義を具すと雖も、而も機を逐うて一義を語するを且く顯教と名く。顯教  
の一言もまた多義を具すれども、而も機未だ悟らざれば則ち隨他意語となす。」  
三に教とは、謂く藏、通別、圓、密なり。是を北嶺の五教となす。三密の一教は台山の列  
祖も未だ曾て傳へざる所にして、獨り本邦の初祖にあり、實はざるべからず。若し龍樹に  
依れば則ち今の五教に於て、初の三を顯示教となし、後の二を秘密教となす。顯密を判す  
るが如く權實もまた然り。須く知るべし、東西二域の立教は、祇これ離合の不同なるこ  
とを。教は顯密を出でずと雖も、更に細しく此を分つときは、則ち牛、滿、單、複の差別あり。  
是を以て其顯の三教の、初の一を小乘となし、後の二を俱に大乘と名く。又これ同じく大  
乘なりと雖も、共と獨と同じからず。又其密の二教の初を唯理秘密單。と名け、後を事理  
俱密複。と稱す。應に知るべし、北嶺は牛、滿の兩教、單、複の二密を以て一代を盡すこと  
を。五教五時、其義知るべし。故に後の二教を、若し密と稱するときは則ち俱に密なれど

【梵網律宗】傳教大師の宗戒を中心として見たる場合の天台宗。  
 【具戒】具足戒の略、即ち比丘の二百五十戒、比丘尼の五百戒を言ふ。

【九】十門判教の第四、時の旨を明す。  
 【五時】華嚴時、鹿苑時、方等時、般若時、法華涅槃時之れ釋尊一代の教説を時間的に分類せしものなり。

も單復を以て分ち、若し圓と稱するときは則ち俱に圓なれども淺深同じからず。然るに法華もまた深祕の軌あり、大日もまた淺略の説あり。但前の三の定んで惟顯に屬するには異なり、其淺略の言も前に望むれば則ち還つて深祕となる。別教をも尙深法と稱す、況んや今の二密をや。故に興唐の云はく、「深祕の中に於てまた淺深ありとは即ち其義なり」と、須らく其意を得て譚すべし、義容易なり難し。又梵網律宗は、初の二は小律を以て具戒と定め、後の三は大律を以て具戒を判す。二種の具戒以て三類を攝し、而して三部と獨の戒經に依りて以て三寺の別あることを斷す。是を三種の律藏に、五教の三類を分つとなす。若し深く此義を察せば、則ち一家の章疏思ひ且半に過ぎん。他は十心を立てて以て諸教の淺深を論するも、五失違するの失、四には善提心論に違するの失、五には業師の説に違するの失、の灼なれば今取らず。

四に時とは、即ちこれ五時なり、全く常に當るが如し。但し前の四時を顯示の部となし、第五時に於てまた顯密を判す。更に三分を別つて初、中は以て顯の部とし、最後を以て密の部となす。此二部を指して同じく大圓教と名く、是を其異なりとなす。然して新宗の意は、其五時の設けは全く惟舊來の聖教を判じ盡すのみならず、而もまた豫め妙に新傳五部の曼荼の深旨を點ずることをなす。願ふに自解佛乘とは、究めて其實を尅するに、此義に非ざることなきを得んや。是を以て東方の發心を示すを華嚴部となし、南方の行を示すを方等部となし、西方の智を示すを般若部となし、北方の滅を示すを阿含の部となし、中央



【止觀の五略】發  
大心、修大行、感  
大果、裂大網、歸  
大處の五、之れ摩  
訶止觀に説く所な  
り。

【三諦】空諦、假  
諦、中道諦。

【三惑】見思、塵  
沙、無明の三惑。

【四土】凡聖同居  
土、方便有餘土、  
實報無障礙土、常  
寂光土。

【變化】變化法身  
の略、地前の菩薩  
及び二乘凡夫の爲  
に現ずる所の丈六  
の應身なり。

【等流】等流法身  
の略、九界隨類の  
身にして佛身にあ  
らず、或は佛形あ  
るも無にして忽ち  
有り、暫現速隱の  
佛を言ふ。

【十門判教の  
第五、藏の旨を詮  
明す。

【金剛界藏】大日  
如來の智徳を開示

の徳を示すを醍醐味の部となす。是に知んぬ、一家の所傳は二種の大圓俱に此毘盧遮那の位に攝すること、並に經王と稱すること、良に所以あることを。五時の如くなれば、止觀の五略もまた然り。五略は次の如く、是れ東西南北中央の五轉の相を互ぶるなり。自餘の、或は三部は是を三諦と説き、三妄は是を三惑と名け、四重圓壇は是を四土と稱する等、謂ゆる内に秘密の教を證するに非ざるよりは、焉ぞ能く茲に至らんや。故に四一の妙宗を立てて、十方一切の佛、時、處、教を統收す。其一切とは、蓋し五部を出でざるなり。問ふ、此は是れ自姓、自受の二土の中の一時一切時等なりとせんや、將他受、變化、等流の三土の中の時等なりとせんや。答ふ、四身の土の中には各四身ありて、互に一時一切時等あり、今みな總じて之に名く。土既に是の如くなれば、身も亦復然り。若し其説に就かば、則ち隨他意の法は今の變化、等流二土の中の一時一切時等に攝し、若し隨自他意の法は今の他受用土の中の時等に攝し、若し隨自意の法は今の自性、自受二土の中の時等に攝す。

五に藏とは、今の俱密の教は或は一藏と謂ふべし、謂く眞言藏なり。或は二藏といふべし、一には金剛界藏、二には大悲胎藏なり。是れ一の眞言藏なりと雖も、而も行法儀軌の別なるに就くが故なり。或は三藏といふべし、蘇悉地を加へ、十八道をもつて紀綱となす。前の兩界と少しく差別あるが故なり。或は四藏といふべし、瑜祇藏を加ふ。是れ兩部大法の肝心にして、兩界の阿闍梨位行法を説くを以ての故なり。或は五藏といふべし、更に雜藏を加ふ、謂く『陀羅尼集經』なり。是れ『金剛頂大道場經』より出づ、大明咒藏の少分な

【大悲胎藏】 大日

如來大悲を以て無盡の諸尊を出生して普門の化用を垂るるを言ふ。又衆生本具の菩提心の理性を指す。

【十八道】 眞言修法の初門にして胎金兩部に通ず。

【阿闍梨】 アーチヤールヤ (Acharya) 佛道行者の軌則師範となるべき高僧の敬稱。

【陀羅尼集經】 十二卷、唐の阿地瞿多譯、唐の阿地瞿天の印呪を説く。

【二】 十門列教の第六、分の旨を明す。

【金疏】 金剛頂經疏七卷、慈覺大師撰。

【修多羅】 スートラ (Sutra) 義譯して經と翻す。

【優婆提舍】 ウパデーシヤ (Upadesha) 論と翻す、十二部經の一なり。

るが故に金剛界に攝すべし。然るに其經の中に十八道を明せば、則ち亦諸を蘇悉地に屬すべし。今は行法、兩界に相渉るを以て分ちて一藏となす。又廣く一代に約すれば、則ち四種の三藏あり。一には小乘の三藏す所の如し。二には大乘の三藏、深密、楞伽、維摩等の經部律藏、百法唯識、攝大乘等の論藏なり。退いて小乘に非ず、進んで三には理密の三藏及び無量義等の經藏、梵網、瓔珞及び文殊問、普賢觀等の律藏、中觀智度等の論藏是れなり。四には俱密の三藏等の律藏、菩提心、釋摩訶衍等の論藏是れなり。又大小相對の三藏、權實相對の三藏あり。是を以て大小對論するときは、則ち三藏の名は専ら小乘にあり。智者はこれに依りて、小乘を名けて三藏となせり。若し權實對論するときは、則ち獨り圓實の中にあり。其小の三藏は俱に未だ實を盡さず、其一乘の中は特に極理を詮す。一家はこれに依りて以て圓頓の三學を立つ、その旨知んぬべし。

二に分とは分は謂く分類なり。『金疏』には、今この經を以て十二分に收むこと。具には彼釋の如し。准じて識る、一切の密經もまた十二分なることを。一には修多羅、乃至、十二には優婆提舍なり。蓋し密部に依りて其義を明すを以て、常と異なるのみ。

七に部とは、大見胎藏の如きは是に三部を分つ。凡そ三說あり、一には中胎及び上方の一切如來智印、佛眼佛母、眞陀摩尼、下方の不動尊、勝三世等を如來部となし、法身の德に配す。勝方の觀世音等、及び諸の眷屬を蓮華部と名け、解脫の德に配す。右方の執金剛手等、及び諸の眷屬を金剛部となし、般若の德に配す。佛は三德祕密藏を以て自ら住し、諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

諸の衆生を度して亦この中に住せしむ。此中とは即ち是れ九曼荼羅の極果なり。二には

【二】十門判教の第七、部の旨を明す。

【佛眼佛母】佛眼尊は釋迦の佛母なり。

【眞陀摩尼】チンターマニ(Chintamani)如意珠と翻す。

【三德秘藏】法身、般若、解脱の三德は不縱不横にして大涅槃の秘藏なり。

【撰醜經】三卷、傳教、弘法、慈覺三師の將來せるところの經なり。

【正法教令の二輪】本地の佛體を自性輪身と言ふに對して菩薩の身を現ずるを正法輪身と言ひ、明王忿怒の相を現ずるを教令輪身と言ふ。

北嶺教時要義

毘盧遮那は是れ佛部、阿彌陀佛は是れ蓮華部、即ち觀世音、釋迦牟尼は是れ金剛部、即ち金剛手、總説の相なり。三に諸の傳法は、細に四重を分つて以て三部となす。謂く中胎を佛部となし、勝方の觀世音と第二重の勝方の地藏と、初方の文珠と、右方の除蓋障と、華方の虚空藏、並に諸の眷屬を蓮華部となす。第一重の右方の金剛手と、華方の不動等、第三重の初方の釋迦並に諸の眷屬、及び第三院の世天を皆金剛部となす。此一は是れ別重圓壇は須らくその義を明にし、亦その尊位を詳にすべし。然るに是れ略説なり、若し處中の説は十三院あり、若し廣説なれば則ち二十八部あり、終に五百及び無量を成す。四部といふは此に摩怛理迦部を加ふ、『撰醜經』の如し。又五部とは般支迦を加ふ、『蘇摩胡』の如し。若し金界の五部は、一に如來部、是れ即ち中胎の大日、及び金、寶、法、業なり。二に金剛部、是れ即ち東方の阿閼、及び薩、王、愛、喜なり。三には摩尼部、是れ即ち南方の寶性、及び寶、光、幢、笑なり。四には蓮華部、是れ即ち西方の彌陀、及び法、利、因、語なり。五には羯摩部、是れ即ち北方の不空成就、及び業、護、牙、拳なり。内の四の嬉、臺、歌、舞、外の四の香、華、燈、塗、四攝の鈎、索、鎖、鈴も一に次第の如く四方四部なり。已上合して三十七尊となす。又五部の如來は、各二輪の身を現することあり。中央の尊は轉法輪、並に不動明王身を現じ、東方の佛は普賢及び降三世の身を現じ、南方の佛は虚空藏並に軍荼利の身を現じ、西方の佛は文珠及び大威徳の身を現じ、北方の佛は虚空庫と金剛夜叉との身を現す。是を其次の如く正法教令の二輪となす、此身は猶文武の兩官の如く、是より悲智の兩用、此

【三】十門判教の第八、法の旨を明す。

【佛、蓮、金】佛部、蓮華部、金剛部。

【扇底迦】シヤールチカ(Santika)、四種悉地の一、息災法と譯す。

【補瑟微迦】五種護摩法中の鈎召法の梵名。

【阿毗遮瞻迦】アピチャールカ(Apicharaka)四種護摩の一、降伏法と譯す。

【四】十門判教の第九、勸の旨を明す。

【毘尼】ピナヤ(Nivaya)律藏の梵名なり。

【五】十門判教の第十、開の旨を諭す。

析攝二身を現す。是れまた胎曼の五佛に通ず。廣、略、處中は前に準じて説くべし。

八に法とは、胎藏に三種の法あり、其佛、蓮金は、次の如く扇底迦、補瑟微迦、阿毗遮瞻迦の法に當る。又三品の成就あり、亦其次の如く上、中、下の法に當る。此三また各三品あり、合して九品の成就法を明せり。また四種の壇法あり、方、圓、三角、半月なり。四壇は次の如く是を寂災、増益、降伏、攝招の所用となす。『義釋』中の如し。『金頂』にもまた四法あり、但し攝招を改めて名けて敬愛となす。又五法あり、離して鈎召義同じ。を加ふ。

又六種の壇法ありて上と稍異なる、圓、方、三角、金、蓮、甲冑なり、即ちその次の如く息、増、降、鈎、敬、延の法に用ふ。この中各、尊及び印、言、色、並に形類、相應の法物、所現の日時、月分等あり。敢て顯に説き回し、須らく精しく研すべし。

九に制とは、例せば聲聞の毘尼は、若し羯磨を行するに人をして聞かしめず、若し受戒せる者には其後聽くことを許すが如し。此教法は是れ一切佛の祕密の毘尼なり、人をして輒く聞かしむべからず。若し深解なくして此旨を聽かば、周く解すること能はずして匱法の罪を致すに違ばん。是故に若し論議の場合にも、若し説法の處にも、三昧耶なき人の前には妄りに宣傳することを許さず。

十に聞とは、若し人先より菩提心を發し、曾て法利を觀するは、師に隨ひ法を請うて但須らく求學すべし。他の學縁を見て迫逐することを待たざれ。若し未だ菩提心を發さずと雖も、大根性ありて法器とするに堪へたるは、師須らく往きて攝し、勸めて受學せしむべ

【灌頂】 アビセー  
 チャニー (Abhishe  
 can) 天竺の國王  
 卽位の時に四大海  
 の水を以て頂に灌  
 ぎ視意を表す。密  
 教は此世法に従ひ  
 其人加行成就して  
 阿闍梨の位を嗣ぐ  
 時境を行きて灌頂  
 の式を行ふ。  
 【一六】 結文。  
 【大本】 教時間答  
 安然撰。

【五部の大疏】 大  
 日經義釋十四卷、  
 金剛頂經疏七卷、  
 蘇悉地經疏七卷、  
 菩提場一字經疏五  
 卷、瑜祇經疏一卷

し。若し結縁の者、乃至は一毫の善をも方に開發すべきものには、爲に結縁の灌頂を作  
 し、又廣大救攝の心を發して、皆其をして自心成佛の旨を聞かしめよ。十門已竟んぬ。  
 謹んで北嶺の宗教を按じて、抄録すること敷の如し。若し廣く曉めんとなせば、請ふ  
 『大本』を看よ。具に諸宗の分齊を示し、備に一家の攝屬を判すること猶赫日の如し。及び  
 『胎金義抄』五卷きて十卷となすに、詳に兩部の行相を明し、密に五教の義旨を聞けり。若  
 し善く此を了せば、則ち當に五部の大疏、諸部の經軌をも亦漸く歩を進むべし。二死の洪  
 海を越え、密嚴の岸に到らんことを求むる者は、此を棄てて執れにか適從せんや。

北嶺教時要義 畢



【傳教大師全集新  
版卷一、二五四頁  
上顯戒論表一首は  
傳教大師、弘仁十  
一年二月二十九日  
に上の所に於て、  
南都戒に對して特  
に圓頓大戒の必要  
なる所以を説いて  
上奏せるものなり  
【僧光定】 延曆寺  
の光定。

【僧綱】 僧正、僧  
都、律師の三官。今  
は南都の僧綱を指  
す。

【八不】 不生、不  
滅、不去、不來、不  
一、不異、不斷  
不常の八。

【東印の馬鳴】 馬  
鳴菩薩。佛滅後六  
百年東印度に出生  
し大乘起信論、佛  
所行讚等著名の作  
あり。

【護法】 佛滅後一  
千年、南印度に出  
世し、世親の唯識  
論三十頌の解釋を  
造る。  
【青辯】 佛滅後千  
百年の頃印度に出

# 上顯戒論表

沙門最澄言す、去年十月廿七日、僧光定に附して、僧綱の上る所の表對等の文を、  
最澄に給示したまふ。天雨流れ洽くして枯木更に榮ふ。捧戴して慙愧し、悚踴地無し。最  
澄、誠皇誠恐、以て懼れ以て忻ぶ。最澄聞く、南天の龍樹は八不を織りて邪を破し、東  
印の馬鳴は一心を立てて道を開く。護法は頌を釋して惡取空を斷じ、青辯は論を造りて有  
所得を遮す。天親は論を製して五の過失を洗ひ、堅慧は論を作りて一究竟を顯す。大乘論  
は則ち無著の顯揚、小乘論は則ち衆賢の顯宗なり。邪を破し正を顯すこと、車に載するに  
勝へず。是を以て唐朝の法珠は傳奕を破邪に制し、秦代の僧肇は般若を無知に示す。寶臺  
の上座は佛性論を作り、緇州の慧沼は慧日論を造る。是の如き等の類歴代繁興す。伏して  
惟れば陛下、天を承け祚を踐み、聖政惟れ新に、正法國を理め、靈と契を合す。今斯法  
華宗は、登駕の桓武皇帝、國の爲に建てたまひし所なり。其困簡の度者は、法華宗に依り  
て大の出家を定む。夫れ圓頓の學人は三車を門外に求めず、何ぞ羊車の威儀を用ひん。化  
城を中路に樂ふこと無し、高迂廻の徑を過ぎんや。財を付するの長には父を知り子を知る、  
何をか客作と爲ん。何をか除蕪とせん。功を賞するの夕には鬚を解きて珠を授く、何に  
由りてか宅を望み、何に因りてか城を求めん。明かに知んぬ、先帝の傳法は古今比無し、

上顯戒論表

生し、龍樹中觀の宗を承けて大乘宗の珍論を作り、護法の有宗を破す。

【天親】佛滅後九百年北天竺に出生し俱舍論、唯識論等を撰す。

【堅慧】佛滅後七百年に出で、實性論、法界無差別論等を作る。

【無著】天親の兄法相宗の祖。

【象賢】有部宗悟人の弟子、順正理論、顯宗論を造る。

【法琳】穎川の人幼にして三論を學ぶ、尋で廣く道佛二教を究む、當時太子令傳奕の廢佛論に對して破邪論一卷を造る。

【僧肇】羅什門下四哲の一、般若無知論、涅槃無名論等を撰す。

【慧沼】唐代の人慈恩大師に從て性相の典義を極め、慧日論を造る。

【法華宗】天台法

護國利生塵劫にも豈朽ちんや。今山家の宗に依りて、圓の三學を定め菩薩僧を望み、謹んで、天制を請ひたてまつる。則ち四條式を僧綱等に給うて、異宗和するや否やを問しめず。是時僧統、護法の志を存して高く智劍を振ひ、群釋は破石の心を執して論鼓有らんことを請ひ、表を内裏に進めて密に天制を待つ。是に於て、帝心廣博にして都て愛憎無く、表を山に給うて更に死灰を煖む。謹んで表對を按ずるに、但山家の詞を陳べて聖教を述ぶること無く、博覽を愛せずして三寺を日本に汎じ、新制に諍ふこと無くして上座を文珠に違す。鐘を鳴らして遮すること無きは還つて算升を耻づ、法界を家とするは深く銃の破に墮す。倒言の詰反つて和上を罵り、違教の妨げ亦師傳に乖けり。昔の大千の五事は佛説に依ること無く、今の叡山の四條は聖教に據有り。又律儀を問へば則ち我は大乗なりと稱し、上座を定むれば則ち還つて賓頭に向ふ。已に還州を嫌ふ、豈比蘇を信ぜんや。若し假名を許さずんば誰か眞實と爲る者あらんや。竊に以みれば年分の五宗は國家の良將、人倫の資糧、兩海の舟航、彼岸の梯鄧なり。俱に行じ俱に用ふるときは則ち味ひ鹽梅に同じく、同じく説き同じく傳ふるときは則ち聲金石に等し。何ぞ自宗に黨して忽ちに諸宗を遏めんや。但耳より入り口より出づるを責んで内心を治むることを得ず、若し清虛の功無くんば何ぞ非常の難を排はん。今我弘仁、釋教を論じて偏固を定む。道之れ必ず興るべきの時、行之れ必ず擇ぶべきの日なり。小乘の律義は藏、通に通じ、梵網の三聚は別、圓に局れり、而るに今圓宗の度者、小乘の律儀を受けて圓の三聚を忘れ、争うて名利を求めて各無漏



華宗。【圓頓】台宗の圓教は即ち圓頓の教にして、其行は圓頓の行なり。【化城】三百由旬を化城、五百由旬を寶所と言ふ。化城とは小乗の涅槃なり。【山家の宗】傳教大師の天台宗。【圓の三學】圓教の戒、定、慧。【四條式】傳教大師六條式、八條式を上表し、次で四條式を制して大乘戒壇の建立を奏請す。【三寺】向大乘寺、一向小乘寺、大小兼行寺。【年分の五宗】華嚴宗、律宗、三論宗、成實宗、法相宗、俱舍宗。【三聚】攝律儀戒、攝善法戒、攝捨淨戒と言ふ。之れ大乘菩薩僧の戒なり。

を退す。去る大同二年より弘仁十一年に至るまで合して一十四箇年、兩業の度者二十八口、各縁に隨つて諸方に散在し、住山の衆一十に滿たず。圓戒未だ制せず、禪定由る無し。前車の傾くを見て將に後轍を改めんとす。謹んで弘仁十一載歲次庚子を以て、圓戒を傳へんが爲に顯戒論三卷、佛法血脈一卷を作り、謹んで陛下に進む。重ねて願くは、天台圓宗兩業の學生には所傳の宗に順ひて、圓教の戒を授けて菩薩僧と稱し、菩薩の行を勤めしめ、一十二年秋山を出でず、四種三昧を修練することを得しめん。然らば則ち一乘の戒定永く本朝に傳はり、山林の精進遠く塵劫に勸めん。此功德を奉け以て群凶を滅し、茲を上りて聖壽疆り無く、此を承けて兆人清泰ならん。最澄識は一行に謝し學は毗壇に恥づ、謹んで愚誠を獻じて倍戰汗を増す。若し進表を允許したまはば、請ふ 聖教を降したまへ。傳戒の深に任る無く、表を奉り陳請して以て聞す。誠惶誠懼謹言。

弘仁十一年二月二十九日

沙門最澄 上表

上顯戒論表 畢

【別圓】化法四教の第三は別教、第四は圓教なり。  
 【兩業の學生】止觀業、遮那業の兩學生。  
 【四種三昧】常坐三昧、常行三昧、半行半坐三昧、非行非坐三昧。  
 【二行】一行阿闍梨、唐代の人。  
 【昆境】荆溪湛然此地に住す。

傳教大師全集新  
版卷一、三〇三頁  
以下。菩薩戒を授  
くる行事作法を明  
す。古來傳教大師  
の撰なりと傳ふ  
るも其順序次第は  
荆溪湛然の著、授  
菩薩戒儀一卷に類  
似す。

【一】 先づ授菩薩  
戒十二門の名稱次  
第を擧ぐ。

【菩薩戒】 大乘菩  
薩僧の戒律を菩薩  
戒と言ふ。總じて  
三聚淨戒を指す。

【二】 十二門の第  
一開導の義を詮す  
の三擧。

【三】 戒、定、慧  
の三擧。

【五】 八、十、具  
五戒、八戒、十戒  
具足戒。

【三明白通】 阿羅  
漢所具の徳。

【三身】 法身、報  
身、應身。

【四徳】 常德、樂  
徳、我徳、淨徳の  
四。

【本來本有常住法  
身】 凡夫本有の常

# 授菩薩戒儀

（二）  
夫れ菩薩戒を授くる行事の儀、略して十二門と爲す。  
第一に開導、第二に三歸、第三に請師、第四に懺悔、第五に發心、第六に問遮、第七に授戒、第八に證明、第九に現相、第十に説相、第十一に廣願、第十二に勸持なり。

第一に開導。  
應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

應に先に問うて言ふべし、『何れの戒をか受けんと欲する』と。佛法の大海は深廣にして  
淵無し、唯信のみ能く入る。信あるに由るが故に、三學成ず可く、菩提至る可し。故に三  
學の中には戒を以て首と爲し、菩提の曠路には戒を資糧と爲し、生死の大海には戒を船筏  
と爲し、三途の重病には戒を良藥と爲す。然るに戒に多種あり、五、八、十、具、菩薩律  
義金剛寶戒なり。五戒の報は人、八戒の報は天、十善の報も天、具足戒は出家の大戒にし  
て小解脱を感じ、三明白通、無餘永寂なり。四教に菩薩戒及び五戒を示す可し。菩薩律義  
三千の威儀、八萬の細行は報に佛果を得、三身四徳相好不共一切功德なり。此れ即ち又如  
來一戒金剛寶戒、是則ち常住佛性、一切衆生の本源、自性清淨、虛空不動戒なり。此  
戒に因つて以て本來本有常住法身の三十二相を具するを顯得す。今既に人天の果を求めず、  
聲聞、辟支佛の果を求めず、小乘の人の所見の佛果を求めず、通教の三乘の佛果を求めず、

住佛性を指す。

【通教の三乘】化法四教の第二を通教と言ふ、三乗は聲聞、緣覺、菩薩

【別教獨菩薩】化法の第三を別教と言ふ、別教は前の藏、通に別に後の圓教に別なる故、此教中の菩薩を獨菩薩と言ふ。

【圓教】化法四教の第四を指す。

【八苦】生苦、老苦、病苦、死苦、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦の八。

【六賊】色聲香味觸法の六塵は障道の賊となる故に。

【三教の權の菩薩】藏、通、別の三權教の菩薩。

【三歸】十二門の第三歸を明す。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

別教獨菩薩の佛果を求めず、唯専ら圓教所詮の無上正等菩提を求めんと欲す。須らく六法を具して方に戒を得べし。一には能授の人、謂く能授戒の者は須らく預め預類、及以人數を知るべし。中に於て幾許か中國、邊方、餘道雜類なる。人身を得と雖も安樂あること無く、八苦交逼り四蛇蠆煎し、四大危脆にして念念住せず、六賊争ひ驅つて新新に生滅す。設ひ餘戒を受けて人天に報を得と雖も沈没を免れず。二乘の小果は永く涅槃に住し、三教の權の菩薩は歷劫の路に迂廻す。故に須らく誠誓を發して圓果を求むべし。二には所依の處、先づ須らく諸白して内外の障無からんには壇場を安置すべし、莊嚴清淨にして皆地鋪せしめ、受者をして安穩ならしめよ。三には高座、法を乘る。四には専ら大道を求む、互には希有の心を生じ、貧の如く、饑の如く、病の如く、怖の如くして寶を得、食を得、醫を得、安を得て一念も散亂の心を生ぜざれ。若し懇誠無くんば徒に彼此を勞せん。六には専ら利他の爲に戒を求む。菩薩の發心は利物を本と爲すを以て、大勇猛を發して身命を惜まず、誓つて衆生とともに同じく眞如法界の大海に入らん。

【三歸】十二門の第三歸を明す。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【三歸】歸依佛、歸依法、歸依僧。

【四】十二門の第三請師を説す。

【應正等覺】應供正遍知と同一なり。應供は人天の供養に應ずるが故に。正遍知は等しく一切法を知るが故なり。  
【和上】師に依つて弟子の道力生ずるが故に、師を稱して和上と言ふ。  
【羯磨】カ、ル、マ（Karma）、比丘の受戒等の作法。

に歸依し竟らん。説ふ。

今より已往、佛を稱して師と爲したてまつり、更に餘の邪魔外道に歸せじ。唯願くば三寶、慈悲攝授したまへ、慈悲の故に。三寶を敬

應に須らく廣く一體三寶を明して所依の境となし、復此境に別相住持等あつて之を用ふることを知るべし。

第三に請師。

我某甲等今大德に従ひて菩薩の金剛寶戒を受けんことを求む。大德、我に於て勞苦を憚らざれ、慈悲の故に。

聖和上を請するの詞。  
弟子某甲等、一心に靈山淨土本來常住釋迦如來應正等覺を請じ奉る。我爲に菩薩戒の和上と作りたまへ。我和上に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん。慈悲の故に。

聖羯磨阿闍梨を請するの詞。  
弟子某甲等、一心に清涼山中金色世界文殊師利龍種上智尊王如來應正等覺を請じ奉る。我爲に菩薩戒の羯磨阿闍梨と作りたまへ。我阿闍梨に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん。慈悲の故に。

禮して一  
教授阿闍梨を請するの詞。

【編勒】 マイトレ  
一ヤ (Maitreya)、  
釋迦佛の佛位を紹  
ぐ補處の菩薩にし  
て、當來五十六億  
七千萬歳を経て人  
間に化生し、龍華  
樹の下に正覺を成  
じて衆生を度すと  
言ふ。

【同學等侶】 等し  
く同一佛道を修す  
る伴侶の意。

【菩薩摩訶薩】 ボ  
ーシサツトバ、マ  
ハ一サツトバ (Bod  
hisattva Mahasa  
tva) 道果を求む  
る大衆生の意。

【五】 十二門の第  
四懺悔を詮す。

弟子某甲等、一心に知足天上四十九重摩尼寶殿、當來の大導師彌勒慈尊應正等覺を請じ奉る。我爲に菩薩戒の教授阿闍梨と作りたまへ、我阿闍梨に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん。慈愍の故に。禮して一拜す。

弟子某甲等、一心に十方淨土一切如來應正等覺を請じ奉る。我爲に菩薩戒の尊證師と作りたまへ。我尊證師に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん。慈愍の故に。禮して一拜す。

弟子某甲等、一心に十方一切諸大菩薩摩訶薩を請じ奉る。我爲に同學等侶と作りたまへ。我同學等侶に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん。慈愍の故に。禮して一拜す。

傳教師に從ひて戒を乞ふの詞。  
族姓大徳、今正に是れ時なり。願くは時に我に菩薩の戒法を施したまへ。

戒師應に起つて聖師に白すべきの詞。  
敬つて十方盡虛空界の一切諸佛、諸大菩薩に白す。「此某甲等、我に諸佛菩薩に白さんとを求む、諸佛菩薩に從つて出家の菩薩戒を乞受せんと欲す」と。此某甲等、已に大願を發し、已に深信あり、能く一切を捨てて身命を惜まず。唯願くは諸佛菩薩、憐愍の故に某甲等に菩薩戒を施與したまへ。三たび

第四に懺悔。

(五) 説ふ。

【曇無讖】 ダルマ  
ラクシヤ(Dharma  
羅門種の人、支那  
に法豊と言ふ。

無始より已來、誰か能く罪無からん。或は重罪あらば戒を障へて發せざらしむ、故に須らく懺悔すべし。故に曇無讖は三年にして始めて獲たり。故に上根上行の人あらば宜しく應に靜處に別に道場を置きて、事理合行し精誠懇到すべし。上品の相現せば戒品自ら成ず。今此は通方に時に被る行事なり。利根の士は語に逐つて想成じ、宿種現に加はつて前事を成辨す。故に今略して世を濟ひ、善を生じ、物を利するの儀を出す。中に於て三となす。先に懺の意を明し、次に運心を明し、三に正しく罪を説きて懺の方法と爲す。初に意と言ふは、夫れ戒と言ふは是れ白淨の法なれば、法器清淨にして方に進み愛くるに堪へたり。淨潔の繫、染色を受け易きが如し。是故に先に懺悔洗淨を教ふ、亦故衣を洗ふに先づ灰汁を以てし、後に清水を用ふるが如し。然るに佛の滅後二千年に向はんとして、正法沈淪し邪風競ひ扇ぐ。衆生薄祜にして生れて此時に在り、從ひて聽聞すること有れども信受を生じ難し。猶水に畫くに久しく停むることを得ず、空中の遺立は成就す可きこと難きが如し。良に惑障深厚にして見執鏗然たるに由る。若し慙重の心を起さずんば罪滅するに由無し、罪若し滅すること無くんば戒品期し難し、是故に輒爾にして而も受く可からず。然るに懺悔の法に三種あり、上品の懺とは身を擧げて地に投じ、大山の崩るるが如くして毛孔より血を流す。中品の懺とは自ら所犯を露し悲泣して涙を流す。下品の懺とは通じて過咎を陳べ、師に隨つて口に言ふ。今下品なりと雖も猶諸佛、諸大菩薩を請じて爲に證明と作したてまつる、諸佛菩薩は大慈悲ありて、常に法界の衆生をして我の如く異ること

【大止觀】摩訶止觀十卷、天台大師撰。

【身見】五見の一、身に於て實我を執する邪見なり。【貪、瞋、癡】貪、毒、瞋毒、癡毒、之を三毒と言ふ。

【三業】身業、口業、意業。

【一闍提】イクチヤーンチカ (Eukchi) 成佛の性無き一類の人。

無からしめんと欲したまふ。衆生を觀ること猶赤子の如しと雖も、然も須らく行者自ら精誠を發すべし。大王を請するには先づ須らく舍を淨むべきが如く、亦濁水には日輪現ぜざるが如し。三世諸佛は皆此戒に因りて菩提を成ずることを得たまへり。次に運心とは戒師に従つて罪名の種を説ふと雖も、然も須らく先づ逆順の十心を運んで、重罪をして方に滅せしむべし。故に天台大師は大止觀の懺淨の文の中に於て具に此方を立てたまへり。當に順流の十心を識りて明かに過失を知るべし、當に逆の十心を運んで以て對治を爲すべし。此二の十心を通じて諸懺の本と爲す。順流の十心とは、一には無始自從闇識昏迷にして煩惱に醉はされ、妄りに人我を計す、故に身見を起す。身見の故に妄想顛倒あり、顛倒の故に貪、瞋、癡を起す、癡の故に廣く諸業を造る、業あつて則ち生死に流轉す。二には内に煩惱を具し、外に惡友に値ひて邪法を扇動し、勤めて我心を惑はすこと、倍隆盛を加ふ。三には内外の惡緣既に具して能く内に善心を滅し外に善事を滅す、又他の善に於て都て隨喜無し。四には三業を縱恣にして惡として爲さすといふこと無し。五には事廣からずと雖も惡心遍布す。六には惡心相續して晝夜に斷えず。七には過失を覆誦して人の知らんことを欲せず。八には魯扈底突にして惡道を畏れず。九には慚無く愧無し。十には因果を撥無し。一闍提と作る。是を十種に生死の流に順ひ昏倒にして惡を造るを爲す。則の蟲則を樂ひ、覺らず知らず、積集重累して稱計す可からず。四重五逆極まつて闍提に至り、生死浩然として而も際畔無し。今懺悔せんと欲せば、應に當に此罪流に逆ひ、十種の心を用ひて惡法



【五塵】色、聲、香、味、觸の五境を言ふ。

【六欲】色欲、形貌欲、威儀姿態欲、語言音聲欲、細滑欲、人相欲。

【阿輪柯王】阿育王の弟、又帝須と言ふ。王位に代りて七日間王位に即けりと傳ふ。

【梅陀羅】チャンダーラ (Chandala)、四姓以外の下姓。

を禪除すべし。先づ正しく因果決定して孱然なりと信ず、業種久しと雖も敗亡せず、終に自ら作して他人の果を受くること無し。精しく善惡を識つて疑惑を生ぜず、是を深く信じ一闍提の心を禪破すと爲す。二には自ら愧ぢて尅責す、鄙極の罪人にして羞無く耻無く、畜生の法を習つて白淨第一の莊嚴を棄捨せり。咄哉、鉤無くして斯重罪を造る。天我屏へる罪を見る、是故に天に慚づ。人顯なる罪を知る、是故に人に愧ず。此を以て無慚無愧の心を禪す。三には惡道を怖畏す。人命は無常なり、一息追はざれば千歳長く往く。幽途綿邈として資糧あること無く、苦海悠深にして船筏安んぞ寄せん。賢聖に訶棄せられて恃怙する所無く年事稍去つて刀風者らず。豈晏然として坐して酸痛を待つ可けんや。譬へば野干の耳、尾、牙を失ふも、詐り睡つて脱れんことを望み、忽ち頭を斷たれんことを聞いては心大いに驚怖するが如し。生、老、病に遇つては尙急なりと爲さず、死の事は奢らず、那ぞ怖れざることを得んや。怖心起る時は湯火を履むが如し、五塵六欲も食染するに暇あらず。阿輪柯王の梅陀羅の朝朝鈴を振りて一日己に盡きぬ、六日ありて當に死すべしといふを聞いて、五欲ありと雖も一念の愛無きが如し。行者怖畏して苦到に懺悔し、身命を惜まざること彼野干の決絶して思念する所無きが如く、彼怖王の如くすべし。此を以て惡道を畏れざるを禪破するなり。四には當に罪を發露すべし、瑕玃を覆ふこと莫れ。賊毒惡艸は急に須らく之を除くべし、根露なれば條枯れ、源乾きぬれば流竭きん。若し罪を覆藏すれば是れ不良の人なり。迦葉頭陀には大衆の中にして發露せし、方等には一人に向つ

【迦葉頭陀】迦葉は佛十大弟子の頭陀第一【方等】一切大乘の通名。

【勝鬘】勝鬘經一卷、求那跋陀羅の譯、大寶積經第四十八勝鬘夫人會の異譯なり。

て發露せしむ。其餘の行法は但實心を以て佛像に向つて改障す。陰隠に癡あるに、覆諱して治せざれば則ち死するが如し。此を以て罪を覆藏する心を翻破するなり。互に相續心を斷ずとは、若し決果斷癡して、故きを畢へて新しきを造らざるは乃ち是れ懺悔なり。懺して而も更に作さば、王法の初犯は原さるるを得るも、更に作すは則ち重きが如し。初、道場に入るは罪則ち減し易く、更に作すは除き難し。已に能く之を吐く、云何ぞ更に嘔はん。此を以て常に惡事を念ふことを翻破す。六に菩提心を發すとは、昔は、白の安危遍く一切境を憊ませり。今廣く兼濟を起し、虚空界に遍して他を利益せん。此を用ひて一切處に遍して惡心を起すことを翻破するなり。七に功を修して過を補ふとは、昔は三業、罪を作ることを晝夜を計へず、今は身口意を善して策勵すること休まず。山獄を移すに非ずんば安んぞ江海を填めん、此を以て三業を縱恣にする心を翻破するなり、八に正法を守護すとは、昔は自ら善を滅し亦他の善を滅せり、自ら隨喜せず亦他を喜ばざりき。今は諸の善を守護し、方便をもつて増廣して斷絶せしめじ。譬へば城を全うする勳の如し。【勝鬘】に云はく、「正法を守護し正法を攝受するを最も第一と爲す」と。此を以て隨喜無き心を翻破す。九に十方の佛を念ずとは、昔は惡友に親狎して其言を信受せり。今は十方の佛を念じたてまつる、無礙の慈は請せざる友と作りたまふを念じ、無礙の智は大導師と作りたまふを念ず。此れ惡友に順ふ心を翻破す。十に罪性空なりと觀すとは、貪、瞋、癡の心は皆是れ寂靜の門なりと了達す。何を以ての故に、貪、瞋若し起らば何れの處に在つてか住する、知ん

【我見】五蘊假和合の心身を指して常一とする邪見。

【寂靜】煩惱を離るるを寂と言ひ、苦患を斷絶するを靜と言ふ。

【四重】姦戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒の四波羅夷。

【僧伽藍】サンガ一ラアヤ(Saṅgha Rāma)伽藍を言ひ、身(の四威儀)行住、坐、臥。

ぬ、此貪瞋は妄念に住す、妄念は顛倒に住す、顛倒は身見に住す、身見は我見に住す、我見は則ち住處無し。十方に諦かに求むるに我不可得なり。我心自ら空にして罪福に主無し、深く罪福の相に達して遍く十方を照す。此空慧をもつて心と相應せしむ。譬へば日出づる時、朝露一時に失ゆるが如く、一切の諸の心は皆是れ寂靜の門なり、寂靜を示すが故に、此れ無明の昏暗を灑破す。是を十種の懺悔と爲す。涅槃の道に順ひ、生死の流に逆ひて、能く四重、五逆の過を滅す。若し此十心を解せずんば全く是非を識らず、云何ぞ懺悔せん。設ひ道場に入るも徒に苦行を爲して、終に大なる益無し。此心を運び已つて是の如きの言を作す。

須らく一一の釋、所以を對破すべし。故に知る、無始の罪障は卒に除く可からず。樹を伐りて根を得、病に灸して穴を得るが如し。故に須らく逆順をもつて其罪を觀すべし、罪性の空なるを見るに由りて方に永く謝すと爲す。

仰ぎ啓さく、十方盡虚空界の一切の三寶、釋迦牟尼、當來の彌勒、十二部經、眞如藏海、諸大菩薩、緣覺聲聞、證明したまへ。我等、披陳懺悔す、無始より來た今日に至るまで其中間に於て、皆妄に我人を計するに由り、貪、瞋、癡の無量の煩惱の爲に身心を惱亂し、三業を繼態にして具に十惡、五逆、四重を造り、一闍提と作りて因果を撥無し、僧伽藍を壞し、經像を焚燒し、身の四威儀は含識を損傷ひ、三寶物及び餘趣の財を盜み、顛倒邪淫にして梵行を汚染し、父を汚し母を汚し、比丘、比丘尼、人男、人女、畜生、鬼神等一切の

【五辛】大蒜、葱、葱、蒜、蘭葱、薺、興菓の五種の辛味ある蔬菜。

【八難】地獄、餓鬼、畜生、鬱單越、長壽天、瞿曇、佛前佛世智辯聰、佛生佛のものは佛の正法を聞くを得ざるが故に八難と云ふ。  
【二死】分段、變易の二死。  
【二嚴】智慧莊嚴、福德莊嚴。  
【四魔】煩惱魔、

男女を汗し、三寶を誑惑し、三乗の法を誘りて佛説に非ずと言ひて障礙し留難し、或は酒を飲み肉を食ひて慈愍の心無く、或は五辛を食ひて三寶を薰穢し、或は一切出家の人所、有戒、無戒、持戒、破戒に於て打罵し訶責し、乃至一切の有情、無情に於て不饒益を作せり。是の如き等の罪、數へ知る可からず、自作、教他見聞して隨喜す。今三寶の前に對して披陳懺悔す、佛の知りたまふ所に齊つて敢て覆藏せじ。一たび懺したる已後は永く相續を斷ちて更に敢て作らじ、願くば罪の消滅せんことを。唯願くば三寶、慈悲證明したまへ。三遍已に之を語ふ。

佛海に入らんと欲するには信を以て本と爲し、佛家に生在するには戒を以て本と爲す。故に三歸乃至菩薩戒あり。然して五、八、十戒を受くるは、人燭を乗りて夜行くに、見る所遠からざるが如し。小乘戒を受くるは月下に遊ぶが如し、未だ大に明ならずと雖も猶燈燭に勝る。若し大乘戒を受くるは、日中に在りて曉了せざることを無きが如し。能く八難を摧き、能く八苦を免れ、二死を遠離し、二嚴を具足し、四徳圓滿して四魔を降伏せん。第五に發心。

先に當に念を十方の諸佛に繼いで所期の果と爲すべし。是故に經に云はく、若し能く佛を念せば佛心を見ることを得、佛心は復慈悲を以て本と爲す、慈悲は乃ち弘誓を以て先です。是故に弘誓を菩提の因と爲す。

圓融十界の諸の衆生 我今誓ひを發して必ず濟度せん

陰魔、死魔、他化自在天子魔。【六】十二門の第五發心の旨を説す【五住】根本煩惱能く枝木の煩惱を生ずるが故に住地と言ふ、五住地とは見一處住地（見惑）、欲愛住地、色愛住地、有愛住地（愛上の三は思惑）無明住地（根本煩惱）の五種を言ふ。【四門】有門、空門、亦有亦空門、非有非空門。

【三聚】三聚淨戒の略名。一に攝律儀戒二に攝善法戒三に饒益有情戒なり。【七】十二門の第六問遮を明す。【問遮】遮難を問ふを言ふ。

授菩薩戒儀

圓融五住の諸の煩惱  
我今誓ひを發して必ず斷除せん  
圓融四門の諸の道品  
我今誓ひを發して必ず盡知せん  
圓融法性の眞佛道  
我今誓ひを發して必ず顯得せん

弘誓を發し已つて復四心を加へ、以て弘誓を成ず。一には一切の衆生を觀ること、佛の如くして異なること無し。二には國王の如くし、三には父母の如くし、四には大家の如くす。何を以ての故に。佛は法王たり。是れ所求の故に。心、佛、衆生の三差別無きが故に。王は國の尊に居し、親は家の尊に在り、大家は後下類の中の尊たり、因中に果上の想を生ずるが故に。若し爾らずんば、何ぞ能く之を度せん。衆生を度せんが爲に餘の三誓を立つ。又復四種の心を發す。一には所作の功德を衆生と共にせん。二には願くば一切衆生と共に、煩惱生死の大海を過ぎん。三には願くば衆生と共に、一切諸經の了義に通達せん。四には衆生と共に菩提に至らん。此れ亦四弘の別名なり。而も利生を以て本と爲す、故に並に俱に衆生に於て想を起す、四弘誓を以て生を利するを本と爲す。既に發心し已つて、三業清淨なること猶明鏡の如し。内外清徹にして淨戒を受くるに堪ふ。此戒品に三聚を具足し、三聚遍く一切法を收むるを以ての故なり。

第六に問遮

既に能く發心して行相を建立す。行相は自行化他を出でず、自行の故に上求し、利他の故に下化す。汝等既に發心の相を知り、能く四弘を成就し満足するに堪ふるも、此は但現

【梵網經】梵網經  
 盧舍那佛說菩薩心  
 地戒品第十の略稱  
 羅什三藏の譯、一  
 卷あり。  
 【七遮】七種の遮  
 難、名數の夫夫は  
 本文に出づ。

【八】正しく十二  
 門の第七授戒の旨  
 を説す。  
 【攝律儀戒】五、  
 八、十、具等の一  
 切の戒律。

在の身心の發趣なり。若し遮難あらば戒品發せじ。故に『梵網經』に云はく、「若し七遮あらば爲に戒を受けしむべからず。」と。今汝に問ふ、當に實の如く答ふべし、若し實を答へずんば、徒に自他を苦しめ、尅獲する所無くして虚しく菩薩と稱す。則ち一切衆生を欺誑すと爲す。心に負き佛を誑かし狂りて利養を受くるなり。

汝等、曾て佛身より血を出さざるや不や。應に無しと答ふべし。汝等、父を殺せざるや不や。汝等、母を殺せざるや不や。汝等、和上を殺せざるや不や。汝等、阿闍梨を殺せざるや不や。汝等、羯磨僧を破らざるや不や。汝等、聖人を殺せざるや不や。已上皆應に無し

若し七遮無くんば戒を受得するに堪ふ。應に須らく專注の心を起し、慳重の心を發すべし。今此に方に汝等に戒を授け、戒品の心を發さしめんと欲す。若し志を専らにして仰むける完器の如くすれば、則ち尅する所あらん。一念も差違はば猶覆器の如く、必ず成ずる所無けん。然るに此戒は形色あること無くして而も能く汝等が身心に流注し、未來際を盡して大果を成就す。而るに爾時に於て覺知する所無し。向に若し形あつて汝が身に入らん時は、當に天崩れ地裂くるの聲を作すべし。故に須らく念を繋けて、餘覺及び餘の思惟を得ざれ云云。

第八に授戒。此段先に相傳  
 先に略して三相を示す。三相と言ふは、謂ゆる攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり、夫れ三藏教に三聚戒の名あり、通教にも三聚戒の名あり、別教にも三聚戒の名あり、圓教

【攝善法戒】 一切の善法を修する戒  
【饒益有情戒】 一切衆生を饒益するを戒とするもの  
【三藏教】 化法の四教の第一、實生實滅を其教理の本體とする小乘教

【大經】 涅槃經を言ふ

【九】 十二門の第八證明を明す

にも三聚戒の名あり。今正しく此圓の三聚戒を授く可し。汝等今我所に於て一切菩薩の淨戒を受けんことを求め、一切菩薩の學處を受けんことを求む。謂ゆる攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり。此諸の淨戒、此諸の學處は過去の一切の菩薩は已に受け、已に學し、已に解し、已に行じ、已に成ぜり。未來の一切の菩薩も當に受け、當に學し、當に解し、當に行じ、當に成ぜん。現在の一切の菩薩は今受け、今學し、今解し、今行じて當來に作佛せん。汝等今身より未來際を盡すまで其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。三たび答ふ。第一遍の時、應に語つて言ふべし、「十方法界一切の境の上の微妙の戒法、悉く皆勤轉して、久しからずして當に應に汝が身中に入るべし」と。第二遍已つて次に即ち語つて云へ、「此妙戒法は即ち法界諸法の上より起り、虚空の中に遍じて汝が頂上に乗る、微妙にして愛す可きこと光明雲臺の如し」と。第三遍の初に復應に示して言ふべし、「若は更に一遍せよ。此妙戒法、汝が身中に入りて清淨圓滿なること。正に此時に在り。戒法を納受して餘覺餘思を以て、戒をして滿ぜざらむることを得ざれ」と。第三遍已つて語つて言へ、「即ち是れ菩薩なり、眞の佛子と名く。故に大經に曰はく、『發心と畢竟との二別ならず、是の如きの一心は先心を難しとす。』と」。

第八に證明

證明とは、戒師應に受者の爲に白して言ふことを作すべし。

弟子某甲、仰いで十方盡虚空界の一切諸佛に啓す、此世界一四天下、南瞻部州人主の地、

【觀自在菩薩】ア

パローキテースバ

ラ(Avalokitesvara)

觀世音菩薩なり。

【一四天下】須彌

山の四方にある四

大洲にして、東弗

婆提、南閻浮提、

西瞿耶尼、北鬱單

越の四を指す。

【南瞻部州】南閻

浮提の異名。

【二】十二門の第

九現相を明す。

【現相】菩薩戒を

受けし結果として

現する相を言ふ。

【三品】上品、中

品、下品の三類。

大日本國山城の州乙訓縣、山本僧伽藍の中、千手千眼大悲者觀自在菩薩の像前に於て、衆多の佛子あり、我所に來つて菩薩金剛寶戒を受けんことを求め竟んぬ。我已に爲に證明と作る、唯願くば諸佛爲に證明と作りたまへ。

弟子某甲、仰いで十方盡虛空界の一切諸菩薩摩訶薩に啓す。此世界一四天下、南瞻部州人主の地、大日本國山城の州乙訓縣、山本僧伽藍の中、千手千眼大悲者觀自在菩薩の像前に於て、衆多の佛子あり、我所に來つて菩薩金剛寶戒を受けんことを求め竟んぬ。我已に爲に證明と作る、唯願くば諸の菩薩も亦爲に證明と作りたまへ。

第九に現相。

現相とは、受者に既に三品の心あれば、相の現することにも亦三品の不同あり。謂ゆる涼風、異香、異聲、光明、種種の異相あり。十方界に於て此相現する時、彼諸の菩薩各彼佛に問ひたてまつる、「何の因縁の故に此相現することあるや」と。彼佛各彼菩薩に答へて言はく、「此相現するは、娑婆世界一四天下、南瞻部州人主の地、日本國山城の州乙訓縣、山本僧伽藍處に於て、衆多の佛子あり、寂澄佛子の所に於て、三説して菩薩の別解脱戒を受けんことを求め竟んぬ。今我等に證明と作りたまへと請ふ、我爲に證と作る、故に此相あり」と。彼諸の菩薩各歡喜し、咸相謂つて言はく、「是の如き等の極惡の處所に於て、是の如きの猛利の煩惱を具足する惡業の衆生にして、能く是の如きの極勝の心を發すること甚だ希有なりとなし、深く憐愍を生じたまふ」と。乃ち汝等に於て堅固梵行の



【二】十二門の第十説相を説ず。

【説相】受戒後に於ける持犯の相を陳ぶ。就中梵網經の十重禁戒を以て一誓約す。

【波羅夷】パーラージカ(Parajika)戒律中の最嚴重罪にして六聚罰の第一に位す。

【五大】地大、水大、火大、風大、空大の五を指す。

【九大禪】自性禪一切禪、難禪、一切門禪、善人禪、一切行禪、除惱禪、此世他世樂禪、清淨禪の九を指す。  
【初信】十信位の初位を指す。

心を起す、十方の菩薩も尚是心を發したまふ。是故に汝等宜しく應に志心に禁戒を守護すべし。身命を惜まず、毀犯せしむること勿れ。上品の相は上風、上香、光明等なり、中下は此に準せよ。唯佛のみ能く了したまふ、餘は知る所無し。

第十に説相。

若し諸の菩薩、已に戒師の所に於て、三説して菩薩金剛寶戒を受けんことを求め竟んぬ。

若し自ら殺し、若し人をして殺さしめ、若し坑穿を作り、人非人に毒藥を與へ、方便を施設するは眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持

若し自ら盜み、若し人をして盜ましめ、人の五錢を盜み、若し五錢を過ぎ、若し焼き、若し埋め、若し色を壞す。是の如く五大、五塵を盜まば眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持

若し人の男女、諸天鬼神畜生の男女を姪して不淨行を作さば、眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯

若し眞實に非ず、己が有に非ずして、自ら禪を得、解脱を得、定を得、九大禪を得、初

【等覺】菩薩の極位にして將に妙覺の佛果を得んとする位。  
【妙覺】大覺極果の佛位を指す。

【十波羅夷】殺戒、盜戒、姦戒、妄語戒、酤酒戒、說四衆過戒、自讚毀他戒、慳戒、嗔心不受戒、誑三寶戒の十種の戒を言ふ。又之を十重とも稱す。  
【四十八輕戒】十重戒に對する四十八種の輕罪戒を指す。名數は梵網經に出づ。

信乃至等覺、妙覺を得、天龍鬼神來つて我を供養すと言はば、眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持つと言へ。

若し諸の酒を酤るは眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持つと言へ。

若し出家在家の菩薩にして十波羅夷の中、隨つて一波羅夷を犯せりと説はば眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持つと言へ。

若し自ら己が眞實の所得を讀し、并びに出家、在家の菩薩を毀りて、十重の中の一一の重罪、四十八輕の中の一一の輕罪を犯すと言はば眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持つと言へ。

若し法を慳み財を慳みて、來り求むる者あらんに、法は爲に一句一偈をも説かず、財は一針一草をも施與せず、反つて罵辱を生ぜば眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざれ。能く持つや不や。答へて能く持つと言へ。

【三】十二門の第十一廣願を詮す。  
【廣願】廣く利他の願を起すを言ふ。

【無生忍】無生無滅の理に安住して動ぜざる位を言ふ。

若し一切の出家、在家の菩薩を嗔り、若し非菩薩、諸天鬼神、讎謝するも解けずんば眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯すことを得ざれ。能く持つや不や。つと言へ。答へて能く持

若し三寶を謗り、若し増し、若し減じ、若し相違し、若し戲論すること下一句に至るも眞の菩薩に非ず。假名の菩薩は無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝、今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯すことを得ざれ。能く持つや不や。つと言へ。答へて能く持

第十一に廣願。

廣願とは、上來の受戒は但是れ起行なり、菩薩の儀は利他を本と爲す。是故に更に須らく願を以て之に加ふべし。師應に教へて言ふべし、「弟子某甲等、願くば懺悔、受戒、發心所生の功德を以て、法界の一切衆生に廻施し、願くば法界の衆生にして未だ苦を離れざる者は、願くば苦を離れしめ、未だ樂を得ざる者は、願くば樂を得しめ、未だ菩提心を發せざる者は、願くば菩提心を發せしめ、未だ惡を斷じ善を修せざる者は、願くば惡を斷じ善を修せしめ、未だ佛法を集めざる者は、願くば佛法を集めしめ、未だ生を利せざる者は、願くば早く生を利せしめ、未だ生佛せざる者は、願くば速かに成佛せしめん」と。「又此功德を以て、願くば法界の諸の衆生と共に、等しく此身を捨て已つて極樂界の彌陀佛の前に生じ、正法を聽聞して無生忍を悟り、大神通を具して十方に遊歴し、諸佛を供養し、常に無上大乗の正法、福智の資糧を聞き、自行化他十方の佛前に生じ、一切の佛法をして速

【無生法忍】無生忍と同一なり。  
【三惡道の身】地獄身、餓鬼身、畜生身。

【二戒】十二門の最後勸持の旨を説す【勸持】戒を失はざることを勸むるを言ふ。

【圓頓の十乘】所謂十乘觀法にして一に觀不思議心二に眞正發菩提心三に善巧安心止觀四に破法偏五に識通塞六に助道品治八に知次位九に能安忍十に離法愛なり。  
【十境】陰入境、煩惱境、病患境、業相境、魔事境、禪定境、諸見境、上慢境、二乘境、菩薩境の十を言ふ。

かに圓滿することを得ん」と。「又此功德を以て、願くば衆生と共に今より已往、自行門に於ては未だ無生法忍を得ざる前、永く三惡道の身を離れ、永く下賤の身を離れ、永く女人の身を離れ、永く拘繫の身を離れ、常に佛法の中に於て清淨に諸行を修し、利他門に於ては十方國土に分身し、常に衆生の爲に大知識と作り、共に正道を示して實果を生ぜしめん」と。「願くば諸の衆生の我名を聞かん者は、菩提心を發し、我身を見ん者は惡を斷じ善を修し、我説を聞かん者は大智慧を得、我心を知る者は早かに正覺を成せんことを」と。發願し已つて三寶を禮す。

第十二に勸持

教令持戒とは、既に戒を得已れば良藥を服するが如し、須らく禁忌及び補養を知るべし。自行に惡を斷ずるを禁忌と爲す、利他に善を修するは補養の如し。是故に應に須らく二持を具足し、遍く諸善を修し、遍く諸惡を斷じて勤行慈救し、三寶を恭敬すべし云云。一の行に於て、悉く須らく願を以て之を加護し、常に四弘の願を満足せんと思ふべし。六度四等利那を離れず、妙觀門を以て萬境を融通し、事理具足し、正助合修して、圓頓の十乘をもつて十境を超越せよ云云。受者をして佛を禮し、師を禮すること三遍せしむ。

授菩薩戒儀畢

【天台宗叢書】安  
 然撰集第二、一頁  
 以下安然が荆溪の  
 妙樂本を基礎とし  
 て、古來の菩薩戒  
 に關する戒儀、論  
 文等を集成せしも  
 の、上中下三卷に  
 分たる。  
 【彌勒菩薩】釋迦  
 佛の佛位を繼ぐ補  
 處の菩薩なり。  
 【鑿眞和上】唐の  
 揚州江陽縣の人、  
 特に戒律に精通し  
 天平勝寶六年日本  
 に來朝す。東大寺  
 に居して盛んに授  
 戒傳律す。  
 【菩薩の羯磨】菩  
 薩は大道心衆生の  
 受戒、羯磨は比丘の  
 受戒自法を言ふ。  
 【獄獄の本師】傳  
 教大師を指す。  
 【大律】大乘律。  
 【上品殊勝の心】  
 要は菩提心の意。  
 【感應同交】衆生  
 の感と如來の應と  
 が互に交通す。  
 【實乘】實大乘。  
 【權實】權は方便

普通授菩薩戒廣釋 竝序

序

粵若に彌勒菩薩説いて言はく、「東に小國あり、其中には唯大乘の種姓のみあり」と。我  
 日本國は僉成佛することを知れり、豈其事に非ずや。所以に鑿眞和上、創て戒藏を傳へて  
 先づ天皇、太后の爲に以て菩薩の羯磨を授く、後に律儀の方法に因つて而も聲聞の戒文を  
 傳ふ。獄獄の本師は論じて大律を立つるに、普天感崇して謂つて直道と爲す。爾來、聲聞  
 戒の衆咸善はく、「我も亦上品殊勝の心を發起して、同じく菩薩意地所持の戒を有ち、機  
 縁に觸るる毎に菩薩戒を行す。近代功德の場には盛に菩薩戒を好む、感應道交して佛事幾  
 多ぞや。夫以れば一句の法門も永劫に種と爲る、如し實乘に非ずんば恐らくは自他を欺か  
 ん。」と。前賢の戒儀已に十家に及べり、廣略は意にあり、偏圓濫吹して遂に直往の機をし  
 て還つて歷劫の徑に迂ら令む。因つて今、廣く文義を揉へて遍く來賢に遺る。事は須らく  
 機の半滿を觀て戒の權實を行すべし。總じて是れ廣釋の務は開導に在り、宜しく要否を  
 鑒みて繁略時に隨ふべし。以て盡く開すること莫れ、人をして疲倦せしめん。  
 元慶六年四月十五日

天台門人安然敍して云ふ

# 普通授菩薩戒廣釋

てんだいしうさうもんあんねんせん  
天台宗桑門安然撰

【安然】五大院先  
 言ふ。初め慈覺大  
 師に學び後遍照僧  
 正に師事し、叡山  
 居士に五大院を構て屏  
 居す。本書の外、  
 數多の著書あり。  
 【一】菩薩戒授者  
 の立場を詮す。  
 【梵網】梵網盧舍  
 那佛說菩薩心地戒  
 品第十の略稱、羅  
 什譯一卷。菩薩の  
 大乘戒儀を詮す。

【三歸】歸依佛、  
 歸依法、歸依僧。  
 【十戒】聲聞の十  
 戒、或は菩薩の十  
 重戒なり。

【無量義】無量義  
 經一卷、蕭齊の曇  
 摩伽陀耶舍譯。

先づ須らく戒を乞ふべし、我某甲等、今大德に從つて菩薩戒を求受す、大德我に於て勞苦を憚らざれ、慈愍の故に。説ふ。次に傳戒師懃謝す。「梵網」に云はく、「若し佛子たらん者は日夜六時に菩薩戒を持して其義理を解せよ、而るに若し大乘經律の若し輕若し重是非の相、一句一偈、戒律の因縁を解せず、利養の爲の故に、名間の爲の故に、弟子を食利して詐つて能く解すと言はば、即ち自ら欺誑し亦他人を欺誑すと爲す。而も他人の爲に師と作りて戒を授くれば輕垢罪を犯す」と。某甲の如きは智の盲、戒の跛なり、何を以てか衆の與に而も戒師と作らん。然るに「梵網」に亦云はく、「若し佛子、一切衆生を見ては應に唱へて言ふべし、盡く應に三歸十戒を受くべし」と。若し一切の畜生を見ては應に心に念じ口に言ふべし、菩提心を發せよ」と。若し闍らさんば輕垢罪を犯す」と。又云はく、「若し佛子、自を慳み、人をして慳ましめ、乃至求法の者あるにも爲に一句一偈一微塵許りの法をも説かざれば、是れ菩薩の波羅夷罪なり」と。大衆の如きは菩提心を發して菩薩戒を求む、某甲、若し憚りて授けずんば恐らくは佛の誠に背きて波羅夷罪を犯さん。「無量義」に云はく、「菩薩は自ら未だ度せずと雖も先づ衆生を度すべし」と。病導師の如きは、自は此岸

【梵網本】 梵網經の受戒作法に依る戒本。

【地持本】 地持經の説による戒本。

【高昌本】 道朗法師本とも言はれ、その源は地持に依る。

【瓔珞本】 瓔珞經所説の戒本。

【新撰本】 智者大師前後の諸師の集むる戒儀にして、凡そ十八科あり。

【制旨本】 廣州制旨寺眞諦三藏所出の戒本と傳ふ。

【達磨本】 達磨の戒本。

【明曠本】 天台沙門明曠の戒本。

【妙樂本】 荆溪の授菩薩戒儀一卷。

【和國本】 傳教大師の授菩薩戒儀等を指す。

【二】 十二門の第一開導を明す中、先づ六法の第一根據を定むるを明す

【波羅末陀】 パラマールタ (Paramita)

に在りて他を彼岸に度す。今斯義に縁つて敢て戒師と作らん。菩薩戒の相は廣く經論に出たり。賢聖の傳授に略して十本あり、一には梵網本、二には地持本、三には高昌本、四には瓔珞本、五には新撰本、六には制旨本、七には達磨本、八には明曠本、九には妙樂本、十には和國本なり。今は妙樂の戒本に據つて、第一には開導、第二には三歸、第三には誦師、第四には懺悔、第五には發心、第六には問遮、第七には授戒、第八には證明、第九には瑞相、第十には戒相、第十一には受持、第十二には廣願なり。

第一に開導とは、先づ六法を定んで當に戒法を授くべし。一には根機を定む、二には信心を觀す、三には意樂を察し、四には道場を擇び、五には師相を示し、六には戒徳を教ふ。一に根機とは、昔、天竺の波羅末陀三藏、菩薩の律藏を將て漢地に來らんと擬し時、南海に於て船上るに船即ち沒せんと欲す。餘物を省き、去れども船仍起す、唯律本を去れば船方に進むことを得たり。三藏嘆いて曰はく、「菩薩の戒律、漢地に縁無し、深く悲む可きなり」と。又云はく、達磨無識三藏、菩薩戒を持して來つて西涼を化す、時に沙門法進といふものあつて菩薩戒を求め、竝に戒本を請す。三藏の曰はく、「此國は人、麤なり、豈菩薩の道器と爲るに堪ふることあらんや」と。遂に與授せず。法進、苦に請ふに所願を獲す、佛像の前に於て誓を立てて求戒す、七日繼に滿るに夢に彌勒菩薩の親子戒を與授し、并て戒本を授くるに並に皆誦得すと見る。覺め已つて三藏に見ゆるに、三藏其異相を視て默然として嘆じて曰はく、「漢地にも亦人あり」と。則ち譯出の戒本を與ふるに、進が夢に誦

【三藏】譯して眞諦三藏と言ふ。

【達摩無三藏】曇無讖なり。中印度の人、伊波勒菩薩と同人異名なり。地持戒本を始めて支那に傳ふ。

【道進】道進河西に於て曇無讖より菩薩戒を受くと云ふ。

【道朗法師】智者大師以前の人、三論宗の第二祖なり。河西の高足と稱せらる。

【瑜伽論】瑜伽師地論の略名、唐卷の玄非譯す。

【耆闍維】耆闍維羅刹四卷の略名、宋の求那跋陀羅譯す。

【十八梵】色界の十八梵天。

【六欲天】欲界の六天即ち四王天、忉利天、夜摩天、兜率天、樂變化天、他化自在天の六を指す。

【十六大國王】史

せしと文義相同じ。今別行する地持の戒本の首に歸敬の偈を安する者是なり。又沙門道進

といふものあつて菩薩の戒を求むるに、三藏亦許可せずして且く懺悔せしむ。七日夜竟つ

て乃ち受戒を求む、三藏大に怒つて答へず、道進更に懺すること首尾三年、夢に釋迦文佛

の已に戒法を授け、悉く皆誦得すと見る。明日、夢みる所を説かんと欲して未だ十歩に至

らざるに、三藏已に知つて驚起して唱へて言はく、「善哉善哉、汝已に戒を感じり、我當に

作證すべし」と。佛像の前に於て三藏與に戒法を説く、夢に受くる所と一同なり。時に道朗

法師といふものあり、道進の感夢の夕亦夢成を感ず、道進と同じ。今別行する高昌戒本は

是なり。當に知るべし、菩薩の戒法は根機希有なり。彼天竺國には猶外道あつて佛道を信

ぜず、亦小乘あつて大乘を信ぜず。其大唐國にも亦道法あつて佛法を許さず、亦小乘あつ

て大乘を許さず。我日本國には皆大乘を信ず。一人として成佛を願はざるものあること無

し。『瑜伽論』に云はく、「東方に國あり、唯大機のみあり」と。豈我國に非ずや。『耆闍維

に云はく、「若し釋迦の名號を聞けば未だ發心せずと雖も已に是れ菩薩なり」と。我國の衆

生誰か菩薩に非ざらん。戒法を發さんと欲せば當に深心を發すべし、深心若し熟せば戒法

儻ち現る、我れ證明と作らん。當に知るべし、三藏會て道進が證明と作りき、此中何

れの衆か菩薩戒を求むる。昔、佛在世に梵網戒の時には諸の菩薩、十八梵、六欲天、十

六大國王、王子、百官、比丘、比丘尼、信男、信女皆來りて菩薩戒を聽き、淨行の戒の



伽、摩竭提等の十  
六天國を言ふ。

【信男】 清信男と  
も言ひ、優婆塞の  
異名なり、三歸五  
戒を受けし男子を  
清信男、女子を清  
信女と稱す。

【淨行】 優婆夷淨  
行法門經。

【淨居天】 無煩天  
無熱天、善現天善  
見天、色究竟天の  
五天にして色界の  
第四禪に不還果を  
得し者の生るる所

【光音天】 色界の  
第二禪の終天。

【非想天】 三界の  
頂上に在りて果報  
の最も勝れたる處

【心地觀】 大乘本  
生心地觀經の略名

【欲天】 六欲天。  
【色天】 色界の十  
八天。

【四業】 輪轉王。  
發起業、  
當機業、 影向業、  
結緣業。

【仁王】 仁王經の  
略。

【無色天】 無色界

【無色天】 無色界

普通授菩薩戒廣釋

二乘、欲天、色天、輪王、國王婦人、八部四衆、餓鬼、禽獸、閻王、獄卒皆來りて菩薩戒を聽き、仁王の時には無色天下り、方等の時には婆藪仙人地獄衆を引ゐて來りて大乘を聽く。而るに有が云はく、「無色と淨居とは唯小にして廻せず、無想と外道とは唯邪にして發さず」と。有が云はく、「本業に云はく、六道の衆生、戒を受得ず、但語を解すれば得戒して失はず」と。然るに無色界には顯には則ち説かず、室には則ち遮無し。【虚空藏經】には淨居天子下つて佛説を受くと。無想の外天も初後は想あれば發することあるべし、北州は頑黨、三途は苦重くして語を解せざれば理は得受無かるべし。三途の輕苦なるものは亦受戒を得ん」と。然るに【梵網】に云はく、「佛子、人の與に戒を受けしめん時は一切の國王、王子、大臣、百官、比丘比丘尼、信男信女、姪男姪女、十八梵、六欲天、無根二根、黃門奴婢、一切の鬼神をも簡擇することを得ざれ、盡く受戒を得しめよ」と。佛在世の時は六道八部も皆人形に化して來りて法を聽く。【法華】に云はく、「若は法師の説法の處には我變化人を遣はして而も法を聽かしむ」と。涅槃に云はく、「末世の中にも二萬の菩薩あつて大乘を受持す」と。故に今の現前の人衆も凡聖溷り難し。十住に云はく、「四方の一方の虚空の中の無形の衆生は、四天下の衆生の數と等し」と。故に今冥道の大衆の多少量らんや。一切を擇ばず普通に戒を授けて、各所衆に隨つて當にし衆と作すべし。謂ゆる菩薩の比丘、比丘尼、清信男、清信女、沙彌、沙彌尼、式叉摩尼なり。有が云はく、「若しは在家の戒は一切遮無し、語を解すれば皆受く。若は出家の戒は唯人の男女のみ遮無ければ

【無色天】 無色界

五

の四處を指す。

【娑叢仙人】初め

婆羅門に歸して地獄に墮し、後無量劫を経て華聚菩薩の火光明力に依つて地獄より出て佛所に至ると傳ふ

【無想】無想天にして無想有情の天處なり。

【本業】菩薩本業經の略名。

【無色界】三界の一、此界には物質的なものはなく、但誠心のみあつて深妙なる禪定に住す。

【虚空藏經】虚空藏菩薩經一卷の略名、姚秦の佛陀耶舍譯す。

【黃門】五種不男にして十三難の一

【娑叢仙人】初め婆羅門に歸して地獄に墮し、後無量劫を経て華聚菩薩の火光明力に依つて地獄より出て佛所に至ると傳ふ

方に受く。義は聲聞に同じ。文の中には在家、出家、沙彌、具足を簡はず、唯得受と言ふ。

若しは下の文に準せば、服をして俗と異ならしめば應に出家に通ずべし。然るに受法に二

あり、若し律法の白四の受に準せば、應に須らく無根等の類を簡擇すべし。若し三歸三聚

の總受に依らば理は應に通受すべし。文に簡ぶこと無きが故に具足を受くることを許す、

但し比丘等の性を成ずることを許さず。半擇迦の如きは五戒を受くることを許す、但し其

近事男の性を許さず」と。今謂く、爾らず。『善生』に云はく、『在家の菩薩の受も亦白四羯

磨を用ひて得戒す。』と『涅槃』に云はく、『世教戒を受くる者も白四羯磨して然る後に得戒

す。』と『戒壇圖』に云はく、『菩薩戒聚は白四に非ざれば而も生ぜず。』と、故に知んぬ、菩

薩の七衆も共に白四羯磨を用ひて得戒す。七衆共に受くるに別して三名あり。一には云は

く、受者の樂に隨つて各一衆を成す。故に『本業』に云はく、『一分の戒を受くるを一分

の菩薩と名け、乃至具分の戒を受くるを具足の菩薩と名く。』と『二』には云はく、七衆皆菩薩

僧と名く。故に『涅槃』に云はく、『僧をば和合と名く、和合に二あり、一には世和合、聲聞

僧と名け、二には第一義和合、菩薩僧と名く。』と『淨行』には在家の菩薩をば皆大優婆塞

僧と名け、出家の菩薩をば比丘僧と名く。三には云はく、七衆を皆如來と名く。故に『梵

網』に云はく、『菩薩戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。』と『三義ありと雖も第三を正義と

なす。此は是れ如來の金剛寶戒、此戒を受け竟るを皆佛と名く。故に冥顯の大衆、得戒を

知らんと欲せば、我語趣を解るは是れ得戒の相なり、若し解らずんば自ら非器なりと知る

【十住】 十住經六卷の略、羅什譯。

【四天下】 東大娑提、南閻浮提、西瞿耶尼、北鬱單越の四を指す。

【式叉摩尼】 沙彌尼の六法を學せる者。

【平擇迦】 黃門、不男等の不具者を言ふ。

【近事男】 優婆塞【養生】 養生經の略。

【戒壇圖】 戒壇圖經一卷、唐の道宣撰す。

【第一義和合】 第一義は究竟の眞理に義は。

【金剛寶戒】 梵網經所說の大乗戒を言ふ。

【金剛神】 金剛力士、執金剛神等と言ふ。

【三】 開導六法の第二信心を觀ずの旨を明す。

【心識】 識は心境に對して了別する

べし。故に『梵網』に云はく、『若し佛戒を受けん者は國王、王子、百官宰相、比丘比丘尼、十八梵、六欲天子、庶人黃門、姪男姪女、奴婢八部、鬼神金剛神、畜生乃至變化人、但法師の語を解すれば盡く戒を受得して皆第一清淨者と名く』と。又『淨行』に云はく、『六道の衆生も戒を受得す、但語を解すれば戒を得て失はず。此を眞法戒を修すと名く』と。能く解せりや不や。

二に信心を觀ずとは、『淨行』に云はく、『若し一切衆生、初て三寶海に入るには信を以て本と爲し、佛家に住するには戒を以て本と爲す。始行の菩薩の若は男、若は女の中、諸根具はらず、黃門二根、姪男姪女、奴婢變化の人等も皆戒を受得す。皆心識あつて菩提に向ふが故なり。』と。云何なるをか信と名く、『梵網』に云へるが如き、若佛子常に大乘の信を生じて、自ら我は是れ未成の佛、諸佛は是れ已成の佛なりと知つて、常に是の如きの信を作さば戒品已に具足すべし。若し一念にも二乘外道の心を起さば輕垢罪を犯す。又云はく、『若佛子利養の爲の故に未受菩薩戒者の前、外道惡人邪見の人の前に於て、此千佛の大戒を説くことを得ざれ。是惡人の輩は佛戒を受けざれば名けて畜生と爲す。生生に三寶を見ず、木石の心無きが如く、木頭と異ること無けん。而も是前にして説かば輕垢罪を犯す。』と。又『善戒經』に云はく、『此菩薩戒をば應に不信の者に向つて説くべからず、乃至謗大乘の者に向つて説かざれ。若し不信の者は是因縁を以て地獄に墮するが故なり。』と。又『涅槃』の中に、信不具足を一闡提と名く、無量劫の中地獄を出ること難し、故に佛戒を受

を言ふ、古來俱舍には心と識は同體の異名なりとすも、唯識にては別體と爲す【苦戒經】菩薩善戒經の略名。

【四】開導六法の第三意樂を察すを明す。

【即身に成佛せん】凡夫身其儘にして佛なりと違觀するを言ふ。

【瓔珞】菩薩本業瓔珞經二卷、姚秦の竺佛念譯。

【古察】古案善惡業報經二卷、隋の菩提燈譯。

【廻心向大】小乘の小心を廻して大乘の小心に向はしむるを言ふ。

【無上道】如來所得の最上道。

【淨戒波羅密多】淨戒は大乗戒、波羅密多は到彼岸と譯す。即ち解脱道の大成を意味す。

【十無盡戒】梵網

けんと欲せば當に深信を起すべし。

三に意樂を察すとは、何の意樂あつてか菩薩戒を求むる。且く十種の意樂あれば皆受戒を許す。一には若し即身に成佛せんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に「梵網」に云はく、「一切有心の者をば皆應に佛戒に攝すべし、衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る、位大覺に同じし已ぬれば眞に是れ諸佛の子なり。」と。二には若し菩薩の位を紹がんと欲する者に我當に戒を授くべし、故に「瓔珞」に云はく、「三寶の海に入るには信を以て本と爲し、佛家に住するには戒を以て本と爲す。始行の菩薩の若し男、若し女、初て發心し出家して菩薩の位を紹がんと欲せば、當に先づ正法戒を受くべし、戒は是れ一切行功德藏の根本にして正しく佛果の道に向ふ一切行の本なり、能く大惡を除く正法の明鏡なり。」と。三には若し直往の菩薩たらんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に「古密」に云はく、「若し善男女十戒の法を受くれば菩薩の沙彌沙彌尼と作り、白四羯磨して三聚戒を受くれば菩薩の比丘比丘尼と作る。」と。四には若し廻心向大せんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に「大般若」に云はく、「彼根性を觀じて爲に大乘を説いて、其をして廻心せしめて無上道に入るるを淨戒波羅密多と爲す。」と。五には若し永く戒を失せざらんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に「瓔珞」に云はく、「佛子、十無盡戒を受け已れば四魔を過度して三界の苦を越え、生より生に至るまで此戒を失せずして常に行人に隨ふ、乃ち成佛に至る。若し三界の一切衆生の是菩薩戒を受けざらん者は、有情識者と名けず、畜生に異なること無し、

經所説の十重禁戒を指す。

【十重四十八輕戒】梵網經所説の十波羅夷罪と、四十八輕罪を指す。

【對首懺】三種羯磨法の一、一人乃至四人の比丘に對面して懺悔するを言ふ。

【七遮】出佛身血、殺父、殺母、殺和尚、殺阿闍梨、破羯磨轉法輪僧、殺聖人の七罪。  
【地持】菩薩心持經八卷、北涼の曇無讖譯す。

名けて人と爲す、常に三寶海を離れて菩薩に非ず、男に非ず女に非ず、鬼に非ず人に非ず、名けて畜生と爲し、名けて邪見と爲し、名けて外道と爲す。人情に近からず。故に知んぬ、菩薩戒は受法のみあつて捨法無し、犯あれども失せずして未來際を盡す。其戒を受くる者は諸佛の界、菩薩數の中に入つて三劫生死の苦を超過す。是故に應に受くべし、有にして而も犯するは無にして犯ぜざるに勝る。有犯をば菩薩と名け、無犯をば外道と名く」と。又『淨行』に云はく、『若し發心して菩提に向ふ者有らん、當に知るべし、十無盡戒を受けて後に數犯すと雖も名けて佛子と爲す。此人未來に當に作佛すべきが故に。』と。六には若し重ねて佛戒を受けんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に『梵網』に云はく、『若し十戒を犯すること有らん者は應に懺悔することを得べし。佛、菩薩の像前に在つて、日夜六時に十重四十八輕戒を誦し、苦到に三世の千佛を禮して好相を見ることを得べし。若し一一三七日乃至一年にして要す好相を見るべし。相とは佛來つて頂を摩し、光花種種の異相あれば便ち滅罪を得るなり。若し好相無くんば懺すと雖も益無し、是人は現身に亦戒を得ざれども而も増受戒を得るなり。』と。若し四十八輕戒を犯せば對首懺するに罪滅す、七遮に同じからず。意の云はく、『若し十重を犯せば修懺して相を見つれば還つて本戒を得るなり、若し相を見ずんば而も更に重ねて受けよ』と。若し四十八を犯せるは但對首懺するに還つて本戒を得べし。故に『本業』に云はく、『十重は犯あれば懺無きも、重ねて受戒せしむることを得、八萬の威儀をば輕と名け、悔過せしむることを得、對首懺に滅す。』と。地

【慈湯】比丘に同

【別解脱戒】受戒

乃至具足戒を受け

別に解脱する戒法

【他勝處】波羅夷

を譯して他勝處と

言ふ佛法を自勝と

なし、魔法を他勝

となす。

【集法悅經】佛說

集法悅捨苦陀羅尼

經一卷。

【普賢觀】觀普賢

經一卷、劉宋の曇

摩蜜多譯。

【普賢懺】普賢菩

薩を觀念して六根

の罪を懺悔するを

言ふ。

【沙彌戒】十戒。

【沙彌尼戒】小戒

-5 65 35 195" data-label="Text">

不

持に云はく、「茲薊の別解脱戒に任し、他勝處の法を犯す如きは、現法中に於て更に受く

るに任へず。若し諸の菩薩、此毀犯に由つて菩薩の淨戒律儀を棄捨するも、現法中に於

て更に受くるに堪任へたり、堪任へざるには非ず」と。「瑜伽」に亦云はく、「此因縁に由つ

て當に知るべし、菩薩の律儀を棄捨して若し還つて清淨の愛心を得ることあらば、復應

に還つて受くべし。」と。然も此菩薩戒の中には唯七逆を遮して受戒を許さず。有が云はく、

「七逆も懺せずんば受くることを得ず、若し懺すれば亦受くることを得」と。故に「集法悅

經」に云はく、「他の犯せる五逆罪を遮して、王の爲に悼怖せられて、沙門と作りて他國に

在り、修行して三十年乞食す、道中に大鉢の中に「集法悅捨苦陀羅尼」あるを得て讀誦する

こと一年、始めて滅罪を得、七日陀羅尼の字を思惟するに心中に忽ち定を得、千金を得たる

が如し。飛行して三世諸佛を視見す。」と。有が云はく、「此説は未だ誠證と爲さず、經力

をもつて罪を滅すれども得戒とは説かず」と。今謂く、「普賢觀」に云はく、「普賢懺を修す

る者を具足菩薩戒者と名く、白四羯磨を須ひざれども自然に成就す。若し聲聞の三歸、五

戒、八戒、比丘戒、比丘尼戒、沙彌戒、沙彌尼戒、式叉摩尼戒を破し、若し優婆塞の諸

の不善を犯し、若し王者、大臣、婆羅門、居士、長者、宰官の五逆罪を作り方等經を謗る

ものは、當に方等第一義空を修すべし、罪垢永く盡き、戒法を具足し久しからずして當に

阿耨菩提を成すべし。」と。「藥師」に亦云はく、「若し善男女、三歸戒、五戒、或は十戒、或

は菩薩の一百四戒、或は二十四戒、或は比丘の二百五十戒、或は比丘尼の五百戒、或は菩

薩の

略。

【方等經】大乘經

【藥師】藥師經の

【四重】姪戒、盜戒、殺人戒、大妄語戒の四波羅夷罪  
 【四恩】父母恩、衆生恩、國王恩、三寶恩。  
 【波羅提木叉】七衆の別解脫律儀を言ふ。  
 【梵釋】梵天と帝釋天即ち色界の諸天を總じて梵天と言ひ、欲界忉利天の主を帝釋と言ふ。

薩戒を受けて、所受の中に隨つて禁戒を毀犯すとも、若し能く樂師如來を供養すれば三惡に墮せじ。」と。故に知んぬ、大乘の懺悔は力強大にして能く五逆四重破戒謗法の大罪を滅し、菩薩の戒法自然に成就す。然して佛は極重を遮せんが爲に七逆を除くと説きたまへる而已。七には若し四恩を報ぜんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に『梵網』に云はく、『釋迦文佛無上覺を成じて初て菩薩の波羅提木叉を結す。父母、師僧、三寶に孝順せよ、孝順は至道の法なり。戒を名けて戒と爲し、亦是制止と名く。諸佛の本源なり、菩薩道を行するの根本なり、諸佛子の根本なり。』と。『心地觀』に云はく、『世間の恩に其四種あり。一には父母の恩、一切衆生五に父母と爲り、生生世世養育すること深きが故に。二には衆生の恩、一切衆生は菩薩の恩處なり、衆生を利益して佛道を成ぜしむるが故に。三には國王の恩、正法をもつて世を治め、自他に善を修せしむ、此恩に依るをもつて功德を行するが故に。四には三寶の恩、常に法界に住して衆生を引導し、拔苦與樂して菩提に致すが故に。』と。普く四恩を報ぜんが爲の故に、清淨の菩提心を發起して應に菩薩の三聚淨戒を受くべし。恩を知つて恩に報ずるを持戒と名く。八には若し一切の護を得んと欲する者に我當に戒を授くべし。故に『大毘婆沙』に云はく、『若し衆生あつて菩薩戒を受くる初心の功德は、一切の諸佛如來の後心の功德に超勝せり。何を以ての故に。一切の諸佛の等正覺を成じたまふには、有縁の衆生のみ供養し恭敬す。若し衆生あつて菩薩戒を受くれば、一切諸佛、菩薩聖衆皆其所に來りて摩頂護念したまふ、一切の梵釋、八部、鬼神も皆其所に

【二障】煩惱障、所知障の二を言ふ。  
 【三障】煩惱障、業障、報障。  
 【百氣】惑の現行を伏し、惑の種子を斷ずるも尙惑の氣分ありて惑相を現するを言ふ。  
 【善逝】佛十號の一。  
 【三身】法身、報身、應身。  
 【貪瞋癡】引取の心は貪、悲忿の心は瞋、迷闇の心は癡なり。  
 【轉輪王】此王身に三十二相を具し位に即く時天より輪寶を感得し、其輪寶を轉じて四方を降伏するが故に轉輪王と言ふ。

來りて翼從衛護す、一切の六趣四生の衆生も皆其人の爲に心を歸して渴仰す。其發心して來世に作佛し、能く一切の爲に依處と作るを以ての故に」と。『梵網』に亦云はく、「若佛子、國王の位を受けんと欲する時にも、轉輪王の位を受けん時にも、百官の位を受けん時にも、應に先づ菩薩戒を受くべし。一切の鬼神、王の身、百官の身を救護し、諸佛は歡喜したまふ」と。『心地觀』に亦云はく、「是の如きの三聚の清淨戒は三世の如來の護念したまふ所なり。無聞非法の諸の有情は無量劫の中にも未だ聞見せず、唯過去十方の佛のみ有して已に淨戒を受けて常に護持したまふ。二障の煩惱を永く斷除して無上菩提の果を獲得す。未來の一切の諸の世尊も三聚の淨戒寶を守護し、三障并に習氣を斷除して當に正等大菩提を證すべし。現在十方の諸の善逝も具に三聚淨戒の因を修し、永く生死苦の輪廻を斷じて三身の菩提の果を證することを得。生死の深大海を超越するには菩薩の淨戒を船筏と爲し、貪瞋癡の繫縛を求斷するには菩薩の淨戒を利劍と爲し、生死の峻道の諸の怖畏には菩薩の淨戒を舍宅と爲し、自ら貧窮の諸の苦因を除くには淨戒能く如意寶と爲り、鬼魅に着かるる諸の疾病には菩薩の淨戒を良藥と爲し、人天に王と爲りて自在を得るには三聚戒を良縁と作す。及び餘の四趣の諸の王身も淨戒を縁と爲して勝果を獲るなり。是故に能く自在の因を修して當に王と爲ることを得て尊貴を受くべし。應に先づ十方の佛を禮敬して日夜に清淨戒を増修すべし。諸佛は當受持を護念したまふ。戒は金剛に等うして破壊すること無し、三界の諸天、諸の善神、其身及び眷屬を衛護したまふ。



一切の怨敵も皆歸伏し、乃至万姓歡娛して所化を感ず。是故に菩薩戒を受持して世出世無爲の果を感ずべし。』と。九には若し一切の王と作らんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に『心地觀』に云はく、『諸王の所受の諸の福樂は往昔に曾て三淨戒を持し、戒德薰修して招感する所の人天の妙果、王の身を獲るなり。若し人、菩提心を發起すれば願力無上の果を資成す。上品の清淨戒を堅持すれば起居自在にして法王と爲り、神通變化十方に満ちて縁に隨つて普く諸の群品を濟ふ。中品に菩薩戒を受持すれば福徳自在の轉輪王となつて、心に隨つて作す所盡く皆成じ無量の人天悉く尊奉す。下の上品の持は大鬼王となりて一切の非人咸く率ひ伏す、戒品を受持すれば毀犯すと雖も戒の勝るに由るが故に王と爲ることを得。下の中品の持は禽獸の王となり、一切の飛走皆歸伏す、清淨戒に於て缺犯あれども戒の勝るに由るが故に王と爲ることを得。下の下品の持は琰魔王となり地獄の中に處して常に自在なり、禁戒を毀りて惡道に生ずと雖も戒勝るに由るが故に王と爲ることを得。若し如來戒を受けざるものあらば終に野干の身をすら得ること能はず、何に況んや能く人天の中の最勝の快樂を感じて王位に居らんや。是義を以ての故に諸の衆生應に菩薩の清淨戒を受くべし。』と。十には若し三世の化を紹がんと欲する者に我當に戒を授くべし。故に『梵網』に云はく、『汝新學の菩薩、戒を頂戴し受持すべし。是戒を受持し已つて轉じて諸の衆生に授けよ。若し國王王子、百官、比丘比丘尼、信男信女の菩薩戒を受持せん者は、應に佛性常住の戒卷を受持し、三世に流通すべし。一切の衆生化化絶

【五】開導六法の第四道場を擇ぶを

【淨滿如來】 盧遮

那佛

【蓮華臺藏】 佛菩薩の座處

【第四禪】 色界四禪天の第四、即ち最高處なり

【兜率天】 欲界の天處にして夜摩天と樂變化天との中間にあつて下より第四重に當れり

【伽耶山】 象頭山とも言ふ

【施鹿林】 即ち釋迦初轉法輪の地なり

【戒壇】 戒を授くる式場

【一向大乘寺】 大乘のみに依る寺

【一向小乘寺】 小乘のみに依る寺

【大小兼行寺】 大小

えず、千佛を見たてまつることを得て、千佛手を授けて世世に惡道八難に墮せずして常に人道、天中に生ぜん。」と、十種の意樂を得んと欲せば餘乘の果報を求むること莫れ、一向に當に無上菩提を求むべし。能く求めんや不や。

四には道場を擇ぶ。道場に二あり、一には外道場、二には内道場なり。一には外道場とは、昔、淨滿如來、蓮華臺藏を以て菩薩の戒場と爲す。次に釋迦如來、第四禪の中の菩提樹下を以て菩薩七衆の戒場と爲す。兜率天上を菩薩の在家の戒場と爲し、伽耶山頂を菩薩の沙彌の戒場と爲す。施鹿林の中には小乘戒場を結したまふ、故に南閻浮提に始めて三戒壇あり。『祇洹圖』に云はく、『祇洹の一寺に頓に三壇を結す、一には菩薩の戒壇、二には比丘の戒壇、三には比丘尼の戒壇なり。』と。今五天竺に三種の寺あり、一向大乘寺、一向小乘寺、大小兼行寺なり。各戒壇あり。眞旦國の中には昔、秦の羅什三藏、草堂寺に於て始めて菩薩戒藏を譯す、秦主、菩薩戒を受く。及び融影等三百人の輩、同じく大戒を受く、乃ち戒壇あり。梁の天監帝、方等經を抄し受菩薩戒法を撰す。等覺殿を構へて大圓壇を築き、草堂寺の惠均法師を延いて菩薩戒を受く、崇んで僧正と爲し、號けて智者と爲す。公侯の弟子四萬八千人あり。又普通中に帝、光宅寺の雲法師を獎て菩薩戒を受く。雲、光花殿にして大功徳を修す。上帝、隨喜して大僧正と爲し、同秦寺に於て大戒壇を築き羯磨拜受す。

又天監中に帝、南潤寺の惠超法師を詔じて等覺殿に於て菩薩戒を授く、大僧正と爲す。隋の煬帝、金城に於て大戒壇を築き、天台山の智顛禪師を請じて菩薩戒を受く、禪師、帝を

小二乘兼學の寺。

【羅什三藏】 秦の國に生れ、苻秦の時支那に來りて多くの經論を譯す。

【雲法師】 法雲法師。

【智顛禪師】 支那天台立教開宗の祖所謂天台智者大師なり。

【弘仁の皇帝】 嵯峨天皇。

【福田】 應に供養すべき者に於て之を供養すれば能く諸の福報あり。

【七難】 日月失度難、星宿失度難、災火難、雨水難、惡風難、充陽難、惡賊難。

【三災】 刀兵災、疾疫災、飢饉災を小三災と言ひ、火災、水災、風災を大三災と言ふ。

名けて總持菩薩と爲し、帝、禪師を名けて智者大師と爲す。事、梁帝の均法師の徽號を擧るに同じ。又淨影寺の慧遠法師、大象年中に詔りあつて東西の兩京に各戒壇を立てて菩薩僧を安す。我日本國の勝寶六年、大唐の鑒眞和尚、東大寺の大佛殿の前に於て大戒壇を築き、天皇、太后に菩薩戒を授く。傳教和尚は大唐の台州國清寺の西廊の下にして菩薩の大僧戒を受く、弘仁の皇帝遂に東山に於て大戒壇を建てたまへり。貞觀年中、慈覺大師、大内にして上帝、太皇太后、皇太后、公侯等各宮幃に於て大戒壇を飾つて菩薩戒を受く。上帝、道を崇んで僧正の位を贈る、兩師の諡號を傳教大師及び慈覺大師といふ。自餘の戒地は説盡す可からず、故に知んぬ、緣に隨つて場を聞く由來尙し。戒に緣つて徳を崇ぶ古今同じ。然るに其戒壇は是れ國主、國人の大福田、佛子菩薩の菩提場、三世諸佛の得道の處、一切如來の所住地なり。故に「境界」に云はく、「若し四恩の爲に道場を建立すれば國に七難無く萬姓安樂なり。何を以ての故に。此道場の地は金剛際乃至微塵に至るまで皆國王に屬す。此王曾此地に於て菩薩戒を受持すればなり。」と。故に「賢聖傳」に云はく、「若し菩薩戒を受くる地は變じて金剛道場」と成る。大劫三災の現する時にも此地を破壊すること能はず。」と。有が云はく、「餘地は皆壞すれども此處は柱の如し」と。有が云はく、「孟情に壞と見るとも法場は壞せず、此地は得戒の菩薩の後身の當坐の道場なり、餘地は此菩薩身の金剛の力を任持すること能はず、唯此地のみあつて其金剛の體を任持して正覺を成ぜしむ」と。「法花」に云はく、「若し説法の處は即ち是れ道場なり、諸佛此に於て等正覺

【般若波羅蜜】生死の因果を滅し、生死の瀑流を渡るを指す。

【毘盧遮那遍一切處】法身の如來を指す。

【常寂光】佛の所住の所を常寂光土と言ふ。

【常波羅蜜】常波羅蜜の有相を滅するところ。

【我波羅蜜】佛果に至つて我徳を成就す。涅槃の徳をいふ。

【樂波羅蜜】常寂光上の常樂我淨の四徳は皆波羅蜜の所成なり。

【般若波羅蜜】般若智慧、波羅蜜は到彼岸と譯す。實相を照す智は能く、到彼岸の功能あるが故に斯く言ふ。

【五分法身】五種の功德法を以て佛身を成ずるを言ふ。戒、定、慧、解脱、知見なり。

【花嚴】大方廣佛

を成じ、大法輪を轉じて數大涅槃す。」と「普賢觀」に「菩薩戒は自然に成就す。」と又云はく、「行者問うて云はく、何れの處にして此法を修行せん、空に聲ありて答へて云はく、釋迦牟尼をば亦是毘盧遮那遍一切處と名く、其佛の住處を常寂光と名く、常波羅蜜に攝成せられたる處なり、我波羅蜜に安立せられたる處、淨波羅蜜の有相を滅せる處、樂波羅蜜の身心の相に住せざる處、有無の諸の法相を見ざる處なり。寂解脱乃至般若波羅蜜の如きは是れ色常住の法なるが故なり。是の如く常に十方の諸佛を觀すべし。」と當に知るべし、菩薩戒を受くる地をば常寂光土と名く、一切如來の五分法身の究竟證會の處なり。「花嚴」に云ふが如きは、法の如く一微塵の中を觀察するに則ち三世十方の諸佛の慈心、成道、法輪、涅槃の相あり。即ち今の菩薩の戒場なり。二に内道場とは即ち我自身なり。故に「涅槃」に云はく、「云何が長壽金剛不壞の身を得る、復何の因縁を以てか大堅固利を得る。佛會自身に於て菩薩戒を修したまへるが故なり。」と。「金光」にも亦云はく、「如來何が故に舍利を禮拜する、如來の戒定慧等の功德は皆此身に依つて而も修得したまへるが故なり。」と。「境界」に亦云はく、「行者の自身は即ち是れ道場なり、一切如來の五分法身皆來つて中に住す。當に知るべし、菩薩戒を受くるの身は即ち是れ金剛の道場なり、一切諸佛、此中に集會して未來際を盡して捨離す可からず、身は虚空の永く敵對無きが如し、十方世界の四魔の境界力を盡して壞せんと欲すれども毛孔をも傾くること莫し。華嚴に云ふが如きは我此道場は帝珠の如し、十方の諸佛の影の中に現す。」と。即ち今の菩薩戒を受くるの

【華嚴經の略名】  
【金光】 金光明經の略

【舍利】 佛の身骨  
【四衆】 發起衆、當機衆、影向衆、血緣衆

【事火婆羅門】 火に事へて道を求むる梵士を言ふ

【六】 開導六法の第五師の相を示すを言ふ

【妙海】 妙海王。【逸多菩薩】 彌勒菩薩の異名

【須利蘇摩】 天竺の人、羅什三藏の師なり

【南岳の九師】 明師、最師、嵩師、就師、思師、慧師、文師、監師、顛師の九師相承を言ふ

【天台の八祖】 智顛、灌頂、智威、慧威、玄朗、湛然、道邃、傳教の八祖

【南岳の九師】 明師、最師、嵩師、就師、思師、慧師、文師、監師、顛師の九師相承を言ふ

身は道場なり。已に道場の相を説く。今擇地の法を説かん。『梵網』に云はく、『若佛子、地に立ちながら四衆の爲に法を説くことを得ざれ。若し説法の時は法師は高座にして香花を供養し、四衆の法を聽かん者は下坐にして父母師教に孝順するが如くし、事火婆羅門の如くせよ。若し如法に説かずんば輕垢罪を犯す』と。事須らく勝地の雜穢無き處を擇定すべし。清淨に莊嚴して地に安穩の高座を鋪き、乘法は下座にして法を納け、師に於て當に無上法塔の想を生ずべし。諸佛菩薩は先に法師の身に住するが故なり。『金光』に云へるが如きは、法師下坐せば其坐處を見ること猶諸佛菩薩の形像あるがごとくせよ。身に於て當に無上佛國の相を生ずべし、諸佛菩薩今受者の身に住せるが故なり。『法花』に云ふが如きは、佛子此地に住するは即ち是れ佛の受用なり。常に其中に在つて經行若は坐臥す。諒に須らく信力を地と爲し、法空を座と爲し、菩提心の香、大功德の花ありて無垢水を潤き無盡藏を設けて佛の戒法を納くること、猶瓶に滿ぐが如くし、心に佛位を證すること宛も掌を反すが如くすべし。

五に師の相を示す。師相に三あり、一には諸佛師、若は眞佛、若は佛像、若は生身の舍利、若は道具錫鉢、若は法師の舍利、大乘の經卷なり。具には『梵網』の戒本の如し。昔、妙海及び千の王子、盧舍那に従つて菩薩戒を受く。釋迦、盧舍那の教勅を受けて菩提樹に下りて轉じて逸多菩薩に與ふ。是の如く二十餘の菩薩次第に相付す。須利蘇摩、次に羅什に付す。羅什秦に傳ふ。乃至南岳の九師、天台の八祖相付す、今、東山に傳ふるは是なり。

【燈明佛】日月燈明佛と言ふ、過去の如く法華經を説きし佛なり。  
 【伊波勒菩薩】曇無讖と同人なりと傳ふ。

【無著菩薩】印度の人、法相宗の祖として有名なり。  
 【瑜闍國】印度昔時の橋薩羅國に屬地なり、今のオードの地なり。

【瑜伽論】瑜伽師地論の略名、一百卷、彌勒菩薩説、玄非三藏譯。  
 【世親】無著の實弟、毘陀羅國の人、瑜伽宗の祖なり。

【護法】唯識十大論師の一人、其年時を明かにせず。  
 【玄非】唐の大慈恩寺の玄奘三藏、支那法相宗の開祖にして印度に至つて數多の經論を求む。譯出する經論凡そ七十五部一千三百三十五卷と言

又「地持」の戒本の如きは、是れ燈明佛の説なり。蓮花藏菩薩受けて次第に四十餘の菩薩相承く、伊波勒菩薩、來つて北涼に傳ふ、即ち曇無讖是なり。二には菩薩師、若は眞聖、若は聖像、謂く眞の菩薩の像なり、凡夫假名の形に非ず。若は生身の舍利、若は持物錫鉢、若は法身舍利、大乘の律論なり。具には瑜伽決擇分の菩薩戒の如し、是は無著菩薩なり、兜率天上に昇り彌勒の眞身に値つて大乘空の義を承く。後に彌勒を請じて瑜闍國に下り、後夜の分に於て瑜伽論を説かしむ。無着獨り聽いて大衆は聽かず、但、光明香氣を見る而已。世親、護法次第に相承く。玄非は西に入つて正法藏に承く。今則ち弘道の門人の執する所の戒は是なり。「涅槃」にも亦云はく、「末法の中に二萬の菩薩あつて大乘の法を持す」と。其中の戒を受くるも亦是類なり。三には凡夫の師なり。若は内凡夫、若は外凡夫なり。形像、持物、法文を須ひざるなり。夫以れば三祇百劫は小乗の菩薩三祇は外凡、百劫は内凡なり。七大僧祇、百萬劫の行は通乘の菩薩なり。初の三僧祇は三賢四善根の外凡内凡なり。二十二僧祇、百千萬劫は別乘の菩薩なり、萬劫は外凡、三祇は内凡なり。即身成佛は圓乘の菩薩なり。五品は外凡、十信は内凡なり。故に知んぬ、今の四分律家の上品殊勝の發戒の菩薩、瑜伽論家の三乘普行迂廻の菩薩、無相論家の獨一修行歴劫の菩薩は此身に始めて大菩提心を發して未だ外凡に入らざれば師と爲るに堪へず。夫南山、慈恩、嘉祥の若きは、如し和光に非ざれば未だ戒師を許さず、何に況んや末代假名の菩薩をや。曾南岳の云はく、「一生に銅輪の十住に入らんと欲すれども、衆を領すること太た早くして

【三賢】大乘の十住、十行、十回向の菩薩を言ふ。  
 【四善根】小乘にては總相念住の後大乘にては十廻向の滿位に生ずる四種の善根なり。  
 【五品】隨喜、讚誦、說法、兼行六度、正行六度の五品を指す。  
 【十信】界内の見思を伏する位。  
 【南山】道宣律師  
 【慈恩】玄奘三藏  
 【嘉祥】嘉祥寺吉藏にして三論宗の祖なり。  
 【南岳】南岳慧思禪師と言ふ、天台智顛の師なり。  
 【十住】界内の見思塵沙を躋じ界外の塵沙を伏する位又彌輪と言ふ。  
 【鐵輪王】十信位  
 【兼輸王】十信位  
 【觀心論】智者大師撰、一卷  
 【菩薩地】菩薩地

但六根を淨むこと。即ち是れ圓乘の内凡、鐵輪王なり。又天台の云はく、「衆を領すること太だ早くして唯位五品なり」と。即ち是れ圓乘の外凡、衆散王なり。今の如き末代の圓乘の自他の佛性に深く隨喜を生じて十信具足するは第一品なり。讀誦經典は第二品、更加説法は第三品、兼行六度は第四品、正行六度は第五品なり。此五品の中に一品あるに隨つて即ち是れ外凡の位に入るなり。菩薩戒の師と作るに堪へたり。故に天台の「觀心論」に云はく、「能く問に答ふる者をば是れ五品なりと許す」と。云何が戒師の堪を知ることを得ん、若し一失、六弊あらば則ち不堪なりと知つて從つて戒を受けざれ。故に「菩薩地」に云はく、「又諸の菩薩、一切に從つて聰慧の者なりと雖も、菩薩所受の淨戒を受けんことを求めず。淨信無き者には應に受くべからず。一。慳貪ある者、淨戒を毀る者、忿恨ある者、憍情ある者、心散亂の者、闇昧ある者には應に從つて受くべからず。六。若し四能、五徳あらば則ち堪へたりと知つて應に從つて戒を受くべし。故に「菩薩地」に云はく、「要す、四徳を具して方に師と爲るに堪へたり、一には同法の菩薩、二には已發入願、三には有知自力、四には辨了開解なり」と。又羅什の云はく、「五徳を具せば應に當に師と爲るべし、一には堅持淨戒、二には年滿十歲、三には善解律藏、四には妙通禪慧、五には慧藏窮玄なり」と。「瓔珞」の戒本に云はく、「受戒に三種あり、一には諸佛菩薩の現在前に受得するは眞實の上品戒なり、二には諸佛菩薩の滅後に千里の内に先に受戒の者あらば請じて法師と爲して、我に戒を教授したまへ、我先づ禮足せん。應に是の如く語るべし、大尊者

持經八卷の略名、北涼の曇無讖譯す

【自誓受戒】

大乘の菩薩戒は、若し戒師無き時は佛前に於て自誓して大戒を受くることを許す。若し眞に發得せば夢中に佛の妙相を見ると言ふ

【和上】

師に依つて弟子の道力生ずるが故に、師を稱して和上と言ふ。

【文殊師利】

此菩薩は常に釋迦佛の左に侍して智慧を司ると言ふ。

【阿闍梨】

アーチヤールヤ (Acarya) 佛道修行の師となるべき高僧の敬稱なり。

を請じて師と爲さん、我に戒を授與せよと。其弟子、正法戒を得ば是は中品の戒なり。三には佛の滅度の後に千里の内に法師無からん時は、應に諸佛菩薩の像前に在つて、胡跪合掌して自誓受戒すべし。應に是の如く言ふべし、我某甲、十方の佛及び大地の菩薩等に白す、我一切の菩薩戒を學する者なりと。是は下品の戒なり、第二、第三も亦是の如く説くべし。と。『梵網』に亦云はく、若佛子、佛の滅度の後、好心を以て菩薩戒を受けんと欲する時には、佛菩薩の像前に於て自誓受戒せよ。當に七日佛前に懺悔して好相を見ることを得べし、便ち戒を受くることを得るなり。若し好相を得ずんば、應に二七、三七、乃至一年にも好相を得んことを要す。好相を得已つて便ち佛菩薩の像前に自誓受戒することを得べし。若し好相を得ずんば佛像の前にして受戒すとも得戒と名けず。若し現前に先受菩薩戒の法師の前にして受戒する時は、要す好相を見ることを須ひされ。是法師は師師相授せるが故に好相を須ひず、是を以て法師の前にして受戒せば即ち戒を得、重心を生ずるを以ての故に便ち得戒す。若し千里の内に能授の戒師無くんば、佛菩薩の像前に戒を受得することを得よ、而も要す好相を見よ。と。其自誓受は下品の戒法なり。『普賢觀』に云ふが如きは、若し菩薩戒を具足せんと欲する者は、罪を懺悔し已つて十方の佛に白すべし、唯願くば釋迦牟尼は我和上と爲り、文殊師利は我阿闍梨と爲り、當來の彌勒は願くば我に法を授けたまへ、十方の諸佛は願くば我を證知したまへ、大德諸菩薩は願くば我伴と爲りたまへ。我今佛に歸依し、法に歸依し、僧に歸依すと。三たび説き已つて次に自誓して六重



【龍種淨智尊王佛】  
名 文殊師利菩薩の異

の法を受くべし。六重の法を受け已りなば次に八重の法を受くべし。一日乃至三日、若は在家も出家も、和上の諸師を須ひされ。白四羯磨せされども自然に五分法身を成就す。其法師の授けたるは中品の戒法なり。『心地觀』に云ふが如きは、若し上品戒を受持せんと欲せば、應に戒師佛菩薩を請すべし、我釋迦牟尼佛を請じて當に菩薩戒の和上と爲すべし、龍種淨智尊王佛をば當に淨戒の阿闍梨と爲すべし、未來の導師彌勒佛をば當に清淨の教授師とすべし、現在十方の兩足尊をば當に清淨の證戒師と爲すべし、十方一切の諸菩薩をば當に修學戒の伴と爲すべし、梵釋、四王、金剛天をば當に學戒の外護衆と爲すべし。是の如きの佛菩薩及び現前の傳戒師を請じ奉るは、普く四恩を報ぜんが爲の故なり。清淨の菩提心を發起して、應に菩薩の三聚戒を受くべしと。『善戒』に亦云はく、  
『師に二種あり、一には不可見、謂く佛菩薩なり、二には是れ可見、謂く授戒の師なり。若し佛菩薩に於て受けざる者は菩薩戒と名けず。又現前の智者ありと雖も、猶應に佛菩薩の像前、若は經卷の前に在つて得戒すべし。若し形像經卷無くんば應に得戒すべからず。當に知るべし、三緣和合して方に應に戒を得すべし。』と。其佛菩薩は上品の戒法なり。若し現前授は唯佛世に在り、若し感夢授戒は滅後に通ず。如昔、西涼の道進は夢に釋迦の授戒を感じ、法進は夢に彌勒の授戒を感ず。若し無着の彌勒を請じて説かしむるが如きは此は唯上位なり。初心に闈らず。如今、釋迦已に滅し、彌勒未だ出でたまはず、某甲、師師相授の菩薩の戒法を受持する事は、須らく要す像前に於て亦聖師を請じて本師の戒を傳ふ

【身子】舍利弗の  
譯名なり

【目蓮】佛十大弟  
子の一、神通第  
一と稱せらる。

【正見】諸の邪倒  
を離れたる正觀を  
指す。

【一乘】一佛乘の  
教、即ち法華の教  
義を指す。

【四種の輪王】金  
輪王、銀輪王、銅  
輪王、鐵輪王。

【七】開導六法の  
第六戒徳を攝はす  
の旨を証す。

【灌頂】佛說灌頂  
經十二卷の略、東  
晉の帛尸梨蜜多譯

べし。但某甲、戒行全からず、知徳亦闕けたり。若し先法の人を拜するに非ずんば、誰か囊を忘れて珠を拾ふの能あらん。然れば聖教に依つて當に衆の心に應すべし。心地觀に云はく、「世出世間に三種の僧あり。一には菩薩僧、二には聲聞僧、三には凡夫僧なり。文殊、彌勒等は菩薩僧、身子、目連等は聲聞僧なり。若し別解脱の眞善の凡夫の正見を具足して他の爲に說法するは凡夫僧なり。」と。復二類の凡夫の僧あり、戒品全からざれども深く因果を信じ、一乘を讚誦して他の佛因を成じ、隨つて犯すれば隨つて悔して業障を消除す。鬱金花の如く然も萎悴すと雖も、猶一切の諸の雜類の花に勝れたり。正見の比丘も亦復是の如し、四種の輪王も尙及ばざる所なり。何に況んや餘類の一切衆生をや。殊戒を毀ると雖も正見を壞せず、是の如きの凡夫をも亦福田と名く。是の如きの福田僧を供養する者は、前の三の眞實の僧寶を供養して獲る所の功德と、正等にして異なること無し。故に某甲に於て當に佛勅を觀すべし。

六には戒徳を顯す。諸經に皆云はく、若し十惡、五逆、四重を造り、三寶を誹謗し、四恩に不孝なれば地獄に墮落して冥宮罪人となり、無量劫を經、地獄の餘報は餓鬼冥道鬼類に墮落して無量劫を經、餓鬼の餘報は畜生蚊虻蠅蟻に墮落して無量劫な經、畜生の餘報は生れて邊地に在り、下賤の奴婢となりて無量劫を經、邊地の餘報は中國に生ると雖も諸根不具なり。『灌頂』に云はく、「若し三歸、若し五戒、若し十戒、若し善信菩薩の二十四戒、一百四戒、若し沙門の二百五十戒、若し比丘尼の五百戒、若し菩薩戒、是諸の戒を破す

【報恩】大方便佛  
報恩經七卷、失譯  
【阿羅漢】阿羅漢  
は小乘の悟を極め  
たる位、又阿羅漢  
果とも言ふ。

【獨覺】緣覺の中  
に緣覺と獨覺の二  
義あり、前者は佛  
世に出て、十二因  
緣の教を受けて開  
悟するもの、後者  
は無佛の世に出て  
飛華落葉等を觀じ  
て空寂の理を悟る  
【有漏】煩惱を合  
める法を指す。  
【無漏】煩惱を離  
れたる法。  
【三善道】天道、  
人道、阿修羅道、  
三惡道に對して此  
三道を三善道と言  
ふ。  
【三善趣】三善道  
【同性】大乘同性  
經二卷、宇文周の  
闍那耶會譯す。

るも、若し琉璃光を聞かば三惡趣に墮せず。」と。『報恩』に云はく、「三歸、五戒は人に生れ、  
八戒は天に生じ、二百五十戒、三千の威儀、六萬の細行は阿羅漢を得、五百戒、六千の威  
儀、十二萬の細行は非想等の天に生ずるなり。若し菩薩戒を受くれば成、佛の果を得。」と。  
『涅槃』に云はく、「五戒、十戒、二百五十戒、菩薩戒は羅漢の果、支佛の果、菩薩の果、菩  
提の果なり。漸漸深と名く。」と。又云はく、「戒に復二あり、一には聲聞戒、二には菩薩戒  
なり。若し聲聞戒を受くれば佛性如來を見ず、若し菩薩戒を受くる者は能く菩提を見る。」  
と。『大般若』に云はく、「聲聞、獨覺等の心を起さざるを是を菩薩の尸羅と名く。」と。又云  
はく、「假使、人あつて妙高山を取つて梵世に上昇し之を下に投げん。彼適ち投げ已つて  
誠諦の言を發さん。若し菩薩戒、普く異生、聲聞、獨覺の諸の淨戒に勝れたらんには、  
今此山王、虚空の中に住せよと。言ひ已らば便ち住して必ず墮落せし。何を以ての故に。  
諸の菩薩戒は如來戒を除いて餘の淨戒に於ては、若し有漏、若し無漏にも最たり、勝た  
り、尊たり、高たらん。當に知るべし、外道の鷄狗等の戒は三惡道の破戒には勝れなり。  
三善道の正法戒は外道等の邪見の戒に勝れたり。二乘の聖出世の戒は三善趣の愛見の戒  
に勝れたり。諸の菩薩の廣大戒は二乘の小心を行する戒に勝れたり。諸の如來の果地の戒  
は菩薩の四分の戒に勝れたり。若し此如來の果戒を得んと欲せば、當に外道、人天、二乘  
の小戒を捨て、菩薩の大戒を求受すべし。」と。『同性』に云はく、「聲聞の十地、支佛の十地、  
菩薩の十地、諸佛の十地は皆、悉く毘盧遮那智藏海の中に流入す。」と。『涅槃』に云はく、「下

【四乘】羊、鹿、牛、大白牛車の四立つるの義あり。

【須彌山】一小世界の中心の山なり譯して妙高、妙光安明、善高等と言ふ。  
【三獸】兔、馬、象なり。

智觀の故に佛性を見ず、而も聲聞の菩提を得。中智觀の故に佛性を見ず。而も緣覺の菩提を得。上智觀の故に見ること了了ならざれども、而も菩薩の菩薩を得。上上智觀の故に見ることを了了にして、而も佛の菩提を得ん。如來は諸の衆生を教化し已つて、同じく共に祕藏の中に安住すと、『瓔珞』に云はく、『三乘に各三乘あり、聲聞の聲聞、聲聞の支佛、聲聞の菩薩、支佛の聲聞、支佛の支佛、支佛の菩薩、菩薩の聲聞、菩薩の支佛、菩薩の菩薩なり。』と。復、定慧あり、無盡門と名く。三乘に超越して菩薩の號を成ず、三三三、九乘同じく共に平等大慧に流入す。故に知んぬ、四乘に各菩薩あることを、天台を以て四教の菩薩と爲したまへり。『入印』に云へるが若きは、羊乘行の菩薩、馬乘行の菩薩、月日神通乘行の菩薩、聲聞神通乘行の菩薩、如來神通乘行の菩薩、云ふが如き、譬へば人あつて羊に乗りて彼他方世界に往くに、山海の障あつて彼界に至らず、乃至如し如來の神通に乗すれば鐵圍も礙げずして疾く彼界に至るが如し。五種の菩薩も亦復是の如しと。羊とは昔、太子幼にして羊車に乗じて俗學の堂に詣でしが如し。馬とは轉輪王の馬寶、一日に閻浮四邊の海中の金路を周行するが如し。月日とは日月輪の須彌山を周りて一日に一廻するが如し、天上の萬里は人中の一寸なり。聲聞とは四方の海に各一山あり、各三獸あり、合して十二神なり、聲聞の慈を行じて衆生界を化するは、八月一日の子神を始と爲し、次第に日に直る、夜半は子神を始と爲し、次第に時に直る、一日一時に三千界を周るが如し。如來とは諸の如來の如くんば、一念を越えずして三世に遊入し、一處を動ぜ

【迦旃延】佛十大弟子の一、論議第一と稱せらる。  
【元曉法師】新羅國黃龍寺の元曉、華嚴唯識に達す。

【法藏法師】支那華嚴の第三祖、人呼んで眞首大師と言ふ。

【頓教】頓大乘の教。

【顯密】顯教は斷惑證理の法門を顯露に明せるもの、即ち隨他意の教なり。密教は法身自内證の隨自意の説にして等覺の菩薩も窺知すべからざる教なり。

【有相無相宗】法相宗を有相宗と言ひ、三論宗を無相宗と言ふ。

【四教】藏教、通教、別教、圓教の四を指す。

【四分】四分律六十卷、五部中の曇無德部の律藏なり。姚秦の佛陀耶舍、竺佛念の共譯

すして一切に遍滿す。五種の菩薩、次での如く相喻ふるに有礙、無礙、遲速知んぬ可し。叡山は五が中に後の二を合して一圓に喩ふ。次での如く以て四教の菩薩と爲す。何を以ての故に。『智論』に迦旃延の小乘の菩薩を破すとして、更に歩行的菩薩、馬乘行の菩薩、神通乘、行の菩薩を明す、此れ則ち四菩薩なり。故に彼を以て此に合する而已、華嚴宗の元曉法師も亦四教の菩薩を立つ。三乘別教の菩薩、三乘通教の菩薩、一乘分教の菩薩、一乘滿教の菩薩なり。名目は異ると雖も意は天台に同じ。若は法藏法師の本には、五教の菩薩を立つ。小乗教の菩薩、始教の菩薩、終教の菩薩、頓教の菩薩、圓教の菩薩なり、彼宗に判じて云はく、「大いに天台に同じ」と。但頓教を加ふるを異りと爲るのみ。「入印」の五菩薩に稍充合するに似たり、唯智論に違する耳。眞言宗にも釋迦顯教の四菩薩の外に、更に大日密教の一種の菩薩を立つ。顯密に都て五種の菩薩あり、特に入印に合へり、智論に違ふこと無し。天台は顯教の中に四の説を立つ、而も有相無相宗には各一種の菩薩を執して多種を許さず、共に菩薩戒の師と稱す。人をして迂廻ならしむ。迂廻なれども宿縁の人は皆信心を生ず。今天台に依つて略して四教の菩薩戒を明すに、三を會して一に歸せしめて和合の大海に入らしむ。一には小教三乘中の菩薩の二百五十戒は、三祇百劫に迂廻して佛果を成ず、二乘に同じきが故に。四分に云はく、『若し上品殊勝の心を起せば佛果を感得す』と。又『阿含』の中に、佛、迦葉に命じて同座の解脱等に坐せしむるが故に」と。而るを鈔家の云はく、「此四分宗は義は大乗に當れり」と。要家破して云はく、「古代の諸師、多

なり。

【阿含】小乘經の總稱、今は阿含經を指す。

【迦葉】佛十大弟子の一、頭陀第一の羅漢なり。

【雜集】大乘阿毘達磨雜集論十六卷、安慧造、支那譯。

【乾慧等の十地】三乘共の十地。

【歡喜等の十地】大乘菩薩の十地。

く四教を判じて大乘と爲すとは良に恐らくは非なり、教は實に是れ小なれども大を發することゝ妨げず云云」と。二には通教三乘中の菩薩の二百五十戒は、七阿僧祇、百萬劫の中に迂廻して成佛す、亦二乘に同じ。故に「智論」に云はく、「釋迦文の法中には別の菩薩僧無し、故に文殊、彌勒も聲聞の中に入つて次第して坐せり」と。又「大智度論」に云はく、「三乘同じく一解脫の床に坐す」と。「雜集」に、「第十一地にして餘習を斷じ盡して、即ち羅漢及び如來と成るは即ち通乘の意なり」と。「大般若」に云はく、「乾慧等の十地は是れ三乘の十地なり、歡喜等の十地は是れ勝義の十地なり」と。「彌道賢」の中にも亦此判に同じ。而して有相宗は唯通乘を執して前に小乘菩薩を立てず、後に獨菩薩、圓の菩薩を許さず云云は別教の獨菩薩の三聚淨戒をもつて過く一切の世、出世の戒を攝し、次第に修行して二十二種大阿僧祇、百千萬劫に迂廻して成佛す、因より果に至るまで二乘に共ぜず。故に「瓔珞」に云はく、攝善法戒は大乘の戒、饒益有情戒は大乘の四弘誓願、攝律儀戒は二乘の二百五十戒なり」と。「淨行」に云はく、「今、諸の菩薩の爲に一切戒の根本を結す、謂ゆる三聚門なり。攝善法戒は謂ゆる八萬四千の法門、攝衆生戒は謂ゆる慈悲喜捨、化一切に及ぶ、攝律儀戒は謂ゆる十波羅夷なり」と。有が云はく、「經に云はく、若し優婆塞戒、沙彌戒、比丘戒を受けずして菩薩戒を得ると言はば、是處あること無し。譬へば重樓の如し、初級に由らずして第三級を得るといふは是處あること無けん」と。彼自ら解して云はく、「必ず律儀を得て後に二菩薩の戒を樂はざるに由る、故に是説を作す。未だ必ずしも菩薩先づ

【五行】布施行、持戒行、忍辱行、精進行、止瞋行。

【五篇】波羅夷罪、僧殘罪、波逸提罪、提舍尼罪、突吉羅罪。

【七案】波羅夷、僧殘、偷蘭遮、波逸提、提舍尼、突吉羅、惡説の七罪。

五篇は罪果の上より具足戒を分類し今の七案は罪性又は囚罪の上より比丘比丘尼の二百五十戒を分類せるものなり。

【阿闍世王】阿闍世王經二卷、後漢支婁迦讖譯。

小心を發せよといふにはあらず」と。「涅槃」に菩薩の五行、五篇、七聚、五支、十戒を説く。

「天品」に云はく、「菩薩は次第に學し、次第に行じ、次第に證す」と。又「大般若」に云はく、「諸の菩薩は二乘を求むる者と應に交渉すべからず、設ひ與に交渉すとも應に共に住すべからず、設ひ與に共住すとも應に彼と論議決擇すべからず」と。「淨行」に云はく、「昔、羅漢あり、名けて伽彌と曰ふ。一りの弟子を將ゐて鉢をもつて後に隨はしむ。弟子思惟らく、我菩薩と作り聲聞と作らじと。發心已に定まれば其師觀見す。我弟子なりと雖も發心高廣なり、即ち是れ我師なり。其衣鉢を取つて自ら擔つて後に在り、弟子還つて自ら思惟らく菩薩の行は成じ難く就し難し、我堪忍せじ。還つて聲聞と作らんと。其師知り已つて鉢を還して前に在り」と。又云はく、「昔、二人あつて俱に共に道を修す。一を通軌と名く、二を範頂と名く、爾時、通軌、大乘を愛敬して小乘を挫抑し、諸の業生をして菩提心を發さしむ、故に法身を得て一切を度脱す。範頂、嫉妬して小乘を宣説す、生生世世に地獄に入す。時の通軌とは無頂相菩薩是なり、範頂とは今の善生足なり」と。「阿闍世王」に云はく、「文殊の云はく、「迦葉は上に坐せよ、耆年を以ての故に」と、迦葉、讓つて云はく、「我等は後に在らん、菩薩は尊きが故に」と。舍利弗の云はく、「我等も亦重ねて已に無上心を發すが故に」と。迦葉の云はく、「菩薩は尙尊くして久しく發心せるが故に」と。故に文殊所將の二千の在家は前に在つて住し、迦葉の五百の聲聞は後に在つて坐す」と。天親の云はく、「菩薩の律儀に四の殊勝あり、一には差別殊勝、謂ゆる聲聞等は唯律儀のみあつて

...

【八別法】頓、漸、秘密、不定、藏、通、別、圓。

餘の二戒無し、菩薩は三を具す。二には共不共學處殊勝、謂ゆる諸の菩薩の性罪を行せざることは、聲聞と共に遮罪現行すとも彼と共せず、聲聞は唯身語の二戒のみあり、菩薩は具に身語心の戒あり。三には廣大殊勝、四の廣大に由る、一には學處廣大、二には福德廣大、三には利生廣大、四には證菩提果廣大なり。四には甚深殊勝、方便善巧あつて殺生等の十種の作業を行すれども、而も罪あること無し、無量の福を生じて速に菩提を證す」と。連摩は八勝法を説き、天台は八別法を説く。故に死んぬ、一切、二乘に共せざることを。「智論」に云はく、「十地に二あり、一には但菩薩の十地、二には共菩薩の十地なり。」と。亦三藏の菩薩、歩行の菩薩、馬乘の菩薩、神通乘の菩薩を説く。而るに無相宗は但、別乘を執して餘の三を許さず云云。四には圓教の頓の菩薩の三聚淨戒は佛性を體と爲し、佛果を相と爲し、萬法を圓融して五乘を圓會す。直道に修行して即身成佛す、二乘に共せずして三乘を超越す。故に「梵網」に云はく、「本、盧遮那佛の心地の中の初發心中に、常に誦する所の一戒の光明金剛寶戒は是れ一切佛の本源、一切菩薩の本源、佛性の種子なり、一切衆生皆佛性あり、一切の意識色心、是情是心皆佛性戒の中に入る。一切有心の者は皆應に佛戒に攝すべし。衆生、佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。位、大覺に同じ已れば眞に是れ諸佛の子なり。」と。「法華」に云はく、「菩薩は聲聞を求むる四衆に親近せざれ、亦問訊せざれ。若は坊中に於ても、若は經行の處にも、若は講堂の中に在つても共に住止せざれ。或時來らば宜きに隨つて說法して憐求する所無かるべし」と。「梵網」に云



【阿毘曇】 アビダ  
ルマ(Abidharma)  
論部の總稱。

【無量義】 無量義  
經一卷、蕭齊の曇  
摩迦陀耶舍譯。

【法界六】 華嚴の  
法界自在無礙の法  
界を指す。

【思益】 思益梵天  
所問經四卷、羅什  
譯。大乘の實義を  
説いて小乗の偏小  
を破す。

【三摩耶戒】 博法  
灌頂を授くる以前  
に授くる作法。

【五相成佛】 通達  
菩提心、修菩提心  
成金剛心、證金剛  
身、佛身圓滿の五  
相觀を成じて金剛  
界の佛身を顯得す  
【三摩地の法】 密  
教の法を總稱す。

はく、『若佛子、佛の經律あらん、而るを勤學せずして反つて外道の俗典、阿毘曇、雜論、書記を學せば、是れ佛性を斷ずる障道の因縁なり、輕垢罪を犯す。』と。又『無量義』に云はく、『初は四諦、六度、十二因縁を説き、次に方等十二部經、摩訶般若、華嚴海空、菩薩歷劫の修行を説けども、而も未だ曾て此無量義を説かず、大直道を行じて留難無きが故に。』と。『瓔珞』にも亦云はく、『三乘を超越して菩薩の號を成す。』と。『法華』に云はく、『諸の菩薩及び聲聞衆と與に是寶車に乗じて直に道場に至る。』と。『梵網』は『華嚴』を結成し、『普賢』は『法華』を結成し、圓頓は華嚴に一同じ。而るに法界宗は『華嚴』、『法華』を名けて圓教と爲し、別に『思益』を立てて名けて頓教と爲して、圓乘は即ち是れ頓乘なることを許さず云。若し眞言の譯に云へるに依らば、此『梵網』の戒は『金剛頂』の淺略の門より出で、別に菩薩大藏經戒あるを名けて一切如來の三摩耶戒と爲す。具には四波羅夷、十重禁戒、四大性罪、十方便學處あり。昔の釋迦菩薩の如きは、六年苦行して道場に坐せし時、正覺現はれず、一切如來皆來つて此三摩耶戒を授け、五相成佛して則ち世尊の此直道より頓に佛界に入ることを成せしめたまへり。故に龍樹の云はく、『惟眞言法の中に即身成佛するが故に、是に三摩地の法を説く、諸教の中に於ては闕いて書せず、故に今此顯教の中には且く此事を置く云云と。然るに上の四菩薩の戒は、或は各佛戒と名く、當分に各佛果を證するが故に。或は各菩薩の三聚戒と名く、當分に各三聚を具するが故に。或は各直往の菩薩戒と名く、當分に各廻小入大の者に對するが故に。或は各即身成佛戒と名く、

【六即】六は差別  
 的階位の意、即は  
 六位圓融の義を詮  
 す。六即とは理即、  
 名字即、觀行即、  
 相似即、分證即、  
 究竟即の六を指す

當分最後身に現生に成佛するが故に、或は各一受不捨戒と名く、當分五分法身、一たび發して永く滅せざるが故に、或は各常作王身戒と名く、當分に常に諸趣の王と作るが故なり。今、跨節に約して深淺を明さば、前の三戒の果をば唯り菩薩の菩提と名け、圓乘の成果をば的しく如來の菩提と名く。前の三戒法をば唯三聚淨戒と名け、圓乘の戒法をば的しく虚空不動金剛寶戒と名く。前の三戒行を唯歷劫修行と名け、圓乘の戒行をば的しく大直道行と名く。前の三戒は無量劫を歴て最後に現身成佛することを證し、圓乘の戒は受戒の日に即身六即成佛を證す。前の三戒は身に犯不犯の境あれば、犯不犯の境に差別あるが故に、復犯すと雖も而も戒法を失はず、圓乘の戒身は一切諸法皆是れ佛法なれば佛法の中に於て犯戒無し、犯戒無きが故に戒法常住なり。前の三戒の報は、犯すれば三惡道の王と作り、持すれば三敎の法王と作る、若し大心を退すれば上位に入ると雖も還つて二乘外道と作る。故に『心地觀經』に云はく、『若し人菩提心を發起して往昔に三淨戒を受け、下品に持すれば琰魔王となり、地獄の中に處して常に自在なり。禁戒を毀つて惡道に生ずると雖も、戒勝れたるに由るが故に王と爲ることを得。此義を以ての故に諸の衆生、應に菩薩の清淨戒を受くべし。若し如來の戒を受けざるものあらば終に野干の身をすら得ること能はず、何に況んや能く人天の中の最勝自在にして王位に居ることを感せんや。下中品に持すれば禽獸の王となり、一切の飛走歸伏す。清淨戒に於て缺犯あれども戒勝れたるに由るが故に王と爲ることを得。下上品に持すれば大鬼王となり、一切の非人咸く率

【十信】 界内の見  
 思を伏する十位。  
 【十行】 界外の座  
 沙を斷ずる十位。  
 【十向】 界外の無  
 明を伏する十位。  
 【十地】 等覺、妙  
 覺と共に界外の無  
 明を斷じて佛果に  
 至る位。  
 【無量壽觀】 觀無  
 量壽經一卷、宋の  
 晉良耶佛譯。  
 【大佛頂】 大佛頂  
 經十卷、般刺蜜帝  
 譯。又首楞嚴經等  
 と言ふ。  
 【大隨求】 大隨求  
 陀羅尼經二卷、唐  
 の不空譯。  
 【尊勝】 尊勝陀羅  
 尼經一卷、地婆訶  
 羅等の五譯あり。  
 【拘留孫】 拘留孫  
 佛の略、過去七佛  
 の第四に當り、佛  
 現在の賢劫一千佛  
 の最首なり。

普通授菩薩戒廣釋

伏す。戒品を受持して缺犯すと雖も戒勝れたるに由るが故に王と爲ることを得。中品に菩薩戒を受持すれば福德自在轉輪王となり、心に隨つて作す所盡く皆成す。無量の入天悉く尊奉す。上品の清淨戒を堅持すれば起居自在にして法王と爲ること。「本業」に亦云はく、「菩薩の世間の果報とは、十信は閻浮の鐵輪王、十住は二洲の銅輪王、十行は三洲の銀輪王、十向は四洲の金輪王、十地は瑠璃十輪、六欲四禪の十天王なり。等覺の菩薩三界に出でて摩尼輪一切の王と作る。妙覺の如來は虚空に等しうして水精輪の法界王と作る。」と。是を以て「無量壽觀」に云はく、「劫初以來八萬の王あつて其父を殺害す、是則ち菩薩戒を受けて唯國王と作れり。今、殺戒を犯じて皆地獄に墮すれども犯戒の力に王と作る。」と。「大佛頂」に云はく、「發心の菩薩、罪を犯すれば暫く天神地祇と作る。」と。「大隨求」に云はく、「天帝、命盡きて忽ち驢腹に入るに、隨求の力に由つて還つて天上に生ず。」と。「尊勝」に云はく、「善住天子、死して後七返應に畜生の身に墮つべかりき、尊勝の力に由つて還つて天の報を得たり。」と。昔、國王あり、千車に水を運んで焼ける佛塔を救ふに自ら憍心を起して修羅王と作る。昔、梁の武帝、五百の袈裟を須彌山の五百羅漢に施す、志公往きて五百に施すに一を缺く。衆の云はく、「罪を犯して暫く人王と作れり。」と。即ち武帝是れなり。昔、國王あり、民を治すること等しからず、今天王と作り大鬼王と爲る。即ち東南西の三天王是なり。拘留孫來つて菩薩と成り、誓を發して現に北王と作る、毘沙門是なり。「大悲空藏」に云はく、「昔、舍利弗、六十劫の中に菩薩の道を行す、波羅門の眼を乞ふ

【婆娑】阿毘達磨  
大毘婆沙論二百卷  
唐の玄奘譯。

て踐滅するに遇ひ、菩薩の行を退して即ち小乘となる。」と「要略」に云はく、「我初會の如きは淨日天子、舍利弗等、七住に入らんと欲するに惡知識に遇つて退して凡夫と作る。五逆十惡造らずと言ふこと無し、三惡道に留まる。」と。此は是れ下と中とに各三あり、六品の犯戒の報なり。三教の菩薩はは上の三品と名く。若し小乘の菩薩は是れ上の下品の戒、極つて小乘の佛と作る。若は通乘の菩薩は是れ上の中品の戒、極つて通乘の佛と作る。若は別乘の菩薩は是れ上の上品の戒、極つて別乘の佛と作る。別乘の七階は五十二位なり、「要略」に説くが如し、通乘の五階に五十二位あり、唯識に説くが如し。小乘の四階に五十二位あり、「婆娑」に説くが如し。上來の五十二位を或は以て十二位と爲す、一地持に説くが如し。然るに小乘の中には顯露に五十二位を説かされども、若し密意に約すれば佛或は之を説きたまふ、阿含の如し。譬へば聚に一重の樓あり、十二位あり。若し第一位を昇らざれば第二位乃至第十二位に登ること能はず。若し戒を以て根本と爲さずんば、如來の正法の堂に昇らざらん。既に三教の持戒に約して各五十二位を立つ、故に三教の犯戒に約して各一十五王を明す。又天台の云はく、「三教の果頭は有教無人なり、因中に廻心して皆圓乘に入る。一切の菩薩は終に圓佛と作りて三教方便の佛果と作らず」と。今の圓乘の中にも亦九品あり、但是れ持戒は六即の佛と作る。故に「心地」に云はく、「菩提心を發して菩薩道を求むるに二の菩薩あり、一は在家、二は出家なり。在家の菩薩は姪室屠肆を化導せんと欲するが爲に皆親近することを得。出家の菩薩は則ち是の如くならず。」と。然る

【蘭若】 寺院の總稱。

【大圓覺】 大方廣圓覺修多羅了義經一卷、唐の佛陀多羅譯。

【理即の佛】 理性のみ融じて宅も解行證の功用なき佛即ち在迷の凡夫を言ふ。

【名字】 經卷或は善知識に依つて迷悟の法體不二なるを了解せし位。

【觀行の佛位】 經卷等の名字言説を離れて觀智親しく性德を照す位。

【相似の佛位】 觀智の力をも離れて稍法性に冥合せんとする位。

【習種】 習種性、十住の位。

【性種】 性種性、十行の位。

【道種】 道種性、十廻向の位。

【聖種】 聖種性、十地の位。

【三賢十聖】 十住十行、十廻向を三

に此菩薩に各九品あり、上根の三品は皆蘭若に住して無間に精進して有情を利益す。中下の二根は宜きに隨つて住する所、方便定乎して衆生を利益す。或は蘭若に住し、或は聚落到に住す。『大圓覺』に云はく、『一切衆生本來成佛せり。』と是れ理即の佛なり。『梵網』に云はく、『衆生、佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。』と是れ即身に名字に入る。名字の佛位は是れ下下根なり。『仁王』に云はく、『受持讀誦すれば即ち佛と爲る。』と是は即身に觀行の佛位に入る、是は下中根なり。『普賢觀』に云はく、『行者、即ち六根清淨を得。』と是れ即身に相似の佛位に入る、是れ下上根なり。『無量義』に云はく、『此經を受持すれば即ち是身に於て無生忍を得。』と是は即身に習種の佛位に入る、是は中下根なり。即身に若し性種に入れば是は中中根なり。即身に若し道種の佛位に入る、是は中上根なり。又云はく、『菩薩の第七の地に昇るは是れ即身に聖種の佛位に入るなり。』と是れ上下根なり。即身に若し等覺の佛位に入るは是れ上中根なり。『法華』に云はく、『須臾も之を聞かば即ち阿耨菩提を究竟することを得。』と是は即身に妙覺の佛位に入るなり、是れ上上根なり。當に知るべし、圓乘の戒法は但持果のみあつて而も犯の報無きことを。故に『仁王』に云はく、『十善の菩薩、人心を發して長く三界の苦輪海を別る。』と。自所行の處、及び佛の行處、一切知見するが故なり。上品の十善は鐵輪王、中下品の善は粟散王、十住は百國の銅輪王、十行は千國の銀輪王、十廻向は萬國の金輪王、十地は位増すること不可說なり。六欲、四禪の十天王、各法門を説いて衆生を化す。三賢十聖は果報に住す。唯佛一人のみ

賢とし、初地乃至十地を十聖となす

【薩婆若】一切智と譯す。即ち諸佛究竟果位の智を指す。

【無行】諸法無行經二卷、秦の羅什譯。諸法實相には善惡の行無きを説く。

【理趣分】大般若波羅密多經卷第五百七十八、第十般若理趣分。  
【楞伽經】楞伽經の略、四譯三存。

淨土に居す、圓乘の菩薩は巧に方便を修す。「仁王」に云ふが如きは、觀實相方便とは第一義諦に於て沈せず出せず、轉ぜず顛倒せず。遍學方便とは證に非ず不證に非ずして而も一切を學す。廻向方便とは果に住するに非ず、果に住せざるに非ず、而も薩婆若に向ふ。魔自在方便とは非道に於て、而も佛道を行すれば四魔も動ぜざる所なり。一乘方便とは不二の相に於て衆生の一切行に通達するが故なり。變化方便とは願力を以て自在に一切の淨佛國土に生ず。四魔の自在方便を行するを以て三毒、十惡、五逆を起すと雖も、皆佛道を成じて戒品を破らす。故に「無行」に云はく、「普二菩薩あり、一の名は喜根、常に人の爲に説く、貪欲即ち是れ道なり、悲癡も亦復然り。是の如きの三法の中に無量の佛法を具す。若し人、佛道を求めんには貪悲癡を壞すること莫れ、若し貪悲癡を斷じて諸佛の道を求めんと欲せば、是人佛道を去ること譬へば天と地との如し。此説を信する者は皆成佛す。二には勝意と名く、常に人の爲に説く、貪欲は即ち道に非ず、悲癡も亦復然り、悲貪癡を斷ぜずして諸佛の道を求めんと欲せば、是人佛道を去ること、譬へば天と地との如し。此説を信ぜん者は皆地獄に墮せん」と。「大圓覺」に云はく、「諸の戒と定と慧と及び婬怒癡は俱に是れ梵行なり。」と。「理趣分」に云はく、「是經を受持せば故ひ三界の一切有情を害すとも惡趣に墮せず、調伏の爲の故に」と。欲等をもつて世間を調へて淨除することを得しめんが故に、有頂及び惡趣を調伏して諸行を盡す。言ふ所の欲等とは十惡を等取するなり。「楞伽」に云はく、「貪愛を名けて母と爲し、無明を則ち父と爲す。覺境の識を佛と爲し、諸使

【獄】 無間地

【鷲搗摩羅】 佛在世に舍衛城に住せし者。

【瓊離王】 迦毘羅衛國の釋種を亡せし惡王の名なり。

【和修密】 世友と譯す。

【阿闍世王】 佛在世の頃、摩竭陀國王舍城の治者。

【提婆達多】 阿難の兄、釋尊の從弟なり。

【毘婆尸佛】 過去七佛の第一佛。

【堅誓師子】 釋尊因位の時、金毛の堅誓師子となり、

袈裟の徳を念ふが故に獵師の爲に身を捨てしと言ふ。

を羅漢と爲す。陰集を名けて僧と爲し、無明を次第に斷ず。」と。謂く、是五無間に無擇獄に入らざるなり。諸法を觀じて眞如の相と爲すを以て、持戒、犯戒皆不可得なり。故に「大般若」に云はく、「應に不護を以て淨戒波羅密多を圓滿すべし。」と、昔、世間現、孝師と爲り千人を殺害せよと教ふ。千人の手指を編みて頭鬘と爲す。是故に名けて鷲搗摩羅と爲す、此には指鬘と云ふ。此は孝を戒と爲し殺戒を犯するに非ず。昔、瓊離王、無量の人を殺す、此域の人剛惡にして化し難きを以てなり。但命を斷するに臨みて菩提心を發す。此殺を名けて入法界門と爲す、殺戒を犯するに非ず。昔、和修密、願を發して人を利す。我口を吸はん者は大辨才を得ん、我胸に合せん者は大智慧を得ん、我手を執らん者は大福聚を得ん、我身に嫁がん者は大菩提を得んと。此は姪を戒と爲す、姪戒を犯するに非ず。昔、釋迦尊、慳人の者を盗んで大いに施會することを得て今其福を増す。此は盜を戒と爲す、盜戒を犯するに非ず。當に知るべし、三毒、十惡は皆戒行爲ることを。阿闍世王、父母を殺害す、即ち無明は父、亦貪愛は母なり。此非道を行じて佛道に通達しき。提婆達多是現に三逆を造つて地獄に處すと雖も三禪の如し。伊れ昔は佛の師なり、今は弟子と成る。婆數仙人は牛を殺すを以ての故に、即身に地裂けて大地獄に墮せしも、地獄の人を率ゐて佛所に來詣して皆得道せしむ。此は善惡本より定果無きことを顯す。散脂鬼は毘婆尸佛のとき大誓願を發して常に鬼王と作りて鬼道を教化しき。堅誓師子は菩薩の變化にして常に畜生と爲つて畜生を教化しき。當に知るべし、五逆、三惡は皆戒行と爲ることを。淨名は家に居し

【末利婦人】舍衛國波斯匿王の夫人なり。

【富樓那】佛十大弟子の一、説法第一。

【十六王子】三千塵點劫の昔、大通智勝佛あり。此佛出家せざる前、十六王子ありしと言ふ。  
【三善】無貪、無瞋、無痴の三を指す。

て無量の道品を以て妻室と爲す。月上無垢は淨名の女子なり、佛藏に通達して在家の法を行じき。末利婦人は亦王宮に處して法藏を解了して自ら戒法を説き、人命を救はんが爲に巧に酒戒を犯しき。佛、此人の爲に萬石を飲むことを許したまへり。當に知るべし、一切の俗塵皆戒行となることを。是を以て圓乘の戒法は但受法のみあつて終に破法無し、故に虚空不動金剛寶戒と名く。爲るに『法華』に云はく、『舍利弗に告げたまはく、二萬億の佛の所にして常に汝を教化しき、汝今廢妄せり。富樓那に告げたまはく、十六王子の時久しく汝を教化しき、汝今小に住す、故に『法華』を説いて本願を憶せしむ。』と。此は是れ發心以後不意に廢妄す、犯戒と名けず。更に五喻を以て戒の差別を顯さん。一には外道の邪戒は戒無く果無し。譬へば狂人の虚空に屋を構へんに空無く用無きが如し。二には三善の戒は因生じ果を感ず、業盡くれば惡に墮す。譬へば楊葉の秋至れば金に似、秋去れば地に落ちんが如し。三には二乗の小戒は持する時の果は拙く、破する時は永く捨つ。譬へば瓦器の見きときは用卑く、若し破すれば永く失ふが如し。四には菩薩の大戒は持すれば寶王と成り、犯すれば世王と成る、而も戒は失はず。譬へば金銀の器と爲れば用貴く、破器にして用ひざれども而も寶は失せざるが如し。五には如來の寶戒は一たび受くれば永固にして終に犯失せず、而も大用あり。譬へば金剛の一たび利寶と成れば更に破壊せず、人あつて闇に入つて寶に觸れ、身を害して自ら謂へり、蛇に螫さると。身腫れ心悶ゆるに、明醫實を示せば自ら蛇に非ざることを知つて、還つて利寶を得て萬用自在ならんが如し。



【義】心の異名。心境に對して、了別するを識と名く。

【處胎】菩薩處胎經七卷、姚秦の竺佛念譯。

【眞如三昧】眞如無相の理を觀じて妄惑を除く禪定。眞如は眞理と言ふに同じ。

【一色一香】些細なるもの意なり

【中道】中とは不二の義、又は絶待の意にして、天台にては眞如實相を中道と爲す。

【華嚴】大方廣佛華嚴經の略、六十八卷、四十卷の三本あり。

『山察』に云ふが如きは、觀に二種あり、一には唯心、謂く唯識を觀ず。二には實觀、謂く眞如を觀ず。眞如佛性を以て戒體と爲す。一切諸法皆是れ戒體なり、何ぞ戒に非ざるの法あつて而も犯戒の法あらん。故に『大般若』に云はく、『菩薩は應に此は是れ戒法、此は是れ能持、此は是れ所持、此は是れ持境なりと分別すべからず。一切の諸法は皆眞如なるが故に。』と。『處胎』に云はく、『昔、魔王、梵王、釋王、七十二億の女人あつて眞如三昧を修習して皆身を捨てず、亦身を受けず、悉く現在に於て同じく成佛を得たり。』と。法性は大海の如し、是非ありと説かず、凡夫、賢聖の人も平等にして高下無し。唯、心垢の滅するに在つて證を取ると、掌を返すが如し。文殊師利の如きは、智慧の劍を以て在纏の一切如來妄執の右の臂を殺害す、能殺、所殺は皆眞如の相にして、大虛空の如く自他無きが故に。大虛空藏の如きは、若し人、尊を見て一切有主の所攝の物の六分の一を取用すれば、盜罪を得ずして能取所取皆是れ眞如なり、大虛空の如く能所無きが故に。觀世自在の如きは、定慧の男女二根和合して能く諸佛の子を生ず。能合所合皆是れ眞如なり。大虛空の如くにして着脱無きが故に。能く深く此理を觀行するを名けて已善持戒と爲し、未だ探く此理を觀行せざるを名けて未善持戒と爲す。『大品』に云はく、『一色一香中道に非ざること無し。』と。『華嚴』に云はく、『擧足、下足即ち是れ道場。』と。當に須らく一切處に遍するの道場あるべし。眞如法性の戒法を修行すれば、善法惡法皆律儀と爲り、一色一香更に退轉莫し。『本業』に云はく、『一切國土の中に於て一人を教化して出家し、菩薩戒を受けしめ

【鄢波尼殺曇分】ウバニシヤド(ウバニシヤド)譯して近少微細、因等と言ふ

【八】十二門の中開導に次いで第二三歸の一門を證明す。

【九】五種の外道【西域外道の總數】外道とは佛教外に道を立つるもの【摩離首羅】色界の頂上に位する天神の名なり【鳩摩羅天】初禪天の梵王にして、其童子の如くなくるが故に斯く名く

ば、是法師の其福は八萬四千の塔を造るに勝らん。況んや復二人三人乃至百千の福果は稱量す可からず」と。「淨行」に云はく、「譬へば七寶の塔の閻浮提に遍滿し、世に不善の人あつて毀壞して碎盡せしむるが如き、人の菩提心を破するの不善は彼よりも過ぎたり。三界の諸の衆生の其命將に盡きんとするや、良醫あつて方に救濟して皆死せざらしめん、人の菩提心を増す其福は彼に倍せり」と。今此利を見て慇懃に開導す。「本業」に云はく、「是の如く菩薩の受くる所の律儀戒は餘の一切所受の律儀戒に於て最勝無量無邊なり。大功德の隨逐する所、第一最上の善心の意樂の發起する所なり。普く能く一切有情に於て一切種の惡行を對治す。一切の別解脱律儀は此菩薩律儀戒に於て百分が一にも及ばず、千分が一にも及ばず、數計算喩鄢波尼殺曇分も亦一に及ばず。一切の大功德を攝受するが故に」と。

と。此利を得んが爲に至心に當に此を受くべし。開導已に竟んぬ。

第二に三歸とは、昔拘留孫佛の像法の中に佛惠比丘苦行の後、九十五種の外道出世して竊に三寶の名、及び戒の名を盜み、妄に三寶を立てて亦戒法を説く。摩離首羅を法身と爲し、大梵天王を報身と爲し、鳩摩羅天を化身と爲して並べて佛寶と爲す。四種の毘陀、六種の波陀、十八大經を並べて法寶と爲し、九十五種を並べて僧寶と爲す。中陰の識を見て鷄狗等を起して以て眞我と爲し、鷄狗戒を説いて自ら妄じ他を妄じ、俱に惡道に墮す。如來出世して邪を離して正と爲し、世をして悉く四不壞の信を起さしむ、而も佛滅に至つて邪風還つて扇ぐ。天竺に尙祠天の寺あり。佛、三人を遣して且く眞旦を化す、五帝以

【四種の毗陀】四種吠陀、即ち婆羅門の經書なり。  
【六種の波陀】六足論を指す。  
【十八大經】四吠陀と六論と八論を合して十八大經と言ふ。

【中陰】此に死して彼に生ずる中間に於て受くる陰形【四不壞の信】三寶及び戒を信じて壞せざるを言ふ。

【西昇化胡經】偽經。  
【一に即して而も】三諦圓融の圓理に約すれば、假の一法を擧ぐるに空中も亦同じ。即ち一即三なり。

【性體の離念】佛性の體は本來迷妄の念慮を離るるが故なり。  
【前の三】藏、通別三教の四不壞信を指す。

【後の一】四教の四不壞信を指す。

【四不壞信を指す。】

て五戒の方を聞く。昔、大宰、孔子に問うて云はく、「三皇五帝は是れ聖人歟」と。孔子答へて云はく、「聖人に非ず」と。又問ふ、「天子は是れ聖人歟」と。亦答へて「非なり」と。又問ふ、「若し爾らば誰か是れ聖人なる」と。答へて云はく、「我聞く、西方に聖あり、號して釋迦と曰ふ」と。又老子は尹喜と俱に西して胡國に入る、而も其後輩安りに西昇化胡經等を作り、説いて老子西に入つて釋迦佛と作ると。妄りに李理同糸の事を説く。三郎天子容ち道寺を起つ、殆んど佛法と争つて勝負を成す。佛眼遠く照して預め此事を知る。故に今末代に皆四信を起す、謂ゆる三寶及び聖戒に於て不壞の信を起し、未來際を盡して歸依處と爲るなり。且く三種の三寶あり、一には住持の三寶、泥木素像を佛寶と爲し、黄卷赤軸を法寶と爲し、剃髮染衣を僧寶と爲す。二には別相の三寶、三世の三身を佛寶と爲し、所説の法門を法寶と爲し、三乘の賢聖を僧寶と爲す。三には一體の三寶、實相の圓理を名けて一體と爲し、一に即して而も三を名けて三寶と爲す。心體の覺知を佛寶と名け、性體の離念を法寶と名け、心體の無諍を僧寶と名く。凡聖始終此三を具足す、佛は已に修證して物に應じて形を現す。別相住持の功は一體に由る。我等が理は是なり、氷の水に在るが如し。今始めて覺知して正に此三寶に向つて未來際を盡すまで歸依處と爲す。戒に亦三種あり、一には傳受戒、師より受くる所の名句文身是なり。二には發得戒、白四羯磨して心境に發得する是なり。三には性得戒、眞如の性戒なり、凡聖共に是あり。四不壞の信は四教不同なり、今前の三を非して正しく後の一に歸す。三種の三聚淨戒を受けんと欲せば、

【四不壞信を指す。】

【九】十二門の第三請師の門を説す  
 【天王如來】提婆達多の未來に成道するよきの佛名なり

【自在王經】自在王菩薩經の略名  
 【六蔽】秦の羅什譯戒、瞋恚、慳貪、破散亂、愚癡

【四攝】四惡趣も言ふ。布施攝、愛語攝、利行攝、同事攝の四を指す  
 【維摩經】維摩詰所說經三卷、秦の羅什譯

【空王佛】釋尊阿難と共に此佛の所にて發心せしと言ふ  
 【須陀洹】聲聞四果の中初果の名なり

【不退位】功德善根愈増進して退失退轉なき位。是に位、行、念の三不退あり

當に三種の三尊の境界に歸すべし。弟子甲等、始め今身より盡未來際まで佛の兩足尊に歸依したてまつり、法離欲尊に歸依したてまつり、僧衆中尊に歸依したてまつると。三たび弟子甲等、始め今身より盡未來際まで佛に歸依し竟り、法に歸依し竟り、僧に歸依し竟らん。三たび今身より已後、佛を稱して師と爲し、更に餘の邪魔外道に歸せじ。唯願くば三寶、慈悲攝受したまへ、慈愍の故に。三寶を受けんぬ。

第三に請師とは、佛未代に勅して以て釋迦、文殊、彌勒を奉請せしむる所以は各四義あり。一には過去の天王如來の如く、王宮に居在して自ら佛道を成す。木出家せず、袈裟を着せず。鉢具を持せず、戒品を結せず。其國の衆生、心性調善、如來の威儀自然に具するが故に。『自在王經』に説くが如し。今の釋迦の如きは娑婆界に入つて盛んに惡口を行す。此界には具に六弊四惡あるが故に、佛隨つて六度四攝を説く、此界の十法は餘土には無き所、眞如法界には非持非犯なり。犯戒の惡に對して持戒の善を制す。是を釋尊の娑婆の惡口と名く。具には維摩經に説くが如し。今の釋迦佛は舍那の勅を受けて、此地上の凡夫癡闇の人の爲に而も菩薩の戒藏を説く、故に未代に勅して請じて和上と爲す。釋迦佛、昔、空王佛の所にして六重の戒を受けたまふ。惡友に値遇して須陀洹を退す。後に須彌登王佛、海音王佛、雲自在王佛に遇つて皆法を聞かず。次に二萬億の威音王佛に值つて、最初の佛の像法の中に常不輕菩薩と爲りて三千の威儀を受持す。第二の佛の時に不退位を證す。後に大通智勝如來に值つて我王子と爲つて出家し、具に三百の戒行を持つ。後

【記を授け】佛が弟子に成佛する事其劫數、國土、佛名、壽命等を分別するを授記と言ふ。【鹿苑】波羅奈國鹿野苑。【五比丘】橋陳如、迦葉、跋提、摩男、五人。是れ佛が最初に度せし人なり。【阿難】佛十大弟子の一、多聞第一と傳ふ。

【金剛仙論】金剛仙菩薩の著、後魏の善提流支譯十卷天親の金剛般若論を釋せしもの。【佛語經】鐵圍外二界の中間にあつて佛の説き給ひし經、經錄に無し。【本又】波羅提木又の略、戒律の一の名なり。

に二萬の日月燈明に値つて、定光佛を經て名を儒童と曰ひ、具に律儀三千の戒行を攝す。即ち我に記を授けて號して釋迦牟尼と爲す。我過去無量無邊劫に於て、伽耶城に在つて初めて正覺を成じ、衆生の爲に威儀戒行を説く。過去久遠不可思議阿僧祇劫に二萬億の釋迦牟尼あり、最初の佛は我身なり。我初めて成道して鹿苑に在つて五比丘の爲に重ねて制戒を説く、此より已來始めて僧ある耳。具には「淨行經」に説くが如し。今の「法華」に云ふが如きは、我、阿難等と空王佛の所に於て同時に阿耨菩提心を發す、我は常に精進して已に佛道を成す、阿難は常に多聞を好みて我法を護持す。次に云はく、大通智勝佛の所にして十六の王子沙彌として教化す。次に云はく、然も我實に成佛してより以來無量無邊不可思議阿僧祇劫なり。次に云はく、二萬億の威音王の最初の佛の時に常不輕と爲る。天台の云はく、實成を本と爲す、威音王は是れ實成の後、大通智勝を中間の迹と爲す。空王佛は是れ大通の後なり、日月燈明は是れ空王の後なり。當に知るべし、「淨行經」は逆次の説なることを、亦超越あり、若干の佛所にして菩薩戒を受く。此娑婆は久劫修行の爲の故に毫相の一分を留めて未來の弟子を養育す、故に末代に勅して請じて和上と爲さしむ。三に釋迦佛、二鐵圍の中間に在しし時、大衆に告げて言はく、「汝等が所聞皆各説く可し」と。時に無量の菩薩、聲聞あつて各佛に白して言さく、「是の如く我聞きぬ、一時佛某方某處に在して某經法を説きたまふ」と。具には「金剛仙論」に「佛語經」を引くが如し。佛、涅槃に臨んで阿難に告げて言はく、「我滅度の後は木叉を師と爲すべし、木叉世に住せば佛と異

【均提沙彌】婆娑門の子、舍利弗に依つて出家し阿羅漢を得たりと傳ふ。【解脫知見身】己が實に解脫せしを知るを言ふ。

【楞嚴】首楞嚴經十卷、嚴刺室密譯と傳ふ。

【放鉢經】普賢三昧經奉鉢品の別譯一卷、失譯。

なること無けん」と。又、舍利弗、佛に先だつ七日、已に涅槃に入る。佛、均提沙彌に問ひたまふ、「汝が師の戒身滅するや不や」と。答ふ、「滅せず」と。乃至、「解脫知見身滅すや」と。答へて云はく、「滅せず」と。小乗の戒身すら常住不滅なり、況んや如來常住の戒身を、故に現前滅後に勅して如來の戒身を住持せしむ。亦末代に勅して請じて和上と爲さしむ。四には釋迦亦是舍那と名け、亦是遮那と名く。三身體一にして皆平等なり、毘盧舍那の自性身なり。具には華嚴「羅素」等に説くが如し。如今の佛戒の寂光の法身は如如の理法なり。實報の報身は如如の智法なり。華嚴の舍那は心地の所持なり、娑婆の釋迦は日輪の所傳なり。應身は滅すと雖も法報は滅せず。東方の莊嚴世界の昭明莊嚴自在王佛の身は七阿僧祇なり、即ち是れ釋迦なり。今東方に在して現在に滅せず、『楞嚴』に説くが如し。釋迦の淨土をば名けて無勝と曰ひ、現在に說法したまふ、智度論に説くが如し。故に釋迦を請する時は遮那、舍那も自ら現す、微塵の中も即ち法界なるが故なり。故に末代に勅して請じて和上と爲さしむ。一には文殊師利大聖尊は三世諸佛の以て母と爲すところ、十方如來の初發心は皆是れ文殊の教化の力なり。一切世界の有情、名を聞き身及び光相を見、並びに隨類の諸の化現を見れば皆佛を成じて思議し難し。『心地觀』に説くが如きは、今の釋迦佛は昔文殊に從つて發心して成佛す。昔は能仁の師爲り、今は其弟子と爲る。『放鉢經』に説くが如し。又、文殊は是れ最後の日月燈明佛の八王子の師なり。釋迦佛は即ち第八の燃燈佛の弟子なり、故に文殊は是れ釋迦の九世の師なり。故に末代に勅し

【多羅聚落】多羅樹の繁茂せる聚落の意。

【童眞】沙彌の異名、又有髮の童子に通ず。

【吉祥天女】毘沙門天の妹にして、功德成就して大功を衆生に與ふ。【摩利天】陽微と稱す、其形は見取する能はず。

【耆闍山】中印度摩揭陀國王舍城の東北にあり、靈鷲山とも稱せらる。【摩訶衍藏】大乘方等の諸經論。

て本師を請じて羯磨師と爲さしむ。二には釋迦佛の成道七日に御耶山に在して菩薩戒を説きたまふ。文殊は多羅聚落到に應生して童眞出家し、菩薩の沙彌の十戒を受持す。及び寂場梵網の具戒を受けて菩薩僧と爲る。佛の滅度の後、皆菩薩僧衆の上座と爲る。故に惠苑の云はく、「天竺の國法には一向大乘寺には文殊を上座と爲し、一向小乘寺には賓頭盧を上座と爲し、大小兼行寺には文殊と賓頭盧とを共に以て上座とす」と。文殊、頭盧、上座の人と別なり、一師、十師、羯磨の法異なり。叡山の云はく、「當今、諸寺に造る所の上座は皆是れ文殊なり。世の人達せず、皆頭盧と云ふ。例せば世に吉祥天女を造るに安りに摩利支の像と言ふが如し」と。摩利支天は是れ男天なるが故に、頭盧を請するの法は但其座を置くのみ、像を造る法無し、故に悞りなり。今、釋迦の法、菩薩僧の事は文殊を上座とす。故に末代に勅して上座を請じて羯磨師と爲さしむ。三に釋迦佛の所説の五藏を五人受持す。修多羅藏を阿難受持し、毘奈耶藏を波利受持し、毘曇藏を迦葉受持し、波羅若藏を文殊受持し、陀羅尼藏を金剛手受持す。『六度經』に説くが如し。今、釋迦の後に迦葉、阿難、耆闍山に在つて小乘の三藏を結集す。文殊、彌勒は阿難等と鐵圍山に往いて摩訶衍藏と結集す。智度論に説くが如し。故に大乘戒は文殊の所持なるが故に、末代に勅して法主を請じて羯磨師と爲さしむ。四には釋迦の言はく、「耆闍彌山は誰が所造、是世界は亦何れより出づるや」と。迦葉突ひて言はく、「文師師利なり、一切の世界は文殊の所出なり。過去久遠に此界の南方の國を平等と名く。龍種上佛、彼世界に於て三菩提を得、文殊是なり。『首楞

【大寶積】大寶積經、四十九卷七十品あり。一百二十卷の中に於て三十九卷は唐の菩提流支譯、他は舊來乘深妙の教を説く【行基菩薩】天智天皇の七年泉州に生る、當時の高僧として遍く諸民に崇拜せらる。

【龍華會】當來五十六億七千萬年を経て彌勒菩薩此土に出世し、華林園中龍華樹の下に在つ法會を開き、普てく人天を度す此會を龍華會と稱す【彌勒經】彌勒上生經、彌勒下生經を總稱す。譯に數種の異本あり。

嚴に説くが如し。現在北方の國を常喜と名け、佛を歡喜藏摩尼寶積と名く、文殊即ち是なり。若し名を聞かん者は、歡喜國を見ること自家を見るが如くならん。彼名を聞くが故に當に四趣を閉づべし。『驚掘經』に説くが如し。未來に成佛して名をば普見と曰ふ、『大寶積』に説くが如し。今の釋迦佛は是れ現在の佛なるが故に、過去の龍種淨智尊王佛を請じて當に菩薩の淨戒阿闍梨と爲すべし。『心地觀』に説くが如し。又文殊は是れ三身常住なり、法報の二身は邊量知り難し。化身は或は東方の金色世界に住し、或は東北方の清涼山の中に住す。萬眷屬百千化現す。或は日本に出づ。昔、行基菩薩あり、是なり。又文殊は是世界の能造の主なり。凡そ厥菩薩の事、文殊地主なり。故に末代に勅して地主の佛を請じて羯磨師と爲さしむ。一に彌勒菩薩法王子は初發心より肉を食はず、是因縁を以て慈氏と名く。諸の衆生を成就せんと欲するが爲に、第四兜率天の四十九重の如意殿に處して晝夜に恆に不退の行を説き、無數の方便をもつて人天を度す。我今弟子を彌勒に付して龍華會中に解脱を得しむ。末法の中に於て善男女、一搏の食を衆生に施さば、是善根を以て彌勒に見えて當に菩提究竟道を得べし。『心地觀』に説くが如し。釋迦の像末に善を遺るもの、乃至一稱南無の輩は、皆彌勒の三會に得道すべし。『彌勒經』に説くが如し。當來世に於て法の滅せんと欲する時に當に比丘、比丘尼あるべし。我法中に於て出家を得已つて、手に兒の臂を牽りて而も共に遊行して酒家より酒家に至り、我法中に於て非梵行を作さん。此賢劫千佛の出世に於て我を第四と爲す。次後に彌勒最後の盧至、我法の中に袈裟を著す



【大悲經】五卷、高齊の那連提耶舍譯。付法、滅後弘法の人、舍利供養の功德、結集の法等の事を記す。

【梅怛哩耶】もと樹の名、遂に城に名く。摩揭陀國の帝都なり。

【傳大士】南齊の建武四年に生る。有髮の道士にして自ら東陽の火士と言へり。

者の是の如きの佛の所にして涅槃に入ることを得て遺餘あること無けん。【大悲經】に説くが如し。釋迦遺法の弟子は彌勒得道の眷屬なり。故に末代に勅して當師を請じて教授師と爲さしむ。二には釋迦佛、舍那の戒を受けて逸多に傳受す。是の如く二十餘の菩薩傳來して終に羅什に至る、『梵網』の戒本に説くが如し。又燈明佛の所説の戒法を蓮藏受持す。是の如く四十餘の菩薩傳説して伊波勒に終る、『地持』の戒本に説くが如し。彌勒、梅怛哩耶聚落に應生し、乃至『梵網』の具戒を受持して菩薩僧と爲り、滅後に亦菩薩戒法の軌範の師と爲る。故に末代に勅して軌範を請じて教授師と爲さしむ。三には彌勒は是れ釋迦の前に在ること一十二年にして兜率天に生ず。結集の時に至りて天上より來下して文殊等と菩薩藏を結す、故に末代に勅して戒主を請じて教授師と爲さしむ。四には彌勒如來は三身具足す。法報は邊表無くして知り難し、化身は或は觀史多天上に住し、或は梁代に出で東陽の傳大士として田獲魚捕して衆生を利潤す。又文殊は是れ過去の本師なり、釋迦は是れ現在の教主なり、彌勒は是れ當來の界主なり。故に之を請じて教授師と爲さしむ。所以に佛勅して諸佛、菩薩、金剛天衆、現前凡師を請ぜしむ。亦各四義あり。一には、昔釋迦菩薩道場に坐せし時、正覺を成ずること能はず。一切の如來皆來つて驚覺すらく、汝、諸佛所行の道を觀すべし、菩薩即ち觀するに一切の如來皆我身に入る、五分法身も皆我身に住す。諸佛と同體にして便ち正覺を成ず、眞實に説くが如し。今末代をして行じて佛道を成ぜしむるが故に、諸佛を請じて尊證師と爲さしむ。二には、一切衆生は自ら一切諸佛の五分

法身に迷ひて以て苦惱の身と爲し、一切の諸佛は自ら一切衆生の五分法身を疑りて以て法樂の體と爲す。若し三世諸佛の名を見れば一切諸佛を見たてまつらん、『普賢觀』の如し。今、末代をして自身の佛を見しむ。故に諸佛を請じて尊證師と爲さしむ。三には二鐵圍山の間に無量の諸佛、佛、諸佛、佛、諸佛を説いて、諸佛同體の戒身を結せしむ、『金剛仙』に説くが如し。今、末代をして彼戒身を得しめんが故に、諸佛を請じて尊證師と爲さしむ。四には、諸佛如來は常住にして世に在す、我煩惱の眼は觀見ること能はず。普賢觀を以て諸佛を觀見す。目を閉れば則ち見、目を開けば見す、菩薩の戒法自然に成就す。普賢觀の如し。今、末代をして常住の佛を觀せしむ。故に諸佛を請じて尊證師と爲さしむ。一には妙覺の菩薩は佛地に居在す。五分の戒身未だ満たざるを名けて妙覺の菩薩と爲し、戒藏滿じ已るを號けて佛と爲すなり。我本菩薩居爲し時、妙覺海中に入つて十千劫を滿つるまで、衆生發せず、我も證せざりき。十千劫已つて然る後に乃ち成道す。是故に妙覺の假緣者れ滿じて始めて成佛することを得、『淨行經』に説くが如し。當に知るべし、有緣の一切衆生、若し發心受戒せざれば、則ち其有緣の一切の菩薩、礙へられて成佛せじ。今、末代をして成佛を礙へざらしむ。故に菩薩を請じて同學の伴と爲さしむ。二には戒は明なる日月の如く亦瓔珞珠の如し。微塵の菩薩衆は是に出つて正覺を成ず。過去の一切の菩薩已に學し、未來の一切の菩薩當に學すべし、現在の一切の菩薩今學す、『梵網』に説くが如し。今、末代をして菩薩に隨順せしむ、故に菩薩を請じて同學の伴と爲す。三に釋迦說法の時、他方の

【觀經】觀無量壽經一卷、宋の雷良耶舍譯、阿彌陀佛の身相、淨土等の相を説きし經。

【密迹】密迹力士經。大寶積經四十九會の第三會を指す。

【金剛手】金剛力士とも稱す、佛教の外護者なり。  
【俱舍】俱舍論、世親の作、唐の玄奘譯、三十卷あり  
【金剛神】金剛手の異名。

菩薩是法を受持して各本土に還つて法藏を結集す、『大般若』に説くが如し。『佛話經』の中に無量の菩薩、各大乘を結す、『仙論』に説くが如し。一切の菩薩、皆五分法身を具し、能く衆生をして同體の戒身を得しむ、觀經等に説くが如し。今、末代をして菩薩に等同ならしむ。故に菩薩を請じて同學の伴と爲す。四には娑婆世界に自ら六十二億恆河沙數の菩薩あり、故に觀音の名號を持すれば正に等し、『大佛頂』に説くが如し。釋迦末代の法、二萬の菩薩大乘を住持して斷絶せざらしむ、『涅槃』に説くが如し。寂滅道場、に三千の菩薩、菩薩戒を受く、『梵網』に説くが如し。兜率天の中、八萬四千の菩薩、菩薩戒を受く、淨行に説くが如し。下方空中に六萬恆沙の菩薩大乘の法を持つ、『法華』に説くが如し。一切の菩薩、常に衆生の不請の友と爲る、『心地』に説くが如し。今、末代をして不請の友を請ぜしむ、故に菩薩を請じて同學の伴と爲す。一には昔國王に一千二子ありき、千子は發心して皆佛道を成ず。一子は發願して其法を護持す。天竺の佛寺に皆其像を造る、二金剛神是なり、『梵網』の如し。又、力士あり、名けて密迹金剛と曰ふ、佛法を護持す、『密迹』に説くが如し。又妙高山の頂、四の角に四峰あり。金剛手の所住なり、『俱舍』に説くが如し。劫初に水上に忽ち一人あり、臍に千葉の蓮華あり、淨居見て云はく、『此賢劫の中に當に千佛ありて出世したまふべし』と。長壽の諸天悉く此事を知る、諸佛の出でたまふ時に皆法輪を請す、諸佛の滅後には皆法藏を守る、諸部に説くが如し。今、戒事を行するが故に護持を請す。二には金剛神、及び變化人、盡く得戒を受く。十八梵、

【四轉】阿字轉じて發心、修行、菩提、涅槃の四德を顯現するを言ふ。

【陀羅尼藏】眞言陀羅尼の法藏。

【四不退】位不退、行不退、念不退、處不退の四、不退とは功德善根愈増進して退失退轉せざるを言ふ。

【八塵】煩惱、陰死、他化自在天子無常、無樂、無我無淨の八塵。

【五大明王】不動降三世、軍荼梨、六足尊、淨身の五明王を指す。

【月藏】大方等大集月藏經十卷、高齊の那連提耶舍譯來りて方等を説く

六欲天、十六國王皆佛戒を受く、『梵網』に説くが如し。又菩薩戒を受けて四轉、六欲、四禪の天王と作る、諸經に説くが如し。又、淨居、光音、非想天王、皆佛戒を受く、『淨行』に説くが如し。彼は是れ已に學す、我は是れ今學す、故に等侶に憑りて以て護持を請す。三には陀羅尼藏、執金剛手、『梵網』の戒經を受持す。即ち金剛頂の淺略なり。又菩薩大藏經の戒法は是れ陀羅尼藏の攝なり、三藏、西海に船没して海に投ず。又鐵圍山の結集に梵釋諸天來集して戒法を修せしむ、故に護持を請す。四には生身の佛には五百の執金剛神あつて護持す、法身の佛には無量の執金剛神あつて護持す、『大論』に説くが如し。四不退の菩薩には五族の執金剛護持して須臾も離れず、『大般若』に説くが如し。圓宗の初心には八魔遠く逃る、故に不退と名く。五大明王の常に加持する所なり。又父母に孝事すれば天王帝釋、汝が家の中に在り、又能く孝を行すれば、大梵尊天、汝が家の中に在り、又能く孝を盡せば釋迦文佛、家中に在り、『月藏』に説くが如し。父母、師僧、三寶に孝順せよ、孝順は至道の法なり。孝を名けて戒と爲す、『梵網』に説くが如し。四恩に報ぜんが爲に三聚戒を受けよ、『心地』に説くが如し。今、孝戒を行ぜんが故に護持を請す。一には我凡師を信すれば聖師を見るが故に。『法華』に云ふが如き、若し衆生あつて汝が所説を信すれば、則ち我、及び比丘僧、並に諸の菩薩を見ると爲す。二には師、聖法を納けて我に戒を傳ふるが故に。『梵網』に云ふが如き、是法師は師師相授するが故に、好相を須ひず。是を以て法師の前に戒を受くれば即ち戒を得、重心を生ずるを以ての故に。三には我師の語を解

【應正等覺】應供  
正遍知と同一なり  
應供は人天の供養  
に應ずるが故に、  
正遍知は等しく一  
切法を知るが故なり

【悔担哩耶】彌勒  
菩薩を指す。

すれば聖戒を得るが故に。『梵網』に云ふが如き、但法師の語を解すれば盡く戒を受得す。四には師、凡身を現すれども即ち聖身なるが故に。『法華』に云ふが如き、應に比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の身を以て得度すべき者には、即ち比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の身を現じて而も爲に法を説く。請師の因縁大槩然るが如し。一一の師を請すること、當に是の如く觀すべし。先づ和上を請す。

弟子某甲等、娑婆の菩薩戒の教主、菩提樹下にして始めて菩薩戒を結しまふ。釋迦牟尼如來應正等覺を請し奉る。我爲に菩薩戒の和上と作りたまへ。我和上に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん、慈愍の故に。一體して説く。

次に羯磨阿闍梨を請す。弟子某甲等、娑婆の菩薩戒の上座、伽耶山頂にして初めて菩薩戒を受けたまへる文殊師利大菩薩摩訶薩を請し奉る。我爲に菩薩戒の羯磨阿闍梨と作りたまへ。我阿闍梨に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん、慈愍の故に。一體して説く。

次に教授阿闍梨を請す。弟子某甲等、娑婆の菩薩付囑の寂滅道場にして、初めて菩薩戒を受けたまへる悔担哩耶大菩薩摩訶薩を請し奉る。我爲に菩薩戒の教授阿闍梨と作りたまへ。我阿闍梨に依るが故に菩薩戒を受くることを得ん、慈愍の故に。一體して説く。

次に尊證師範を請す。弟子某甲等、十方菩薩戒の大師、一切世界の常に菩薩戒を誦したまへる一切如來應正等覺を請し奉る。我爲に菩薩戒の尊證師範と作りたまへ、慈愍の故に。一體して説く。

次に同學等侶を請す。弟子某甲等、十方菩薩戒の大衆一切世界の常に一切の菩薩戒を學せる一切同法の菩薩摩訶薩を請じ奉る。我爲に菩薩戒の同學等侶と作りたまへ、慈愍の故に。一禮して

次に金剛外護を請す。此一の奉請は心地觀に依る。弟子某甲等、十方菩薩戒の護法、一切世界に常に菩薩戒を護したまへる一切の金剛天衆變化者を請じ奉る。我爲に菩薩戒修學の外護と作りたまへ、慈愍の故に。一禮して

次に現前の戒師を請す。此一は新撰本には此處に安ず、妙樂本には聖前に安ず。我某甲等、今、大德に従つて菩薩戒を求受す。大德、我に於て勞苦を憚らざれ、慈愍の故に。

次に乞戒。此一は高昌本に准ず。若は乞戒は時に隨つて取捨せよ。族姓の大德、今、正に是れ時なり。願くば時に我に菩薩の戒法を施したまへ。

次に傳戒師。應に起つて爲に聖師に白して云ふべし。敬つて十方盡虛空界の一切の諸佛、諸大菩薩に白す、某甲等、我に諸佛菩薩に白さんことを求む。諸佛菩薩に従つて菩薩戒を乞受せんと欲す。此に某甲等、已に大願を發して已に深信あり、能く一切を捨てて身命を惜まず。唯願くは諸佛菩薩、憐愍の故に某甲等に菩薩戒を施與したまへ。一禮して請師已に竟んぬ。

第四に懺悔。『心地觀』に云はく、

若し如法に受戒せんと欲せば、應に當に懺悔して清淨ならしむべし

【現行】種子より色心の諸法を生ずるを現行と言ふ。  
 【種子】阿頼耶識に一切法を生ずる功能あるを種子と言ふ。  
 【藏識】八識中の第八阿頼耶を指す一切の種子を含藏する識なり。

【大圓鏡】大圓鏡智のこと、凡夫の第八識如來の大智に名く。智體清淨にして染垢を離れ衆生善惡の業報より萬徳の境界を顯現すること大圓鏡の如くなるを言ふ。

起罪の因に十縁あり、身三、口四、及び意三なり  
 生死無始なれば罪も窮り無く、煩惱の大海は深くして底無し  
 業障嶮峻にして須彌の如し、造業の由因二種より起る  
 謂ゆる現行及び種子なり、藏識、一切の智を持縁す  
 影の形に隨ふが如くにして身を離れず、一切の時に中聖道を障ふ  
 近きは人天妙樂の果を障へ、遠くは無上菩提の果を障ふ  
 在家は能く煩惱の因を招き、出家は亦清淨の戒を破る

若し能く如法に懺悔せん者は、所有の煩惱悉く皆除かん  
 猶劫火の世間を壞し、須彌並に巨海を燒盡するが如し  
 懺悔すれば能く煩惱の薪を燒き、懺悔すれば能く生天の路に往く  
 懺悔すれば能く四種の樂を得、懺悔すれば寶摩尼珠を雨す  
 懺悔すれば能く金剛の壽を延べ、懺悔すれば能く常樂の宮に入る  
 懺悔すれば能く三界の獄を出で、懺悔すれば能く菩提の華を開き  
 懺悔すれば能く菩提の果を結ぶ  
 懺悔すれば佛の大圓鏡を見、懺悔すれば能く寶所に至らん  
 若し能く如法に懺悔せん者は、當に二種の觀門に依つて修すべし  
 一には事の滅罪門を觀じ、二には理の滅罪門を觀すべし

【三界火宅】三界は欲、色、無色の三を指し、此三界の生死の苦を火宅に譬へしなり。

【六塵】色聲香味觸法の六境は夫夫根を有して身に入り、淨心を染汚すれば是等の六境を六塵とも言ふ。

事の滅罪を觀するに其三あり、上中下根を三品と爲す。若し上根あつて淨戒を求めんに、大精進を發して心に退すること無し。悲涙泣血して常に精懇に、哀み盛にして徧身に血現す。念を十方の三寶の所、並に餘の六道の諸の衆生に繫け長跪合掌して心亂れず、發露洗心して懺悔を求む。唯願くば十方三世の佛、大慈悲を以て我を哀愍したまへ。我輪廻に處して所依無し。生死の長夜常に覺めず。我凡夫に在つて諸縛を具す、狂心顛倒して徧く攀緣す。我は三界火宅の中に處して、妄りに六塵に染して救護無し。我貧窮下賤の家に生じて、自在を得ずして常に苦を受く。我邪見の父母の家に生じて、罪を造ること惡眷屬に依る。唯願くば諸佛大慈悲をもつて、哀愍護念して一子の如くしたまへ。一たび懺して復諸罪を造らじ、三世の如來常に證明したまへ。是の如き勇猛の懺悔の者をば、名けて上品に淨戒を求むと爲す。若し中根ありて戒を求むる者は、一心に勇猛に諸罪を懺し。涕泣交横するも覺知せず、徧身に汗を流して佛に哀求す。無始の生死の業を發露して、大悲の水の塵勞を洗はんことを願ひ。



罪障を滌除して六根を淨む、我に菩薩の三聚戒を施したまへと願くは我堅持して退轉せじ、精進を修して苦の衆生を度せん自らは未だ得度せざるに先づ他を度し、盡未來際まで常に斷すること無からん是の如く精勤勇猛の者、身命を惜まず菩提を求むれば能く三寶の靈異の相を感ず、是を中品の大懺悔と名く若し下根ありて淨戒を求めんに、無上の菩提心を發起して涕淚悲泣して身の毛を豎て、所造の罪に於て深く懺悔し十方の三寶の所と、及び六道の衆生の前に對して至誠に無始より來の、所有の諸の衆生を惱亂せしを發露して無礙の大悲心を起して、身命を惜まず三業を悔い已作の罪をば中發露し、未作の惡をば更に造らじと是の如く三品に諸罪を懺するを、皆第一清淨者と名く若し修習して正理を觀ぜんと欲せば、一切の諸の散亂を遠離して新淨衣を著けて跏趺して坐し、心を攝して正念に諸縁を離れよ常に諸佛の妙法身は、體性空の如くにして不可得なりと觀すべし一切の諸の罪性は皆如なり、顛倒の因縁妄心より起る是の如きの罪相は本來空なり、三世の中無所得なり

内に非ず、外に非ず、中間に非ず、性相如如にして俱に動ぜず  
 眞如の妙理は名言を絶す、唯、聖智のみあつて能く通達す  
 有に非ず、無に非ず、有無に非ず、不有無に非ず名相を離る  
 法界に周徧して生滅無く、諸佛は本來同一體なり  
 唯願くは諸佛、加護を垂れて、能く一切の顛倒の心を滅したまへ  
 願くは我早く心性の源を悟りて、速に如來の無上道を證せん  
 若し清信の善男女あつて、日夜に能く妙理の空を觀ぜば  
 一切の罪障、自ら銷除せん、是を最上の持淨戒と名く  
 若し人實相の空を觀知すれば、能く一切の諸の重罪を滅す  
 猶大風の猛火を吹いて、能く無量の諸の草木を燒くが如し  
 諸の善男女の眞實の觀を名けて諸佛の祕要門と爲す  
 若し他の爲に廣く分別せんと欲せば、無智の人中に宣説すること勿れ  
 切凡愚の衆生の類は、聞きて必ず疑心を生じて信ぜざらん  
 若し有智の者は信解を生じて、念念に觀察して眞如を悟らん  
 十方の諸佛皆現前して、菩提の妙果自然に證せん  
 善男女等我滅後の、未來世の中の淨信の者は  
 二の觀門に於て常に懺悔して、當に菩薩の三聚戒を受くべし

【結使】 結も使も共に煩惱の異名。

【阿耨菩提】 阿耨多羅三藐三菩提の略、眞正に徧く一切の眞理を知る無上の智慧を言ふ。【一彈指】 彈指に三意あり、一は諸の爲、二は歡喜の爲、三は警告の爲なり。

其事理に於て差別無し、但根縁を以て應に不同なるべし。

然るに二門の中には理門最勝なるが故に、「善眞觀」に、十方の諸佛は懺悔の法を説く。

菩薩の所行は結使を斷ぜず、使海に住せず、心を觀するに心無し、顛倒の想より起る。此

の如きの想心は妄想より起り、空中の風の依止の處無きが如し。是の如く法相は不生不沒

なり、何者か是れ罪、何者か是れ福なる。我心自ら空なれば罪福も主無し。一切の法も

是の如し、住無く壞無し、心を觀するに心無し、法、法に住せず、諸法は解脱にして滅諦

寂靜なり。是の如きの想をば大懺悔と名け、大莊嚴懺悔と名け、無罪相懺悔と名け、破

壞心識懺悔と名く。我賢劫の菩薩及び十方の佛と與に、大乘眞實の義を思ふに因るが故に、

故に百萬億劫阿僧祇數の生死の罪を除却す。此懺悔に因つて、各成佛を得。佛滅度の後、

佛の諸の弟子、若し疾く阿耨菩提を成ぜんと於せば、大乘經の第一義空を思ふべし。

一彈指の頃に百萬億阿僧祇劫の生死の罪を除却す。是を具足菩薩戒者と名く。鷄磨を須ひ

ざれども自然に成就す。佛、王宮に生る、王、十惡十善を説いて世を治む、故に我法中に

も亦十惡十善を説いて人を度す。佛、匿王に問ふ、「汝が國の正法は何の犯をか重と爲す」

と。匿王、佛に白す、「我國の正法は四法を重と爲す」と。故に我法中にも亦以て重と爲す。

法に善惡無しと雖も、世に隨つて罪福を説く。譬へば王罪を犯するが如し。自ら衆罪を首

し、罪を説いて懺悔すれば自ら諸罪を脱す。譬へば王家に屬すれば負債を免除するが如し、

理の懺悔を觀するも亦衆罪を滅す。此は是れ在家と七衆通行の法なり、亦是れ直往の

【二】十二門の中  
 第五の發心を論ず  
 【義章】大義義章  
 二十卷、階の淨影  
 寺の慧遠撰す。大  
 小乗の法相を解釋  
 せるもの。

【四弘の大願】衆  
 生無邊誓願度、煩  
 惱無數誓願斷、法  
 門無上誓願成、此  
 道無上誓願成、此  
 四種の大願は一切  
 の菩薩初發心の時  
 必ず發す。

廻心なり、七衆同懺の儀なり。懺悔已に竟んぬ。

第五に發心。心地に云はく、「普く四恩に報いんが爲の故に、清淨の菩提心を發起し、

應に菩薩の三聚戒を受くべし」と。菩提心とは、「義章」に云ふが如きは、新學の菩薩は先學

の有智有力の菩薩を頂禮して而も是言を作すべし、我今大菩提心を發さんと欲すと。先學

の菩薩は應に教授して云ふべし、過去の菩薩も已に發し、未來の菩薩も當に發すべし、現

在の菩薩も今發す。仁者今三世一切の菩薩に隨順して、當に大菩提心を發して、一向に無

上菩提を志求すべし。爾時新學の菩薩、當に是言を作すべし、我今菩提心を發起して、一

向に大菩提を志求し、三世の諸の菩薩に隨順して盡未來際まで退轉せじと。爾時有智有

力の菩薩、彼に於て能く正行を行せしむ。菩薩無亂心を以て而も是言を作さん、仁、是

の如く聽く、仁は慈の菩薩歟不や。新學、應に答へて言ふべし、是れ菩提の願を發せしや

未や。應に答へて已發すと云ふべからず。爾時に先學の菩薩、當に四弘の大願を教へべし。

右、一切衆生に於て自ら四種の卑下を起す。一には諸佛の如く、二には國王の如く、三

には父母の如く、四には大家の如くす。今直に一切衆生は即ち四種の恩處と爲す。一には

生生の父母の恩に背く故に、二には世世の國王の恩に背く故に、三には後後の師範の恩に

背く故に、四には當當の三寶の因に背く故に。彼恩德を以て我を資成するが故に。我以て

報謝して彼を引導せん。菩薩普く一切衆生を觀じて、威く自身と爲す、更に他身無きが故

に願くば衆生未だ度せざれば我も亦度せじ、衆生若し度せば我も亦度を得ん、故に衆生無

【闍提】一闍提に同じ、前註。

【二】十二門の中第六問遮の旨を説す。

邊哲願度と言ふ。故に復一切衆生の煩惱は即ち是れ菩提なるが故に、願くば衆生未だ斷ぜざれば我も亦斷ぜじ、衆生若し斷ぜば我も亦斷除せん、故に煩惱無邊哲願斷と言ふ。故に復一切衆生の心行は即ち是れ菩提の心行なるが故に、願くば衆生未だ解せざれば我も亦解せじ、衆生若し解せば我も亦解了せん、故に法門無盡哲願知と言ふ。故に復一切衆生の菩提は即ち是れ菩薩の菩提なるが故に、願くば衆生未だ成ぜざれば我も亦成ぜじ、衆生若し成せば我も亦成を得べし、故に菩提無上誓願成と言ふ。一切の菩薩皆此誓あり、皆大悲闍提を成ぜずといふこと莫し、故に法華に云はく、『我本菩薩の道を行す、今猶未だ満たず』と。論に云はく、『衆生無盡の願は究竟せるに非ず』と。楞伽等に亦云はく、『大悲の菩薩は一切諸法は本來寂滅なりと了するを以て、未來際を盡すまで涅槃に入らず』と。『淨行』に亦云はく、『願くば此功德を以て普く一切に施し、衆生自ら覺せずんば我正位を取らじ』と。法華に亦云はく、『願くば此功德を以て普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に佛道を成ぜん』と。發心已に竟んぬ。

第六に問遮とは、『梵網』に云はく、『若し受戒せんと欲する時は、師、應に問うて云ふべし、汝、現身に七逆罪ありや、若し菩薩の法師は七逆の人の與に現身に受戒することを得ざれ。七逆とは、出佛身血、殺父、殺母、殺和上、殺阿闍梨、破羯磨轉法輪僧、殺聖人なり。若し七逆を具すれば現身に得戒せず、餘の一切人は盡く受戒を得』と。又云はく、『七逆無き者は受を得、若し十戒を犯すことあらば應に教へて懺悔せしむべし。佛菩薩の形像

【曠の云はく】曠とは明曠を指す。【義戒經】菩薩善戒經九卷、劉宋の求那跋摩譯。三十五佛悔除罪の法を説く。

の前に在りて、日夜六時に十重四十八輕戒を誦し、苦到に三世千佛を禮して好相を見んことを得よ。若は一七日、二三七日、乃至一年に好相を見るを要す。好相とは佛來つて摩頂し、若し光花種種の異相を見れば便ち滅罪を得ん。若し好相無くんば懺すと雖も益無し。是人現身に亦戒を得ず、而も増受戒を得るなり。若し四十八輕戒を犯さば對手懺して罪滅す。七遮に同じからず」と。寂の云はく、「問ふ所の罪に三種あり、一には七逆、一向に受くることを得ず、二には十重、若し懺して相を得れば受くることを得、相を得ざれば得ず。今謂く、十重は若し懺して相を得れば受法を作さざれども便ち本戒を得。若し懺除せざれば應に更に増ねて受くべし。三には四十八は唯、須らく對悔すべし、更に受くることを須ひす」と。寂賢と同説なり。十重の下中纏の犯は對懺すれば罪滅し、還つて本戒を得。上纏の犯重は若し好相を得れば舊戒還つて生ず、更に受くることを須ひす。若し相を得ざれば舊戒已に失す、故に更に戒を受けよ。曠の云はく、「善戒經」に云はく、二緣あつて菩薩戒を失ふ、謂く、曾て受けて後に菩提心を退没し、及び増上の十惡を造り、十重を犯す。此二緣を除けば乃ち他世に至りて四趣に流轉すれども戒體恆に存す云」と。此二の失戒の人、並に中下の心にして而も十重を犯すれば、戒を失はざる人なれども懺するに相を見ざれば、罪も亦滅せず、名けて益無しと爲す。既に七遮に非ざれば並びに重ねて受くるを許す。故に而も得増受と云ふ。是故に菩薩、重重に受くることを得て、而も捨法無し。今、云はく、若し對懺還淨に約すれば中下の兩重も亦爾り。若し重ねて常に受くるに約すれば四十八も

【業障】 惡業の正道を障礙するを言ふ。

【調達】 提婆達多の異名、即ち阿難尊者の兄、佛の從弟なり。

【閻王】 阿閻世王は父母を囚囚すと言ふ。

【大天】 末土羅國の一商の子。殺父、殺母、殺阿羅漢の三逆罪を犯すと傳ふ。

【五事】 大天五事妄語として傳へらる。五事とは五惡見なり。

【初轉四諦】 初轉法輪時の四諦の理、四諦とは苦、集、滅、道の四眞理を言ふ。

亦爾なり。懺するに相を得ず、上纏好釋して唯須らく重ねて受くべし。懺淨する能はざるは五逆なり。殺和上、及び阿闍梨を加へて名けて七逆と爲す、七逆の遮戒は此れ則ち業障なり。出佛身血は昔、調達、石を走らして指を害せしが如し、末代に無しと雖も若し塔寺を毀ち、經像を焚くも亦其類なり。殺父、殺母は閻王等及び人天等の如し。殺和上、殺阿闍梨は謂く、新教師及び軌範師なり。『善生』に云はく、『發菩提心の衆生を殺さば菩薩戒を受くることを得ず』と。即ち和上と阿闍梨を殺す類なり。謂く、會て受具すれば此逆を行すべく、若し未だ會て受けざれば二師を害し、及び僧を破するの逆を除く。羯磨の轉法輪僧を破するは、昔、大天、説戒の日、五事を説く故に、諍つて羯磨を破し、調達の五百の比丘を化誘して佛の法輪を破するが如し。一には云はく、唯、法輪を破するは是れ逆なり。若し羯磨を破するは逆に非ず、羯磨の時、諍つて異見を作さんと欲せざるが故なり。然るに輪を破する時に羯磨則ち壞す。一には云はく、破輪は一向に是れ逆なり、破磨は亦應に分別すべし。若し法の想を起して破するは則ち逆に非ず、非法の想を以て破するは則ち逆と爲る。一には云はく、法輪を破する時、羯磨僧を破せず、而も羯磨の法を誘るが故に破羯磨と言ひ、僧と言はざるなり。一には云はく、佛滅度の後、別の邪羯磨無しと雖も、正羯磨を破し、及び初轉四諦の理を破し、若し正法を轉じて逆を爲す、破は亦此流なり。聖人を殺すを學無學に通ず、若し七逆を具するに二義あり、一には縁を具すれば業を成じ、縁を闕けば具に非ず。二には一身に七を具す、謂く、會て受具すれば一身に七を具す、若

亦爾なり。懺するに相を得ず、上纏好釋して唯須らく重ねて受くべし。懺淨する能はざるは五逆なり。殺和上、及び阿闍梨を加へて名けて七逆と爲す、七逆の遮戒は此れ則ち業障なり。出佛身血は昔、調達、石を走らして指を害せしが如し、末代に無しと雖も若し塔寺を毀ち、經像を焚くも亦其類なり。殺父、殺母は閻王等及び人天等の如し。殺和上、殺阿闍梨は謂く、新教師及び軌範師なり。『善生』に云はく、『發菩提心の衆生を殺さば菩薩戒を受くることを得ず』と。即ち和上と阿闍梨を殺す類なり。謂く、會て受具すれば此逆を行すべく、若し未だ會て受けざれば二師を害し、及び僧を破するの逆を除く。羯磨の轉法輪僧を破するは、昔、大天、説戒の日、五事を説く故に、諍つて羯磨を破し、調達の五百の比丘を化誘して佛の法輪を破するが如し。一には云はく、唯、法輪を破するは是れ逆なり。若し羯磨を破するは逆に非ず、羯磨の時、諍つて異見を作さんと欲せざるが故なり。然るに輪を破する時に羯磨則ち壞す。一には云はく、破輪は一向に是れ逆なり、破磨は亦應に分別すべし。若し法の想を起して破するは則ち逆に非ず、非法の想を以て破するは則ち逆と爲る。一には云はく、法輪を破する時、羯磨僧を破せず、而も羯磨の法を誘るが故に破羯磨と言ひ、僧と言はざるなり。一には云はく、佛滅度の後、別の邪羯磨無しと雖も、正羯磨を破し、及び初轉四諦の理を破し、若し正法を轉じて逆を爲す、破は亦此流なり。聖人を殺すを學無學に通ず、若し七逆を具するに二義あり、一には縁を具すれば業を成じ、縁を闕けば具に非ず。二には一身に七を具す、謂く、會て受具すれば一身に七を具す、若

し未だ曾て受けざれば二師の輪を除く。然れども極多に就いて七遮を具するを説く、一、一  
 の逆を犯すと謂んには非ず、遮障を成ぜず。若し爾らずんば、佛滅度の後には須らく更に  
 破僧、出血を問ふべからず。又此七遮は但現身を問うて宿世を問はず。善戒十種、婆黎十五  
 十三難、今は「梵網」に我今汝に問ふ、當に實の如く答ふべし、若し實の如く答へずんば徒ら  
 依つて唯七遮を問ふ。汝、曾て佛身より血を出さざるや不や、父を殺さざるや不や、母を殺さ  
 ざるや不や、和上を殺さざるや不や、阿闍梨を殺さざるや不や、羯磨轉法輪僧を破せざる  
 や不や、聖人を殺さざるや不や。若し七遮無くんば、諒に受戒に堪へたり。經に准ずるに、  
 若し十重を犯さば教へて懺悔せしめよ、若し輕垢を犯さば對首して懺せしめよ、而も問法  
 無し。疏に准じて問ふ可し。謂く、若し増受戒を見ては應に問ふべし、汝、何の犯をか犯  
 せる、若し重を犯さば、復何の纏ぞと問へ。若し上纏を犯せば復自ら懺して相を得たりや  
 と問へ。若し好相を得ば則ち汝已に還り出せりと許す、我證明と作らん。若し好相を得  
 ずんば則ち教へよ、汝實に戒を失す、宜く更に新に受くべし。若し中下を犯せば、則ち教  
 へよ、汝の戒は未だ失せず、對懺せば還つて淨とならん。若し輕垢を犯せば則ち教へよ、  
 汝の戒猶在り、對首せば還つて淨とならん。上來の四人の行法是の如し。若し樂欲に隨つ  
 て重重に更受せよ。今、懺法に約して三種を爲さしむ、一には輕垢を懺し、二には十重を  
 懺し、三には一切を懺す。一に四十八は唯須らく對懺すべし、更に受くることを須ひず。  
 便ち木戒を淨む、菩薩僧に對して惡を滅す可き者なり。一人を請して懺首と爲す。云はく、



【菩薩地】菩薩地持經の略名。

【補特伽羅】ブドガラ(Pudgala)人及び衆生等の譯あり。

【菩薩毘那耶】菩薩戒。

菩薩念を専らにしたまへ。我某甲今、菩薩を請じて犯輕垢の懺悔の主と爲す。願くば菩薩、我爲に懺悔と作りたまへ、慈愍の故に。次に懺悔。懺悔とは梵語なり、正しくは懺尾と云ふ、亦懺摩と云ふ。此には請忍と云ひ、恰に云はく、自罪を懺陳すと。今悔の字を加へて改悔と謂ふなり。互に跪きて合掌して云はく、菩薩志を専らにしたまへ。我某甲故らに大乘の法等を聽かざるが爲に輕垢罪を犯す。今、菩薩に向つて發露懺悔す、懺悔すれば則ち安樂なり、懺悔せざれば安樂ならず、憶念發露して知つて而も敢て覆藏せず。願くば菩薩我を憶したまへ、清淨の戒身を具足して清淨の菩薩とならん。懺悔の主の云はく、自ら汝心を責めて應に厭離を生ずべしと。答へて云はく、爾なりと。懺悔の羯磨に依つて之を出す。二に云はく、十重若し懺して相を得ば、受法を作さざれども便ち本戒を得。若し懺除せざれば應に更に増受すべし。「菩薩地」に云はく、又此菩薩の一切を違犯するは當に知るべし、皆是れ惡作の所攝なり。有力に向つて語に於て義を表し、能く覺り能く受けよ。小乘大乘の補特伽羅に發露懺悔せよ。若し諸の菩薩、上品の纏を以て上の如き他勝處の法を違犯せば、戒律儀を失ふ、應に當に更に受くべし。若し中品の纏に上の如き他勝處の法を違犯せば、應に補特伽羅に對すべし。戒はこの數に過ぎたり。應に發露除惡作法の如くすべし。先づ當に犯事の名を稱述して應に是説を作すべし、「長老は法を専らにす」と。或は云はく、「大徳、我は是の如く菩薩毘那耶の法に違越すと名く、所稱の事の如き惡を犯じて罪を作れり。餘は苾芻の發露懺悔、滅惡作罪法の如し、應に是の如く説くべし。

【波羅夷】(Pāṭika) 六衆罪の第一、戒律中の最重罪にして梵網經の十重戒等は是なり。

「若し下品の纏に上の如き他勝處の法を違犯し、及び餘を違犯せば、應に一の補特伽羅に對して發露悔法すべし」と。當に知るべし、前の如し。若し隨順の補特伽羅無くんば、對して所犯を發露し悔除すべきもの無くんば、爾時に菩薩、淨意樂を以て自誓の心を起し、我當に決定して防護して當來に終に重ねて犯せざるべし」と。是の如くせば犯に於て還つて出淨ならん。若し對主無くば梵網の意に依つて佛前にして自ら懺せよ。若し好相を得ば佛來つて頂を摩し、種種の光花、或は空中に聲ありて毘尼薩と言はん。或は印を得ん。鬘へば滅罪の字等を作して便ち滅罪を得るが如し、還つて本戒を得ん。若し相を得ずば便ち更に受けよ。若し下中の二纏を犯せば隨つて一三を請じて對首し發露し懺悔せば而も本戒を得ん。菩薩念を専らにしたまへ。某甲今、菩薩を請じて波羅夷を犯する懺悔の主と爲す。願くば菩薩、我爲に懺悔を作へ、慈悲の故に。説ふ。次に正に懺悔す、菩薩念を専らにしたまへ。我某甲、故らに大乘の法等を聽かざるが爲に波羅夷を犯す。今、菩薩に向つて發露し、懺悔す。懺悔すれば則ち安樂なり、懺悔せざれば安樂ならず。憶念し發露して知つて而も敢て覆藏せず。願くは菩薩我を憶したまへ、我清淨の戒身を具足して清淨の菩薩とならん。説ふ。藏師、寂師皆云ふ、若し好相無くんば懺すと雖も益無し、是れ現身に亦戒を得ず。此は上纏に約す。舊戒已失せば而も増受戒を得よ、既に七遮に非ざるが故に更に受くることを得。舊に三の解を作す、一に云はく、得ずして而も強ひて受くれば更に受戒の罪を増す、教に違するを以ての故に。二に云はく、得戒せざれども而も受戒の福を得。三

【藥師】藥師經、  
五譯あり。普通に  
は支非譯一卷を指  
す。

に云はく、直に是れ驚嗟する不得の障のみ。今、而も増受戒を得と謂ふは是れ重受を許すの言なり。謂く、十重を犯して懺するに、相を得ざれば現身の中に本戒を得ずと雖も、而も更に新戒を増受するを得ん。所以に知ることを得。婁路經に云はく、「十重は犯あつて悔無し、重ねて受戒せしむることを得。八萬に威儀を輕と名け、犯あれば悔過せしむることを得、對主して悔すれば滅す」と。「菩薩地」に云はく、「若し諸の菩薩、此毀犯に由つて、菩薩の淨戒の律儀を棄捨するも、現法中に於て堪任せん。苾芻の別解脱戒の如きは他勝處を犯すれば、現法中に於て更に受くるに任へず」と。「決擇分」に云はく、「此因縁に由つて當に知るべし、菩薩の律儀を棄捨して、若し還つて清淨戒を得んことあらば、復應に還つて受くべし」と。當に知るべし、上纏失戒更受の法、一ら初受新戒の人の如くなることを若し其中下の犯重ならば對懺して還つて淨なり。自ら懺して相を得れば本戒還淨の者、更に受く可からず、本戒を得るが故に。「涅槃」に云ふが如き、世尊に兩種の人あり。一には惡を作さざらんことを欲し、二には作し已つて能く悔す。是れ則ち誰人か過無からん、改むれば莫大なり。「瑜伽」に云ふが如き、懺は至心に在り。世尊の云ふが如くんば、所犯の罪に於て意樂に由るが故に、我説いて能く治罰を出す、故に謂く懺悔藥は罪毒を教ふるなり。三には人、道俗大小と無く、戒に具分權實無く、皆深法に還つて懺悔すれば罪を滅し、還つて本戒を得、亦本戒に過ぎたり。「藥師」に云はく、「若し三歸、五戒、十戒、二百五十戒、五百戒、菩薩戒を破すれども、藥師を供養せば三惡に墮せじ」と。「普

【六齋日】毎月八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日、六箇日は四天王が人の善惡を伺ふ日なりと傳ふ。

賢に云はく、「若し輪間の三歸、五戒、八戒、比丘戒、比丘尼戒、沙彌戒、沙彌尼戒、式叉磨尼戒、優婆塞優婆夷戒を破し、若し王者大臣、波羅門居士、長者宰官の五逆罪を作り方等を誘れども、大乘經の第一義空を思へば戒法具足して罪垢皆滅す」と。又刹利居士に五種の懺悔あり、三寶を誘らず、出家を障へず、梵行の人の爲に惡留難を作さず、大乘を持する者を供養し、第一義空を憶念す、是を第一と名く。父母に孝養し、師長を供養する、是を第二と名く。正法をもつて國を治め、人民を上げざる、是を第三と名く。六齋日に於て諸の境内に勅して不殺を行せしむ、是を第四と名く。一實の道を信じ、佛の不滅を知る、是を第五と名く。若し此法を修せば、久しからずして當に阿耨菩提を成すべし。『集法悅』に云はく、『陀羅尼を誦すれば五逆を滅し、十方に飛行す』と。此經に既に五逆を滅す、則ち知んぬ、亦七逆を滅することを。若し此等の重罪を滅し、上來の戒品を具足せんと欲せば、當に深く第一義空を思惟すべし。罪垢は古來今に住せず、兩間及び内外に在らず、良に妄想に由つて分別を起し、種種の見倒此に因つて生ず。慧眼明かに照して餘あること無く、摩勞本來清淨の相なり。若し能く實相の中に安心すれば、煩惱は空の如くにして住處無し。『菴掘』に云はく、『一彈指の頃に如來常恆不變如來の藏に於て、若し戲笑して説き、若し他に隨順せば、此れ反つて外道の若は婆羅夷、無間の惡業、阿僧祇の罪、須臾に悉く滅して當に我所得を得べし』と當に知るべし、深法の力、阿僧祇の罪、一彈指の頃に須臾に悉く滅することを。問遮已に竟んぬ。

【二三】十二門の第七授戒の旨を説明す。  
【小乘、通乘、別乘、同乘】藏教、通教、別教、同教。

【言說法身】二種法身の一。

第七に授戒とは先づ略して相を示し、次に正しく戒を授く。先づ略して相を示すとは、菩薩の三聚淨戒に略して四種あり。謂ゆる小乘、通乘、別乘、同乘の戒法なり。此中に今は同教の菩薩の三聚淨戒を授く。謂ゆる攝律儀戒、攝善法戒、饒益有情戒なり。故に「心地」に云はく、「一應に菩薩の三聚戒の一切の有情を饒益する戒、一切の善法を修攝する戒、一切の律儀を修攝する戒を受くべし」と。此同乘の三聚淨戒に約して示すに三種あり、一には傳受戒、二には發得戒、三には性徳戒なり。論の正受戒、串習戒、自性戒の如し云云。一に傳受戒とは、我今三聚淨戒を傳へんと欲するに、是れ昔、蓮華臺藏世界の盧舍那如來、此心地の金剛寶戒を以て妙海王、及び千の王子に授けし時、惟れ我本師釋迦牟尼如來、此戒を誦持して次に逸多菩薩に傳ふ。是の如く二十餘の菩薩次第に相承して乃至印度、眞旦、日本に傳へ來る。我假名の菩薩比丘某甲此戒を受持す。今者維れ釋迦の滅後千九百年中某元某年歲次某月某日某時、上分上時に汝等に傳へんと欲す。此傳受戒をば名けて言說法身と爲す。若し相傳へずんば法身即ち滅せん。汝等當に善く此金剛寶戒の言說法身を受け、一切衆生に傳授して未來際を盡すまで斷絶することを得ざるべし、能く受傳せんや不や。是故に佛の言はく、汝新學の菩薩、頂戴して戒を受持せよ。是戒を受持し已りなば、諸の衆生に轉受して三世に流通して化化絶えず。千佛を見たてまつることを得ば千佛手を授けたまふべし。是故に汝等此事を當に是の如く持つべし」と。二に發得戒とは、我今三聚の淨戒を發得せんと欲す。是れ昔、蓮華臺藏世界の盧舍那如來、本因地に在して初發心

【無作の戒品】戒法は無作色と言ふ一種の色法を以て戒總とするが故に無作の戒品と言ふ無作とは因縁の造作なきものを言ふ

の中に凡夫の師に従つて此戒を受けし時、第三羯磨の竟りに一刹那の間に、自らの身口意及以法界色心の上には是の如きの無作の戒品を發得す。一たび發得して後は常住不滅にして、一切處に偏じて傾動あること無し。未來際を盡して破壞す可からず、入菩提を成ずるまで常に此戒を誦して以て内證心地の法門、自受法樂、施他法門と爲したまへり。彼妙海王、及び千の王子、阿逸多等の二十餘の菩薩、乃至印度、斯那、日本の相承の菩薩、惟れ我假名の菩薩比丘某甲、乃至十方三世の此戒を受けん者は皆悉く自らの身口意及以法界の色心の上に、此戒を發得して一へに舍那の如し。今者汝等をして亦第三羯磨の竟り、一刹那の間に於て自らの身口意及以法界の色心の上には、是の如きの無作の戒品を發得して、一たび發得して後は常住不滅にして、未來際を盡して傾動あること無く、自らの菩提を成じ他の菩提を聞かしめんと欲す。若し此發得せる無作の戒法は凡夫の耳目、見聞の形聲に非ず、十方法界六種に震動す。汝等自らの身口意及以法界色心の上に於て、當に微妙可愛の光明、莊嚴の形を作し、亦天崩れ山裂け、雷震ひ地吼ゆるの聲を作すべし。然るに此發得の無作の戒は、是れ凡夫見聞の法に非ず。唯、三寶にありてのみ明に證見したまふ所なり、此發得の戒をば名けて功德法身と爲す、若し發得せざれば法身生ぜず。汝等當に能く是の如きの金剛寶戒の功德法身を發得し、未來際を盡して常に法樂を受くべし、能く發得するや不や。是故に佛の言はく、「一切の意識色心の是情是心あるものは皆佛性戒の中に入る、當に當に當に因あるが故に。當に當に當に常住の法身あり、是故に汝等此事を當に是

【如意珠】龍王等の  
珠にして、此珠は  
意の如く種々の所  
求を出すと言ふ。

【三十二相八十種  
好】三十二相八十種  
は大人の具する相  
にして出家せば無  
上覺を開く相と言  
ふ。八十種好とは  
三十二相を更に細  
別せしものなり。

の如く持つべし」と。三に性得戒とは、我今三聚淨戒を示さんと欲す。是は昔、蓮華臺藏世  
界の盧舍那如来、初め因地に在して凡夫師の開示の力を蒙り、只自心に於て本有眞如の佛  
性、五分法身の戒を開悟したまふ。法身の體は他より得る法に非ず、若し他より得る法な  
らば、燃燈佛の所にして受記を得て即ち佛道を成ずべし。他より得る法に非ず、自修して  
佛を成ずるが故に。經中に云はく、「衆生自ら得度し、佛は衆生を度せず」と。彼妙海王  
及び千の王子、阿逸多等の二十餘の菩薩、乃至印度、斯那、日本の相承の菩薩、誰れ我假  
名の菩薩比丘某甲乃至法界の此戒を承けん者は、皆自心に於て本有の五分戒身を聞悟して  
一へに舍那の如し。今、亦汝等一切衆生の自心に於て、本有の眞如佛性の五分戒身を聞示  
せんと欲す。無始より以來本より汝が心に在り、無明覆蔽して今に至るまで顯れず。譬へ  
ば狂人に如意珠あれども、狂亂を以ての故に都て覺知せざるが如し。諸の佛菩薩は常に  
開示せんと欲するに、汝等狂亂の故に信受す可からず。更に今大心を發して此戒を精進す、  
諸佛大に喜びて皆來つて摩頂したまふ。同意して汝が心の戒身を聞示すれども、汝等煩惱  
に眼盲みて諸佛菩薩を見ず。我今諸佛菩薩に相代りて諦かに汝等に語るべし、諸佛は適に  
今汝等に告げて言はく、一切如来の金剛寶戒の五分法身は汝等が心中に本來常に住し、萬  
徳圓滿なること日月の如く、粧へること瓔珞の如し。三十二相八十種好あつて一切處に徧  
じて大虚空に等し。此語を諦信する、是を成佛と名く。此性得戒を名けて性得法身と爲す。  
若し聞悟せざれば法身顯れず、汝等當に能く是の如きの金剛寶戒の性得法身を聞悟すべし。

未來際を盡して永く諸佛と號けん、能く開悟するや不や。是故に佛の言はく、「金剛寶戒は佛性の種子なり、諸佛は已成の佛、我は是れ當成の佛なり。常に大乘の信を作さば戒品自ら具足す。是故に汝等此事當に是の如く持つべし」と。次に正しく戒を授く。應に與に語つて言ふべし、汝等諦に聽け、汝今我所に於て一切菩薩の淨戒を求受し、一切菩薩の學處を求受す。謂ゆる攝律儀戒、八重四攝善法戒の因果、佛性常住戒と、饒益有情戒、單白に云はく、六度四攝の淨戒、此諸の學處をば過去一切の菩薩も已に受し、已に學し、已に解し、已に行じて已に成佛したまへり。未來一切の菩薩も當に受し、當に學し、當に解し、當に行じて當に成佛したまふべし。現在一切の菩薩も今受し、今學し、今解し、今行じて今成佛したまふ。單白に云はく、今當に汝等に授くべしと。重ねて白して云はく、汝等今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯することを得ざらんや。能く當に持し、能く正不や。單白に一間答して云はく、能く當に持つべしと。重ねて白し三問答して云はく、已に受せり。に語るべし、汝等當に想ふべし、今、此處に於て現に菩薩戒の大和上釋迦牟尼如來、羯磨阿闍梨の文殊師利菩薩、教授阿闍梨の梅怛哩耶菩薩、尊證大師の一切如來、同學等侶の一切菩薩、受戒外護の金剛天等在す。今正しく文殊師利菩薩、梵音聲を發して此羯磨を作す。亦正しく梅怛哩耶菩薩、慈の言音を以て此事を教授すと。三業に渴仰して勸請の偈を説くべし。

我今親しく釋迦尊、文殊、彌勒傳戒の衆に對して



至心に諸の戒品を勸請す、唯、願くは慈悲をもつて早かに授與したまへ

重白の第一徧竟つて應に語るべし、汝等當に想ふべし、今傳受戒、諸佛の心の上、十方法界色心の上、悉く皆動轉して、久しからずして皆來つて將に汝等が身口意の中に入らんと。譬へば釋迦菩薩、昔、道場に坐して正覺を成ずるに垂んとするの時、十方法界の一切諸佛の五分法身、皆悉く搖動して皆來つて垂に菩薩の身に入らんとするが如し。其發得戒、汝等自らの身口心、法界の色心の上、皆悉く搖動して久しからずして發生せん。譬へば大威光童子菩薩の蓮華臺藏世界に坐して正覺を證するに垂んとするの時、修因所得の五分法身、法界に徧滿して垂に將に發生せしが如し。其性得戒は汝等が自心なり、自心の法性の戸開きて皆悉く搖動して内より垂に顯れんとす。譬へば一切義成就菩薩の自性の菩提心場に坐せし時、自心本有の五分法身の量、虚空に等しくして内より垂に顯れんとするが如し。三業相應して召入の偈を説く、

唯、願くば諸佛、法輪を轉じて、佛の心中の戒法藏を轉じ

法界の功德藏を發生して、我心の常住藏を開顯したまへ

重白の第二徧竟つて應に語るべし、汝等當に觀すべし、今、戒を傳受す。即ち諸佛の心の上、法界の色心の上より、皆悉く來集し、汝等が身口心の上、虚空の中に降臨して、微妙可愛なること光明臺の如し。譬へば釋迦菩薩、六年苦行し、菩提の場に坐して成道すること能はざるの時、十方の諸佛來つて教授して、便ち鼻端に於て法輪を觀せしむ、菩

薩教を受けて近く鼻端に於て佛の月輪を觀ず、光明徧く照して其面前に在るが如し。其發得戒、汝等自身、法界の上に聚集顯現せん。譬へば大威光童子菩薩、蓮華臺に坐して一切佛の灌頂を受けし時、菩薩頂上に大光明を發ち、一切の境上に赫奕として照耀せしが如し。其性得戒、汝等自心の内より顯發せん。譬へば薩婆羅他悉地菩薩、自心の殿に坐して正等覺を成ぜし時、初め自心の形を見るに月輪の如くにして自らの胸中に在りしが如し。三業に專注して納受の偈を説く。

十方諸佛の傳受の戒、一切諸法の發得の戒

一心法界の自性の戒、今正しく是れ時なり願くは受得せん

重白第三徧の初に應に語るべし、若し更一徧せば此傳受戒、汝が身中に入つて清淨圓滿なること正しく此時に在り。斯發得戒、一切境を發して廣大に發生せんこと正しく此時に在り。此性得戒、自心の内より開けて、微妙にして出現せんこと正しく此時に在り。餘覺餘思あつて戒法を具足せざらしむることを得ざれ。重白第三徧竟つて應に語るべし、汝等當に一切の戒法を學して悉く已に具足すべし。何となれば、今傳受戒、已に汝等が受學の身中に入る、故に汝等を名けて以て從佛口生と爲す。譬へば釋迦菩薩、正覺を成ぜんと欲するの時、一切の諸佛皆來集して釋迦菩薩の自身の中に會入し、諸佛の五分戒身を以て釋迦の五分戒身と爲し、釋迦自身を以て諸佛の數中に墮せしむるを名けて成等正覺と爲せしが如し。其發得戒、已に汝等法界の身中に發す、故に汝等が號けて以て從法化生と

【三菩提】サンボ  
（Sambodhi）  
正等覺と譯す。  
【本覺】衆生の心  
體は自性清淨にし  
て迷悟を離れ、其  
覺知の徳は本有自  
爾の性徳なれば本  
覺と言ふ。

爲す。譬へば大威光童子菩薩の佛位を受けし時、不可説不可説の大劫の修行の功徳の報に依因て、盡虚空徧法界の一切の五分戒身の果を發得せしを名けて無上覺を成すと爲すが如し。其性得戒、已に汝等が自性の身中に顯る、故に汝等を呼んで以て法身の分を得と爲す。譬へば一切義成就菩薩の三菩提を證せし時、自らの胸中の八分の肉團、干栗多心より眞如自性清淨の一心の實相に通達し、本覺の心法身を證得して常に妙法の心蓮臺に住し、本來三身の徳を莊嚴し、因果を遠離して法然として具せるを名けて大菩提を成すと爲すが如し。昔、佛未だ出でたまはず、諸の外道、諸の大婆羅門は梵天の口より生じ、諸天衆は父母の膝の上に化生し、能く此法を得て天法分を得たりと爲せり。如來世に出でたまひて彼邪説を破す、故に佛法に入る者は從佛口生なり、生じて佛家に在るは從法化生なり、佛種を紹繼せば得佛法分なり、眞に是れ佛子なりと説く。故に『梵網』に云はく、『衆生、佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る。位、大覺に同じうし已つて眞に是れ諸佛の子なり。』と。三業に極悦して證得の偈を説く、

諸佛の三轉の戒法輪をば、我等三業に已に受得し。

諸佛菩薩の中に墮在して、未來際を盡して傾動せじ。

結し竟つて應に語るべし、今より以後は永く汝等を號けて以て諸佛と爲す。何を以ての故に。汝等は無始より以來、尙是れ理性の即身成佛なり。初めて自心の五分法身を開くを名けて名字の即身成佛と爲し、今、自心の五分戒身を受くるを名けて觀行の即身成佛と爲す。

【四依の菩薩】四依に四種あり、人の四依、法の四依、人の四依、説の四依なり。

す。若し十信に入りて六根淨を得ば、當に相似の即身成佛なり、若し初住に登り四十一地に入れば、當に分證の即身成佛と爲す。若し妙覺に昇りて佛地に安住するを當に究竟の即身成佛と爲す。亦は六即の菩薩と名く。謂ゆる理性の菩薩、名宇の菩薩、觀行の菩薩、相似の菩薩、分證の菩薩、究竟の菩薩なり。汝等觀行の諸佛、當に戒法を以て而も大師と爲すべし。釋迦佛の臨終に勅して云ふが如き、我滅度の後、諸の佛子、木叉を師と爲よ、佛の世に在ると而も異りあること無けん」と。又佛説いて云はく、「諸佛の師とする所は謂ゆる法なり」と。汝等觀行の菩薩は當に一切衆生の所依と爲るべし、戒法を傳説して利益安樂し、徧く其供を受くべし。釋尊の勅の如き、我滅度の後、四依の菩薩、佛法を弘通して衆生を饒益せよ、謂ゆる煩惱を具すと雖も能く如來の祕密の藏を知る、是を初依の菩薩と名くと。即ち今汝等觀行の菩薩、已に一切衆生に皆佛性の戒法あるを知るを、能く如來の祕密の藏を知ると爲す。汝等觀行の菩薩、所有の功德は猶十方三世の一切諸佛の所得の功德に勝れたり。釋尊の説きたまふ如き、若し衆生あつて菩薩戒を受くる初心の功德は、十方一切諸佛後心の功德に超勝せり。何を以ての故に。諸佛の成佛は唯有縁の者のみ供養恭敬す。衆生、戒を受くれば一切の諸佛菩薩皆來つて頂を摩し、一切の聲聞緣覺、天龍八部、皆來つて翼從し、一切衆生、六道四生皆此人の爲に歸依の心を作す。所得の功德は十方の諸佛説けども盡すこと能はじ、當に是の如く信すべし。三業に決定して結竟の偈を説く、

【二四】十二門の第八證明の旨を明す  
【索訶世界】現住世界の名、即ち此娑婆を指す。

過去の一切の諸の如來は、已に淨戒を受けて正覺を成じたまへり  
未來の一切の諸の世尊は、當に淨戒を護して佛道を成じたまふべし  
現在の一切の諸の善逝は、現に淨戒を修して妙果を成じたまふ  
我今三世の佛に隨順して、淨戒を受持して菩提を證せん  
受戒已に竟んぬ。

第八に證明とは、戒師、受者の爲に白言を作すべし。弟子某甲仰いで十方盡虛空界の一切諸佛に啓す、索訶世界、一四天下、南瞻部洲人主の地、大日本國、某州某縣、僧伽羅の中、佛菩薩の像前に於て、衆多の佛子ありて來りて我所に於て菩薩戒を求受し竟んぬ。我已に師と爲りて證明を作す。唯、願くば諸佛も亦爲に證明と作りたまへ。三たび諸の菩薩に啓すも亦向の説の如し。説ふ。大衆同じく啓せよ。

歸命す、牟尼大覺尊、已に淨戒の大和上と爲りたまふ

龍種淨智尊下佛は、已に淨戒の阿闍梨と爲りたまふ

未來の導師彌勒佛は、已に淨戒の教授師と爲りたまふ

現在十方の一切佛は、已に淨戒の尊證師と爲りたまふ

十方一切の諸の菩薩は、已に淨戒の同學衆と爲りたまふ

梵釋四王諸の冥道は、已に淨戒の外護衆と爲りたまふ

現前の和上阿闍梨は、已に淨戒の傳授師と爲りたまふ

【七】十二門の第九現相の旨を明す

【五濁惡處】劫濁見濁、煩惱濁、衆生濁、命濁を五濁と言ふ、此五濁ある娑婆世界は即ち惡處なり。

唯、願くば諸尊證明と作りたまへ、生生世世に忘捨したまはされ

證明に竟んぬ。

第九に現相とは、十方法界に三の佛土あり、一には應佛の土、二には報佛の土、三には法佛の土なり。彼三佛土に皆瑞相を現す、一には應佛の土は數微塵に過ぎたり。今、受者の上中下の心に隨つて彼十方應佛の國土に於て三種の相を現す。謂ゆる清凉の風、微妙の香、法樂の聲、光明臺、寶樓閣、佛菩薩の戒身等なり。譬へば釋迦成佛の時の如し、十方法界の衆生草木、皆丈六金色光明徧照の佛身と成る。時に彼十方法界の應佛の土の諸の菩薩等、具惑を以ての故に瑞縁を知らずして各彼佛に問ひたてまつる、何の因縁の故に此相現することあるや」と。時に彼諸の佛、各菩薩に告ぐ、「此某の方、若干の佛土を去ぎて、釋迦如來、昔、化度する所の索訶一四天下、南閻浮提、大日本國某州某縣某僧伽藍の中に處して彼に衆多の佛子あり、菩薩比丘某甲の所に於て白四羯磨して菩薩戒を求受し竟る。今、我等を請じて而も證明と作さしむ。我、誦を作すが爲の故に此相あり」と。時に彼菩薩、各歡喜して成相謂つて言はく、「彼娑婆世界は五濁惡處にして釋迦滅後已に像末なり、煩惱猛利にして不善具足す。是の如き時處にして能く是の如きの勝上の心を發して、諸佛の戒を受けて大菩薩と爲る、甚だ希有なりと爲す。娑婆世界の一日の持戒の所得の功德は十方無難の淨土の百劫修行にも勝超せり。乃ち汝等に於て深く憐愍を生じて、則ち汝等が爲に共に證と作る」と。二に報佛の土は法界に徧滿す。諸佛同體の自受

法樂、一切國土の凡聖の衆生を以て内證法樂の身と爲す。而も諸の衆生は迷惑を以ての故に、佛の内證に在れども都て覺知せず、諸佛の法身常に瘦憔悴あり。今者汝等は具戒の法身なり、諸佛の法身に肥滿を増して、乃ち諸佛をして法樂を増益せしむ。一切諸佛咸く相謂つて言はく、「今某甲衆多の佛子、諸佛の戒を受け諸佛の會に入つて、前佛後佛の戒身同體なり。譬へば衆流の海に至れば皆鹹くなるが如し」と。是故に某甲等が身は即ち我諸佛の身なり。諸佛の身は即ち是れ某甲等が身なり。乃ち今時に於て一切諸佛同體の戒身、永く以て汝等が身中に安住して虚空界と等し。法樂を受用し未來際を盡して破壊す可からず。内證の樂具、嬉遊歌舞、香華燈塗、法身を莊嚴して常に以て汝等が身中に安住し、無間に娛樂して刹那も離れず。一切の諸佛の五族金剛、諸佛變化の外金剛部、梵釋四王、天龍八部、衛護し翼從して一念も離れず。何を以ての故に。汝等未だ戒を受けざる前も、猶彼一切諸佛は汝等の身を以て法樂の身と爲したまひき。況んや今已に佛戒を受けて永く内證眷屬に入るが故に、是の如きの廣大の功德を得るなり。三に法佛の土とは、徧一切處は毘盧遮那の一法性身にして、身土不二なるを常寂光と名く、常樂我淨の四波羅蜜處なり。即ち是れ一切衆生の自心本性の理は、還つて一切諸佛の究竟内證の處と爲る。『勝契經』に云はく、『所有の聲聞法、支佛法、菩薩法、諸佛法は皆悉く毘盧遮那の智藏海中に流入す。』と。汝等又諸佛の戒印を受けて、自然に毘盧遮那の大智海藏に流入す。今より以後、生死の海中に流入すべからず、一體の法身なり。獨り此言を作す、彼某甲等は本來是れ法

【六】十二門の中次に第十戒相の旨を説す。

【文殊問經】文殊師利問經二卷、梁の僧伽婆羅譯。大乘律藏に關する經典。

身なり、我此法身は本來某甲等が身なり。即ち此法身、五道に流轉するを説いて衆生と名け、即ち此法身、戒法を修行するを説いて菩薩と名け、即ち此法身、彼岸に到るを説いて如來と名く。常に是れ法身にして法身に非ずといふこと無し。此法は本住にして無説無聽なり、一切の法に徧じて即ち法身の相なり。汝等が所行の事は即ち是れ法身の事、汝等が所説の言は即ち是れ法身の言なり。若し汝等が身を見るは即ち法身を見るなり、若し汝等が身を供するは即ち是れ法身を供するなり。汝等が身を以て佛の法身と爲す。『楞伽經』中に明に三身説法の文あり。當に知るべし、三身の佛上に皆今日の瑞相を現じ、三身皆今日の因縁を説きたまふことを。現相已に竟んぬ。

第十に戒相とは、戒相に二あり、一には七衆各別の戒法、二には七衆共通の戒法なり。戒法既に然り、受法も亦然り。一に七衆各別の戒法とは、『地持經』には偏に出家の菩薩の爲に四重禁を説く。及び『方等經』には二十四戒、一百四戒を説く。彼四重とは『梵網經』の十重の後の四是なり。『善生優婆塞戒經』に偏に在家の菩薩の爲に前の六重の戒、及び二十八輕戒を説く。前の六重とは『梵網』の十重の前の六是なり。『文殊問經』には偏に沙彌沙彌尼の爲に十善戒を説く。十善戒とは十惡を翻せば十善と爲るは是なり。二に七衆共通の戒法とは、『心地觀』及び『木業經』に通じて在家出家七衆の爲に三聚淨戒を説く、一には攝律儀戒、一には攝善法戒、三には饒益有情戒なり。『梵網經』に通じて七衆の爲に十重四十八輕戒、八萬の威儀、三千の威儀を説く。十重とは一には殺生、二には偷盜、三には姪欲、



四には妄語、五には清酒、六には説過、七には自讃毀他、八には慳貪、九には瞋恚、十には誹謗三寶なり。『普賢觀經』には通じて七衆の爲に六重法、及び八重法を説く。八重法とは一には姪僕、二には殺害、三には偷盜、四には逆父母、五には逆師僧、六には嫉妬、七には瞋心、八には貪利なり。今、受法に於て自ら四種あり。一には戒別人共、謂く、六重八重は本是れ在家の別戒なり。而るを七衆同共に誓受することを許す。二には戒共人別、謂く、五十八戒は本是れ七衆の共戒なり、而るを七衆別時に各受けんことを許す。三には戒別人別、謂く、『地持』、『善生』、『交殊問』等は七衆別戒にして別時に各受く。四には戒共人共、謂く、『梵網經』、『本業』、『心地觀』等は七衆共戒にして同時に共に受く。今の普通戒は即ち第四なり。是れ七衆同時に共に受得すと雖も、各意樂に隨つて而も一衆と作す。故に汝等が爲に三聚の相を説く。一に攝律儀戒とは十重四十八輕戒なり。戒に於て十重を名けて十波羅提別毘木乞叉脫尸羅戒と爲す。此には別解脫戒と云ふ。若し能く堅持するを波羅蜜と名く、此には到彼岸と云ふ。生死を此岸と爲し、涅槃を彼岸と爲す。若し破すれば此岸に住し、若し持すれば彼岸に到る。若し能く犯失するを波羅夷と名く、此には他勝處と云ふ。佛法をば自勝と爲し、魔法をば他勝と爲す。持戒は是れ自勝、破戒は是れ他勝なり。十重は寶の性を失するが如く、四十八は取垢を生ずるが如し。且く十重に約して略して持犯を説かん。若し諸の菩薩、已に戒師の所に於て三説して菩薩戒を求受し竟るに、若は自ら殺し、若は人をして殺さしめ、若は坑穿を作り、人に非人の藥を與へ、

【五大】地水火風空の五大を指す。非情は此五大の要素に依つて成ると言ふ。

【九大禪】自性禪一切禪、難禪、一切行禪、善人禪、淨他世樂禪、除惱禪、此世他世樂禪、清淨禪、此九禪は獨り菩薩所修の大禪なり。

【初信】十信位の第一、一切の妄想を滅盡し中道純眞となる位を言ふ。

方便を施設するは眞の菩薩に非ず、假名の菩薩なり、無慚無愧にして波羅夷を犯す。汝今身より未來際を盡すまで、其中間に於て犯すことを得ざれ、能く持つや不や、答へて能く持つと言へ。若し自ら盗み、若し人をして盗ましめ、人の五錢を盗み、若し五錢に過ぎ、若し燒き若し埋め、若し色を壞す。是の如き五大、五塵、若し人の男女、諸天鬼神畜生の男女を姪し、不淨の想を作し、自ら不淨の行を作す。若し眞實に非ず、己有に非ざるに、自ら禪を得、解脫を得、定を得、九大禪を得、初信乃至等覺妙覺を得、天龍鬼神來つて我を供養すと言はん。若し諸の酒を酤り、若し説いて出家在家の菩薩、犯十波羅夷の中、隨つて一波羅夷を犯すと言はん。若し自ら己が眞實の所得を誦し、並に出家在家の菩薩を毀つて、十重の中の一の重罪、四十八輕中の一の輕罪を犯すと言はん。若し法を慳み財を慳み、來つて法を求むる者あらんに、爲に一句一偈をも説かず、財は一針一草をも施與せず、反つて罵辱を生ぜん。若し一切の出家在家の菩薩を嗔り、若し非菩薩、諸天鬼畜の懺悔するも解せず、若し三寶を誘ひ、若し増し若し減し、若し相違し若し戲論し、下一句に至る。此九は初重の中の一の如く、非眞菩薩以下一一に問答せよ。此は是れ菩薩の十無盡藏なり、復菩薩の四十八輕戒、八萬の威儀、三千の律儀あり、具には「心地品」に説くが如し。前の如く汝今身より以下、問答せよ、此は是れ菩薩攝律儀戒なり、復菩薩の八萬四千の攝善法戒、六度四攝等の饒益有情戒あり、具には菩薩大藏の如し。前の如く問答せよ。此は是れ菩薩自行の性戒なり、復菩薩の和光利他方便の學處あり、謂ゆる權乘の菩薩の一

【七】十二門の第十一奉持の旨を明

【瑜伽論】瑜伽師地論百卷、彌勒菩薩説、唐の玄奘譯三乘行人の十七地を明す。

【尸羅】シラ、戒と譯す。衆生の熱惱を消息して清涼ならしむるを言ふ。  
【五度】布施、持戒、忍辱、精進、禪定の五波羅密を言ふ。  
【攝大乘論】無著菩薩造、眞諦譯等三譯あり。

百四戒、聲聞の二百五十戒、大尼の五百戒、人天の五戒十善は皆是れ實乘の菩薩の方便の學處なり、毀謗することを得ず。前の如く問答せよ。戒相已に竟んぬ。

第十一に奉持とは、略して十門の持相を示す。一に徧持諸戒門とは、『梵網』に云ふが如きは、十重四十八輕戒は應に一一に之を犯すべからず。故に須らく此中に若は大比丘、若は比丘尼、若は優婆塞、若は優婆夷、若は沙彌、若は沙彌尼、若は式叉摩尼を成ぜんと欲することあるに隨つて、皆同じく徧く十重四十八輕戒を持つべし。又『瑜伽論』に云はく、『聲聞の自利すら尙他心を護る、況んや諸の菩薩の利他を先と爲すをや。故に應に徧く諸の譏嫌戒を護るべし、故に須らく自行實乘の戒法に非すと雖も、而も諸の權乘の小乘、人天乘等の所持の戒法、皆應に徧く持つべし。若し徧く持するに非ざれば、他をして譏嫌せしめ、自ら利他の行を闕いて彼をして惡道に墮せしめん。一に隨心多少門とは、『本業經』に云ふが如きは、若し一戒を受くれば一分の菩薩と名け、乃至具受すれば具分の菩薩と名く。當に知るべし、受けて而も持せざるは尙受けずして犯せざるに勝りたり。犯するのとあれども菩薩と名く、犯無けれども外道と名く。況んや圓乘の戒は一戒を持するに隨つて則ち一切を攝す。故に『大般若經』に云はく、『一切の諸法は等しく尸羅に趣いて此趣を過ぎず』と、三に護性許遮門とは、『智度論』に云ふが如きは、新學の菩薩は一世一持に徧く五度を修行すること能はず、護衣戒の施等を能くせざるが如し。又『攝大乘論』に云はく、『菩薩は性罪は現行することを得ず、故に聲聞と相似たり。遮罪は亦現行することを許す、故に彼

【莊嚴論】二部あり、一は無着造、波羅頗迦羅蜜多羅譯の大乗莊嚴論十三卷、一は馬鳴造、羅什譯、大莊嚴論十五卷。

【十住婆娑論】龍樹造十七卷、秦の羅什譯。

と異なり。故に須らく十善の性戒は一向に犯すること莫るべし、若し因縁あらば遮戒を犯することを許す。』と。四に方便無犯門とは、『攝大乘論』に云はく、『若し利他を見ては十惡をも行ずることを許す。方便善巧をもつて殺生等の十種の作業を行すれども、而も罪あること無し、無量の福を生じて速に菩提を證す。』と。『瑜伽』に亦云はく、『菩薩は若し勝利あれば性罪をも現行す。』と。故に『理趣分』に廣く説く、菩薩大貪等の十惡五逆を行じて他を利して成佛せしむ。故に須らく衆生を利せんが爲には性戒をも犯することを許すべし。五に許勝制劣門とは、『莊嚴論』に云はく、『群生を利する意樂に由つて貪を起すは犯罪を得ず、瞋は彼と違して恆に他を損せんと欲す。』と。『瑜伽』に亦云はく、『是諸の菩薩は多分は應に瞋の與に起す所の犯なるべし、貪の起す所には非ず。』と。『智度』に云はく、『菩薩は衆生を惱まさざるを戒と爲す、聲聞の現涅槃を求むるには同じからず。姪欲は是れ衆生を惱まさずと雖も、心を繫縛するが故に立てて大罪と爲す。菩薩は現涅槃を求めず、生死に往返して資糧を具するが故に、貪瞋の諸戒を説くが如く准行せよ。』と。且く清酒の如きは自他を憚樂し、妄語は自他を欺誑す。一切准じて知るべし。六に隨樂無犯門とは、『瑜伽論』に云はく、『若し彼生を斷ぜんと欲し、意樂を起して勲精進を發すに、煩惱熾盛にして其心を繫抑せば、瞋蓋等を起すに違犯する所無し。』と。又『十住婆娑論』に云はく、『慳心解けずして施を能くせざる時は、今は未だ熟せず後當に施すべしと謂ふが故に。』と。慳瞋を説くが如く諸戒を準行せよ。且く姪欲を斷ぜんと欲するが如き、勇猛精進すれども惑心彌

【尼拘陀樹】ニヤ  
ゲローダ、(Nyāy)  
roha 榕樹なり。  
【初利】初利天、  
欲界六天中の第二  
帝釋は此處に住す  
【殘伽沙劫】無量  
劫の意。

増して正觀する能はざれば、狂念を止めんが爲に放捨等を行せよ。譬へば魚を釣るに魚強く鉤弱ければ能く鉤を損し魚を失ふ、能く鉤緒を緩むれば定んで其魚を得るが如し。一切準じて知れ、智者の犯罪は流の上に書くが如く、隨つて犯すれば隨つて滅す。猶隨つて書けば隨つて散するが如し。七に怖畏無犯門とは、『梵網經』に云はく、『浮囊を惜み、及び草繫の比丘の如くせよ』と、『涅槃經』に云はく、『油鉢を護るが如くせよ』と。小罪を犯すと雖も、大怖畏を生ぜば罪垢留らず。譬へば羊を牧ふに常に虎を以て見すれば、其羊肥ゆと雖も而も臑脂無きが如し。八に隨勝無犯門とは、『涅槃經』に云はく、『乘に於て緩なる者を名けて緩と爲し、戒に於て緩なる者を緩と名けず、般若に暇無ければ亦律を持せざること許す』と、『法華』に云はく、『能く法華を説く、是を持戒と名く、律義を犯すと雖も、能く善法を攝して亦衆生を利す、豈、持戒に非ずや。律儀を持すと雖も、善法を攝せざれば猶木石の衣鉢に帶持せるが如し』と、『涅槃經』に亦云はく、『若し尼拘陀樹の持戒者は常に初利に生ずべし、無智の持戒の人、豈、尼拘陀樹に異ならん。律儀を持つと雖も衆生を利せずんば、猶二乗の多く自利を修して二乘地に墮するが如し』と。故に二戒を持して不持律を許す。九に捨小無犯門とは、『大般若』に云はく、『若し菩薩、設ひ殘伽沙劫に妙五欲を受くとも、菩薩戒に於ては猶犯と名けず。若し一念二乗の心を起さば即ち名けて犯と爲す』と、『慈掘經』に亦云はく、『寧ろ野干の心を起すとも、二乗の心を起すこと莫かれ』と。唯、小心を制して餘行は犯に非ずとす。十に究竟持得門とは、『涅槃經』に云はく、『菩薩は設ひ女

に交らずと雖も、猶壁の外の瓔珞等の聲を聽かば欲を成じて戒を犯す。」と。「淨戒」に云はく、「若し心を以て女人の身上の瓔珞等の具を想はば、是れ菩薩の波羅夷なり。」と。「文殊問經」に云はく、「若し心を以て男女非男女の相を分別せば、是れ菩薩の波羅夷罪なり。」と。「大般若」に亦云はく、「應に圓滿淨戒波羅蜜多を護らざるを以て、不犯の相を犯すべし、犯不犯の相は不可得なるが故に。」應に此は是れ能護、此は是れ所護、此は是れ護相、此は是れ護果と分別すべからず、一切法は皆眞如なるを以ての故に。」と。「大圓覺經」に亦云はく、「戒定の慧、及び姪怒疑は俱に是れ梵行なり。」と。當に知るべし、圓乘の菩薩は一切諸法皆眞如の相なり、男女の想もなく、自他の想も無し、持無く犯無きを眞の持戒と名く。上來の十門は唯攝律儀戒に約して以て説く。若し攝善法戒に約せば亦四門あり。謂く、諸の菩薩、若し因縁あらば一切の諸事皆行すべしと許す。唯四事ありて終に行すべからず。謂ゆる菩提心を捨つると、三寶を遠離すとなり。若し大菩提心を捨てず、亦三寶を遠離せざることあらば、一切の行相皆是れ持戒なり、一切の事中に犯失あること無し。上來の四門は唯攝善法戒に約して以て説く。若し利衆生戒に約せば亦一門あり。謂く、釋迦佛、初めて菩薩の波羅提木叉を結して云はく、「父母、師僧、三寶に孝順せよ、孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲すこと。」心地觀に亦云はく、「普く四恩の爲に三聚戒を受けよ、謂ゆる父母の恩、衆生の恩、國王之恩、三寶の恩なり。當に知るべし、唯四恩を報ずるを名けて持戒と爲し、設使律義善法を持つと雖も、四恩を報ぜざるを名けて破戒と爲す。若し

善男善女ありて一切事に觸れて報恩行を修報せば、舉足下足即ち是れ戒地なり、語言動作皆是れ戒法なり。此人の威儀は即ち是れ諸佛の威儀なり、此人の顏貌は即ち是れ諸佛の顏貌なり。諸佛を見んと欲せば此人を見るべし、諸佛を供養せんと欲せば此人を供養すべし。此人の世に處するは猶日月の如く、此人の世を濟ふは猶天地の如し。生生の處に常に大王と爲り、念念の中に即ち我大師なり。是故に汝等、大誓願を立てて十門の戒を持し、大心を捨てず、三寶を離れず、常に四恩を報じて在在處處に永く退轉せざれ。念念歩歩に早に佛位に昇らん」と。三寶虔誠して奉持の偈を説く。

菩薩の諸の戒品を奉持して、一色一香にも退轉せじ

菩提心を堅固にし增長して、終に三寶の海を捨離せじ

法界四恩の徳に孝順して、速に無上大菩提を證せん

奉持已に竟んぬ。

第十二に廣願とは、夫以れば菩薩、初發心の後、菩提に至るまで、所有の功德若し願波羅蜜無き時は、中間に稽留して速に大菩提の岸に至ること能はず。若し願波羅蜜の力を加ふれば、念念進趣して速に大涅槃の岸に超登することを得ん。譬へば大海に一の大船を浮べ、大雲の帆を建てて好願風に任するが如し。故に須らく平等法界の大海に於て、大菩提心の大船を浮べ、菩薩淨戒の重寶を載せ、願波羅蜜の廣帆を擧げ、力波羅蜜の願風に任せて大般涅槃の彼岸に送るべし。

【一八】十二門の第十二廣願の旨を明す。

弟子某甲等、至心に大願を發す

我今此大衆、諸の佛戒を受得し

即身に已に、觀行の諸佛の位に證入し

位、大覺に同じうし已つて已に諸佛の數に入りぬ

觀行已に顯れて、自身の本の三身を得

三世の佛に契會して、自他、法樂を受く

亦願くは即身に於て、速に相似の佛と成り

早に分證の佛と成り、定んで究竟の佛と成らん

猶過去世の、魔梵釋女等も

更に受身を捨せずして、現身に佛道を成ぜしが如し

今日の此大衆、佛戒を受持すと雖も

若し宿世の障りあつて、現身に成佛せずんば

願くは命終の時に臨んで、決定して極樂に生ぜん

願に隨つて都率に生じ、正法輪を聽聞して

無生忍に悟入し、大神通を具足して

意に隨つて徧く、十方諸の淨土に遊化せん  
諸の佛界に歷事して、福智具足することを得

【都率】兜率天。  
欲界の天處にして  
内院は彌勒の淨土  
外院は天衆の欲樂  
處なり。  
【無生忍】無生無  
滅の理に安住して  
動ぜざるを言ふ。  
初地、又は七八九  
地の悟に名く。



自行及び化他、常に間斷する時無く  
一切の諸の佛法、即時に圓滿することを得ん  
又斯功德を以て、今日より以後  
若し自行門に於て、永く無生忍を得  
永く三惡道を離れ、永く下賤の身を離れ  
永く女人の身を離れ、永く繫縛の身を離れ  
常に三寶界を過ぎて、諸行を清淨にせん  
亦利他門に於て、身を十法界に分つて  
常に諸の衆生の爲に大善知識と作り  
其正道を開示して、皆佛道を成ぜしめん  
亦願くは諸の衆生  
若し我名を聞かん者は、菩提心を發せしめん  
若し我身を見ん者は、惡を斷じ善を修せしめん  
若し我説を聞かん者は、大智慧を得しめん  
若し我心を知らん者は、大覺位に入らしめん  
願くは懺悔を修し、受戒して大願を發し  
所生の大功徳を以て、普く法界の、一切の諸の衆生に廻施せん

願くは普く法界の諸の衆生の、未だ苦を離れざる者には苦を離れしめん

未だ樂を得ざる者には樂を得しめん、未だ發心せざる者には發心せしめん

未だ善を修せざる者には善を修せしめん、未だ法を集めざる者には法を集めしめん

未だ生を利せざる者には生を利せしめん、未だ佛を成ぜざる者には佛を成ぜしめん

願くは此功德を以て

我大師、釋迦牟尼佛、文殊彌勒等の

一切の傳戒師、證明及び同學

諸佛及び菩薩、梵釋四天王

三界の諸の天衆、閻羅王、五道

一切冥官衆、天神地祇衆

伽藍諸法衆、八部鬼神衆

受戒の大外護、一切冥道の者を莊嚴せん

若は此處中に於て、大菩提心を發して、同じく諸佛の戒を受けん

一切の冥の得道、畜生鬼魅等、蚊虻虱蟻等

各内證の樂を増し、各利他の樂を施さん

已に佛道を成ずる者は、利他の自在を得ん

未だ佛道を成ぜざる者は、樂を證して自在を得ん

同心に共に、現前の諸の大衆を守護して、災難を消除せしめ  
現前榮華の樂、後世佛法の樂

各増長することを得、各圓滿することを得て

福壽を増長せしめん

亦願くは今日の受戒の衆、在家出家の菩薩の衆

現前冥道の得戒の衆、見聞信毀の諸の大衆

此今日の受戒の善に依つて、未來際を盡して爲に結縁し

生生世世に爲に憶念し、後後當當爲に利樂せよ

未だ成佛せざる者をば我引導せん、已に成佛せる者は我を引導せよ

一人も惡趣に墮せしめず、一人も苦惱を受けしめざらん

若し一人の苦を受くる處あらば、互に爲に拔苦し爲に引導せん

若し一人あつて佛國を成ぜんに、互に爲に聞法し爲に弟子とならん

彼三劫の三千佛の如く、願くは我大衆も亦是の如くならん

總じて願くは初後の大功德をば、普く法界の諸の衆生に施し

同じく共に大菩提に廻向して、決定して無上道を證得せん

廣願已に竟んぬ。

普通授菩薩戒廣釋 並序 畢



傳教大師全集新  
版卷一。一九九頁  
以下。日本天台圖  
密戒四宗の相承  
血脈を明にす。

【一】本書述作の  
所以と五種の相承  
名目を擧ぐ。中天竺摩  
錫陀國。

【二】日本天台四  
宗相承の中、先づ  
禪の相承血脈を示  
す。

【尼樓羅王、烏頭羅  
王、瞿羅王、尼  
休羅王】以上の四  
王は皆甘蔗王の妃  
善賢の生む所、後  
王の第二妃の爲に  
國外に放逐せられ  
逃れて雪山の南に  
國を建て姓を釋迦  
(シヤークヤ)と稱  
すと傳ふ。

# 内證佛法相承血脈譜

傳教大師撰

(一) 敘して曰はく、譜圖の興るや具來ること久し。夫れ佛法の源は中天に出で、大唐を過ぎて日本に流はる。天竺の付法、已に經傳あり、震旦の相承、亦血脈を造る。我叡山の傳法、未だ師師の譜あらず、謹んで三國の相承を纂して以て一家の後葉に示すと云爾。

達磨大師付法相承師師血脈譜一首。天台法華宗相承師師血脈譜一首。天台圓教菩薩戒相承師師血脈譜一首。胎藏金剛兩曼荼羅相承師師血脈譜一首。雜曼荼羅相承師師血脈譜一首。

達磨大師付法相承師師血脈譜一首。  
謹んで案するに、西國佛祖代代相承傳法記に云はく、  
昔、大師あり瞿曇と名く――

第一の祖を尼樓羅王と名け、――第二の祖を烏頭羅王と名け、――第三の祖を瞿頭羅王と名け、――第四の祖を尼休羅王と名く、

尼休羅王に四子あり  
――第一を淨飯王と名け、

【僧を破る】破僧  
台僧の罪を犯す。

【釋摩男】五比丘  
の一、俱利太子な  
り。

【阿那律】アニル  
ケ(Animulha)  
佛十大弟子の一、  
天眼第一を以て有  
名なり。

第二を白飯王と名け、

白飯王に二子あり、一を調達と名け、僧を破る、是れ佛の從兄なり。二を阿難と名け、出家して阿羅漢を成す。

第三を斛飯王と名け、

斛飯王に二子あり、一を釋摩男と名け、出家す。二を阿那律と名け、出家して天眼を得。

第四を甘露飯王と名く、

甘露飯王に二子あり、一を娑婆と名け、出家す。二を跋提と名け、出家す。淨飯王に二子あり

一を悉達多と名け、號して佛と爲す

二を難陀と名け、出家す。

謹んで案ずるに、『西國佛祖代相承傳法記』に云はく、『悉達太子は十九にして出家し、三十にして成道す、身の長一丈六尺なり。三夫人あり、各二萬の采女を領して圍繞せらる。第一の夫人の名を瞿夷と曰ひ、優波摩那を生んで出家す。第二の夫人の名を耶輸陀羅と曰ひ、羅睺羅を生んで出家す。第三の夫人の名を鹿野と曰ひ、善星比丘を生んで出家す』と。委くは『十二遊經』、『瑞應經』及び『大智

【姬周】 三代の周の稱。

【摩訶迦葉、龍樹菩薩】 以上十三祖は天台法華宗相承血脈中に出づるが故に今は略す。  
【迦那提婆】 龍樹の門弟、龍樹と共に三論宗の祖と言はる。  
【羅睺羅】 提婆の弟子。  
【僧伽難提、師子尊者】 以上八祖相承の事は付法藏因縁傳卷六に出づ。  
【菩提達磨】 南天竺香至國王の第三子、梁代に支那に來りて禪宗の祖となる。

度論等に出づ。  
垂迹釋迦大牟尼尊

謹んで案ずるに、「周書」に云はく、「佛は是れ姬周第五の帝、昭王在位の時、癸丑の歳七月十五日、神を母胎に降す。甲寅の歳四月八日、迦毗羅衛國の林微園に遊び、母の右脇に在りて生ず。壬申の年二月八日の夜、執を踰えて出家す。周の第六の帝、穆王在位の時、癸未の歳二月八日に至り、三十にして成道す。壬申の歳二月十五日、狗尸那城に於て年七十九にして般涅槃に入りたまふと。

摩訶迦葉 阿難 商那和修 優婆塞多 提多迦 彌遮迦 佛陀難提  
佛陀密多 脇比丘 富羅奢 馬鳴菩薩 比羅比丘 龍樹菩薩 迦那提

婆 羅睺羅 僧伽難提 僧伽耶舍 鳩摩羅駄 闍夜多 婆修槃陀  
摩奴羅 簡勒耶舍 師子尊者 舍那婆斯 婆須密 僧伽羅叉 優婆掘

菩提達磨

謹んで案ずるに、「傳法記」に云はく、「其師子尊者、罽賓國に至る。提王問ふ、「大師は彼國より來る、要す諸法空を得るや否や」と、大師の云はく、「已に得て謬らす」と。提王問うて云はく、「既に法空を得ば生死懼れありや否や」と、大師答へて

【屬賓國】西域の一國名。  
【提王】名を彌羅掘と言ふ。

【佛陀耶舍】屬賓國の人、婆羅門種なれども十三歳にして佛門に入ると言ふ。

【加行】或事を求むる方便手段として努むる行。

【廬山】支那江西省南康府にあり、江南の名山にして佛教と深き關係ありし地なり。

【遠大師】支那東晋代、廬山白蓮社祖慧遠を指す。

云はく、「已に生死を離る」と。提王問ふ、「既に生死を離るれば今師を損はんと欲す、計ふに應に懼るること無かるべし」と、大師の言はく、「一任す」と。提王遂に劍を揮つて大師を斬る。首落ちて白乳湧くこと高さ一丈、其提王の右臂便ち地に落つ。王遂に驚怖す。弟子舍那婆斯、師の損はるるを見て奔りて南天竺の國に向ふ」と。又云はく、「遠磨大師、弟子佛陀耶舍に謂つて云はく、汝、振旦國に往きて法眼を傳へ、彼國、此の如きの事を信するや否やを看る可し」と。弟子耶舍、師の付囑を奉じ便ち船に附せて此土に来る。耶舍秦中に到りて見るに、大徳數千餘人の坐禪、加行、精進するも、耶舍の所説を忽聞して一人の信する者あること無し、皆言ふ、「何ぞ此事あらん、妖説の説なり」と。遂に殞す。耶舍、廬山の東林寺に向ふ。其時遠大師、耶舍の來るを見て遂に請問す、「大徳は西國より來る。將に何れの佛法を此土に流傳せんとして遂に殞せらるるや」と。其時耶舍、遠大師に答へて曰はく、「手を已て拳と作し、拳を以て手と作す、是事疾きや否や」と。遠大師便ち悟る、時に煩惱と菩提と本性不二なることを知るなり。後時、耶舍無常す。遠磨大師、弟子の無常せるを知り、遂に自ら船を泛べて此土に渡來す。初、梁國に至る。武帝迎へて殿内に就かしめ、問うて云はく、「朕廣く寺を造り人を度し、經を寫し像を鑄る、何の功德かある」と。遠磨大師答へて云はく、「無功德」と。武帝問うて曰はく、「何を以てか無功德なるや」と、遠磨大師の云はく、「此は是れ



【有爲の事】物質的の事業。

【嵩山】支那河南省河南府登封縣にある山。

【慧可】支那南北朝代、禪宗の第二祖。

【能大師】支那唐代、禪宗の第六祖。

【四行觀】達磨大師の著と稱せらるる『摩訶衍』大乘の勝教を言ふ。

【道育】達磨に師事して壁觀を得し一人なり。

【胡僧】印度僧。

有爲の事にして、是れ實の功德ならず」と帝の情に稱はず、遂に發遣勞過す。大師錫を杖き行きて嵩山に至る。慧可の勝法を志求するに逢見ひて、遂に乃ち佛法を付囑す。漢地の相承、祖師六代、達磨の衣を傳へて信と爲す。能大師に至り息えて傳へず。今現に曹溪の塔所に在り。乾元年中、孝義皇帝此衣を索め、内に入れて供養を奉ぐに嵩南安からず。節度使張休奏して衣を索む。勅して奏に依りて衣を本處に還す。其塔所に光明を放つ。使司重ねて奏す、勅詞ありて大師の道徳を釋讃せん」と。

後魏の達磨和上

謹んで案ずるに、『四行觀』の序に云はく、「法師は西域南天竺の大婆羅門國王の第三の子なり。神慧諫朗にして聞けば皆曉悟し、志、摩訶衍の道に存す、故に素を捨てて緇に従ひ聖種を紹隆す。冥心虚寂にして世事に通鑿し、内外俱に明かにして徳世表に超ゆ。遊隅に正教の陵替せるを悲誨し、遂に能く遠く山海を涉りて漢魏に遊化す。己を忘るるの士、歸信せざるは莫く、見を存するの渣は乃ち譏謗を生ず。時に沙門道育、慧可あり。年は後生なりと雖も偶志高遠なり。幸に和尚に逢ひて之に事ふること數載、虔恭諮啓して善く師意を蒙る。法師其精誠に感じて誨ふるに眞道を以てせり」と。又「付法簡子」に云はく、「達磨大師を葬りて二七日を經、後魏の聘國使宗雲、葱嶺の上に於て一りの胡僧に逢ふ、一脚は履を

【楞伽の山頂】楞伽山は僧伽羅國（錫蘭島）の東南部にありと傳ふ。

【芬陀利花】大白蓮華と譯す。

【妙覺心】究竟佛果の心境。

著け、一脚は跣足なり。宗雲に語りて曰はく、「汝の漢地の天子今日無常す」と、宗雲紙筆もて之が日月を記す。宗雲歸り至れば帝已に崩せり、記する所の日月之を驗するに一も差別無し、宗雲と朝庭の百官並に達磨の門徒等と共に墓を發きて棺を開くに、師の身を見ず、唯棺中に一隻の履あるを見るのみ、舉國聖なることを知る。又梁の武帝達磨の碑を製る。頌に云はく、「楞伽の山頂に寶月を生ず、中に金人あり纏樹を披る、形は大地に同じく體は空の如し、心は瑠璃の如く色は雪の如し、磨するに塵す瑩すに塵すして恒に淨明なり、雲を披き霧を卷きて心日に徹せんとす。芬陀利花を用ひて身を嚴り、緣に隨ひ物に觸れて常に歡悅す、有ならず無ならず去來に非ず、多聞辯才にして法説無し、實なる哉空なる哉性有を離る、大と小と衆縁を絶し、刹那にして而も妙覺心に登る、鱗は悲海に躍りて先哲に超え、理は法水に應じて永長に流る、何ぞ期せん暫く湧き還りて暫くにして竭きんとは、驪龍の珠内心燈を落し、白毫の慧刃鋒に當りて缺く、生途忽焉として慧眼閉ぢ、禪河流を駐めて法梁折る。去無く來無く是非も無し、彼此の形體心碎裂す。住たり去たり皆寂に歸す。寂の内何ぞ曾て唵明を存せん、之を用ひて手を執り以て燈を傳ふ、生死去來、電の掣くが如し、能く至誠の心ありて疑はずんば、劫火燃燈にも斯れ滅せず、一眞の法盡く有つ可し、未だ迷途を悟らずんば茲に是れ竭きん」と。

北齊の慧可和上一

【總持】陀羅尼の譯語。種種の善法に於て散失せず、廣大の義を持し、諸の障碍を遮するを言ふ。

【僧璨】隋朝の沙門。慧可の門人なり。

謹んで案ずるに、慧可和上の碑銘に云はく、「禪師、諱は慧可、武牢の人なり。領西に甚深の法を聞かんことを望冀ひ、三十年の間に于て窟窟に慨歎す。時に西國に達磨大師あり、乃ち總持の林苑、不二の川澤なり、金棺久く寂なるが爲に微言且に絶え大教斯に隠れんとす、誰か其れ之に遵はんやと。是に於て悲愍の心を發して風を東夏に傳ふ。杖を策つて請益し禪門を踞踞す、滿月の高樓に顯るるが如く、渤海の江漢を呑むが若し。禪師年四十にして方に始めて遇へり。晝夜を捨てず精勤すること六年、大師の云はく、「夫れ法を求むる者は身を以て身と爲さず、命を以て命と爲さずして方に得ん」と。禪師乃ち雪に立ちて數宿し、臂を斷ちて而も顧ること無く、地に投じ身を碎きて開示を策求す。大師乃ち喜びて曰はく、「我心將に畢らんとす、大教に行はる、一眞法是れ有つ可し」と。命じて手を執ら令めて心燈を默付し、楞伽を持奉して將に要決の妙と爲せと。爾して乃ち喜顔を啓きて眞教を授く。乃至大師之を印するは惟可禪師のみ。明を繋け跡を重ねるは則ち僧璨之を得たり。相承せる寶光明明として大いに照し、一ら蒼生を導きて而も盡くる時無く、萬劫にも墜ちず。歎乎、達磨大師は迺ち觀音の聖人なり」と。又「付法簡子」に云はく、「達磨大師、諸人に語けて言はく、「三人の我法を得るあり、一人は我髓を得、一人は我骨を得、一人は我肉を得たり。我髓を得る者

【尼總持】梁の武帝の女にして達磨去梁の際請を容れて伴ひ來りしものなり。

【般若波羅密】六度の一、一切法を照し通達する智慧行を言ふ。

【一行三昧】眞如法界は平等一味なりと觀する理の一行三昧。

【涅槃】寂靜の悟境に名く。  
【無漏の智性】煩惱無き眞智性。煩

は是れ慧可なり、我骨を得る者は道育なり、我肉を得る者は尼總持なり」と。又達磨、慧可に語けて曰はく、「我此法は是れ諸佛の甚深般若波羅蜜の法、亦是れ諸佛の總持の法、亦是れ一切法の印、亦是れ如來の禪、亦は一行三昧と爲す」と。遂に此法を授け付囑して慧可に與ふ」と。又達磨の曰はく、「我に一領の袈裟あり、慧可に傳授せん。我今此袈裟を以て亦其信を表す、我後代の傳法者をして承襲あることを得しめよ」と。慧可説法して人を度するに、門徒千萬圍繞す。

隋朝の皖公山僧璨和上!

嘗んで案するに、「付法簡子」に云はく、「隋朝の沙門、釋僧璨は可大師に承けて後遂に開安郡の皖山に居す。可大師且に璨の根行を知り、遂に密語を授け以て法契と爲して傳與す。僧璨師の言下に於て密語を默受すること、大海に於て瓊瑤寶を獲るが如し。可大師璨に語けて曰はく、「佛法を洪持して斷絶せざら令めんと欲するが爲に、達磨大師一領の袈裟を傳へて我に與ふ。我今傳へて汝に付囑せん」と。遂に袈裟を取り之を傳へて璨に與へ、傳法の者をして遞に相授領せしめ、學道の者をして宗旨を知ることを得しむ。慧可璨に語けて曰はく、「汝、好住せよ。我輩都に歸らんとす、還ち續け」と。去るとき璨に語けて曰はく、「我身命を以て而も法を求め得たり、好住努力せよ、努力好住せよ、我去らんとす。璨送りて皖橋に至る。可大師の言はく、「一切衆生は本來涅槃、無漏の智性は本自ら具足す、大事

【道信和上】支那  
禪宗の第四祖。

已に畢る。必ず須らく慙慙にすべし」と、璨、語を受け已りて即ち頂禮して和上に別る。可大師、天平の載弊都に至る。

雙峯山の道信和上

謹んで案ずるに、『付法簡子』に云はく、「時に道信といふものあり、載十三なり。俗姓は司馬、河内の人なり。開皇中皖山に詣りて璨大師を頂禮し、事へて師と爲さんことを願ふ。璨大師道信と共に語りて具に根行を知る、遂に相隨ひて司空山に居す。親しく事へて左右を離れず、九載を経たり。璨大師、道信の發言の旨趣唯解脱を求むるのみなるを見る。璨大師の曰はく、「誰か汝を縛する」と。道信答へて言はく、「縛するものあるを見ず」と。璨大師道信に語けて曰はく、「汝既に縛するものあるを見ずんば何が故に解脱を求むと言ふや」と。道信師の言下に尋ねて朗然として大悟す。璨大師、道信道を得て更に疑滯無く、諸衆の中に於て更に過る者無きを知り、便ち密語を授け、以て法契と爲して道信に付與す。密語を默受すること猶し日輪の虚空に處すれば、頓に一切の色像を現するが如し。璨大師、道信に語けて曰はく、「汝が緣は此間に在り、我祖師の袈裟を受けて、以て法信と爲し、汝をして廣洪く佛法を持して斷絶せざらしむ」と。璨大師遂に即ち袈裟を取りて付屬し、道信に與へて信と爲す。後人をして傳受の所由を知んことを得しむ。勅請再三疾と辭して應ぜず。刀を振ひて首を刎ぬるに劍折れて劍無し、



【註菩薩戒經】道  
曙の菩薩戒經の集  
註三卷を指す。

【道璿和上】唐許  
州の人、大和天安  
寺の學僧にして天  
台、華嚴に精通す

【比蘇山寺】大和  
國吉野郡大淀村大  
字比曾に在りし寺  
一名を現光寺と言  
ふ。

内證佛法相承血脈譜

謹んで案ずるに、『註菩薩戒經』の序に云はく、『普寂禪師は人の爲に尊まるること  
一に大通の如し。和上は即ち入室の弟子なり。骨氣個體にして儒典盡く包ね、  
雅志淵玄にして同章底を窺む。終年竟歲道俗寺に滿ち、理と戒と嚴合す。法を受  
くるもの雲のごとく奔り、日夜無間に誨誘疲を忘る。法化の盛なること、豈言  
筆を以て而も能く之を數述せんや』と。  
大光福寺の道璿和上 日本國大  
唐大光福寺の道璿和上 西唐院

天平寶字年中、正四位下大宰府の大貳、吉備の朝臣眞備の纂に云はく、『大唐の道  
璿和上は天平八歲大唐より至る。戒行絶倫にして教誘怠らず、天平勝寶三歲に  
至りて聖朝請じて律師と爲す。俄にして疾を以て比蘇山寺に退居す。常に自ら  
言つて曰はく、「遠く聖人の聖と成る所以のものを尋ぬるに、必ず戒を持ち次を以  
て漸く登るに由る」と。和上毎に梵網の文を誦す。其謹誦の聲、零茶として聽く可  
きこと、玉の如く金の如く人の善心を發す。吟味幽味にして律藏は細密、禪法は  
玄深なり。遂に菩薩戒經に集注すること三卷、我輩の逮ぶ所に非ず、更に何ぞ以  
て稱述することを得ん。自餘の行迹は具に碑文に載せたり。其前の序に云は  
く、『昔、三藏菩提達磨、天竺より東來して漢地に至り、禪法を慧可に傳ふ。可は  
僧璨に傳へ、璨は道信に傳へ、信は弘忍に傳へ、忍は神秀に傳へ、秀は普寂に傳  
ふ。寂は即ち我律師の事ふる所の和上なり。本嵩山にありて禪法を流傳するに人

【根本無明】眞如海中に最初一念起動せる微細の煩惱【十地の罪障】異生障等の十重障にして、十勝行に依つて斷ぜらるる惑障なり。

【所知煩惱】所知の境を覆うて菩提を障ふる惑を言ふ【三師七證】具足戒を受くるに際して師として臨場を請ふべき人數。

【身口七支】身業の殺生、偷盜、邪淫の三と、口業の兩舌、惡口、妄語綺語の四。

【行表】三論宗、南都大安寺の僧にして傳教大師の師なり。

衆多く歸す。故に勅あり、請じて東都に入らしめ、常に華嚴寺に在りて法を傳ふ。故に華嚴尊者と曰ふ」と。璣和上四季追福の文に云はく、「春季三月の内は達磨和上乃至第七華嚴和上及び湯澤和上、並に十方法界無邊の三寶の奉爲に、根本無明、十地の罪障、一切の微細の所知煩惱を滅除せん。夏季六月の内は無始より時來の一切の師僧、乃至禪河和上及び並に府の三師七證、並に盡未來際十方法界の一切の師僧善友の奉爲に、一日一夜盡法界虛空界の一切の三寶を供禮し、永く身口七支の破戒及び三業に三聚淨戒を毀破するの罪を斷ぜん。秋季冬季の二節は願文に説くが如し。天平寶字二年三月二十五日、峯林の下にて發願す」と。謹んで案ずるに、「璣和上の書」に云はく、「又五智院の堂内に供する所の燈、今より已後佛を禮する時に至らば炷を加へて明なら令め、佛を禮し了らば即ち唯一莖の燈心を留めよ。是の如くにして佛像を燃するの罪過を免ることを得べし」と。行表數自ら親く之を看檢す。付法の文具に遺言の如し。

大日本國大安寺の行表和上

謹んで案ずるに、「行表和尙の度縁」に云はく、「釋の行表は大養國、今大和の國と名く、葛上の郡高宮の郷、戶主大初位上、檜前調使案磨の男百戸、右、天皇の奉爲に天平十三年十二月十四日の勅を奉じ、國宮の中に於て七百七十三人例して得度す。師主は大安寺唐の法師道璣なり」と。又延曆十三年の「房主帳」に云はく、「傳





常寂光土第一義諦靈山淨土

久遠實成多寶塔中大牟尼尊

謹んで案ずるに、『觀普賢經』に云はく、『時に空中に聲あり、即ち是語を説く。釋迦牟尼佛を毗盧遮那遍一切處と名く、其佛の住處を常寂光と名く』と。又案ずるに、『法華經入論』に云はく、『我淨土は毀たれず、而も衆は焼け盡くと見るとは、報佛如来眞實の淨土は第一義諦の所攝なるが故なり』と。又案ずるに、『法華經』の如来壽量品に云はく、『然るに我實は成佛已來久遠なること斯の若し』と。又云はく、『阿僧祇劫に於て常に靈鷲山に在り』と。又案ずるに、『法華經論』に云はく、『八には同じく一塔に坐すとは、化佛、非化佛、法佛、報佛等を示現するは皆大事を成せんが爲の故なり』と。

摩訶迦葉

謹んで案ずるに、『付法藏傳』に云はく、『當に減度すべきに垂として大弟子摩訶迦葉に告げたまはく、汝今當に知るべし、我無量阿僧祇劫に於て衆生の爲の故に、勤めて苦行を修し一心に専ら無上勝法を求む。我昔の願の如き今已に満足す。迦葉當に知るべし、譬へば密雲の世界に充遍し、甘雨を降し注ぎて萌芽を生長するが如し。無上の法雨も亦復是の如し。能く衆生をして善根の子を増さ令む、所以

【化佛】佛菩薩の神通力を以て化作せる佛形。  
【法佛】法佛身。法性に覺知の體、あれば佛と言ふ。  
【報佛】報身佛。報身は因行の功德に報ひて顯はれたる佛の實智。

【般涅槃】今は佛の入滅を意味す。

【娑伽婆】佛の異名。

【般遮于瑟】五年毎に設くる大齋會にして義譯して無遮會と言ふ。

阿難陀  
に諸佛は常に守護を加へ、恭敬讚歎し、禮拜供養したまふ。我今者の如き將に般涅槃せんとす。此深法を以て用て汝に囑累す。汝當に後に於て敬みて我意に順じ、廣宣流布して斷絶せしむること無かるべし」と。

阿難陀  
謹んで案するに、『付法藏』に云はく、『摩訶迦葉、涅槃せんとする時に垂として最勝の法を以て阿難に付囑し、而も是言を作さく、長老當に知るべし、昔娑伽婆、法を以て我に付す、我年老朽ちて將に涅槃せんと欲す、世間の勝眼今相付せんと欲す。汝、精勤して斯法を守護す可し。』と。

商那和修

謹んで案するに、『付法藏』に云はく、『摩訶迦葉、涅槃せんとする時に垂として阿難に告げて曰はく、今法寶を以て用て相委累す。長老後に於て若し涅槃に入らんとせば、王舍大城に一の長者あり、商那和修と名く、高才勇猛にして大智慧あり、已に過去に於て深く善根を種え、意を發して海に入り珍寶を採取し、回還りて般遮于瑟を作し、佛如來の爲に經行處を造り、復當に高門樓屋を建立すべしと願ふ。所爲既に訖らば度して出家せしめ、如來の法藏をして悉く之に付囑す可し。是故に、阿難當に滅度すべきに臨み而も之に告げて曰はく、佛、法眼を以て大迦葉に付し、迦葉法を以て我に囑累す。我今者の如き涅槃の時至れり。法

【摩突羅國】中印  
度ノ一地方の名

寶藏を以て用て汝に付す。汝、精勤して斯法を守護し、諸の衆生をして甘露味を服せしむ可し」と。商那和修答へて曰はく、教を奉く」と。  
優婆塞多

謹んで案するに、「付法藏」に云はく、「尊者阿難法を以て商那和修に付囑して而も之に告げて曰はく、世尊、昔摩突羅國に遊び我に顧命して言はく、此國の中に於て當に長者の名を毘多と爲るものあるべし。其子を優婆塞多と曰ふ、禪法の中に於て最も第一爲り、相好無しと雖も化度我の如くならん。我滅度の後大饑益を興し、其教化する所の無量の衆生、皆悉く解脱して阿羅漢を得ん。汝當に後に於て度して出家せしむべし。若し涅槃せば其法藏を付せよと。商那和修、涅槃に臨むの時、毘多に告げて曰はく、佛、正法を以て大迦葉に付し、迦葉は次に吾師阿難に付し、阿難は法を以て我に囑累す。我當に滅度すべし、以て汝に付せん、汝、精勤して妙法を擁護し正教を光宣して諸の群生を濟ふ可し。」と。  
提多迦

謹んで案するに、「付法藏」に云はく、「商那和修、法を以て我に付す。是の如く相續して常に法輪を轉じ、甘露味を灑ぎて煩惱の渴を療す。然るに我今者所作已に辨す、涅槃の時至れり、滅度遠からず。此法寶を以て持し用て汝に付せん。汝、後に於て受持頂戴し、勤めて守護を加へ漏失せしむること無かる可しと。提多迦

の言はく、敬んで尊教を受く、我當に斯の如きの正法を擁護して、未來世の爲に不請の友と作るべしと。是に於て次で無上の法味を宣ふ、其化度する所甚大弘廣なり」と。

彌遮迦

謹んで案するに、「付法藏」に云はく、「昔提多迦、滅度の時に臨み法を以て最大の弟子彌遮迦と名くろものに付囑す。多聞博達にして大辯才あり、而も之に告げて曰はく、「佛正法を以て大迦葉に付す、是の如く展轉して乃ち我に至る。我將に涅槃せんとす、用て汝に付せん。汝、當に後に於て流布し世眼となるべしと。彌遮迦の言はく、善哉、教を受けん」と。

佛陀難提

謹んで案するに、「付法藏」に云はく、「化緣已に竟りて當に滅度すべきに臨み、復正法を以て次に尊者佛陀難提に付し、其をして勝甘露味を流布せしむ」と。

佛陀蜜多

謹んで案するに、「付法藏」に云はく、「難提、後に於て廣宣分別し、大法輪を轉じて魔怨を摧伏し、然る後に佛陀蜜多に付囑す。其人の徳力甚深無量なり。善巧方便をもつて諸の衆生を化し、惡見を離れしめよと。佛陀蜜多、是念言を作さく、

吾師難提、法を以て我に付す。」と。

脇比丘

謹んで案ずるに、『付法藏』に云はく、『昔、尊者佛陀蜜多、化緣既に訖り將に壽を捨てんと欲す。一りの弟子の脇比丘と名くるものに告ぐ、汝當に後に於て廣く聖教を敷き、諸の衆生を化して解脱を得しむべしと。大聖に白して言さく、敬んで尊教を承く、當に至心に正法を守護すべし。』と。

富那者比丘

謹んで案ずるに、『付法藏』に云はく、『彼脇比丘、當に滅度すべきに垂として、一りの比丘の富那者と名くるに告ぐ、長老當に知るべし、佛法は微妙にして大功徳あり、是故に諸聖頂戴奉持す。我付囑を受けて斯法を守護せり。今涅槃せんと欲す、用て汝に累す。汝、宜しく至心に擁護し受持すべしと。時に富那者答へて曰はく、唯然りと。是に於て微妙の勝法を演暢し、其化度する所無量の衆生ありと。

馬鳴菩薩

謹んで案ずるに、『付法藏』に云はく、『昔、富那者涅槃の時に臨み法を以て弟子の馬鳴に付囑し、而も之に告げて曰はく、譬へば闇室に大明燈を燃せば所有の諸

物皆悉く照了なるが如しと。乃至馬鳴敬諾す、當に尊教を受くべしと。比羅比丘。

譯んで案ずるに、『付法藏』に云はく、馬鳴、命を捨てんと欲するに臨み、一りの比丘の名を比羅と曰ふものに告ぐ、長老當に知るべし、佛法は純淨にして能く煩惱の垢を除く。汝、宜しく後に於て流布し供養すべしと。比羅答へて言はく、善哉、教を受くと。是より以後廣く正法を宣ぶ、微妙の功德而も自ら莊嚴し、乃至當に滅せんとする時に臨み、便ち法藏を以て一りの大士の名を龍樹と曰ふものに付し、然して後に命を捨つ」と。

龍樹菩薩

譯んで案ずるに、『付法藏』に云はく、『龍樹菩薩』此世を去るに臨み、大弟子の迦那提婆に告ぐ、善男子聽け、佛は大悲を以て衆生を愍傷し、甘露味を演べて來世を利益す。次第相付して乃ち我に至る。我世を去らんと欲す、汝に囑累せん。汝、當に流布し至心に受持すべしと。提婆敬諾す、當に尊教を承くべしと。又案ずるに、『龍樹傳』に云はく、『廣く摩訶衍を明して』提舍論『佛道論』方便論『中論』無畏論』等を製作す」と。

天竺の須利耶蘇摩

謹んで案ずるに、『開元釋教錄』に云はく、『一』什、又須利耶蘇摩に從ひて大乘を諮稟す。』と。以て知る、羅什、天竺の蘇摩に歸託して師と爲すことを。因りて茲に列ねて次第するなり。

一 鳩摩羅什三藏

【初果】 聲聞乘四果中の第一預流果を指す。  
【大僧】 沙彌に對して比丘を大僧と言ふ。  
【龜茲】 龜茲國と言ふ、西域の一國なり。

【三果】 不還果。

【一乘の妙義】 佛乘の深法。

一

謹んで案ずるに、『開元釋教錄』に云はく、『沙門鳩摩羅什は秦に童壽と云ふ、天竺の人なり。其母出家修道して初果を學得したり。什年七歳にして亦俱に出家し、師に從ひて經を受け日に千偈を誦す。偈に三十二字あり、凡そ三萬二千言なり。什年九歳にして名諸國に播す。所任の寺僧乃ち大僧五人沙彌十人を差りて營視灑掃し有弟子の若し。年十二に至り、其母携へて龜茲に還る。羅漢見て其母に謂つて言はく、常に當に守護すべし、此沙彌若し三十五に至りて戒を破せずんば、當に大いに佛法を興し無數の人を度すること優婆塞多と異なり無かるべしと。什の母行きて天竺に至り、進みて三果に登る。什の母去るに臨み什に謂つて曰はく、方等の深教、應に大いに眞丹に闡くべし、之を東土に傳ふるは唯爾の力なり。後羅蜜に往きて其師繁頭達多の爲に且に一乘の妙義を説く。什の道西域に震ひ聲東國に被る。符氏の建元十三年、茂丁丑に次る正月、大史奏す、星あり外國の分野に現る、當に大徳の智人あり、入りて中國を輔くべしと。堅素より什の名を聞く。乃ち悟つて曰はく、朕聞く西域に鳩摩羅什といふものあり、將に此に非ざらんや



【笈法護】その先は月支に出て、敬焯に移住す。傳譯する所、百七十餘部、三百五十餘卷と言ふ。

【道融】羅什の弟子、關中四傑の一人なり。

して後弘始三年、歲辛丑に次る三月、樹あり、連理して殿庭に生ず、逍遙の一回葱鬱じて、蔭と爲る、以て美瑞と爲す。謂く、智人應に入るべしと。其年十二月二十日、什常安に至る。興待すに國師の禮を以てす。什の譯する所の經、叡竝に參正す。昔、竺法護は正法華を出す。受決品に云はく、天、人を見、人、天を見ると。什經を譯して此に至る、乃ち言つて曰はく、此語は梵本と義同じ、但言に在りて實に過ぐと。叡聲に應じて曰はく、將に入天交接兩得相見ゆるに非ざる乎と。什大いに喜びて曰はく、實に然りと。而して叡と什と共に相開發すること皆此類なり。嘗て秦の僧道融新法華を講ず、什乃ち歎じて曰はく、佛法の興る融其人なりと。又杯度比丘彭城に在りて什の常安に在るを聞き、乃ち歎じて曰はく、吾、此子と戲別すること三百餘年、杳然として未だ期せず、來生に遇ふことあるを遅つ耳と。什、終に臨み疾を力めて衆僧の與に別を告げて曰はく、法に因りて相遇ふ、殊に未だ伊心を盡さず、方に復世を異にす、惻愴言ふ可けんや。自ら闇昧を以て謬つて傳譯に充る。若し傳ふる所にして謬り無くんば、焚身の後舌をして焦爛せざらしめよと。秦の弘始中に以て卒す。即ち逍遙園に於て外國の法に依りて尸を焚く、薪滅し形化するも舌のみ變せず、弘法の微あることを信す」と。

妙法蓮華經

大智度論

講んで案ずるに、『開元釋教錄』に云はく、『什譯する所、妙法蓮華經八卷、大智度論一百卷、自餘の經論五十部百九十四卷』と。

雙林寺の傅大士

講んで案ずるに、『無生義』の序に云はく、雙林の居士、厥名は善慧、跡を示すと人に同じく、功は袖處より高し。茲士に居して利物を懷と爲し、波羅蜜門をもつて恆に汲引を爲すと又案ずるに、『止觀義傳』に云はく、『東陽の居士は位等覺に居す、尙三觀四運を以て而も必要と爲す』と。

齊高の世の慧文大師

講んで案ずるに、『摩訶止觀』の第二に云はく、『南岳は慧文禪師に事ふ。齊高の世に當りて河淮に獨歩す』と。又案ずるに、『佛隴道場の碑』に云はく、『龍樹大士は道種智を用て諸の外道を制し、十一部經を括りて宗極を發明す。微言東流して我慧文禪師之を得、文字の中に於て不二門に入り、以て南岳の思大師に授く』と。

天竺靈山の聽衆陳朝南岳の慧思大師

講んで案ずるに、『法門義』に云はく、『既にして教終に不ならず、至人見るに利あり。慧文、慧思或は躍んで相繼ぐ。法雷の振ふこと未だ普からず、故に木鐸重ねて天台大師に授く』と。

【等覺】菩薩の極位にして其智慧功德は妙覺の佛果に等似す。  
【三觀】一心三觀  
【四運】正念、念已、念心相續して速び行くを言ふ。

【道種智】一切の道法を學して衆生を度する菩薩の智慧、三諦の中の假諦の智は是なり。

**【止觀】** 妄念を止息するは止、觀智通達して眞如に契會するは觀なり。  
**【十如】** 諸法實相を説明するに實相性等の十種の如是を用ふ。  
**【十界】** 地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十種の世界。  
**【三觀】** 諸法の空論を觀するは空觀、諸法の假諦を觀するは假觀、諸法の非空非假を觀するは中觀なり。  
**【三智】** 空觀の智は一切智、假觀の智は道種智、中觀の智は一切種智なり。  
**【兩朝】** 陳、隋の兩朝。

天竺靈山の聽衆隋朝天台山の智者大師頌は

謹んで案ずるに、『佛薩道場の記』に云はく、「智者大師之を受く。是に於て止觀の法門を開きたまふ。其教は大略身心に即して而も定慧を指し、言説に即して而も解脱を詮す。善權を演ぶるには鹿苑を表して初と爲し、一實を明すには法華を用ひて宗と爲す。十如、十界の妙を合して三觀三智の極に越く。發心より上學に至るまで行位照明にして倫を相奪ふこと無し。然して後に誕に契經を敷きて之を會同す、煥然として冰の如く釋けて心路惑はず。其教を窺ふ者、焉を藏し焉を修す。蓋し入として自ら得ざること無し。大師の教を設くるや此の如し。若し夫れ弛張用舍聞闔語默は高く海内に歩して兩朝の爲に宗とせらる。大明天に在りて光四表に被り、大雲雨を注ぎて旁く萬物に施すがごとし。是に繇つて佛法を言ふ者は天台を以て司南と爲し、殊塗異論往往退息す。緣離れ化成りて鼓山に涅槃したまふ。是茂隋の開皇十七年なり。夫れ名は實の實、教は道の門なり。大師其實を溷し其門を開き、自ら地位を言ひて證入あることを示す、故に感あれば之に應ずるの事は得て知る可し。法界に安住し現じて比丘と爲るが若きは、等覺敷、妙覺敷、得て知る可からざるなり。」と。

國清寺の灌頂大師

數、深心を得る者三十有二人、其言説を暴して後世に施行する者は、曰はく、章安大師、諱は灌頂なり」と。

國清寺の智威大師

謹んで安するに、「佛隴道場の記」に云はく、「灌頂は緡雲の威禪師に傳ふ」と。又案するに「六祖略傳」に云はく、「左僕射徐陵の後身諱は智威なり」と。

天宮寺の慧威大師

謹んで案するに、「佛隴道場の記」に云はく、「威禪師は東陽に傳ふ、東陽は緡雲と號を同うす、時に小威と謂ふ、諱は慧威なり」と。

左溪の玄朗大師

謹んで案するに、「佛隴道場の記」に云はく、「小威は左溪に傳ふ、玄珠を以て相付し、晦に向つて宴息す」と。而して諱は玄朗なり。

蘇溪の湛然大師

謹んで案するに、「佛隴道場の記」に云はく、「左溪の門人の上首は今の湛然大師なり、道高く識遠く超悟辨達なり」と。

瑯琊の道邃和上

姑蘇の行滿和上

【法華止觀玄文】  
天台の三大部。  
【天台】天台山、  
支那浙江省台州府  
天台縣にあり。

謹んで案するに、『道邃和上行業記』に云はく、『釋の道邃、俗姓は王氏、鄞郡の苗裔、桑梓は西京の繡衣なり。繼代具にすべからず。身を委ねて乃ち監察御史を授けらる、組を解きて業を辭し、師に従ひて道を學ぶ、年二十四にして方に乃ち進具し、秦地に於て戒を學す。既に持犯に達して大乘を學ばんことを思ひ、遂に慈恩の法華疏を寫す。夜に於て夢に一僧を見るに而も語けて曰はく、何ぞ天台圓頓の宗旨を聽かざると。明旦に至りて乃ち衆人に向ひて夢事を陳説す。衆人の曰はく、既に其夢あり、豈其微無からんや。常州妙樂寺の湛然闍梨、今盛に此教を傳弘すと承く、時に其語を聞くと雖も未だの實と爲さず。後信の至るあり、方に虚しからざることを知つて乃ち寫す所を捨て、錫を振ひて南行し楊州の法雲寺に至る。住すること旬日ならんと欲するに又夢に一僧を見る、語けて曰はく、妙樂、經を講じて已に方便品に至らんと欲す。今速に往く可しと。因りて乃ち馳趨するに果して其夢の如し。集業五年更に他事無し、燭を以て晝に繼ぎ、麟角業成る。乃ち師を辭して獨り行かんとす。師の曰はく、方に隨ひて住し、分に隨ひて宣傳せよ。縦ひ自ら修行するも亦利益の爲にせよ。遂に却りて揚州に至り、人の請を被りて法華止觀玄文を講すること、各數遍を得たり。後天台に入らんとして路於越州に至り、御史端公に見ゆ。後除歙州刺史陸、參拜して和上と爲す。後貞元十二年に至り、却りて天台に入る。山に居ること九年、法華止觀玄文等を講じて

未だ曾て闕くことあらず。六時に道を行ず、法華一部、大小乗の戒、日に常に一遍し未だ嘗て周くせずんばあらず。二十年台州の刺史、龍興に請じ下して法華止觀を講せしむ。今年二月に至り、本國の教門を勾當するに因りて日暨く停まるのみ。但乾淑和上に隨ひて始めて始めて十年を得。前に在るの事は悉く具に知らず、略して書する而已」と。

謹んで案するに、『傳法記』に云はく、『釋の行滿、生緣は始めて姑蘇、今は即ち蘇州是なり。二十にして出家し、二十五にして具戒し、五年律を學す。天曆三年より浮樞寺に在つて、荆溪和上に依つて止觀玄文を聽學すること各一遍を得たり。文句は三遍、最後に涅槃疏二遍なり。同じく佛隴に歸りて寺宇に住持し籠邊を掃灑す。春秋改移して既に二十餘祀と成る云々と。大日本國比叡山。

前の人唐受法沙門最澄

前の人唐受法沙門義真

謹んで案するに、日録の後の『陸公の批』に云はく、『最澄闍梨、形は異域なりと雖も性は實に源を同じくす。特に生知を稟け類に觸れて慧に解し、天台の妙旨を求む。又龍造遠公に遇ひ、萬行を一心に總べ、殊塗を三觀に了す。親しく祕密を承け理名言を絶す云』と。又案するに、日録の後の『鄭公の批』に云はく、『最澄闍梨、

【陸公の批】傳教大師將來台州錄の末にあり。

【鄭公の批】傳教大師將來越州錄の末に載す。

【四】四宗相承の中、第三圓頓戒の血脈を詮す。

性は生知の才を稟け、禮義の國より來り、萬里に法を求む。險を視ること夷の若く、艱勞を憚らず神力保護す。南、天台の嶺に登り、西、鏡湖の水に泛びて智者の法門を窺め、灌頂の神祕を探る云云」と。大唐の貞元二十一年五月十五日、朝議郎使持節明州諸軍事守明州刺史上柱國榮陽の鄭審則ち書す。

天台圓教菩薩戒相承師師血脈譜一首。

蓮華臺藏世界赫赫天光師子座上盧舍那佛

謹んで案ずるに、『菩薩戒經』に云はく、「時に蓮華臺藏世界の赫赫たる天光師子座上の盧舍那佛」と。又案ずるに、羅什の誦出せる『羯磨の文』に云はく、「受戒の法、本、梵網經律藏品の中に出で、盧舍那佛の妙海王の王子の與にしたまへる受千子受戒の法なり」と。又案ずるに、『菩薩戒經義記』に云はく、「梵網の受法は是れ盧舍那佛の海王子の爲にしたまへる授戒の法にして、釋迦の舍那に従ひて受誦したまへる所なり」と。

逸多菩薩

謹んで案ずるに、『菩薩戒經義記』に云はく、「次に逸多菩薩に轉與す。是の如く二十餘の菩薩次第に相付す」と。

天竺の鳩摩羅什三藏

謹んで案ずるに、「慧融の集」に云はく、「四部の弟子の菩薩戒を受くるは、原長安城内の大明寺に於てす。鳩摩羅什法師、道俗百千人の與に菩薩戒を受けしむ、時に慧融道祥、八百餘人次をもつて預る、彼未だ盡く持せざれば戒本及び羯磨受戒の文を誦出せるなり」と。

山聽 衆南獄の慧思大師

謹んで案ずるに、「高僧傳」に云はく、「釋慧思、俗姓は李氏、武津の人なり。又梵僧數百の形服壞異なるを夢む。上座命じて曰はく、汝先に戒を受くれども律儀勝れず、安ぞ能く正道を開發せん、既に清衆に遇へば宜しく更に翻壇すべし」と。師僧三十二人を祈請し羯磨法を加へて具足成就す」と。已上傳 受菩薩戒文一卷を造つて盛に世に傳ふ。多く瓔珞傳に依れり。

山聽 衆天台山の智者大師

謹んで案ずるに、「高僧傳」に云はく、「釋の智顛、字は徳安、姓は陳氏、潁川の人なり。晋王方に淨戒を希ひ妙願唯諾す。故に躬ら請戒文を製して云はく、弟子基積善を承け、生れて皇家に在り、庭訓早く趨り胎教夙に注ぐ。福履の臻る攸妙機須らく悟るべし。崎嶇を小徑に耻ぢ優游を大乘に希ふ。息止を化城に笑ひ舟航を彼岸に誓ふ。聞士の萬行は戒善を先と爲し、菩薩の十受は専ら持するを最上

【菩薩の十受】  
薩の十重禁戒。

菩



【波論】般若を求むる爲に七日七夜啼哭せし菩薩の名なり。

とす。宮室を造るには必ず基址を先とす、徒に虚空に架せば終に成ること能はざるに喩ふ。孔、老、釋、門、咸く鎔鑄を資く、軌儀あらずんば孰か將に安んぞ仰がんとする。誠に復能仁奉じて和上と爲し、文殊冥に闍梨と作る。而して必ず人を藉りて聖授を顯傳す。近きより遠きに之き、感あれば遂に通ず。波論は髓を無竭に罄し、善財は身を法界に忘る。經に明文あり、徒に臆説するに非ず。深く佛語を信じ、幸に願くは明尊に道はん、禪師は佛法の龍象なり、戒珠圓淨にして定、水淵澄なり、靜に因りて慧を發し、無礙辯に安ず、物を先にし己を後にし、謙樹風を成じ、名稱遠く聞えて衆の知識する所なり。弟子、所以に虔誠遙に注ぎ機を命じて遠く迎ふ。毎に緣着して諸の留難に値はんことを慮る。師亦既に至れば心路豁然として雲霧を披くが如く即ち煩惱を銷く。今閉皇十一年十一月二十三日、楊州の總管金城に於て千僧會を設け、敬居して菩薩戒を授けしむ。戒を名けて戒を名けて孝と爲し、亦制止と名く。方便智度、宗に歸し極に奉じて大莊嚴を作す。如來の慈に同じく諸佛の愛を普くし、等しく四姓を見ること猶し一子の如し云云。即ち内策に於て射ら戒香を傳へ、律儀の法を授けしむ。告げて曰はく、大王は爲度遠濟を宗と爲す、名實相符ふ、義は輕約に非ず、今法名を總持と爲す可しと。用攝相兼の道なり。王、其旨教を頂受して曰はく、大師の禪慧内に融ず、道の法澤なり、輒ち名を奉じて智者と爲さん」と。

章安灌頂大師

謹んで案ずるに、「高僧傳」に云はく、「釋の灌頂、字は法雲、俗姓は吳氏、常州義興の人なり。年二十に登りて進具す。奉儀德瓶油鉢彌思ひを留むる所なり。孫師の世を厭ふに泊びて道に天台に沐し、定綱を承習して麴緒すること罔し。陳の至徳元年、智顛禪主に従ひ、出でて光宅に居し、觀門を研釋して頻に印可を蒙る。陳氏の馭を失ふに逮び師に隨ひて江を上り、勝地名山盡く皆遊憩す。三び廬阜に宮し九び衡峯に向ふ。迹を躡み依迎して遺逸を訪問せざるは無し。後、荆部に居りて玉泉寺に停る。法を傳へ化を轉じ教を西楚に敷く。開皇十一年、晋王の楊州に鎮んじてより智者に陪從して印溝に戻し、禪衆寺に居して法の上將と爲り、日討幽求す。俄に智者に隨ひ東旋して台岳に止る。晚には稱心精舍に出でて法華を開講す、朗に跨り基を籠めて雲印に超えたり。方集奔隨のもの餘を負ひて屯浦す」と。

縉雲の智威大師

謹んで案ずるに、「六祖略傳」に云はく、「禪師、諱は智威、字は超悟、俗姓は蔣氏、處州縉雲の人なり。初、天台山に詣りて灌頂に師事す、頂は是れ智者の高足なり。遂に之に従ひて業を受く、一心三觀、四教、六即の道歸する所あり」と。

東陽の慧威大師

【四教】 化儀、化  
 【六即】 天台大師  
 は圓教の人の位を  
 六即にて判じ給へ  
 り一には理即、二  
 に名、字、即、三、  
 行、即、四、に、相、  
 五、に、分、證、即、六、  
 究竟、即、なり。

謹んで案ずるに、『六祖略傳』に云はく、『禪師、諱は慧威、字は深昭、俗姓は留氏、務州東陽の人なり。童年にして道に入り、本縣の天宮寺に度配せらる。業を緇雲の智威大師に受け、學業は天台の四葉を繼ぐ。』と。

左溪の玄朗大師

謹んで案ずるに、『六祖略傳』に云はく、『禪師、諱は玄朗、字は慧明、俗姓は傅氏、北地の人なり。天台大師の止觀は一期の佛法、源は龍樹に發り、中は衡嶽に承くと聞き、遂に探討す。』と。

荆溪の湛然大師

謹んで案ずるに、唐の台州國清寺の『故荆溪大師の碑銘』に云はく、『公、諱は湛然、字は某、俗姓は戚氏、世晋陵の荆溪に居す。其教を尊びて因りて以て號と爲す。教を以て之を言へば則ち龍樹の裔孫にして、智者の五世の孫、左溪の朗公の法子なり。』と。

瑯琊の道邃大師

謹んで案ずるに、『乾淑記』に云はく、『釋の道邃、俗姓は王氏、瑯琊の苗裔、桑梓は西京なり。』と。又『行滿和上の記』に云はく、『邃座主、天台の佛隴に到りて自り十年傳説絶えず云云。』と。夢に縁りて常州の妙樂寺に詣りて湛然の講を聞く、具に

『行業記』の如し。

大日本國比叡山

前の入唐受菩薩戒沙門最澄、

前の入唐受菩薩戒沙門義真、

前の入唐受菩薩戒沙門義真、

大日本國の延暦二十四春三月二日初夜二更亥の時、台州臨海縣龍興寺西廂の極樂淨土院に於て、天台の第七傳法の道邃和上を奉

請し、最澄、義真等大唐の沙門二十七人と俱に圓教の菩薩戒を受けたり。

胎藏金剛兩曼茶羅相承師師血脈譜一首

胎藏曼茶羅毘盧遮那如來

【五】四宗相承の第四密教の血脈を詮する中、先づ胎

【胎藏】胎藏界。密教にては地水等の五大或は菩提心を以て本具の理性となす。此理性に一切諸法を攝する

【曼茶羅】胎金の諸尊を其位の如く境上に安置せしむ

【執金剛秘密主】

謹んで案ずるに、『毗盧遮那經』の第一に云はく、次に眞言行を修して大悲胎藏生

大曼茶羅王を説きたまへ。彼諸の未來世の無量の衆生を満足せしめんが爲に、救護し安樂ならしめんが爲の故に。爾時、薄伽梵毗盧遮那、大衆會の中に於て遍く

觀察し已つて、執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け金剛手、今、修行曼茶羅行満足一切智智の法門を説くべし。

中天竺大那蘭陀寺の善無畏三藏大師、謹んで案ずるに、『開元錄』に云はく、『沙門輸波迦羅、唐に善無畏と言ふ、中印度の人、釋迦の苗裔なり。風儀爽俊にして聰敏群に超え、解は五乘を究め行は三學

金剛薩埵、又は金剛手と言ふ、眞言密教の第二祖なり【五乘】人乘、天乘、聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘の五を指す。【三學】戒學、定學、慧學。

を該ぬ。總持禪觀妙に其源に達し藝術奇能語曉せざることを無し。加ふるに弘法を以て努と爲す、豈難危を憚らんや。遂に跡を中天に發して東夏に來遊す。塗、北印度の境に至るに聲譽已に帝京に達す。今上、賢良を搜集し使を發して迎接す。開元四年景辰を以て大いに梵木を齎して長安に來達す、初、興福寺の南院に於て安置し、次いで後に勅ありて西明に住せしむ。五年丁巳に至り菩提院に於て「虚空藏求聞持法」二卷を譯す。沙門悉達譯語し、沙門無著綴文章受す。其無畏所將の梵木、勅ありて並に内に進めしむ。此に緣りて未だ廣く諸經を譯することを得ず、曩時に沙門無行、西して天竺に遊び學び畢りて言に歸らんとす、廻りて北天に至るも達せずして卒す。所將の梵木勅ありて迎へ還らしむ。比、西京の華嚴寺に在りて收掌す。無畏、沙門一行と彼に於て數本の梵經、並に總持の沙門、先に未だ曾て譯せざるを簡び得たり。十二年に至りて駕に隨ひて洛に入り、大福先寺に於て安置す。遂に沙門一行の爲に大毗盧遮那經を譯す、其經具足すれば梵文十萬頌あり。今の所出は其要を撮るのみ。沙門寶月譯語し、沙門一行筆受し、旨を受けて兼ねて詞理を刪綴す、文質相半して妙に深趣に諧ふ。又、蘇婆呼、蘇悉地の二經を出す。無畏、性恬簡を愛して靜慮神を怡ばしむ。時、禪觀を聞きて初學を奨勸し、慈悲を念と作して接誘虧くること無し、人或は疑を問へば剖析、滯ること無し。一。

大唐の沙門一行大師

大唐の沙門義林大師

謹んで案するに、『釋氏要錄』に云はく、『沙門一行は俗姓は張、名は遂、荆國襄公譚の曾孫大僕吸樛の子なり、家代忠孝にして公卿相襲ぐ。母は隴西の季氏、懐孕の日其母額に二三寸の白光あり、乃ち生るるの後移りて兒の額上に在り、親族怪みて之を異となす。年十歳に至りて聰慧人に過ぐ、其父神童をもつて之を擧げんと欲す。其母の曰はく、吾夢寐の徵兆あり、此兒子國師と爲らん、妄に之を擧ぐる事勿れ、後必ず大器と成らんと、是に於て乃ち止む年志學に登り、敏にして而も古を好む。經史を披覽して日に萬言を誦す。備に九流を學びて皆其幽旨を盡す。年二十有一にして父母俱に歿す。豁然として世を厭ひ、方外の心を懷く、因りて荊州の景禪師に遇ひ、欣樂して出家す。爲性疏曠にして服飭を事とせず、嵩山の太照禪師に禪法を諳受し、深く心要に達して無性に契悟し、毎に一行三昧を研精す、因りて以て名とす。或は禪或は誦、寸陰も棄つること無く、人の短を談せず俗務を論ぜず、恬然として自ら志を守り山水を樂む。内外の經書日歴れば便ち誦す。律部並に諸の經論を探り、所有の要文撰して『調伏藏』十卷と爲す。兼ねて自ら注解す。開元四年荊州の玉泉山に居す。勅ありて東都に赴くに聖上欣然として待すに師の禮を以てす。累歲内に居して日に益欽敬す。時に一

び外に出でて師友を参訊すれば衣服の資給御親く指搦す。豈夫秦帝の道安を重んじ、吳王の僧會を敬ふに比して年を同うして語を爲す可からざるなり。色を視ること屍の如く、金を視ること土の如し、口あれども鼻の如く、心は死灰の若し、十二年春正月に至り、勅を奉じて大衍贊並に開元曆を述す。十五年の秋末に汨で方に畢る。唐梵參會して共に一義を成ず、先賢の誤る所は皆以て之を正す。千載の事峻然として日に在り、其著述する所文言宏壯にして馬遷班固以て過ぐる事無し。燕國公張說、序を製して云はく、開元十二祀詔あり、沙門一行、上は軒瓊夏覬周魯五王一隻の遺式に本き、下は大初より麟德に至る二十三家の衆議を集め、其異同を比し其疏密を課し、日昃の短長を審にして星間の廣狹を覆かにす。九道の腴腠を繩し五星の進退を紀す。大衍天地の數を參へ八卦六爻の序を綜ぶるは幟を文王に一にするなり。春秋交蝕の辰を覈べ九疇五紀の奧を研くは符を孔子に同じうするなり。萬象に杼軸し四載に優柔す。奏草朝に竟れば一公夕に落す。其意此の如し。大いに群生を益し永く國典と爲す、又西域の梵文及び祕要、眞言妙印を尋ねて該通せざること嗟し。毎に無畏三藏の所に於て毗盧遮那經を諮受し、自ら梵文を譯して以て漢典と爲す、凡そ七卷見に世に傳はる、兼ねて疏義を爲る。十五年十月八日に至りて長逝す。春秋四十有五、所司に勅して塔を造らしむ。終より葬に及ぶまで凡そ三七日、鬚髮更に長く容貌改まらず、觀る

【授記】 佛發心の衆生に對して當來作佛の記別を授與するを言ふ。

【三車】 聲聞、緣覺、菩薩の三乘を譬へて羊車、鹿車、牛車の三車となす

【金剛界】 大日如來の智慧を開示したる部門なり。  
【阿迦尼吒】 天界十八の最上天にして、形體を有する天處の究竟なり。

者雲の如く未曾有なりと歎す。上、追念して已ます、自ら塔の銘を製し並に自ら石に書し用て威徳を彰す。前古に考ふるに未だ之れあらず。其銘に云はく、天よりの聰明、佛の授記を經、彼上人は兼ねて藝事を善くす。文は日月を掲げ術は天地を窺む。有作の心を捨てて無上の志を發す。萬品の道諦千門の法華、一燈に總攝し三車を廢去す。我金人來りて國家を鎮むるを夢む、神は劫石を増し善は恆沙を集む、定は實相に住し慧は眞宰を行す。余一人を導き、化、四海を清くす、正眼何を促からん、供心付つこと莫し。臂を交ふれば忽ち亡す、跏趺して在すが如し。舍利堅固にして法螺燄絶す、生滅を見る者寂、豈生滅せん、言説を聞く者空何ぞ言説あらん、道は見聞を離る、銘して來哲に示す」と。

謹んで案するに、「順曉和上付法記」に云はく、「沙門義林阿闍梨は是れ鎮國道場の大徳阿闍梨なり、善無畏三藏に師事す。三藏は大悲胎藏曼荼羅の妙法を以て沙門義林に付囑す。阿闍梨は一百三歳、今新羅國に在りて大法輪を轉す」と。是則ち一行禪師の法弟なり、故に二りを以て一處に畧列するなり。

金剛界毗盧遮那如來

謹んで案するに、「金剛頂一切如來眞實攝大乘 現證大教王經」第一卷、「金剛界大曼荼羅廣大儀軌品」の一に云はく、「大悲毗盧遮那常恆に三世一切身口心金剛如來一切如來遊戲處住阿迦尼吒天王宮中の大摩尼殿に住したまふ」と。



金剛薩埵

龍猛菩薩

龍智阿闍梨

金剛智阿闍梨

不空和上

【瑜伽】相應の義  
密教にては行相應  
の意に解す。

【師子】師子國、  
即ち今の錫蘭島な  
り。

【十八會】金剛頂  
の大本十萬頌の設  
會を設けるもの。

【大唐順曉阿闍梨  
付法文】順曉の付  
法次第を録せるも  
の。

【大那蘭陀寺】中  
天竺摩竭陀國にあ  
りしと傳ふ。

謹んで案ずるに、代宗の朝、贈司空大辨正廣知三藏和上の表制集第六卷三藏和上當院の碑に云はく、「敢て概見を以て其大歸を序す。昔、金剛薩埵親く毗盧遮那佛の前に於て、瑜伽最上乘の義を受く、後數百歲にして龍猛菩薩に傳へ、龍猛は又數百歲にして龍智阿闍梨に傳へ、龍智は金剛智阿闍梨に傳へ、金剛智は東來して和上に傳ふ。和上は又天竺師子等の國に西遊して龍智阿闍梨に詣で、十八會の法を揚推す。法化相承すること毗盧遮那如來より和上に迄んで凡て六葉なり」と。

大唐秦嶽靈巖寺の沙門順曉阿闍梨

謹んで案ずるに、『大唐順曉阿闍梨付法文』に云はく、『大唐國開元の朝、大三藏婆羅門國の王子、法號は善無畏なるもの、佛國の大那蘭陀寺より大法輪を傳へ、大唐國に至りて轉じて傳法の弟子僧義林に付囑す。亦是れ國師大阿闍梨なり、一百三歲今新羅國に在りて傳法して大法輪を轉ず。又大唐の弟子僧順曉に付す。是れ鎮道場の大德阿闍梨なり。又日本國の弟子僧最澄に付して大法輪を轉ぜしむ。僧最澄は是れ第四の付囑傳授なり。唐の貞元二十一年四月十九日書記す、佛法を

して永く永く絶えざらしめよ、阿闍梨沙門順曉録して最澄に付すと。

大日本國比叡山

前の人唐受法沙門最澄

前の人唐受法沙門義真

雜曼荼羅相承師師血脈譜一首

金剛道場大牟尼尊

【六】天台密教相承の中、次に雜曼荼羅の血脈を證す【雜曼荼羅】藥師法の名に依る蘇悉地の法を指す。

【一字佛頂經】一字佛頂輪王經六卷

天竺沙門菩提流志

剛道場に住すとて

謹んで案するに、『一字佛頂經』の第一に云はく、『薄伽梵、摩竭提國菩提樹下金

剛道場に住すとて、開元釋教錄』の第九に云はく、『沙門菩提流志後、和帝の龍興神龍二年景午に至り、駕に隨ひて京に歸る。勅して西崇福寺に於て安置す。遂に

廣大寶樓閣、不空羼索神變、一字佛頂、千手千眼姥陀羅尼、如意輪、文殊寶藏、

金剛光焰等の經を譯すとす。

大唐草堂寺の比丘大素

謹んで案するに、冥道無遮齋の後の批に云はく、『時大唐貞元二十一年、歲乙酉に在る五月五日、壽州草堂寺の比丘大素、字は海鏡、此文を抄し兼ねて別に五佛

【五佛頂】一字佛頂輪王經の略。

頂の法を傳授す。永く恆記と爲す。』と。

天竺の沙門阿地瞿多

謹んで案するに、『陀羅尼集經』の序に云はく、『高德の沙門あり、厥を阿地瞿多に無極と號す。是れ中天竺の人なり。永徽三年三月上旬、慧日寺の浮圖院の内に赴く。法師自ら普集會の壇を作り、大乗琮等の一十六人をして受けしむ。及び英公鄂公等の一十二人壇供を助成す。』と。

大唐明州檀那行者江祕

大唐貞元二十一年五月五日、大唐國明州の檀那行者江祕、此普集壇並に如意輪壇等を留傳して日本國地に往かしめ訖んぬ。付法の行者は大唐明州甌縣の廊裏江策十二郎なり。

大唐開元寺の靈光和尚

大唐貞元二十一年五月五日、明州開元寺西廂の法華院の靈光和尚、軍荼梨菩薩の壇法並に契藏等を傳授す。

大唐國清寺の惟象和尚

【七】 結文。

大唐貞元二十年十月、台州國清寺の惟象和上、大佛頂大契曼荼羅の行事を傳授す。具に付法文に説くが如し。

大日本國比叡山。

前の入唐受法沙門最澄。

佛法の血脈、一家の所承、略して上に列ぬるが如し。將來の法、孫儼に依りて名を加へよ。法の在ることあるを示すに庶からん。

大日本國弘仁十年歲己亥に次る十二月朔乙巳五日己酉撰上して上る。

前の入唐受法沙門最澄證脈

前の入唐受法沙門義眞證脈

一乘佛子 眞忠筆受

一乘佛子 顯然書

内證佛法相承血脈證畢

【慧心僧都全集】日本佛教台書等收  
 特色なる理觀の念  
 佛を委悉に證明し  
 兼て口稱の念佛を  
 都勸獎す。實に僧  
 都寂年の五月の撰  
 序を有し、師の思  
 想信仰圓熟の頂を  
 示すものなり。  
 【觀法】天台の十  
 乘觀法。

【澆季】澆薄の末  
 世。

【大師】天台宗の  
 開祖智者大師。  
 【娑婆界】三千大  
 千世界の總名。

【依正】依報、正  
 報。

【空假中】迷悟善  
 惡の情相を亡する  
 は空、法法自體を  
 失はざるは假、常  
 に破立を絶するは  
 中なり。之れ即ち  
 三諦なり。

# 觀心略要集

## 序

夫觀法は諸佛の祕要、衆教の肝心なり。故に天台宗にはこれを以つて規模と爲す。「心地觀經」には「能く心を觀する者は究竟して解脱す。觀すること能はざる者は究竟して沈淪すと云云」。當に知るべし、生死の沈と不沈とは、心性の觀と不觀となることを。爰に世は澆季に迄りて人利根なること少し、其門を尋ぬる者は闇奥を究め難く、其流を挹めざる者は淵源を討ぬること空なり。何に矧んや予が如き愚暗の者をや。然れども志弘闡に深く、思ひ兼濟に切なり。竊に大師の觀心を慕ひて自他の慧眼を開かんと欲す。仍て聊か祖師の釋文を鈔し、名けて「觀心略要集」と曰ふ。觀行の一門に分ちて十章と爲す。一には娑婆界の過失を擧げ、二には念佛に寄せて觀心を明し、三には極樂の依正の徳を歎じ、四には空假中を辨じて執を蕩さしめ、五には凡聖一心に備はるることを釋し、六には流轉生死の源を知らしめ、七には出離生死の觀を教へ、八には空觀を修して懺悔を行ぜしめ、九には眞正の菩提心を發さしめ、十には問答料簡して疑ひを釋す。時に強固の載夏五月に序す。

源信述

觀心略要集

【一】十章の第一 娑婆界の過失を擧ぐ。

第一に娑婆界の過失を擧ぐとは、夫娑婆世界は行住坐臥の威儀皆是解脱を遠離するの基、見聞觸知の境界は生死に沈淪するの源に不すと云ふこと莫し。經に曰はく、「一人一日の中に八億四千の念あり。念念の中に作す所皆是三途の業なり」と云云。」凡夫は世間に住すれども世間の相をだも知らず、八億四千の念を起すこと我等が所知に非ずと雖も、佛眼に照したまへる所なれば仰ひで信すべし。彼一日の中の三途の業すら猶以て償ひ難し、況んや一期の頃の無量の念をや。何を爲してか懺悔せん。且く細念の生滅を除いて只浮虚の塵惡を思ふに、適電容の一咲するを見ては深く愛欲の水に溺れ、纔に毀謗の片言を聞いては専ら瞋恚の炎を熾にす。貪瞋は暫く息すれども愚癡は日に甚し。『法華の疏』に云はく、『貪海流を納るれども未だ曾て飽足せず。瞋虺毒を吸うて諸の世間を撓す、癡闇頑翳にして漆墨よりも過ぎたりと云云。』凡て違順は俱非の縁、三毒は等分の惑を増す。慢幢未だ折れざれば業海傾き難し。其心念念に世間の樂を欣ひ、常に其臭身を安んじ、亦其癡心を悦ばしむ。若し種性高貴の家に生ずれば自在の威勢に誇りて恣に罪業を造り、若し貧窮下賤の身を受くれば官位福祿を求めて、鑊へに惡念を起す。『止觀』に云はく、「若し其富貴なれば心を縱にして罪を造る、若し其貧窮なれば惡念亦廣しと云云。』貴賤貧富は共に罪

【三毒】貪毒、瞋毒、癡毒。

【西重】殺生、偷盜、邪淫、妄語。

【八寒】八地獄獄

【有爲有漏】界内

【見思未だ破せざるときは起作あるが故に有爲と云ひ煩惱あるを有漏と云ふ。

【無始無明】生死流轉の根本惑なり

【三乘】聲聞乘、緣覺乘、菩薩乘。

【一乘開會】法華經の三乘即一乘の開會。

障の器なり。日夜に専ら名譽を四遠に飛ばさんことを憶ひ、朝暮に唯利養を一身に貪らんことを營む。人を先にし我を後にするは是成佛の要なり、己を益し他を忘るるは濟度の道に非ず。然れば則ち漁父の江河の鱗を濟ふは更に大士の慮懐に背き、獵者の山野の蹄を從ふことは永く菩薩の悲願に違へり。又恩愛の家を棄てて而も其身は深山絶域に入れども猶俗塵の境に染みて而も其心は聚落田里に在り。無始の妄染の有執未だ薄けずして、桃李の春風に開けたる、之を翫んでは則ち五趣に輪廻するの因と成し、蘭菊の秋露に綻びたる、之を愛ては亦三有に流轉するの業を結べり。豈只五逆の惡報を招き、四重の善趣に背くのみならんや。故に紅蓮大紅蓮は將來の我等が柄ならん、焦熱大焦熱は抑も誰人の家ならんや。八寒八熱の罪報を畏れて習因習果の根源を尋ぬるに、久しく有爲有漏の故郷に留まりしことは只無始無明の妄想に依れり。所以に空を廢てて有に在つて只鏡中の影に耽り性を捨てて相を取りて常に水上の月に迷へり。『止觀』に云はく、『凡愚は有と謂ひ智者は無と知る、水中の月を得ては喜び失ひては憂ふるが如し。大人は去取都て欣慘無し、鏡像幻化も亦復是の如しと云云。』而るに實有は累劫の妄執なるが故に厭へども捨てられず、空寂は今世の觀念なるが故に好めども馴れ難し。縱ひ一分の善根有るに似たれども無相法界の悲智に非ず。遂に種智の遠縁と成ると雖も更に善提の近因とは爲り難し。所以は何んの絶愛妻子の慈みは狭くして偏頗有り、天文地理の智は淺くして出世に非ず、三乘解脱の教文を讀むと雖も立行に勇み無く、一乘開會の義理を聞くと雖も局情を改め難し。散亂轟動

【梅檀】 香木の名。

【大論】 大智度論

【魚子】 魚母多く胎子を有するも成育する者少し。

【菴羅菓】 菴羅に似たる實、菴羅樹は花多けれども果を結ぶこと少しと言ふ。

【薩婆若海】 薩婆若は一切智相、海とは佛智廣大なるに名く。要は悟界の意。

【二】 十章の第二念佛に寄せて觀心を明す。

【彌陀の誓願】 極樂國の教主彌陀佛に四十八願あり。

にして三業靜かならざればなり。「止觀」に云はく、「身は獨落の如く、口は春蛙の如く、心は風燈の如し。散逸なるを以ての故に法現前せずと云云。」佛法の心に染まざることは實に是散逸なるが故なり。幸にして佛法に遇ひ乍ら何ぞ空しく日月を送らん。一生將に暮れなんとし來世近きに在り。菩提の資糧を貯へずして再び三途の冥路に歸らんこと、譬へば梅檀の林に入りて一枝をも攀ぢず、崑崙山に陟つて片玉をだも取らざるが如し。其寶山に入らずんば誰か之を取らざることを悔いん。既に佛法の寶山に入れり、手を空しうして歸るべからず。縱ひ佛法を習ふ人有りとも若し名聞利養の爲にせば、何ぞ摩尼珠を以て頭の牛に博ふるに異らんや。實には生死を厭ひ菩提を欣ふの輩とても、觀心は是出離の正因なることを知らず。若し聖教を學び、學ばざるものも、俱に生死を出で難きは、唯是薩婆國の欲界は散網の地なるの失なり。又最初發心の時は上求菩提の志深く、下化衆生の思切なり。而れども煩惱内に競ひ起り、惡縁外に頻りに之を引くが故に、千萬人の中に其心を遠ぐることも最も希なり。「大論」に云はく、「菩薩の發大心と、魚子と、菴羅菓との三時、因の時は多けれども果を成ずる時は甚だ少しと云云。」若し淨土に生じなば豈斯の如くならんや、内には煩惱を伏し、外には善友に遇ひ、自然に佛道を増進して薩婆若海に流入す。願くば安養の淨刹に往詣して自行化他自在ならんことを。

第二に念佛に寄せて觀心を明すとは、濁世不善の世に生れたりと雖も、適彌陀の誓願を聞くことを得、誠心念佛の功を運んで必ず往生の素懷を遂げんと欲ふは、諸教に讀ふる所



【要決】大慈恩寺の實基法師撰、四方要決を指す。

【二邊】空假の二邊を指す。

【四句】をもつて推檢す。義例隨釋一に出づ。  
【弘決】摩訶止觀輔行傳弘決。

多くは彌陀に在るが故なり。夫彌陀如來とは、昔は娑婆の聖主と爲て始めて發心修行し、今は安養の化主と成りて終に宿縁を忘れたまはず。故に要決に云はく、「彌陀の本願は誓つて娑婆を度したまふと云云。」茲に因りて釋尊勸めて曰はく、「唯食時を除いて恆に此事を憶へ」と。彌陀自ら曰はく、「我國に來生せんと欲はば當に我を念すべし」と。又或る處に云はく、「此界に一人佛の名を念すれば、西方に便ち一つの蓮生すること有り、但し一生常にして不退ならしむれば、此花還つて此間に到り迎ふと云云。」佛の名を念ずとは其意云何。謂く、阿彌陀の三字に於て空假中の三諦を觀すべきなり。彼阿とは即ち空、彌とは即ち假、陀とは即ち中なり。其自性清淨の心は凡聖に隔て無く、因果にも改まらず。三世に常住にして二邊に動ぜられざるは是中道なり。百界、千如、三千世間の諸法、森然として幻有なるは是假諦なり。四句をもつて推檢するに一法をも存せず、三千を亡泯するは是即ち空なり。「弘決」に云はく、「心性動せず、假に中の名を立つ。三千を亡泯す、假に空の稱を立つ。亡すと雖も而も存す、假に假の號を立つと云云。」法門幽玄にして喻に非ずんば知られず。而るに三諦一諦の旨は諸の喻皆分なり。非三非一の談は鏡の喻最も視し。譬へば明鏡の上に諸の色像を現すること有るが如し。鏡は萬像の體性なり、之を中道の萬法の體性たるに喩ふ。明は鏡像を映徹す、之を妙空の三千の性相を亡するに譬ふ。像は假に鏡の上に現す、之を假諦の中道の假用たるに譬ふ。明、像即ち鏡なるは空假即中の如し。鏡、像即ち明なるは假中即空の如し。明、鏡即ち像なるは空中即假の如し。三

【圓融の三諦】空假中の三諦互具互融するを圓融三諦と云ふ。

【修徳の三諦】後天的に修治の造作によつて開發せられたる三諦。

【性徳の三諦】本性不改の先天的三諦の性。

【釋籤】法華玄義釋籤。

【義例】止觀義例。

に即して而も一、一に即して而も三、非三非一にして而も三と一とを照す。之を言はんと欲すれば則ち言語の道斷へ、之を思はんと欲すれば思慮の處亡す。凡て不可思議の理は是圓融の三諦なり。又譬へば如意珠の光明を放ちて七寶を降すが如し。珠は中道の如く、光は空諦の如く、寶は假諦の如し。是は修徳の三諦なり。又如意珠の中に光の性有り、寶の性有り、故に珠と光と寶とは一ならず、異ならず、而も一而も異、亦縱横ならず、亦並別ならざるが如く、一心三諦、三諦一心、之に准じて知んぬべし。是は性徳の三諦なり。空なる内に其性有り、故に外に光、寶を吐くが如く、性徳に依つて修徳有るなり。但し此譬は未だ修性不二の旨を顯さず。須らく所生の寶即ち如意珠なりと云ふべく、波即ち水、夢即ち心なるが如し。『釋籤』に云はく、『夢中に於て因を修し果を感ずるが如き、夢事宛然なるは即假なり。夢を求むるに不可得なるは即空なり。夢の心性は即中なり。此三法前後ならず、合散ならずと云云。』假諦の三千の性相なるは夢中の修因感果の如し、空諦の三千の因果を亡没するは夢中の依正を求むるに而も空なるが如し、中道即ち此空假の體性なるは夢に見る所の諸法即ち心性なるが如し。修性不二、萬法唯心、之を以て悟る可し。諸法は萬差なれども一心に不ずと云ふこと無し。『華嚴經』に曰はく、『三界は唯一心なり、心の外に別法無し、心佛及び衆生、是三差別無しと云云。』『義例』に云はく、『唯萬境に於て一心を觀ず、萬境は殊なりと雖も妙觀は理等しと云云。』『止觀』に云はく、『微塵を破して大千の經卷を出すが如く、恆沙の佛法一心の中に曉らむと云云。』『起信論』に云はく、

【本覺】衆生の心性は本來清淨にして迷悟因果を離るるが故に本覺と言ふ。

【攝論】無性攝論

【十卷】

【莊周】莊子名は周、字は子休、宋の人なり。

【烈士】印度施鹿林の東二三里にして烈士池あり、烈士の傳説を傳ふと言ふ。

【圓覺經】大方廣圓覺修多羅了義經一卷。

【大加行】正位に入らんが爲に大菩提心を發して修行に勵むを云ふ。

「三界は虚偽にして唯心の所作なり。心を離るれば則ち六塵の境界無しと云云。」止觀に云はく、「又眠夢に百千萬の事を見るが如き、當悟すれば一も無し。況んや復百千をや。未だ眠らざるときは夢みず、覺めず、多ならず、一ならず、眠力の故に多と謂ひ、覺力の故に少と謂ふと云云。」眠夢に百千の事を見るは、假諦の三千の理の如し、當悟すれば一も無きは、一念の如し。此は無明の眠夢の所見に就て、三千の多を論じ、當悟の一を論ずるなり。本より眠つて夢みざるときは、自性の覺の故に、眠夢の多に非ず、當悟の一にも非ず。只自性清淨の本覺の心のみ有りて而も實なり。無明の夢の中の六塵の境界は、本覺の心の假用なるが故に虚偽なり。我夢裏に在りと雖も、覺に乗じて思惟するに、定に諸法の眞理は夢の即空なるが如し。是を以て眠夢の體是心なりと觀じて、夢中の苦樂に迷ふべからず、所以に多歳の榮耀をも樂はず、亦長時の苦患をも愁へず。只本覺に達すべし。覺め已んぬれば乃ち須臾なり。『攝論』に云はく、「夢に處して年を経と謂ふも覺むれば乃ち須臾の頃なり、故に時無量なりと雖も一刹那に攝在すと云云。」譬へば莊周が百年の蝶、烈士が二生の夢の如くなるのみ。『圓覺經』に曰はく、「始めて衆生本より來た成佛すと知れば、生死涅槃は猶昨夢の如しと云云。『唯識論』に云はく、「未だ眞覺を得ざれば常に夢中に處す、故に佛説きて生死の長夜と爲したまへりと云云。我等何れの時にか眞覺を得て、今の生死を翻へして昨の夢と爲さん。彼春夜の夢は醒さんと欲せざれども而も自ら醒むるの期有り。此生死の夢は發心せざれば塵劫を経と雖も覺めず。是故に大加行を起して法性の覺

【三】十章の第三極樂の依正の徳を歎ず。

【迦旃隣陀】鳥の名。

【曼陀曼珠】曼陀は此に白華と云ひ曼珠は此に赤華と云ふ。

を得んと誓ひ、應當に極樂に往生して覺悟の師に值遇すべし。

第三に極樂の依正の功徳を歎ずとは、今期する所の極樂の依正は云何。夫彼世界の相を觀するに三界の道に勝過せり。究竟して虚空の如く、廣大にして邊際無し。寶性功徳の草は柔軟にして左右に旋り、觸れん者の勝樂を生ずること迦旃隣陀に過ぎたり。大乘善根の境、無苦無惱の砌りなり。瑠璃をもつて地と爲し金繩をもつて道を界へり。凡そ八方上下の無央數の諸佛の國の中に、極樂世界の所有の功徳最も爲第一なり。二百一十億の諸佛の淨土の嚴淨の妙なる事を以て皆此中に攝在せり。依正微妙にして庸淺斯に迷ふ、功徳甚深なるは辱愚何ぞ測らん。粗大綱を擡て聊か之を讚歎すること、譬へば鴉片蠶をもつて海を抱み、寸管をもつて天を窺ふがごとし。彼にて適顏梨の鬪を排きては摩黎に求めざれども自ら梅檀の匂を飛ばし、籠に珊瑚の床に登れば襄邑に尋ねざれども亦錦繡の茵を展たり。幡蓋の色色は七寶莊嚴の光を流し、歌唄の聲聲は萬徳圓滿の相を歎ず。宮殿より宮殿に行くに耳に滿るものは簫笛箏篋の聲なり、林池より林池に至るに眼を遮ぐるものは曼陀曼珠の色なり。上膳の甘味は七寶の机に備へ、自然の衣服は黄金の體に纏へり。光明周遍して日月燈燭を用ひず、冷暖調和して春秋冬夏有ること無し。妙華繽紛として亂墜し、寶衣旋轉として來下すること、鳥の空より飛び下る如くにして彌陀に俱散したてまつる。孔雀鸚鵡の群がり飛び、長雁鴛鴦の遊び戯れにも、晝夜に常に妙法を唱へて、聞く者をして佛道に進ましむ。内に重惡無ければ外に愛染無く、六根に理を得て六塵に自在な

り。聲を聞きても悟を閉き、色を見ても惑を斷ず。玉樓の金銀を鏤りたるにも著を成さず、玉樓を點じて空寂なりと體達するを以ての故なり。寶地の瑠璃を敷けるにも執を留めず、寶地に即して十方を徹見するを以ての故なり。瑤池の浪の聲は一實中道の教を演べ、琪樹の風の響は三諦卽是の法を説へ。又彼土の衆生は語默作作の威儀進止、無障無礙にして縱任自在なり。或は七寶の山の間に住して寂然宴默し、或は衆寶の樹下に在りて讀誦解說し、或は飛梯を渡りて伎樂を作し、或は虚空に騰りて神變を現じ、或は蓮臺の上に坐して互に宿命の事を説き、或は寶池の邊りに至りて新生の人を慰問す。自行を先にせずして専ら化他に在り。或時は觀音勢至に伴ひて、語る所は十方の諸佛の利生の方便なり。或時は普賢文殊に従ひて、語る所は三有の衆生の拔苦の因縁になり議し己んぬれば縁を追うて去り、語り己んぬれば樂に隨ひて往く。世世の父母の六道に沈めるや意に任せて引導し、生生の知識の四生に在るや思に隨つて教誡す。此は是安養の淨刹に任運に生じ得たる果報なり。彼瑠璃明徹の地のの上に高廣の菩提樹有り、華菓の樹王を飾れるは皆是種菓礪磻なり、枝葉の四方に布るは紫金白銀に非ずといふこと莫し。樹の上に羅網を覆へり、羅網の金鈴に常樂我淨の響有り、條の間に瓔珞を垂れたり、瓔珞の眞珠に法界圓融の色を現す、樹の下に座有りて莊嚴無量なり、座の上に佛在して相好無邊なり、妙覺尊上の粧は、之に近づけば七世の父母に遇へるが如く、見る者無厭の徳あり。之を尋ぬれば一子の慈悲より起る。『經』に云はく、『清淨の慈門は刹塵數にして、共に如來の一の妙相を生ず、一一の諸

【無作】因縁の造作なきを言ふ。

【珂雪】瑠璃の潔白にして雪の如きもの。

【兜羅綿】妬羅樹より生じたる綿、柳絮の如しと言ふ。

【俱胝】百億。

相然らずと云ふこと莫し。是故に見る者厭足無しと云云。青蓮の眼鮮かにして紫金の膚潔く、乃至滿字の駒の間に開けたる、千輪の趺の下に顯れたるは、皆無作の誓願より出で、併に平等の慈悲に成せられたまへり。誰人か之を見て渴仰を生ぜざらんや。彼面輪は圓滿にして秋月の光を留め、雙眉は皎淨なること天帝の弓に似たり。雙眉の間に白毫あり、右に旋りて宛轉たること金鏡の上に水精の珠を立てたるが如く、鮮白なること珂雪に逾え柔輭なること兜羅綿の如し、表裏俱に映徹すること白瑠璃の筒の如く、十方面に於て無量の光を現すること萬億の日の如くにして具に見るべからず。但し光の中に於て諸の蓮華を現す、上無量塵數の世界を過ぎて華華相次いで團圓正等なり。一一の華の上に一一の化佛生じ、相好莊嚴して眷屬圍遶せり。一一の化佛復無量の光を出す。中に於て復八萬四千の相好有り、一一の相好に八萬四千の光有り、其色微妙にして衆寶の色を具せり。總じて之を言はば七百五俱胝六百萬の光明あり。熾然赫燦として神德巍巍たること金山王の大海の中に在すが如し。無量の化佛菩薩光の中に充滿ちて、各各に神通を現じ、阿彌陀佛を圍遶せり。彼佛是の如く無量の功德相好を具足して、菩薩衆會の中に在して正法を演説したまへり。唯白毫の光のみに非ず、身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如し。一一の光明遍く十方世界を照すこと、夜闇の中に大炬火を燃すが如し。念佛の衆生を攝取して、捨てたまはず、但し念佛の衆生の攝取して、而も念せざる者を捨てたまふには非ず。『大般若經』に曰はく、『十方世界に一の有情として如來の大悲の照したまふこ

【無縁の大悲】諸佛の心は無縁に住せざる等大悲を以て法界を照す、故に生を攝るに生として攝せざることに無し。縁に出つて造らざるが故に無縁と言ふ。

【八相成道】佛の成道を中心として其生涯を八相に分つ。

【九法界】十界より佛界を除きたるもの。

【二十五有】四州四惡趣、六欲並に梵天、四禪、四空處、無想、五那舍なり。

【六蔽】慳貪、破戒、瞋恚、憍念、散亂、愚癡。

【空王佛】過去の一佛。

【三十七品】四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道。

【十力】是處非處、根力、業力、定力、根力、欲力、性力。

觀心略要集

と能はざる所無しと云云。無縁の大悲の光明に何の彼此の愛憎か有らんや。然りと雖も念ぜざれば自然に機を隔つ、猶盲者の日光を見ざるがごとし。彼念佛の衆生の中に、若し應に佛身を以て得度すべき者有れば、此光即ち八相成道を現す。九法界の身を以て得度すべき者には、此光亦隨類の化を示す。凡そ三界六道二十五有、界内界外までも、百界千如普門摩訶の無邊の色身皆能く顯現して說法利生し、無盡の佛事を作したまふに冥顯の益窮り無し。或は大悲の光を放つて一實の樂を與ふること、如意珠の寶を雨すに似たり。或は大悲の光を放つて九界の苦を抜くこと藥樹王の病を愈すが如し。三善の光は三毒を滅し、六度の光は六蔽を破す。即ち知んぬ、我等も彼光の中に在りて鎮へに照耀を被れども、煩惱に眼を障へられて之を見ることを得ず、見ることを得ずと雖も、大悲憊むこと無く常に我身を照したまひて、罪業自ら除かれんことを。過去に空王佛の眉間の白毫の相を彌陀尊禮敬したまひて、罪を滅して今佛を得たまへり。我も亦彌陀の白毫を禮敬したてまつり、無始の罪を滅して佛道を證得せん。白毫の一相を觀すれば、自ら諸相を觀することを成す。『觀無量壽經』に曰はく、『無量壽佛を觀せん者は一の相好より入り、但眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見る者は八萬四千の相好自然に當に現すべし』と、『觀佛經』に曰はく、『無量劫より晝夜に精進して身心懈ること無く頭燃を救ふが如くにして、六度、三十七品、十力無畏、大悲大悲の諸の妙功德を勤修して此白毫を得たり。此相を觀ずる者は九十六億那由他恒河沙微塵數劫の生死の罪を除却せんと云云。』所以は何ん。今此白毫の光

至處道力、宿命力、漏盡力、一切智無所畏、漏盡無所畏、說障道無所畏、說盡苦道無所畏。

【中道第一義】諸法中道に過ぎたるものなし、故に第一義と云ふ。中道とは絶待の眞理に名く。

【大圓鏡智】如來眞智。

【一念三千】凡夫の一念に圓かに三千の諸法を具有するを云ふ。

【四】十章の第四空假中を辨じて執を蕩かさしむ。

明は是中道第一義の光なり。中道の白毫なれば圓融無礙にして、華藏世界の所有の塵は一の塵の中に法界を見る。毫光、無邊の佛事を化作し、亦一相に即して諸の相好を見ることは唯心の毫相なるが故なり。加之、大小の相好は列なれる星の如くにして大圓鏡智の膚に照耀し、萬徳の瓔珞は垂れたる露の如くにして波滅忍辱の衣に懸露たり。依報、正報、大略斯に在り。今總じて淨土に付して亦觀解を作すことをいはば、中論に云はく、『因縁所生の法は、我即ち是空と説く、亦是名けて假名と爲し、亦是中道の義なりと云云。』安樂の佛土も因縁の所生なれば、即空即假即中なり。云何なるか即空なる、謂く彌陀の依正は淨業の因縁より生ず、縁生は主無く、主無ければ即空なり。云何なるか即假なる、謂く主無くして而も生ずれば即ち是假なり。云何なるか即中なる、謂く法性を出でざれば並に皆即中なり。當に知るべし、極樂は一念三千にして並に畢竟空、並に如來藏、並に實相なることを。三に非ずして而も三、三にして而も三に非ず。所觀の淨土此の如し。能觀の身心も亦爾なり。抑も我等、思ひ八功德池に深きこと池魚の江湖を求むるが如く、望み七重寶樹に高きこと籠鳥の山藪を欣ふに同じ。唯願くば彌陀尊、我心願を照見したまへ。

第四に空假中を辨じて執を蕩かさしむとは、西方の淨利を欣求せん者は先づ此土の執を遣るべし。凡そ諸法の道理は三諦に過ぎず。空、中に入りては娑婆の妄執を蕩かし、假諦に出ては西方の佛土を欣ひ、自他の依正に廻じ、凡聖の因果に互つて、常に三諦の觀を作して凡夫の迷情を破すべきなり。所以に中道は不思議の境なれば著、不著有るべからず。空



【旃陀羅】屠殺等を業とする種類の者の總號。

【梵天離欲】梵天は淨にして欲染無きが故に。

【涅槃經】大槃涅樂神。

は所有無し、何の執をか成ぜんや。假諦には二の義有るべし、一には生滅無常にして且算測り難し、縦ひ八十年の壽を得たる人も連持未だ三萬日に足らず。其一期の間の日數を計るに、纔に二萬八千餘日なり。日月の奔走すること驥馬に策つが如く、盛年半は過ぎぬ、餘算幾程ぞ。旃陀羅の羊を驅つて屠所に至らしめんとするに、歩歩に死地に近づかば、斯に何の少しき樂みか有らん。無常の旃陀羅我を驅つて火血刀の屠所に至らしめんとす。日暮れ夜明けて將く死地に近づけり、何ぞ生涯の暮れ易きに驚きて、而も生死を解脱するの善根を修せざらんや。劫初の無量歳なるすら猶滅盡の期有り。何に況や今世の泡沫の命をや。昨は紅顏に誇り今は白骨と爲るとも、唯是朝露の底に名利を貪り、夕陽の前に子孫を愛す。一息の出入する、是を壽命と名け、出入通ぜざる、是を命終と名く。身の煖り漸くに冷えぬれば木の如くにして覺無し。心の燈忽ちにして滅すれば萬劫にも復らず。中有の驛路には孤獨にして伴ふもの無く、晝夜に常に行て邊際を知らず。深遠黒闇にして光明有ること無し。適生の縁合する時に神無數界に去りて、刹那須臾の頃に諸趣の生處を定む。纔に善處に生ずれども遂に其終り有り。所以に梵天離欲の殃を受くと雖も、還つて無間熾燃の苦に墮す。天宮に居して光明を具すと雖も後には地獄の黒闇の中に入る。驛へば人有りて弓を彎きて虚空を射るに、箭の力盡き畢んぬれば還つて地に下るが如くなるのみ。『涅槃經』に曰はく、『一切の諸の世間に生ある者は皆死に歸す。壽命無量なりと雖も必ず終盡くると有り』と云云。『馬鳴の伎聲に唱へて曰はく、『有爲の諸法は幻の如

【四土】凡聖同居土、方便有餘土、實報無障礙土、常寂光土。

【因陀羅網】帝釋宮の中の衆の寶珠は互に相映入して一球の中に衆珠を現じ、一一の珠内に帝釋の依正彼此雜亂せず窮り無しと言ふ。

く化の如し。三界の獄縛は一として樂むべきこと無し。王位高顯にして勢力自在なるも無常既に至りぬれば誰か存することを得たる者あるや。空中の雲の如く須臾にして散滅す。是身は虚偽なること猶芭蕉の如し。怨たり、賊たり、親近すべからず。毒蛇の蝮の如し、誰か當に愛樂すべけん。是故に諸佛常に此身を呵したまふと云云。實に能く此身を觀するに讎敵たり、怨賊たり。煩惱恆に起りて聖財を奪ふが故に。浮雲の如く芭蕉の如し、無常の風を待ちて終に保たざるが故に。此は是假諦の生滅無常なり。二には假諦即ち法界にして一法も定んで一法ならず。石毒藥の文を以て意を得。一塵法界と觀するに、我心に分齊無ければ三千融通し、心念に即かに達す。憶想熏習すれば眼に明らかに之を見る。『經』に六根清淨の人を説いて曰はく、『又淨き明鏡に悉く諸の色像を見るが如く、菩薩淨身に於て皆世の所有を見んと云云。』假諦の三千と理體は本隔無ければ、心を攝めて思惟するに妄想漸く蕩け、父母所生の身に十界の依正を現す。是を以て四土木是一にして三身は法界に遍ぜり。我身即ち彌陀、彌陀即ち我身なれば、娑婆即ち極樂、極樂即ち娑婆なり。譬へば因陀羅網の互に相影現するが如し。故に遙に十萬億の國土を過ぎて安養の淨刹を求むべからず。一念の安心を翻へして法性の理を思はば、己身に佛身を見、己身に淨土を見ん。法性明鏡の身を得つれば像として現せずと云ふこと無し。淨穢は唯是迷悟の差別なり。迷者の爲には極樂即ち娑婆、覺悟の前には娑婆即ち極樂なり。是を以て荆溪大師の釋に云はく、『同居の穢を離れずして同居の淨を見ると云云。』故に深信觀成の人は娑婆に

【藥王品】 妙法蓮華經藥王菩薩本事品第二十三

【無生法忍】 境智相冥じて無生の理を悟るを無生法忍と云ふ。

【淨名經】 維摩詰經。

於て四種の佛土を見る。而るに我等淨を隔てて穢を見、妄想に封ぜられて一に於て、異を見ること猶一河の水に於て、人間は冷水と見るに餓鬼は猛火等と見るが如し。業力に隨ひて所見不同なり。是法體の本より永く異なるには非ず。只其穢國を執して嚴淨の土を觀ぜざればなり。豈金銀を棄てて而も瓦礫を取るに異らんや。『藥王品』に如說修行の人を説きて曰はく、『此に於て命終して即ち安樂世界に往きて、乃至蓮華の中に生ぜん』と云云。『此に於て命終すとは、法華を修行すれば惡業の命終るなり。即ち安樂世界に往くとは、安樂行に住するなり。安樂行とは法華經の行なり。即ち往くとは、即生に感業の心を轉じて極樂の清淨衆の心と成るなり。蓮華の中に生ずとは、理解を生じて妙法蓮華の法門の中に入るなり。是の如く修行して無生法忍を得ば、眼根清淨にして諸佛如來を見たてまつること、猶晴夜に星を見るがごとし。紺頂白毫は明かに眼前に現じ、寶樹檀林は掌の中に在るが如し。乍く此土に住して先づ同居の淨土の氣分を得つれば、順次の往生に疑ひ有るべからず。根性遲鈍なるが故に、縦ひ今生の内に淨土を見ること能はずとも、遂に此觀力に依つて順次に必ず上品蓮華に生ぜん。但し前に空に入りては娑婆の軌を離れ、假に出でては極樂の土を欣へと勧めしことは、乍く極樂は空觀の境に非ざるに似たり。然りと雖も既に亡泯三千と云ふ。何ぞ忽ちに彌陀の依正に滯せんや。假觀の口は淨穢宛然なれども、尙穢を捨てて而も淨を得んと願はするなり。『淨名經』に曰はく、『諸佛の國と及び衆生と空なりと知ると雖も、而も常に淨土を修して群生を教化すと云云。』是を以て閻淨を厭離するに非ず

【五】十章の第五凡聖一心に備はることを證す。

【十界互具】若し十界の各に十界を具せざれば佛は九界に應用を垂れることを得ず、又九界の人成佛することを得ざるべし。故に應用成佛の義は十界互具互融の義に憑ること明かなり。

【普現三昧】佛此三昧に入つて佛れ一切を應現するを言ふ。

【無明住地】根本煩惱たる無明は衆生をして生死に住著せしむるが故に

して而も之を厭離し、極樂を欣求するに非ずして而も之を欣求す。若し空觀相應せずして而も安樂を求めば、全く欣上厭下の觀に同じからんか。故に空なりと雖も而も往生し、往生すと雖も而も空なるのみ。

第五に凡聖一心に備はることを釋せば、往生極樂は成佛の華報、證大菩提は所期の果報なり。先づ苦界を離れて彼淨刹に詣り、深重の罪障を除いて彌陀の尊容を瞻たてまつらんと欲することは、是凡聖一心に在りて機應相請てざることを憑むが故なり。佛陀の九界の妙應を垂れたまへることは本無今有に非ず。衆生の得道の妙機と爲ることは是無始の理具なり。但十界互具せり、誰か機、誰か應ならん。三諦圓融せり、何れか體、何れか用ならん。然るに二にして而も不二なるが故に、實に彼此の差別無しと雖も、不二にして而も二なるが故に、亦機應を論じ體用を辨ず。故に空假の二用は中道の體より開す、則ち機應萬差なれども心性より顯れずといふこと無し。所以に明鏡の萬像を浮ぶるは宛ら心性の三千を現するに似たり。寶珠の七珍を雨らすは定に眞如の諸法を生ずるに同じ。珠の内に寶の性無くんば、何ぞ能く衆寶を雨らさん。彌陀の普現三昧の應用は、體内の三千の性相の外に顯れたるなり。『止觀』に云はく、『若し内に是德無くんば、則ち外に大用無し。外に寄せて内を顯す、其相是の如しと云云。』『弘決』に云はく、『當に知るべし、身土は一念の三千なり。故に成道の時は此本理に稱つて、一身一念も法界に遍すと云云。』無明住地の惑を盡して本覺眞如の理に歸する時には、只是本有の三千を顯はすなり。始めて果位の萬德

【三十七尊】五方  
如來、四波羅蜜、菩薩、十六大菩薩、內外  
の四供養、四攝菩薩。

を得るに非ず。爰に知んぬ。我等が一念の心性に無始より已來三身の萬徳を備ふと云ふことを、『蓮華三昧經』に曰はく、『本覺の心法身に歸命したてまつる。常に妙法の心蓮臺に住したまひ、木より來た三身の徳を具足せり。三十七尊心城に住したまふ。普門摩訶の諸の三昧、因果を遠離して法然として具す、無邊の徳海本より圓滿せり、還つて我心の諸佛を頂禮すと云云。』『般若經』に曰はく、『佛法遙かなるに非ず。心中にして則ち近し。眞如外に無し、身を棄てて何くにか求めんと云云。』『華嚴經』に曰はく、『若し人三世一切の佛を了知せんと欲はば、應に是の如く、心、諸の如來を遇するを觀すべしと云云。』『法華玄』に云はく、『若し衆生に纏在することをと云云。』『淨名經』に曰はく、『諸佛の解脫は當に衆生の知行の中に於て求むべしと云云。』然れども妄想の力強くして之を覺知せず、菩提の中に於て不清淨を見、解脫の中に於て而も纏縛を起せり。彼一心の中の萬徳の性を指して佛性と名け、法身と稱するなり。法身の五道に廻するは蓋し淤泥の中の水濕の如く、佛性の九界に在るは竹木の中の火性の如し矣。凡そ生死の苦を厭ひて涅槃の樂を欣ひ、菩提心を發して佛の加被を蒙るは、是具縛の身中の眞如佛性の力なり。『究竟一乘寶性論』に云はく、『若し佛性無くんば諸苦を厭ふことを得ず、涅槃の樂を求めじと云云。』『弘決』に云はく、『內熏に非ずんば何ぞ能く悟を生ぜん。故に知んぬ、悟を生ずることは力、眞如に在ることと云云。』『大乘止觀』に云はく、『但諸佛同體の智力に護念せらるるが故に、人天の善を

【毗盧】 毗盧舍那  
如來。

【觀音玄】 觀音玄  
義。

修し、善知識に遇うて漸く道心を發すは、即ち是性淨の用なりと云云。一慧に因りて達多  
 が記莖に預りしは遂に阿鼻城の煙焰を出で、龍女が畜趣に沈みしは忽ちに無垢界の寶蓮に  
 坐せり。當に知るべし、佛性内に在るを眞如熏じて之を起すことを。故に釋尊は同體の慈  
 悲をもつて無作の應を垂れたまひしなり。畜生すら猶爾なり、況んや人倫をや。惡逆すら  
 此の如し。況んや信を生ぜんをや。我等彌陀の護念を蒙むることも亦法性の重力に依るべ  
 きなり。善いかなや、此旨を聞きて今既に衣の裏に珠を繋げぬ。何を以てか聖財に乏しと  
 歎げんや。是宿因の催せるを善緣の扶けたるなり。又當に凡下に佛性有るのみに非ず、亦  
 乃ち聖人にも凡性を備へたり。『金鑰論』に云はく、『阿鼻の依正は全く極聖の自心に處し、  
 毘盧の身土は凡下の一念を逾えずと云云。』極聖凡下、因果遙に異なれども既に是一如な  
 り、中間の諸界の機應相近きこと之に準じて知るべし。問ふ、「九界に佛性の性を備へたる  
 が故に、惡を轉じて遂に正覺を成ずといはば、亦佛界に九界の性有るが故に、善を翻じて  
 還つて凡夫と成るべきや。」答ふ、「爾らず。『觀音玄』に云はく、『闍提は性善を了せず、是  
 故に修善還つて起ることを得。佛は能く性惡を了す達したまへり、是故に修惡起ることを得  
 ずと云云。』惡法の源底を體達するが故に聖還つて凡と成らず。幼婉の既に成長せるは還  
 つて水火に迷ふべからざる者をや。」問ふ、「若し爾らば佛地の惡法に何の用か有るや。」答  
 ふ、『義例』に云はく、『佛本性惡の法を斷せざるが故に。性惡若し斷げば普現色身何に  
 従つてか立せんと云云。』誠に利物權道の要は性惡に過ぎたるは無きのみ。是を以て彌陀

【三】道 苦道、煩  
惱道、業道。

【三權即ち一實】  
三權は藏、通、別  
の三教、一實は圓  
教なり。會三歸一、  
三乘即一乘に依る  
が故に三權即一實  
なり。

如來は形を六道に分けて、悉に難化の有情を度し、應を十方に垂れて飽くまで隨類の利生を施したまへることは、只是性徳の善惡俱に法門にして之を斷じたまはざるが故なり。」問ふ、「煩惱、業、苦の三道は衆生の爲には怨なり。彌陀如來は九界の妄染を具し乍ら之が爲に侵害せられたまはず。亦何ぞ還つて利生の方便と爲したまへる。惡を以て惡を治せん」と其理成じ難きをや。」答ふ、「譬へば一の利刀有るを、小兒之を持たば損害を成じ、大人之を得ては常に身體に疵を成せざるのみに非ず、亦能く衆寶の具を造れるが如し。小兒は刀の損益の用を辨へず、大人は能く之を知れるが故なり。凡夫の小兒、煩惱の利刀を持ちて二死の害を成ずることは、煩惱の損益の用を解せざるが故なり。諸佛の大人は常に法身の體を損せざるのみに非ず、亦九界形聲の寶を造れることは、能く惡法を了達したまへるを以つての故なり。『仁王經』に曰はく、『菩薩未だ成佛せざる時は菩提を以て煩惱と爲し、菩薩成佛する時は煩惱を以て菩提と爲すと云云。』妙樂大師云はく、「迷へば則ち三道の流轉、悟れば則ち果中の勝用なりと云云。」煩惱は同じと雖も人に依りて則ち異なり、是煩惱の自體定んで惡なるに非ず。故に我等彌陀の應化の益を蒙らんことは、即ち果地の性惡の力に依るべきなり。仰も九界即ち佛界なるは、福德の人の瓦礫を執りて而も金寶と成すが如く、三權即ち一實なるは、大醫王の毒藥を變じて而も良藥と成すが如し。『弘決』に云はく、『石毒と寶藥と性本不二なれども、人の所感に隨つて各見ところ不同なり。諸法も亦爾なり、本是法界なれども、前三教の人は謂つて苦集と爲す、圓頓の智をもつて照す

【苦集】世間一切の有爲法は皆苦なるを苦諦と云ひ、此苦諦の原因を集諦と云ふ。  
 【道滅】苦界を離るる正行を道諦と云ひ、究竟じて涅槃に入るを滅諦と云ふ。

【六】十章の第六流轉生死の源を知らしむ。

は義之執るが如く、即ち是法界なるは寶等と成すが如しと云云。故に三權に空する所の苦集は、即ち一實に照す所の道滅なり。偏教は理外に諸法を説き、圓頓は體内に三千を談ずるが故なり。問ふ、「心性の理體に凡聖の因果等を具する方云何。」答ふ、「一心に凡聖の因果等を具すとは謂く心即ち是なり。是異體の諸法に於て縱横に之を具するには非ず。『止觀』に云はく、『若し一心より一切の法を生ずとは此即ち是縱なり。若し心一時に一切の法を舍すといはば此即ち是横なり。縱も亦不可なり、横も亦不可なり。只心は一切の法一切の法は心なりと云云。』今此釋文は隨緣不變の意なり。只心は一切の法とは隨緣眞如なり。一切の法是心とは不變眞如なり。『金鍼論』に云はく、『萬法は是眞如なり、不變に由るが故に。眞如は是萬法なり、隨緣に由るが故にと云云。』譬へば一の海水の上に種種の波を揚ぐるが如し。海水に即して而も波なるは豈隨緣眞如の意に非ずや、波を點するに而も海水なるは寔に是不變眞如の理なり。哀しい哉、悲しい哉。不變眞如の海上に煩惱泥濁の波を立てんをや。但し『觀無量壽經』に曰はく、『諸佛如來は是法界の身なり、一切衆生の心想の中に入りたまふと云云。』水精の珠を泥濁の水に入れば即ち澄淨なり。彌陀の水精の珠を我心水の中に入れば煩惱の泥濁自然に澄むなり矣。當に知るべし、性徳を以て之を論すれば凡聖一心に備はれり、修徳を以て之を論すれば機感即ち相關る。旁彌陀の利生を思ふに引攝疑はしからず。永く五道の流轉を離れんことは宜く此時に在るべき耳。第六に流轉生死の源を知らしむとは、凡そ病を治せんと欲せば須く病起の緣を知る



【四倒】非常、非樂、非我、不淨、と計するを四倒といふ。

【頂生】善住王の頂より一の童子生る、之を名けて頂生と云ふ。

【色無色】色界は欲界の上にあつて、婬食の二欲を離れたる人の住所にして、此界の物質的なるものは皆殊妙なりと云ふ。無色界とは只心識のみあつて深禪定に住する世界なり。

べし。生死煩惱の病は其根源云何。『止觀』に云はく、『無明、法性に法つて一心一切心なること彼昏眠の如し、無明即ち法性なりと達しぬれば一切心一心なること彼醒寤の如しと云ふ。』我等何ぞ法性の一心を悟らずして、深く昏眠の一切に迷へるや。倚其山來を思ふに、無始の無明の眠りをもつて本覺の理を覆ひしより以來、法性の一の覺心として二種の生死の夢の一切心と成ればなり。止觀に云はく、『無明癡惑は本覺法性なり、纏迷を以ての故に法性變じて無明と作る、諸の顛倒善不善等を起すこと、寒來りて氷を結び堅氷と作すが如く、又眠り來りて心を纏めて種種の夢有るが如しと云ふ。』一盤に因りて虛妄の夢の中に實有の執を成じ、五塵六欲の境に觸れて四倒三毒の惑を起す、貪欲瞋癡に由るが故に種種不善の業を造り、因果の廻する所生死に輪環す。其流轉の間に難忍の苦を受く。適十善の修因に依りて天趣の中に生ずれば五衰の苦有り、日光の所照に非ずと雖も頭上の華鬘忽ちに萎む、是白業の所感なりと雖も衣裏の塵垢自ら著く。頂生と相戰へる時は只視胸の異のみ有り、退汝の愁へ至りぬれば兩目頻りに向く。殊勝殿の木居も臨命終の時には已に忘れ、喜見城の快樂も億千歳の後には方に絶えなんとす。『正法念經』に曰はく、『天上より退せんと欲する時心に大なる苦惱を生ず。地獄の衆の苦毒も十六にして一にも及ばずと云云。』色無色の中には五衰無しと雖も、皆無常の行苦の爲に遷されて退汝の苦有り。其相知んぬべし。昔五戒を持つに依るが故に今人中に來れり。人中にも亦四苦有り、四苦とは生、老、病、死なり。生苦とは『寶積經』に曰はく、『若は男、若は女、適生れて地に墮

つるに、或は手を以て捧げ、或は衣をもつて承け接ち、或は冬夏の時に冷熱の風に觸るるに大苦惱を受くること生剝の牛の墻壁に觸るるが如しと云云。一誕生の苦患蓋し以て是の如し。老苦とは、『法句經』に「少き時は意の如くならんも老いては階設せらる、老羸れて氣竭なば故を思ふとも何ぞ違はんと云云。』紅蓮玄奘の壯日には衆人競ひて以て善の如くに應じ、霜蓬凍黎の暮年には衆人競ひて以て惡賤す。今に居て古を思ふに落淚潸然たり。奔車は轉じ易く流水は返り難し。力は日を追うて衰へ、氣は時に隨つて減り、諸根者羸して起居易からず、榮望永く盡きて只終焉を待つのみ。病苦とは、一大調はざるに一百一の病あり、四大調はざるに四百四病あり。若は一病にもあれ、若は衆病にもあれ、或は異時、或は同時に、六根を痛ましめ五體を惱ます。華他鷓鴣と雖も醫術に益無きを以て月を逐ひ日を累ねて身心羸劣せり。多年の歡樂を忘却して一時の憂苦に耐へず、父母は涙を流せども救療すること能はず、妻子は悲みを含めども對治するに力無し。決定應受の業は祈請するとも驗を得難し。『止觀』に云はく、『先罪の禍を招くことを推せずして、而も善を修すれども酬無しと言ひて大邪見を起す。又身を惜み命を養つて魚肉、乾、酒、非時無度なり。或は病差えて身壯なれば五欲に情を恣にして、善心都て盡きて惡業熾盛なりと云云。』一病痾の身を侵すは宿業の致す所なり、之を除かんと欲せば罪根を懺悔すべし。猶樹の根を絶たば百枝悉く枯るるが如くなるのみ。先罪を推せずして邪見を起し、病に依りて彌惡業熾盛なるものは是因果を檢無する一闍提の人なり。身心に病有らば五陰八苦

【四弘】衆生無邊  
誓願斷、煩惱無數  
誓願斷、法門無盡  
誓願成、佛道無上  
誓願成の四弘誓願  
を云ふ。

【普賢の十願】華  
嚴經普賢行願品に  
出づ。

の身を棄てんことを喜び、尋常に平復せば宜しく四弘六度の行を積むべし。若し爾らば病に沈みても、彌善根を長じ、病を差しても倍功德を増さん。分段血肉の身を捨てて内外清淨の土に生れんこと、此時に競はずんば將に何れの生をか期せんや。若し此の如く觀ぜずんば唯今生に病惱を受くるのみに非ず、更に亦來世にも重苦に遇はん。死苦とは「弘決」に云はく、「人の命盡きなんと欲する時、必ず業力の散風の爲に解かる。體囊を解くが如く、息風をして續かさらしめ、溝瀆を解くが如く、血脈をして流れさらしめ、機關を解くが如く、筋節をして應はざらしめ、火炬を解くが如く、煙氣をして滅盡せしめ、坏器を解くが如く、骨肉をして分離せしむ。四大既に分れなば應に塗炭に遇ふべし。如何ぞ端拱して善本を修せざらんやと云云。」普賢の十願に云はく、「臨命終の時、最後の刹那には一切の諸根悉く皆散壞し、一切の親屬悉く皆捨離し、一切の威勢悉く皆退失し、輔相大臣、宮城内外、象馬車乘、珍寶伏藏、是の如き一切復相隨ふこと無し。唯此願王のみ相捨離せずと云云。」寶積經に曰はく、「父母兄弟、及ぶ妻子舅友、僮僕並に珍財、死し去れば一りも來り相親しむもの無し。唯黒業のみ有りて常に隨逐すと云云。」止觀に云はく、「四方に馳求して貯積聚斂す。聚斂未だ足らざるに濫然として長く往かば所有の產貨徒に前の有と爲り、冥冥として獨り逝く、誰か是非を言はん」と云云。「死とは是天に終へるの別れにして、只波の返らざるが如し。長夜に一づ去りなば何れの口か再會せん。凡そ生死無常は貴賤上下を擇ばず、老少中年をも簡ばず。而るに世人の愚なる、老少不定

【華嚴經】佛說華嚴經教化地獄經。

【多百踰繕那】瞻部洲の下、五百由旬を経て其獄あり故に多百と云ふ踰繕那は四十里を以て一踰繕那とす

の境に於て千秋萬歳の執を成し、只財位の分に踰えんことを望みて業樂の終有らんことを知らず。『罪業應報經』に曰はく、『日出でて須臾に没り、月滿ちて已に復缺く。尊榮高貴の者も無常の速かなること是に過ぎたりと云云。』生者必滅の理を忘れて偏に五欲の爲に使はるる者は、五欲の業み既に極むるすら、留めて尙從へざれば冥途には益無し。何に況んや貪海流を呑みて東西に馳走し、聚斂未だ足らざるに濫然として永く逝きぬるをや。譬へば微牛の車を駕するに身疲れて死するが如し。口には他の無常を談れども更に我身を顧みず、無常の轍は骨髄に徹すれども心馬は正路に越かず。常住不變の思を存すと雖も、自然に必滅の理に歸す。手を昏くの期に至り、目を瞑るの趣みに臨みては、諸根散壞して其用を施さず。眼に諸方の色を見ず、耳は善惡の聲を聞かず、鼻根に香臭を辨へず、舌根に甘苦を覺えず。身は常に黏じて舉動せず、心は轉惶して了知すること無し。留むれども而も留まらず。魂去りて眼閉づ。惜めども而も惜まれず。出入の息絶えぬ。其時に當りては夫婦の死を並べしも長れて自ら遠ざかり、眷屬の膳を拏げしも饑りて近ぶかず。最後の誼には只荒原に送り終らんのみ。屍は空しく墳墓の下に埋もれ、魂は獨り娑羅の廳に往かん。平生の諸佛菩薩の願王を憑めば唯此願王のみ捨離したまはず。在世に殺、盜、姪等の業を營めば、唯黑業のみ有りて常に隨逐す。善惡の業の外には全く餘の伴無し。哀憐を垂れし父母兄弟も從ひ來る者無く、我有と憶ひし綾羅錦繡も徒に他の寶と爲んぬ。冥冥として獨り逝く、誰か是非を訪はん。多百踰繕那の洞然猛火に投ぜらるる時には、至孝

の子も苦に代らず、多年の友も問ひに往かじ。四大未だ分離せざるの前に、終に務めて善本も修せずんば、最後の刹那には必ず此苦に嬰りなん。龍樹の云はく、「夫衆の惡を造るに即ち報ゆには不ず、刀劍の交へて傷ひ割く如くに非ざれども、臨終に罪相始めて俱に現じ、後に地獄に入りて、諸の苦に嬰ると云云」。即時に其酬い無きに驕りて恣に惡業を造ること莫れ。罪相は臨終に始めて顯現す。春種を下して秋實を得るが如し。平生に善根を修すれば最後に大いなる善有ること、之に翻じて知んぬべし。憍慢勝他の業は阿修羅道に墮つ。天帝と闘つて常に怖畏を懷く、雷鳴を謂ひて天の鼓と爲し、龍雨は變じて刀劍と成る。日日三時の苦は自ら來りて相逼害す。愚癡無智の者は畜生道に生在す。若は大小、若は強弱、互に自類を食噉す。或は繫縛を被り、或は鞭撻を加へらる。加之、明珠羽角有れば之を食つて殺され、骨毛皮肉有れば之が爲に害せらる。但水草を念じて餘は知る所無し。饑貧嫉妬の因は餓鬼飢饉の苦を受け、一萬五千歳までも飲食の名をすら聞かず。山に入りて菓を拾はんと欲すれば變じて鐵丸と成り、河に臨んで水を掬はんと欲すれば化して猛火と成る。或は子を屠りて命を續ぎ、或は腦を碎いて身を扶く。血肉の身の痛まざるには非ず、將に身命を存せんとするに餘の計無きが故なり。子を慈しむの心の深からざるには非ず、將に飢饉を止めんとするに他の資無きが故なり。『瑜伽論』に云はく、「口は針の孔の如く、腹は大山の如し。縱ひ飲食に逢ふとも之を噉ふに由無しと云云。『瞋恚熾盛なるものは地獄道に往く。地獄に多種あり。暫く無間の相を明さば縱廣幾何ぞや。八萬

【八萬由旬】一由旬は三十里亦は四十里の里程なり。

【阿防羅刹】阿防の暴惡にして怖るべきこと羅刹の如くなれば斯く言ふ阿防とは閻羅王の徒衆を言ふ。

【生蘇】五味の一

由旬なり。上には七重の鐵網を覆ひ、下には七重の鐵牆を隔て、中には猛火を滿てて少しも間隙無し。凡て八方上下、一切唯火焰のみなり。自身よりも猛火を出し、他身よりも猛火を出して互に相燒害すること乾草を燒くが如し。四の角に四の銅狗有りて、身の長四十由旬なり。毛孔より炎を出すに猛火彌熾にして、其煙の臭惡なること譬を取らんに類無し。四萬四千の大蛇有りて、毒を吐き火を吐きて城中に滿てり。其蛇の吼る聲は百千の雷の如し。十八の獄卒有りて頭に八の牛頭有り。六十四の眼より鐵丸を迸散し、角の頭より炎を出し、牙の上より火を流し、一切の猛火併せて鐵城の中に聚集す。縱人間の火ならば、海水を傾けても則ち滅すべし、是は惡業の火なるが故に、人力の及ぶ所に非ず。異人惡業を造りて異人苦果を感ずるに非ず。自業の招く所大苦惱を受く、譬へば夜蛾の燒けんことを知らずして火を愛して繞ひ入り、春蠶の煮らるることを知らずして桑を食みて自ら纏ふが如くなるのみ。『正法念經』に焦熱地獄を説きて云はく、『若し此獄の豆許りの火を以て閻浮提に置かば一時に焚け盡きなん。況んや罪人の身の輒らかなること生蘇の如くなるを長時に焚燒せば豈忍ぶべけんやと云云。』焦熱の火すら猶爾り。何に況んや無間をや。其餘の地獄の苦は無間よりも劣れりと雖も、見聞覺知の境界は猶皆受苦の根源なり。櫻梅の目を悦ばしむる無く、只劍樹の身肉を碎くのみ有り。泉水の心を養ふ無く、只銅湯の骨髓に徹するのみ有り。妻子眷屬の仁義の姿を見ずして、唯阿防羅刹の怒れる形を見る。朋友知識の柔輒の語を聞かずして、唯牛頭馬頭の惡める聲のみを聞く。黑繩地獄の獄卒は罪

【人我】人身の中  
に常一主宰の實體  
の我ありと執する  
謬見。

【身見】五陰の身  
に主宰を立つる邪  
見。

【七】十章の第七  
出離生死の觀を教  
ふ。

【見思塵沙】道理  
に迷ふ煩惱を見惑  
と云ふ、事物に迷  
ふ煩惱を思惑と云  
ひ、菩薩の化道に  
起る惑障を塵沙惑  
と稱す。

【寂靜の門】一切  
の諸法は本來寂靜  
なるが故に一切法  
を寂靜門と言ふ。

人を呵責して云はく、「心は是第一の怨なり、此怨最も爲惡なり、此怨能く人を縛して、送つて閻羅の所に到らしむ。汝獨地獄に焼かるるは惡業の爲に食はるるなり。妻子兄弟等の親屬も救ふこと能はずと云云」。罪人此呵責の聲を聞くに、道理に逼められて陳べん所を知らず。龍樹の云はく、「若し復人有りて一日の中に三百の矛を以て其體を鑽らんを、阿鼻地獄の一念の苦に比ぶるに、百千萬分にして其一にも及ばずと云云」。若し人病を瘥さんが爲に、一處に灸針を加ふる片時の苦患すら猶心肝を割く。況んや多百千歳の間皮剝燒煮の害に預からんこと、寧ろ忍びんや否や。又堪へんや。何。凡そ此の如き多劫海の流轉生死の苦は、元初の無明の闇識昏眠に由るなり。『止觀』に云はく、「無始より闇識昏迷にして、煩惱に醉はされ安りに人我を計す。人我を計するが故に身見を起す、身見の故に妄想顛倒す、妄想顛倒の故に貪瞋癡を起し、癡の故に廣く諸業を造る、業は即ち生死に流轉すと云云」。是則ち生死に順じて流轉するの根源なり。

第七に出離生死の觀を教へんとは、何なる善巧方便を廻してか生死の輪廻を出離すべき。謂く無明の根本を觀じて生死の枝條を絶つべきなり。所以に中道の藥の府藏を以て無明の病の淵源を治せば、見思塵沙の流竭きて五逆十惡の條枯れなん。惡業煩惱滅しなば永く生死の苦を受けじ。其淵源を治する方云何。謂ゆる我心自ら空なれば罪福に主無しと觀するなり。『止觀』に云はく、「貪欲、瞋、癡の心を了達するに皆是寂靜の門なり」と。弘決に云靜の門とは心を觀するに由るが故に通じて寂靜に至る。是故に諸心を寂靜の門と爲すと。何を以ての故に。貪瞋若し起らば何處に在りて

【分段變易】三界の生死流轉の身果報に分段の生死と言ひ、外淨土の果報にして見思を斷じたる阿羅漢以上の聖者の生死を變易生死と言ふ。

【梨耶】阿梨耶識は八識中の第八識にして有情の根本心識なり。  
 【六識】眼、耳、鼻、舌、身、意の六種の識。  
 【七識】無始以來常に第八識を了別して我痴、我見、我慢、我愛を思量する識を云ふ。  
 【三因佛性】緣因佛性、了因佛性、正因佛性。  
 【一乘の教】法華の教。

か住する。知んぬ、此貪瞋は妄念に住す、妄念は顛倒に住す、顛倒は身見に住す、身見は我見に住す、我見は則ち住處無し。十方に諦かに求むるに我は得べからず。弘決に云はく、始の妄計假名なり」と。我心自ら空なれば罪福に主無し。深く罪福の相に達して遍く十方を照す、此空慧と心とを相應せしむるに、譬へば日の出づる時朝露一時に失ゆるが如しと云ふ。「弘決」に云はく、「昔無住より我見乃至貪瞋を起せり。今却つて貪瞋を推して無住の處に至る。根本既に去れば枝條自ら傾くと云ふ。」當に知るべし、我心とは無始の無明の眠心なることを。眠心は覺心に依る、故に覺心は是實なり、眠心は是空なり。眠心既に空なれば眼夢の所見豈に實ならんや。無明の眠心は即ち中道第一義空なれば、分段變易の二種の生死の夢何ぞ有らんや。能生の我心を觀するに主無きが故に、所生の罪福も亦主無し。罪福に主無ければ諸法皆空なり。「弘決」に無住と云へるは中道の無性なり。中道の無性に迷つて梨耶の妄我を生じ、梨耶の一念より六識七識を生ず。流に逆つて源に歸らば、亦中道の無性に至る。中道の無性は即ち佛種なり、佛種とは三千即空、即假、即中の性なり。是性は是則ち三因佛性なり。而るに三千理に在るを同じく無明と名づけ、三千果を成ずるを成く常樂と稱す。佛種を起し常樂の果を得んと欲はば、須く一乘の教をもて無生の觀を習ふべし。故に介爾の安心若し起らば、次第に之を尋ねて空寂に歸せしむ。『菩提心論』に云はく、「安心若し起らば知つて而も隨ふこと勿れ、妄若し息む時は心源空寂なりと云云。」又三千の諸法は無始の一念の無明に在りと知つて、總じて空假中と觀するは是一心



【不思議境】吾人現前刹那の妄心は現前三諦なる妙觀を言ふ。

【四悉】世界、爲人、對治、第一義の四種の悉檀、佛此四法を以て徧く衆生に施す故に悉檀と言ふ。  
【三障】煩惱障、業障、報障。  
【四魔】蓋魔、煩惱魔、死魔、天魔。  
【四住】見惑を一住とし、思惑を開いて三住となす。

三觀なり。一家所立の不思議境は、一念の中に於て理に三千を具す。故に一念の中に具に因果、凡聖、大小、依正、自他有り。而るに此三千の性は中理なり。一念所具の百界三千は更に互に一に越く。是越過ぎず一念の三千なれば、性相無生にして、一念行りと雖も而有ならず。三千存すと雖も所有無し。一念の三千なれば共じて而も雜ならず。一念の三千なれば離れて亦分たず。彼彼の一念、彼彼の三千、法界に遍すと雖も亦所在無し。偏に有なるべからず、偏に無なるべからず、唯は不思議の一實中道なり。雙非は二邊を亡ずれども、雙照は恆に空假を存す、空假を存すと雖も中道を離るること無し。猶水結して氷と成るに、氷を離れて氷無きが如し。水に非ずして而も氷有りといはば終に是處有ること無けん。是一家終窮の極說にして、思量分別の解する所に非ず。故に淨名居士は口を杜ぎ、滿願尊者は默然す。但し一實中道の理は思慮の處亡すと雖も、四悉隨緣の教は亦言說に依つて之を顯す。故に天台、妙樂の釋の意を取りて、三諦の觀解を扶けんと欲す。三障四魔の難を離れんこと、此妙觀の力に依る可ければなり。凡そ法界洞朗にして如來藏の理に非ずといふこと無し。而るに我等無始より今日に至るまで凡夫具縛の身にして、如來藏の中に在りて而も覺らず知らず、行住坐臥に理の爲に傷らるること。譬へば大に富める盲兒の寶藏の中に坐するに都て所見無くして、動轉筆礎すれば寶の爲に傷けらるるが如し。二乘は明かに藏理を見ること能はずして、之を謂つて四住とすること、譬へば眇目の明かに珍寶を見ずして誤つて鬼虎龍蛇と謂へるが如し。二乘の眇目は明かに藏理の珍寶を見ずし

【三智】道種智、一切智、一切種智

【阿字不生】梵語の阿字は一切字の元初にして、因縁所生の法にあらず、本来不生のものなり。

【三密同體】身密語密、意密は迷悟に依らず一體不二なり。

【玄樞】中觀と百門の宗旨を明す。

【六即の位】理即名字即、觀行即相似即、分眞即、究竟即の六位を説く。

【六即の位】六は差別の一面を説し、即は圓融を表す。

て、謂つて四住の鬼虎等と爲して棄背馳走し、躑躅辛苦す。唯圓實の菩薩のみ種智明眼を得て、四住の龍蛇等の體是如來藏理の寶なりと知れり。如來藏理とは、大師釋して云はく、「一念の心即ち如來藏の理なり、如の故に即空なり、藏の故に即假なり、理の故に即中なり。三智一心の中に具して不可思議なりと云云。」是則ち一心三諦を如來藏理と稱するなり。

一心三諦、大略斯の如し。具には第二章の如し。委しく記するに迫あらず。亦是眞言秘密教の阿字不生の意なり。本不生とは詞の端なり。阿字に三諦の義有り。故に無畏、不空の三密同體の説は、南岳、天台の三密一心の宗なり。顯密異なりと雖も二趣惟れ同じ。

一心三諦の中に、殊に心を第一義空に繋ぐべし。凡夫の迷情は深く妄我の有執に封ぜらるるが故なり。「玄樞」に有る頌を引いて云はく、「人生きて百歲までも出多く放逸ならんよりは、一日なりとも心を空寂に歸せんには如かじと云云。」是を以つて或時は無始の無明の源底を覆達し、或時は見思の曇惑の末流を照了して、妄想の雲霧を拂ひて心性の月輪を顯はすべし。是を即身成佛と名く。

成佛に六即の位有り。謂く、理即、名字、觀行、相似、分眞、究竟なり。「止觀」に云はく、「譬へば貧人家に寶藏有りて、兩るを知る者無し。知識之を示すに、即ち知ることを得、草稿を耘除して之を掘出し、漸漸に近づくことを得、近づき已つて藏を開けて、盡く取りて之を用ふるが如し。六のたとへを合せて解すべしと云云。」弘法に云はく、「家に寶藏有るは理即なり。知識之を示すは名字

【大經】 大般涅槃經の略

【孔丘】 孔子なり

【八】 十章の第八空觀を修して懺悔を行ぜしむ

即なり。案牘を掃除するは觀行即なり。漸漸に近づくことを得るは相似即なり。近づき已つて識を聞くは分眞即なり。盡く取りて之を用ふるは究竟即なりと云云。「大經の貧女の醫の意なり。是を直至道場と名く。實に醫中の明珠なり、亦無上の寶聚なり。彌陀の名字の所詮、往生極樂の指南なり。諸を忽せにすること莫れ。但し下劣の根機は幽微の理を聞かば毀替する者有らん、嘲弄する者有らん、或は聞くに驚く、或は眼を増さば、其時に應に此念ひを作すべし。我に無明の毒氣深く入りて妙法の良藥に堪へざるなり」と。縦ひ心に順ぜずと雖も遂に巨益有るべし。孔丘の云はく、「良藥は口に苦くして而も病に利行り、忠言は耳に道へども而も行に利ありと云云」。俗典すら斯の如し、佛教之に准す。凡て三世の諸佛の說法、十方の居士の弘經、偏に一心三諦を以て最要と爲したまへることは、衆生の出離生死の根源なるが故なり。三教の權門は助道の方便なるのみ。

第八に空觀を修して懺悔を行ぜしむとは、以前の觀門を修するに罪業として殘ること無しと雖も、而も妄情平つて擴くして猶常に有に迷はん。故に重ねて萬法皆空の理を明して無始已來の罪根を懺悔せしめん。凡そ業罪を懺悔するの要は、理性の空を觀するに如くは莫し。若し爾らば云何が之を觀ぜんや。謂く自他共、無因の四性を以て諸法を推檢するに而も不可得なり。眠心の共離を以て夢を推するに不可得なるが如し。「止觀」に云はく、「若し心に依つて夢有らば眠らずとも應に夢有るべし、若し眠に依つて夢有らば死人の眠れるが如きも應に夢有るべし。若し眠と心と兩つ合して夢有らば、眠れる人那ぞ夢みざるの

【三種の愛】境界愛、自體愛、當生愛。  
 【法華三昧】三諦圓融の理分明にして中道の慈悲息するを言ふ。

時有らん。又眠と心と各夢有らば合しても夢有るべし。各既に夢無くんば合しても有るべからず。若し心を離れ、眠を離れて而を夢あらば、虚空の二を離れたるも應に常に夢なるべし。四句に夢を求むるに皆不可得なり、云何が眠夢に於て一切の事を見んやと云云。諸法も亦爾なり。法性の心より生ぜず、無明の眠よりも生ぜず、共じても生ぜず。離れても生ぜず。故に『中論』に云はく、『諸法は自生ならず、亦他よりも生ぜず、共ならず、無因ならず、是故に無生と説くと云云。』龍觀の心、所縁の境、一切皆是の如し。尋常の時に空觀を修習せずんば、瞑目の剋に三種の愛を治し難からん。穢土の執を遣りて淨國の生を受けんことは、偏に空觀の力に依るべきなり。是觀無生の懺悔なり。是法華三昧の行法なり。造次圓沛にも餘念を離へずして、或は譬を空華に取り、或は思を谷響に寄せて、靜に之を案じ、苦に之を觀するに、實に一切の諸法は有にして而も有ならざること旋火輪の如く、有ならずして而も有なること乾闥城の如し。而るに森羅の萬法は心を以て主と爲す。心有なるを以ての故に一切皆有なり。心空なるを以ての故に一切皆空なり。心の有無を尋ねて妙觀に入るべきなり。『法華云に云はく、『心は幻炎の如し、但名字のみ有り、之を名けて心と爲す。適其有りと言はんとすれば色質を見ず、其無しと言はんとすれば復慮想を起す。有無を以て思度すべからず。故に心を名けて妙と爲すと云云。』今心の體木より來た空寂なることを識りて、有に執せしに依りて造りし所に業を悔いよ。所以に實有と執するが故に五欲の境に在り。『心地觀經』に曰はく、『心は猿猴の如し、五欲の樹に遊んで暫く

【一色一香】極く  
其細なもの意。

【未曾有經】十二  
部經の一。又は一  
卷失譯。

も住せざるが故に。心は僮僕の如し、諸の煩惱の爲に策も役はるるが故にと云云。『煩惱に使はるるに依つて十惡五逆を造る。六情根の所犯の罪二十五有に満満す。三途八難も中に經ずといふことなし。輪廻の無量の業は皆自心より生ず。故に心は生死の根本、衆苦の源なり。』普賢觀經に曰はく、『釋迦牟尼を毘盧遮那遍一切處と名け、其佛の住處を常寂光と名くと云ふ。』寂光は理通ぜり、鏡の如く器の如し。諸士は隔異せり、像の如く飯の如し。當に知るべし、諸法の影像是寂光の理鏡なり、一色一香も中道に非ずといふこと無し。而るに妄想分別して諸の熱惱を受く、今鏡體の明徹なるを覺つて影像の假有なることを憤せざれ。重慚愧を生じて發露懺悔すれば惡業煩惱一時に消滅す。『心地觀經』に曰はく、『是の如き心法は本有に非ず、凡夫は執迷して無に非ずと謂へり。若し能く心の體性は空なりと觀すれば、惑障生ぜずして便ち解脱すと云云。』上に引く所の文に曰はく、『此空慧と心とをして相應せしむれば、譬へば日の出づる時朝露一時に失ゆるが如しと云云。』罪業は無始より積聚すと雖も、一の空觀の力然らしむるなり。千歳の闇室に一燈を挑げたるの時に衆闇悉く除かるるが如し。未曾有經に曰はく、『前心に惡を作るは雲の月を覆ふが如く、後心に善を起すは炬の闇を消すが如しと云ふ。』又嚴冬の氷厚しと雖も春風吹きて之を解き、寒夜の霜深しと雖も朝日照して之を消す。觀無生の懺悔も亦復是の如し。故に『普賢觀經』に曰はく、『衆罪は霜露の如く、慧日能く消除す。是故に應に至心に六情根を懺悔すべしと云云。』是を大懺悔と名け、莊嚴懺悔と名け、無罪相懺悔と名づ

【寶所】五百由旬  
の究竟地を寶所と  
稱す。

け、破壊心識懺悔と名くるなり。『心地觀經』に理の懺悔を明して云はく、『一切の諸の  
罪性は皆如なり。顛倒の因縁は妄心より起る。是の如きの罪相は本來空なり、三世の中に  
所得無し、内に非ず、外に非ず、中間にも非ず、性相如如にして俱に動ぜず、眞如の妙理  
は名言を絶す。唯聖智のみ有りて能く通達す。有に非ず、無に非ず、有無に非ず、有無な  
らざるにも非ず。名相を離れ、法界に周遍して生滅無し。諸佛は本來同一體なり、唯願く  
ば諸佛、加護を垂れて能く一切顛倒の心を滅せしめたまへ。願くば我早く眞性の源を悟  
りて、速かに如来の無上道を證せんと云云。』今此理の懺悔を行ずるは則ち眞に念佛三昧な  
り。『佛藏經』の念佛品にはばく、『所有無しと見るを名けて念佛と爲す。諸法の實相を見  
るを名けて念佛と爲す。分別有ること無く、取ること無く、捨つること無きは是眞の念佛  
なりと云云。』前後に明す所の中道第一義等の觀、悉く皆「是の如き懺悔に何の勝徳か有  
る」。答ふ、「心地觀經」にはばく、『在家は能く煩惱の因を抜き、出家も亦清淨の戒を破  
る。若し能く如法に懺悔する者は、所有の煩惱悉く皆除くことと云云。』懺悔は能く三界の  
獄を出で、懺悔は能く菩提の華を聞き、懺悔は能く佛の大圓鏡を見、懺悔は能く寶所に至  
ると云云。』此懺悔を修すれば、心流水の如くにして法の中に住せず。六根の罪垢を洗除し  
て身心清淨なり。『大論』にはばく、『念想の觀已に除り戲論の心皆滅すれば、無量の衆罪  
除かれて清淨の心常一なり。是の如き尊妙の人は則ち能く般若を見ると云云。』一念の  
中に諸法を照了して、受けず、著せざれば、是則ち能く般若を見るなり。此因縁を以て三

【九】十章の第九  
眞正の菩提心を發  
さしむ。

昧と相應することを得。三昧力の故に即ち普賢、文殊、觀音、勢至及び釋迦、彌陀等の十方の諸佛の摩頂說法したまふを見たてまつり、一切の法門悉く一念の中に現す。譬へば明鏡動ぜざれば色像分明なり、淨水波無くんば魚石自ら現するが如し。誰か是の如きの法を聞きて菩提心を發せざらん、彼不肖の人と癡冥無智の者をば除く。

第九に眞正の菩提心を發さしめんとは、往生極樂の業因は菩提心を根本と爲す。『安樂集』に『大經』を引きて曰はく、『凡そ淨土に往生せんと欲はば、要す、須く菩提心を發すをもつて源と爲すべしと云云。』當に知るべし、菩提心は是欣求淨土の綱要なることを。若し兩らば云何が之を發さんや。『止觀』に云はく、『眞正の菩提心を發すとは、既に深く不思議境を識りて一苦一切苦を知り、自ら昔の苦を悲しむ。惑を起して塵弊の色聲に耽溺し、身口意に従つて不善の業を作し、惡趣に輪環して諸の熱惱に嬰り、身苦しみ心苦しみて而も自ら毀傷しき。而るに今還つて以て愛の鹽に自ら纏はれ、癡燈に害せらる。百千萬劫にまで、一に何ぞ痛ましき哉。設使三途を捨てんと欲して五戒十善を欣へども、相心に福を修すれば市易博換の如く、翻つて更に、罪を増すこと魚の筍口に入り蛾の燄中に赴くに似たり。狂計邪點にして途迷ひ途遠し。自ら惟みるに此の若し、他を悲しむこと亦然なり。即ち大悲を起して兩誓願を興す。衆生は無邊なり誓願して度せん。煩惱は無邊なり誓願して斷ぜん。衆生は虚空の如しと雖も如空の衆生をば度せんと誓ひ、煩惱は所有無しと知ると雖も無所有の煩惱を斷せんと誓ふ。衆生は數甚だ多しと知ると雖も、而も甚多の

衆生を度せん。煩惱は邊底無しと知ると雖も、而も無邊底の煩惱を斷ぜん。衆生の如きは佛の如の如しと知ると雖も、而も佛如の如き衆生を度せん。煩惱は如實の相なりと知ると雖も、而も如實の相の煩惱を斷ぜん。何となれば、若し但苦の因を抜きて苦の果を抜かざれば此誓、毒を雜せり。故に須く空を觀すべく、若し偏に空を觀すれば則ち衆生の度すべきを見ず。是を空に著する者と名く。諸佛も化せざる所なり。若し偏に衆生の度すべきを見れば即ち愛見の大悲に墮す。解脫の道に非ず。今は則ち毒に非ず、僞に非ざるが故に名けて眞と爲す。空の邊に非ず、有の邊にも非ざるが故に名けて正と爲す。鳥の空を飛ぶに終に空に住せざるが如く、空に住せずと雖も跡尋ぬべからず。空なりと雖も而も度す、度すと雖も而も空なり。是故に誓つて虚空と共に闘ふ、故に眞正の發菩提心と名く、即ち此意なり。又不思議の心は一樂心一切樂心なりと識る。我及び衆生に昔樂を求むと雖も樂の因を知らず、瓦礫を執して如意珠と謂ひ、妄に螢光を指して呼びて日月と爲るが如し。今方に始めて解しぬ、故に大悲を起して兩誓願を興す。謂く、法門は無量なるも誓願して知らん、無上の佛道を誓願して成ぜんと。法門永寂なること空の如しと知ると雖も、永寂を修行せんと誓願す。菩提は所有無しと知ると雖も、無所有の中に善故らに之を求む。法門は空の如くにして所有無しと知ると雖も、畫續もて虚空を莊嚴せんと誓願す。佛道は能成所成に非ずと知ると雖も、虚空の中に樹を種ゑて花菓を得しむるが如くにす。法門及び佛果は修に非ず、不修に非ず、證に非ず、得に非ずと知ると雖も、證得する所無きを以



て而も證し、而も得ん。是を偽に非ず、毒に非ざるを名けて眞と爲す、空に非ず、見愛に非ざるを名けて正と爲すと名く。此の如きの慈悲誓願は、不思議の境智と前に非ず、後に非ず、同時に俱に起る。慈悲は即ち智慧、智慧は即ち慈悲なり。無縁無念にして普く一切に覆ひ、任運に苦を抜き自然に樂を興ふ。毒害に同ぜず、但空に同ぜず、愛見に同ぜず、是を眞正、發心の菩提我と名くと云云。一圓の菩提心は其義是の如し。又聞會の意を以て重ねて之を助釋せん。不思議境を識りて菩提心を發すれば、一切の諸法は悉く是佛法なり。但其心を閉すれば境として轉ぜずといふこと無きが故なり。是を以て南樓の秋月を望みても眞如の本宮に列りぬべく、金谷の春花を翫びても將に寂光の理土に還りなんとす。同願の行を立つる人は、造境即中と觀するに一法として法性を出たる者を見ず。誠に祕密の奥藏、圓極の沖微なる者なり。達悟の體一にして修性不二なり。修に於て性を照せば煩惱即ち菩提なり。性を以て修を了すれば生死即ち涅槃ならんのみ。凡そ縁を法界に繋げ、念を法界に一にせば、一色一香も中道に非ずといふこと無し。已界及び佛界、衆生界も亦然なり。陰入皆如なれば苦として捨つべき無く、無明寧勞即ち是菩提なれば集として斷ずべき無し。邊邪皆中正なれば道として修すべき無く、生死即ち涅槃なれば滅として證すべき無し。苦無く、集無きが故に世間無し。道無く、滅無きが故に出世間無し。純一實相にして、實相の外に更に別の法無し。法性寂然なるを止と名け、寂にして而も常に照すを觀と名く。初後と言ふと雖も、二無く、別無し。問ふ、「煩惱即菩提、生死即涅槃にして

【六凡四聖】地獄餓鬼、畜生、修羅人、天の六界は六凡、聲聞、緣覺、菩薩、佛の四界は四聖なり。  
 【無漏の業】煩惱の穢垢なき淨業。

二無く、別無くんば、斷惑證理すべからず。若し前らば大乘上慢の見到同んからん。答ふ、「法性寂然の故には、生死涅槃に理性二無く、寂而常照の故には、五住二死嘗て混濫無し。止觀の解を得て能障の惑を除くは、是則ち斷惑證理なり。只邪執を翻じて諸法を體達せよ。『止觀』に云はく、『止は能く諸法を寂す、病を灸するに穴を得れば衆患悉く除くるが如し。觀は能く理を照す、珠玉を得つれば衆寶皆獲るが如しと云云。』今止觀並べて存す、上慢に墮すべからず。眞如の淨心、寂にして而も理を照すの日は、染淨の縁に隨ふが故に六凡四聖と成る。『大乘止觀』に云はく、『譬へば金の蛇を見て、是金を打つて作れりと知んぬれば、即ち蛇の體純らば調柔の金なりと解す、復金は匠に隨つて蛇蟲の形と作ることを得と念はば、即ち蛇體の金は匠に隨つて佛像とも成ると知るが如し。藏心は眞金の如く、違順の性を具足せり。能く染淨の業に隨つて凡聖の果を顯現す、出因縁を以ての故に、速かに無漏の業を習うて清淨の心に重し、疾く平等の徳を成ぜよ。是故に即時に於て輕しく自身を御すること莫く、亦他を賤しむること勿れ。終に俱に成佛するが故にと云云。』心體は自性清淨なれども、染業の重習に覆はれたり。所以に六道の心相に汙さるるが故に、心性の眞金も形色を異にす。今諸佛金匠の教に隨順して、自心の調柔の金を顯さんと欲するに、功徳の性の顯れざるに依つて、自身を輕んじ他人を賤しむべからず。鏡は本明淨なれども塵積るが故に闇し。闇きを以ての故に鏡を賤しむべからず、之を磨く時は明らかなることを得るが故に。是を以て想を心鏡の明に繋けて煩惱の客塵を拂ふべきなり。」

【般若解脫の徳】  
法相を實の如く覺  
了するは般若の徳  
一切の繫縛を離れ  
て自在を得るは  
解脫の徳なり。之  
に佛の常住不滅の  
法性を身とする法  
身の徳を加へて三  
徳と言ふ。

【四重曼荼羅】大  
曼荼羅、三摩耶曼  
荼羅、法曼荼羅、  
羯磨曼荼羅。  
【二十七尊】金剛  
界曼荼羅の主勝會  
第一根本成身會中  
の五佛、四波羅蜜  
菩薩、十六大菩薩  
内外の四菩薩、四  
攝菩薩を合して三  
十七尊と言ふ。

問ふ、「何が故に強ひて心性の法身を顯さんと欲するや」答ふ、「法身の理を顯さんと欲するは、般若解脫の徳を得んが爲なり。譬へば鏡を磨き明を得て影を寫さんとするが如し。法身の鏡を磨くことは報身の智慧の明を得んが爲なり。智慧の明を要することは應用の影を寫さんが爲なり。心性の三身我身内に備はれることは、未だ磨かざる鏡に明と像との性あるが如し。而るに彌陀は明鏡の如し、修に之を顯したまへるが故に。衆生は闇鏡の如し、性に之を具するが故に。明闇異なりと雖も鏡體は惟れ同じ。之を悟るを出纏眞如と名け、之に迷ふを在纏眞如と名く、迷と悟とは是時用差別すれども心性は而も常に不二なり。故に恆沙の果徳をも我心の中に求むべし。是を以て經に曰はく、「無邊の徳海木より圓滿せり、還つて我心の諸佛を頂禮したてまつると云云。」具には上に之を引くが如し。眞言宗の四本より述べるるの儀式は、前貧女が家に無量の伏藏あることを知らず、日夜他の寶を數ふるも自ら半錢の分無し。故に彌陀の色相莊嚴を念じても、方に我心と別無しと觀すべし。夫能念所念は性空寂なり、不二にして而も二なれば思議し難し。我此心性は帝珠の如くにして三寶は我心中に影現す。其三寶とは、心體の覺知を佛と名け、心體の染を離るるを法と名け、心體諍ひ無きを僧と名く。是一體の三寶なり。凡聖の始終に此三具足せり。實に亦三寶あり、別相の三寶、住持の三寶、一體の三寶なり。一體の三寶とは一の心性に於て三義を立つ、佛性に二無きが故に一體と云ふ。別相、住持は功一體に由るのみ。一體の三寶を念するに、心性帝珠の如くにして釋迦彌陀等悉く現じて我心に入り同一無二なり。我等何なる宿習に依つてか、今此深妙の法を聞くや。若は利養の爲にもあれ、若は輕戲を以

【優曇華】花の名、此花は三千年に一現すと云ふ。

【一乘開會】三乗の權を會して一佛乘に歸せしめたる法華開顯の意。

てもあれ、心性の理を緣じぬれば功德甚だ多し。無量無數劫にも是法甚だ聞き難きこと、猶優曇華の時に乃ち一たび現するが如し。利の爲にし、戯れの爲にするも功尚是の如し。何に況んや發心真正にして上求下化の爲にせんをや。若し止境を緣するに非ずんば、縦心妄僞の心無く勇猛精進に行ずとも、尙佛種とは成り難し。但し枝葉に攀附して具根本を捨て、眞實に念佛するの志無く、法華を悟らんと欲せざる人は、若し此旨を聞かば定んで誹謗を致さん。志を同じうする輩に非ずんば能く之を秘すべし。深奥の法門は言近けれど意遠し、善知識に遇うて常に談話るに非ざるよりは、恆に心に馳れず、恆に悟入し難し。故に妙樂大師の云はく、「若し之に依つて修行せば成く口決を須ふと云ふ。又弘決」に云はく、「四緣具はると雖も開導は師に由ると云ふ。四緣とは止觀の行者五緣を具一に持戒清淨、二に衣食具足、三に閑居靜處、四に息諸緣務、五、する中の其四なり五緣とは得善知識なり。開導は師に由るとは教授の善知識たらくのみ。自ら習つて知るべし、外人の測る所に非ず。發菩提心の緣は善知識に遇きたるは無きのみ。又復一乘開會の意には種類種有り、相對種あり、若し種類種を以て之を論ずれば、彼緣愛妻子の癡愛は即ち應化の慈悲、世智三乘の解心は、亦報佛の智慧、衆生皆心あるは是法身の如來なり。又偏に有漏の報を求めて菩提に志さざる者も像を造り、塔を起て、頭を低む、手を舉げ、乃至一たび南無と稱ふる、是の如き過去の微善も願智に掣かれて成菩提に越く。火焰の空に向ふや理數として成く滅し、水流の海に越くや法爾として停ること無し。但願智に未だ資けられざるに由つて便ち果報に封ぜらる。『記』に云はく、『善の體は本妙なれども、執著の心に隨ふ。

是故に心を開すれば宿善成遂ぐと云云。『今塔寺に歩を運ぶ人あれども、多くは名聞利養の爲の故なり。暫く其世情に隨つて淺近の願を成すと雖も、開會の教を聞き、聞き已つて諦かに思惟せば、善體は眞善妙有にして必ず無上菩提に到らん。加之、相對種を以て之を論ずれば煩惱、業、苦の三道は、即ち法身、般若、解脱の三徳なり。其法體を除かずして只其執情を改めよ。』大乗止觀に云はく、『但其病を除いて而も法を除かずと云云。』若は種類に於ても、若は相對に於ても、凡て厭萬法を心に納めて之を觀するに、六道四生併ながら皆清淨なること、明鏡の上に善惡の像を現するに、鏡體なりと知り已れば、悉く清潔なるが如きのみ。心性は此の如くなりと雖も而も我無始より迷へり。圓融の教を聞いて今之を開覺る。我既に之を知らば則ち又他人をしても、之を悟らしめんと欲すること、父母の食を得て其子に與へんと思ふが如し。故に第一の願を發す。謂く衆生無邊誓願度なり。生死縛著して我精神を勞らすは空に非ずんば解けず。自ら既に縛有りて若し他の縛を解かんといはば、是處あること無けん。之に依つて、『弘決』に云はく、『他を利せんが爲の故には先づ己が縛を斷つべしと云云。』故に第二の願を發す。謂く煩惱無邊誓願斷なり。復三諦の法門に聞くば争でか能く種種の根に返せん。『弘決』に云はく、『衆生を度せんが爲の故に須く法門を習ふべしと云云。』故に第三の願を發す。謂く法門無量誓願知なり。若し法王の位に登らずんば、自行化他に自在ならず。故に第四の願を發す。謂く無上佛道誓願成なり。夫法界常平等の故には斷惑證理無しと雖も、法界常差別の故には皆發心修行あり。

【頻伽】 妙聲鳥を言ふ。

【波利質多羅樹】

根莖杖其に大に其香氣は五十由旬にも周徧すと云ふ。

【瞻蔔花】 樹形廣大にして金翅鳥其上に居すと云ふ。

【婆師華】 雨時に生ずる樹花。

是を以て空寂の理に住し乍ら、而も佛道を修證すべし。『釋籤』に云はく、『故に夢の如く功を勤加すれば空名の惑絶え、幻因既に満ずれば鏡像の果聞かなりと云云。』四弘は是諸佛の總願なり、初心に必ず之を發すべし。若し別願有らば亦同じく之を發すべし。釋迦の五百大願、彌陀の四十八願の如きのみ。問ふ、『菩提心を發さば何なる功德有りや』答ふ、『功德甚深にして稱計するに遑不ず。』『華嚴經』に曰はく、『菩薩、生死に於て最初て發心するるとき、一向に菩提を求め堅固にして動すべからず。彼一念の功德、深廣にして涯際無し、如來分別して説かんに功を窮むとも盡すこと能はずと云云。』『寶積經』に曰はく、『菩提心の功德は、若し色の方分有らば虚空界に周遍して能く容受もの無けんと云云。』『法華の疏』に云はく、『似解の初の初は、二乗の極の極を過ぎたること百千萬倍せり。好堅は地に處りて牙已に百閉し、頻伽は鼓に在りて聲衆鳥に勝れたりと云云。』『菩提心論』に云はく、『若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に即ち大覺の位を證すと云云。』『華嚴經』に曰はく、『譬へば波利質多羅樹の花をもつて一日衣を薫せんに、瞻蔔花、婆師華をもつて千歲薫すと雖も及ぶこと能はざる所の如く、菩提心の華も亦復是の如し。一日薫する所の功德の香も十方の佛の所に徹る。一切の聲聞緣覺の無漏智を以て諸の功德を薫するのと、百千劫に於てすれども及ぶこと能はざる所なりと云云。』凡そ菩提心の功德殊勝にして、自利利他、滅罪生善等の巨益無量なり。『止觀』に『秘密藏經』を引き已つて云はく、『初の菩提心に已に能く重重の十惡を除く、況んや第二、第三、第四の菩提心をやと云云。』言ふ所

の初とは、是三藏教の界内の事を縁する菩提心なり。何に況んや、深く一切衆生に悉く佛性ありと信じて、普く自他身共に佛道を成ぜんと願はんに、豈滅罪生善の功能なからんや。『華嚴經』の中に、善財童子の菩提心を發せしとき、彌勒菩薩之を歡じて曰はく、『譬へば人有りて自在の藥を得て五怖畏を離るるが如し。何等をか五と爲す。謂ゆる火も燒くこと能はず、水も漂はすこと能はず、毒も中ること能はず、刀も傷ふこと能はず、煙も薰ずること能はず。菩薩摩訶薩も亦復是の如し、菩提心を發して薩婆若に攝すれば五怖畏を離る。何等をか五と爲す、謂ゆる欲火の爲にも燒かれず、諸有の流水も漂はすこと能はざる所、瞋恚の惡毒も中ること能はざる所、煩惱の利刀も傷ふこと能はざる所、邪見の煙薰も害すること能はざる所なりと云云。』又云はく、『住水の寶珠を得て其身に瓔珞とすれば、深水の中に入るとも没溺せざるが如し。菩提心の住水の寶珠を得れば、生死の海に入るも沈没せずと云云。』又云はく、『善見の藥王を得れば一切の病を滅するが如く、菩提心の善見藥王を得れば一切衆生の諸の煩惱の病を滅すと云云。』又云はく、『藥樹王有り、無壞根と名く、其力を以ての故に一切の閻浮提の樹を長養するが如く、菩提心の樹も亦復是の如し。其力を以ての故に一切の學、無學、菩薩の善根を長養すと云云。』又云はく、『衆生の品類も須彌山に近づけば悉く其色に同するが如く、菩提心の山も亦復是の如し。若し近づく者有らば皆彼薩婆若の色に同すと云云。』誠に兼濟俱に美はしきは菩提心に過ぎたるは無し。而るに愚鈍の身自ら慧解無し、亦復教授の師に遇はずんは何れの生にか發心修

【四德】當、樂、  
我、淨の四種の德

子預問。孔子の弟

行し、何れの世にか聞留得脱せんや。『止觀』に云はく、「既に自ら覺らず、又師に値はざれば邪晝日に増し、生死月に甚し。稠林に曲れる木を曳くが如し、何ぞ出づるの期を得んと云云。」故に三因開發することは知識の縁に依るべし、種子豈雲雨の濕ひに長ぜざらんや。四徳圓滿するは只善友の教に任ず、象牙は必ず天雷の聲を待つなり。縦令ひ佛種有りとも雖も善縁に遇はずんば萌さじ。『法華玄』に云はく、「若し知識に値はば宿善還つて生じ、若し惡友に値はば則ち本心を失ふと云云。」夫玉樓に登るものは自ら照曜の光を受け、蘭林に入るものは必ず芬芳の氣に染む。善知識に近づくも亦復是の如し。顏氏の云はく、「善人と與に居るは芝蘭の室に入るが如し、久しくして自ら芳ばし。惡人と與に居るは鮑魚の肆に入るが如し、久しくして自ら臭しと云云。」古人の諺に云はく、「凡て人の心は水の器に従ふが如し、器方なれば則ち方なり、器圓ければ則ち圓しと云云。」或書に云はく、「麻の中の蓬は扶さるに而も直し、泥の底の砂は染さるに而も黒しと云云。」『心地觀經』に云はく、「菩提の妙果は成じ難きに不ず、眞の善知識は實に遇ひ難しと云云。」故に惡知識を捨てて善知識に親近すべきなり。之に依つて、『論語』に云はく、「己に如かざる者を友とするなかれと云云。」『心地觀經』に曰はく、「善友に親近するを第一となし、正法を聽聞するを第二となし、理の如く思量するを第三となし、法の如く修證するを第四となす。十方一切の大聖主は是四法を修して菩提を證せりと云云。」我等、知識經卷に従つて一實菩提を聞く、攀覓の心息んで、但法性を信じ、思惟修證せんこと今正しく是時なり。三徳祕



【二〇】十章の第十問答料簡して疑を釋す。

【文選云々】五十卷王子淵が論に德を講ずるの論に出づ。  
【毛嬙西施】共に越王の美姫なり。  
【嫫媿倭媿】嫫媿は黃帝の妻、倭媿は未だ其所出を明にせず、共に醜女なり。

藏の理體は本より無始無終なり、然れども、始無くして而も始有れば始三觀を修し、終り無くして而も終り有れば終に三德に至る。一たびは知識に値へることを悦び、一たびは心の蒙昧なることを責め、猶三惑を離れんことを求めて常に三觀を修すべきなり。

第十に問答料簡して疑を釋すとは、問ふ、末代の行者は理觀に堪へず、妄染轉じ難し、即生の中に其行焉んぞ成ぜん。故に『金鑰論』に云はく、『大師、佛法の不思議なることを敬じて云はく、二乘及び菩薩すら尙測ること能はざる所なり。何に況んや諸の凡夫をや。而るに此事を判ぜんと欲すること、譬へば生盲の人の日輪の相を分別し、虚空界の一切の諸の色像を判ぜんと欲するが如し。而も了達せりと云はば畢竟是事無けんと云云。』如かど只彌陀の名號を唱へて聖衆の來迎を待たんには。彼五逆を造れるの輩も纔に臨終十念の力に依つて往生することを得るか故に。此義云何。答ふ、此言を成ず者は口に西方を期すと云ふと雖も、意には實に其志無きなり。『淨名經』に曰はく、『其心淨きに隨つて則ち佛土淨しと云云。』若し往生淨土の意有らば、何ぞ先づ妄心を翻へさんと欲せざるや。身に難治の病有りて身を愛するの思深ければ死に至るまでも猶之を治するがごとく、心に難治の病ありて、往生を求むるの心切ならば何ぞ又治せざるべけんや。能く心性を觀じて上定を得ん時は、遮障萬端なりと雖も而も往生の留滯有るべからず。業累を除かずして安養を欣ぶ者には、佛大悲の願有りて雖も而も引攝の力猶及ぶべきこと難からんか。『文選』に云はく、『毛嬙西施は善く毀れる者も其好きを蔽ふこと能はず、嫫媿倭媿は善く譽

【波旬】 經迦成道の時の魔王の名。

【常坐三昧】 四種三昧の一、靜處に座を設け、九十日一期とし、西方に向つて端坐し、果別なき法界の理を觀念す。若し障起らば彌陀の名號を唱ふるを普通とす。

【薄地】 凡夫の境界を言ふ。

る者も其醜きを掩ふこと能はずと云云。一凡そ自性の好悪は人の讃毀に依らず、若し夫惡業の體醜きは彌陀觀音も之に掩ふこと能はざるが故に、淨土を求むる者は千萬なるも往生を遂ぐる者は一二なり。若し心性の貌麗しきは波旬も歡ふこと能はざれば、期むる心縱ひ疎なりとも來迎疑ひなし。故に「法華の疏」に云はく、「己心の高廣なるを觀じて無窮の聖應を叩けば、機成じ感を致きて己刹を逮得すと云云。」「止觀」の常坐三昧の意に、止觀を論する文に云はく、「佛の相好を見たてまつること水鏡を照して自ら其形を見るが如し、初に一佛を見たてまつり、次には十方の佛を見たてまつる。神通を用ひて往いて佛を見たてまつるにあらず、唯此處に住して諸佛を見、佛の説法を聞きて如實の義を得るなりと云云。」「弘法」に此文を釋して云はく、「色身の佛を見たてまつること本期に非ずと雖も、觀力の兩らしむなり。故に所見をして猶鏡像の如からしむと云云。」「觀法の功用期せずして而も佛を見たてまつること、霜降れば鐘鳴り、水澄めば月泛ぶが如きのみ。只是心水の濁りを止めて滿月の來迎を待つべきなり。次に「金鐘論」の中の、實相眞如の理は二乘菩薩の測る所に非ず等といへるを會すれば、彼文は權教の人の全く之を知らざることを釋するものなるべし。薄地の異生を簡んで全く其境界を隔てたるに非じ。證悟は實に人聖に在りと雖も、教法は本より下凡に被らしむ。只六即の淺深を知りなば懼れず誇らざるべし。誠勸は時に隨ふ、偏執すべからず。彌陀も昔は是凡夫なりき、始め三諦の理を觀ぜしに依りて三諦の悟りを得たまへり。我等も同じく是凡夫なり、何ぞ一圓の因を修して一圓の果を感ぜ

【初住無生】初住は圓教にあつては聖位の初なり、無生忍は初地の證の名とし、又は七、八、九地の悟の名とす。

【三生】台家は種熟、脫の三益を三生と爲す。

ざらん。而るに妙理の深奥なるに懼れて轍を改めなば、發心既に僻越して萬行徒らに施さん。冥冥たる生死何れの時にか出離せん。悠悠たる苦海何れの世にか度ることを得んや。努力して暫くも廢忘すること莫れ。次に行成就し難しといふことを會すれば、證を取ることを掌を反すの間を期すと雖も、根の利鈍に依りて自ら遲速有り。永劫の遠因を結して順次の解脫を望まんことは、修因感果の理には猶頗る相順せざるをや。若し慇懃の志を運びなば何ぞ亦其分無からんや。『止觀大意』に云はく、『内觀道に順ひ外教門に附して、之に依つて修行せば必ず空しくは過ぎじ。縱ひ此生に未だ獲ずとも種と爲ること亦強からん。未來際を盡すまで復轍を改めされと云云。』種となること亦強からんといへる文は、深く愚みを懸くる所なり。縱ひ今生に悟らずとも來世には必ず證得ん。『弘決』に云はく、『願くば諸の同遇の者深く慶幸の心を生ぜよ、冀くは來世に重ねて聞きて早く無生忍に契はんと云云。』愚意に思ふ所大師の願に同じ。又一句神に染みぬれば、微劫にも朽ちず。無窮の生死を促めん、是要中の要なり。『止觀』に云はく、『皆釣餌を以て之に隨つて捨てざれば、此蔽久しからずして乘御に堪任んと云云。』我既に圓頓の教法の鈎を吞む、定んで速かに菩提涅槃の岸に登らん。況んや眞正菩提心を因と爲して即ち安養淨土に往生せば、重ねて一實圓頓の旨を聞きて初住無生の位に可はん。今此圓乘の結綵を以て殊に上品の三生を欣求せん。但し不肖の身を以て上品を期すること分に非ざるの所望に似たりと雖も、第一義に於て心驚動せず、菩提心を發すを以て其因とするが故なり。我尙

【婆藪】 婆羅門の中にあつて役生をなし途に地獄に墮す。後華聚菩薩の教化に由つて地獄を脱して釋迦佛の所に詣ると言ふ。

【觀音地藏】 炎州の火鼠は火に入るのを樂となし、江河の水鳥は水に入るのを樂となす。地獄の焦熱炎底に入るの苦を感ぜず、觀音の大紅蓮の水の中に入るも憂なし。中の影なるが故なり

も菩提心を發す。望む所は他に非ず。但恨むらくは無始よりこのかな塵染に隨逐するを以て、猶妄我慮知の執に隨つて發心實ならず、衆行徒らに施さんことを、然れども「華嚴」に曰はく、「聖へば金剛の破れて全からずと雖も、一切の衆寶猶及ぶこと能はざるが如く、菩提の心も亦復是の如し。少しく懈怠すと雖も聲聞緣覺の諸の功德の實の及ぶ能はざる所なりと云云。」弘決に云はく、「縱使發心眞實ならざるものも、正境を緣すれば功德猶多しと云云。」發心眞實ならざれば縱ひ上輩の數に漏るとも、功德猶多きが故に益ぞ下品の生を受けざらんや。又破戒の身なるに依りて暫くは惡趣に廻るといへども、乘種強きを以て極重の苦を免がれん。縱ひ猛火の中に交るとも、必ず解脫清涼の風に扇がれん。縱ひ寒氷の底に沈むとも、定んで中道正慧の日に遇はん。若し大苦即法界なりと悟つて苦を以て苦とせずんば、同類の爲に法を説いて共に生死を出づべければ、三途に在ることを厭はずして物と結縁せん。人間の少苦を救ふすら其悦びの心幾許ぞや。況んや三途の重苦を抜かんことは、利生の極みとするに足れり。彼調達婆藪が應迹を那落到垂れ、觀音地藏の泥梨の苦器に代りたまへるは、則ち是心中に深く樂ふ所なり。故に顯次生の昇沈は偏に佛陀の境界に任す。而るに強ひて私情を恣にして狭めて望を成すべからず。平等一子の慈悲は定んで衆生の爲に疎からず。然りと雖も、名字、觀行の位すら猶生を隔つれば則ち忘る。何に況んや底下理即の凡夫にして猶未だ毛分の悟をも得ざるをや。是を以て未脫の前に六趣に經歷せば、恐らくは憂苦に纏はれて永く以て沈沒せん。自ら唯碎身の苦を受

【他化天】他化自在天、欲界六天の第六なり。

くろのみに非ず、他の爲にも亦一分の益無かるべし。象の子の力微くして身を刀箭に没す、湯を拘んで氷に投ずれば翻つて氷聚を添ふるが如し。得忍以前の化度利生は還つて苦集を増すこと亦復是の如し。故に先づ極樂不退の刹に生じて我性法身の理を顯し、後に分段有爲の境に入りて流轉生死の衆を導かん。之に依りて拏拏つて云はく、竹意に夢絶ゆるの曉、草薺に露消ゆるの夕、忝くも彌陀の來迎を蒙り必ず觀音の引攝に預からん。問ふ、觀心の利益の誠證を聞かんと欲す。答ふ、先に出す所の菩提心、並に懺悔の功德等皆其利益なり。又「菩薩處胎經」にはく、「法性は大海の如し、是非有ることを説かず、凡夫賢聖の人も平等にして高下なし。唯心垢の滅するに在り、證を取ることを掌を反すが如しと云ふ。」一淨名疏に云はく、「若し無生を見つれば、生死に處すと雖も縱任自在に自利し、他を利すと云ふ。」弘決に云はく、「太公の如き管輅命たりしとき、龍神すら尙暴風疾雨を以て其境に至らしめざりき。況んや佛法の人の長心正念ならん者をやと云ふ。」『大集經』にはく、「月藏分の中に他化天の魔王、菩提心を發して記を受け願を發して云はく、我等、現在未來の諸佛の弟子の第一義と相應して住せん者を護念して供給し供養せん。若し我教に順はずして行者を惱亂せば、即ち彼類をして種種の病を得て神通を退失せしめんと云ふ。」取一止觀に云はく、「此金剛の觀は煩惱の障を制き、此牢強の足は生死の野を越ゆと云ふ。」弘決に云はく、「若し理に稱はば舉足下足、道場に非ずといふこと無しと云ふ。」經に云はく、「即ち安樂世界に往くと云ふ。」現身に證りを得て自在に生を利し、冥衆の

【理具の三千】森羅萬象各皆本より三千の諸法を具するを言ふ。

【三般若】一には實相、二には觀照三には方便なり。

護念を蒙りて魔界の障難を却け、生死煩惱を超越して安樂世界に往生するは偏に是觀心の利益なり。問ふ、「彌陀の加被に依らずして唯自心を觀ずとも往生すべきや」答ふ、「爾るべからず。只機を憑むも、偏に應を待つも共に不可なり。理具の三千を觀するを以て機と爲して、修徳の三千の應を仰ぐべし。機感相應する時は佛法の至れる理なり。譬へば珠の中に火の性有り、火珠所成の日輪に對する時は能く火を取るが如きのみ。善根增長して往生の大事を遂げんことは、定んで彌陀如來の護念に任せたまつるべし。大願の影に覆へば子も能く生長するものをや」弘決に禪定を發する因縁を釋して云はく、「宿種有り」と雖も、現種の因縁は必ず諸佛の冥加の外護を假ると云云。「止觀に大會論を引いて云はく、『池の華も口を得ざれば驢死せんこと疑ひなし、善も加被を被らざれば沈溺して未だ顯はれずと云云。』今の念佛定も亦復是の如し、必ず彌陀の加被に據つて應に淨土に往生するを獲べきのみ。問ふ、「理觀を修せずして只一佛の名號をのみ稱ふる人も往生を得るや不や如何」答ふ、「また往生することを得べきなり。彼繫念定生の願に未だ理觀を修せよ」と云はず、聖衆來迎の誓は只是至心の稱名なり。夫名號の功德莫大なるを以ての故なり。所以に空假中の三諦、法報應の三身、佛法偈の三寶、三徳、三般若、此の如き等の一切の法門、悉く阿彌陀の三字に攝む。故に其名號を唱ふれば即ち八萬の法藏を誦し、三世の佛身を持つなり。縱に彌陀佛を稱念したてまつるに、冥に此諸の功德を備ふ。猶丸香の一分を焼けば衆香悉く薰じ、大海の一滴に浴すれば衆河の水を用ふるが如し。故に慈

恩の云はく、「諸佛の願行、此果名を成じたまへり。但能く號を念するに、具に衆徳を包ぬ。故に大善を成じて往生を廢せずと云云。」是を以て散心に念佛して極樂に往生せると、昔より今に至るまで其數幾何ならん。其中にも梁朝に一の僧有りき、名を雄俊と曰ふ。口には善く説法すれども身に戒行無し。所得の利益は非法にして食用す。僧の行に嫌くして即ち還俗す、還俗して軍陣に入り殺害を行すること量り無し。俗中に難有れば而も亦出家し、此の如くすること凡そ七遍にして極惡不善なりき。爰に死して一日を經しに蘇つて語つて言はく、閻魔法王、我をして地獄に引き入れしむ、其時に俊、聲を高うして曰へらく、俊若し地獄に入らば三世の諸佛は即ち妄語を成ぜん。何となれば曾て觀經を見しに、下品生の者は五逆罪を造るも、臨終に十念すれば尙往生することを得と説けり。而るに吾罪業を造れりと雖も五逆を造らず、若し在生の念佛を論すれば即ち其數を知らず、俊若し地獄に入らば誰か佛説を信ぜんと。此語を爲す時聲に應じて華臺空中に現はる、閻王之を見て歎じて曰はく、善い哉善い哉、禪師既に淨土の迎ひを得たり。獄中の有ゆる衆生の汝が聲を聞く者は亦皆念佛して、久しからずして悉く往生することを得ん。禪師此より直に往生せずして暫く人間に還りて、不信の者の爲に不如法の念佛の功用微妙なることを示せと。時に俊、閻王之可を蒙りて娑婆に還らんと欲するに、現する所の華臺、小路に向つて去る、俊隨ひて路に入れば此の如く蘇れるなりと。此語を聞く者、俊が誑言なりと謂へり。其後俊、六時に念佛して精進勇猛なりしに、三月を經て病無くして卒しぬ。

隣里郷閭、或は音樂を聞く者有り、或は光明を見る者有り、悉く信心を得て念佛する者益多しと云云。」散心の念佛誠に深妙なる哉。智解の胸に滿つる人すら猶理觀に堪へず、況んや尼女在俗のものは唯俊が先蹤を追ふべきなり。彼が言ふが如き、浴すること必ずしも江海ならずとも要す垢を去る。馬必ずしも騏驎ならずとも要す善く走る、念佛必ずしも理觀ならずとも要す往生すと。散亂の中の念佛なりと雖も只誠心を用ひば遂に引攝を蒙らん。但し煩惱を點するに即ち是菩提なり、誰か愚知の性を備へざらんや。今釋迦の聲教に値へり、其心を練磨して、憶想を轉じて智慧と成さんこと宜しく乃ち是時なるべし。豈理觀の如意を捨てて而も散心の水精を誣はんや。尙眞の善知識に従つて速かに圓觀の念佛を修習すべきなり。一問ふ、「散念の功德劣らば心を勞して之を修するも何んせん。如かじ所作無くして生涯安く之を過ごさんには」答ふ、「此言甚だ誤まれり、其理觀を兼學せんが爲に事の念佛を貶しめて劣れりとせんは道理として隔るべし。若し進退據を失して偏に念佛を廢せんと言はば、是大懈怠極無道心の人の謂ふ所ならん。何人か初心より即ち理を得たるや、事を以て初門として理觀を習ふべきなり。又功德の勝劣を論せずして、事理の念佛俱に往生することはいはば、只頭然を救ふが如くすべし、敢て餘の言事を致すこと莫れ。夫人の世に在るは秋露の表に栖むよりも危く、命の常無きは猶春夢の枕に凝るに同じ。何の暇有りてか無益の言論を致さんや。種種に橋を問へるは智者の呵する所なり。次に生涯所作無くして安く之を過ごさんことは、其然るべからず。三界は安きこと無く猶火



【四山】 四大を喻ふ。

【初利天】 欲界六天中の第二、須彌山の頂にあり。轉輪聖王の壽無量歳より八萬歳に至るまで此王出世す。此王輪を旋轉するに由つて道に應じて一切を威伏す。故に此名あり。

宅の如し、一箇に偏に苦む、耽荒すべきに非ず。四山合せ來りて遁れ避くる所無し。何ぞ安穩の想を生じて出離を求めざらんや。悉達太子の夜半に城を踰えて仙人の洞に到りたまひしに、大王使を遣して還らんことを請はしめし時、太子堅く辭して偈を説いて言はく、「譬へば金屋に火の熾盛なるが如く、池に滿てる華に蛟龍あるが如く、甘味を食ふに毒藥の和れるが如し。王位、樂を受くれども後には大苦有りと云云」常に樂に苦を雜ふるのみに非ず、終には亦其限りあり。縦ひ初利天上に生ずるとも五衰の悲み早く來り、轉輪聖王と成ると雖も七寶久しく持たず。輪王も之を免がれず、黔黎も亦此の如し。凡そ流轉生死の厭ふべきことは、昇沈處所の定まらざるを以てなり。形に常主無ければ只墳墓の間に爛壞し、神に常家無ければ徒らに越生の路に跡跡す。身と心とすら猶相伴はず、況んや命と財と而も相隨はんや。綾羅の服は在生の飾りなり、何ぞ冥路の膚を隠さんや。金玉の寶も今世の貯へなり、全く淨土の資とならず。「大集經」に云はく、「妻子珍寶及び王位も命終に臨まん時は隨はざるなり、唯戒及び施と不放逸とのみ今世後世の伴侶となる」と云云。故に勤めて布施を行じ、堅く淨戒を保ち、心放逸ならずして、苦に念佛を修して早く世に朽ちざる財を貯へ、生生に離れざる伴を儲くべし。又世人重罪の身なるを卑下して、往生の望みを絶つこと有らば、亦然るべからず。天台の云はく、「無量壽佛の國は果報殊勝なりと雖も、重罪を犯す者も臨終の時懺悔して佛を念ずれば、業障便ち轉じて即ち往生することを得ん。惑染を具すと雖も願力心を持して亦居ることを得と云云」『淨

【九品の蓮臺】彌陀の淨土に往生するに其行業の優劣に依つて九等の階級を分つ。蓮臺とは佛菩薩の座を言ふ。

【五相成身】通達善提心、修善提心成金剛心、證金剛身、佛身圓滿。此五相具に備つて方に本尊の身と成る

士論に云はく、一若し重き業障有りて淨土に生ずるの因無くとも、彌陀の願力に乗じて必ず安樂國に生ぜんと云云。二平等覺經に云はく、阿彌陀佛と觀世音、大勢至と大願の船に乗じて生死の海に浮び、此娑婆世界に就いて衆生を呼喚で大願の船に上らしめ、西方に送り著けたまふと云云。三夫若し千里を翔ることは驥の尾に附くが故なり、巨石の四溟を渡るは船上に載するが故なり。縱ひ惡業の石重しと雖も、方に四十八願王の船に乗りて娑婆憂苦の海を渡らんと欲す。自ら沙門なりと稱して手を振つて去りなば、冥官の責免がるる所を知らじ。佛法に遇はずと陳ぶべからず、釋迦の遺教盛んに弘まるに専らなるの比ひなるが故に。諸根を具せずと謂ふべからず。六根全く備はりて修行に堪ふるの器なるが故なり。只天性癡惰の失に墮ちて、舌を卷いて答ふるどころ無けん。亦悲しからずや。我争でか、必ず今生を以て生死の終りと爲すべきや。坐しても歡き臥しても歡く。最後臨終の時恐らくは正念に安住せざらんことを。寤ても思ひ、寐ても思ひ、一期生涯の暮に定めて十念をも成就しがたからんことを。十念若し成せば往生すること疑ひあらじ。故に「要決」に云はく、「上は現生の一形を盡すより、下は臨終の十念に至るまで、俱に能く決定して皆往生することを得んと云云。」之に依つて功を積み徳を累ねて祈る所に、忒なし、彈指散華の善も偏に九品の蓮臺を望み、隨聞一句の因も併せて三身覺位の爲なり。加之、三密の行法を修しては心を五相成身の月に繫け、一實の觀門を凝しては悟を八功德池の蓮に期す。然りと雖も、無明の雲厚く覆ひて法性の空未だ明かならず。恨むらくは壯齡に精進

【楊貴妃】唐の玄宗帝壽王瑁の妃。太眞を容れて貴妃となす。  
 【潘安仁】晉居士は安仁、榮陽中平の人なり。  
 【李將軍】前漢の季廣隴西成紀の人。武帝に仕へ、世射法に長ず。  
 【曹子建】陳思王曹植字は子建、魏の臣。范蠡、後陶に至り、陶朱公と稱し、巨萬の富を致す。  
 【鄭和白】鄭國が渠と白渠とは京師億萬の口に衣食を與ふと傳ふ。

の志を遂げずして、限目のときに定んで懈怠の過を悔いんことを。『大莊嚴論』に曰はく、『盛年にして患ひ無き時は懈怠にして精進せず、衆の事務を食營して施と戒と禪とを修せず、死の爲に吞まるるに臨んで、方めて悔いて善を修せんことを求む。智者は應に觀察して五欲の想を斷除すべし、精勤して心を習へる者は終る時に悔恨無し。心意既に專至なれば錯亂の念有ることなし。智者は勤めて心を投ずれば臨終に意散らず、心を習ふこと專至ならざる者は臨終に必ず散亂せんと云云。』『華嚴經』に曰はく、『鑽燈して火を求むるに未だ出でず、而も數息むれば火勢も隨つて止滅するが如し。懈怠の者も亦然なりと云云。』此等の文を披くに落涙禁め難し。晝夜勤めて精進して空しく明し空しく暮すこと莫れ。縦令寸陰を競ふと雖も生涯の修善幾くにも非ず。先徳の云はく、『一世の勤修は是須臾の間なり、何ぞ衆事を捨てて淨土を求めざると云云。』借過去の年月の夢の如くなるを、顧るに、亦未來の時節の程無からんことを知る。彼楊貴妃が房を専らにせられし寵も、潘安仁が菓を擲げられし戯れも、李將軍が武勇なりしも、曹子建が賢才なりしも、乃至陶朱が金玉の財も、鄭と白とが衣食の富も、名は萬代に留まると雖も身は何くにか去んぬることを知らず。古人の遺ること無きを思ふ毎に今世の終りあらんことを觀すべきなり。又曾に古人の早世せしみに非ず、親昵の面を並べしものも多くは北芒の塵となり、外人の名を聞きしも併せて東塗の煙と化せり。何れの朝、何れの夕にか彼逝水に従はんや。無常の殺鬼は豪賢を擇ばず、山海空市に遍遊るもの無し。故に朝露の未だ消えざる前、曠燈の纔に残

【三輩】 彌陀の淨土に往生する人の行業の淺深に上輩、中輩、下輩の三類あり。

れる間にも、猶能く誠を勵み、事に觸れては觀を増すべきなり。巖戸に夜深ければ只癡闇の暗闇きを憶ひ、洞門に曉來らば應に慧日の漸く出でなんことを悦ぶべし。西山に月の傾くも満月の尊容を慕ふの便あり、翠嶺に風の扇ぐも寶樹の微風を欣ぶに妨げ無し。何ぞ所觀の境を得ながら徒に心念を運ばざらんや。師範に對して顯密を學ぶも彌陀の說法に傾るに准へ、弟子の爲に教誡を加へても法界の群類を濟はんことを思はば、念念歩歩に悉く三途の業を改め、造次顛沛にも併せて九品の因を成せん。問ふ、「今愚驚の性を以て此文を集む、豈後見の嘲り無からんや」。答ふ、「二の故有り、一には自心を練らんが爲なり。譯に云はく、「常に心の師と爲りて、心を師とせざれと云云」。『玄樞』に曰はく、「但其心を正しうして餘學を尙ばざれ、自心若し正しければ萬境咸く歸す、自心若し邪なれば諸障に滯り有り」と云云。『弘決』に云はく、「是心は無始より常に曲つて端しからず、正行の處に入りぬれば心則ち端直なり、蛇の行くこと常に曲れども筒に入れなば則ち直きが如し」と云云。『疏』に云はく、「若し觀の方便を作さずんば行人に於て益無し、貧しうして寶を數ふるが如く、盲て燭を執るに似たり」と云云。而るに心は孤り起らずして必ず縁に託る、文を假りて意を助くれば心を觀するに亂れず。既に散心を一境に調へつ、必ず往生を三輩に遂げん。二には他人を誘はんが爲なり。長夜の法燈を挑ぐるは適しく祖師の本懷に叶ふ。苦海の船筏を傳ふるは遙に釋尊の恩德に報するなり。『經』に云はく、「汝等若し能く是の如くせば則ち爲已に諸佛の恩に報すと云云」。『藥王品の疏』に云はく、「我爾に明

を傳ふ、爾復明を傳へよ。明明已むことなきは師の志なりと云云。故に短才淺智をも  
 憚らざるは、斷種の身を成ぜざらんが爲なり。「史記」に云はく、「舜禹の智有り」と雖も吟  
 んで而も言はざるときは、瘖聾の指麾にも如かざるなりと云云。實に瘖聾の身たりと雖  
 も、何ぞ亦迷ふ者を導かざらんや。若し義理に紕繆有らば賢哲必ず添削を加へたまへ。衆  
 の嘲りに於ては敢て之を辭せず。逆順俱に縁を結び、互に引導を蒙らんことを欲す。南  
 無阿彌陀佛。南無觀世音菩薩。南無得大勢菩薩。南無極樂界會一切清淨大海衆。南  
 無十方三世一切三寶。

觀心略要集 畢



當書一卷源信の撰なり。念佛の法門を最も簡易に説き盡せるものなり

# 横川法語

夫れ一切衆生、三惡道をのがれて人間に生るること大なるよるこびなり。身はいやしくとも畜生におとらんや、家貧しくとも餓鬼にはまさるべし、心に思ふことかなはずとも地獄の苦しみに比ぶべからず。世の住みうきは厭ふたよりなり、人かずならぬ身のいやしきは菩提をねがふしるべなり、このゆゑに人間に生るることを覺ふべし。信心あさくとも本願深きがゆゑにたのめば必ず往生す、念佛ものうけれど唱ふれば定めて來迎にあづかる功德莫大なり、このゆゑに本願にあふことをよるこぶべし。又妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念の外に別の心もなきなり。臨終のときまでは一向に妄念の凡夫にてあるべきぞと心え、念佛すれば、來迎にあづかりて蓮臺にのるときこそ妄念をひるがへして悟りの心とはなれ。妄念の中より申し出したる念佛は濁りに染まぬ蓮の如くにして、決定往生うたがひあるべからず。妄念をいとはずして信心のあさきを敷き、こころざしを深くして常に名號を唱ふべし。

横川法語畢

○當書一卷眞盛の撰なり。明應元年三月後土御門天皇に回戒を授け奉りて念佛の要旨を述べて是を上りたるものなり。

# 奏進法語

御往生の安心は定めて御心に研かせ給ひ候はんれども承り候ふに付いて一端申しまゐらせ候。常には念佛を申し候うて、此念佛の力によりて往生せんずるぞと心得る、それも背かぬ事にて候へ共、それは念佛と往生とが別の物のやうに候ふ程に、猶煩はしき心得にて候。只様も候はず南無阿彌陀佛と唱ふるが、即ち往生にて候なり。南無と申すは佛を頼む心なり、此の心願て彼の佛の光の中に攝め取りて捨て給はず、迎ひ取り給ふ佛を阿彌陀とは唱へ顯はして、加様に頼む我等が心と救ふ佛の覺りと一つになりて候を、南無阿彌陀佛の佛とは心得候。されば南無阿彌陀佛と申すは、佛の正覺即ち我等が往生ぞと御心得候ふべく候。加様の御心得候うて疑ひの御心だにも候はずば、御手に數珠をとらず、御口に聲なくとも、御忘れなきばかりが念佛にて候ふべく候。さりながら御氣もよくすずしみ候はん時は、いかにもいかに念佛の功をばげませ給ひ候ふべく候。是が正身の上の正教と申すことにて候。あなかしこ。

西教寺眞盛判

飛鳥井殿參る  
奏進法語畢



常書一卷源信の撰なり。天台大師の一代の業績を和語を以て詳説せるものなり。  
【乗妙法】法華經の妙旨に依る三乗即一乗の深法。

# 天台大師和讃

歸命頂禮大唐國  
佛の使と世に出て  
眉は八字に相分れ  
妙慧深禪身を嚴り  
嬰兒の間の瑞相も  
臥しては必ず合掌し  
生年七歳なりし時  
諸僧口に授くるに  
一度聞くこと得てしかば  
残りは教ふる人なくて  
長沙の佛の御前にて  
比丘となりては正法を  
佛を禮拜せしほどに  
定光菩薩招きてぞ

天台大師は能化の主  
一乗妙法のべたまふ  
目には重障相うかみ  
佛に殆ど近かりき  
人より異にましまして  
居ては定んで西に向く  
好んで寺に詣づれば  
普門品をば以てせし  
永く忘れず成りにけり  
獨り暗にぞ悟りにき  
大弘願を發してぞ  
荷負せんとは誓ひてし  
ほのかに夢の如くにて  
向後鑒みて教へける

源信撰す

【定光菩薩】定光佛手を言ふ。天台の佛體に定光禪師あり、智者十五歳の時、夢中、手を以て招かると傳ふ。

【果願寺】荊州果願寺。

【大蘇山】光州大蘇山。

【金字の小品】南岳大師四十四歳の時、立誓願文と共に金字の小品般若經を造れりと傳ふ。

【三三昧】空三昧、無相三昧、無願三昧。

【瓦官寺】金陵にあり。

年はれ十八なりし時、二十歳に至りてぞ、禪慧心に深く染み、大蘇山に攀ぢ登り、昔は靈山淨土にて宿縁朽ちせず此にまた即ち普賢行法を、二七日に至りてぞ、受法の大師に相代り、三三昧と三觀智、文字の法師百千萬、辯才海は盡きもせず、晝夜に流瀉し給ふに、法華を弘宣し給ふに、一日朝義をとどめてぞ、雷默の益を蒙る者、徒衆轉た多くして

果願寺にて出家し、具足戒をば受けたまふ、師友を尋ね訪ふと、南岳大師に見えしに、同じく法華を聽きしかば、來れるなりとぞ宣たまふ、教へて修せしめ給ひしに、法華三昧得給ひし、金字の小品講ぜしに、是計をぞ問ひ受けし、力を合せて尋ぬるに、説法最も第一なり、瓦官寺にて八箇年、梁陳舊德皆來る、王侯相將集まりて、濟濟として有りしかば、自行に障りを成せしかば

陳の大建七年に  
宣帝留め給へども

其の山嶮しく高くして

周りは八百餘里にして

東は滄海遙にて

西には長山連りて

石橋渡りて虹のごと

鳳鳥鸞鳥飛び翔り

白道猷が古き室

一一廻りて見給ふに

即ち定光菩薩の

木をうる菴を造りてぞ

其の後華頂峯にして

天魔は種種惱ませど

明星漸く出る程

自行化他に今よりは

其後茶色相現じ

生年三十八にして  
天台山にぞ入り給ふ

一萬八千丈餘なり

八重一つが如くなり

蓬萊方丈遠からず

人無き境に入りけり

瀧水落ちて布を引く

銀地金地に分れたり

王子晋が木の跡

昔の夢に異ならず

室より北に地を占て

始めて宴坐し給ひし

後夜に坐禪し給ふに

降伏し給ひ終りにき

胡僧形を現じてぞ

影向せんとは誓ひてし

僧衆縁に隨へば

【華頂峯】 天台山  
の別峯。

【胡僧】 印度の僧  
を言ふ。

【梵僧】印度の僧  
又は清淨の戒行を  
持つ僧。

【流水品】金光明  
最勝王經長者子流  
水品第二十五。

宣帝是をきこしめし

始豐縣の御調をば

兩戸の民を除きてぞ

淨名經を講せしに

堂には琉璃映徹り

梵僧數十手ごとに

子雄木林成りしかば

山の麓の巨海に

護骨積りて岳となる

水性衰しかのみならず

慈悲を回らし給ひてぞ

満満渡りて三百里

一時に法流と成てこそ

財施法施の功德の

昔の野生池よりも

陳の太子永陽王

殆ど絶るに及ぶほど

敕命俄に下りてぞ

衆の費に充て給ひ

薪水に役し給ひける

砌の前に山現じ

欄には珠璣布き満てり

香爐を擗けて出来る

講堂改め造りにき

黎民漁り繁ければ

蠅虻の鳴く聲雷同じ

船人危ぶみ多ければ

衣物を捨て買取りし

江梁合せて六十所

流水品をば講せしに

限り有ることなければ

是をぞ勝れて覺しける

獵して馬より落ち給ふ

觀音懺を行せしに

【觀音懺】觀音に向つて行ずる懺悔法を指す。

【菩薩戒】大乘菩薩僧の戒律、總じて三條淨戒に名く

梵僧眼に見えしかばこれに因りて生生に

大極殿の裏にして

諸僧敕を蒙りてぞ

論議は冬の氷にて

解くこと夏の日に似てぞ

主上詰滞したまひて

大師の名譽は是よりぞ

隨帝齋會を設けてぞ

論を大師に奉る

所有の施物六十種

悲田敬田二つにぞ

生年五十七にして

一夏の間に敷揚し

止觀一部は大師の

法華を人に知らせんと

大師は木より泉石を

痛む處も止にけり  
大師に仕へんとは云ひし

仁王般若を講ぜしに

激難鋒をば競ひける

峨峨と結びて堅けれど

赫赫として消えにける

起居に三度を禮しける

彌天下に充滿てり

菩薩戒をば受けたまひ

智者とは是より申すなり

一つも留め給はず

分ちて還りたまひける

摩訶止觀を説き給ふ

朝暮二時に蒸淫す

已心中の法なれば

名字を替て説けるなり

好みて隱居し給へど

陳隋二帝相續き

凡そ十二年を経て

人跡久しく絶てこそ

山の半に到る程

眉髮擡も白くして

一時月の夜静かにて

胡僧二度現じてぞ

隋帝頻りに請せしに

石城寺に到りてぞ

最後の説法し給ふに

聞く者涙を流してぞ

十如不生十方界

四諦六度十二縁

智朗禪師が問ひしかば

観音來迎し給へば

其のとき生年六十歳

仲冬二十四日の

請じ下したてまつる

舊居に歸り給ふ程

竹樹林とは成りにけれ

俄に沙門相あへり

立ちもとほりてぞ隠れにし

人と語らふ氣色あり

終を告るに成りにける

山より下り給ふほど

遷化の庭とは宣べ給ふ

辯才常より妙にして

憂ひの海には洗みける

四教三觀四悉檀

一一法門相擲す

位は第五品にして

浄土へ行くとぞ宣べ給ふ

隋の開皇十七年

未の刻にぞ滅せたまふ

【石城寺】天台山の西門にあり。  
【四教】頓、漸、秘密、不定の化儀の四教と、藏、通別、圓の法の四教とを指す。  
【三觀】空觀、假觀、中道觀。  
【智朗禪師】天台大師の弟子。  
【位は第五品】五品弟子の位。六即の配すれば觀行即の位なり。

【沙羅雙樹の昔】  
昔釋迦佛は沙羅雙樹の下にて入寂し給へるに比す。

【三會】龍華三會の略。彌勒菩薩當年五十六億七千萬年を経て此土に出世し、華林園中龍樹の下にて法會を開き、普く人天を度する會座を指す。

其とき風雲相さわぎ

沙羅雙樹の昔にも

龕より外の十日は

容顏變することなくて

遠忌にいたる時ごとくに

莞爾舞目美はしく

齋の庭にて數ふれば

名字を呼で點すれば

凡そ大師の一生の

多くの功德の其の中に

造れる寺は三十五

金櫃繪像十萬軀

傳教學士三十人

凡そ五十餘州の

大師の徳業はかりなし

一言語るを縁として

天台大師和讃 畢

草木うなだれ水咽び

相劣らじとぞ悲しみし

道俗拜みたてまつる

身より汗をぞ流しける

龕を開きて拜すれば

鬚髮生ひてぞましましき

千に一人ぞ餘りにき

木の數に異ならず

所作の行業多ければ

少しの功德是いへば

寫せる經は十五藏

度せる僧衆は四千人

修禪學士充滿てり

道俗その數知りがたし

心も言も及ばれず

三會に必ず値遇せん

○當書一卷最深の撰なり。傳教大師の一代を和語にて講説せるものなり【四依の居士】來の使者となりて末世に弘經し、人の天の依止となる者

# 傳教大師和讃

歸命頂禮日東國

智者の後身と聞くからに

其の祖を委しく尋ぬるに

卯金刀の姓氏なる

木邦王化の盛なる

數多の男女を携へて

時の帝の畏くも

姓を三津首と改めて

百杖にいたりて猶榮え

奇香巖に薫りきて

神護慶雲元年の

母子も憫める色なくて

其のとき親族集まりて

其の後人に語るにぞ

傳教大師と申せしは

四依の居士と覺えたり

大漢四百の末のころ

登萬王とぞ申しける

應神帝の御代とかや

徳化を慕ひて至りけり

滋賀の郡を與へてぞ

世世に安んじ住ひける

代嗣を祈る四の夕

願を滿つとはさとりける

八月十有八日に

安生れたまひける

珍膳肴菓を設けしを

毫髪さらに差ひなし



【法相】 諸法は其性を一にすれども相を殊にす、殊別の相外より見るべきが故に法相と言ふ。

【進具の境】 登壇して比丘の具足戒を受くること。  
【二部の大乘】 法華經、金光明經、仁王經。  
【五條の願文】 本書に收むる傳教大師發願文。

生年七歳なりしとき  
醫方陰陽巧術も

佛法深く尊みて

行表法師を師と仰ぎ

法相普く授くるに

天機たちまち獨發し

台教あること知り給ひ

鑑眞法師の傳へたる

もとより畜思の遇ふ處

講演日目に勤むれど

二十歳のころとかや

三部の大乘常に讀み

父の言に隨ひて

法施を神にそなふるに

東の麓の崔嵬に

靈山會場をまのあたり

時に延暦四年の

聰明すでにあらはれて  
學ばず獨りさとりにき

年これ十二に及びてぞ

染衣の身とこそなり給ふ

一を聞ては十を知る

大乘經論すべて讀む

京師に往きてたづぬるに

玄疏殘らず得たまひし

優柔低厭目を忘る

師承の無きを愁ひけり

進具の壇には登りにき

五條の願文製しける

昔の求願に報いては

香爐に舍利を感得す

日吉山王現じては

本地を顯はし示しける

夷則十又七日に

【四明の洞】 比叡山四明洞の洞

【龍華】 歸納菩薩當本此上用世して龍華樹の下に法會を開くと云ふ。

【大黒天神】 一の地福神にして吾朝の大黒天祭祀の濫觴は傳教大師なり

出離の念起り

此の山草木生茂り

周長二十四里にして

四明の洞にたたまれば

惡獸魍魎拂ひてぞ

嶺南の峯を攀ぢけるに

此地龍華に至るまで

溪には流るる水の聲

峯にはふ風の音

朝梵野禪も静かにて

木を伐り巖を穿ちてぞ

其の後延暦七年に

一字の伽藍を造立し

辨財天女の告により

等身薬師の尊像を

白鬚明神この山の

大黒天神現じては

始めて山にぞ登りける

日の影も間もなかりけり

峯には常に雲を帯ぶ

堅牢地神の現はれて

誓ひをなしてよりにける

五百の賢聖集りて

劫火を脱ると談りける

眞如淨性胸に澄み

諸法實相常に聞く

此の生終ふべきところとて

草薮ここに結びける

山中淨き地を探み

止觀院とぞ號けたり

鎮護國家のそのために

自ら刻みて安置せり

久遠の昔を告げたまひ

後の榮を契りける

【七寺の諸師】七寺は南都七大寺、【一六宗】三論宗、法相宗、華嚴宗、律宗、成實宗、俱舍宗。【三論論】中論、十【二門論】百論。【法相】萬法の性を究明する宗、日本傳來は元正帝靈龜二年玄昉僧正の傳ふる北寺の傳を以て正傳とす。

同じく三十月に  
主上大師に教ありて  
都を九條に聞きては  
山に九院をつらねては  
同じく十六丑の年  
近江の貢の正税を  
天恩深く内供奉の  
經藏なきを思ひては  
同じく十七仲冬に  
十個の大徳集まりて  
七寺六宗唱へなき  
三論法相諍ひも  
弘法の心の彌まさり  
遙にその師を求めんと  
留學多年を奏するに  
期月歸朝と定めてぞ  
頃ば延暦甲申の

平安城の成りしかば  
結界安鎮なさしむる  
胎藏界にぞかたどりし  
金剛界をぞ表しける  
桓武の帝の御感あり  
山供の費に充てたまふ  
列にあづかる始めなり  
七寺の諸師に事成れり  
法華十講はじめては  
議論の鼓音高し  
一乘妙經弘まりて  
氷の如くに解にけり  
利生の願の猶堅く  
渡唐の表文捧げける  
才器を惜みたまふとや  
教許を下したまひける  
二十三年七月に

中使の船に打ち乗りて  
俄に風雲吹き起り

佛舍利海に投ずるに

大唐貞元二十年

御船はつひに恙なく

其時官府の符を得てぞ

國清僧徒の出で迎へ

山中周覽したまうて

石橋臺によこたはり

神境仙窟蹈むことも

智者の遺跡伏し拜み

道達法師に見えしに

一心三觀開示して

佛隴寺にいたりてぞ

祕藏の經疏法器まで

それより越府に起きて

善無畏不空の傳へたる

滄波を凌ぎたまひける

水面くらくなりければ

風やみ波も靜かなり

徳宗帝の朝ときく

明州府にぞ着にけり

天台山にぞ攀ち登る

求法の勞をぞ慰めし

一一聖跡たづぬるに

瀧水空より下りける

宿縁違はぬ誓ひぞと

感涙袖をぞ霑せり

弘法の器なりと喜びて

三聚の淨戒授けたり

行滿座主を訪ふに

残らず付囑せし給ひき

順曉阿闍梨にあひけるに

密法密具を授けらる

【牛頭の禪要】牛頭山法融禪師一派の禪。

表師の付法の有なれば

牛頭の禪要悟りてぞ

程なく歸朝ぞ在して

傳へし曼荼羅法器まで

帝の敬感淺からず

禁中上紙をたまはりて

もとより此の士に稀なりし

始めて高雄の道場に

其の後再び敕ありて

幡壇道具を建てつらね

二十五年の上表に

天台圓宗加へてぞ

年分度首を給はりて

諸寺の大徳表あげて

根木中堂西の地に

弘仁三年七月に

筑紫宇佐の神前に

脩然禪師の門下にて

北禪傳へて歸りける

顯密二教の法文に

表文添へてぞたてまつる

傳ふる典籍流布せんと

七寺のために寫しけり

眞言法要弘めんと

三摩耶灌頂行はる

九重隔つる禁中に

盧遮那の法をぞ行ひし

大小六宗その上に

佛法東流の残りなし

七宗ともに衰へず

此こと大いに慶賀せり

經讀む體觸を掘り得ては

法華三昧耶の堂をたて

渡海の願に報ずれば

大神オホカミ隨喜ズイキの聲こゑありて  
 昔渡唐ムキワタリの頃ころとかや  
 明神夢アカミカミにきたりてぞ  
 岩畔イハノヘ崩れて空あかしきも  
 田河タカに震ふるく瑞雲スズクモは  
 六所ムツカの塔婆トウバの木き願ねがひに  
 道の艱難カンナンあはれみて  
 諏訪スワハの明神アカミカミ託たくしては  
 美濃ミノの賢榮ケンエイ誓ちかひては  
 大乘ダイジョウ戒壇ゲイタン設たてげんと  
 南都ナントの諸師シュシの遮さぎれば  
 傳燈デンテウ法師ホウシの寵位チュウイには  
 主上シュジョウ宸翰シンカン染そめたまひ  
 緣縁盡じんき應思オウシむ時ときなれや  
 門人モンニン有緣ユエンの人人にんじんを  
 滅後メツゴの弟子トシの共ともの爲ために  
 住山ヂュウサン修學シュガクの僧徒ソウトには

自ら紫衣ムラサキイをぞ給たまひける  
 賀春カハルの下したに宿しゆくせしに  
 一乘イツジョウ法味ホウミを求めらる  
 草木ソクボク漸ゆるく生茂なまり  
 吏民リミンの錄ろくして送りける  
 この歳とし吾妻ゴメに下くだるにぞ  
 廣濟クワジ廣くわ拯たく置おきにけり  
 經馱キョトす馬うまをぞ護まもりける  
 多寶タホウ佛ぶつ塔建トウケンてられき  
 表文ヘイモンささげて奏そうするに  
 顯戒ケンゲ論ろんをぞたてまつる  
 最澄サイジョウ阿闍梨アセリその人ひとと  
 山やまにぞ下くだしたまひける  
 假かりに病やまひを現あらわじては  
 中道チュウダウ院いんにぞ招まねきける  
 兩箇リウカンの制禁セイキンたて給たまひ  
 六種ロクシュウの遺誡ユイとぞめけり

時に弘仁十三年

生年五十六にして

その時奇雲の空に滿ち

大師の遷化と聞くからに

初七の靈儀に備ふるに

木代弘法の爲なりと

天皇哭詩の玉韻に

在すが如き聲ありて

明ぬる年の仲春に

延曆寺と稱すべき

その後貞觀八年に

清和の帝の敕ありて

凡そ大師の行業は

三朝帝の國師にて

度せる僧衆數百人

選集抄疏數多く

三塔九院わかかれては

六月始めの四日にぞ

辰の刻にぞ終りける

聖衆の來迎ありけるや

道俗はるかに伏し拜み

先帝の遺旨齎きたまひ

戒壇修造の敕くだる

公卿の和作も備ふれば

法華の要文唱へける

日枝の山寺を今よりは

敕額山にぞ下されし

相應和尚の奏により

傳教大師と謚りける

今更申すもおろかなり

四海の慈父とぞ仰ぎける

受學の公卿量りなし

造寺寫經も擧げがたし

三千僧徒の常に住み

【堅義】 論場に於て探題より出したる論題に就て義を立つるを言ふ。【十講法華會】 十座に法華經八卷を講讀する法會なり

七重六位の結界は  
歲霜積りし今の世も

三壇修法の怠らず

一十二年の籠山は

堅義の十講法華會は

すべて六十餘州に

異境多邦にいたるまで

歸命檀首すわが大師

後の仰のみ代までも

道俗男女の隔てあり

三院おのの本堂に

永く國家を鎮護せり

兩業今に引きつづき

諸國の學徒みな來る

法化遍きのみならず

その徳仰が眞者ぞなき

法の燈火つたへては

慈悲の護念を垂れたまへ

傳教大師和讃畢



昭和五年一月五日印刷  
昭和五年一月十日發行

昭和  
新纂 國譯大藏經 宗典部 第一卷

不許複製

編纂者

昭和  
新纂 國譯大藏經編輯部  
代表者 三井品史

發行者

東京市下谷區上野櫻木町五十番地  
株式會社 東方書院  
代表者 坂戸彌一郎

印刷者

東京市神田區表神保町十番地  
同 興舍  
代表者 井波康三郎

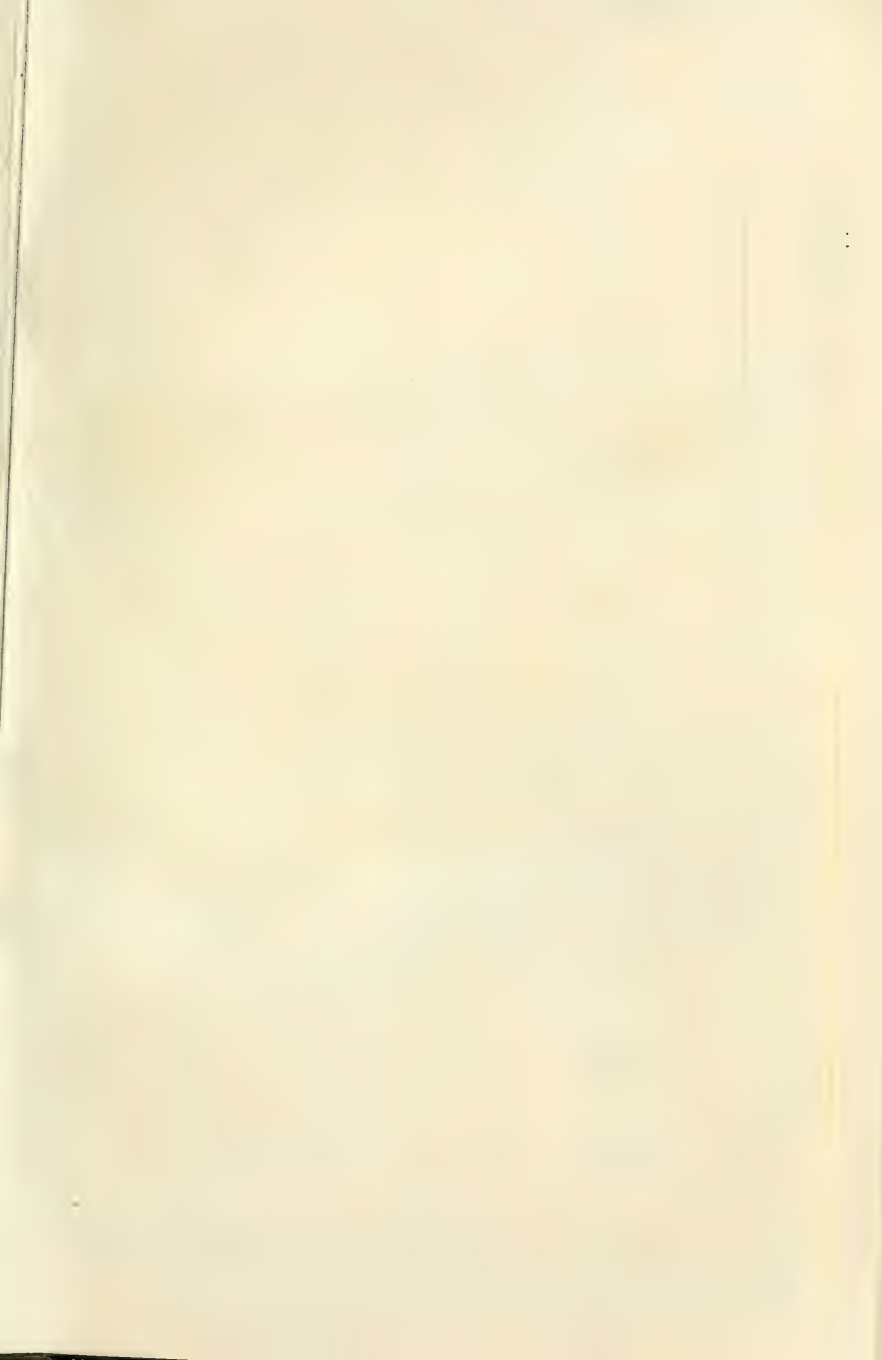
發行所

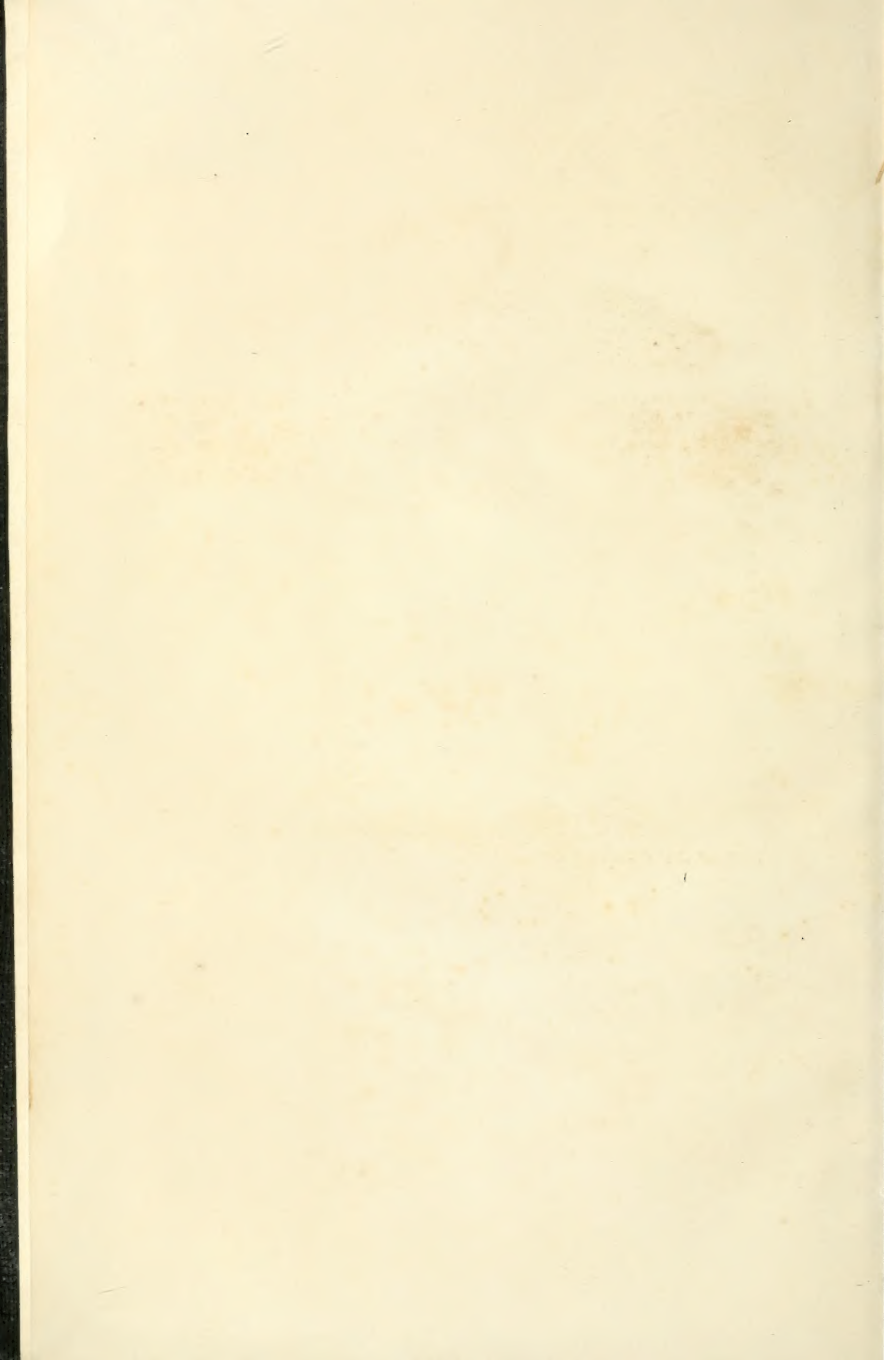
東京市下谷區  
上野櫻木町五〇

株式會社

東方書院

電話下谷四二五九  
振替東京六八一

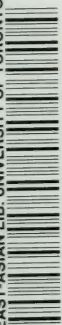






東山喜房佛書林  
東京市赤門前  
假替東一〇〇  
電話小石五三一六

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03023 4223